

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I

今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡

1984

新潟県教育委員会

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I

今池遺跡

下新町遺跡

子安遺跡

新潟県教育委員会

序

上越市は新潟県西南部の主要都市として、現在おおいに発展している。この地方が古くから「頸城」と称され、幾多の歴史を有していることはよく知られている。殊に今から千年ほど前の平安時代には越後国の国府が置かれ、現在の佐渡をのぞく新潟県の中心として栄えていたと考えられる。

しかしながら、古代の越後、あるいは頸城地方の状況はあまりよくわかっていない。それは当時の記録がほとんど残っていないことに加えて、従来古代遺跡の調査がかならずしも進んでいなかったことにもよる。そのため、かつて存在したはずの国府・国分寺・国分尼寺などの明確な所在地はいまだに解明されていない。ところが、最近になって上越市周辺の古代遺跡の調査がさかんに実施され、その成果にはめざましいものがあり、これまで解明されなかったことのいくつかが明らかにされている。ここに報告する今池遺跡をはじめとする三遺跡の調査はこれを代表するものとして、特に注目されるものである。

今回の調査は上越市から長野県に通じる一般国道18号線の上新バイパス建設に伴って行われたものであるが、従来、遺跡の存在すら知られていなかったところでありながら、奈良時代・平安時代の大規模な建物群が検出されるなど、越後の古代史の大きな展望を開く成果が得られた。今後、これを契機に新潟県の古代史研究が一步でも進むことが期待されるとともに、さらにこうした埋蔵文化財の調査を積み重ねることによって、新潟県の歴史を少しでも明らかにしてゆきたいと考える。

調査にあたって、建設省北陸地方建設局高田工事事務所には格別な御配慮を賜わり、上越市教育委員会には多大な御協力と御援助をいただいた。ここに深甚なる謝意を表すものである。

昭和59年3月

新潟県教育委員会
教育長 久 間 健 二

例 言

- 1 本書は新潟県上越市に所在する今池遺跡（大字今池・大字下新町）、下新町遺跡（大字下新町）、子安遺跡（大字子安）の発掘調査報告書である。調査は一般国道18号線の上新バイパスの建設にともない、新潟県が建設省から受託して実施したものである。
- 2 今池遺跡、下新町遺跡、子安遺跡はそれぞれ互いに近接しており、遺跡の時期・性格なども類似していることから、3遺跡の報告をまとめることとし、各遺跡ごとに章を分けた。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、昭和55年度から昭和58年度の四ヶ年にわたって実施した。各年度ごとの調査体制は第Ⅰ章に記したとおりである。
- 4 本書の作成にかかる遺物の整理と図面の作成等は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。
- 5 発掘調査による出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記は今池遺跡を「I M」、下新町遺跡を「S S」、子安遺跡を「K Y」とした。
- 6 図版収録の土器実測図は各遺跡ごとに通し番号を付した。また土器実測図の断面は須恵器（黒ぬり）、土師器（白ぬき）、施釉陶器（網目）によって区別した。中世以降のものは陶器（黒ぬり）、土師質土器・磁器（白ぬき）とした。土師器のうち黒色土師器、赤彩土師器はその処理された器面の範囲にそれぞれ異なった網目をかけた。土器実測図は縮尺4分の1、墨書土器・拓影は縮尺3分の1を原則としたが、すべて統一されてはいない。写真の遺物番号は図版の番号と同一である。
- 7 本書で示す方位はすべて真北である。磁針方位は西偏約7度である。既製の地形図を使用したものについては原図の出典を記した。原図は国土地理院発行50,000分の1地形図（昭和57年発行「柿崎」・「高田東部」・「高田西部」）、国土地理院25,000分の1地形図（明治43年測量・昭和5年修正「高田東部」・「新井」）、上越市2,500分の1地形図（昭和54年空撮・昭和56年現地調査）、建設省北陸地建高田工事事務所作成1,000分の1地形図（昭和49年測図）である。
- 8 本書の作成は時間の関係上、遺跡・遺物全般について調査参加者・執筆者の間で十分な検討と調整がなされてはならず、全体を通して一貫した記述になっていない部分もあるが、御寛恕願いたい。なお、図面・図版の作成は原則としてこれに関係する執筆者が行った。執筆分担は第Ⅰ章で記した。
- 9 建物の方位測定は、東西棟建物は梁（短辺）の方位、南北棟建物は桁（長辺）の方位を基準とした。溝の方位測定は、東西溝に限り、溝と直交する方位を基準とした。
- 10 遺構のうち、建物については巻末の別表1に一覧表を付し、その説明文のある頁を示した。その他の遺構については別表2の遺構索引を利用されたい。
- 11 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略 アイウエオ順）

伊藤正義，植木 宏，金子以策，河原純之，工業善通，黒崎 直，小島幸雄，斎藤孝正，齊藤基生，巽淳一郎，中川成夫，波貝 毅，橋崎彰一，能登 健，服部敬史，平野団三，吉岡康暢，吉田恵二

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経過	1
A 今池・下新町遺跡	1
B 子安遺跡	3
2 調査と整理	4
A 発掘作業	4
B 整理作業と報告書の作成	6
第Ⅱ章 今池遺跡群の位置と環境	7
1 位置と地理的環境	7
A 頸城平野の概略	7
B 今池遺跡群周辺の地形	7
C 遺跡の範囲と現況	10
2 頸城地方の古代・中世遺跡	12
3 文献からみた古代・中世の頸城地方	14
A 古代の頸城地方	14
B 鎌倉・南北朝の頸城地方	20
4 今池地区の歴史と伝承	22
A 西松野木の条里的地割	22
B 関川面の開発	23
C 周辺の考古学的調査と伝承	25
第Ⅲ章 今池遺跡の調査	27
1 調査の概要と経過	27
A 昭和55年度	27
B 昭和56年度	29
C 昭和57年度	35
D 昭和58年度	40
2 遺 跡	41
A 層 序	41
B 概 観	41

C 遺構各説	43		
3 遺物			87
A 奈良・平安時代	87	B 中世	129
C 古墳時代	135		
4 小結			136
A 奈良・平安時代	136	B 中世	142

第Ⅳ章 下新町遺跡の調査 145

1 調査の概要と経過			145
A 調査の準備	145	B 発掘調査	145
2 遺跡			149
A 概要と層序	149	B 遺構各説	151
3 遺物			160
A 土器	160	B 特殊土器類	166
C 瓦	171	D 井戸枠部材	172
E その他の遺物	173		
4 小結			174
A 遺構の時期区分	174	B 出土遺物	175

第Ⅴ章 子安遺跡の調査 178

1 調査の概要と経過			178
A 昭和57年度	178	B 昭和58年度	181
2 遺跡			182
A 層序	182	B 概観	182
C 遺構各説	183		
3 遺物			189
A 平安時代の遺物	189	B 中世・近世の遺物	194
4 小結			199

A 調査成果	199	B 遺跡の時期と性格	201
--------	-----	------------	-----

第Ⅵ章 考察	203
1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について	203
2 今池遺跡群出土の瓦について	210
3 結 語	212
(別 表)	215

図 版

図 面

1 今池遺跡群周辺の地形	
2 今池遺跡群周辺の地形と発掘調査範囲	
3 今池遺跡遺構実測図Ⅰ	(C地区北半部)
4 今池遺跡遺構実測図Ⅱ	(C地区南端部・B地区北部)
5 今池遺跡遺構実測図Ⅲ	(B地区中央部)
6 今池遺跡遺構実測図Ⅳ	(B地区南部)
7 今池遺跡遺構実測図Ⅴ	(A地区)
8 今池遺跡遺構実測図1	(C地区)
9 今池遺跡遺構実測図2	(C地区)
10 今池遺跡遺構実測図3	(C地区)
11 今池遺跡遺構実測図4	(C地区)
12 今池遺跡遺構実測図5	(C地区)
13 今池遺跡遺構実測図6	(B・C地区)
14 今池遺跡遺構実測図7	(B・C地区)
15 今池遺跡遺構実測図8	(B・C地区)
16 今池遺跡遺構実測図9	(B地区)
17 今池遺跡遺構実測図10	(B地区)
18 今池遺跡遺構実測図11	(B地区)
19 今池遺跡遺構実測図12	(B地区)
20 今池遺跡遺構実測図13	(B地区)
21 今池遺跡遺構実測図14	(B地区)
22 今池遺跡遺構実測図15	(B地区)

- 23 今池遺跡遺構実測図16 (B地区)
- 24 今池遺跡遺構実測図17 (B地区)
- 25 今池遺跡遺構実測図18 (B地区)
- 26 今池遺跡遺構実測図19 (B地区)
- 27 今池遺跡遺構実測図20 (B地区)
- 28 今池遺跡遺構実測図21 (B地区)
- 29 今池遺跡遺構実測図22 (A地区)
- 30 今池遺跡遺構実測図23 (A地区)
- 31 今池遺跡出土土器 1 (SK 24・SK 37)
- 32 今池遺跡出土土器 2 (SK 21B・SK 21A)
- 33 今池遺跡出土土器 3 (SK 21A・SK 25・SE 20・SK 50)
- 34 今池遺跡出土土器 4 (SK 102)
- 35 今池遺跡出土土器 5 (SK 257・SD 104・SK 120・SK 140)
- 36 今池遺跡出土土器 6 (SD 201一括)
- 37 今池遺跡出土土器 7 (SD 201一括・SD 201)
- 38 今池遺跡出土土器 8 (SD 3 IV層)
- 39 今池遺跡出土土器 9 (SD 3 IV層)
- 40 今池遺跡出土土器10 (SD 3 IV層)
- 41 今池遺跡出土土器11 (SD 3 IV層・III層)
- 42 今池遺跡出土土器12 (SK 391B・SK 391A・SK 223)
- 43 今池遺跡出土土器13 (SD 321・SD 320・SD 323・SD 324)
- 44 今池遺跡出土土器14 (B地区遺構)
- 45 今池遺跡出土土器15 (A地区遺構・包含層)
- 46 今池遺跡出土土器16 (B地区南半部包含層)
- 47 今池遺跡出土土器17 (C地区・B地区北半部包含層)
- 48 今池遺跡出土土器(墨書土器)
- 49 今池遺跡出土瓦
- 50 今池遺跡 SE 20井戸梓部材
- 51 今池遺跡出土土器 (中世)
- 52 今池遺跡出土土器 (中世・古式土師器)
- 53 今池遺跡出土木製品
- 54 今池遺跡出土木製品
- 55 今池遺跡出土石製品
- 56 今池遺跡出土石製品
- 57 下新町遺跡遺構実測図
- 58 下新町遺跡遺構実測図 1
- 59 下新町遺跡遺構実測図 2
- 60 下新町遺跡遺構実測図 3

- 61 下新町遺跡遺構実測図 4
- 62 下新町遺跡出土土器 1 (SK 31・SE 11・SE 12・SE 13)
- 63 下新町遺跡出土土器 2 (SE 14・SE 15・SK 32・遺構外)
- 64 下新町遺跡出土土器 3 (遺構外)
- 65 下新町遺跡出土土器 4 (遺構外施釉陶器・墨書土器)
- 66 下新町遺跡出土土器 5 (遺構外)
- 67 下新町遺跡出土瓦・子安遺跡
- 68 下新町遺跡 SE 11井戸枠部材
- 69 子安遺跡遺構実測図
- 70 子安遺跡遺構実測図 1
- 71 子安遺跡遺構実測図 2
- 72 子安遺跡遺構実測図 3
- 73 子安遺跡出土土器
- 74 子安遺跡出土土器(中世)・石製品
- 75 子安遺跡出土土器拓影
- 76 子安遺跡出土木製品

写 真

- 77 今池遺跡群周辺の地形
- 78 今池遺跡 C 地区
- 79 今池遺跡 B 地区北半部
- 80 今池遺跡 B 地区南半部
- 81 下 新 町 遺 跡
- 82 今池遺跡 C 地区 1 C 地区北端部 2 同西半部 3 同東半部
- 83 今池遺跡 C 地区 1 建物 SB 57 2 建物 SB 12・建物 SB 13 3 井戸 SE 20・土坑 SK 21
- 84 今池遺跡 C 地区 1 井戸 SE 20全景 2 同上掘形断面 3 同上井戸枠検出状況
- 85 今池遺跡 C 地区 1 井戸 SE 20掘形上部埋土状況 2 同上井戸枠 3 同上井戸枠と自然木
- 86 今池遺跡 C 地区 1 溝 SD 1 2 溝 SD 2・溝 SD 6 3 土坑 SK 10断面
- 87 今池遺跡 B 地区 1 南端部全景 2 建物 SB 105 3 建物 SB 106
- 88 今池遺跡 B 地区 1 建物 SB 109 2 建物 SB 115・溝 SD 111・溝 SD 104 3 E27区付近建物
- 89 今池遺跡 B 地区 1 建物 SB 148 2 建物 SB 173 3 建物 SB 122
- 90 今池遺跡 B 地区 1 建物 SB 205 2 建物 SB 204 3 建物 SB 206・溝 SD 203
- 91 今池遺跡 B 地区 1 建物 SB 229・建物 SB 242 2 建物 SB 242 3 建物 SB 228・建物 SB 253
- 92 今池遺跡 B 地区 1 建物 SB 290 2 建物 SB 274 3 H・I 24区付近
- 93 今池遺跡 B 地区 1 土坑 SK 391 A・B 2 建物 SB 411・建物 SB 408 3 溝 SD 201・溝 SD 141・溝 SD 202
- 94 今池遺跡 B 地区 1 溝 SD 201 2 溝 SD 320・溝 SD 321・溝 SD 325 3 溝 SD 320屈接部
- 95 今池遺跡 B 地区 1 溝 SD 323 2 溝 SD 324 3 溝 SD 387
- 96 今池遺跡 B 地区 1 溝 SD 324 2 建物 SB 420・建物 SB 421 3 建物 SB 430

- 97 今池遺跡B地区 1 溝 SD 501 2 溝 SD 431・溝 SD 501・溝 SD 433 3 建物 SB 504
- 98 今池遺跡B地区 1 建物 SB 504 2 建物 SB 666・井戸 SE 652 3 建物 SB 651
- 99 今池遺跡B地区 1 溝 SD 3 2 同上 3 H11・12区畝状小構B
- 100 今池遺跡B地区 1 溝 SD 3 石敷 2 同上 3 溝 SD 3
- 101 今池遺跡B地区 1 B地区北辺部発掘風景 2 溝 SD 3 満水状況 3 同上断面
- 102 今池遺跡B地区 1 土坑 SK 102 2 井戸 SE 114 3 土坑 SK 208
- 103 今池遺跡B地区 1 溝 SD 201断面 F25(14)区 2 同上 F24(9)区 3 同上 F24(19)区断面 4 同上土器溜り
- 104 今池遺跡B地区 1 土坑 SK 101断面 2 土坑 SK 302断面 4 溝 SD 324断面 5 溝 SD 603断面
- 105 今池遺跡B地区 1 建物 SB 109-10断面 2 建物 SB 228-4断面 3 建物 SB 107-5 黒色土師器出土状況 4 土坑 SK 145杯蓋出土状況 5 建物 SB 105-11柱穴底面柱痕 6 F23区 P2・3切り合い断面 7 建物 SB 108-4 土器出土状況 8 I17区P1根石
- 106 今池遺跡B地区 1 建物 SB 340・建物 SB 341 2 建物 SB 345 3 井戸 SE 327
- 107 今池遺跡B地区 1 井戸 SE 356 2 井戸 SE 347 3 土坑 SK 428
- 108 今池遺跡C地区 (昭和58年度) 1 建物 SB 1002・建物 SB 1003 2 同上 3 土坑 SK 1004
- 109 今池遺跡A地区 1 遺跡近景 2 グリッド設定状況 3 遺跡近景(完掘後)
- 110 今池遺跡A地区 1 昭和56年度調査区完掘状況 2 昭和55年度調査区完掘状況 3 建物 SB 901・土坑 SK 906・土坑 SK 907完掘状況
- 111 今池遺跡A地区 1 建物 SB 900 2 建物 SB 901 3 建物 SB 902
- 112 今池遺跡A地区 1 溝 SD904 2 溝 SD 904土層断面 3 土坑 SK 906・土坑 SK 907
- 113 下新町遺跡 1 発掘前遺物表面採集風景 2 完掘状況東側 3 同上西側
- 114 下新町遺跡 1 A・B区全景 2 建物 SB 1 3 建物 SB 1・建物 SB 2・溝 SD 21
- 115 下新町遺跡 1 建物 SB 1・溝 SD 21 2 建物 SB 3・建物 SB 4 3 建物 SB 4
- 116 下新町遺跡 1 建物 SB 5 2 建物 SB 6 A・6 B・建物 SB 7 3 建物 SB 8(部分)・建物 SB 9・井戸 SE 13
- 117 下新町遺跡 1 建物 SB 10 2 井戸 SE 11発掘風景 3 井戸 SE 11井戸枠検出状況
- 118 下新町遺跡 井戸 SE 11 1 遺物出土状況 2 井戸枠内礫出土状況 3 井戸枠設置状況
- 119 下新町遺跡 井戸 SE 11 1 掘形完掘状況 2 井戸枠内遺物出土状況 3 木枠組方 4 井戸枠内礫出土状況 5 井戸枠底部
- 120 下新町遺跡 1 井戸 SE 12遺物出土状況 2 井戸 SE 12土層断面 3 井戸 SE 12完掘状況
- 121 下新町遺跡 1 井戸 SE 14土層断面 2 井戸 SE 14緑釉出土状況 3 井戸 SE 14完掘状況
- 122 下新町遺跡 1 井戸 SE 15土層断面 2 井戸 SE 15完掘状況 3 C7区発掘風景
- 123 下新町遺跡 1 土坑 SK 31遺物出土状況 2 溝 SD 21土層断面 3 溝 SD 22土層断面
- 124 子安遺跡 1 西南部全景 2 同上 3 B10区畝状小溝
- 125 子安遺跡 1 B7区付近 2 東南部全景 3 建物 SB 10
- 126 子安遺跡 (昭和58年度) 1 建物 SB 5 2 井戸 SE 37 3 井戸 SE 35断面 4 井戸 SE 36 5 溝 SD 1 断面 6 溝 SD 1・溝 SD 6 断面
- 127 子安遺跡 (昭和58年度) 1 調査区全景 2 建物 SB 60 3 建物 SB 49

- 128 子安遺跡 (昭和58年度) 1 建物 SB 41 2 建物 SB 61 3 建物 SB 65・建物 SB66
- 129 子安遺跡 (昭和58年度) 1 井戸 SE 54 2 井戸 SE 58 3 井戸 SE 47 4 井戸 SE 45 5 墓坑 SX
59断面 6 墓坑 SX 59
- 130 今池遺跡出土土器 (SK 24・SK 21ほか) (1:3)
- 131 今池遺跡出土土器 (SK 25・SK 102・SK 257ほか) (115 1:6, 他1:3)
- 132 今池遺跡出土土器 (SK 257・SK 140・SD 201一括) (172 1:4, 他1:3)
- 133 今池遺跡出土土器 (SD 201一括・SD 3Ⅳ層) (269・285 1:4, 他1:3)
- 134 今池遺跡出土土器 (SD 3Ⅳ層・SD 3Ⅲ層ほか) (446・489・512 1:4, 他1:3)
- 135 今池遺跡出土土器 (SD 321ほか) (1:3)
- 136 今池遺跡出土土器・瓦塔 (697・708・585 1:4 219 1:6, 他1:3, 瓦塔1:1)
- 137 今池遺跡出土土器 (小形長頸瓶・製塩土器・円面硯ほか) (1:2)
- 138 今池遺跡出土須恵器製作技法
- 139 今池遺跡出土須恵器製作技法
- 140 今池遺跡出土須恵器製作技法ほか
- 141 今池遺跡出土墨書土器
- 142 今池遺跡出土瓦 (1~14 1:4)
- 143 今池遺跡出土井戸枠部材 (SE 20) (1:10)
- 144 今池遺跡出土木製品
- 145 今池遺跡出土漆器・鉄製品ほか (1:2)
- 146 今池遺跡出土石製品 (1:2)
- 147 今池遺跡出土石製品・植物種子 (石製品 1:2)
- 148 今池遺跡出土土器 (中世) (1:3)
- 149 下新町遺跡出土土器 (56・122 1:4, 他1:3)
- 150 下新町遺跡出土土器 (灰釉・緑釉・墨書) (灰釉・緑釉1:2)
- 151 下新町・子安遺跡出土瓦 (1~14 1:4)
- 152 下新町遺跡出土木製品ほか
- 153 下新町遺跡出土井戸枠部材 (SE 11) (1:10)
- 154 子安遺跡出土土器 (74・57 1:4, 他1:2)
- 155 子安遺跡出土木製品
- 156 子安遺跡出土宝篋印塔・石臼ほか (1:2)

挿 図

1	今池遺跡群の位置	2	33	SK 257断面図	62
2	子安遺跡採集の灰釉陶器	3	34	SB 275・SK 316断面図	63
3	調査・整理作業の実施状況	5	35	SK 302・SK 303・SK 304断面図	63
4	頸城平野（高田平野）の地形分類 と遺跡分布	8	36	SD 321断面図	64
5	今池遺跡群周辺の地形分類と遺跡 の範囲	折込み	37	SK 339断面図	65
6	本長者原廃寺周辺の旧地割	11	38	SD 201・SD 203断面図	65
7	頸城郡の庄・保概念図	19	39	B地区中央部遺構配置図	66
8	鎌倉・南北朝期の頸城地方	21	40	SD 324・SD 387断面図	66
9	西松野木の条里的地割	23	41	SD 501断面図	68
10	今池の小字	25	42	B地区北側遺構配置図	68
11	西松野木出土の和鏡	26	43	SD 3断面図	69
12	本長者原遠望	26	44	SD 3張り出し実測図	69
13	今池遺跡A地区グリッド設定図	27	45	SB 651実測図	72
14	今池遺跡グリッド（B・C地区） 設定と年度別発掘区	32	46	SB 701断面図	73
15	57年度当初計画地区割図	35	47	畝状小溝分布図	74・75
16	排水作業風景	36	48	A地区土層柱状図	76
17	今池遺跡B・C地区の地区割りと 周辺の状況	37	49	A地区遺構配置図	76
18	発掘作業風景	39	50	中世遺構配置図	79
19	今池遺跡層序模式図	41	51	SK 428実測図	80
20	今池遺跡調査区内地山断面模式図	41	52	SE 435	82
21	今池遺跡遺構配置図	折込み	53	SD 603断面図	83
22	SE 20井戸枠復原模式図	45	54	SD 1断面図	86
23	SE 20実測図	46	55	SD 5断面図	86
24	SK 21A・B実測図	47	56	土師器Aと土師器B （栗原遺跡出土土器）	88
25	C地区溝断面図	53	57	SK 24出土須恵器杯・杯蓋 法量分布図	89
26	B地区南側遺構配置図	54	58	SK 24出土須恵器甕拓影	90
27	SD 113断面図	54	59	SK 21B出土須恵器杯・杯蓋 法量分布図	91
28	SK 101・SK 102断面図	55	60	SK 21B出土須恵器杯底部拓影	92
29	SE 114断面図	56	61	SK 102出土須恵器杯・杯蓋 法量分布図	95
30	SK 139断面図	57	62	SK 102出土須恵器底部拓影	96
31	SK 391断面図	61	63	SK 257出土須恵器杯・杯蓋 法量分布図	98
32	SK 270断面図	62			

64	SD 201出土一括土器須恵器杯・ 杯蓋法量分布図……………	99	98	SE 11実測図……………	154
65	SD 201出土一括土器須恵器拓影……………	100	99	SE 12実測図……………	155
66	SD 3Ⅳ層出土須恵器杯 法量分布図……………	102	100	SE 13・SE 14・ SE 15実測図……………	158
67	底部再利用有台杯……………	104	101	SD 21A・B断面図……………	159
68	転用須恵器片(SD 3Ⅳ層)……………	105	102	SD 22断面図……………	159
69	SD 3Ⅲ・Ⅳ層出土土師器杯 法量分布図……………	106	103	遺構外出土土器……………	166
70	A地区出土須恵器杯・杯蓋 法量分布図……………	117	104	その他の特殊土器……………	170
71	金属器模作須恵器杯・杯蓋……………	117	105	中世陶器……………	171
72	叩き目の杯と再利用杯……………	122	106	瓦分布図……………	171
73	須恵器甕破片・把手……………	122	107	SE 11出土木製品……………	172
74	その他の須恵器……………	123	108	土 錘……………	173
75	円面硯……………	123	109	銭 貨……………	173
76	篋書土器……………	125	110	砥石・凹石……………	173
77	今池遺跡瓦分布図……………	125	111	子安遺跡グリッド設定図……………	179
78	瓦 塔……………	126	112	作業風景……………	181
79	土 錘……………	126	113	基本層序模式図……………	182
80	羽 口……………	127	114	遺構配置模式図……………	183
81	SE 20出土木製品……………	127	115	SB 10南北セクション……………	184
82	SE 20出土井戸部材復原図……………	128	116	SX59実測図……………	188
83	鉄製品……………	129	117	河川跡断面図……………	188
84	中世遺物分布図……………	129	118	SD 1・SD 6断面図……………	189
85	漆器・紡錘車……………	131	119	SD 4断面図……………	189
86	鉄製品……………	133	120	仏像・漆器……………	196
87	銭 貨……………	134	121	砥 石……………	197
88	今池遺跡の遺構変遷……………	137	122	石 塔……………	198
89	B建物群の遺構配置……………	138	123	銭 貨……………	198
90	C建物群の遺構配置……………	139	124	子安遺跡周辺の地形と地割……………	200
91	今池遺跡の主な溝……………	141	125	今池遺跡群における奈良・ 平安時代の土器……………	折込み
92	中世建物模式図……………	143	126	今熊窯跡採集の須恵器……………	208
93	下新町遺跡グリッド設定図……………	146	127	半ノ木遺跡出土土器……………	209
94	遺構配置図……………	148	128	上越市向橋瓦窯跡出土遺物……………	210
95	土層断面図……………	150	129	平瓦凹面布の比較……………	211
96	SK 31断面図……………	152	130	今池遺跡群の動態……………	212
97	SE 11井戸枠復原模式図……………	153	131	今池遺跡と下新町遺跡の 遺構配置図……………	折込み

表

1	頸城郡の庄・保	18	8	今池遺跡出土の墨書土器	124
2	文禄検地	24	9	土錘計測値	126
3	今池村の「新田改帳」	24	10	井戸出土木製品一覧表	133
4	村高変遷表	24	11	主な溝の概要	141
5	今池の小字	24	12	下新町遺跡出土の墨書土器	169
6	畝状小溝一覧表	75	13	B9区包含層出土土器の構成	189
7	一括土器の年代	88			
別表	1	建物一覧表			215
	2	遺構索引			218

第 I 章 序 説

1 調査に至る経過

A 今池・下新町遺跡

一般国道18号は、群馬県高崎市から長野県長野市を経て上越市に至る本州横断幹線で、日本海側と関東・中京を結ぶ重要な路線である。一方、上越地方においては、一般国道8号と共に産業・経済の動脈としての役割を果たしている。その交通は、近年の経済成長と車社会の発達に伴い通過交通を含め著しい伸びを示し、特に、上越市・新井市付近は慢性的な交通渋滞を起している。また、この地域は全国的にも豪雪地帯で知られており、沿道市街地には家屋が密集しているため、効果的な除雪作業が困難で交通の難所となっている。特に「51・1豪雪」時には上越市高田地区において、一週間にわたり連続的に「ドカ雪」が降り続き、24時間降雪量で130cm（高田測候所）を記録し、最大積雪深も270cmに達した。加えて猛吹雪のため、上越地方は海岸沿いの一部を除き、一時は、すべての道路がマヒ状態となった。このため建設省北陸地方建設局（以下「北陸地建」という）では、これらの交通のあい路を開き、上越地方の道路交通における動脈的な役割をもつ一般国道18号（上新バイパス）建設工事の計画を立てるに至った。

北陸地建は、建設工事の実施にあたり、昭和46年度より計画線調査及び実測調査を行い、昭和50年4月23日までに上越市大字下源入から中頸城郡中郷村市屋に至る延長24.6km全線のルート発表を行った。そして、その発表をもって昭和51年10月4日付けの文書で新潟県教育委員会（以下「県教委」という）に、上新バイパス予定線に関する埋蔵文化財の所在について、新井市及び中郷村分の設計図面を添付して照会した。これを受けて県教委では、新井市及び中郷村教育委員会に法線内の遺跡分布調査を依頼し、その結果を昭和52年3月24日付けの文書に遺跡分布地図及び遺跡一覧表を添付し北陸地建に回答した。しかし、今回の発掘対象地となった今池・下新町遺跡を含む上越市分については、設計図面等の添付による照会がなかったため、遺跡分布調査区域に含まなかった。そのため、上越市分の遺跡の有無について北陸地建と県教委との間で、行き違いを生ずる結果となった。

ところが、昭和53年10月18日付けで県文化財保護指導委員室岡博氏より提出された「文化財パトロール報告書」で「1. 西黒保遺跡（今池遺跡A地区）は土師・須恵の国分形式、位置は関川右岸の河岸段丘上半島状地の先端、面積10アールほど、出土物多量、但し上新バイパス法線にかかる恐れがある。2. 下黒保遺跡（今池遺跡C地区）も国分形式、出土物微量、位置は下新町と櫛池川をはさんだ河岸段丘上。目下新設計画中の上新バイパス予定線にかかるかどうか調査を要する。」との指摘を受けた。工事着工の時期も迫まっているため県教委では、急ぎ北陸地建との協議を再開し、上越市分の設計図面を入手した後、全線にわたって遺跡分布調査を実施することとなった。遺跡分布調査は、昭和54年10月29日から31日までの3日間で実施し、新たに8遺跡の所在が確認された。今回の発掘対象地となった今池・下新町遺跡もこの調査により確認されたもので、便宜的に今池A・今池B・今池C・下新町の4遺跡として登録された。この4遺跡の遺跡分布調査における所見は「1. 今池A遺跡は、平安頃の土師器・須恵器片が採集され、現状は



第1図 今池遺跡群の位置 1. 今池遺跡 2. 下新町遺跡 3. 子安遺跡

国土地理院1/50,000地形図
 柿崎・高田西部・高田東部 昭和56年修正

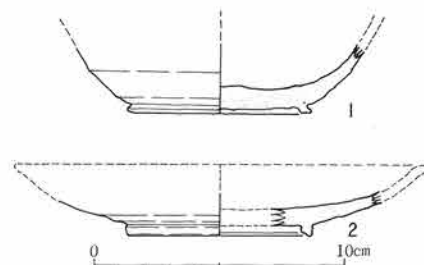
畑となっている。基盤層までは10cm弱と浅く、遺構は大半こわされているものと思われる。遺物は小片が多い。2. 今池B遺跡は、平安頃の土師器・須恵器が採集され、現状は水田となっている。基盤層までは40～50cmと思われる。遺物は比較的大形のものが多い。3. 今池C遺跡は、平安頃の土師器・須恵器が採集され、現状は水田・畑となっている。基盤層までは30～40cmで小片が多く散布している。4. 下新町遺跡は、平安頃の土師器・須恵器が採集され、現状は畑となっている。基盤層までは30～40cmで、小片が多く散布している。」というものである。この結果を、昭和54年12月11日付けの文書で、埋蔵文化財分布地図及び埋蔵文化財包蔵地一覧表を添付し北陸地建に回答した。北陸地建ではこの回答等を局内で検討した後、県教委とその取り扱いについて協議を重ねた結果、用地買収後に発見された遺跡であるため、法線変更は困難であることから、事前に県教委により発掘調査を実施することとし、今池A遺跡は昭和55年度下半期に、またほかの3遺跡については昭和56年度上半期に行うことで合意した。北陸地建では、昭和55年2月15日付けで、埋蔵文化財包蔵地に係る事業計画通知書を提出するとともに、未決定であった昭和55年度の発掘調査日程について更に協議を重ね、10月23日から11月12日の間に実施することとした。県教委は昭和55年9月20日付けで発掘通知書を文化庁に提出した後、10月20日、上越市教育委員会及び地元今池町内会長に調査の概要を説明し、作業員募集等の協力を依頼した。その結果、調査開始当日までに必要作業員数を確保し発掘調査実施の運びとなった。

B 子 安 遺 跡

子安遺跡も今池・下新町遺跡と同じく、建設省への最初の回答時には発見されていなかった。遺跡が発見されたのは、昭和55年度の上越市教育委員会による分布調査である。この段階で上越市教育委員会の小島幸雄学芸員は、遺跡は東西・南北とも500mほどの規模をもち、古代から中世に至る大遺跡であると指摘していた。遺物の散布量は著しく多く、越後では報告例の少ないK-14窯式の灰釉陶器も採集されていた(第2図)。遺跡の規模が大きいことと流通量が限定されているK-14窯式の灰釉陶器の存在から、本遺跡は一般集落とは異なる性格のもの¹⁾と予想された。

ところが、バイパスの法線は遺跡の東側の水田地帯に位置していたため、この部分は遺跡の範囲外と判断され、昭和54年12月の段階では発掘対象外とされた。しかし、昭和57年度の今池遺跡の調査において、7月にはいつから子安集落周辺の詳細な表面採集を実施し、明治期の更正図(地籍図)を検討したところ、バイパス部分は字「佐野屋敷」で、低湿地ではなく、これより西方の遺物が散布する畑と一連の地形であることを確認した。また、更正図からは、子安集落付近で一町方格の地割が存在することが判明し、その性格が問題になった(第124図)。そして、表面採集では集落全域に遺物の散布量がとくに多いことが再確認されるとともに、採集遺物は灰釉陶器片数点を含む平安時代の土器が大半を占めることが注目された。

一方、調査が進行していた今池遺跡では、大規模な掘立柱建物群が検出され、その建物について大きな関心がもたれていたが、出土遺物からみてこれらの建物群は10世紀には廃絶したと推定されていた。子安遺跡の採集遺物からみれば、時期的には、今池遺跡の廃絶した後に子安遺跡の盛行期があると予想され、両遺跡が一連の性格として把握される可能性



第2図 子安遺跡採集の灰釉陶器

1) 坂井秀弥 「越後の灰釉陶器 — 資料紹介と若干の問題点 —」(『信濃』34-4 信濃史学会 1982)

も生じた。

バイパスの工事は土盛りなどすでにかなり進行していたにもかかわらず、当該地は幸運にも着手されておらず、試掘調査を実施する余地は残されていた。そこで建設省高田工事事務所に連絡をとり、7月20日・21日の2日間、試掘調査を実施した。その結果、遺物包含層の存在が確認され、平安時代の遺物が検出された。このことから遺構が存在する可能性は充分考えられた。

8月7日、係員が建設省高田工事事務所へ出向き、試掘調査の結果を報告し、本調査の必要なことを説明した。これに対し建設省側からはバイパス工事が急迫している旨の説明があったが、後日、具体的な協議をもつことになった。8月13日の協議の結果、以下のように調査を実施することに決定した。

- ①調査対象地は、約6,600㎡とする。
- ②バイパス工事は、昭和58年度開通をめざし切迫しており、工事工程との関係で57年度・58年度の二ケ年に分ける。57年度は東西の側道の部分とし、中央部を58年度とする。
- ③57年度の調査は、9月の1ヶ月とし、今池遺跡の調査期間を1ヶ月延長し、11月末日までとする。
- ④58年度は、5月20日までに完了する。

以上の事項を、8月20日、北陸地方建設局で正式に決定した。

2 調査と整理

A 発掘作業

今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡の発掘調査は、当初予定していたよりも長く、昭和55年に始まり、昭和58年まで継続された。現場作業は冬期間は中断している。

調査体制は各遺跡ごとにではなく、各年度ごとに組織した。これは3遺跡がたがいに近接しており、工事工程の関係から、ひとつの遺跡を連続して調査することができなかったことにもよる。とくに今池遺跡は発掘面積が20,000㎡以上にのぼり、4ケ年にわたった。調査の詳細な実施状況については、各章ごとに述べてある。

昭和55年から58年までの調査と整理作業の実施状況は第3図のとおりである。55年度には10月に今池遺跡A地区の調査がはじまり、この年はこれで終了し、翌年度には本格的な長期の発掘調査となった。56年度は7月までの期間で、下新町遺跡の主要な調査を終え、8月下旬より今池遺跡C地区の作業にはいった。例年7月下旬から8月中旬頃までは県教育委員会による詳細分布調査と夏期休暇などで4週間ほど作業を中断している。57年度の調査は4月早々から開始し、11月いっぱいまで例年になく長期間にわたって実施された。今池遺跡C地区を6月中旬には完了し、B地区が残りの期間となった。この間、子安遺跡の調査が必要とされることが判明し、前述の協議により急遽本調査にはいり、これによって、今池遺跡の調査が1ヶ月延長となり、子安遺跡の約半分が次年度にもち越された。58年度は子安遺跡の残部と今池遺跡C地区の一部が新たに買収され、これも調査対象とした。

調査主体は新潟県教育委員会（代表 教育長 久間健二）で、調査体制は下記のとおりである。現場に専従した調査員は常時1班編成の3～4名を基本とした。

昭和55年度 今池遺跡

総 括 南 義昌（文化行政課長）

管 理 石山 欣弥 (同 課長補佐)
 庶務管理 近藤 信夫 (同 副参事)
 庶 務 獅子山 隆 伊藤 和子 (同 庶務係)
 調査指導 金子 拓男 (同 埋蔵文化財係長)
 調査担当 折井 敦 (同 埋蔵文化財係)
 調 査 員 北村 亮 田辺 早苗 (同 埋蔵文化財係)

昭和56年度 今池遺跡・下新町遺跡

総 括 南 義昌 (文化行政課長)
 管 理 石山 欣弥 (同 課長補佐)
 庶務管理 近藤 信夫 (同 副参事)
 庶 務 獅子山 隆 伊藤 和子 (同 庶務係)
 調査指導 金子 拓男 (同 埋蔵文化財係長)
 調査担当 折井 敦 (同 埋蔵文化財係)
 調 査 員 北村 亮 田辺 早苗 田海 義正 佐藤 雅一 (同 埋蔵文化財係)

昭和57年度 今池遺跡・子安遺跡

総 括 南 義昌 (文化行政課長)
 管 理 歌代 莊平 (同 課長補佐)
 庶務管理 飯口 猛 (同 庶務係主任)
 庶 務 若杉 幸三 (同 庶務係)
 調査指導 金子 拓男 (同 埋蔵文化財係長)
 調査担当 戸根与八郎 (同 埋蔵文化財係)
 調 査 員 木村 宗文 坂井 秀弥 田辺 早苗 大森 勉 高橋 勉
 (同 埋蔵文化財係)

昭和58年度 子安遺跡・今池遺跡

総 括 高橋 安 (文化行政課長)
 管 理 歌代 莊平 (同 課長補佐)
 庶務管理 飯口 猛 (同 庶務係主任)
 庶 務 高橋 幸治 (同 庶務係)
 調査指導 中島 栄一 (同 埋蔵文化財係長)

年度	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備 考
55 年度								今池 A	整理					今池 A 1,800㎡
56 年度			今池 A	下新町	今池 C									今池 A 450㎡ 今池 C 4,400㎡ 下新町 4,600㎡
57 年度		今池 C	今池 B	整理	子安									今池 C 6,000㎡ 今池 B 12,000㎡ 子 安 3,400㎡
58 年度		整理	子安	今池 C				報告書						子 安 3,200㎡ 今池 C 162㎡

第 3 図 調査・整理作業の実施状況

調査担当 戸根与八郎 (同 埋蔵文化財係)
 調査員 高橋 勉 (同 埋蔵文化財係)

B 整理作業と報告書の作成

昭和55年度から昭和57年度までは、それぞれの年度ごとの出土遺物の洗浄・註記と図面の整理を行い、遺物の実測を含めた本格的な作業は、ほとんど昭和58年度に実施した。遺物の整理のうち、洗浄については、出土量が増加し、発掘が長期化した昭和56年度と昭和57年度には現場でほとんどを行った。

昭和58年度は4ケ年にわたる調査の報告書を年度末までに印刷物として完成するため、現場作業のため職員の大半が出張する4月から11月までの期間も整理要員を一名確保し、土器の実測、遺構図面のトレースを主とした作業を実施する計画を立案した。しかし、現場の作業量に対して、職員数が不足し、一名の確保ができたのは10月にはいつからであった。さらに現場作業は例年になく長びき、12月上旬まで続くところがあり、それまでの期間は1名のみでの整理作業となった。調査参加者が揃ったのは12月中旬であり、それから1月までの短い期間内に、図面類の作成と原稿執筆、写真撮影など多くの作業を消化せざるをえなかった。このため、埋蔵文化財係のほぼ全員が本書の作成に参加した。本文の内容や用語の使い方に統一性がみられないのはこうした事情によるものであり、校正の時間も限られていたために、誤植も多いと思われる。

本書の作成にあたっては調査参加者のほかに多数の職員が参加した。主として遺物については寺崎裕助・山本肇・鈴木俊成・丸山謙司・肥田野弘之、写真については岡本郁栄・高橋保、編集については藤巻正信が参加した。執筆分担はつぎのとおりである。編集は中島栄一の指導のもと藤巻正信・田辺早苗の協力を得て坂井秀弥が行った。

第I章	坂井 秀弥 (建物・溝)	C 山本 肇
1 A 折井 敦	田辺 早苗	D 田海 義正
B 坂井 秀弥	(建物・土坑・溝)	E 北村 亮
2 坂井 秀弥	3 A 1)・8) 坂井 秀弥	田海 義正
第II章	2)・5)~7) 戸根与八郎	4 折井 敦
1 坂井 秀弥	3) 木村 宗文	第V章
2 戸根与八郎	4) 山本 肇	1 A 坂井 秀弥
3 木村 宗文	9) 折井 敦	B 戸根与八郎
4 A・B 木村宗文	B 1)~4) 戸根与八郎	2 A・B 坂井 秀弥
C 戸根与八郎	5) 鈴木 俊成	C 戸根与八郎
第III章	C 戸根与八郎	(昭和58年度分)
1 A・B 折井 敦	4 A 坂井 秀弥	坂井 秀弥
C 坂井 秀弥	B 戸根与八郎 (井戸・陶器)	(昭和57年度分・畝状小溝)
D 戸根与八郎	坂井 秀弥	3 A 坂井 秀弥
2 A・B 坂井 秀弥	第IV章	B 1) 坂井 秀弥
C 1) 木村 宗文	1 折井 敦	2)~5) 戸根与八郎
(B地区北半部)	2 A 折井 敦	6) 山本 肇
折井 敦 (A地区)	B 折井 敦 (建物)	4 A 戸根与八郎
北村 亮 (A地区)	北村 亮 (溝・土坑)	坂井 秀弥
坂井 秀弥	田海 義正 (井戸)	B 坂井 秀弥
(C地区・B地区)	3 A 北村 亮 (土坑出土)	第VI章
田辺 早苗	田海 義正 (井戸出土)	1 坂井 秀弥
(B地区北半部)	B 1) 折井 敦	2 山本 肇
2) 戸根与八郎 (井戸)	2) 木村 宗文	3 坂井 秀弥
木村 宗文 (建物)	3) 北村 亮	

第II章 今池遺跡群の位置と環境

1 位置と地理的環境

A 頸城平野の概略 (第4図)

今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡は、新潟県南西部に展開する頸城平野(高田平野)西側のほぼ中央に位置する。頸城地方は上越市・新井市などを核とする新潟県南西部の中心をなし、西は富山県、南は長野県と接する。これら3遺跡の行政区はいずれも上越市で、それぞれ大字今池・下新町・子安に所在する。3遺跡は南北2km以内の範囲に近接して存在し、立地・時代など共通点が多い。したがって、これらを総称する場合は、「今池遺跡群」とし、周辺の本長者原廃寺・本長者原南遺跡などもこれに含めることとする。

この平野は沖積地を主体とする。主な河川は関川をはじめ、矢代川・保倉川・柿崎川などである。地勢は大局的にみて、南から北、あるいは南東から北西に傾斜する。地形は南東縁に扇状地、北側に海岸砂丘¹⁾があり、ほかはほとんど氾濫原性低地である。関川は長野県境に源を發し、ほぼ北流する当平野第一の河川であり、妙高山系から流れる矢代川とともに、平野南縁に広大な扇状地を形成する。関川の主要な支流である大熊川・別所川・櫛池川も丘陵から平野部に出る部分にそれぞれ扇状地を形成している。保倉川は平野北辺をほぼ西流し、関川の河口付近でこれと合流する。保倉川の北側と海岸砂丘(潟町砂丘)との間は低く、17世紀に干拓された大潟などの広大な後背低湿地がひろがる。潟町砂丘の中央部内陸側は砂丘が樹枝状に張り出し、その間に朝日池・犀ヶ池などの湖沼群が存在する。

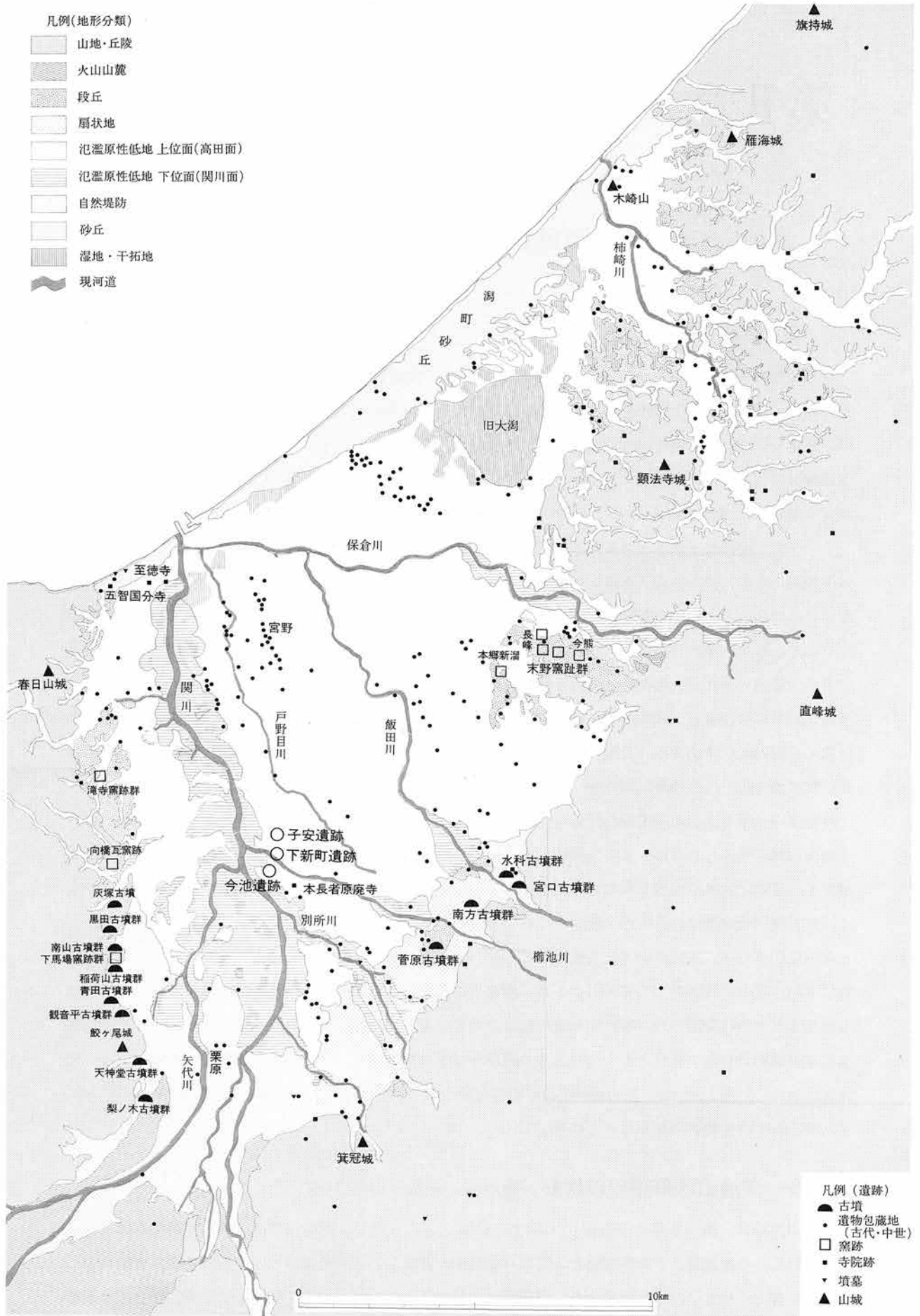
沖積地の大半を占める氾濫原性低地は、上位面の高田面と下位面の関川面に分類される。関川面は保倉川の谷口部にもみられるが、多くは関川と矢代川の流域に分布する。関川面は関川などの河川が高田面を開析することによって形成されたもので、両者の境界は段丘崖となり、高田面はいわゆる沖積段丘となる。この段丘崖は今池遺跡付近から上流はとくによく發達し、今池付近で比高差約5mである。

関川にかぎらず、河川はいずれも蛇行しており、その痕跡を明瞭にとどめることが多い。頸城村の保倉川の旧河道はその典型として著名である。櫛池川については後述するように近代以降、改修工事によって直流するように開削され、現在の河道に固定されている。高田面上を流れる櫛池川・飯田川・戸野目川などは河道部分が深く浸食されており、その両側の斜面は林となり、一面の水田風景のなかでは目立った存在となっている。高田面・関川面の上には自然堤防があり、現在の集落の大半はこの上に営まれている。また畑としての土地利用が多くみられる。

B 今池遺跡群周辺の地形 (第5図, 図版1・77)

今池遺跡群は、関川右岸の沖積段丘(高田面)の縁辺部に立地し、南から今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡となる。今池遺跡と下新町遺跡の間には櫛池川が西流し、下新町遺跡と子安遺跡の間は櫛池川の旧河道とも考えられるくぼ地が介在する。段丘面はおおむね南から北へゆるく傾斜しており、標高は今池遺

1) 地形分類は北陸建設弘済会『新潟県平野部の地盤図集(柏崎・高田平野編)』(1981)によった。



第4図 頸城平野(高田平野)の地形分類と遺跡分布

地形分類典拠:『新潟県平野部の地盤図集』(社団法人北陸建設弘済会 1981)

跡約16m・下新町遺跡約14.5m・子安遺跡約13.5mである。子安付近では集落の立地する縁辺部が高く、これより東側が低くなる。関川面は今池の集落西側で標高約10m、子安遺跡の西側で約8mであり、段丘崖は北へいくにしたがって低くなる。

関川面は高田面沿いに一段高い面がある²⁾。これは今池の南から本長者原・新長者原の南にかけてと今池の北側とにみとめられる。この面は高田面と比高約2～3mである。

現在、櫛池川は下新町・上新町集落の南を通り、ほぼ西へ流れている。この河道は、大正期に改修されたものであり、明治年間の更正図(地籍図)には、これ以前の河道が記されている。これによれば河道は大きく蛇行しており、現在も三日月湖のように残っている部分がある。今回調査した今池遺跡の北側の湾入部、下新町遺跡の西側がこれにあたる。

明治までの櫛池川のほかに、地形や明治期の更正図の地割から、櫛池川の河道と推定されるものが多くみられる。これを上流からみていくと、まず上新町の上流では現河道に沿うもののほかに、これと全く方向・位置が異なるものが注意される。このほか藪野の集落の東側にも河道があり、櫛池川は丘陵の谷口を出てからは現河道におさまるまでいくつかの河道があったと思われる。谷の一部は昭和40年前後の圃場整備でも埋められずに残存している。下新町・上新町の南側では下新町集落の南方の湾入が大きい。これは明治期までの河道とそれ以前の河道とが重複するものであるが、後者の湾入部の南側は河道状の谷となるが直線的であり、人工的な造作とも考えられる。下新町の西側から子安の南側にかけては、旧河道が複雑であり、かなり広いくぼ地となって北西方向にのびている。これが櫛池川の開削によって形成された可能性があり、現在とは異なる河道が存在したことが想定される。このくぼ地にはさらに数条の河道がみられ、このうちの子安遺跡の南側の部分は現在でも谷が残存している。これらの流路をみると、下新町の南側から流れ出たものと推定されるものもあるが、一方下新町集落の北側から流れ出たことを想定させるものもある。また、下新町集落と今回発掘した畑地との間には細い水田が介在し、ここにも河道が考えられる。なお、子安遺跡の調査区で検出された河跡は北側の子安の集落方向を指向しており、このほかにも河道が存在したことをうかがわせる(第V章2参照)。

一方、現在の河道である樋場の南側には、現河道のほかに河道が存在した形跡がみられず、さきのくぼ地とは対照的なあり方である。すなわち現河道は蛇行せず、直線的な流路であり、半島状に南から突き出した段丘面を横断しており、関川への最短距離に位置する。こうした点を考慮すれば、この河道が人工的に開削されたことがうかがわれる。

さて、これらの流路がいつ形成されたかは遺跡の存在ともからんで重要な問題である。たとえば下新町遺跡は現状では範囲が狭いが、今池遺跡と同時に存在した時期もあり、両者の性格を考えるうえで、この間に櫛池川が介在したかどうかは大きな問題である。しかし、これに関しては不明な点が多いといわざるをえないが、古絵図によって若干ではあるが、知られる点がある。代表的な絵図は①慶長2年(1597)、②正保2年(1645)、③文化5年(1808)である。

まず、慶長2年絵図では櫛池川は「こやす川」と称され「長者原村」と「こやす村」の間から「たか畠村」の南西部を通って関川に注ぐ。樋場・新町・今池の記載がないためこれ以外はわからない。「たか畠村」は、現在残っていない地名であるが、慶長2年の検地高における本納・縄高・家数・人数すべての

2) 高田平野団体研究グループ「高田平野の第四系と形成史」(「新潟大学教育学部高田分校研究紀要」25 1981)の分類は、ここで使う分類の「関川面」を「汎

濫原」と「関川面」とに分け、ここでいう「関川面」の高い部分を「関川面」、低い部分を「汎濫原」とする。高田面については註1)文献と同じ分類である。

数字が子安村と一致している(23頁参照)ことから、子安に比定され、当時櫛池川は子安の南を通っていたことが知られる。ただ、子安の範囲が不明なため櫛池川が樋場の南を通っていたかどうかは定かでない。

次に、正保2年絵図では櫛池川と思われる川に「小町川」という名が付されている。小町川は「今池」と「新町」の間、「新町」と「子安」の間、さらには「鴨島」・「戸ノ目」・「三田」などの東側を通過している。したがって、子安から直接西方の関川へ出るのではなく、段丘上(高田面)を北流することがわかる。文化5年絵図は、河川ばかりでなく、すでに完成していた中江用水をはじめとする用水が記されており、河川が複雑である。櫛池川と思われる河道は「新町」・「今池」の北を通過するが、その後、「今池」と「子安」の間に短い流路がみられる。これは描き方が直線であり、櫛池川とT字状に接することから、現在の樋場と今池の間の河道に比定され、かつ人工的なことを想定させ、前述した地形からの所見と一致する。したがって、この流路が開削されたのは、正保2年から文化5年の間であると推測されるのである。

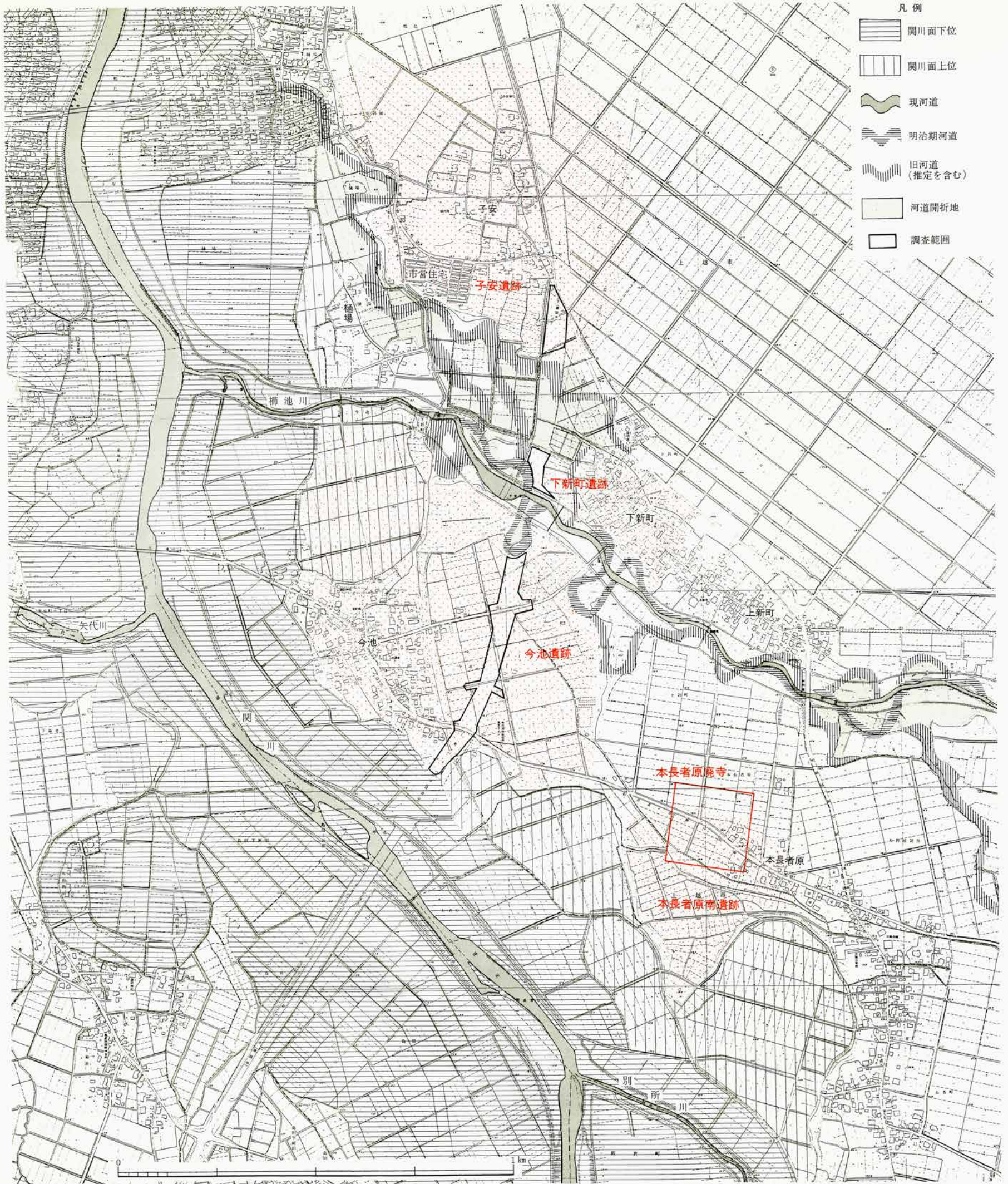
以上のように、櫛池川は時代によっていくつかの流路が存在しており、平野部を濫流していたようすがうかがえる。そして、その河道はひとつに定まることなく、数条同時に存在したことも考えられる。今池遺跡群周辺もこの傾向が著しく、現状から直接当時の地形環境を復元することは適当でないことに留意しなければならない。

C 遺跡の範囲と現況








今池遺跡群の各遺跡は、本長者原廃寺をのぞけば、いずれも昭和54年・55年に発見されたものである。今回、今池・下新町・子安の各遺跡が発掘調査されたが、これは遺跡全体のごく一部にすぎず、遺跡の範囲は不明確であった。そこで、昭和57年度では周辺の踏査を実施した。調査は水田耕作期であったため、基本的には畑地を中心に遺物の散布範囲を把握することを主眼にし、これに発掘調査の所見と地形を勘案して、一応の範囲を推定した。

今池遺跡 発掘調査面積が約20,000㎡で今回の調査のなかでとくに大きく、その範囲は南北約600mに達し、遺構は分布状況に疎密はあるが、南端から北端まで全面に分布する。周辺の畑は櫛池川の南の下新町側にかかなり広く存在し、その全面に遺物の散布がみられる。一方、段丘南縁の集落沿いの畑、あるいは集落内の屋敷畑にも遺物が数多く散布している。遺物の大半は発掘資料と同じく奈良・平安時代の須恵器・土師器である。遺跡の範囲は南側から西側の段丘縁辺部は段丘崖で画されるが、ほかは不明である。東側は櫛池川の旧河道の湾入部とその南につらなる直線的な谷を一応の目安とし、北側は櫛池川と考えておくが、前項で述べたように櫛池川の河道は変動しており、現段階では不分明である。なお、西側北辺部には一段低い面があるが、この部分は遺物の散布を確認できず、範囲外となる可能性もある。上越市教育委員会では発見当初、県道高田・青柳線と市道によって、南より今池A遺跡・今池B遺跡・今池C遺跡とに区別していたが、一括してひとつの遺跡とみたほうが妥当であることは発掘調査の結果により明らかである。ただ、発掘工程上、道路によって地区分けすることは有効であり、それぞれA地区・B地区・C地区とした。

下新町遺跡 発掘調査範囲の北側・西側は河道の浸食で低くなり、南側は現櫛池川であることから、遺跡の3方は明確に画される。東側はさらに畑が連続し、細い水田地帯を介して下新町集落へつづく。畑の部分は範囲内に含まれるが、集落内は表面採集ができないこともあって不明である。しかし、地形的には畑と同じ地形上にあり、これも遺跡に含めて考えるべきであろう。南北は約100mである。遺物は奈良・



凡例

-  関川面下位
-  関川面上位
-  現河道
-  明治期河道
-  旧河道
(推定を含む)
-  河道開折地
-  調査範囲

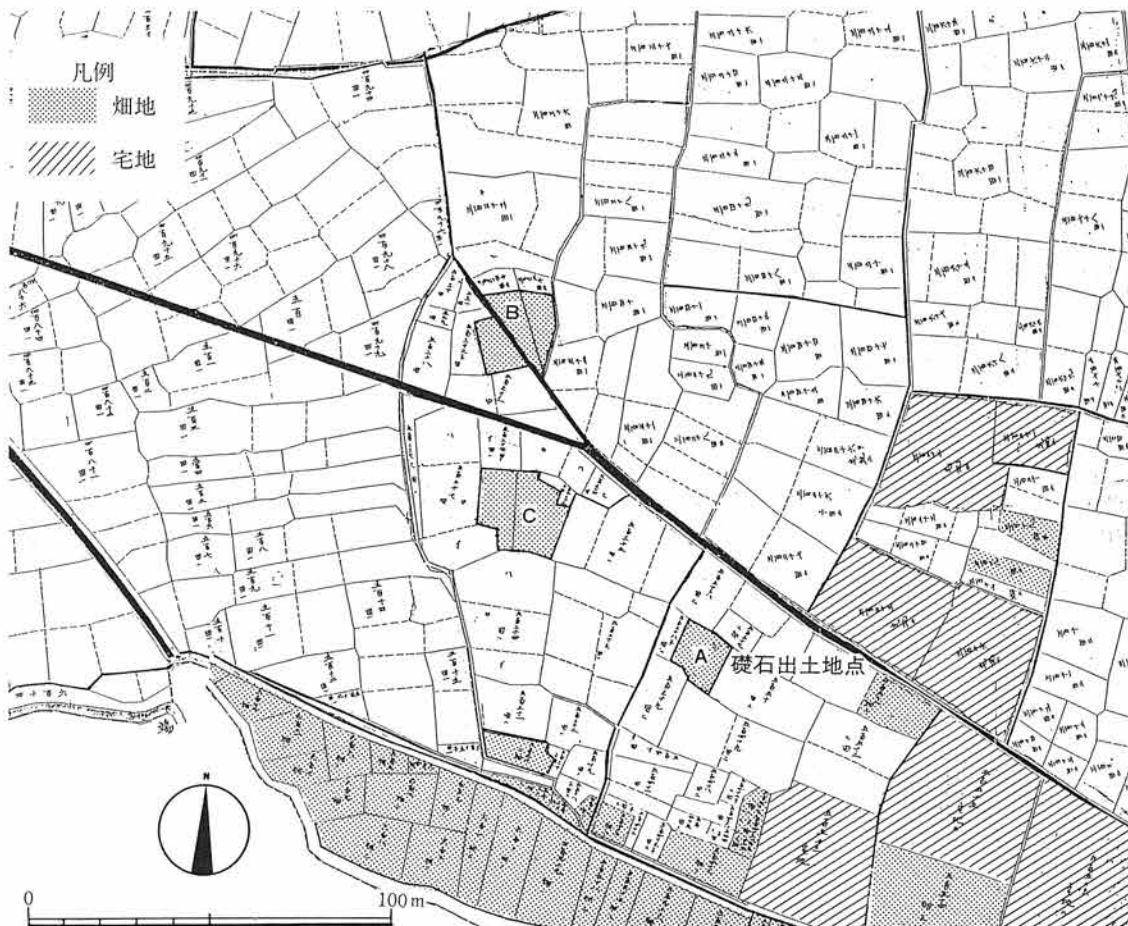
第5図 今池遺跡群周辺の地形と遺跡の範囲

平安時代の須恵器・土師器である。ただし、発掘で明らかにされたように、洪水堆積層が遺物包含層を覆っており、遺物の散布量は少ない。

子安遺跡 発掘調査範囲は遺跡全体からみれば東辺にあたり、中心部は子安用水を介した西側である。市営住宅の東側の畑(字「古屋敷」)をはじめとし、集落内の畑には満遍なく遺物が散布している。西側は段丘崖、あるいは河道開析部により明確に画されるが、北側・東側は不分明である。ただし、北側には字「池之尻」という場所があり、現状でも低くくぼみ、この付近が北辺となろう。東側は決め手を欠く。したがって、現状では東西・南北とも500m以上と推定される。遺物は平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器、中世の珠洲・瀬戸焼などである。

本長者原南遺跡 本長者原の集落の南側に半島状に突き出た段丘上に位置する。発掘調査はなされていない。半島部の畑・大道用水の北側の畑には全面に遺物が散布しており、南北は300m以上であろう。遺物は奈良・平安時代の須恵器・土師器が中心である。

本長者原廃寺 本長者原に存在する奈良時代から平安時代の寺院跡である。発掘調査はなされていない。昭和48年の『新井市史』³⁾により、はじめて寺院跡として紹介され、越後国分寺の可能性が強いとされた。その根拠は塔心礎と考えられる大きな礎石が存在したという記録があること、塔基壇と考えられる畑がかって存在したこと(第6図)、付近に古代瓦が散布していることがあげられている。これについて、最近再検討した結果、『新井市史』の指摘が正鵠を得たものであろうと考えられ、現在のところ越後国分寺の



第6図 本長者原廃寺周辺の旧地割

3) 加藤晋平「越後国分寺と国衙」『新井市史』上 1973

可能性がもっとも高い寺院跡といえよう⁴⁾。当廃寺は今池遺跡群の性格を考えると、不可欠の存在であり、今後の調査が期待される(第12図)。

2 頸城地方の古代・中世遺跡

高田平野の古代・中世遺跡の分布は第4図の如くである。丘陵部の遺跡については明治時代から注目されてきたが、沖積部の遺跡については県教育委員会が昭和37・48年に行った全県の遺跡分布調査や昭和51年以来毎年実施している遺跡詳細分布調査などによって一層明確になった。さらに、上越市教育委員会が昭和55年に実施した市内の遺跡分布調査によって、市内の遺跡の範囲および時代・性格がほぼ把握されている。ここで図示したものが頸城地方の古代・中世遺跡のすべてではなく、まだ相当数のものが地中深く埋没していると思われる。この中の遺跡のうち、各種開発事業に伴って、発掘調査が実施されたものは数少ないが、実施されたものについては頸城の古代・中世を考えるうえで貴重な資料を提供するものが多い。

古墳時代の遺跡は古墳と遺物包蔵地がある。古墳は県内でも有数の規模をほこり頸城古墳群と総称され、その数は約200基を数える。古墳は高田平野をはさんで、南東グループと西南グループとに大別される。東南グループは関田山脈から流れ出る飯田川・櫛池川によって形成された扇状地を中心にして分布する古墳群で、菅原古墳群を最大規模として高士・宮口・水科などの古墳群である。この中でも昭和50年に牧村宮口地区と三和村水科地区の圃場整備事業で水田中にある古墳群の発掘調査が行われ、宮口古墳群の第11号古墳からは金銅装円頭太刀が出土し、頸城古墳群について大きな手懸かりを与えている。西南グループは関川の左岸段丘上の原通古墳群および矢代川左岸の南葉山山麓の先端部や丘陵上に立地する古墳群で、梨ノ木・天神堂・観音平・青田・稻荷山・南山・黒田と南側から北側へ連続するように分布している。この2つのグループの古墳群はいずれも古墳時代の後期に属するものと考えられている。なお、遺物包蔵地では水科古墳群で2枚の文化層が確認され、下層から和泉式土器に併行する土器が出土している。おそらく、高田平野の下には古墳時代の遺跡がまだ埋没している可能性が多分にあり、今後の調査・研究に期待したい。

奈良・平安時代の遺跡は種別から遺物包蔵地・須恵器窯跡、それに国府・国分二寺推定地などがある。該期の遺跡は中世の遺跡の分布にほぼ一致している。自然堤防上・砂丘・扇状地・支谷に臨む丘陵上などに数多く分布している。特に沖積地内の自然堤防上には顕著で、現集落内の屋敷内および周辺の畑地から遺物が採集されるケースが多い。遺物包蔵地が数多く分布している沖積地には段丘化した2段の段丘面(関川面・高田面)がある。関川面は高田面の下位に位置し、1m以上の比高差がある。関川面と関川の氾濫原との比高差は1~2mをはかる。高田面は高田平野のほぼ全域をおおい、関川面は関川と矢代川にはさまれた地域と関川下流の全域に分布する。今後、この高田面に注目して遺跡の分布を調査する必要がある。特に、関川の左岸現高田市街地周辺については確認されている遺跡が少なく、今後一層注意を払う必要がある。

いま、これらの遺跡の分布を見てみると、保倉川の旧河道を境にして分布の仕方は大きく異なっている。保倉川旧河道以北では、砂丘・潟端の自然堤防、低丘陵上・柿崎川の上流の小支谷内に分布しているのに対して、保倉川旧河道以南では高田面が広く形成され、保倉川・飯田川・戸野目川・櫛池川などによって

4) 坂井秀弥「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討―越後国分寺推定地の一例―」『新潟史学』16 新潟史学会 1983

形成された自然堤防上に立地しているものが多い。高田面に分布する遺跡を詳細に見るとある程度グルーピングすることができる。しかし、未調査の部分がかなりあるので、調査データがまとまった段階で再考することとしたい。近年、県教育委員会や上越市教育委員会によって、分布調査や発掘調査が行われ、高田面上にある遺跡の性格の一端が明らかにされつつある。保倉川の旧河道沿いの自然堤防に立地する榎井B遺跡・片津中之島A遺跡(頸城村)からは平安期の灰釉陶器片が採集され、戸野目川と飯田川にはさまれた自然堤防上の宮野遺跡(上越市)からは石帯・灰釉陶器片が出土している。砂丘上にある木崎山遺跡(柿崎町)の下層には奈良期の集落跡があり、「品遅部宮麻呂」と銘がある墨書土器が出土している。これらの集落跡と推定される遺跡に須恵器などを供給したと考えられる窯跡は沖積地の西側、西頸城丘陵の裾部に3遺跡(下馬場・滝寺・向橋)確認され、そのうち向橋窯跡(上越市)は須恵器・平瓦を焼いた窯跡で、国分寺等の瓦の生産地として注目されている。また、東頸城丘陵の裾部、三和村神田から浦川原村今熊にかけては須恵器窯跡群(末野古窯跡群)が存在し、高田平野周辺部で最大規模をほこる一大窯業地帯である。長峰窯跡群(三和村)からは土馬(飾馬)が、今熊窯跡群からは8世紀と目される多嘴瓶が出土している。国府および国分二寺については今日まで先学によって、上越市善光寺浜周辺・三和村法花寺周辺・板倉町田井周辺・同国川周辺・新井市堂庭周辺・同国賀周辺・同栗原周辺・妙高村今府周辺・上越市長者原周辺などの諸説があるが、いまだその位置は明確になっていない。しかし、栗原遺跡(新井市)は国賀周辺にあって、発掘成果から郡衙的要素をもっていると考えられている。今回、発掘調査の対象となった下新町遺跡・子安遺跡・今池遺跡は長者原周辺にあって、本長者原廃寺と有機的関連をもった遺跡と考えられる。

中世になると沖積地のみならず、東頸城丘陵の米山から山寺薬師に至る山間地には城館跡をはじめ塚・墳墓・寺跡などが特に多く分布している。いずれもこれらは有機的関係をもっているものと思われる。廃寺跡は山寺薬師(板倉町)、岡峰廃寺跡(清里村)、水吉堂百・大光寺(三和村)、法定寺(浦川原村)、東泉寺跡・林泉寺跡(柿崎町)、至徳寺跡(上越市)などがある。山寺薬師は奈良時代行基の開山と伝えられ、別名猿供養寺と呼ばれている。木造薬師如来像の頭部に「大檀那三善讚阿勸進沙門祐山 応永第二年大才乙戌七月二日 大仏師筑後法眼」・背部に「大檀那三善讚阿 応永二年大才乙戌七月二日 大仏師筑後法眼」と墨書銘がある。この三善讚阿は三善為教の子孫と考えられ、三善氏は鎌倉時代から室町時代初期にかけてこの地方に相当な勢力をほこっていたことがうかがえる。法定寺はもと真言宗の寺院で、旧境内からは鎌倉時代の五銚鈴・五銚杵(県指定)が出土している。また、この寺の周辺部には鎌倉時代から室町時代と推定される石仏があり、妙高村の関山神社を中心に分布する腹部・台座を省略して下部を地下に埋め込むものに近似している。この石仏は浦川原村横住・岩室、三和村山高津・大光寺・水吉などにもあり、一大石仏群を形成している。水吉堂百には首から上だけの石仏(阿弥陀・観音・地藏)があり、首切地藏と呼ばれている。いずれも凝灰岩製で、阿弥陀仏は高さ73cm・面幅43cm・頭廻1.8mある。林泉寺跡では本堂・庫裡が確認され、本堂は4間×5間、庫裡は4間×4間である。柱間は1.7mで、柱穴は径30cm前後、深さ40cmである。

塚および墳墓も廃寺跡に関連して数多くある。金谷塚・車地塚(柿崎町)、河沢塚(吉川町)、しらみ経塚(頸城村)、善光寺浜中世墳墓(上越市)などが調査されている。骨蔵器および外容器は14世紀頃の珠洲焼が大部分を占めるが、善光寺浜中世墳墓では古瀬戸瓶子を骨蔵器にしているものもある。

山城は高田平野より外へ通じる街道の要所に築かれている。上越より中越・下越地方へ通じる米山峠を守るために、顕法寺城(吉川町)、旗持城(柏崎市)などが、関東地方への道沿いには直峰城(安塚町)・室野城(松代町)などが、信濃への道沿いには鮫ヶ尾城(新井市)・箕冠城(板倉町)などが、上洛の道であ

る北陸道沿いには徳合城（能生町）・不動山城・根知城（糸魚川市）がある。いずれも大規模な山城で、春日山城防衛のための山城である。また、石造物も東頸城丘陵の山麓部から数多く発見されている。おもに五輪塔が主で、親鸞の妻であった恵信尼の墓塔とされるものが板倉町米増に、吉川町の大乗寺には「永禄十一年十一月廿九日 龍勝禅定院」や「元亀二年七月廿日 法印賢永大和尚位」と銘文のある一石五輪塔などがある。いずれにせよ、中世においては、春日山城を中心にして、東頸城丘陵山麓に仏教文化が栄えたことが顕著にうかがわれる。

3 文献からみた古代・中世の頸城地方

A 古代の頸城地方

頸城郡は、現在の青海町から柿崎町にかけての広い面積をもつ郡であった。今日の行政区でみると、佐渡を除く新潟県の面積11,721.09km²のうち2,342.38km²を占め、その比率は約20%に当る（昭56・10・1）。『倭名類聚抄』によれば、この中に「沼川・都宇・栗原・原木・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味」の10郷が存在した。それぞれの位置は、式内社の所在や今日に残る地名などから、おおむね、沼川郷は糸魚川市・能生町付近、都宇郷は直江津付近、栗原郷は新井市栗原付近、板倉郷は板倉町付近、高津郷は上越市から三和村にかけて、物部郷は清里村付近、五公郷は三和村付近、夷守郷は頸城村・三和村付近ないし新井市美守付近、佐味郷は柿崎町付近と推定されている。

頸城地方が県内でも比較的早くから開けていた地域であることは、文献上からも推定可能である。『先代旧事本紀』に引く「国造本紀」は、「久比岐国造、^{（崇神）}瑞籬朝御世、大和直同祖御戈命定賜国造」と記す。崇神朝ということは信憑性に乏しいにしても、清里村・三和村・牧村に菅原・水科・水吉・宮口などの古墳群が存在し、それらが6世紀から7世紀のものとして推定されていることからすれば、これら在地の勢力が畿内政権の支配下に組み込まれた時に、国造に任ぜられたものと考えられる。

一方、のちの北陸道地域は長く「越」と総称されていた。それが越前・越中・越後に三分割され、地方行政組織の整備がはかられるのは、大化改新以後、律令体制が確立されてゆく過程においてである。三分割の時期は、史料がないために何年と特定することはできないが、『日本書紀』持統6年（692）に越前国司の名称がみえることからすれば、そのころには越後国も成立していたと思われる。しかし、越後国の国域がほぼ現在のような形で確立するまでには、その後数十年を要した。その中で頸城郡も当初から越後国に属していたわけではなかった。『続日本紀』大宝2年（702）3月17日の条に「分越中国四国郡属越後国」と記されている。この四郡については、三島郡が9世紀に古志郡より分置されたものであることが明らかにされ、頸城・古志・魚沼・蒲原郡とすることでほぼ結着がついている。これからすれば、成立当時の越後国はほぼ阿賀野川以北の地であったと推定され、大宝2年に越中国から上記四郡を加え、さらに和銅5年（712）、出羽国を分離させてようやく国域が定まったと考えなければならない。こうした動きの中で、頸城郡も大宝2年の段階で、越中国から越後国に編入されたのである。

10世紀前半に越後国府が頸城郡に存在したことは、『倭名類聚抄』に「越後国^{国府在頸城郡行程上}二十四日下十七日」と記さ

1) 越の三分割は、持統3年（689）の飛鳥浄御原令の頒布と翌年の庚寅年籍の作成を契機としてしていると考えられるむきもある（坂井秀弥『栗原遺跡第6次発掘調

査概報』新潟県教育委員会 1983）。

2) 米沢 康「大宝2年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 1980

れていることによって明らかである。ただ越後国の国域がしばらくの間流動的であったために、いつからと断定することは困難である。しかし少くとも出羽国を分離して北方の拓殖という機能が不用になったころから頸城郡が越後国の政治の中心地となったとみることはできそうである。すなわち、慶雲2年(705)、威奈真人大村が越後城司に任命された。同4年には病をえて現地で没するが、明和年間(1764~1771)、大和国葛下郡で発見された威奈大村の骨蔵器の銘文には、「越後北疆衝接蝦夷、柔懐鎮撫允属其人」と記される。大村の任務ははまだ不安定な越後国の統治と蝦夷の柔懐鎮撫にあつた。したがって、彼の拠つた越後城すなわち当初の越後国府を頸城郡内に求めることはできない。越後城の役割が終焉した時に、政治の中心も頸城郡に移つたものであろう。

頸城郡における国府の所在地については諸説ある。直江津に国分寺があることから、国府もその付近にあると長い間考えられてきた。しかし、五智国分寺は永禄5年(1562)上杉謙信によって再建されたものであり、昭和39年から40年にかけて実施された御館の緊急発掘調査によつても古代の遺構を確認することはできなかつた⁴⁾。今日、直江津に古代国府を求める人はほとんどいない。そうした中で、親鸞関係の史料から頸南地方に求める動きがでてきた。故井上鋭夫氏は次のようにいう。

承元元年(1207)越後国府に流された親鸞の妻惠信尼とその子供たちは、板倉町の栗沢・高野・沢田・山寺や安塚町の小黒にいたし、惠信尼の実家の三善家は、板倉町山寺に薬師・阿弥陀・釈迦の像を南北朝時代の末につくらせている。国府が直江津とすれば、これらの離れた土地での結びつきを説明するのに困難となる⁵⁾。

この疑問の上に立つて井上氏は、「古府(今府)より国衙(国賀または国川)へ、そしてその国衙より府中(直江津)へと、関川をしだいにくだつて日本海に達したことが考えられよう」とした。新井市国賀に国府を求める説は平野団三氏も唱えるところである。しかし『新井市史』が指摘するように、多分に地名にもとづくところが多く、越後国府の所在ははまだ不明といわざるを得ない⁶⁾。

越後国分寺についても国府との関連で推論されている。『中頸城郡誌』や『直江津町史』は、万里集九の記録をもとに海中埋没説をとつたが、頸南に国府を求める動きの中で、板倉町大字田井字国分寺が注目されるようになった⁷⁾。しかし同地からは布目瓦が発見されておらず、否定的な見解もある。その中で、今池遺跡に隣接する本長者原廃寺において、礎石の存在した記録があること、布目瓦が採集されていること、更正区上でも伽藍配置が推定されることなどによつて、同地に国分寺を求める説も出されている⁸⁾。

国分寺の建立は天平13年(741)の詔に端を発する。天平勝宝8年(756)、越後国など26か国に灌頂幡1具、道場幡49首、緋綱2条が頒下された。聖武天皇の1周忌に充てられるもので、終つたら金光明寺(国分寺)に納められることになっていた。越後国分寺はこのころには成立していたとみることができる。『弘仁式』では、国分寺料2万束が正税から出されることになっている。これは国分寺の運営、修繕費用に充てられたものであろう。越後国分寺関係の史料としては、このほかに『袖中抄』の記事がある。弘仁13年(822)、国分寺尼法光が農民の濟度(渡河あるいは渡海)の難を救うために、古志郡の渡戸浜に布施屋を建

3) 『続日本紀』は威奈大村が慶雲3年(706)越後守となったことを記す。墓誌銘と合わせて、慶雲2年に事実上越後守として赴任したものと思われる。越後城の所在については淳足柵に求める説(桑原正史「淳足柵の史的性格など」『新発田郷土史』7 1974他)と磐舟柵に求める説(横山貞裕「越後城司威奈大村」『越佐研究』1 1956他)がある。

4) 『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会 1966

5) 井上鋭夫『新潟県の歴史』山川出版社 1970

6) 平野団三「越後国分二寺址論考」『越佐研究』28 1969

7) 平野団三 同前、山本 仁・田中圭一「越後における親鸞と惠信」『越佐研究』25 1967

8) 『新井市史』上 1973、坂井秀弥「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討 — 越後国分寺推定地の一例 —」『新潟史学』16 1983

て、壱田400余町、渡船2艘を施入したという。渡戸浜は現在の分水町渡部に比定され、その位置関係から国分寺は国上寺の誤りかともいわれるが、国分寺関係の数少ない史料の1つとしなければならない。行基にも匹敵する事業を行った尼僧がいたのである。

中央集権体制のとられた奈良・平安時代においては、都と地方を結ぶ交通路の整備もはかられた。それは駅制の確立と密接にかかわるが、北陸道は若狭国からはじまって、越後国を経て佐渡国に至る。『延喜式』兵部省に記す越後国の駅と駅馬の数は次のようになっていた。

滄海8疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2疋

このうち佐味駅は佐味郷に通ずると考えられ、それより先に記される駅が頸城郡に属した駅である。滄海駅は青海町青海、鶉石駅は能生町鶉石、名立駅は名立町大町、水門駅は直江津、佐味駅は柿崎町に比定されている。「令」の規定では、駅馬は駅ごとに5疋を置くことが原則になっているが、滄海駅が8疋となっているのは、越中国佐味駅が8疋となっていることと合わせて、親不知子不知の天険を通過しなければならなかったためであろう。これらをつなぐルートとしては、海岸線に沿って北上したという考えと、一部は山間部を迂回したという考えがある。⁹⁾

駅馬の利用は、在京の諸司および地方で急を要する場合に限られていた。国司の赴任や巡検などには伝馬が利用された。伝馬は越後国の場合、頸城郡と古志郡に8疋ずつ置かれた。必ずしも各郡に置かれなかったことについては、「国郡制成立当初からの郡で、駅路に位置するものに限られていた」という指摘がある。¹¹⁾ 駅路に当る郡でも、三島郡は9世紀に古志郡から分置されたものであるために伝馬が置かれなかったとみなければならない。伝馬の数も「令」の規定では毎郡5疋が原則であるが、頸城・古志郡とも規定以上になっているのは、それぞれ広い地域をカバーしなければならなかったからであろう。駅でみるならば、滄海駅から佐味駅までが頸城郡、三嶋駅から渡戸駅までが古志郡の管轄になっていた。

交通路に絡んでは、信濃国に通ずるいわゆる支路もしばしば問題となる。ふつういわれるところは、東山道から錦織駅で分れた道が信濃国において麻績・亘理・多古・沼辺と続くことから、野尻湖付近と推定される沼辺駅と直江津に比定される水門駅の間で越後国の駅があったはずとされ、それが越後国府の所在を推定する時の拠り所ともなっている。今、信濃国の駅とのかかわりで越後国府を推定することは避けたいと思うが、信濃国との交流があったことは橋為仲の記録によって知り得る。承暦4年(1080)ころ越後国司であった橋為仲は、「十月つこもりころに雪降りたるにしなののかみたかもとこまうてきてあそひしに」¹²⁾「越後よりのぼりけるに姨捨山の麓に月あかりければ」と記している。¹³⁾

これら陸上交通とは別に、海上交通・河川交通もまた重要であった。古代においては調庸物および諸国の官物を都に運ぶことになっていた。官物の輸送には徭夫を使ったり駄(馬)も利用されたが、それらの輸送力は高くはなかった。このため、寛平6年(894)の太政官符に「進上調物以駄為本、運漕官米以船為宗」と記されるように、重い物については船が利用された。『延喜式』主税上「諸国運漕官物功賃」では、越後国の場合、蒲原湊を出て敦賀津に入り、塩津・大津を経て京に入るようになっていた。蒲原津は新潟市に比定され、国府所在地に国津がなかったことについては種々の論議がある。¹⁴⁾ しかし、水門の名称をもつ土地は『日本書紀』にもかなりみえ、ほとんどが湊としての機能を有する所である。そこ

9) 小林健太郎「北陸道」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』大明堂 1978

10) 『糸魚川市史』1 1976

11) 米沢 康「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』28-5 1976

12) 井上鋭夫 前掲書

13) 『新潟県史』資料編2 1981

14) 千田 稔は、信濃川が広い流域面積をもち、越後国の物資を集積するために最も便宜があったからとする(千田『埋れた港』学生社 1974)。

からすれば、水門駅も実態としては湊の機能を有していたことが推測される。そして関川およびそこに合流する櫛池川や飯田川の水運なども物資の輸送に利用されたものと思われる。

越後国には、延長5年(927)成立の『延喜式』神名帳に記載された神社、いわゆる式内社が56座54社ある。そのうち頸城郡のものとしては、次の13社がある。

奴奈川神社・大神社・阿比多神社・居多神社・佐多神社・物部神社・水嶋磯部神社・菅原神社・五十君神社・江野神社・青海神社・円田神社・斐田神社

今日では所在のわからない神社もあるが、およそ奴奈川神社は能生町の白山神社(論社として天津神社境内の柳田神社、糸魚川市田伏の奴奈川神社がある)、大神社は糸魚川市の天津神社、佐多神社は上越市早川の劔神社に比定される。そして阿比多神社は上越市谷浜、居多神社は上越市五智、物部神社・水嶋磯部神社・菅原神社は清里村、五十君神社は三和村、江野神社は名立町、青海神社は青海町、円田神社は名立町、斐田神社は新井市に所在する同名の神社¹⁵⁾に比定される。大神社は貞観3年(861)、弥彦神社や居多神社とともに従四位下を授かった大神神に通ずるものであろうか。居多神社は貞観3年の昇叙が『三代実録』に記されるほか、居多神社文書「神祇権大副ト部兼員宿祢勘状」に弘仁3年(813)、寛平9年(897)の昇叙を記す。古代においては国司の保護をうけた神社と推定される。奴奈川神社は沼川郷に、物部神社は物部郷に、五十君神社は五公郷に鎮座したものであろう。菅原神社・斐田神社はそれぞれ菅原古墳群・斐田古墳群との関係が考えられる。さらに青海神社は滄海駅との関係が想定される。これら『延喜式』に記され、国司の幣帛をうけた神社は古代の頸城郡に住む人々の信仰を集めていた神社と考えられる。

一体に古代においては、人々の動向を示す史料は極めて少ない。その中で頸城郡に関しては、正倉院宝物の中に「越後国久疋郡夷守郷戸主肥人皆麻呂庸布壹段¹⁶⁾」と記された庸布が残っている。天平勝宝年中(749~756)と推定されるが、夷守郷に肥人を名のる人達がいたことがわかる。また天平宝字6年(762)の「造東大寺司解案」によれば、伊吉郷(五公郷)の戸主山鹿栗栖が仕丁として役務に従事していたことが知られる。山鹿栗栖は、同年2月3日の「造石山寺所食物用帳」にも名前がみえる。栗栖の出た五公郷は東大寺の封戸の置かれた郷である。天平勝宝4年(752)の「造東寺司牒」によれば、東大寺のもつ全国2,000戸のうち越後国200戸、そのうち「膽君郷」が50戸となっていた。天曆4年(950)の「東大寺封戸庄園并寺用雑物目録」にみえる郷は、天平勝宝4年度の郷と異動を生じているが、「五於郷^{五於郷}五十公郷」の50戸は変化していない。この2人のほか、宝亀11年(780)の「西大寺資財流記帳」に「頸城郡大領高志公船長」がみえる。頸城郡の郡司である。あるいは久比岐国造の流れをくむのかも知れない。コシを名のる者には、平安中期、田堵として石井庄の経営に携わった古志得延もいる。

さて、頸城郡が国府所在地であったことをかなり良く示すのが、庄園および保の存在である(第1表)。

頸城郡に置かれた初期庄園としては、桜井庄(西大寺領)、津村庄(同)、石井庄(東大寺領)、吉田庄(同)、真沼庄(同)の5庄がある。西大寺領の桜井庄・津村庄は宝亀11年(780)の「西大寺資材流記帳」にみえる。しかし同帳には神護景雲3年(769)の「越後国水田并墾田地帳」「同国田籍帳、庄々副」「頸城郡大領高志公船長田図」があったことを記すので、そのころには成立したと思われる。建久2年(1191)の西大寺文書に桜井庄3,157町9段264歩と記されるが、この数字は信憑性に乏しい。両庄の史料がほとんど「資材流記帳」に限られるのは、早くに衰退したためかも知れない。東大寺領石井庄の成立時期は、大治5年(1130)の「東大寺諸荘文書并絵図目録」に「石井庄字吉田 一結庄解等十一通 一卷条里坪付等^{四枚、天平勝宝五}

15) 宮 栄二「頸城郡式内十三社調査概報」「越佐研究」
9 1955

16) 肥人に関する例としては、天平10年(738)の「駿河国正税帳」に肥人部広麻呂がみえる。

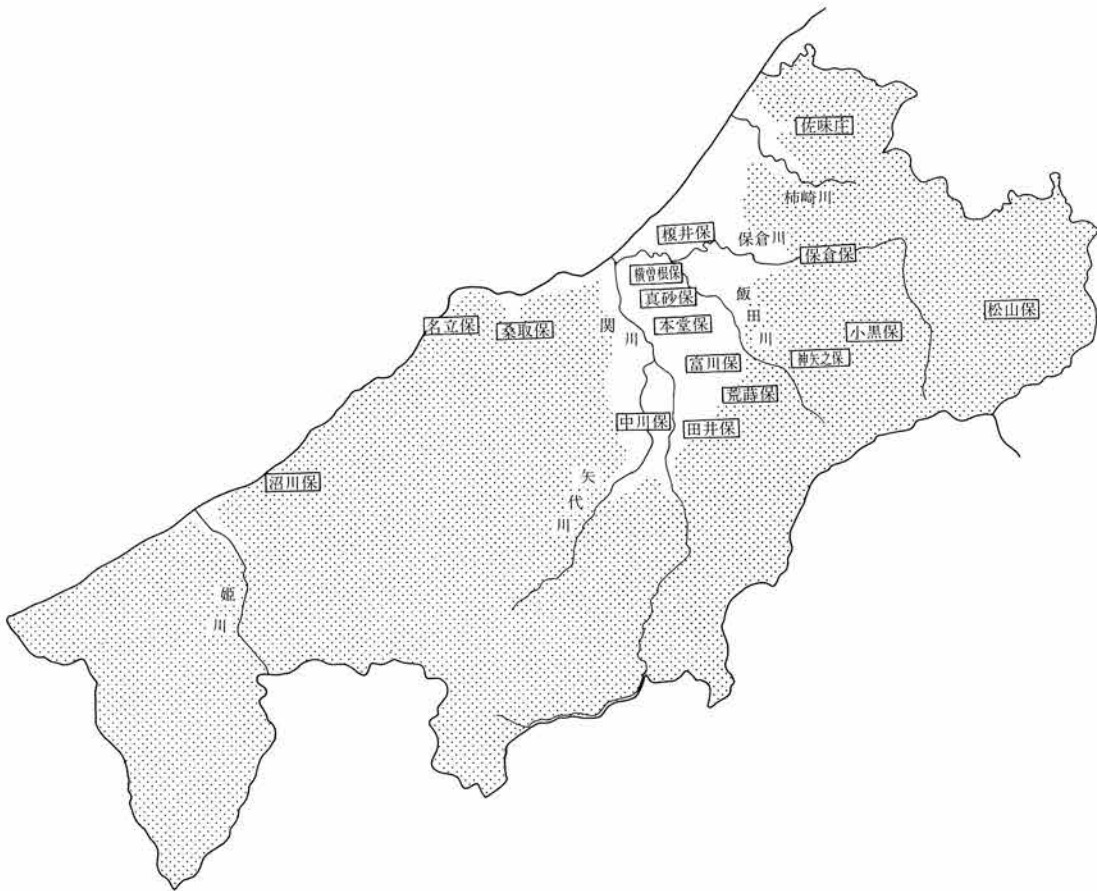
年四月九日庄解状一通」と記されることによって、天平勝宝5年(753)ころには成立したことがわかる。天喜5年(1057)の「越後国石井莊前司兼算解」によって、平安時代には田墾による請負耕作などもあったことが知られる。しかし永治2年(1142)の「越後国留守所牒」によれば、「府辺之要地」という理由で豊田庄と立替えられた。所在地は、井上慶隆氏によって三和村付近に比定されている。吉田庄・真沼庄の成立時期は不明であるが、長徳4年(998)の「東大寺領諸国庄家田地目録」には「並荒廢」となっている。吉田庄は上記大治5年の史料に「石井庄字吉田」と記されていることからすると、石井庄に隣接して存在したとも考えられる。一般的に、北陸道諸国におかれた東大寺領庄園は、「開発の多難な地域を意識的に避け、それぞれの諸国において比較的先進地域と目される国府所在平野のなかの未開地を選んで飛び石づたいに設定されていた¹⁷⁾」といわれる。石井庄についても、「府辺之要地」すなわち国府に隣接する比較的交通や灌漑の便の良い所に設置されていたものであろう。そして荒廢した石井庄を立直す願いが出された

第1表 頸城郡の庄・保 (「県史」は新潟県史資料編、巻・史料番号, 「越史」は越佐史料、巻・頁)

庄・保	比定地	出典等	庄・保	比定地	出典等
桜井庄		宝亀11年「西大寺資財流記帳」(県史2-168)	吉川庄		(实在疑問)
津村庄		同上	芦谷庄		(实在疑問)
石井庄	三和村	天曆4年「東大寺封戸庄園并寺用雜物目録」(県史2-463)、長徳4年「東大寺領諸国庄家田地目録案」(県史2-497)、大治5年「東大寺諸莊文書并絵図目録」(県史2-862)、天喜5年「越後国石井莊前司兼算解」(県史2-626)、康治元年「越後国留守所牒」(県史2-904)他	荒蒔保	清里村荒牧	「居多神社文書」観応2年(越史2-529)
			田井保	板倉町田井	同 貞和3年(越史2-515)
			富川保	上越市富川	「天龍寺重書目録」応永27年(越史2-745)
			横曾根保	上越市横曾根	
吉田庄		県史2-463 県史2-497	楸取保	上越市桑取	「安国寺文書」永正8年(越史3-574)
真沼庄		同上	真砂保	上越市中真砂	「色部文書」弘治2年(越史4-137)
佐味庄	柿崎町・吉川町	『吾妻鏡』文治2年条、正応元年「西大寺田園目録」(越史2-115)、「安田文書」嘉元元年(越史2-160)、正中2年(越史2-202)、「西大寺文書」貞治2年(越史2-606)・貞治3年(越史2-615)・応永7年(越史2-635)、「大友家文書」応永13年(越史2-699)、文安4年(越史3-19)	本堂保	上越市本道	「歴代古案」建武2年(越史2-343)
			榎井保	頸城村榎井	「広泰寺文書」弘治3年(越史4-153)、「歴代古案」永祿2年(越史4-154)
			保倉保	浦川原村	「天龍寺重書目録」貞治元年(越史2-602)、応永27年(越史2-745)
柿崎庄		『存覚袖日記』延文5年(越史2-597) (实在疑問)	神矢之保	牧村神谷	「吉田英忠寄進状」天文15年(県史4-2238)
関庄		安楽寺藏、方便法身尊像裏書 (实在疑問)	小黑保	安塚町小黑	同上
梶庄		『看間日記』(实在疑問)	松山保	松之山町	「仁木文書」建武4年(越史2-408)
新井庄		『上杉家譜』天文17年 (实在疑問)	中河保	新井市中川	「関東下知状案」建仁3年(鎌倉遺文3-1388)
岡田庄		「永祿年中井ノ口村古絵図」 (实在疑問)	名立保	名立町	「重珠社領宛行状」貞和5年(県史4-2227)
笹倉庄		(实在疑問)	沼川保	能生町・糸魚川市	白山神社梵鐘銘(越史3-429)、「安国寺文書」永正8年(越史3-574)
三善庄		(实在疑問)	上小島保		「田中教忠氏所藏文書」(越史3-437)
直江庄		(实在疑問)	藪田保		「村山文書」建武元年(越史2-318)、「歴代古案」建武2年(越史2-343)
黒川庄		(实在疑問)	高田保		永治2年「越後国留守所牒」(県史2-904)、(北浦原郡力)

17) 井上慶隆「越後国の条里制と石井莊の位置」『かみくむひし』11 1973

18) 浅香年木「越の莊園と東大寺」『古代の日本』6 角川書店 1970



第7図 頸城郡の庄・保概念図

時に、豊田庄と立替えられたのであるが、これをもって頸城郡の初期庄園は完全に姿を消すことになる。一方、平安末期から中世に頸城郡に存在したといわれる庄園には、佐味庄・柿崎庄・関庄・榎庄・新井庄・岡田庄・笹倉庄・三善庄・直江庄・黒川庄・吉川庄・芦谷庄などがある。しかし笹倉庄・三善庄・直江庄・黒川庄・吉川庄・芦谷庄については信頼できる史料が全くなく、関庄・榎庄・新井庄・岡田庄についてもその存在を証明できるだけの史料がない¹⁹⁾。従って、石井庄が立替えられたあと頸城郡に存在したことが確実な庄園は、佐味庄のみであるといつてよい。佐味庄は『吾妻鏡』文治2年(1186)の条に鳥羽十一面堂領とみえるのをはじめ、文安4年(1447)まで所領関係を示す史料が断続的に存在する。そしてこれらの文書に下條・河井・高寺・柿崎・赤沢・武直・顕法寺城の地名が記されることからすれば、今日の柿崎町から吉川町にかけての庄域をもつ庄園であったとみることができる。

これに対して、平安時代後半になると、公領は国司や在庁官人の私領としての性格を強め、郷や保と称される国衙領となってゆくが、頸城郡には荒蒔保・田井保・富川保・横曾根保・鎌取保・真砂保・本堂保・榎井保・保倉保・神矢之保・小黒保・松山保・中河保・名立保・沼川保・上小島保・園田保などが存在した。中には史料上検討を要するものもあるが、その数は今日知られている越後国の保の約半数に上る²⁰⁾。まさに頸城郡に国府が存在したためのゆえんであろう。これを地図上に置いてみたのが第7図である。関川右岸、特に関川と飯田川に挟まれた地域に国衙領が集中する傾向がつかめる。このことはこの地域に

19) 赤沢計真「東頸城郡の荘園と保」『かみくひむし』23 1976
大場厚順・花ヶ前盛明「中頸城郡・西頸城郡の荘・保」『かみくひむし』23 1976

荻野正博「越後国中世庄園の成立」『新潟史学』16 1983

20) 荻野正博前掲論文

国府の中核があったことを暗示するようであるが、今少し柔軟に考えても、関川流域から保倉川流域にかけての地が国衙の中心的勢力圏であったとみることができる。うがった見方をすれば、石井庄が豊田庄と立替えられたあと、この地域の国衙によるいわば一円支配化が進められたと考えることもできそうである。

B 鎌倉・南北朝の頸城地方

治承4年(1180)、木曾義仲が挙兵すると、越後では当時白川館(水原町)を拠点に阿賀北に勢力をもっていた城氏がこれに応じた。兄資永の死によって家督を継いだ城長茂は、養和元年(1181)6月、義仲軍と信州横田河原で戦った。しかし陰阻の旅軍に疲れた長茂軍は一矢も射ることなく散々に打破られた。²¹⁾同年8月、長茂は越後守に任じられるが、「国務ニモ及ハサリケリ」という状況であった。²²⁾寿永元年(1182)、長茂は小河庄赤谷に城を築き、妙見大菩薩を奉って源氏を呪詛するものの、やがて囚われの身となる。

文治元年(1185)、越後国は頼朝の知行国となり、甲斐源氏の安田義資が越後守に任命された。文治2年(1186)、朝廷は知行国主頼朝を通じて、諸庄の年貢未納を督促した。その中に鳥羽十一面堂領佐味庄がみえる。預所は大宮大納言入道家である。越後の守護については不明な点も多いが、建保3年(1215)、幕府は佐々木盛綱に命じて守護とともに国内の検断に当らせている。承久3年(1221)、承久の乱がおけると、北条朝時が国府に入り、小国頼継・金津資義らを率いて京に向った。朝時以後、越後国は北条氏一門によって世襲的に支配されてゆくことになる。越後国が頼朝の知行国となったあと、関東御家人が数多く入部してくるが、それはほぼ阿賀北に集中している。これについて阿部洋輔氏は「後代まで御家人が地頭として残ったところは頸城郡に存在せず、下郡=(阿賀北方面)に多いことは、北条氏の所領が、上・中郡に集中していたことを想起させるが、これはあくまで状況証拠で確実なものではない」としている。²³⁾

鎌倉幕府が滅亡したあと、新田義貞が越後守に任ぜられた。しかしまもなく足利尊氏が自立し、上杉憲顕が越後に進入した。ここにおいて越後国も南北両朝に分れた争乱状態にまきこまれてゆくことになる。上杉方には加地庄の地頭佐々木景綱をはじめ、色部・中条・黒川などの揚北衆がつき、新田方には小国・池・風間・河内・荻などがついた。風間氏は直峰城(安塚町)を拠城にした豪族といわれる。今、この動乱期を詳述することは避けるが、「戦闘はおおむね蒲原・刈羽でおこなわれているので、三国峠をこえて侵入してきた上杉軍は、まず魚沼郡をおさえて、これを越後平定の基地とし、ついで国衙領の多い頸城郡に進み、蒲原・刈羽・三島で南朝軍を追いつめていたと思われる」といわれる。²⁴⁾足利直義が高師直および足利尊氏と争った観応の擾乱においては、上杉憲顕は直義方に立って各地で戦った。越後守護も一時は宇都宮氏綱の拝するところとなったが、この争乱を勝ちぬいた上杉憲顕は、貞治2年(1363)、足利義詮の代になって、再び上野・越後の守護職に任ぜられた。そしてこれを支えたのが長尾高景であり、ここに越後における上杉氏および長尾氏の基盤がつくられてゆくことになる。

この時期の頸城郡にかかわる記事は必ずしも多くない。羅列ぎみになるが、目につくものを追ってみよう。建武元年(1334)、新田義貞は村山隆義に頸城郡内蘭田保の地頭職を与えた。「源姓村山系図」によれば、隆義の父義信が鎌倉幕府滅亡に際して軍功があったという。建武2年(1335)中先代の乱がおこると、隆義は北条時行に与する者を討つために信濃国に向うが、「歴代古案」は「村山弥次郎源隆義、信州乱に被_レ越時、書置」として、隆義が本堂保・蘭田保などに所領をもっていたことを記す。建武4年(1337)、池・風間氏らが南朝方に立って挙兵する。島田助朝の軍忠状はこの時水科・水吉で合戦があったことを記

21) 『玉葉』『越佐資料』巻1所収 1931再版

23) 『新発田市史』上 1980

22) 『源平盛衰記』『越佐資料』巻1所収 1931再版

24) 井上鋭夫 前掲書

し、中野家氏の軍忠状もまた「馳渡大川、於符須廐一族等相共、及散々合戦」と記す。池・風間氏らはこのあとまもなく、岩船や蒲原津で奮戦することになる。この年、足利尊氏は仁木義有に松山保を与え、佐々木頼宗に佐味庄三十二分一を与えている。松山保は「右馬権頭義時跡」という。康永4年(1345)、祢智清政・仁科景治らが南朝方に立って沼川で挙兵し、長尾清景の軍と戦った。貞和3年(1347)、幕府は居多神社神主花崎盛光に田井保三分の二を与え、社殿の修造を行わせた。居多神社は観応2年(1351)にも上杉憲顕から荒蒔保の保司分をうけている。応永18年(1411)の「花前文書」によれば、居多神社は頸城郡内において、高柳・倉重・土橋(以上郷)・本郷・利苺・廐・倉重(板倉郷)・富沢(物部郷)・富河新保(高津郷)・富益・荒川新保(津有郷)・河浦(五十君郷)・青野(夷守郷)などに所領をもっていたことがわかる。正平7年(1352)、村山信義が中院貞平に属して池一族と国府で戦った。翌正平8年には、折橋兵庫助が頸城郡本郷のうち西時員跡を賜っている。文和4年(1355)、上杉憲将・宇佐美一族が佐美庄顕法寺城で挙兵すると、風間長頼・村山隆直らがこれを攻めた。両者の戦いは六角峰²⁵⁾城・柿崎城でも展開された。また、上杉顕憲の軍は延文4年(1359)、三宝寺城・東城寺城・田尻城で戦い、同5年には赤田城で戦っている。上杉顕憲は正平17年(1362)に「五十公郷保倉保北方」を天龍寺に寄進したりもした。至徳4年(1387)には、信濃の村上中務大輔らが二宮式部と糸魚川で戦っている。

佐味庄については、『吾妻鏡』文治2年の条に鳥羽十一面堂領とみえるあと、文安4年まで断続的ながら所領関係をうかがうことができる。正応元年(1288)には燈油仏聖料田として、西大寺四王院に施入された。しかし嘉元元年(1303)には平頼資領となっており、頼資は「佐味庄下條河井村内高寺田在家並かやは分限」を次女に譲るとしている。そして正中2年(1325)には平資家がその子資宗に佐味庄柿崎宿の地頭職を譲った。建武4年(1339)、足利尊氏は佐々木頼宗に、恩償として佐味庄三十二分一の地頭職をあてがった。しかるに、貞治2年(1363)、足利義詮は上杉憲顕に対して佐味庄赤沢・武直を西大寺雑掌に還付するように命じ、翌貞治3年、憲顕はこれを嫡子越後守護代憲将に伝えた。武直はその後宇佐弁中務丞らの横領するところとなり、応安7年(1374)、幕府は越後守護上杉憲栄にその停止を命じている。応永13年(1406)、足利義満は鷲尾隆右の讓状によって、その子権中納言隆敦に佐味庄上下の地を安堵し、文安4年(1447)には綸旨によって隆敦は佐味庄上下を安堵された。

鎌倉・南北朝期の頸城地方では親鸞の配流もまた特筆さるべき事項である。承元元年(1207)、朝廷の念仏禁圧によって親鸞は越後国府に流された。建暦元年

(1211)に赦免され、建保2年(1214)には恵信尼らを伴って常陸国に移ったが、約7年間を越後で過ごした。この間に親鸞が妻帯し、子供をもうけたことは、弘長3年(1263)の恵信尼消息に「しんれんぼうはひつしのとし三月三日のひにむまれて候しかは、ことしは五十三やらんとそおほへ候」と記されることによって知りうる。その前後に益方や小黑女房も生まれている。親鸞の配所²⁶⁾については不明であるが、高野の本竜寺に求める説がある。また恵信尼は越後国府とかかわりをもつ三善氏の娘といわれ、三善氏の居住地は国川に求められている²⁷⁾。恵信尼



第8図 鎌倉・南北朝期の頸城地方

25) 吉川町所在の田尻城か

『佐研究』25 1969

26) 山本 仁・田中圭一「越後における親鸞と恵信」『越

27) 山本 仁・田中圭一 前掲書

は晩年越後国に帰るが、子供達は板倉町の栗沢・高野・安塚町の小黑などにいた。そして恵信尼が娘の覚信尼に送った手紙によって、その生活の一端も知りうる。弘長3年2月10日の消息には「このくには、こそこのつくりものことにそんじ候て、あさましき事にて、おほかたいのちいくべしともおぼえず候。中にところどもかはり候ぬ。一ところならず、云々」として、越後国に飢饉があり、恵信尼自身もいく度か居を移したことを記す。そして文永元年(1264)5月13日の消息には、7尺の五重塔を発注したことを記し、文永4年(1267)9月7日の消息の発信地は「とひたのまき」となっている。恵信尼の消息の最後が文永5年であり、これが没年とも考えられていることからすれば「とひたのまき」が最期の地であったと思われる。比定地については諸説²⁸⁾ある。その中で板倉町米増で発見された五輪塔が、恵信尼の発注した五重塔ではないかとするむきもあるが断じ難い。ただ親鸞の配所および晩年の恵信尼の居住地は国府の周辺にあったと思われ、これが越後国府を推論する時に大きな意味をもつ。その中で、今池遺跡も親鸞関係の遺称²⁹⁾地とされる板倉町からはそう離れた距離ではないということは断わっておかなければならない。

4 今池地区の歴史と伝承

A 西松野木の条里的地割

古代の土地制度の根幹は班田制にあった。そしてその前提として条里制が施された。条里制遺構は全国各地にみられるという¹⁾が、越後国の場合は上越市周辺にみとめられるといわれている。藤岡謙二郎氏は「同川(荒川)右岸に条里地割が卓越²⁾する」という。また多賀有志氏は上越市福田地内・角川地内・剣地内に「一の坪」「二の坪」「三の坪」の小字があり、いずれも東に「一の坪」があつて西にむかって「二の坪」「三の坪」と並んでいることを報告している³⁾。一方『新井市史』は、西松野木から辰尾にかけての地域、旧菅原村馬屋・板倉町長領・田井・国川、さらには新井市吉木地区・米沢地区に条里制遺構がみとめられるという。「一ノ坪」等の地名と更正図上の地割をもとにするものであるが、月岡・広島・国賀などにも条里制遺構の崩れかかった姿を見ることができるという。

これらのうち今池遺跡に隣接するのは西松野木地区である。大正15年(1926)発行の『三郷村村誌』は次のように記す。

本村の中央に古来稀なる井田の形跡を存在し阡陌の一区内六十間方眼にして仲田、五里木、佐兵エ坪、孫右エ門坪、下の坪、荘けん、荘吏田、荘司分、郷普清等の地名を存し一部分に外廓の通路を欠き或は江筋に変更せし個所あれども四囲を達観するときは偏局に基跡を存在し東西七坪南北六坪の地区を認知せらる。

60間四方の区画が東西7坪、南北6坪にわたって確認されるというわけであるが、昭和36年(1961)発行の『三郷村村誌』は「班田収授は全国的に実施されたい。しかし条里の遺跡は、東北地方にはほとんど

第3節

28) 新井市斐太、同美守「とひ田」、板倉町上沢田「とびたつば」、同坂井「飛田」、同米増「とよ田」、清里村赤江「鳶田」などの説がある。

29) たとえば、板倉町米増と今池遺跡は直線距離で7km程である。

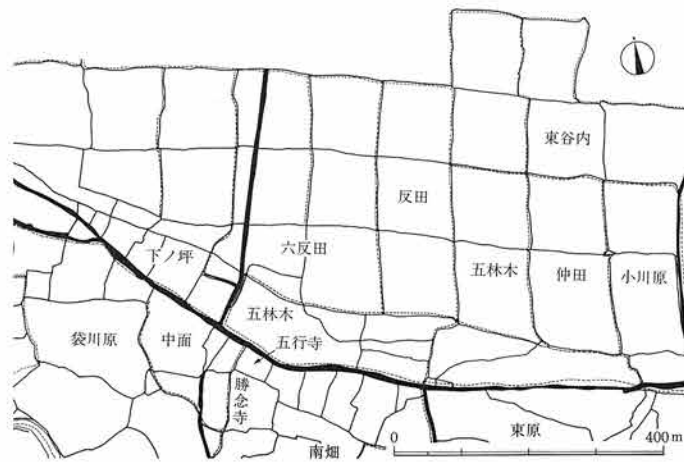
第4節

1) 落合重信『条里制』日本歴史叢書17 吉川弘文館 1967

2) 藤岡謙二郎『国府』日本歴史叢書25 吉川弘文館 1969

3) 多賀有志「新潟県の条里遺制」『頸城文化』31 上越郷土研究会 1972

ない。はたして1,300年前に、この北越の辺地にこのような区画整理が行われたであろうか。はなはだ疑問でなお研究を要する」として懐疑的な見解を示している。しかし条里制遺構については、落合重信氏の「一町方格の地割があり、一ノ坪とか、三十六とか数詞のついた字名がのこっているならば、まずは条里制遺構とみて間違いあるまい」という見解もある。⁴⁾西松野木の場合は、明治期の更正図でみるに110m×110m程の地割を25区



第9図 西松野木の条里的地割（明治期更正図より）

画程確認できる。条里制は方1町の坪を36坪設定するものであるから、更正図上にみえる地割は条里制の存在を物語るようにも思われる（第9図）。今これ以上論証する手だてがないために参考にとどめるしかないが、越後国府周辺に条里制が施かれていたことは、大治5年（1130）の「東大寺諸荘文書并絵図目録」のうち石井庄に関して「一卷条里坪付^{四枚}、^{天平勝宝}五年四月九日」と記されることによって知りうる。

B 関川面の開発 —— 今池村の場合 ——

近世初頭における今池周辺の村々の様子は、慶長2年（1597）の「越後国絵図」で概略を知りうる。長者原村・こやす村・日朝寺村（上富川地内）などがみえるが、それぞれの土地の等級・本納高などは第2表のようにになっている。ただこの絵図には今池・下新町などの村は記されていない。存在しなかったため記載されなかったのか、あるいは脱漏によるものかは定かではない。絵図自体が完全なものではないことは、「こやす村」と「たか畠村」の数字が全く一致し、重複と思われることなどによってもうかがい知れる。

松平光長が改易されたあと、天和2年（1682）にいわゆる天和検地が実施される。おおむねは、『中頸城郡誌』第2巻に載せる井ノ口蓮浄寺所蔵本によって村々の石高を知りうるが、これと元禄15年（1702）、天保5年（1832）の村高を比較したのが第4表である。とくに今池村の石高が元禄15年と天保5年の130年の間に大巾に増大していることが注目される。これが何によるものかは、短期間の調査では何ともいえない面もあるが、第5表にみえる小字の比較が一つの手懸りになりそうである。すなわち、現在の土地台帳にみえる「赤丑」「丑辰」「酉辰」「未」「戌未」といった方位などを示すと思われる地名は、天和検地の段階では全く見えない。これらは今池の中でも関川寄りの一段低い、いわゆる関川面に位置する（第10図）。そして同じ関川面でも、これらよりやや高い位置にある「佐助田」「小屋場」「七反田」「苗代栴」などが天和検地段階ですでに開発されていることを考え合わせれば、関川寄りの一段低い面が開発ないし再開発され、安定してゆくのが村高の増加につながってゆくものと思われる。今、地域を特定することはできないが、洪水を受けやすい面の開発が徐々に進められていったことは、今池地区の区有文書によって推察される。今池村の「天和検地帳」には「一、河欠七町三反式畝式拾七歩 村中」として、水押しによる河欠分が除地の対象となっている。また、元禄3年（1690）から元文4年（1739）にかけての「新田改帳」が11通残っているが、これらから「西川原」「南川原」「地藏川原」などの開発および再開発が進められていったことがわかる（第2表）。「川原」という地名からすれば、おそらくは低位面の開発であったろう。もち

4) 落合重信 前掲書

ろん「黒保」など高田面に位置すると思われる地域の開発もあるから、低位面の開発のみということはないが、主としてこの地域の開発による新田の増加が村高の増加をもたらしたものと考えられるのである。

一方、頸城郡の総高は、古検高13万8,941石8斗3升2合が天和検地では20万2,692石7斗1升7合と

第2表 文禄検地（『中頸城郡誌』第1巻より）

村	知 行 人	等級	本 納	縄ノ高	家 数	人 数
日朝寺村	愛岩分、富永分	下	石 26.0685	石 44.9120	4	14
こやす村	藤田分 此外8方分	下	30.6844	139.2556	11	36
長者原村	御料所、藏田 清衛門級、井文五郎分、 安国寺分	下	40.500	132.0009	10	36
たか畠村	藤田分 此外4方分		30.6844	139.2556	11	36

第3表 今池村の「新田改帳」

年 代	表 題	主 要 内 容
元禄3年(1690)	頸城郡今池村牛改新田帳	御堂木 下田 式拾貳間 七間半 五畝拾五歩 三右衛門
元禄4年(1691)	頸城郡今池村未改新田帳	地蔵河原 みたう池 下田 拾間半 四間半 壹畝拾七歩 権十郎
元禄8年(1695)	頸城郡今池村亥改新田帳	西川原
元禄13年(1700)	頸城郡今池辰改新田帳	西川原
元禄16年(1703)	越後国頸城郡今池村新田未改帳	西河原已開 上河原已開
宝永2年(1705)	〃	西河原西越 同所中越
宝永6年(1709)	〃	南河原子越
正徳2年(1712)	〃	者こい 南河原
享保3年(1718)	〃	畑田・黒保・地蔵川原
享保17年(1732)	〃	
元文4年(1739)	〃	南河原

第4表 村高変遷表

村	天和3年 (1683)	元禄15年 (1702)	天保5年 (1832)
今 池 村	石 290.7300	石 291.2850	石 457.0640
上 新 町 村 (古は新町村)		458.7620	458.7620
下 新 町 村 (上新町枝郷)	520.1370	520.5500	527.3110
子 安 村	277.2480	272.8770	286.9010
子 安 新 田 (子安村枝郷)	36.6700	36.6700	36.6700
本 長 者 原 村	183.7180	247.6820	256.8600
同 新 田 (本長者原村枝郷)	※ 73.5280	73.5280	81.8850
天 野 原 新 田 (同)	130.9140	130.9140	130.9140
新 長 者 原 村	285.9140	399.8860	468.5750
同 新 田	113.684		
松 之 木 村	※382.7450	487.9590	533.3420

天和3年は『頸城郡誌』第2巻によるが、※印は『三郷村誌』昭36による。元禄15年・天保5年は『新潟県史』資料編6による。

第5表 今池の小字

苗代ばへ・佐助田・道西・くろば・赤川 南道添・小屋場・川端・三十歩・太郎左エ 門分・端田・七反田・老反田・土手下・ 谷内・つきとび道・老反ばへ・小川原・ 川むかひ・箱井・下ぶくろ・清水出・大 割・川原田・かつば田・二枚田・池田・ 台古川・上川原・はきへ下・畑田・みや 田・つきとひ東・袖畑・道添・屋敷添・ 袖屋敷・宮ノ根・西袖屋敷・前ノ畑・大 畑・裏畑・野畑・外屋敷・西江丸・南畑 ・漆ヶ窪・江丸・下くろば・江東・宮ノ 西江丸北畑・大道江筋・式反割・沖野・ 子安川大川端	天 和 検 地 帳
○畑田・小猿屋・西畑け田・黒保・佐助田 ○三拾歩・○小屋場・○沖野・○七反田・○苗代併 ○西黒保・赤丑・丑辰・酉辰・屋敷割・小 ○川原・未・大沢・戊未・大川原	今 の 土 地 台 帳

○印 天和の地名を残すもの

なっている。6万3,750石8斗5合の増加である。打出しによるものともかくとして、基本的には用水路の開削などによって生産力が向上し、同時に新田開発なども進んだ結果であろう。今池地区についてみると、江戸時代初期に大道用水、中江用水が開削されていることが注目できる。大道用水は「三郷村南部に於て、別所川を堰き上げ、同村今池より新道村に入り樋場・鴨島・稲田・寺・大日・富岡・藤野と新道村を南北に貫流し、遂に有田村下門前に達す」⁵⁾るものである。中江用水開削以前の用水で、当初は松川用水と称されていた⁶⁾。中江用水は「水上村西條西方にて関川を分岐し板倉にて大熊川・別所川を過ぎ、三郷に至りて櫛池川を渡り、夫より飯田川を右に見て高士・津有・諏訪等の諸村を貫流し、有田村佐内に至て保倉川に注」⁷⁾ぐ郡内最大の用水である。開削に当っては松平光長の家老小栗美作が藩費を投じて、延宝6年(1678)に竣工したといわれている。この時代は大湊用水や上江用水の開削も行われ、城下町高田の基盤が固った時期である。上述した今池村のようにその後拓かれてゆく土地もあるが、光長遺領に対する天和検地は江戸時代を通じてこの地域の基本となった。



第10図 今池の小字

C 周辺の考古学的調査と伝承

考古学的調査は明治時代の後半までさか上ることができる。大正15年三郷村教育会編纂の『新潟県中頸城郡三郷村村誌』によれば、明治42年西松野木の旧十二神社跡を畑に開墾する際、地下約3mの所から土器や砥石などが出土し、翌43年東京帝国大学の坪井正五郎博士が来跡し、発掘調査を実施している。当地を弥生土器を出す遺跡としているが、この弥生土器は今考えると恐らく古代の土師器の可能性が多分にある。同じく西松野木地内の字一番割591番地の下名池上の水田中から明治43年に鎌倉時代の菊花双雀鏡(直径11.2cm, 高さ0.9cm, 第11図)が掘り出されている。表面には線刻で「池上大明神 弘安元年十一月廿三日」という銘文があり、現在上越市福田一丁目新道諏訪神社に所蔵されている。また、長者に関する遺物として本長者原字大江端538番地に長者の蔵の礎石といわれている広さ9尺、石の中央に直径約3尺、高さ5寸の突起がある大石のことが記述されている。さらに、百間四方の田畑から布目瓦の破片が出土することも記述されている。昭和48年新井市史編纂委員会刊行の『新井市史』上巻ではこの大石を塔の心礎とし、この地を越後国分寺に比定している。本長者原地籍の山崎には、貧しい馬追の百姓が酒と味噌とで財をなし勝楽寺という寺院を作った布施長者伝説や、志知という人が観世音菩薩を信じ、そのおかげによって七堂精舎(慈眼無量寺と号す)を建立し、貧民に米銭を施し、時の人は山崎庄布施長者村と名付けたという。

5) 新潟県中頸城郡教育会『中頸城郡誌』3 1914

7) 『中頸城郡誌』3

6) 中江土地改良区『中江用水史』1967

長者宅所在地といわれている本長者原316番地の布施芳男氏宅には当所から出土したといわれている茶臼の上臼が一個所蔵されている。また、地名からは今池と本長者原のほぼ中間にゴモシバシと呼称されている所が現在あるが、古来は御門橋と書いたという。

いずれにせよ、本長者原地内には時代などは明かではないが、上記のような伝承が残っており、これらは先述した古代寺院に関連して発生した可能性が多分にあるものと思われる。



第11図 西松野木出土の和鏡



第12図 本長者原遠望（今池より）

第Ⅲ章 今池遺跡の調査

1 調査の概要と経過

A 昭和55年度

「調査に至る経過」(第Ⅰ章1)で述べたように、今池遺跡A地区の調査は10月23日から11月12日の間調査員2～3名、作業員20名により、当初の対象地とされた1,800㎡について実施した。現況は畑地であったが用地買収後は荒地化していた。

グリッドの設定 グリッドは、センター杭KA7-2を基点にし、センター杭No.415とを結んだ線を基線として、3m方眼を組みグリッドとした。グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字として「C10区」のごとく両者の組み合わせによって、表示した。なお、3m方眼のグリッドは、今池遺跡群のほかの地区では小グリッドと呼んでいるものである。杭の呼称はグリッドの北西隅の杭とグリッド名を一致させた。レベル原点はセンター杭KA7-2とし、標高はその杭高(16.361m)とした(第13図)。

発掘方法 調査開始時にあけた数箇所テストピットの断面観察の結果、当地は以前畑地であり、地山面までの深度が20～30cmと浅く、耕作による表土層及びその下層にある包含層の大部分が攪乱を受け、一部は地山層にまで達している状況であったが、断片的には黒褐色土の包含層が確認された。また、耕作により生成された表土層には遺物は認められず、包含層にのみ土師器・須恵器が検出された。そのため発掘方法は、表土(耕作土)及び断片的に残存する包含層を人力により掘り下げた後、地山面で遺構を検出した。

包含層の遺物は、グリッドごとにとりあげた。遺構は、土坑とピット(建物の柱穴を含む)に分け、それぞれ1番から番号を付し、整理の際に建物等の遺構を抽出して再分類を行った。

土層観察は、南北方向ではH・I列の境界に設定したセクションベルト及び調査区西側の用地界の壁面で行い、また東西方向は20・21列の境界にセクションベルトを設定して行った。遺構平面図は平板測量により1/20で作成した。

経過 10月23日に器材を搬入し、25日までにグリッド杭の打設及び草刈り等の発掘調査



第13図 今池遺跡A地区グリッド設定図

の準備作業を完了し、27日より発掘作業に着手した。

まず、地山面までの掘り下げにおける遺物の出土量は全般に少なかったものの、分布状況には大きな特徴が認められた。東から南にかけての段丘縁辺に近い部分の分布は疎であるのに対し、北から西にかけての段丘縁辺部から離れた部分の分布は、多少の濃淡はあるものの密になっている。ただし、掘立柱建物と土坑等の付近では、上述した分布の傾向とは異なった部分もあるが、とくに濃密に分布している。このように遺物の分布範囲が全面に密でなかったことや地山面までの深度が20～30cmと浅かったこともあり、遺構検出までの作業は早く進行した。当初平安時代の竪穴住居を主体とする集落跡を想定していたが、予想とは全く異なり掘立柱建物を主体とする遺跡であり、時代も奈良時代前半と予想よりも古い時期に属するものであった。また、南側段丘縁辺部（F27区）からは、古墳時代前期の古式土師器が区域を限って出土した。

遺構は、調査対象地が段丘の南東縁辺部であることからさほど多くはなく、掘立柱建物2、土坑2等が検出されたが、その一部が調査区域外のびているものもあった。

ところが、調査開始当初より、調査対象予定範囲の北側に隣接して高さ2m前後の高まりの性格が問となり、地元での聞きとり調査を行った結果、江戸時代に開削された旧大道用水の残土を盛りあげたものであることが判明した。そのため、調査中よりその下に遺跡がひろがっている可能性が強いと判断され、北陸地建とその取り扱いについて協議を重ねた。なお協議の詳細については、続く「調査対象区域の変更」で述べることにする。

発掘作業は、上述した盛土下への遺跡の広がり可能性を想定し、グリッド番号の10から付すとともに、北から南へ順次進めた。まず、調査区北側の10～13列ではC～Hの間にピットが検出されたが、I～Lにはほとんど認められなかった。遺物の分布傾向も全く同様に、西側に密であるのに対し東側では疎であった。また、調査区域の北側いっぱいまで遺物の分布が認められ、隣接する盛土下まで遺跡がのびているのは確実となった。

次に、14～23列の調査においては、13列までと同様にI～Lの間には遺構がほとんど認められなかったのに対し、C～Hの間では建物跡2棟、土坑2基のほか多数のピットが検出された。建物の方位はいずれも東西に近い。遺物の分布傾向も全く同様に、東側では皆無に近かったが、西側では濃密な分布をみせている。遺構内の遺物で注目されたのは、建物（SB 901）の柱穴堀形内埋土より出土の多量の土師器・須恵器であり、一括資料としてとらえることができる。

また、南側の24～27列の調査では、全体的に遺構の数は少なかったものの、B～D25・26区で一部が段丘端で切れているが、遺物を多量に包含する落ち込みが検出された。遺物の分布もこの部分に集中しているのみで、他では皆無に近いほど稀薄であった。なお、南側の段丘縁辺部F27区において古墳時代前期の古式土師器が出土しているが、遺構は認められなかった。

以上のように、今池遺跡A地区は、古式土師器を除くと奈良時代前半の掘立柱建物を主体とする遺跡であることがわかり、56年以降に実施が予定された今池遺跡B地区・C地区の遺跡の性格が一般集落とは異なることが予測され、大きな成果が期待された。

調査対象区域の変更 上述したとおり、調査対象地の北側に隣接する高まりは、旧大道用水の残土を盛りあげたものであることが判明したため、10月24日、北陸地建に状況を説明し盛土下にも遺跡がひろがる可能性があるため、早急に盛土を排除し遺跡の有無を確認する必要があることを申し入れた。しかし、盛土南側は調査対象地であること、また北側では現大道用水の暗渠工事施工中であることなどにより、適当な

排土地を確保することができなかつたため、調査終了後ないしは暗渠工事完了後に盛土部を重機により排除し旧地表面を出した後、遺跡の範囲確認調査を実施することとしたが、日程については未決定のままであった。

11月12日の調査終了日に再度協議をした結果、11月20日に確認調査を行うこととし、当日までに北陸地建で重機により盛土部を排除し、旧地表面を出しておくことで合意した。なお、遺跡ののびが確認された場合は別途契約により発掘調査を実施することとした。

しかし、11月20日に予定していた確認調査は、重機の手配が遅れたため盛土の排除が完了しておらず、実施できなかった。このため、日程的に今年度中に確認調査を実施することは困難であるが、再度日程調整をするように申し入れた。

これを受けて、北陸地建では、11月27日までに盛土部を排除し旧地表面を出したが、内部検討した結果、盛土下は確認調査ではなく発掘調査が必要なことで理解しているものの、今年度の事業はすでに完了していることもあり、この部分の発掘調査は来年度事業として実施してほしい旨回答があった。県教委では、この回答を了解し、来年度の工程に組みこむための計画書の作成にはいった。

B 昭和56年度

1) 調査の準備

「調査に至る経過」(第I章1)で述べたように、昭和56年度上半期に今池遺跡B地区・C地区の調査を行う予定で、北陸地建と合意をみていた。しかし、「調査の概要と経過(昭和55年度)」で触れたように、今池遺跡A地区の調査で貴重な成果を得るとともに、旧大道用水盛土下の調査を実施することとなるなど、当初の計画であった昭和56年度中に調査を完了することは不可能に近い状況であると判断され、昭和55年度調査終了時に北陸地建に対し、今池・下新町遺跡の発掘調査は、昭和56～57年度の2か年はかかるので理解してほしい旨、申し入れた。それを受けて北陸地建との間で再度今後の発掘計画について協議が繰り返された。昭和55年12月の協議で北陸地建は、56～57年度にかけて完了することで計画を進めていた今池・下新町遺跡の発掘調査を、諸般の状況によって56年度中に完了してほしいと申し入れた。しかし、県教委では現体制において最大限努力して、56年度に今池遺跡A地区残部、今池遺跡C地区、下新町遺跡の、また57年度に今池遺跡B地区の発掘調査を予定しているとし、合意に至らなかった。北陸地建ではこの協議内容を局内で検討した後、昭和56年3月12日に検討の結果として、56年度の調査範囲は今池遺跡B地区・C地区のボックス工事、下新町遺跡のアバット工事に係る部分とし、調査面積は全体の1/2で対応してもらいたいとの申し入れがあった。また同時に現地確認の依頼もあった。県教委では現地確認の後に判断するとして態度を保留したが、面的に発掘調査をすることを基本方針とし、断片的な調査は極力避けることで対応することにした。現地確認及び協議は雪どけを待って4月22・23日の両日、北陸地建の関係者を交えて行われ、今池・下新町地内は現・旧河道部を除いてすべて遺跡であることが判明し、さらに一連のものと推定された。この結果をもって行われた協議で、昭和56年度の発掘調査は、調査対象地を下新町遺跡の全域、今池遺跡C地区の一部の合計9,000㎡及び今池遺跡A地区の残部について行うこととし、日程は6月より11月上旬までとすることで合意した。この合意を受けて、4月23日午後より上越市教育委員会及び地元周辺の町内会長に調査の概要を説明し、作業員確保等の協力を依頼した。その結果、とくに上越市教育委員会の格段の協力により調査の前日までに必要作業員数を確保し、発掘調査実施の運びとなった。

なお、各遺跡及び各地区の調査日程は、下新町遺跡は6月1日から8月31日まで、今池遺跡A地区の残部は6月1日から6月15日まで、今池遺跡C地区は8月18日から11月14日までと計画した。

2) 今池遺跡A地区の調査(第13図)

「調査の概要と経過(昭和55年度)」(第Ⅲ章1A)で述べたように、55年度調査対象地に隣接する盛土下及び現大道用水をはさんだ県道沿いの部分について実施した。調査対象面積は1,250㎡である。当初、発掘調査は6月1日より開始することとしていたが、この時期は下新町遺跡の調査を開始したばかりで、作業員が不慣れであることを考慮し、6月9日より下新町遺跡の調査から調査員1名、作業員10名をさき、発掘作業にあたり、前述した盛土下の調査を6月19日に終了した。また、県道沿いの部分については日を改めて7月6・7・8日の3日間で実施した。なお、県道沿いの部分は遺跡確認調査である。

グリッドの設定 盛土下の部分のグリッドは「調査の概要と経過(昭和55年度)」(第Ⅲ章1A)で述べたグリッドを北へ延長したもので9～5列までが該当する。グリッドの方眼・呼称は前年度と同じである。また、杭の呼称及びレベル原点も同じである。

次に、県道沿いの部分については、聞きこみによりかなり削平されていることが予想されたため、遺物・遺構が検出された時点でグリッドを設定することとした。

発掘方法 盛土部については、昭和55年12月に盛土を重機により排除し、旧地表面(現畑面)が出た状況で調査に入った。旧地表面から地山面までの深度は15～30cmと浅かったが、前年度の区域と異なり盛土に覆われていたため、畑の耕作その他による攪乱をほとんど受けていなかった。そのため、前年度の区域とは層序も異なり、耕作による表土層はなく、その代わりとして黒色の旧表土層が存在する。その下層には前年度断片的に確認された黒褐色の包含層が調査対象地全域に認められた。また、旧表土層には遺物は認められず、包含層にのみ土師器・須恵器が検出された。そのため発掘方法は、旧表土層及び包含層を人力によって掘り下げた後、地山面で遺構検出をした。

また、県道沿いの部分については、試掘を行った結果全く包含層が確認されなかったため、重機により地山面まで掘り下げた後、地山面で遺構を確認した。現地表面から地山面までの深度は50cm前後であったが、すべて盛土によるもので、自然堆積層は全く見られなかった。さらに、遺物・遺構も全く検出されなかった。

包含層の遺物は、グリッドごとにとりあげた。遺構は種別ごとに番号をつけたが、整理時に通し番号につけかえた。建物柱穴と認定されなかったピットは、遺物のとりあげの問題により、遺物の出土したものに限り番号をつけた。

土層観察は、盛土部においては南北方向では前年度のセクションベルトを延長することとし、H・I列の境界にそれを設定し、また、東西方向では新たに7・8列の境界にセクションベルトを設定して行った。遺構平面図は平板測量により1/20で作成した。

また、県道沿いの部分については、重機により掘削した壁面で行った。

経過 事前にグリッド杭の打設を完了し、6月9日下新町遺跡より必要器材を搬入し、発掘作業を開始した。

地山面までの掘り下げにおける遺物の出土量は比較的多かったのに加え、盛土下の部分であったため非常によくしまっており、深度が15～30cmと浅かったにもかかわらず、遺構検出までの作業は困難であった。

遺構は調査対象地が200㎡と狭いことや段丘縁辺部であったことなどから多くはなく、掘立柱建物2・

溝2のほかピット等が検出されたのみであった。また、遺構内より出土した遺物はほとんどなく、若干の土師器・須恵器が出土したのみである。これらの包含層を含めた出土遺物は、溝(SD904)より南で出土したものは前年度と同様に奈良時代前半に比定されるが、北側では平安時代中頃と時代差が見られる。

発掘作業は、南(9列)から北(5列)へと順次進め、H~J6・7区で掘立柱建物1棟、D8区からH5区に走る溝を検出した。

また、県道沿いの部分の調査は、7月6日より試掘を行い包含層が全くないことを確認した後、重機により地山面まで掘り下げたが遺物・遺構は全く確認されず、地山面までの土層はすべて盛土であることがわかった。この結果、この部分には、遺跡ののびがなかったか、もしくは削平を受けていたことから遺構は消滅しているものと判断された。以上のように今池遺跡A地区の残部の発掘調査は7月8日に完了し、7月9日より下新町遺跡の発掘作業に加わった。

3) 今池遺跡C地区の調査

今池遺跡C地区の調査は、北陸地建との合意に沿って8月24日から11月14日の間、今池遺跡C地区6,000㎡のうち今年度の調査対象区域4,400㎡について実施することとして作業を進めた。現況は水田及び畑地であったが用地買収後荒地化していた。

グリッドの設定(第14図) グリッドはセンター杭No.390(X=+121,493・Y=-19,491)を基点として、国土地理院の座標系に一致させ、15m方眼を組みこれを大グリッドにした。グリッドの呼称は東西をアルファベット・南北を数字にして「J2区」のごとく両者の組み合わせによって行った。大グリッドはさらに3m方眼に区分けし、1~25の小グリッドとした(右図)。グリッドの設定にかかる杭の打設は業者に委託した。杭の呼称はグリッドの北西隅の杭とグリッド名を一致させた。杭は調査範囲内に打設したが、今池遺跡A地区、B地区、C地区は一連の大規模な遺跡であるとの認識にたち、57年度調査を予定しているB地区についても数か所の見通し杭を打設した。レベル原点は隣接する畑地の鉄塔の基礎コンクリート上に設定し、ベンチ・マークより標高を求めた(16.308m)。

1	2	3	4	5
6				
11				
16				
21				25

発掘方法 用地境に設けた排水トレンチの掘削によって、表土(耕作土)及び水田床土は厚さ20~40cmであり、包含層は旧地形の低い一部分を除いては圃場整備及び畑の耕作によって失われていることが知られた。そのため、立会いのもと重機により表土(耕作土)及び水田床土を排除した後、一部に残存する包含層及び重機による取り残しを人力により排土し、地山面で遺構を検出した。

包含層の遺物は、グリッドごとに取りあげたが、極めて出土量は少なかった。遺構は遺物の出土したものに限り大グリッドごとに暫定的に番号を付した。

土層観察は、南北方向ではグリッド設定の基点を通るJ・K列の境界にセクションベルトを設定し、また東西方向では4・5列の境界にセクションベルトを設定して行った。

経過 8月24日に下新町遺跡の残務作業にあたる者を残し、器材等を今池遺跡に移動した後、草刈り等の準備作業を行った。さらに用地境に沿って排水路を設けるための幅1mのトレンチ掘り作業を完了し、8月25日より発掘作業に着手した。

遺物の出土量は、包含層がほとんど失われていたため全般に稀薄な状態であった。重機による表土(耕作土)及び水田床土の排除もあいまって、地山面までの掘り下げ作業は早く進行した。

遺構は、調査対象区域の6列より北側を中心として「コ」の字形に配置する10数棟の掘立柱建物と黒褐色土を覆土とする数基の土坑及び井戸跡・溝跡が確認された。遺構内上面で出土した遺物でとくに注目され



第14図 今池遺跡グリッド(B・C地区)設定と年度別発掘区

昭和47年8月撮影・昭和48年7月測量
 座標系第8系 建設省北陸地建

たのは、L・M4区の土坑（SK21）より検出された多量の奈良時代後半の土師器・須恵器である。また、L1区より古墳時代前期の古式土師器が出土している。

ところが、9月に入り県教委での全体発掘調査計画の変更により、今池遺跡C地区発掘調査期間を短縮せざるを得ない状況となった。9月21日、北陸地建と日程の変更について協議を行ったが、北陸地建では56年度事業を予定どおり完了することを見込んで、57年度計画はすでに立案、説明済みであり、この時点における変更は困難であるとして、この日の協議は物別れとなった。翌22日では、北陸地建は来年度の工事工程としてグリッドの5列より北側のボックス工事が最優先するため、工事用道路等の範囲も含めて56年度調査対象範囲を完了してもらうことが絶対であるとの条件を示した。しかし、この時点ではまだ、調査対象範囲の60%程度しか遺構検出が終っていなかったため、県教委は現在発掘中の部分を完掘し引き渡すことで対応できないかと申し入れたが、北陸地建は未検出地区がどのような状況か不明では、57年度の計画をたてることはできないとし、今池遺跡C地区の遺構未検出地区の遺構確認を、当初の対象区域外も含めて実施してほしいとして、この線で相方が一応の合意に達した。また北陸地建では、57年度の工事工程についても、早急に検討し県教委と協議することとした。

その結果をふまえて、9月26日に北陸地建と再度協議を行い、北陸地建は、56年度の発掘調査は10月9日をもって終了することを理解し、57年度の工事工程を可能な限り変更することを了解した。また、県教委でも残りの日程内で出来るかぎり遺構検出を行うこととした。しかし、57年度の発掘調査計画は、ギリギリの工事工程の変更を尊重して立案、実施することとなった。

ボックス位置の変更 10月9日をもって昭和56年度の発掘調査を終了したが、その遺構確認状況を検討すると、(1) 建物の配置が、中庭を囲むような規則性をもっていること、(2) 建物の規模が7間×2間ないしは3間の規模の大きな建物が多数確認されていること、(3) 建物の主軸はすべて東西方位に近いこと、(4) 特殊な遺物として墨書土器が出土していること、等から一般集落とは異なった性格の遺跡であることが推定され、重要度も高いものと考えられた。調査期間中の打ち合わせの際、横断ボックスをグリッドの2～3列に設置するため、調査終了後掘削を含む工事に入りたいとの話があったが、北側の建物群のほとんどが破壊されることが明らかであり、遺跡の重要性からも避けてほしいとの申し入れを再三にわたり行った。

その結果、北陸地建からは遺跡の重要性はよく理解しているが、ボックスは地元の農耕車輛の便に供するものであり、その位置については地元との了解事項となっているので、変更にあたっては地元との協議が必要となるので、県教委からも変更にかかる協議書を送付してほしいとの連絡があった。

県教委では、昭和56年10月26日付けの文書で、No.386地点のボックス位置変更について、ボックス工事にかかる掘削範囲が、県内でも特筆すべき掘立柱建物群の一部にかかっているため、ボックス位置変更により、建物群の保存をはかるべく公文で協議した。

北陸地建では、この協議について局内で検討した結果、昭和57年1月14日に局内での了解がとれた。このため県教委の要望であることを強調し、早急に地元との交渉にあたることとなり、折衝にあたった結果、昭和57年4月までに地元からボックス位置変更について同意を受け、掘立柱建物群のボックス工事による破壊はまぬがれた。

4) 今池遺跡B地区の試掘調査

今池遺跡B地区の試掘調査は、昭和57年度予算積算の基礎資料を得るため、9月1日から11日の間行っ

た。この作業には発掘作業継続中であつた今池遺跡C地区より、調査員1名と作業員20名をさいてあてた。B地区の調査対象区域は12,000㎡であり、現況は水田であつたが用地買収後荒地化していた。

試掘方法 試掘方法は、東側の用地境に沿って幅1mのトレンチを設定し、北から南に向かって順次進めた。地山面までの深さは、旧地形の凹凸により地点ごとに異なるが、平均して表土(耕作土)及び水田床土が20～25cm前後あり、その下層に20cm前後の黒褐色の包含層が、全域にわたって良好な状況で検出された。

包含層の遺物は2mごとに取りあげたが、包含層は全体にわたり良好な状態で認められた。とくに、中央部を除く県道高田・青柳線に近い南側の部分と市道今池・下新町線に近い北側の部分に集中している傾向が見られた。

土層観察は、トレンチの東側壁面で行つた。遺構は、トレンチ幅が1mであつたこともあり、東西及び南北に走る大小の溝は多数確認されたが、多数存在する可能性のある建物跡を確認することはできなかった。

以上のように、調査方法については問題が残るものの、下記の結果を得ることができた。

- ①遺物を含まない表土(耕作土)及び水田床土は重機により除去することが可能である。
- ②包含層は、遺物の出土量も豊富であると考えられるので、人力により掘り下げる。
- ③包含層の遺物は、小グリッドごとに取りあげる。
- ④遺構は地山面で検出する。
- ⑤試掘調査では多数の溝が検出されたのみであつたが、今池遺跡はA地区からC地区を含め一連の大規模な遺跡であると考えられ、A地区・C地区で検出された掘立柱建物がB地区においても多数検出されることが予想される。
- ⑥調査対象面積は12,000㎡であり、重機による排土量は約3,600㎡、遺構発掘を除く人力による排土量は2,400㎡である。
- ⑦試掘調査中、周辺の水田より出水が激しく調査に支障をきたしたこともあり、排水路を多数設置する必要がある。

この調査結果と前項の「今池遺跡C地区の調査」で述べた北陸地建より提示された工事工程を検討しつつ、昭和57年度今池遺跡B地区の予算積算及び調査計画を立案することとした。

C 昭和57年度

1) 調査方法

全体計画 本年度の対象は前年度に一部着手していたC地区と未着手のB地区、計約18,000㎡である。前節で述べたように前年度、調査期間を当初計画よりも約3週間短縮したため、本年度は工事用道路部分の調査を先行させるなど、B地区は一部変則的な地区割りとなった。すなわち、B地区は南辺の県道青柳・高田線寄り部分が、昭和57年10月の新井・今池間供用開始に必要なこと、さらに県道と市道の間で工事用道路が早く必要なことから、この部分の調査を先行させることとした。この部分を「B₁地区」、その他を「B₂地区」とし、作業上分けることとした(第15図)。C地区は前年度着手していたので、まずこれから作業を開始し、次にB₁地区、最後にB₂地区という順番を予定した。

調査は4月19日に本格作業を開始し、10月末日には全ての作業を終了することとした。さらに、C地区は6月11日、B₁地区は8月31日にそれぞれ終了日を設定した。延日数は120日で、作業員を1日60人、調査員は4名専従を予定した。なお、7月24日から8月15日までは詳細分布調査・夏期休暇・他の確認調査等により休業することとした。

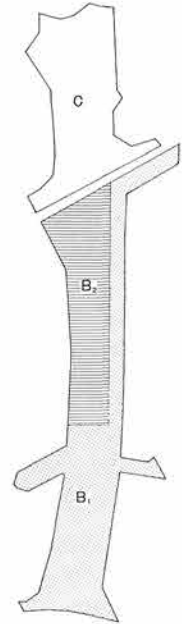
発掘作業の基本工程 まず、表土(耕作土)・水田床土を含め包含層上面まで重機で除去し、その後人力で包含層を掘り、地山面で遺構を確認し、発掘した。包含層の排除はベルトコンベアーを使用した。遺構確認では掘立柱建物の見落しのないよう柱穴の関連に特に注意した。土坑はあらかじめトレンチを入れ、土層を確認したのち分層発掘したが、建物柱穴はおもに柱痕跡の検出に重点を置き、断面観察は代表的なもの以外行わなかった。遺構平面図は1/20で実測した。

遺構は検出順に通し番号を付し、建物・土坑・溝など種別で分けなかった。種別の記号は、SA・SB・SD・SKがそれぞれおもに柵・建物・溝・土坑をさす。掘立柱建物の場合、柱穴番号を遺構番号SB〇-〇というかたちで示した。遺物もそのままのラベルをつけ、遺構番号のないピットは大グリッドごとに番号を付した。畝状小溝は遺物の出土したものに限りSD番号をつけた。

現場では調査員が発掘区の1/100縮尺の略図を作成し、遺構の位置、切り合い関係を主とした所見をこれに記入した。この図を常時携行し、作業に役立てた。

発掘作業のほか、現場では遺物の洗浄を併行して進めた。これは当初墨書土器の早期発見を期したのであるが、遺物の様相を把握して発掘することが可能になるばかりか、墨書土器以外でも特殊遺物の抽出に有効であり、冬期の整理作業等が軽減された。各地区ごとに遺構発掘が完了したところで航空撮影をした。また、遺跡は調査完了後はバイパス道路の下になるが、前年度の下新町遺跡と同様に遺構面を保護するため川砂を入れることにした。

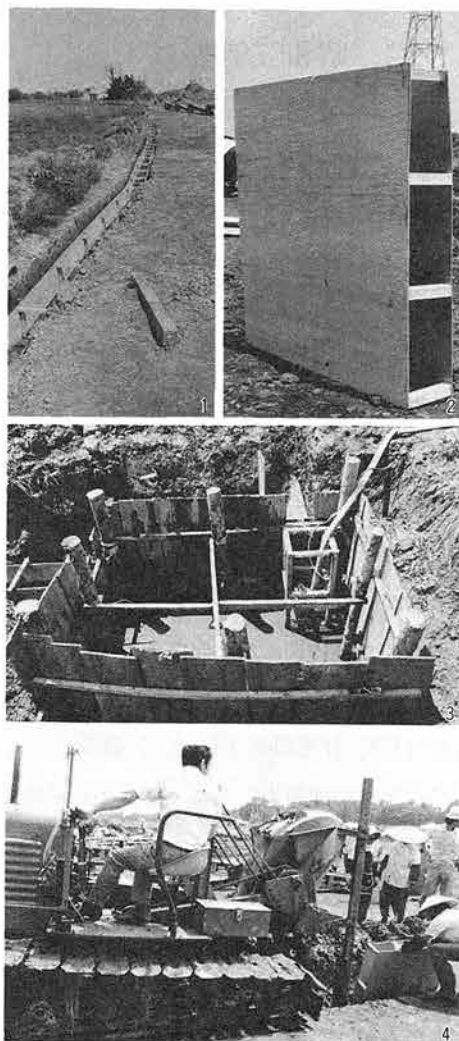
排水方法 調査区の両側は北辺を除き水田地帯で、調査時期が水田滞水期に重なるため、調査区内の地下水位の上昇と浸水、あるいは滞水が予想された。そのため、排水溝の掘削とポンプによる排水は不可欠であった。調査前に設計した排水溝は幅30cm、深さ30cmで、壁の崩落を防ぐため溝の側面を板材で補強するものであり、C地区とB地区南辺はこの方法をとった(第16図1)。C地区は元来畑であった部分が広く、調査区の東側は畑であり、地下水位は高くないことから、排水自体が南西部を除いて不要であった。しかし、



第15図 57年度当初計画地区割図

B地区はこの程度の排水溝の深さでは地下水位が下がらず、遺構はすべて湛水するという状況であった。そこで、さらに溝を下くしたが、すでに掘られた溝中に泥が充満し、その掘り下げは容易ではなかった。苦慮しながらも深さ60cmまで掘った部分もあるが、壁の崩落など遺構の保護という点では適当ではなかったと思われる。

こうした状況を解消するため、根本的に排水溝の構造を再検討した結果、水田（湿田）の暗渠掘削用機械（トレンチャー）を導入することにした。トレンチャーは細くて深い溝を掘削できるという効力があり、仕上りもきれいだ。もちろん、掘削に要する時間もかからない。トレンチャーで掘削した溝の崩落はあらかじめ用意しておいた木枠（第16図2）で防止した。7月初旬になって、現場にトレンチャーを入れたところ、大きな効果をもたらした（第16図4）。溝は調査区両側とこれらをつなぐものを要所に設定した。深さは場所によって、90cmと45cmにした。トレンチャーで不都合なのは、キャタピラの幅を確保できる場所に使用が限られること、掘削面が水平でないと溝が傾斜してしまうこと、あらかじめ木枠等崩落防止具を用意する必要があることである。水は集水枡（第16図3）を設け、24時間運転でポンプ排水した。



第16図 排水作業風景

2) 調査経過

C地区 4月19日～6月10日

C地区は約6,000㎡である。4月19日作業員を投入し、本格的作業を開始した。調査員は係内で最大限調整しても4名の専従は不可能であり、3名でスタートした（戸根担当、木村・坂井調査員）。

C地区は前年度すでに重機排土が終了し、一部を残して遺構検出まで進行しており、遺構の大半が確認されていた。それは桁行6～8間、ひとつの柱穴の一边が1mもあるという大形掘立柱建物をいくつか含むなど、きわめて注目される遺構であった。いきおい、同年調査していた新井市栗原遺跡とともにその性格について大きな関心もたれた。作業は発掘と包含層排土を併行した。4月中には包含層排土が終了し、のちは遺構発掘に集中した。しかし、調査当初のため、調査員自身が作業要領をよく把握できず、かならずしも順調には進まなかった。

まず、遺構の主体を占める掘立柱建物の柱穴は、切り合い関係がなかなかつかめず、柱痕の検出も容易ではなかった。当初、柱穴は検出面から10～20cm下げた時点で柱痕を確認しようとしたが、不明なものも多く、柱穴のプラン自体も誤るものもあった。最終的には柱痕が確認されるまで柱穴埋土を掘ったが、底面では柱の沈下により、その輪郭は明瞭であった。

井戸はこの地区にSE20の1基だけ存在したが、これは掘形が一边約4m、深さ約3.5mもある大きなもので、この発掘は時間を要し、当地区のうち最後まで作業が残った。とくに排土に人手と時間がかかり

掘形壁面の崩落に苦慮した。

反省点としては、この地区の北東部が畑であったため著しく攪乱を受けていた部分もあったことと関係するが、B地区で検出されたような畝状小溝や中世の柱穴と考えられる黒褐色の覆土をもつ小さなピットに十分な注意が払われなかったのではないかとこの点がある。

5月20日過ぎには、一部作業をB地区に移し、6月10日には当地区の全作業を終了した。航空撮影はこの直後に実施した。

B地区前半 5月21日～7月23日

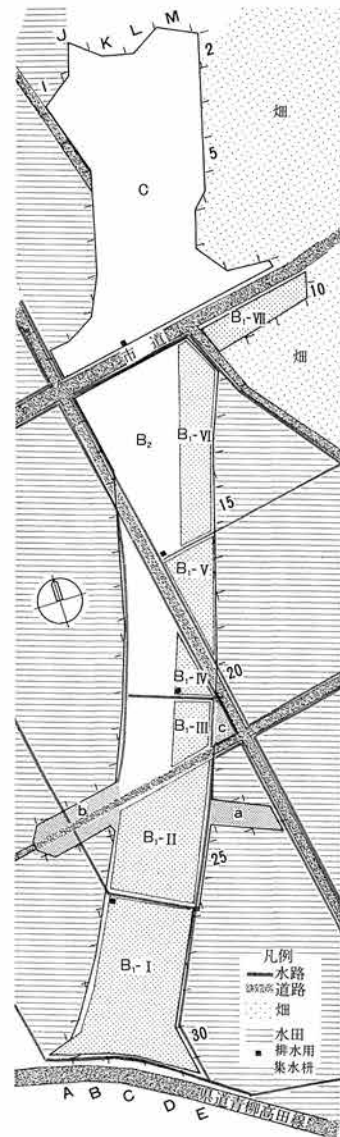
当地区は南は県道、北は市道で画される長さ約300mもの長大な地区で面積は約12,000㎡であり、かつ工事工程との関係により北半部が工事用道路の幅約15mを先行させるという、調査にとっては条件の良い地区割りとなっていた。加えて、調査区内あるいは調査区周辺には、実際に使用されている農道と用水が存在し、それらの機能を停止させないで調査をすすめる必要がある状況であった。

そこで、農道と用水を基準にして、先に作業をすすめるB₁地区を7つに細分した(第17図)。これらを南から番号をつけ、B₁-IからB₁-VIIとした。なお、グリッドの22～25列には農道取り付けのための東西拡張部があるが、この部分は買収されていたが作付けされており、後に回すことにした。7地区のうち、まずB₁-I区を着手した。

〔B₁-I区〕 B₁-I区は南側が県道に接するが、この部分も含めて東側、北側と用水路に囲まれた地区である。重機排土は4月20日に開始し、同時に調査区両側縁にユンボのバケットで溝を掘削し、当地区の北西隅に一辺約3.5m、深さ約1.5mの集水枡を掘った。溝と集水枡は木材によって補強した。

発掘作業は5月21日、C地区の作業に余裕ができてからである。この時期はすでに周辺の水田で田植が完了し、水田に多くの水が入っている時期であり、予想以上に湧水が激しく、当地区中央の東西と南北とに2本の直交する排水溝を掘った。これは幅30cm、深さ30cmである。南端より包含層の発掘をはじめ、北側へいくにしたがい、遺物の出土量は多くなり、遺構の存在も確実視された。前年度県道をはさんだA地区の北側は削平を受けていたもののまったく遺構がなかったため、遺構が分布しないか、あっても稀薄ではないかと予想したが、それと相反する結果となった。包含層の発掘は6月上旬に終了し、遺構検出・精査に移った。

〔B₁-VII区〕 一方、B₁-I区の土は、B₁-II区に排土したため、B₁区の南側から順次北へ作業を進めてゆくことはできず、6月9日には北端のB₁-VII区とB₁-VI区にも着手し、両地区併行して作業を進めた。遺構番号はB₁-I区が100番から、B₁-VI区は600番から、B₁-VII区は700番からとわかりやすいようにそれぞれ付して、重複しないようにした。B₁-VII区は面積も狭く、周辺が畑のため、湧水もなく作業は順調に進み、6月中頃には終了した。当地区は掘立柱建物4棟と畝状小溝が検出されたが、包含層は削平のためかわずかに存在するのみで



第17図 今池遺跡B・C地区の地区割りと周辺の状況

ある。ここで検出された畝状小溝は当初かなり新しい畑の跡かとも思われたが、時期決定する要素もなく、¹⁾ 外觀が奈良県などでよく検出される「中世素掘り溝」と類似することから、いちがいに新しいものと考えられないと思われた。

〔B₁-Ⅶ区〕 B₁-Ⅶ区とは農道をはさんで西側にあるB₁-Ⅵ区では、北半部は湧水がなかったが、南半部はしだいに湧水が激しくなった。そこで当地区の西側農道際に集水枡を設置した。この場所を選定したのはB₁-Ⅴ区でも利用でき、将来B₂地区でも使用できると考えたからである。

当地区ではC地区で検出されていた南北の大溝SD 3の発掘に時間がかかり、完了までには2週間を要した。ただし、のちにSD 3は掘り残していることが判明し、再度発掘した。SD 3の上層からは瓦塔片が出土し、かねてより関心があった今池遺跡の性格について示唆を与える遺物となった。

〔B₁-Ⅰ区〕 併行して作業していたB₁-Ⅰ区では6月中旬より遺構検出と精査にはいった。南側は畝状小溝が主体であったが、包含層の遺物量に比例して北側は柱穴が多く、桁行8間という大形掘立柱建物(SB 105)が検出され、その北側に柱通りが一致する桁行5間のSB 106が明らかになった。さらにはこれらの建物群の南に建物と方向が一致する東西溝が確認され、今池遺跡の規模・性格を考えるうえで良い資料となった。この遺跡は出土遺物からみて、C地区の建物群と併存することが推測され、A地区からC地区までの南北約600mにもわたって建物が存在するという遺跡規模であり、しかも8世紀の前半から中葉に成立すると推察された。

同時に、調査面では今後の時間的余裕に不安も生じた。こうした点からも調査員の増員が必要となり6月末に一名を新たに加えた(田辺調査員)。また、調査地点が2ヶ所で、しかも両者の距離があると、調査員の負担が大きくなるため、B₁-Ⅱ区の排土をB₂地区に搬出し、B₁-Ⅱ区に着手すべく準備をいそいだ。

〔B₁-Ⅱ区〕 6月末、B₁-Ⅱ区の包含層発掘を開始したところ、ひきつづき遺物は多く、建物・溝などの遺構も多く、重複するものが目立ち、複雑な配置となってきた。作業は包含層を除去し、ある程度の広さを確保してから遺構検出・精査をしてゆき、両者を同時に進めた。B₁-Ⅱ区とB₁-Ⅲ区の間には介在した農道は、建設省・地元区長と協議し、除去することとした。こうした施設は調査区を分断し、作業効率を低下させるばかりでなく、遺構の全容把握を妨げることから、可能なかぎり調査面積を広げべく対処した。

〔周辺の調査〕 この頃より今池遺跡の性格解明の材料とするため、雨で作業のできない日や作業終了後に積極的に周辺調査を実施した。圃場整備で失われたかつての地割りや字名を知るため、明治期の更正図(地籍図)を地元や市役所で調査したり、また地元で伝承や遺物の散布状況などについて聞き込みを実施し、さらには検地帳で字名を究明した。そして、7月中旬には長者原・今池・子安・樋場など周辺の表面採集を本格的に実施して、今池遺跡をとりまく古代環境復元に努力した。

〔工程変更〕 B₁-Ⅴ区は7月中旬より作業を開始したが、ほとんど遺構を発掘しない時点で夏期の休業期間にはいった。休業は7月24日からであり、B₁地区全体の当初の終了予定は遅延する公算が強くなり、発掘作業工程の見直しが必要とされた。そこで、8月の現場休業期間に建設省と協議し、工事用道路部分を先行させることはかなり時間を要するので、B₁-Ⅳ区より北は工事用道路部分を先行させないことを決定した。

B地区後半 8月19日～11月30日

1) 中井一夫「奈良県における発掘調査から」(『奈良制の諸問題Ⅰ』奈良国立文化財研究所 1982)

Ⅲ 今池遺跡の調査

8月16日に再び現場に戻ると、8月17日決定した現地説明会の準備を行った。これは今池遺跡の調査成果がきわめて貴重であると判断され、砂埋めする前に多くの人に見てほしいと願ったからである。

建設省との協議により、8月31日までの範囲をほぼグリッドの24列までとし、ここまでの完掘を急いだ。当地区は遺構の重複が著しく、これらを切り込む比較的大きな溝（SD 201・SD 203）などがあり、かなり時間を要したが、期日に間に合わせ、航空写真の撮影後砂埋めした（第18図1）。

9月からは1ヶ月間、子安遺跡調査に主体を移し、9月末の作業再開までいったん調査を中断した。調査期間は子安遺跡の1ヶ月分だけ延長し、11月末日に終了することとした。

9月末になると、すでに周辺の水田は稲刈りが完了し、用水は水を払われ、地下水位は驚くほど低下した。この周辺は沖積段丘上で、元来高燥の地であり、用水がない条件下では地下水位は高くない。このため、調査区両側にある用水も直接必要なくなり、この部分とグリッドの22～25列の東西張り出し部（第17図a・b・c）は発掘可能となった。さらには、南北の農道についても地元の了解を得たうえで撤去した。

調査が北に進むにつれ、遺構の分布は南側より稀薄になり、面積に対して、比較的早く進行した。グリッドの22列に存在する東西溝（SD 320・SD 321）を境にした南北は遺構が対照的なあり方を示すことは明白であり、SB 105の南側の東西溝SD 113と約100mの間に建物が集中することが判明し、ここにある程度規則的な土地区画と建物配置が看取された。

一方、中世の遺構として、子安遺跡で発掘したものと同様の中世井戸が多数検出されはじめ、この発掘に意外と時間がかかった。井戸は素掘りであり、掘り進むにつれ、壁面の崩落が激しく、安全確保のためにも、材木で補強しながら作業を進めた（第18図2）。井戸のほかに掘立柱建物の柱穴が井戸の周辺で集中的に存在するのが顕著であったが、建物の復原にまで及ばなかったものがほとんどである。中世の柱穴は埋土が黒褐色で古代のものと同様に区別された。しかしながら、建物の復原が困難であったのは、中世の建物に関する知識が少なく、奈良・平安時代のものと同様の感覚をもっていたことに起因する。

春に調査がはじまって以来10月までは異常に雨の少ない年であり、朝から作業を中止した日はわずか2日にすぎなかった。しかし、11月になると、北陸地方は裏日本特有の時雨れる天候が多くなり、作業の進行に支障を生じた。冬型の気圧配置による冷たい北西の季節風と、雨、霞とで通常では決して作業できない状況であったが、限られた調査時間のなかで、連日作業を強行し、作業員も大幅に増員した。調査員もさらに2名増員した（高橋勉、大森調査員）。

中世井戸のほかに時間がかかったのは大規模なSD 3である（第18図3）。SD 3はC地区とBⅠ-Ⅵ区ですでに発掘していたものであるが、この時点になってそれまで地山と考えていた土が溝覆土と判明し、掘削された時期も確実に平安時代に遡ると認められ、計画的な建物群が廃絶した後の土地利用の一端がうかがわれた。



第18図 発掘作業風景

寒さと雨風の天候の中、休日を返上しての作業により、11月30日ようやく、すべての作業を終了することができた。

D 昭和58年度

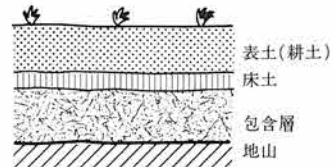
58年3月3日北陸地建から県教委に対して市道今池・下新町線の北側、市道から新町側の側道へ入る進入部について、計画変更があったということで、さらに162㎡の調査を実施してもらいたいという要望があった。県教委は北陸地建と協議し、子安遺跡終了後約10日間の予定で発掘調査に着手した。調査のためのグリッド・標高は昨年準じて行った。表土は重機を使用して排土し、包含層は人力で掘り下げ、地山面で遺構の確認を行った。発掘調査は子安遺跡の調査がほぼ完了した5月19日から開始し、同月27日に終了した。

経過 全体的に遺物量は少なく、昨年検出されていたSB 7・8の北側柱穴は、長芋畑によって深く攪乱を受けていたものの、柱穴の底面が確認されSB 7は東西棟であると判明した。また、新たに溝が1条検出された。比較的包含層がよく残っているN 8区では相対的に遺物量が多く、建物が2棟、土坑が1基検出された。最終的調査面積は158㎡である。昭和55年以来実施してきた今池周辺の遺跡の発掘調査は、この58年度の調査で現場作業は完了した。

2 遺 跡

A 層 序

今回、発掘した範囲は沖積段丘上の南北約600m、幅40mの範囲であり、ほとんど平坦な地形を呈している。標高は現地表面で16m前後である。微視的にみれば、段丘上にも若干の起伏がみられる。櫛池川の河道に沿った帯状の畑地はやや高く、段丘西辺の今池集落の部分もやや高い。調査区内の起伏を地山面のレベルでみると、第20図のようになる。B地区南辺からA地区にかけてがもっとも高く、16mをこえる。B地区の中央部から北辺にかけてはほとんど水平であり、C地区にはいと傾斜がやや急になり落ち込む。C地区では南北約120mで約75cmの比高がある。東西方向ではB地区北辺からC地区にかけては東から西へ傾斜する。C地区南端の東西約100mの間では約25cmの比高差がある。その他の地区でもおおむねこの傾向があるが、さほど顕著ではない。



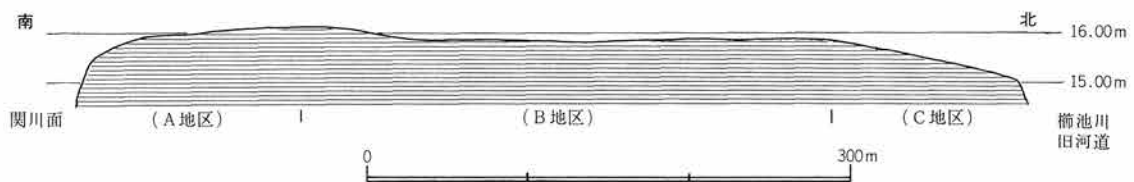
第19図 今池遺跡層序模式図

土層は単純である。基本的には表土・包含層・地山となり、水田部では表土と包含層の間に床土がはいる(第19図)。表土は畑地部と水田部とでは異なるが、厚さは20~30cmである。畑であったところはA地区とC地区の北半部に限られ、ほかは水田であった。畑のところは畝や耕耘によってかなり攪乱を受け、水田のところは昭和40年に圃場整備されたにもかかわらず、包含層は一部をのぞいてほとんど削平を受けていない。水田床土は茶褐色で鉄分等を多く含み、この地区の水田が乾田であったことがよくわかる。包含層は暗褐色土で、粘性を帯び、10~20cm前後の厚さである。包含層は奈良・平安時代の土器を中心に、古式土師器・中世遺物も含む。ただし、中世遺物の出土位置は出土量がごく微量であり不分明である。包含層からの遺物出土量は遺構の分布を明瞭に反映する。したがって、掘立柱建物にともなう遺物は一般にごく少ないが、建物部分の遺物がおおよそ共伴関係を示すと考えられる。なお、奈良・平安時代の掘立柱建物・溝・土坑などの遺構は、確認しえた少数例ではいずれも掘り込み面が包含層の下である。地山は黄褐色粘質土であり、部分的に砂層となる。調査区内で地山面が砂層であったのはB地区北端部に限られる。また、地山面下の50~100cmには厚さ10cm前後の黒色土帯がある。この黒色土帯は下新町遺跡、子安遺跡でもみられたが、性格は不詳である。

B 概 観

遺構のあり方は分布密度・種別・時期など、場所によって多様であるものの、調査区内の全域にみられる。しかし、幅が狭い調査範囲内では、遺跡全体の実態は不分明なところが多い。

遺構の時期は古墳時代前半期、奈良・平安時代、中世の三つに大別される。このうち、当遺跡の主体を



第20図 今池遺跡調査区内地山断面模式図

なすのは奈良・平安時代であり、とくに注目される成果が得られた。以下、時期ごとに概観する。

古墳時代 いわゆる古式土師器の時期であるが、出土量はごく少なく、明確な遺構は検出されていない。土器の出土地点はA地区の一地点に集中するほかは、B・C地区に若干みられる程度である。下新町遺跡でも数点出土しており、段丘上に小規模な集落が点在していたものと思われる。土器の出土層位は奈良・平安時代と同じ包含層である。

奈良・平安時代 遺構がもっとも多く、分布範囲も広い。時期は奈良時代から平安時代中期頃（8～10世紀）にあたり、遺構のあり方からすると、さらに前半と後半に区別される。前半期と後半期では遺構のあり方の変化が大きく、遺跡の性格そのものが変容したことがうかがえる。ただし、両者の間には大きな時間的な空白はないと考えられる。

遺構は掘立柱建物・柵・竪穴住居・井戸・土坑・溝などである。掘立柱建物は全体で100棟以上を数える。これに対し、竪穴住居はわずか2棟である。明確に井戸と判断されるのは1基のみである。溝は規模・形状が多様であり、それぞれの性格づけはむずかしいものもあるが、畠の畝と考えられる小溝群（畝状小溝）が広い範囲に分布する。掘立柱建物は最大で桁行8間であり、5間以上の建物は全体で十数棟ある。大半が東西棟建物であり、南北棟建物は数棟である。また、倉庫様の束柱をもつ総柱建物は1～2棟であり、廂をもつ建物も少ない。

当期の前半は奈良時代から平安時代初頭の時期であり、実年代は8世紀前半から9世紀前半頃にあたる。C地区の北半部（C建物群）とB地区の南辺部（B建物群）、A地区の南半部（A建物群）の3地点に、大形の掘立柱建物を含んだ建物群が形成される。A建物群は建物総数が3棟と少ないが、B建物群とC建物群はそれぞれ30棟前後の建物で構成される。B・Cの建物群は建物の方向のちがいなどから、さらに時期的に細分される。8世紀前半から中葉には3つの建物群が形成され、B建物群は9世紀前半頃までは機能を続ける。このうちB建物群では南・北・東の三方に建物群を画す溝が検出されており、A建物群でも一条の東西溝がひとつの区画をなしているものとみられる。前者は南北の各溝間が約100mであり、ひとつの区画のひろさが明確である。C建物群ではこうした明確な区画の施設は検出されていないが、現状では南北60～70mの範囲に建物が群在する。これら2つの建物群では建物の配置や方向性も一定の規則性がある程度看取され、一般集落とは異なった性格が想定される。

一方、当期の後半にはいと、こうした区画が崩れ、これらの建物群が廃絶したのち、新しく大規模な溝（SD 201・SD 203・SD 3など）が掘削され、小形の掘立柱建物が多くなる。そして、建物の数も減少する。竪穴住居2棟はこの時期である。建物の分布はC地区南辺からA地区までひろがり、建物相互は一定の規則的な配置をとらず、散在する傾向があり、前半期とは対照的な様相を呈する。時期は9世紀前半・中葉頃から10世紀代にかかる。

畝状小溝はB地区で広汎に検出されたが、中世井戸に切られているものがいくつかあり、中世までは下らないものと思われる。一方、建物と重複している箇所では建物より新しいことが判明している。畝状小溝そのものが時期幅をもつことが考えられ、年代の考定は困難な面もあるが、9世紀以降の遺構と一部併存するものもある可能性はあろう。

中世 当期の遺構は掘立柱建物と井戸が主体をなす。遺構の分布はほぼB地区に限られ、一部C地区南端に及ぶ。中世の掘立柱建物は奈良・平安時代の建物に比して、柱穴が小さく、掘形埋土が黒っぽいことでこれと識別されるが、柱穴の配置が規則的ではなく、建物の復原はむずかしいものが多かった。現場で復原したものは少数であり、大部分は58年度に子安遺跡で検出された中世建物を参考にしながら図上で

検討・復原したものである。したがって詳細な観察は不十分であることを了解されたい。建物は井戸の周辺に集中する傾向が顕著であり、これらは全体の分布からすると、ほぼ3地点に分かれる。井戸は約20基あり、いずれも円形の掘形で、井戸枠は検出されなかった。このほかにC地区南端（SD 5・SD 6）とB地区（SD603）に計3条の東西溝がある。なお、奈良・平安時代の後半期に掘削されたSD 3・SD 201・SD 203などの大規模な溝は、覆土最上層から中世遺物が出土しており、これらの溝が中世までは完全に埋りきらず、くぼみが残存していたことが知られる。遺構の年代はほとんどが鎌倉時代から室町時代に至るものと考えられる。

C 遺 構 各 説

今池遺跡の遺構は時期的に多様であるうえ、調査範囲が長大であることから、奈良・平安時代と中世の二つにまず分け、前者についてはA・B・C地区ごとにさらに分けて記述する。

1) 奈良・平安時代

a) C 地 区

C地区は今回の調査区内では北辺部にあたり、櫛池川を介して下新町遺跡と対峙する。南側は市道に接しており、この部分は道路の取り付けの関係から、市道に沿って東西に長く範囲がのびる。

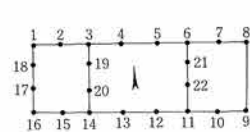
遺構は比較的単純なあり方を示す。建物は一部検出されたものも含めて計40棟を数えるが、このうちの35棟は北辺部に集中し、南辺部は建物が少なく、西側に溝が数条交錯して存在する。北辺部の建物群（C建物群）の中心は奈良・平安時代の前半期のものであり、南辺東側の3棟もこの時期のものと思われる。溝は当期の後半のものの中世のもの（SD 1・SD 2・SD 4・SD 5・SD 6）があり、南北方向の溝はB地区北辺につらなる。以下、検出順を基本として説明を加える。なお、時期を示す「I期」・「II期」などは土器編年（88頁）における時期を意味する。

SB 11 (図版10)

L 6区にある2間（4.95m）×2間（3.6m）の東西棟建物（東偏5度）である。柱間は桁行はほぼ等間であるが梁間は南側が短くなる。柱掘形は一辺40～50cmの方形で、深さ30～45cm（確認面より、以下同じ）である。掘形埋土は黒色土が多く、柱痕跡は径約10cmである。

SB 12 付 SA 85 (図版11・83)

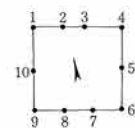
K 6区付近にある7間（14.05m）×3間（4.6m）の東西棟建物（東偏4度）である。東妻の柱穴は存在しない。東西とも2間目の棟通りには間仕切りと考えられる柱穴が各2個（19～22）存在する。柱間はいずれも等間である。柱掘



形は一辺70～90cmの方形ないしは長方形である。間仕切りの柱穴は小さく、一辺20～50cmであり、深さ25～30cmと浅い。掘形埋土は地山土が主体で、なかにはとくによくしまるものがある。柱痕跡は径約25cmである。柱穴底面に柱痕跡が2つ検出されたものがあり、建て替えられた可能性が考えられる。なお、この建物の北には3間（6.3m）の東西方向の柵（SA 85）がある。

SB 13 (図版10・83)

L 5・6区にある3間（5.85m）×2間（5.5m）の東西棟建物（東偏10度）である。柱間はいずれもほぼ等間である。柱掘形は妻のものが小さくて、一辺40cm、深さ30cmの方形、ほかは一辺65cmの方形で、深さは50～90cmである。柱穴2・8の柱痕跡には地山ブロック

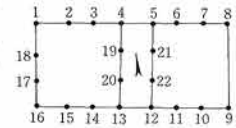


1) 建物の方位は、東西棟建物では梁間、南北棟建物では桁行で計測した。

が詰っていた。柱痕跡は径約20cmである。

SB 29 (図版9・29)

L 3区付近にある7間(12.75m)×3間(5.35m)の東西棟建物(東偏5度)である。建物の西側は畑の攪乱により、大きく破壊されているが、柱穴の下部は遺存する。柱間寸法は桁行約1.8m等間、梁間約1.8m等間である。ただし、東妻には明確な柱穴はなく、小形でごく浅い穴が存在するのみである。柱掘形は東西が



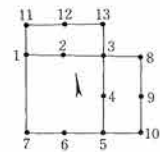
やや長い方で、短辺でも約1m前後、長辺は1.0~1.5mとかなり大きい。深さは60~90cmである。掘形埋土は地山土(黄褐色粘質土)を主体とし、固くしまっている。柱痕跡はあまり明瞭ではなかったが、径約25cmである。この建物の中央の棟通りに2列の柱穴が存在し、これを間仕切りと考えれば、馬通りとも考えられる。柱穴10・20は掘形がほかのものと同じ大きさであるが、柱穴21・22はこれより小さく、深さも浅い。SB 29はSB 30よりも新しく、SB 34よりも古い。

SB 30 (図版9・82)

L 2・3区にある3間(6.1m)×3間の東西棟建物(東偏6度)である。梁間は東妻と西妻とで長さが異なっており(東妻5.0m・西妻4.6m)、平面が歪む、東妻北第3柱はSB 29と重複し、南側柱列東第2柱は柱穴がない。柱間は北側柱列は西より2.4m・1.7m・2.0mであり、梁間は等間である。柱掘形は一辺60~75cmの方形で、深さは40~60cmである。柱痕跡は径約15cmで、掘形埋土は地山土を主体とし、わずかに黒色土を含むものの、よくしまる。柱痕跡は茶褐色を呈する。南西隅の柱穴がSB 29と重複し、このことからSB 29よりも古いことがわかる。東側にはSB 31が1.5mの間隔で並び同時に併存した可能性もある。

SB 31 (図版9)

SB 30の東側にある3間(7.6m)×3間(5.2m)の建物で北側と東側に廂をもつが、北東隅の柱穴はない。西妻は一部SB 29と重複し、明確ではない。身舎は桁行と梁間がほぼ等長で、柱間は等間である。廂の出は東側が2.4m、北側が2.1mである。身舎の柱掘形は一辺60~75cmの方形で、深さは50~70cmである。廂の柱掘形は東側が身舎と同じで、北側がこれより小さい。柱痕跡は径約20cmである。掘形埋土は地山土が主体をなす。



SK 32 (図版9)

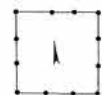
L 2区にある方形の土坑である。長辺2.8m、短辺2.5m、深さは30cmである。東壁のほぼ中央部に焼土が検出されたが、断面観察の結果、焼土は非常に軟弱で薄く住居跡のカマドとは考えられない。底面は軟弱で平坦である。柱穴になるようなものは存在していない。覆土は上面から黒色土、黒色土混入の黄褐色土である。遺物は北東部の黒色土から土師器片・須恵器片が若干出土した。

SB 34 (図版9・82)

L 3区にある2間×2間の建物で、SB 29と一部重複する。東西・南北とも等長(4.7m)で、正方形の平面形をとるが、西妻の柱穴はない。柱掘形は一辺50~70cmの方形で、深さは25~80cmである。北東隅の柱穴が、SB 29と重複し、これよりSB 29よりも新しいことがわかる。方位は東偏14度である。

SB 80 (図版10・82)

L 3区にある東西3間(5.4m)×南北3間(5.4m)の建物で、正方形の平面形を呈する。柱間はそれぞれ1.8m等間である。柱掘形は方形で、一辺50~70cm、深さ40~50cmである。柱痕跡は径約15cmである。SB 34と重複するが、柱穴の重複はなく、これとの前後関係は不



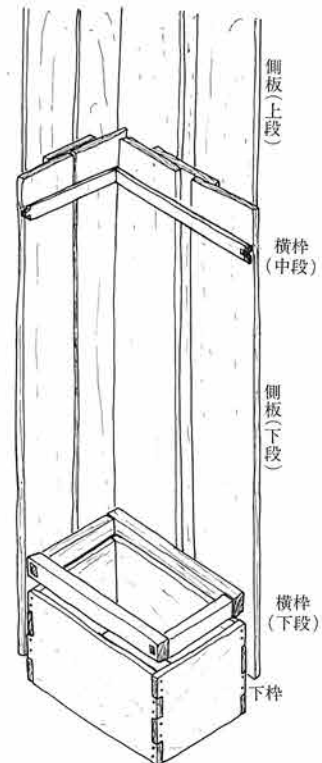
明であるが、建物の方位は東偏10度で北側に位置する SB 30と一致し、両者の西妻の柱筋も一直線上に位置することから、これと同時存在の可能性が高い。

SE 20 (図版10・83～85, 第23図)

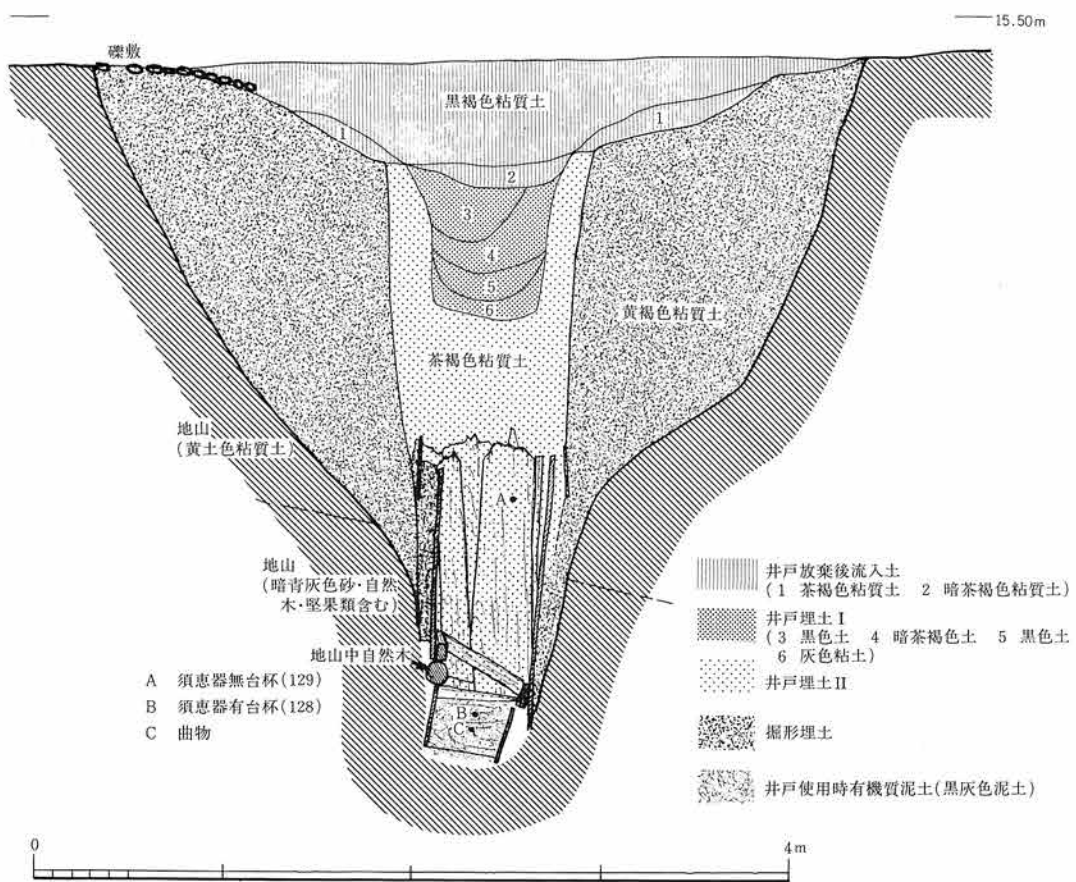
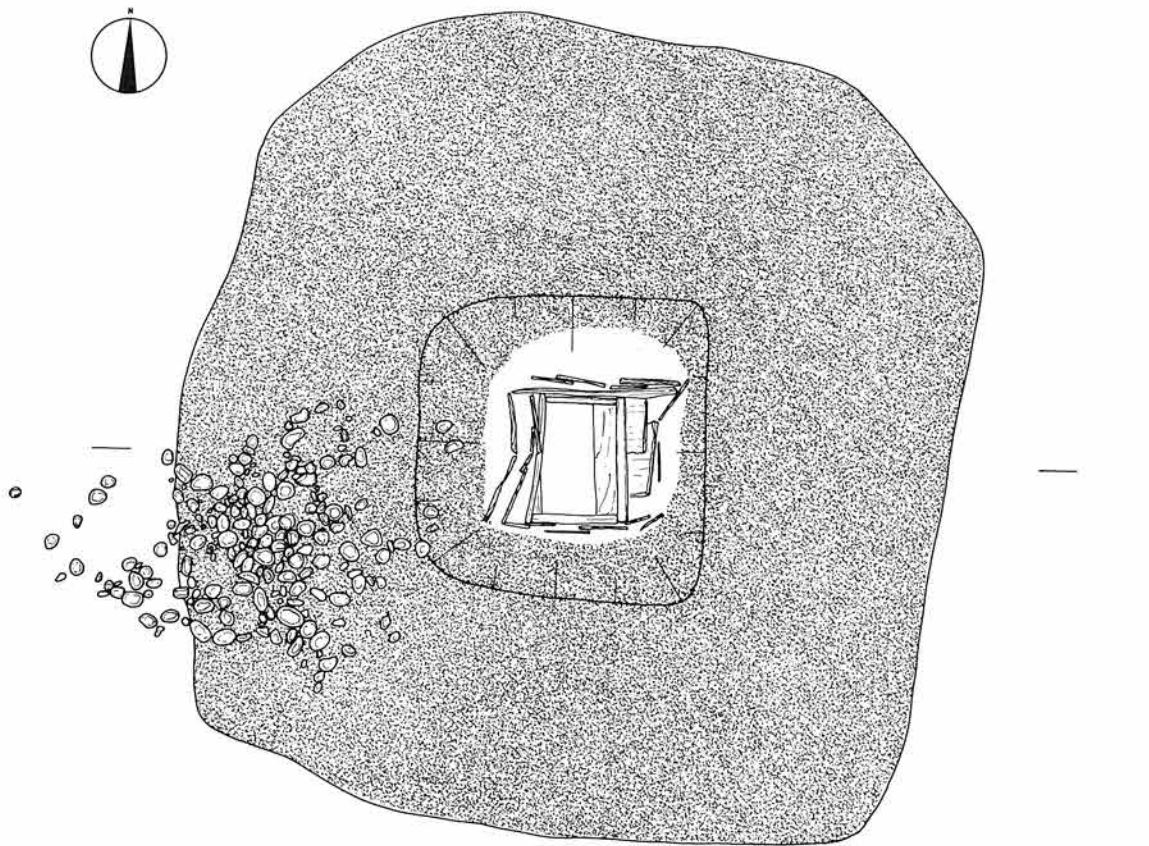
M 4 区にある井戸である。掘形は上面で一辺4.0～4.2mの隅丸方形を呈し、深さは3.7mを測る大規模なものである。掘形の壁は東側で中位にわずかな段をもつ。地山は確認面より約2.5mで粘質土から砂層へと変じる。この砂層中には自然木や堅果類が多く含まれる。この掘形のほぼ中央に木製の井戸枠を据えている。井戸枠の上部は腐蝕して遺存しないが、下部の1.7mが残存していた。これより井戸枠の構造を復原すると第22図のようになる。最下部は幅約40cmで長さ40cmと60cmの板各2枚を組んで枠(下枠)とする。板の組み方は端部に凸部と凹部をつくり合わせたのちに木製の釘で固定する。下枠より上は縦長の側板を立てて、その内側に横位に枠(横枠)をはめ、これと土圧により側板を固定する。横枠で固定された位置に残っていたのは下枠の上のものだけである。これは斜位になって検出されたが、本来水平にすべきところが、地山砂層中の自然木によって斜位にせざるを得なかったものと推定される。この横枠は幅約10cmで、長さ83cmと約60cmの板各2枚を組んだものである。組み方は長い板の両端に約4cm四方の枘穴をあけ、短い板の両端に枘をつくって合せたものであり、組み合わせたものの内法は45×60cmである。横枠はこのほかに井戸枠残存部の最上位に一組が井戸内に落ち込むようにして検出された。これは幅約8cmで、長さは80cmのもので両端は凹部と凸部に加工したもので、組み合わせたものの内法は67×70cmとほぼ正方形となる。この部分の横枠は下の側板の上部内側を固定すると同時に、この上に立てられる側板の下部を固定する機能を果たす。したがって、こうした横枠は本来の井戸枠上端部にも存在したものと推定される。上位の側板は下端がかろうじて残存していた。側板は幅20～25cm、長さ約1.2mで、基本的に一辺に2枚立てて、両者の隙き間を塞ぐように外側に1枚立てる。

井戸枠の外側の掘形内には掘り上げた地山土を埋め土として使用して固める。掘形埋土の上面は中央が約50cmほどすり鉢状にくぼむ。この上面の西側やや南よりには拳大の礫を1～1.5mほどの範囲に敷きつめている。井戸内部の底面は直接地山砂層であり、この上に厚さ30～40cmの有機質を含んだ黒灰色の泥土があった。この泥土は井戸の使用時にたまったものであろう。泥土内からは須恵器有台杯(128)、曲物(第81図)が出土したほか、植物種子(図版147)などが検出された。

井戸内は泥土の上から上面までほぼ茶褐色粘質土が充満していた。この土は下部で滞水のため暗青灰色に変色しているが地山土に類似し、比較的かたくなっていることから人為的な埋め土と考えられ、井戸を放棄する際のものとして推定される。この土層の底面から1.4m上で須恵器無台杯(129)が正置した状態で出土した。これは無傷の完存品であり、同じ層からほかにあまり遺物がみられないことからこの土器は井戸を埋める際に埋置、あるいは埋納されたものと考えられ、井戸の埋め戻しにともなう祭祀が想定される。埋土上部の中央には黒色土と暗褐色土が互層となり、単一層ではないが、井戸内の周縁には茶褐色粘質土の人為的埋土が存在することから、一応人為的な埋土と考えておきたい。掘形埋土上面より上の黒褐色粘質土を主体とする土は井戸の埋め戻しが完了し、放置されたのちに堆積した土



第22図 SE20井戸枠復原模式図



第23図 S E 20 実測図

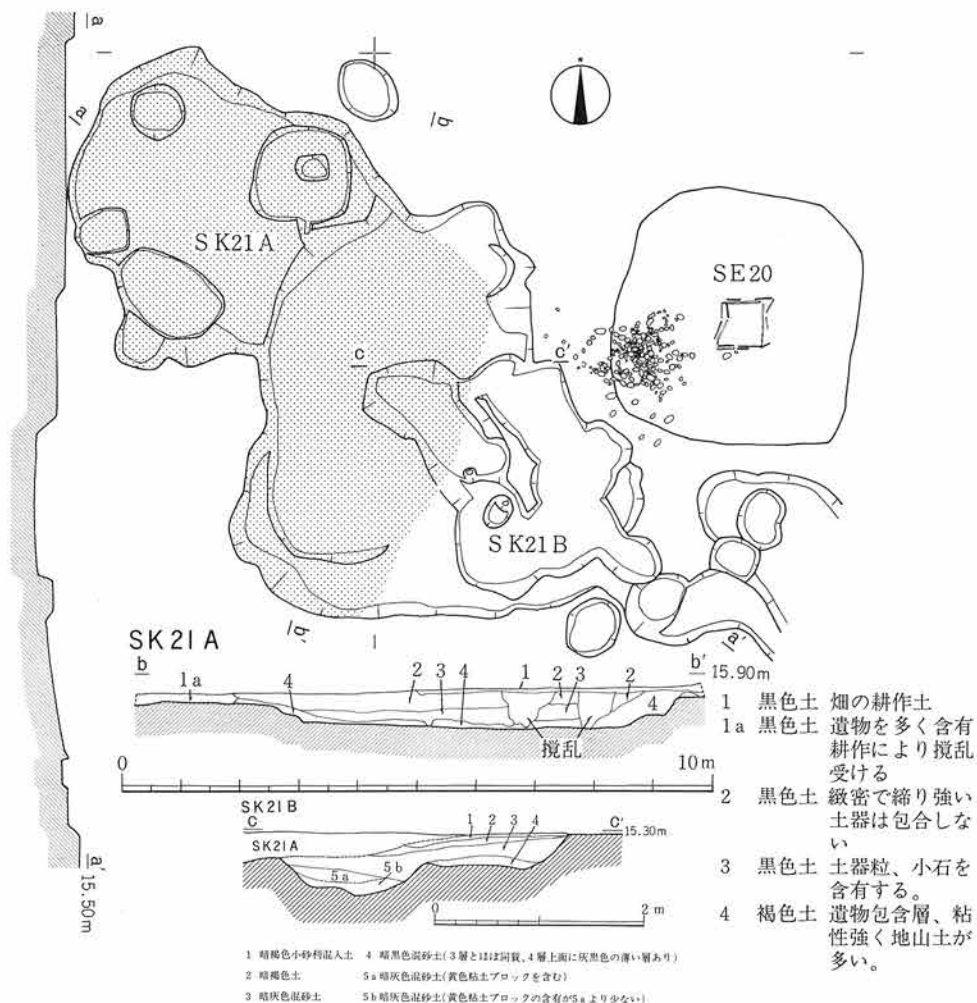
である。この層からは土器が多量に出土した。

井戸は、掘形埋土出土土器がⅣ・Ⅴ期であること、井戸使用時の泥土中の須恵器有台杯がⅣ・Ⅴ期であること、放棄の埋め戻し時の無台杯がⅥ期であることから、9世紀前半頃に構築され、9世紀後半には放棄されたものと考えられる。

SK 21 付 SK 22・SK 68 (図版10・83, 第24図)

L・M4区のSE20の西側にある不整形で大形の土坑である。この遺構の調査は56年度と57年度にわたった。土坑の平面形からすると北西側と南西側に分かれるようであるが、土層からみると区別されなかった。南北7～10m、東西7～8mで、深さは北西側で約20cm、南東側で30～60cmである。北西部とこれに続く南東部西半には上層に黒色土が堆積し、この下位に褐色土があり、底面となる。この褐色土に遺物が多く包含される(SK21A・56年発掘)。これに対し南東部の東半のSE20よりは第24図のように異なった土層となる。すなわち、全体に固くよしまっており、色調も相対的に灰色がかかる(SK21B・57年度発掘)。SK21Bの最上層(1)は小砂利が混り、井戸の礫敷部と同様であることから、井戸が使用されていた時にはすでにSK21Bの部分は埋っており、踏み固められたものと考えられる。遺物は須恵器を主体に多く包含される。遺物の表記は56年発掘の黒色土・褐色土の遺物を「上層(A)」、57年発掘のものを「下層(B)」として区別した。遺物の時期はいずれもⅢ期を主体とする。

SK 21の東側に小形の土坑SK 22とSK 68がある。これらは浅く、出土遺物はごく少ない。



第24図 SK 21 A・B実測図

SK 24 (図版10・82)

L 3区にある円形の土坑である。上端の径は約4 mで、すり鉢状にくぼみ深さは1.3 mである。覆土はいずれもレンズ状に堆積する。最上層は黒色土が約35 cmの厚さでその下に2層を介して暗黒色の木炭を多く含む層が薄くあり、その下は基本的には黄褐色粘土で地山土を主体とする。この黄褐色粘土層は自然堆積ではなく、人為的に埋めた土と考えられ、この層に含まれる遺物は比較的一括性に富み、遺物の表記はこれを下層とし、今池一括資料の基準に用いた。時期はⅡ期であり、8世紀の中葉頃の年代観が与えられる。

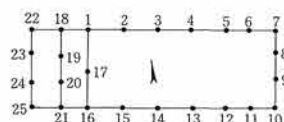
SK 25 (図版10・82)

K 3・4区にある不整形の浅い土坑である。南北約5 m、東西約7 mで、深さは30~40 cmであり、底面にわずかな凹凸がみられる。覆土は暗黒色土の単層で、部分的に黄褐色粘土ブロックを含む。遺物の出土量はごく少ないが、時期はSK 24と同一とみられる。

SB 41 (図版8)

J 2区付近にある8間(16.0 m)×3間(5.2 m)の東西棟建物(東偏5度)

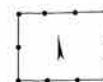
である。桁行8間のうち西側2間の2列の柱穴列(18~21・22~25)は柱掘形がほかのものよりごく小さく、廂かそれに類するものと推定される。したがって身舎は桁行6間(12.2 m)であり、その西側柱間は2間となる。東妻は3



間であるが、この柱穴は小さい。柱間は梁間は3間・2間とも等間であり、桁行は身舎でも東側2間が1.5 mで短く、ほかは2.2 mと長い。西側の廂かと思われる2間の出は身舎から1間目が1.8 m前後、2間目が2.0 mである。柱掘形は大きなもので一辺60~80 cm、深さ40~70 cmの方形、小さいもの(8・9・18~25)で一辺20~40 cm、深さ20~60 cmの方形である。掘形埋土は地山土を主体とし、よくしまる。柱痕跡は径約25 cmである。SB 40・SB 44と重複するが、柱穴の重複はない。

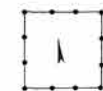
SB 40 (図版8)

J 2区にある東西棟建物(東偏8度)であり、SB 41と一部重複する。桁行は3間(5.7 m)で、梁間(4.4 m)は西妻が2間、東妻が3間となり、柱間はすべて等間である。柱掘形はやや丸味をもち、径50~70 cm、深さ30~55 cmである。柱痕跡は径約20 cmであり、掘形埋土は地山土を主体とする。



SB 44 (図版8)

J 2区付近にある東西3間(5.05 m)×南北3間(5.0 m)の建物で、SB 40の東側に接して並ぶ位置にある。建物方位は東偏8度でSB 40と同じ。柱掘形は一辺50 cmほどの方形で、深さは30~50 cmである。掘形埋土は地山土を主体とし、柱痕跡は径約15 cmである。SK 37と重複するが前後関係は不明である。



SK 37 (図版8)

J・K 2区にある不整形で浅い土坑である。東西に長い楕円形に近い平面形で、長軸約5 m、短軸約2.5 mで、深さは約40 cmである。SB 44と重複するが前後関係は不明である。SB 41の後方に位置し、これにともなう塵芥穴の可能性が考えられる。土師器長胴甕(44)などが出土しており、遺物はⅠ~Ⅱ期と考えられる。

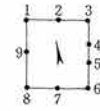
SK 47 (図版8)

J 2区にある土坑で、北西部は調査区外へのびる。調査範囲内では一辺2.5 mほどの隅丸方形の平面形

と推定され、深さは20～30cmである。覆土は暗褐色土で、遺物はさほど多くないが、SK 24よりはやや古いと思われる。

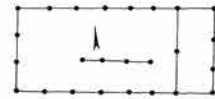
SB 43 (図版 8・82)

K 3 区付近にある建物で、東西は2間(4.4m)、南北(4.7m)は西妻2間、東妻3間となる。方位は東偏9度である。柱間はいずれも等間である。柱掘形は東妻がやや小さい。大きいものは一辺70～90cm、小さいものは一辺50～60cmで、深さは40～70cmである。柱痕跡は径約20cmである。



SB 42 付 SA 72 (図版 8・82)

J・K 3 区にある7間(13.0m)×3間(5.6m)の東西棟建物(東偏8度)で、東に廂をもつ。身舎の東は2間である。柱間は梁間が身舎、廂とも3間・2間等間であるが、桁行は西3間が1.9m、東3間が1.6mとなり、廂の出は2.45mである。この建物の中央やや南よりには東西3間の柱列(SA 72)がある。これは南側柱列と1.9mの間隔で、柱穴の位置もこれとほぼ一致することや、柵とするには柱掘形がやや大きいことからSB 42と関連する間仕切りなどの可能性が高い。柱掘形は身舎が一辺80～100cm、深さ40～80cmの方形で埋土は地山と黒色土の互層となり、よくしまっている。柱痕跡は径約25cmである。東廂の柱掘形はほかより相対的にやや小さく、身舎の東入側柱はこれよりも小さい。



SB 82 (図版 8)

J 2 区にある2間(4.7m)×2間(3.9m)の東西棟建物(東偏約3度)である。柱間寸法は等間ではなく、平面形もやや歪みをもつ。柱掘形は丸味をもち、径20～50cm、深さ20～50cmである。柱痕跡は径15cmである。

SB 39 (図版 8)

J 2 区にある3間(4.65m)×2間(4.00m)の東西棟建物(東偏11度)であり、SB 82と重複する。柱間は桁行・梁間ともほぼ等間である。柱掘形は一辺30～50cmの方形で、深さは30～70cmである。

SB 38 (図版 9)

K 1・2 区にある3間(4.9m)×2間(4.05m)の東西棟建物(東偏10度)である。柱間は桁行・梁間ともほぼ等間である。柱掘形は一辺50～60cmの方形で、深さは40～60cm、柱痕跡は径約15cmである。掘形埋土は地山土が多い。

SB 46 (図版 9)

K 2 区にある2間(5.15m)×2間(3.9m)の東西棟建物(東偏11度)である。柱間はいずれもほぼ等間である。柱掘形は南側柱列がいずれも南北に長い方形で、70×40cm、ほかは一辺40～50cmの方形で、深さは20～60cmである。柱痕跡は径約15cmである。

SB 45 (図版 9)

K 2 区にある建物であるが、東側は攪乱などにより不明確である。南北2間(3.9m)×東西2間(3.6m)以上である。柱掘形は一辺40～50cmの方形で、深さは20～40cmと浅い。

SK 50 (図版 8)

J 2・3 区にある不整形の浅い土坑である。南北に長く、8m×4mほどで、深さは10cm前後である。覆土は暗褐色土で、遺物の出土量はさほど多くはないが、SK 24とほぼ同時期のものと思われる。

SK 49 (図版 8)

SK 50の南側、J 3 区にある浅い土坑で、SK 50とほぼ同様の覆土・出土遺物である。

SK 73 (図版 8)

I 2 区にある 2 m × 1.5 m の楕円形の土坑で、深さ 35 cm である。出土遺物は少ない。

SB 51 (図版 8)

I 4 区にある建物で、東側を検出したのみで、全容は不明である。南北 2 間 (3.5 m)、東西 2 間以上で、柱穴規模・柱間寸法からみて、3 間 × 2 間程度の東西棟と推測される。柱間は梁間で等間である。柱掘形は一辺約 40 cm の方形で、深さは 30 ~ 40 cm である。掘形埋土は黒色土が多く混じる。

SB 81 (図版 8)

J 4 区にある 3 間 (5.05 m) × 2 間 (4.6 m) の東西棟建物 (東偏 10 度) である。柱間はいずれもほぼ等間であるが、さほど規格性はない。柱掘形は一辺 30 ~ 40 cm の方形で、深さ 40 cm 前後である。SB 53 より古い。

SA 48 (図版 8)

J 4 区にある 3 間の東西方向の柵で、SB 81 の北側柱列につらなる位置にある。柱間は 1.7 m 等間であり、柱掘形は一辺 20 ~ 40 cm で、深さは 20 ~ 35 cm である。

SB 53 (図版 8)

J 4 区にある東西 2 間 (4.0 m) × 南北 (4.5 m) の建物で、方位は東偏 6 度である。南北方向の柱は西側が 2 間、東側が 3 間であり、SB 43 と形態が類似する。柱間はそれぞれ等間である。柱掘形は東側の 2 個 (4・5) をのぞけば、一辺 80 ~ 100 cm で、深さは 50 ~ 80 cm と建物の平面形に比して大きい。小さいものは一辺 40 cm 前後で、深さは 30 ~ 40 cm である。掘形埋土は黒色土と地山土の混合で、柱痕跡は径約 20 cm である。柱穴 2 は SB 81 と重複し、SB 53 が新しいことがわかる。



SA 78 (図版 8)

J 4 区にある 4 間の東西方向の柵である。柱間寸法は不揃いである。

SK 56 (図版 8)

J 4 区にある 3 m × 5 m ほどの楕円形の土坑で深さは 43 cm である。遺物は少ないが、IV 期ないし V 期である。

SK 58 (図版 11)

I・J 5 区にある一辺約 1.6 m の方形の土坑で、西側へさらにのびる。壁は直立に近く、覆土は茶褐色で遺物はごく少ない。

SB 52 (図版 8)

J・K 4 区にある 3 間 (5.7 m) × 2 間 (4.3 m) の東西棟建物 (東偏 10 度) である。柱間はいずれもほぼ等間である。柱掘形は一辺 20 ~ 40 cm の方形であるが、これより小さいもの (南側柱列東第 2 柱) もある。深さは 10 ~ 55 cm である。

SB 28 (図版 8・10)

K 4 区にある 3 間 (5.0 m) × 2 間 (4.8 m) の東西棟建物 (東偏 12 度) で、東側 1 間目の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴が存在する。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は一辺 35 ~ 50 cm の方形で、深さ 40 ~ 60 cm である。

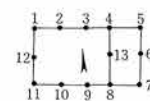


SB 66 (図版 8・10)

K 4・5 区にある 3 間 × 2 間の東西棟建物であるが、北側柱列の柱穴が不明確なところがあり、また平面形がかなり歪むなど、建物の復原に問題を残す。

SB 55 (図版 11)

J 5区にある4間(6.9m)×2間(3.65m)の東西棟建物(東偏4度)である。東第2柱の棟通りの中央にはやや小さい柱穴(13)があり、また東側1間の柱間寸法が長いことから、間仕切りないしは廂と考えられる。この部分の形態はSB 42と類似するが、東側柱列の柱穴(5~7)は大きさに差がなく、廂とみるのは適当でないかもしれない。柱間寸法は梁間が等間で、桁行は西より3間が1.65m、東側1間が2.0mである。柱掘形は西妻のもの(12)と間仕切りかと思われるもの(13)が小さい。ほかは一辺80cmほどの整った方形で、深さは70cm前後である。掘形埋土は黒色土と地山土の混じりでありはまりはない。柱痕跡は径約20cmである。SB 55はSB 57より新しく、SB 59よりは古い。



SB 57 (図版11・83)

J・K 5区で、SB 55の東に接してある3間(5.0m)×2間(4.3m)の東西棟建物である。柱間はいずれもほぼ等間である。柱穴はそれぞれ重複しており、同じ規模で建て替えがあったものと思われるが、それぞれの柱痕跡の位置が不明瞭である。方向は東偏6度くらいであろうか。

SB 59 (図版11)

SB 55・SB 57に重複する建物で、東西2間(3.5m)×南北2間(3.5m)である。柱間はいずれもほぼ等間である。柱掘形は大きさが不揃いであり、一辺30~60cmの方形で、深さ30~45cmである。掘形埋土は黒色土が多く混じるしまりのない土である。SB 55より新しい。

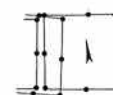
SB 75・SB 76・SB 77 (図版11)

J 5・6区の同一地点に重複して存在する建物で、いずれも3間×2間の南北棟建物であり建て替えが明確にうかがえる。南北棟建物はC地区に限らず少数例である。3棟とも規模はほぼ同一で、桁行4.7m、梁間3.8mである。柱間はずべてほぼ等間となる。建物の方位はSB 75が東偏5度、SB 76が西偏3度、SB 77が西偏2度である。建て替えの順序はSB 75→SB 76→SB 77である。柱掘形は一辺40~50cmの方形で、深さは30~50cmである。柱痕跡は径約15cmである。



SB 74 (図版11)

J 6区付近にある2間(5.45m)×2間(4.9m)の東西棟建物(東偏7度)である。この付近は柱穴が多く、調査区の端にあたっており、建物の復原と柱穴の切り合い関係の追究に問題を残した。SB 74は柱間がいずれも等間で、柱掘形は一辺50~70cmの方形で、深さ40~50cmである。柱痕跡は径約20cmである。



SB 83 (図版11)

I 6区付近、SB 74の東側で重複する南北2間(5.3m)×東西2間以上の建物である。

SB 84 (図版11)

SB 83と重複する南北2間(4.2m)の建物で、大半は調査区外へのびる。

SD 61 (図版11)

I~K 7区にある東西溝である。幅35~75cm、深さ15~20cmである。遺物はほとんど出土せず、中世溝SD 1に切られている。

SB 60 (図版12)

K 7区にある3間(4.3m)×2間の東西棟建物(東偏1度)である。梁間の長さは西妻でやや長く、4.3mを測る。柱間ほぼ等間で、柱掘形は一辺40~60cmの方形で、深さ30~50cmである。掘形埋土は地山土を

含む黒色土で、柱痕跡は径約10cmである。

SK 10 (図版12・86)

K 7 区にある円形の深い土坑である。径は上端で約1.8mで、深さ35cmで一つの段があり、これより下は径が1.2mとなる。1.0mで湧水し、深さは約1.5mである。井戸枠のない井戸の可能性はある。覆土は最上層で黒褐色土で、そのほかは茶褐色粘土で、地山土の埋め土と思われる。遺物はほとんど出土していない。

SB 9 付 SK 62 (図版12)

K 8 区付近にある2間(5.0m)×2間(4.4m)の東西棟建物(東偏1度)である。柱間はほぼ等間で、柱掘形は一辺40~50cmの方形で、深さ30~40cmである。柱痕跡は径約10cmである。SK 62はこれより新しいごく浅い落ち込みである。

SB 69 (図版14)

L 9 区にある3間(4.75m)×2間(4.55m)の東西棟建物(西偏5度)である。柱間は規則的に等間隔とはなっていない。柱掘形は一辺30~50cmの方形で、深さは20~60cmである。掘形埋土は比較的良好である。柱痕跡は径10~15cmである。

SB 7 (図版15)

M 9 区にある2間(4.1m)×2間(5.2m)の東西棟建物(方位に一致)であり、柱穴からみて、同じ規模で2回以上の建て替えがあったものと推定される。しかしながら、この部分の調査が二ヶ年にわたったことや北側柱列が畑により大きく攪乱を受けていたことなどから、詳細については解明できなかった。柱掘形は一辺80~100cmほどの方形で、建物の平面規模に比して大きく、深さも60~80cmある。掘形埋土は地山土を固くつめている。なお、この建物西方にある短い溝(SD 16)は位置とその方向からみて、同時に存在した可能性がある。

SD 16 (図版15)

M 9 区にある短い南北溝である。幅50cm、長さ4.5mで、深さは約30cmである。出土遺物はごく少ない。SB 7と関連する可能性があり、M 8・9区付近の建物を画す性格も想定される。

SB 1002 (図版15・108)

M 8 区にある2間(3.8m)×2間(2.7m)の東西棟建物(西偏約10度)である。柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.3mである。柱掘形は一辺50~60cmの方形で、深さは30~40cmである。掘形埋土は黒褐色土で、柱痕跡は径約20cm前後のものが多い。掘形埋土より土師器片が出土している。

SB 1003 (図版15・108)

M 8 区にある2間(2.5m)×3間(5.0m)の南北棟建物(西偏約4度)であるが、桁行はさらに北側へ延びる可能性がある。柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.3mで桁行が長い。柱掘形は一辺40~60cmのやや丸味をおびた方形で、深さは45~50cmであるが、南妻から1間目の柱穴のみ深さ16cmである。掘形埋土は黒褐色土で柱痕跡は径13~16cmである。掘形埋土から土師器片が若干出土する。

SK 1004 (図版15・108)

N 9 区にある方形の土坑である。長辺1.1m、短辺90cm、深さは83cmである。底面は平坦で埋土は上面から底面まで暗褐色土で炭化物を含んでいる。埋土中より土師器片が出土した。

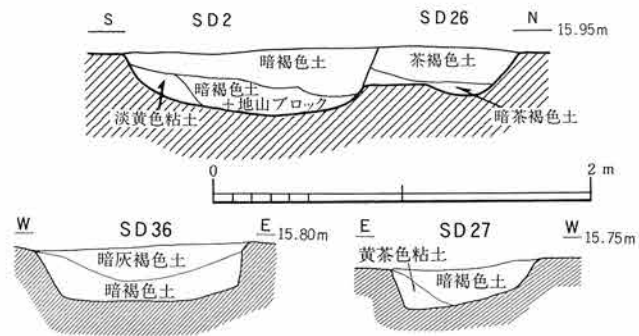
SK 14・SK 15 (図版10)

L 5 区にある不整形の浅い土坑である。深さは両側がやや深く20cmほどで、壁の立ちあがりはしっかりしている。底面は平坦ではない。覆土は上層が黒色土、下層が暗褐色土となり、遺物は黒色土中から出土

する。遺物出土量は多くないが、SK 24とほぼ同じ時期と考えられる。

SD 26 (図版12・14・86)

I 7区からJ 9区にのびる南北方向の溝で、中世溝SD 2に切られる。直線的ではなく、幅も75~125cmと一定しない。深さは20~30cmである。この溝はB地区の北端へのびるようである(SD 608)が、不明確である。覆土は上層が茶褐色土、下層が暗茶褐色土である。出土遺物は少ない。時期は平安時代である。



第25図 C地区溝断面図

SD 3 (図版13)

C地区からB地区北端部にのびる大規模な溝である。SD 4・SD 5によって切られる。この溝は当初地山の判断を誤っていたために、C地区については下層をまったく発掘しないまま調査を終了してしまった。このため詳細な記述はB地区の項にゆずる。溝の東側には大きな湾入部が一ヶ所ある。これは、B地区にもあるような溝にともなうものと考えられる。

SD 36 (図版13)

H 9・10区にある南北溝でB地区南辺部までのびる(SD 611)。幅約1m、深さ30cmで、地面のたちはがりは東側が垂直にちかい。覆土は上層が暗灰褐色土で、下層が暗褐色土である。出土遺物は少ないが、SD 4・SD 5・SD 6に切られ、時期は平安時代である。

SD 27 (図版13)

G 10区にある南北溝でB地区北辺部へつらなる(SD 669)。幅70~80cm、深さ約20cmで、底面は比較的平坦である。覆土は暗褐色土で西側に黄茶色粘土の流れ込みがある。SD 5・SD 6によって切られる。出土遺物はごく少ないが、平安時代と考えられる。

b) B 地区

B地区は南北約300mの延長距離をもち、遺構の時期などのあり方もやや複雑である。しかし、奈良・平安時代前半期の遺構のうち、建物は南辺部の南北約100mの間に集中し(B建物群)、後半期の遺構はおもにこの範囲外にある。南辺部の建物群はB地区南端にちかい28・29区列にある東西溝SD 113と22区列にある東西溝SD 321によってそれぞれ南北を画されている。この範囲外は遺構の分布は比較的少なく、後半期のものが主となる。畝状小溝はほぼ全域に分布するが、これについては個々にとりあげず、一括して述べることにする。記述の順序は、古い時期の遺構が当地区の南辺部に集中することと、調査が一部をのぞいて当地区の南から北へ進んだことを考慮して、基本的には南側からはじめることにする。

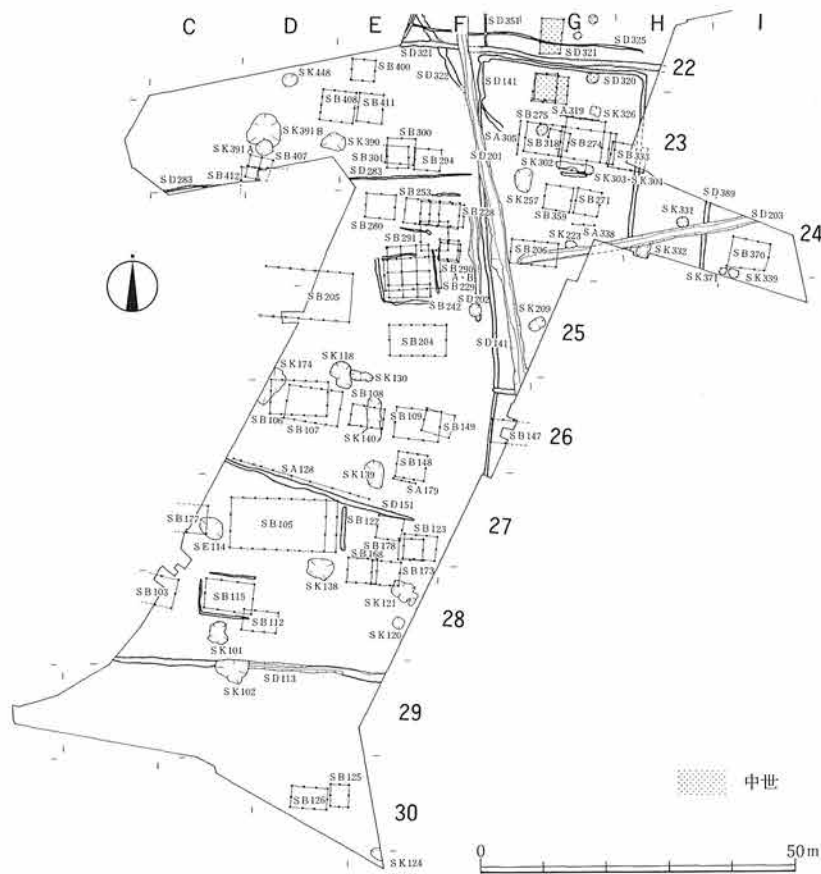
SD 113南側

SB 125 (図版28)

D 30区にある2間(3.5m)×2間(3.0m)の建物で、平面形はかなり歪む。

SB 126 (図版28)

D 30区にある3間(5.8m)×2間(3.4m)の東西棟建物(東偏6度)である。柱間は等間ではなく不揃いである。柱掘形も不揃いであり、復原にやや問題があることも考えられる。掘形埋土は暗褐色土であ



第26図 B地区南側遺構配置図

る。SB 125・SB 126とも奈良・平安時代後半期に属する。

SK 124 (図版28)

E 30区, 調査区東端にある土坑で全容は不明である。深さ40cmで覆土は黒色土である。出土遺物はVI期かこれよりやや新しい。SB 125・SB 126とほぼ同時期と考えられる。

SD 113～SD 321の間 (図版6・87)

SD 113 (図版27, 第27図)

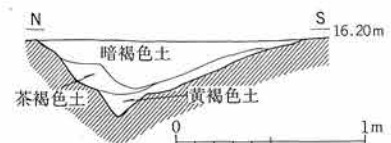
B 28区からE 29区にのびる東西溝で, 奈良・平安時代前半期の建物群 (B建物群) の南限を画す。幅約1.2m, 深さ20～40cm, 断面形はたちあがり垂直でない。覆土は上層が暗褐色土で, その下はこれより地山土を多く含む茶褐色ないしは黄褐色を呈する。出土遺物

はさほど多くはないが, IV期を下限とする。SK 102によって切られる。溝方位は東偏3～4度であり, SB 105・SB 106とほぼ一致する。

SK 101 (図版27・104, 第28図)

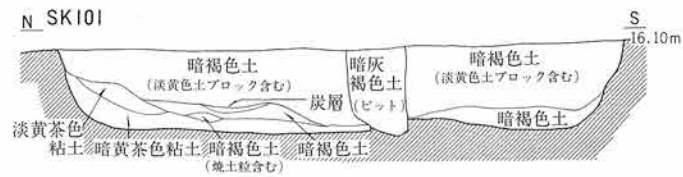
C 28区にある一辺3.5mの隅丸方形の土坑である。東側は浅い段があり, 西側が深く, 深さ40～50cmで, 底面はほぼ平坦である。覆土はほとんどが暗褐色土で, 下面にこれより明るい土があり, これらの間に炭層と焼土粒が介在する。上部の暗褐色土は地山ブロックと思われる淡黄色土を含み, 人為的な埋め土と考

2) 東西溝の方位は北を基準とするために溝の方向と直交する方向で測定表示した。



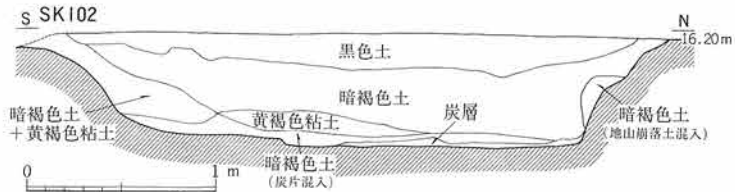
第27図 SD 113断面図

えられる。出土遺物は比較的多く、SK 102とほぼ同時期と思われる。なお、径30cmのピットがこれを切り込んでいる。



SK 102 (図版27, 第28図)

C 29区にある一辺3～4mの隅丸方形の土坑で、形態上SK 101と共通する。東側に浅い段があり、西側が深く、深さ40～60cmである。覆土の最上層は自然堆積かと思われる黒



第28図 SK 101・SK 102断面図

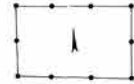
色土であり、その下は暗褐色土が厚く、底面には炭層がみられる。出土遺物は多く、Ⅳ期の基準資料である。SD 113よりも新しく、建物群の変遷の一画期を示す資料として重要である。

SB 103 (図版27)

C 28区にある梁間2間(4.65m)、桁行2間以上の東西棟建物(東偏11度)であり、西側は調査区外へのびる。柱間は梁間が等間であり、桁行は1間2.5mである。柱掘形は一辺70～85cmの整った方形で、深さ70～80cmである。掘形埋土は地山土を主体とし、柱痕跡は径約25cmである。

SB 115 付 SD 104・SD 111 (図版27・88)

C 28区にある3間(7.6m)×2間(4.8m)の東西棟建物(東偏10度)であり、北側と南・西側に雨落溝かと思われる溝がある(SD 111・SD 104)。梁間は西妻が4.5m、東妻が4.8mで、平面形がやや歪む。柱間は西妻がほぼ等間となるが、東妻は柱穴をもたないか、あるいは外方へとび出すような形をとり、桁行は北側で、西より2.3m・2.5m・2.8mと不揃いである。建物の北側にあるSD 111は長さ約8m、幅25～40cm、深さ7～27cmである。西側と南側にあるSD 104は一本の溝が直角に屈折したもので、西側は長さ約5.5m、南側は約8.5mで、幅は30～45cm、深さ19～40cmである。出土遺物はSD 104に多く、製塩土器が含まれる。



SB 112 (図版27)

D 28区にある3間(5.65m)×2間(3.3m)の東西棟建物(東偏6度)である。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は一辺35～50cmの方形、深さ40～65cmである。

SB 105 付 SD 152 (図版26・87・105)

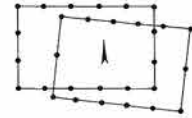
C・D 27区にある9間(16.95m)×3間(8.25m)の東西棟建物(東偏4度)で、東側に廂をもつ。当遺跡のなかでも最大級の規模をもち、中心的な建物と考えられる。柱間寸法は身舎の桁行(15.05m)と東入側が等間で、西妻は北より2.8m・2.2m・3.2mとなる。廂の出は1.9mで柱間は等間である。柱掘形は桁行柱が長方形で、80cm×100cm、深さ70～90cmである。妻の柱はこれより小さく、一辺50～60cm、深さ50～60cm、廂の柱はさらに小さく、一辺40～50cm、深さ約30cmである。掘形埋土は地山土と黒色土の互層となっており、よくしまる。柱痕跡は径約25cmである。この建物の西第2柱の棟通りには、南北それぞれの柱列から1.8mの位置に各1個ずつ柱穴があり、これをSB 105と関連するとみれば間仕切りか廂とみられる。廂とした場合は桁行7間の身舎に東西1間ずつの廂をもつと考えられる。また、建物の東側にある南北溝SD 152は位置関係からみて雨落溝などSB 105に関連する溝と考えられる。この溝は



長さ約7m、幅約50cm、深さ約20cmで、覆土は暗褐色である。出土遺物は少量ながらI期であり、SB 105の時期を示唆する。この溝は畝状小溝によって切られる。SB 105の北方に位置するSB 106とは方向が一致し、SB 105の身舎東側柱列とSB 106の東妻柱列が一直線上に位置することから、同時に計画的に建てられたことがうかがえる。SB 105の南側柱列とSB 106の南側柱列の距離は21.3m、SB 105南側柱列とSD 113は約18mである。

SB 106 付 SD 129 (図版26・87)

D26区にある5間(9.1m)×3間(5.4m)の東西棟建物(東偏4度)で、南方のSB 105と互いに関連する位置関係にある。柱間はいずれも等間で、約1.8mとなる。柱掘形は一辺70~80cmの方形で、深さは60~80cmである。掘形埋土は地山土と黒色土の互層で、よくしまる。SK 174とSB 107と重複し、ともにこれらよりも古い。



掘形埋土から須恵器有台杯(564)が出土している。建物東方の南北の小溝SD 129はこの建物と関連することも考えられる。

SB 107 (図版26・105)

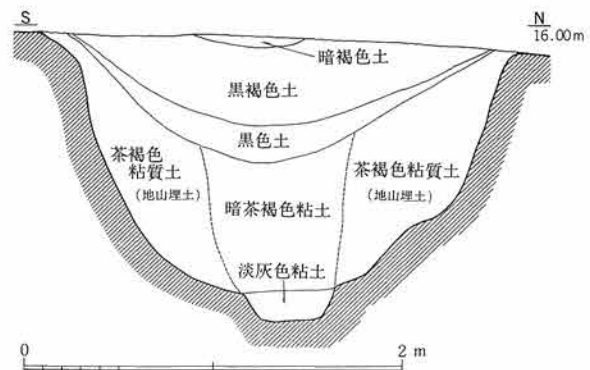
D26区にある5間(8.6m)×2間(5.3m)の東西棟建物(東偏8度)で、SB 106の柱穴を切る。柱間はいずれも等間である。柱掘形は柱筋にそって長く、60cm×100cmほどの長方形で、北側柱列の柱形の東側には段がある。この段は建て替えによるものではない。深さは60~80cmで、柱痕跡は径約20cmである。掘形埋土は上部に地山土、下部に黒色土を主につめている。柱痕跡部は底面より約15cmくぼむ。北側柱列第5柱掘形埋土より黒色土師器杯(568)が出土した(図版105-3)。

SK 174 (図版26)

D26区にあり、SB 106を切る土坑である。調査区西端に位置し、全容は不明であるが、確認されるところでは南北約6m、深さ15~20cmである。覆土は黒色土、黒褐色土を含む暗褐色土で、出土遺物はIV期が含まれる。

SE 114 (図版27, 第29図)

C27区のSB 105西方にある井戸である。掘形は一辺約2.5mの方形で、深さは最深部で約1.5mである。井戸枠はまったく残存していなかったが、掘形断面の所見より一辺75cmの方形の井戸枠が存在したものと推定される。覆土上層の暗黒褐色土、黒褐色土、黒色土は自然流入土と考えられ、これより下で掘形埋土と井戸内埋土がみられる。底面は井戸枠内部にあたる部分のみが約15cmほど深くくぼんでいる。井戸内埋土(暗茶褐色粘土)は掘形埋土(茶褐色粘質土)と質は類似するが、炭化物と黒色土を含んでいる。なお、底部には井戸の使用を示すような黒色泥土がなく、井戸として機能したものか不明である。掘形埋土よりV~VI期の須恵器無台杯、土師器杯が出土している。



第29図 SE 114断面図

SB 177 (図版27)

C27区にある建物であるが、調査区西端で検出されたため全容は不明確である。南北2間(4.3m)で、東西は2間(3.15m)を確認している。SE 114により柱穴が切られる。

SB 108 (図版26・105)

E 26区にある3間(5.10m)×2間の東西棟建物(東偏7度)である。梁間長が東西で異なる(東妻5.4m・西妻5.2m)。柱間寸法は等間ではなく不揃いである。柱掘形は一辺約40cmで、深さ40~50cmである。SK 140との前後関係は把握しえなかったが、両者の伴出遺物からみて、SK 140が古いと考えられる。

SK 140 (図版26)

E 26区にある南北約6.5m、東西約2mの隅丸の長方形の土坑で、深さ約70cmである。覆土は暗灰褐色で比較のかたい。I期の土器(222~226)が出土している。

SB 109 (図版26・88・105)

E 26区にある3間(7.0m)×2間(4.85m)の東西棟建物(東偏6度)である。柱間寸法はいずれも等間である。柱掘形は一辺60~70cmの方形で、深さは60~80cmである。掘形埋土は地山ブロックを含む黒色土で、柱痕跡は径約15cmである。この建物にはこれより新しいSB 149が重複する。

SB 149 (図版26)

E・F 26区に、SB 109と重複する2間(4.55m)×2間の東西棟建物である。東妻の柱穴はなく、梁間長は両側で差がある(東妻3.7m・西妻3.5m)。方位は東偏約20度である。SB 109より新しい。柱掘形は40~50cmの方形である。

SB 147 付 SD 210 (図版26)

F 26区、調査区東端にある建物で、全容は不明である。梁間2間(3.8m)で桁行2間(3.35m)以上である。柱間寸法は梁間が等間であるが、南側柱列は不等のようである。柱掘形は一辺50~60cmの方形で、柱痕跡は径約20cmである。SD 141の覆土を掘り込んでいる。SB 147の北側にある小さな東西溝SD 210もSD 141を掘り込んでおり、位置関係からみて、SB 147の雨落溝とも考えられる。

SB 148 (図版26・89)

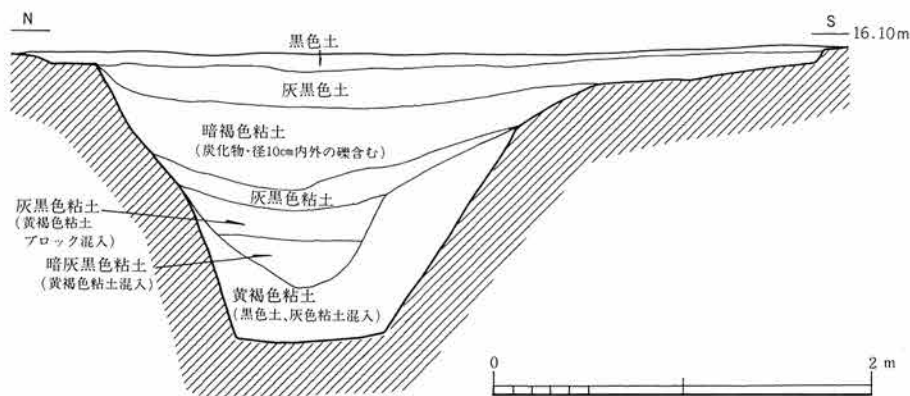
E 26・27区にある3間(4.7m)×2間(3.9m)の東西棟建物(東偏11度)である。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は一辺40cm程度の方角、深さ30~40cmである。

SA 179 (図版26)

E 27区、SB 148の南にある3間(3.6m)の東西方向(東偏14度)の柵である。柱間寸法は1.2m等間である。柱掘形は一辺約25cmの方角で、深さ25cmである。

SK 139 (図版26, 第30図)

E 26・27区にある土坑である。平面形は径2.5mほどの円形で、深さは1.5mを測り、この南側に浅い段がつく。覆土最上層の黒色土は自然堆積と考えられるが、その下層は地山土と類似した土のブロックが



第30図 SK 139断面図

主で、比較的よくしまっている。遺物は多くはないが、Ⅱ期前後と考えられる。この土坑はSE 114と形態、規模が類似し、井戸の可能性もすてきれないが、そうした場合でも使用された可能性は乏しい。

SK 130・SK 118・SK 117 (図版25)

いずれもSB 106の北東側にある浅い土坑で、覆土は暗褐色土である。出土遺物はⅠ～Ⅱ期である。SB 106と関係する可能性が強い。

SA 128 (図版26)

C 27区からE 28区にかけてある6～7間の柵である。方向は東偏17度でかなりふれが大きい。柱間は3.2mである。柱掘形は径30cmほどの円形で、深さは30～40cmである。方向が南側のSD 151とほぼ一致し、同時期のものと考えられる。

SD 151 (図版26)

SA 128の南にこれと平行して存在する幅約1m、深さ約10cmの浅い溝である。出土遺物は土器細片が少量である。

SB 122 (図版26・88・89)

E 27区にある2間(4.1m)×2間(3.5m)の東西棟建物(東偏9度)である。柱間はほぼ等間で、柱掘形は一辺30～40cmの方形、深さ30～45cmである。

SB 123 (図版26・88)

E 27区のSB 122の東南にある2間(4.0m)×2間(3.3m)の東西棟建物(東偏2度)である。柱間寸法はやや不揃いである。柱掘形は一辺40cm前後の方形で、深さ30～40cmである。SB 122との関係ではSB 123が古い。

SB 178 (図版26・88)

E 27区のSB 123と重複する3間(5.0m)×2間(3.8m)の東西棟建物(東偏5度)である。西妻の柱穴は存在しない。柱間寸法はいずれもやや不揃いである。柱掘形は一辺20～40cmの方形で、深さ20～35cmである。

SB 168 (図版27)

E 27・28区にある3間(4.7m)×2間(3.7m)の東西棟建物(東偏5度)である。柱間寸法は梁間が等間、桁行は北側柱列で西より1.75m・1.2m・1.75mとなり、南側柱列は東第2柱が存在しない。柱掘形は一辺30～45cmの方形で、深さ20～30cmである。柱痕跡は径約10cm強である。

SB 173 (図版27・89)

E 27・28区にある3間(4.5m)×2間(3.7m)の東西棟建物(東偏8度)である。柱間寸法や柱掘形の大きさがまちまちである。掘形埋土は黒色土が多い。

SK 138 (図版27)

D 27・28区にある3m×5mほどの楕円形の土坑で、深さは約50cmである。壁のたちあがりは北側がなだらかで、南側が垂直にちかい。覆土は暗褐色土で、出土遺物は少量である。時期はⅡ期前後であろう。

SK 120 (図版27)

E 28区にある径1.8～2.0mの円形の土坑で、深さは約40cmである。覆土は上下2層あり、上層が黒色土、下層が黄褐色粘土である。遺物は上層から出土しており、須恵器小形長頸壺底部(216)が含まれているがさほど多くはない。遺物はSK 102とほぼ同じ時期(Ⅳ期)である。

SK 121 (図版27)

E 28区にある不整形の浅い土坑である。底面にはいくつかのくぼみがある。出土遺物の時期はSK 120と同様である。

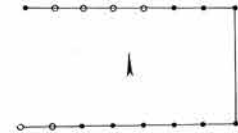
SB 204 (図版25・90)

E 25区にある5間(9.15m)×2間(4.9m)の東西棟建物(東偏1度)である。柱間寸法は桁行、梁間とも等間である。柱掘形は両妻のものが小さいが、ほかは一辺70~80cmの方形で、深さ70~90cmである。妻の柱穴は40cm×60cmくらいで、深さは50cm前後である。掘形埋土は黒色土と地山土を互層にして固くしている。柱痕跡は径約25cmである。



SB 205 (図版25・90)

E 25区、調査区西端に位置し、全容は不明であるが、大規模な東西棟建物(東偏7度)である。桁行は南側柱穴列で6間まで確認したが、北側は調査区内で3間を検出し、西側の水路部分でも柱穴プランが検出されたことから、桁行7間以上と考えられる。梁間は東妻で明確な柱穴が存在しない。柱間寸法は桁行5間(9.32m)で等間で、梁間は7.8mである。柱掘形は大きいもので1.5m×1.1m、小さいものでも方1mでありかなり大きい。深さは90cm前後である。掘形埋土は上面の柱付近を中心に黒色土であるが、下は黄褐色土で、いずれも固くしまっている。柱痕跡は暗褐色土で、径約30cmである。この周辺にある畝状小溝や小土坑(SK 233など)はいずれもSB 205より新しい。



SB 229 (図版25・91)

E 24区にある4間(8.7m)×2間(5.10m)の東西棟建物(西偏3度)である。柱間はいずれも等間であり、柱掘形はやや丸味をもつが、一辺65~80cmの方形で、深さ60cm前後である。掘形埋土は地山土を含むが暗褐色土でありよくしまる。柱痕跡は径約20cmである。SK 243・SK 260より古い。SD 234・SD 237・SD 246・SD 251はSB 227あるいはSB 242と関連する可能性が高い。

SB 242 (図版25・91)

E 24区ではほぼSB 229と重複する位置にある東西3間(6.8m)×南北4間(8.4m)の総柱建物である。方位は西偏2度である。柱穴の配置はやや不規則であるが、柱間寸法はほぼ等間となる。柱掘形は北から第3列のものが大きく、ほかは小さい。SK 236よりも古い。

SB 290 A・B (図版25)

F 24区にある2間(3.2m)×2間(3.0m)の建物である(SB 290 A)。北側、南側の柱列には柱穴の重複がみとめられ、ほぼ同規模の建物の建て替えがあったものと考えられる(SB 290 B)。SB 290 Aの柱間はほぼ等間で、柱掘形は一辺60~70cmの方形で、深さは41~68cmである。妻の柱穴はこれより小さい。柱痕跡は径約20cmである。掘形埋土は地山土と黒色土の互層となるものがある。SB 229よりも新しい。

SB 291 付 SD 244 (図版25)

E 24区にある東西2~3間(4.3m)、南北3間(4.4~4.7m)の建物である。柱掘形は一辺30~50cmの方形ないしは円形である。柱間寸法は不揃いである。方位はほとんど偏向しない。

SB 228 (図版25・91・105)

E・F 24区にある4間(6.9m)×2間(3.55m)の東西棟建物(東偏3度)である。柱間寸法は梁間がほぼ等間となるが、桁行は西より1.8m・1.5m・2.3m・1.7mと一定せず、西第2柱、第3柱の棟通りにそれぞれ各一個の柱穴が存在する。このうち第3柱の



棟通りの柱はSB 253のものの可能性もある。柱掘形は一辺60～70cmの方形で、深さ50～60cmである。掘形埋土は地山土と黒色土を固くしめており、柱痕跡は径約20cmである。南側柱列西第2柱はSB 253と重複し、これによりSB 228はSB 253よりも新しいことがわかる。

SB 253 付 SD 254・SD 256 (図版25・91)

E・F 24区でSB 228と重複する位置にある5間×2間の東西棟建物(東偏9度)である。桁行・梁間とも長さが不揃いで(北桁8.4m・南桁8.7m・東妻4.0m・西妻3.5m)、平面形は歪む。柱間寸法は東側2間が短く(約1.7m)、ほかは約1.9mである。柱掘形は一辺60～80cmの方形で、深さ51～84cmである。SB 228より新しい。北側の小さな東西溝SD 254・SD 256はSB 253と関係する可能性がある。

SD 202 付 SD214 (図版25・93)

F 24・25区にある南北溝である。幅1～1.3m、長さ約18mで、深さは20～30cmである。方向はほぼ方位と一致する。覆土は上下2層で、上層は暗茶褐色土、下層は茶褐色土で地山にちかい。出土遺物は569～572などがあるが、そう多くはない。出土遺物からみて、Ⅳ期を下限とする時期であり、建物群を区画する機能が想定される。南側の延長線上にあるSD 214はこれと同一の溝の可能性もある。SK 208はSD 202より新しい。

SK 208 (図版25)

F 25区にある径約2m、深さ75cmの円形の土坑である。覆土上層は黒色の自然堆積層で、下は埋め土である。出土遺物は少ないが、586・587などが出土している。

SB 280 (図版25)

E 24区にある2間(4.7m)×2間(3.8m)の東西棟建物(東偏6度)である。柱間はいずれもほぼ等間である。東妻は柱穴が存在しない。柱掘形は一辺30～50cmで丸味をもち、深さは35～50cmである。

SA 292 (図版25)

SB 280の西側にある2間(3.8m)の南北方向(東偏10度)の柵である。柱間寸法は等間で、柱掘形は一辺30cm前後の丸味をおびた方形、深さは35～45cmである。

SB 294 (図版23)

E・F 23区にある3間(4.0m)×2間(3.25m)の東西棟建物(東偏3度)である。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は径30～40cmの円形で、深さは20～40cmである。

SB 300 (図版23)

E 23区にある2間(4.6m)×2間(3.9m)の東西棟建物(東偏5度)である。柱間はほぼ等間、柱掘形は一辺40～50cmの方形で、深さ20～70cmであり、柱痕跡は径約12cmである。

SB 301 (図版23)

E 23区にある東西2間(3.45m)×南北2間(3.5m)のほぼ正方形の平面形をとる建物で、方位は東偏3度である。北側柱列の間には柱穴がない。柱掘形は一辺40cmほどの方形で、深さは30～50cmである。

SK 295 (図版23)

E 23区にある2.5m×1.6mほどの土坑で、両側に浅い段がある。深さは約25cmで、覆土は暗褐色土である。出土遺物はそう多くはないが、Ⅳ期にちかい。

SB 400 (図版23)

E 22区にある2間×2間の建物である。桁行、梁間の長さは両方でやや異なるが、一辺約3.5mのほぼ正方形にちかい。柱掘形は径約40～50cmの円形で、掘形埋土は地山土を含み固い。柱痕跡は径約12cmで

ある。

SB 408 (図版23・93)

D23区付近にある3間(5.2m)×2間(4.9m)の建物で、方位は東偏7度である。西妻は4間等間となり、北側柱列は等間ではなく、西側1間がとくに長い(2.5m)。東妻・南側柱列は等間である。柱掘形は一辺40~50cmの方形で、深さは30~60cmである。掘形埋土は地山土が多く、固い。



SB 411 (図版23・93)

E23区付近のSB 408の東に接して存在する東西2間(4.1m)×2間(4.5m)の建物で、方位は東偏3度である。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は40×60cmほどの長方形で、柱筋に直交する方向に長い。深さは40~70cmである。

SK 390 (図版23)

D・E23区にある径2.5~3.0mのごく浅い土坑である。出土遺物はI期~II期である。

SB 407 (図版23)

D23区の調査区南端にあり、全体を検出していないが、東西・南北とも2間の総柱建物と考えられる。方位は東偏12度である。柱間は等間で、柱掘形は一辺30~45cmの方形で、深さは30~50cmである。SB 412よりも新しい。

SB 412 (図版23)

D23区の調査区南端で検出された建物で、全容は不明である。建物の方位は東偏8度である。桁行3間(5.7m)以上、梁間2間以上である。柱掘形は一辺70~80cmの方形で、深さ60~70cm、柱痕跡は径約25cmである。SB 407より古い。

SK 391 A・B (図版23・93, 第31図)

D23区にある土坑で、新旧二つの土坑が重複する。大きいSK 391 Bが古く、この南側にこれより小さいSK 391 Aが存在する。SK 391 Bは径約5mの円形土坑で、深さは約35cmである。覆土は最上層に黒色土があり、この下は暗褐色から暗灰褐色で、出土遺物は比較的多く、I期~II期である。

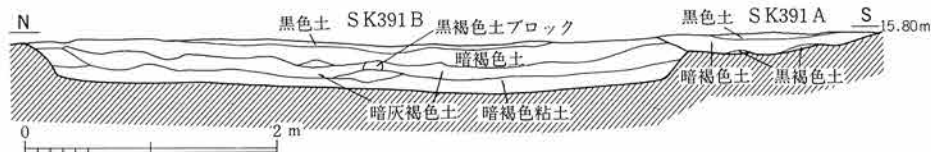
SK 391 Aは径約1.7mの円形で、深さ15cmほどの浅い土坑で、覆土はBよりも黒っぽい。時期はV期である。

SK 409 (図版23)

C・D23区にある径約2.5mの土坑で、深さは約20cmである。覆土は上層が茶褐色の均質な粘質土、下層が黒褐色土で厚さはごく薄い。出土遺物は少ない。

SK 448 (図版23)

D22区にある土坑である。D22・23区にかけて覆土黒色の大きな浅いくぼ地があり、本土坑はこのくぼ地の北部に存する。径2~2.5mで、深さ80cmである。



第31図 SK 391断面図

SD 141の東側

SD 141 (図版6・22・24~29・93)

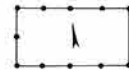
F 22区からF 26区にある南北溝で、北側のSD 321と接する地点で直角に曲がり東へのびる (SD 320)。幅60~100cmで、深さ10cmほどである。覆土は暗褐色土に地山ブロックが混入する。遺物は比較的少ないが、565などが出土している。この溝はゆるく屈曲しており大規模ではないが、SB 274などの建物を囲繞しており、建物群を区画する機能をもつものと想定される。調査区南端ではSB 147に切られている。

SD 211 (図版26)

F 26区でSD 141を切る東西溝である。幅約1m、深さ30~40cmで、覆土は上が暗褐色土、下が暗茶褐色土でいずれも均質な土で自然堆積と考えられる。出土遺物は平瓦片がある。

SB 206 付 SK 225 (図版24・90)

F・G 24区にある4間(7.3m)×2間(3.8m)の東西棟建物(東偏6度)である。SD 203によって一部切られている。東妻には柱穴が存在しないものと考えられる。柱間はいずれも等間である。柱掘形は方形のもの、長方形のものがある。大きさは一辺80cm以上とかなり大きい。掘形埋土は地山土を主体とし、固く、柱痕跡は径約25cmである。一部の柱穴で重複する柱穴があり、建て替えがあった可能性をもつ。北側の浅い土坑SK 225はSB 206に切られている。



SK 209 (図版24)

G 25区にある径1.5~1.8mの浅い土坑である。出土遺物は少ない。

SK 223 (図版25)

G 24区にある土坑で、SD 203によって南側が存在しない。一辺1.5×2.0mほどの長方形を呈し、深さは約70cmである。出土遺物は比較的多い(図版42)。時期はIV期・V期と思われる。

SB 259 (図版24)

G 24区にある2間(4.4m)×2間(4.0m)の建物で、10度東偏する。柱間はいずれも等間であり、柱掘形は一辺60~70cmの方形で、深さは50~70cmである。柱痕跡は径約25cmである。SB 271と東西に接し、両者の方向は一致する。SB 271の西妻に柱穴が存在せず、これがSB 257と同時に存在したことに起因するとも考えられる。

SK 270 (図版24, 第32図)

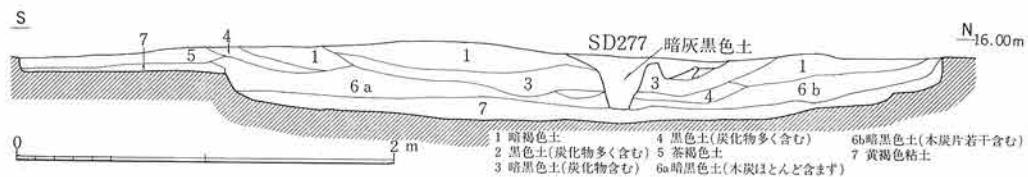
G 24区にある幅約70cm、長さ約4.5mの長方形の土坑である。深さ約25cmで、覆土は下層に薄く黒色土が、上層に暗茶褐色ないしは茶褐色の土層がある。遺物は黒色土から出土しており、時期はI期に限定される。



第32図
S K 270断面図

SB 271 付 SA 338 (図版24)

G 24区にある2間(3.95m)×2間(3.95m)の正方形の平面形を呈する建物であり、10度東偏する。柱間はいずれも等間で、柱掘形は一辺70~80cmの方形、深さ50~60cmである。ただし、西妻の柱穴は存在しない。この建物南側に2間の柱穴列が存在する。柱穴の位置と方向から、SB 271とは

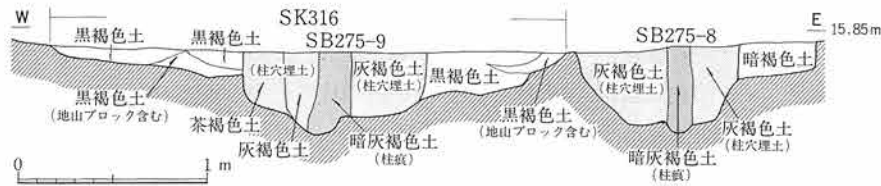


第33図 S K 257断面図

やや異なるが、両者が関連する可能性はある。

SK 257 (図版24, 第33図)

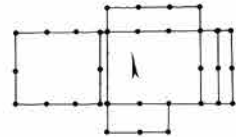
F 23区にある土坑で、出土遺物が多い(図版35)。2.5×3.5mの長い隅丸方形で、深さ30~35cmである。覆土は暗褐色土から暗黒色土で、最下層に黄褐色粘土があり、いずれも埋め土と判断される。遺物は暗褐色土・黒色土に多く含まれる。出土遺物はⅣ期の一括資料として貴重である。



第34図 SB275・SK316断面図

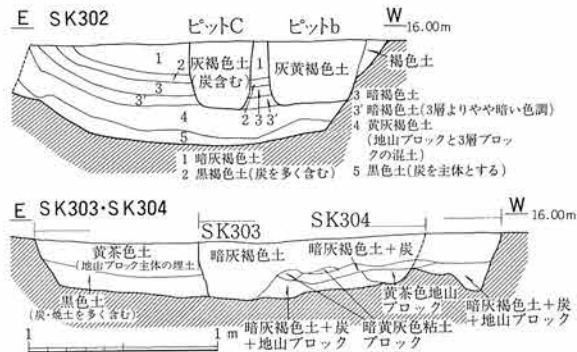
SB 274 (図版22・94)

G 23区にある建物である。この付近には柱穴が多く群在し、SB 275を含めて3棟ほどの存在は確実視されるが、建物の復原は困難な部分もあり、問題を残している。SB 274は東西5間(8.4m)×4間(8.0m)の建物(東偏8度)で、東3間・北3間・南2間の廂をもつ建物である。東廂の東にはさらに一列の柱穴列があり、これも廂の一部にはいる可能性をもつ。南北の廂は東端までのびている。身舎の柱間寸法は桁行・梁間とも等間で、柱掘形は80×110cmの東西に長い長方形である。西妻の柱穴は存在しない。深さは50~90cmであり、掘形埋土は地山土を入れた固くしまった土で、柱痕跡は径約25cmである。廂の出は北1.5m, 南1.6m, 東1.1m・1.0mである。廂の柱掘形は60~70cmの方形である。南廂の柱穴はSK 302を切る。身舎の西側には同じ方向で、SB 275が存在する。この建物はSB 274と南北側柱列の方向が一致する。



SB 275 (図版22, 第34図)

SB 274の西側に接して存在する3間(5.6m)×2間(4.9m)の東西棟建物である。ただし、東側にさらに2間のびる可能性があるが、定かではない。柱間はいずれも等間で、柱掘形はSB 274よりもやや正方形にちかく、一辺80~100cmで、深さ50cmである。この柱穴はSK 316を切っている。SB 275を桁行3間と考えた場合はSB 274と併存した可能性が強く、このためにSB 274の西妻の柱穴がないことも考えられる。なお、SB 274とSB 275がひとつの建物であり、桁行7間となることも考えられたが、柱間寸法が東西で一致しないことから、別の建物と判断した。



第35図 SK302・SK303・SK304断面図

SA 305 (図版22)

SB 275の西側にある南北3間の柵である。ただ、柵にしては柱掘形が大きく、しっかりしていることから、建物となる可能性も考えられるが、復原しえなかった。

SA 319 (図版22)

SB 274北廂の柱列に重複して存在する東西3間の柵である。ただ、柱掘形が大きく、埋土も固いことから建物となる可能性を残している。

SB 318 (図版22)

G 23区にある東西2間(3.4m)×南北2間(2.9m)の建物で、方位は東偏16度である。柱掘形は一辺40cmほどの方形である。

SK 302 (図版22・104, 第35図)

SB 274南廂の柱穴に切られる土坑である。1m×2mの長方形で、東側に幅70cm、長さ2mの細長い浅い落ち込みがつづく。深さは深いところでは約55cmである。覆土は薄い層が数層存在する。このうち、最下層と2層に炭を多く含み、ほかは暗褐色系統の土が層をなす。この土は地山と黒色土の混入土で比較的よくしまっている。この土坑をSB 274の柱のほかにも2個の柱穴と思われるピットが切っているが、これらのピットの関連は把握しえなかった。出土遺物は少ない。

SK 303・SK 304 (図版22, 第35図)

G 23区にあり、互いに重複するふたつの土坑である。SK 304が新しい。SK 303はSK 304によって切られ、全体は一部不明であるが、2.0m×1.5mの方形の土坑で、深さ20~30cmである。覆土は上下2層に明確に分かれ、下層は厚さ約10cmの黒色土で炭を多く含み、上層は明確に人為的な埋め土と判断される黄茶色土である。

SK 304は幅60cm、長さ1.5m、深さ30cmの長方形の土坑である。覆土はほとんど暗灰褐色土であり、人為的な埋め土と考えられる。SK 303・SK 304ともに出土遺物は少ない。

SK 326 (図版22)

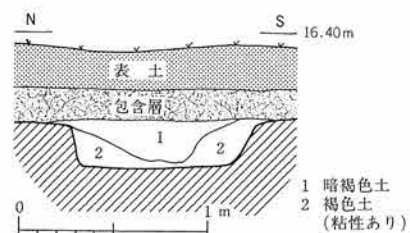
G 23区にある一辺1.2m×1.5mの長方形の土坑で、深さ60cmである。覆土は暗褐色土の単層で、出土遺物はほとんどない。

SD 320 (図版22・24・92・94)

F・G 22・H 22~24区に所在し、SD 141の北端から東へ直角に曲がり、さらに南へほぼ直角に曲がる溝である。北側の東西方向部分(東偏7度)ではSD 321と平行するが、両者は重複せず、新旧関係は不明である。両者が交わらないことと、異なったあり方をすることからみて、併存した可能性も考えられる。出土遺物はさほど多くはない(538~541)。この溝は小規模ながら建物群を区画するものとして重要な機能があったと考えられる。

SD 321 (図版22・23・94, 第36図)

E~H 22区にある東西溝(東偏6度)で、B建物群の北限を画するものと考えられる。幅0.9~1.2m、深さ20~30cmである。覆土は暗褐色土と褐色粘質土である。遺物はG 22区で集中して出土した。遺物の大半は須恵器で、深手の杯がとくに目立つ。SD 320とは切り合い関係にない。出土遺物(513~533)はⅣ期が多いが、SD 201によって切られている。



第36図 S D 321断面図

SB 333 (図版22)

G・H 23区の調査区東端で検出された建物で、全体は不明である。梁間2間(4.1m)、桁行3間以上である。桁行の柱間寸法は不揃いである(2.3m・1.8m)。柱掘形は一辺60~80cmの方形で、深さは50cm前後である。柱痕跡は径約15cmである。

SK 331 (図版24)

H 24区にある径約1.8m、深さ1.6mの円形の土坑である。覆土は暗褐色土を主体とし、レンズ状に堆積

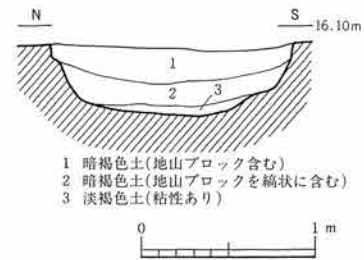
している。出土遺物は少なく、中世に下ることも考えられる。SD 203との切り合いはみとめられない。
SK 332 (図版24)

H 24区にある深さ約30cmの不整形の土坑である。SD 203よりも古い。出土遺物は573・574などである。
SD 389 付 SD 355 (図版24・92)

H 24区にある南北溝で、調査区外へさらにのびる。幅約70cm、深さ約10cmで、覆土は暗褐色土である。出土遺物はほとんどない。SD 321やI 21区のSD 355と同一の可能性もある。

SB 370 (図版24)

I 24区に位置する3間(5.9m)×2間(東妻4.3m・西妻4.9m)の東西棟建物である。西妻の柱穴はなく、東妻の柱穴は柱筋よりも外へ張り出す位置にある。平面形はいびつである。南東隅の柱掘形は小さく、ほかは一辺60~70cmの方形で、柱痕跡は径約15cmである。畝状小溝が柱穴を切っている。



第37図 SK 339断面図

SK 339 (図版24, 第37図)

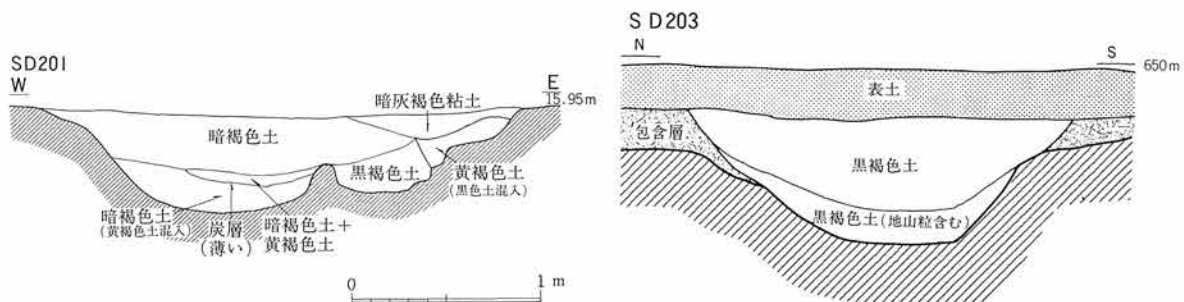
I 24区にある径約1.5m、深さ約40cmの円形の土坑である。覆土は暗褐色土である。

SK 371 (図版24)

SK 339の西側に隣接する深さ約20cmの不整形の土坑で、SK 339との切り合い関係はない。覆土は暗褐色土である。

SD 201 (図版6・21・22・24・25・93・94・103, 第38図)

F 21~25区にある南北方向の大きな溝であり、調査範囲内で重複するすべての遺構より新しい。方位は西偏9度である。幅は約2mで、深さ50cm前後である。溝の上端の両側はなだらかに低くなっている。G 24区南側は、西側の上端が外側へ張り出しており、底面が深くくぼんでいる。この部分の東側にSD 203がSD 201と直交する方向にあり、このくぼみ部よりやや北側の西側上端から底面にかけて、土器が多量に検出された(SD 201土器溜り)。この土器溜りはSD 201の時期を示す重要な資料であり、かつ一括資料としても貴重である。このくぼみ部を境にして、北側は底面の東側には小さな溝が存在する。しかし、断面の観察によっても機能した時期が異なるとはみられない。この小溝の東側のたちあがりにはオーバー・ハングするが、こういった理由によるものかは不明である。覆土は暗褐色土であり、下層には地山ブロックと考えられる黄褐色土粒を含む。ただ、小溝部の覆土は黒褐色土である。覆土最上層には中世の遺物を若干含み、中世まで完全に埋まりきっていなかったと考えられる。とくにG 24区のかぼみ部の上は最後までくぼみが残っていたことが、断面より観察された。土器より9世紀前半から中葉に掘削されたと考えられる。なお、G 24区の覆土最上層から人骨らしき骨片が検出された。



第38図 SD 201・SD 203断面図

SD 203 (図版24・90・92)

F～I 24区にある東西溝で、SD 201よりやや小規模であるが、そのほかの諸点は類似する。SD 201同様調査範囲内でこれと重複して検出されたすべての遺構を切っている。SD 201と直交するが、SD 201とは交差、あるいは接することなく、幅約1mの陸橋部が介在する。したがって、両者は同時に存在したと考えられる。形状・覆土・出土遺物などの共通点もこれの証左といえる。幅は1.7mで、北側上端は2段となっている。底面からのたちあがりは鈍角ながら、角張っている。覆土は黒褐色土で、下層に地山粒を含んでいる。これらの覆土は包含層の色調・土質と類似するが、やや黒っぽく、包含層を切っているように観察された。最上層からは中世の遺物が出土し、そのほかはSD 201と同様のものが出土している。

SD 321より北側 (図版4・5, 第39図)

SD 325 (図版22・44)

E～H 22区にある東西溝で、SD 351と交わり、H 22 (12) 区で消滅する。幅30～40cm、深さ5～15cmの小溝で、断面は浅いU字形を呈する。SD 201・SD 323に切られ、SD 322を切っている。覆土は暗褐色土であり、出土遺物は皆無であるが、SD 351と同一覆土であることから同時期と考えられる。

SD 351 (図版21・22)

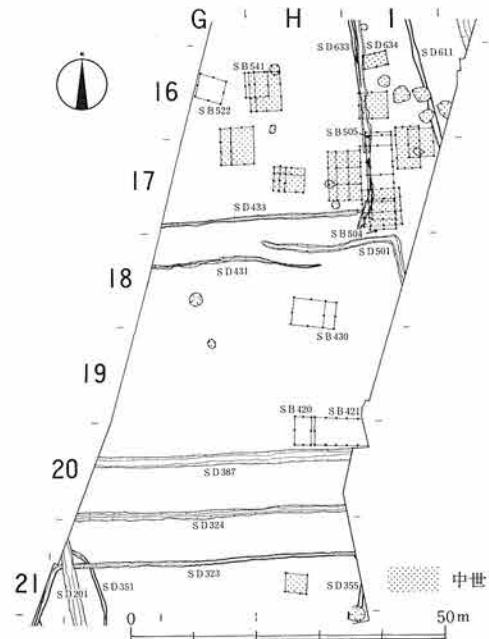
F 21・22区にある南北溝で、F 21区で緩く弧をえがいて西へ屈曲する。幅30～70cm、深さ5～15cmで、北へいくに従って広く、深くなる。断面は浅いU字形を呈する。本溝はSD 201・SD 321・SD 323に切られている。またF 21 (23) 区で重複する東西溝は覆土が本溝と酷似しており、F 22 (3) 区で重複する東西溝は本溝に切られている。SD 141とは位置関係から同一溝の可能性もある。

SD 322 (図版22・23)

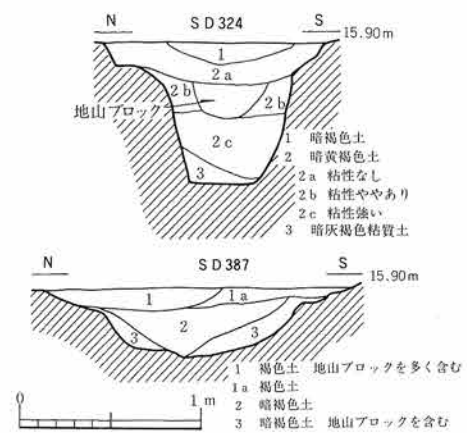
E・F 22・F 23区にある南北溝 (西偏30度) でF 23 (9) 区で消滅する。幅35～105cm、深さ5～15cmである。底面はほぼ平坦で側面は緩くたちあがる。覆土は黒味をおびた暗褐色土でややしまりが弱いが、重複するすべての遺構に切られている。出土遺物は皆無である。

SD 323 (図版21・95)

E～I 21・E 22区にある東西溝 (西偏2度) で、F 21 (11) 区で南へ屈曲し (東偏22度)、さらにE 21 (19) 区で西へ屈曲すると思われる。底面はやや西へ傾斜する。幅55～80cm、深さ15～40cmである。断面は台形で、覆土は上層暗褐色土・下層褐色土で包含層を切り込んでいない。SD 322・SD 351を切り、SD 201に切られている。本溝はSD 324・SD 387と平行であり、SD 324とは約7.6mの距離 (主軸間) をもっている。遺物はさほど多くはないが、IV期を中心とした土器が出土している (542～552)。



第39図 B地区中央部遺構配置図



第40図 S D 324・S D 387断面図

SD 324 (図版21・95・96・104, 第40図)

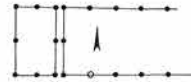
F～I20区にある東西溝で、SD 323・SD 387と平行である。幅85～120cm、深さ45～85cmで、東へいくに従いやや浅くなる。断面は台形で、側面が急激にたちあがる。上方にゆるい段を有する部分がある。覆土は基本的には3層で、第2層暗黄褐色土は人為的な埋め土と考えられる。本溝は他遺構との重複関係はなく、平行にのびるSD 387とは8.4mの距離(主軸間)をもっている。遺物は、SD 323同様Ⅳ期を中心とする土器が出土している(553～563)。

SD 387 (図版21・95, 第40図)

F～I 20区にある東西溝でSD 324と方向は同じである(西偏2度)。幅1.5～2mで、東へいくに従い広がり、深さ35～50cmである。断面は底面幅広のU字形で、上方両側に段を有する。覆土は基本的には3層で遺物は第1層から出土している。SB 421-10と上面が接するが新旧関係は不明である。出土遺物は少ないが、SD 324とほぼ同じ時期のものである。

SB 420 (図版21・96)

H 19・20区にある2間(4.7m)×2間(2.72m)の南北棟建物(東偏2度)である。柱間寸法は、桁行2.35m等間、梁間1.36m等間である。柱掘形は一辺50～60cm、深さ30～65cm、方形のものと円形に近いものがある。柱痕跡は径20～25cmである。

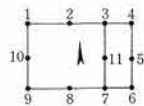


SB 421 (図版21・96)

H・I 19・20区にある東西棟建物である。全体規模は不明であるが、桁行5間(8.75m)以上、梁間2間(4.14m)と推定される。南側柱列西第2柱の柱穴は攪乱をうけて遺存しない。柱間寸法は、桁行1.69m等間、梁間2.07m等間である。柱掘形は一辺55～75cmの方形で、深さは40～65cmである。掘形埋土は暗褐色土を主体とする。柱痕跡は径20～25cmである。方位は2度東偏し、SB 420と一致する。

SB 430 (図版20・96)

H・I 18・19区にある3間(6.8m)×2間(4.3m)の東西棟建物(東偏7度)で、西第3柱の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴(11)がある。柱穴4・5は用水路で上面の大半を削られている。柱間寸法は桁行が西から2.6m・2.4m・1.8mで、梁間が北から2.2m・2.0mである。柱掘形は方形で、建物隅の柱は大形で一辺50～70cm、深さ50～80cmである。ほかは一辺45～50cmで、深さは南・北柱列が60～80cm、東・西妻が25～30cmである。柱穴11のみが径35cmの円形で深さ20cmである。掘形埋土は地山土を主体としており、柱痕跡は径20～25cmである。柱穴8・11は重複する畝状小溝によって切られている。



SD 431 (図版20・97)

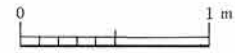
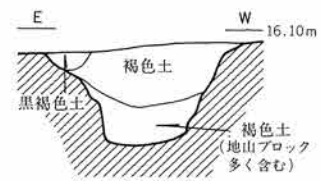
G・H 18区にある東西溝で、H 18(10)区で切れる。幅は35～70cm、深さ8～25cmで東へいくに従って狭く、浅くなる。断面は深い部分では台形を呈し、覆土は褐色土である。重複するピット・畝状小溝によって切られている。出土遺物はきわめて少ない。

SD 501 (図版20・97, 第41図)

H・I 18区にある東西溝で、H 18(2)区から始まり、H 18(4)区で南へ屈曲する。幅は75～120cm、深さ20～45cmで西へいくに従って狭く、浅くなる。底面も同様に傾斜する。断面は台形を呈し、覆土は基本的には2層で、屈曲部周辺にはこの上に黒褐色土が堆積している。遺物は少ないが、577～579が出土している。

SD 433 (図版19・97)

G～I 17区にある東西溝で、I 17 (17) 区で切れる。幅は60～75cm、深さ20～23cmである。断面はコの字形を呈し、覆土は褐色土である。出土遺物は皆無であるが、覆土やSD 431・SD 501との関係から古代の溝と思われる。

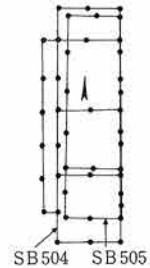


第41図 S D 501断面図

SB 504 (図版19・97・98)

I 16・17区にある7間 (15.45m) × 2間 (4.2m) の南北棟建物 (西偏2度) である。南から1間おきに間仕切りと思われる束柱が存する。西側に付く

廂は長さ5間 (11.2m) で、出は1間 (0.9m) である。柱間寸法は、桁行南側第1間が2.0mとやや狭くなっているものの、ほかは2.24m等間、梁間2.1m等間である。柱掘形は一辺50～80cmの方形で、深さは40～80cm。ただし束柱および廂の柱掘形は、一辺35～40cm、深さ30～50cmの丸味をおびた方形に近いものが多い。掘形埋土は褐色土を主体とする。柱痕跡は径約30cmである。切合関係からSD 634より新しい。



SB 505 (図版19)

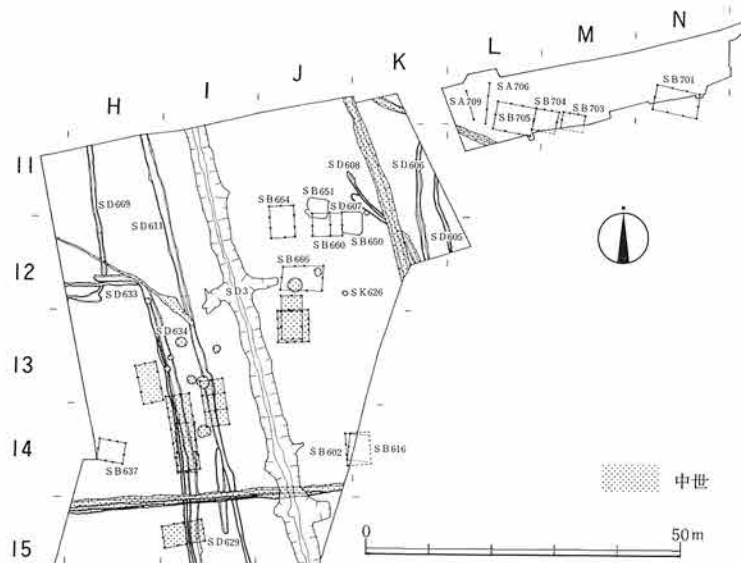
I 16・17区にある6間 (13.5m) × 2間 (3.5m) の南北棟建物である。方位は2度西偏する。柱間寸法は、桁行の南第1間は3.15mとやや広いがほかは2.6m等間、梁間1.75m等間である。柱掘形は一辺45～60cmの方形ないし円形で、深さ45～60cmである。掘形埋土は褐色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。

SB 522 (図版19)

G 16区にある2間 (4.3m) × 2間 (3.8m) の東西棟建物 (東偏18度) である。平面形はやや歪むが、柱間寸法はいずれもほぼ等間である。柱掘形は一辺35～50cmの方形で、深さ30～60cmである。掘形埋土は地山土が多い。

SB 541 (図版19)

H 16区にある2間 (3.7m) × 2間の建物 (西偏4度) で、梁間は東が3.9m、西が4.1mである。西妻は広範囲の撓乱によって上面が15cm程削られている。柱間寸法は桁行が西から1.6m・2.1m、梁間は約2.1mである。柱掘形は一辺35～50cmの方形であり、深さは30～50cmで北側柱列の西第2柱のみ12cmと浅い。掘形埋土は暗褐色土に地山土を含んでおり、柱痕跡は径約20cmである。



第42図 B地区北側遺構配置図

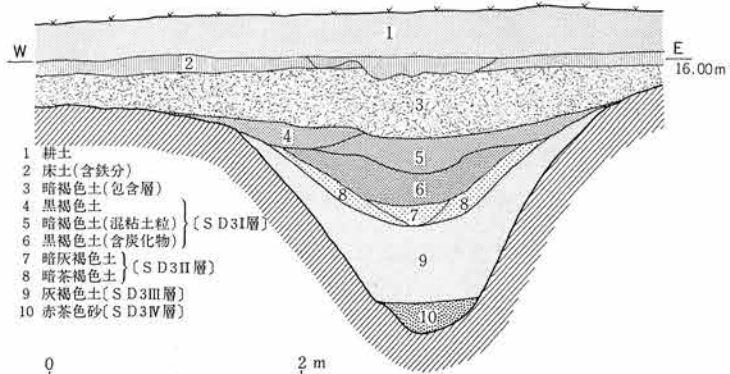
SD 3 付 SD 654・SD 667 (図版
4・10・17・18・99・100・101, 第43
・44図)

C地区南端からつらなる大規模な南北溝で、B地区北辺部に位置する。B地区では約73mにわたって検出した。C地区で発掘した時点では地山の判断を誤り、覆土の下半を掘り残した。上端幅3.5～

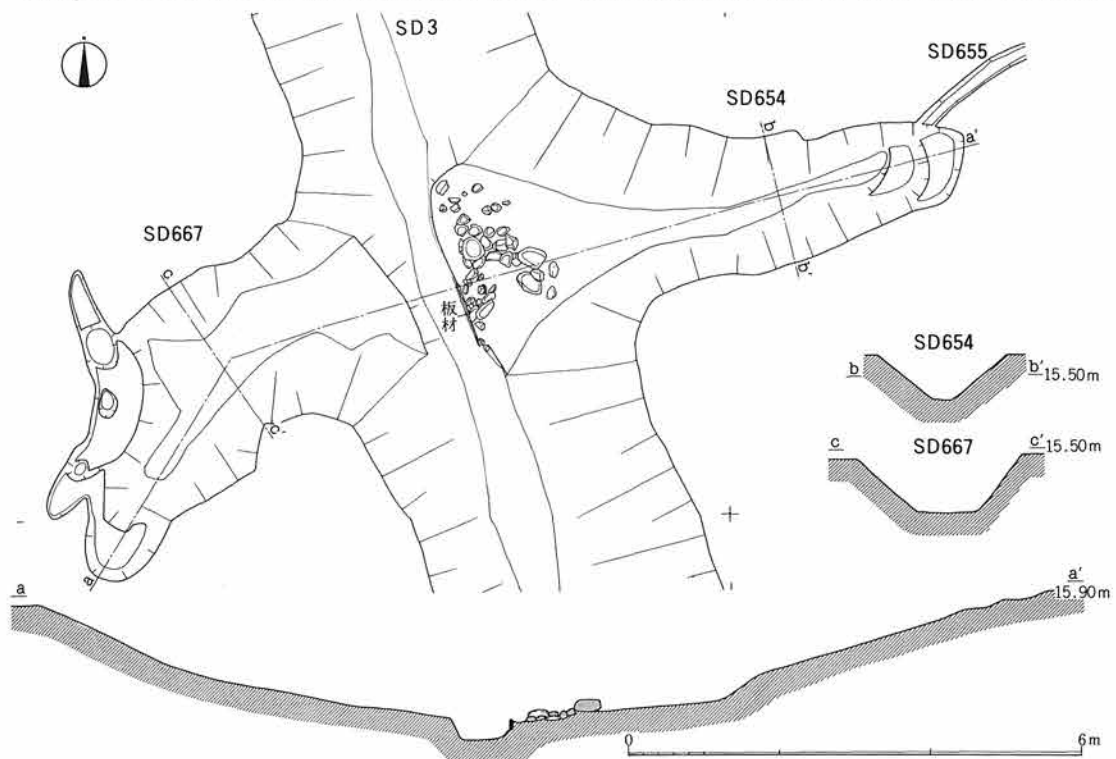
4 m, 下端幅50～70m, 深さ1.8～2.0mで、断面はU字状を呈する。方位は14度西偏する。この方向はおおむね地形の傾斜線に沿っている。底面のレベルはごくわずかではあるが、南が高く、北が低い。上端の高さは東西で、20～30cmのレベル差があり、上端からその外側にかけては溝に向ってゆるく傾斜している。

この溝の両側にはいくつかの湾入部が存在する。I 12区北半部にある東西の溝状のもの (SD 654・SD 667) がもっとも大きく、そのほかに、I 11区の東側・J 14区の東西 (SD 672・SD 673)・J 15区の東西 (SD 604・SD 674) に湾入部がある。これらは溝と同時期に存在したものであり、この湾入部に小さな溝がとりつく例がある。I 11区のSD 656, I 12区のSD 655がこれにあたる。I 12区にある東西の溝状の湾入部はもっとも大きく、SD 3の底面に面する位置に礫敷の施設をともなっている (第44図)。礫は拳大から人頭大のもので、長さ約2 m, 幅1.2mほどの範囲に敷かれており、SD 3の底面に面する位置には、溝と平行する方向に幅15cm, 長さ約80cmの板材を横位に立てている。この板材は礫敷の部分に補強するものと推定される。礫敷の下には白色粘土と砂利を混ぜた土が入れてあり、この土を板材が支持する構造をとっている。

溝の覆土はおおむね4つの層に区分される (第I層～第IV層)。最上層 (第I層) は黒褐色ないしは暗褐色



第43図 SD 3 断面図



第44図 SD 3 張り出し実測図

の粘性の強い土で、奈良・平安時代のほかに中世の遺物をかなり含む。この層はSD 3の上面にだけ存在し、湾入部にはみられない。瓦塔(第78図)は、J14(2)区の第I層から出土した。第II層は第I層よりも褐色がかかる層であり、土質は第III層に類似する。出土遺物は少ないが中世遺物を含まない。第III層は当初、地山と誤認した層で、ほとんど地山の粘質土にちかく、よくしまっている。ただし、地山よりは灰褐色がかかることから区別された。この層の土質は比較的均一である。出土遺物は少ないが、第IV層とほとんどかわらないものであり(図版41)、第III層と第IV層で接合した個体もいくつかあった。第IV層は最下層の赤茶色砂利層で厚さ約20cmである。底部はその部分だけさらにくぼんでおり、このくぼみにだけ第IV層が堆積している。したがって、礎敷部では板材の西側にだけ第IV層が存在し、SD 654・SD 667の底面上には第III層が堆積している。第IV層からは多量の遺物が出土した。当層はその堆積状況からみて、比較的短期間に形成されたものと推定され、第IV層出土遺物は一括資料としてきわめて貴重である。時期は奈良・平安時代の後半期、実年代で9世紀後半を中心とする時期と考えられる。

SK 612 (図版18)

J15区にある径約4.65m、深さ約10cmの楕円形に近い土坑である。覆土は黒褐色土を主体とし、固くしまる。中央部は旧用水によって破壊されている。

SK 610 (図版18)

I・J15区にある不定形土坑である。南北8.25m、東西4.95mで、深さは約6cmである。覆土は黒褐色土を主体とする。切合関係からSD 611より新しい。須師器の細片を若干含む。

SK 613 (図版19)

I16区にある不定形の土坑である。深さは約10cmと浅く、南側を旧用水で破壊されている。SK 610・SK 612と同質の土坑と考えられるもので、SB 614との新旧関係は不明であり、中世にくだるかもしれない。

SB 637 (図版18)

H14区にある3間(4.2m)×2間(3.3m)の東西棟建物(東偏11度)である。柱間はいずれもほぼ等間で、柱掘形は一辺30~40cmの方形で、深さ30~60cmである。

SD 611 付 SD 629 (図版4・13・17・18・99)

H11・12、I11~16、J16区にある南北溝(西偏14度)で、C地区から続いている(SD 36)。SD 3とは8~9m(主軸間)離れて平行にのびている。幅は65~130cm、深さ10~35cmである。断面は浅いU字形を呈し、部分的に段を有する。覆土は暗褐色土であるが、H・I11区の有段付近では下層に灰黄褐色土と黒褐色土の混土が堆積している。本溝はI15区以北で重複するすべての遺構より古い。J16区ではSE 516・SE 531(中世)には切られているが、ほかとの前後関係は判然としないものの、方向からSD 3と同時期とみられる。I14・15区で本遺構の西側を南北にのびるSD 629は本構と同様の覆土である。

SD 634 付 SD 507・SD 510 (図版4・5・17~19)

H12・13、I13~17区にある南北溝(西偏2~15度)で、H12(19)区で西へ屈曲し、(17)区で途切れる。南側はI17(13)区で切れているが、SD 510・SD 507は位置から本溝と同一の可能性も考えられる。幅は80~145cm、深さ約35cmである。断面はU字形で、部分的に段を有する。覆土は暗褐色土である。SD 633とはほぼ平行してのびているが、これより新しい。またほかの重複する遺構より古いものである。

SD 633 (図版4・5・17~19)

H12・13、I13~16区にある南北溝(西偏7度)で、H12(19)区で西へ屈曲し調査区域外へのびる。幅は45~70cm、深さ約20cmであり、断面はU字形である。覆土は黒味をおびた暗褐色土で、ところによって

地山ブロックを含む。本溝はSD 634と平行してのび、屈曲部で重複し切られている。また重複するすべでの遺構に切られている。

SD 669 (図版4・13・17)

H11・12区にある南北溝で、C地区から続いており(SD 27)、H12(22)区で西へ屈曲する。幅は50～90cmで南へいくに従いやや狭くなり、深さは15～30cmで、屈曲部付近では8cmと浅くなる。溝底面はほぼ平坦で、断面は台形を呈する。H12区でSD 633・SD 634(古代)・SD 671(中世)と土坑に切られている。この(22)区にある土坑の覆土は暗茶褐色土であり、古代に所属すると思われるが、出土遺物は皆無で、詳細は不明である。またH11・12区で本溝に接する短い南北溝は深さ3～20cmと浅く、覆土は本溝の上層とほぼ同一で前後関係は明確ではない。

SB 602 (図版18)

J・K14区の調査区東端で検出された建物で、全容は不明である。南北3間(5.3m)で、東西は不明である。方位は西偏5度である。南北の柱間は等間で、柱掘形は一辺50～60cmの方形で、深さ35～45cmである。掘形埋土は地山土が多い。SB 616と重複するが、柱穴の切り合いはない。SD 601よりも古い。南北棟の可能性が考えられる。

SB 616 (図版18)

J・K14区の調査区東端で検出された建物で、全容は不明である。南北2間(4.2m)で、東西は不明である。方位は東偏2度である。南北の柱間は等間で、柱掘形は一辺50～60cmの方形、深さ25～50cmである。SB 602同様SD 601よりも古い。

SD 601 (図版17・18)

J13・14区にある南北方向の溝である。方位は35度程西偏する。幅は約60cm、深さは約10cmである。北端はJ13(2)区で消滅する。切り合い関係からSB 602・SB 616より新しい。

SB 660 (図版16)

J11・12区にある2間(4.7m)×2間(3.7m)の建物(西偏3度)である。柱間寸法は不等であり、桁行は西1間が長く、梁間は東妻では南1間が、西妻では北1間が長い。柱掘形は一辺45～70cmの方形で、深さ35～70cmである。西妻の柱のみ径30cmの円形で深さ25cmである。掘形埋土は地山土を主体とする褐色土で、柱痕跡は径15～20cmである。北側柱列の西第2柱はSB 651を切っている。

SB 664 (図版16)

J11・12区にある3間(東5.0m・西5.3m)×2間(北3.9m・南4.1m)の南北棟建物(西偏7度)である。北妻の柱は柱筋より外(北)へでており、南妻の柱は柱筋より内(北)にはいる。柱間寸法は約2mで、西側柱列の北1間、東側柱列の北・南1間の3ヶ所が約1.5mと短い。柱掘形は方形で一辺45～60cmであり、北西隅の柱は一辺30cmと小形である。深さは25～50cmである。南妻の柱のみ径30cmの円形で深さ15mである。掘形埋土は褐色土中に地山土を含んでおり、柱痕跡は径約15cmである。この建物付近には柱穴と確認できるピットが多く、とくに本建物の柱筋に集中が認められ、建て替えが十分考えられる。

SB 666 (図版17・98)

J12区にある3間(6.5m)×2間のやや歪んだ東西棟建物(西偏2度～東偏1度)で、梁間は西妻が3.8m、東妻が4.2mである。南側柱列の西第2柱はSE 652によってこわされ遺存しない。柱間寸法は北側柱列で西から1.8m・1.5m・3.2mであり、西妻は北から2m・1.8m、東妻は2.1mと等間である。柱掘形は一辺45～80cmの方形あるいは丸味をおびた方形である。深さは30～45cmあるいは70～85cmである。掘形埋土

は上層が地山土、下層が地山土を主体とする褐色土である。柱痕跡は径20～25cmである。北側柱列の西第2・3柱は重複する溝SD 655に切られている。

SD 606 (図版16)

K11・12区にある南北方向の溝である。方位は5度西偏する。幅は約75cmで、深さは約30cmである。北端はK11(14)区で消滅する傾向を示す。埋土は暗褐色土で、K12(14)区では土師器・須恵器小片を若干含む。

SD 607・SD 608 (図版16)

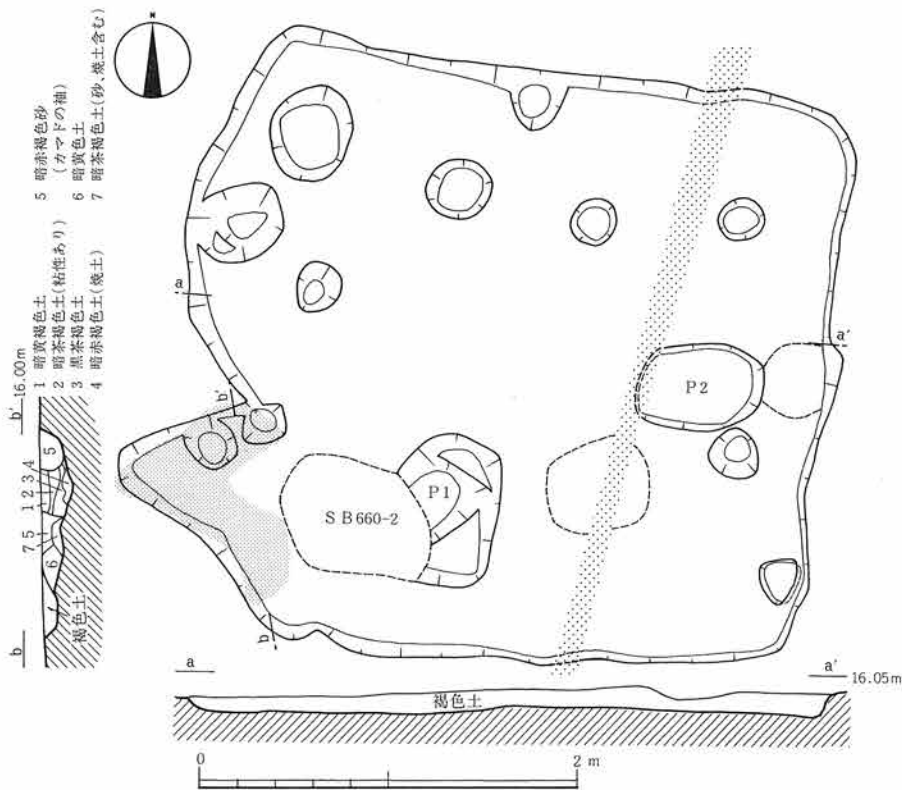
SD 607とSD 608はK11・12区にある南北溝である。SD 608は北半部が幅約50cm、深さ約10cmで、南半部が幅約10cm、深さ30cmで、調査区域外へのびる。これと接するSD 607は幅約1.2m、深さ約5cmである。ともに明褐色土を覆土とし、中世溝SD 2に切られているため、相互関係は不明である。

SD 605 (図版16)

K11・12区にある南北方向の溝である。方位は18度西偏する。幅は約60cm、深さは約30cmである。北端はK11(15)区で消滅する傾向を示す。埋土は暗褐色土で、K12(5)区では下層に土師器小片を若干含む。

SB 650 (図版16)

J・K11・12区にある竪穴住居である。一辺3.3～3.6mの方形で、深さ5cmと浅い。覆土は地山ブロックを主体とする暗褐色土で検出は困難であったが、炭化物を多く含んでおり、この炭化物の分布によってプランを確認した。東壁周辺からはかなりまとまった土器が検出されており、東壁中央のピットの覆土が黒色土で焼土・木炭を含むことから、この部分がカマドと思われる。住居にともなう柱穴はあると思われるが、判然としなかった。SB 660やそのほかの柱穴と考えられるピットよりも新しい。



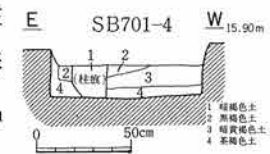
第45図 SB 651実測図

SB 651 (図版16・98, 第45図)

J 11・12区にある竪穴住居である。一辺3.1~3.4mの方形で南西隅にカマドがある。深さは約5cmと浅く、覆土はやや砂粒を含む褐色土で炭化粒・地山粒を少し含む。柱穴の配置は不整であり、柱穴は径20~50cmのほぼ円形で、深さは10~20cmと浅い。柱穴の覆土は住居の覆土と同一である。カマドの両袖は暗褐色砂で、この先端に径約30cmの煙道が確認された。カマド・煙道内からはかなりまとまった土器が出土している(580~585)。P₁・P₂は柱穴とは異なる土坑である。P₁は長軸80cmの楕円形で深さ約20cm、SB 660-2に切られている。

SB 701 (図版15, 第46図)

N 10区にある3間(7.0m)×2間(4.0m)の東西棟建物(東偏13度)である。柱間寸法は、桁行2.3m等間、梁間2.0m等間である。柱痕跡は一辺45~90cmの方形で、深さは30~60cmである。掘形埋土は暗褐色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。全体規模は隣地所有者水吉義英氏の好意により確認しえた。



第46図 SB 701断面図

SB 703 (図版15)

M10・11区にある掘立柱建物である。南側は調査区外であるため、全体規模は不明であるが、東西3間(3.3m)、南北2間(2.55m)以上の東西棟と推定される。方位は5度東偏する。柱間寸法は、桁行西から1.05m・1.35m・0.9m、梁間北から1.25m・1.3mと不揃いである。柱掘形は一辺35~50cmの方形もしくは径25~30cmの円形で、深さも15~50cmと差がある。

SB 704 (図版15)

L・M10・11区にある掘立柱建物である。南側が調査区域外であるため、全体規模は不明であるが、2間(3.65m)×3間(3.36m)の南北棟と推定される。北西隅の柱穴は攪乱によって遺存しない。方位は7度東偏する。柱間寸法は、桁行1.8m、梁間1.12m等間である。柱掘形は一辺30~45cmの方形で、深さは25~45cm、柱痕跡は径15~20cmである。

SB 705 (図版16)

L10・11区にある3間(6.3m)×2間(4.4m)の東西棟建物(東偏11度)である。北東隅の柱穴は攪乱をうけて北半分が不明確になっている。柱間寸法は、桁行2.1m等間、梁間2.2m等間である。柱掘形は50~60cmの方形で、深さは30~60cmである。柱痕跡は径約15cmである。

SA 706 (図版14)

L10区にある南北方向の柵である。方位は6度東偏する。検出全長3間(6.65m)、柱間寸法は南2間が2.25m等間、第3間が2.15mと不揃いである。柱掘形は径20~30cmの円形で、深さは15~40cmである。

SA 709 (図版14)

L10区にある南北方向の柵である。方位は16度西偏する。検出全長7間(4.85m)、柱間寸法は北から40cm・50cm・40cm・95cm・115cm・119cm・35cmと不揃いである。柱掘形は径20~25cmの円形で、深さは20~40cmである。

畝状小溝 (第47図・図版99)

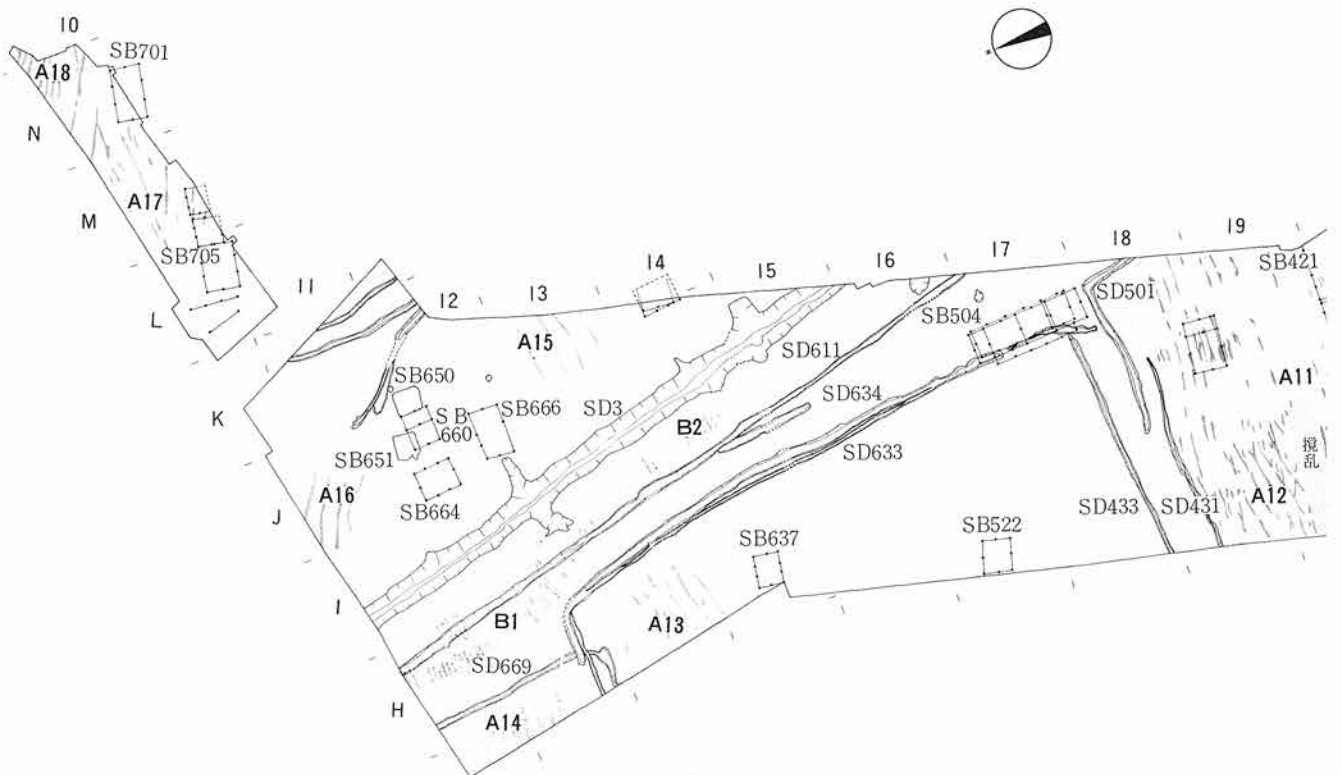
「畝状小溝」とは溝のなかでも細くて浅い小さな溝をいう。この溝は平行して並ぶものが多く、群をなしている。性格は現在のところ明確ではないが、形状は最近群馬県下で検出されている畝跡の遺構と類似し、当例も畝の畝の痕跡とも考えられ、「畝状小溝」と称することとした。この遺構の年代は中世遺構との切り合い関係から古代に遡ることは確実視され、当時の土地利用・景観の復原に遺構なものといえよう。

畝状小溝はB地区の広い範囲に分布し、A地区・C地区ではほとんどみられない。下新町遺跡でもごく少ないが存在しており、子安遺跡では明確なまとまりが確認されている。畝状小溝は形状から2種類に分類される。ここでは仮に畝状遺構A類・B類とする。A類はB類より細長く、平行して存在する溝の間隔が広い。畝状小溝の大半がこれである。B類はA類よりも太く短く、溝の間隔が狭い。ともに無秩序に分布するのではなく、一定の法則性が省取される。出土遺物はいずれも少なく、時期決定をなしうる資料はみられない。

A類 幅20～50cmで、深さ10～20cmである。平行する溝の間隔は約1.5mであり、これより間隔が狭いものはほぼこの半分である。長さは一定していない。短い溝が一定の方向で連続しているものは、元来ひとつの溝であったとみられる。溝の覆土は茶褐色土で、灰褐色のB類の覆土とは異なる。

この溝は分布状況とそれぞれの方向から、おおよそ18の群に分けられる(A1群～A18群)。それぞれの分布地点と方向は第6表のとおりである。各溝群の分布状況を見ると、一定の溝や建物と関係すると考えられるものが多い。たとえば、A8・A9群はSD321とSD323、A10群はSD324とSD387、A11・A12群はSD387とSD431とSD501に南北を画されており、A14群はSD669に囲まれている。また、溝群の形状は方形にちかく、溝群の東西両端が一線にならぶものがほとんどであり、この位置に同様の小規模な南北溝がある場合もある(A2群)。A8群はSD357を介して東西の両群にわかれており、これとの関係がみられる。建物群との関係ではSD141とSD320によって囲繞されたSB274・SB275を中心とする範囲内にはまったく存在せず、この両側も同様である。

溝群の方位はほとんどが東西方向の溝群であり、同一方位のもので分類すると、I群(東偏約30度)A16・A18、II群(東偏約16度)A9、III群(東偏約10度)A1・A4・A5・A6・A7・A8、IV群(東偏約7度)A3・A11、V群(方位とはば一致)A2・A10・A14・A15・A17、VI群(西偏8～15度)A12・A13



第47図 畝状小溝分布図

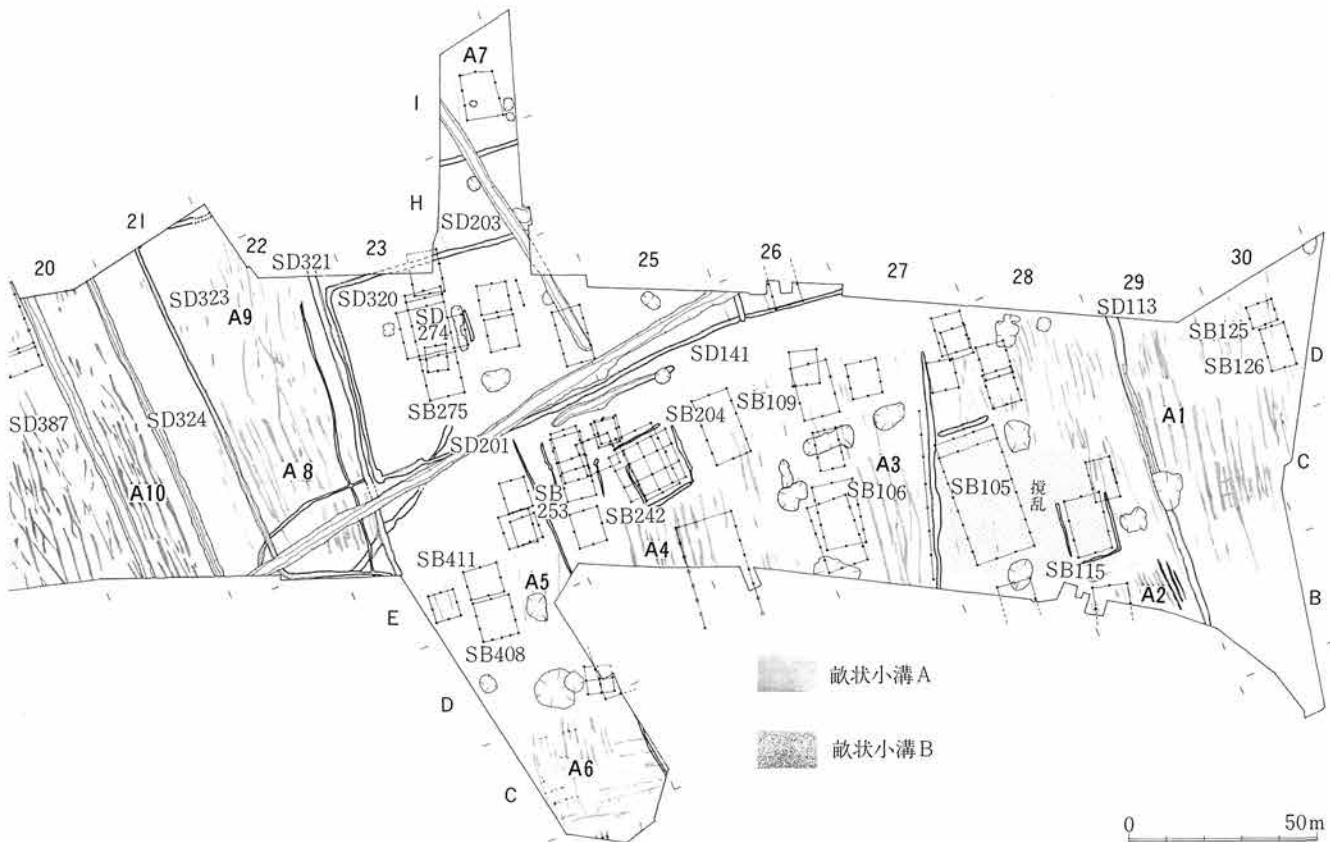
の6つの群になる。同一方向の群は建物と同様に同時存在の可能性が考えられる。同一地点で2つの方向のものが重複するのはA11・A12群であるが、切り合い関係は不明瞭であった。A6群は東西方向の溝のほかに南北方向のものが数条みられるが切り合い関係は不明瞭であった。

ほかの遺構との重複関係では、中世の建物をのぞけば、建物より古いことが確認された例はない。しかし、SD201はA8群を切っており、これから9世紀まで遡るものがあることがわかる。A8群の方向はSD321とほぼ平行で、位置関係はSD321とSD324と関連している。SD321はSD274などの建物群を画しており、この溝に囲まれた中に畝状小溝は存在せず、A8群とSD141とSD320・SD321に囲まれた建物群が併存した可能性は強い。A8群とSB274・SB275の方向はほぼ一致している。

こうした点からみれば、同一の方向をとる畝状小溝群と建物は同時期とされる可能性は強いといえるであろう。A8群と同じ方向のものはA4・A5・A6・A7

第6表 畝状小溝一覧表

	位置	方 向	関 連 遺 構
A 1	D29	東偏10~12度	
A 2	B28	0度	
A 3	D26	東偏7度	
A 4	D24	東偏10度	
A 5	E23	"	
A 6	G23	"	
A 7	I24	"	
A 8	F21	"	SD321・SD323
A 9	H22	東偏16度	SD324・SD387
A10	G20	0度	
A11	G19	東偏7度	SD387・SD431
A12	G19	西偏8~14度	"
A13	H13	西偏15度	
A14	G11	東偏3度	SD669
A15	K13	0度	
A16	J11	東偏27度	
A17	M10	0度	
A18	O10	東偏30度	
B 1	H11		
B 2	I14		
B 3	E26		



群であり、これらも SB 294・SB275の建物群を囲むように位置している。A 4 群が SB 242や SB 253と重複していないのは両者が併存した可能性を示唆するかのようである。

B類 B地区の北側に2群(B 1・B 2群)、南辺部に1群(B 3群)がある。B 2・B 3群は小さい。もっとも規模の大きいB 1群は孤状に30m以上つらなつた一列とその東側にさらに2列がある。この溝の断面はU字形となり、深さは10~20cmである。覆土は均質な灰褐色粘質土である。これはSD 3の最下層の上に厚く堆積する土と類似する。B 1群はSD 611より新しく、中世とみられるSD 671より古い。

c A 地区

A地区は今池遺跡の中ではもっとも南に位置し、北は江戸時代に開削された旧大道用水に、また東から南にかけては関川の段丘崖によって区切られている。

土層は昭和55年度の調査区域であるグリッド10列より南が畑地で耕作を受けていたのに対し、56年度分であるグリッド5~10列では旧大道用水の掘削による残土に覆われ、耕作をほとんど受けていないため全く異なった状況であった。

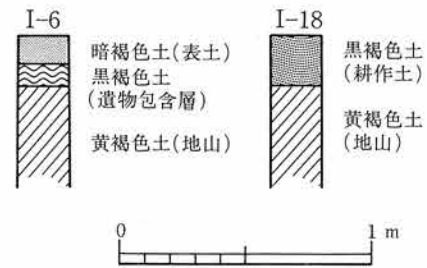
昭和55年度分では、耕作がほとんどの部分で地山層に達し、ごく限られた部分に断片的に認められる黒褐色土の包含層を除けば、地表面から地山面まで1層であり、20~30cmの厚さがある(第48図)。

昭和56年度分では、盛土を除けば旧地表面から地山面まで2層に分けられる。表土は厚さ10~15cm前後の暗褐色土であり、ほとんど耕作を受けていない。包含層は黒褐色土であり、粘性が強く、厚さ15cm程度である(第48図)。

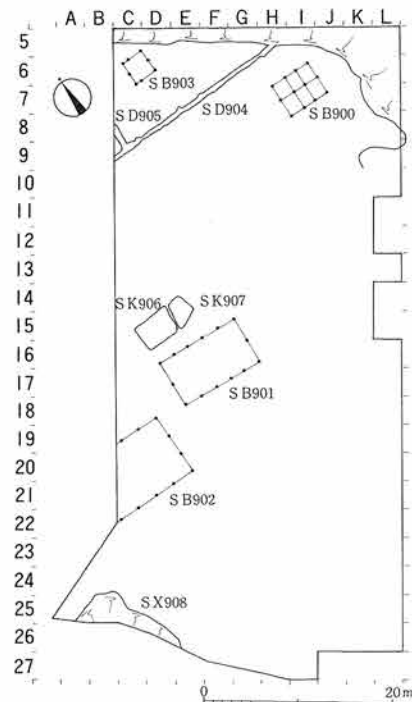
包含層中からは、古式土師器及び奈良時代前半並びに平安時代中頃の遺物が出土したが、両者が明瞭に別々の層を形成するものではない。

包含層直下が地山面であり、標高は16m前後である。土質は黄褐色の粘質土である。

A地区で、検出された主な遺構は掘立柱建物4・溝2・土坑2・性格不明遺構1などである(第49図)。これらは溝(SD 904)を境として南側のものは奈良時代前半であるのに対し、北側の建物(SB 903)は平安時代中頃と時代差が認められる。また、上述した遺構のほかにもいくつかのピット・土坑等が検出された。とくに建物(SB 901・SB 902)の周辺には、径1m前後・深さ40~70cmの柱穴と考えられるものが存在するが、建物として抽出することはできなかった。なお、遺構の大部分を占める奈良時代前半の遺跡の性格は、すべての建物・溝が東西に近い方位をとって配置していることなどから、一般的な集落跡とは異なる可能性があると考えたが、調査対象区域が遺跡南端のご



第48図 A地区土層柱状図



第49図 A地区遺構配置図

く限られた範囲であったため、推定の域を出なかった。

SB 900 (図版29・111)

調査区の北東隅にある東西3間(4.6m)×南北2間(3.8m)の東西棟建物(東偏1度)で、柱筋にすべて柱穴のある総柱建物である。桁行の柱間寸法は、両端の1間は各1.6m、中央1間は1.4mとやや不揃いである。梁間の柱間寸法は1.7m等間である。柱の掘形は、東第2柱列の中央柱穴が一辺60cmの方形で、深さ20cmであるがほかは、すべて一辺80cm~110cmの方形で、深さ50~80cmで大きさは比較的良好に揃っている。検出された柱穴の2/3に柱痕跡が認められ、その径は15cmほどで比較的良好に揃っている。



なお、この建物の棟通りと北2.5mにあるSD 904とは方向が一致している。

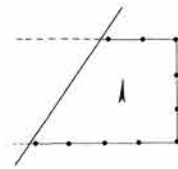
SB 901 (図版30・110・111)

調査区の中央やや西寄りにある東西5間(9.1m)×南北2間(5.3m)の東西棟建物(東偏4度)である。柱間寸法は、桁行は1.6~2.0mと不揃いである。梁間は2.65m等間である。柱穴掘形は、上部が崩落もしくは後世の攪乱によってつながるものが多く、とくに北側柱列は検出面では溝状を呈していたが、推定一辺1.2~1.5mの方形で、深さ70~100cmの大きさと考えられる。検出された柱穴のうち3個に、径30cmほどの柱痕跡が認められた。掘形埋土は、黒色土であり、多量の土師器・須恵器が出土した。これは、柱抜き後に遺物と共に埋められたものと考えられる。



SB 902 (図版30・111)

SB 901より西へ約3m隔てた位置にあり、一部が調査区域外にのびる東西4間(9.3m)以上×南北3間(6.9m)の東西棟建物(東偏4度)である。柱間寸法は、確認部分で桁行2.3m等間、梁間2.3m等間である。柱穴掘形は、円形・楕円形・方形と不揃いで、一辺(径)70~130cm、深さ50~100cmと大きさにばらつきが目立つ。しかし、深さについては、地山面の傾斜を考慮に入れると相対的にはほぼ一定となる。検出された柱穴のほとんどに柱痕跡が認められ、その径は30cmほどで比較的良好に揃っている。なお、北側柱列の東第3柱穴の埋土より鉄製品(第83図)が出土している。



SB 903 (図版29)

SD 904の北で、旧大道用水の落ちぎわにある南北2間(2.7m)×東西2間(2.6m)のほぼ方形の建物である。建物の方位は、4度西偏している。東西両側柱列の柱間寸法は1.35m等間であるが、南北両側柱列の柱間寸法は、東1間が1.9mと広がっている。柱穴掘形は、径30~45cmの円形ないしは楕円形で、深さ25~35cmである。



この建物は、建物の規模・柱穴の掘形から上記のSB 900~902とは明らかに異なり、また出土遺物の年代にも差が認められる。

SD 904 (図版29・112)

H 5区からC 9区へほぼ東西にのびる小溝である。東側では旧大道用水によって切られ、西は調査区域外にのびており、確認された長さは約21mである。この溝は、幅45~70cm、深さ40cmで、D 8区より東では幅20cmの段をもつ。覆土は黒褐色土が堆積している。出土遺物は、土師器・須恵器の小片が数点出土している。なお、この溝は、SB 900・SB 901・SB 902などの北側を区画する目的をもって掘られたものと考えられ、これを境にして北と南では出土遺物に時代差が認められる。

SD 905 (図版29)

C 9区でSD 904にほぼ直交する小溝であり、C 8区で調査区域外にのびている。幅60cm、深さ10cmと浅い。SD 904との関係は、地山面がかなり汚れているため交わる部分は確認されなかったが、ほぼ直交しているほか、それ以南にはのびていない。遺物は出土しなかった。

SK 906 (図版29・110・112)

SB 901の北側柱列から1.5m隔たった位置にある土坑で、東西4.0m×南北2.9mのほぼ長方形で、深さ26cmである。覆土は、地山・焼土粒を少量含む黒褐色土が一様に入っている。覆土の状況はSB 901に類似している。出土遺物は、完形に近い須恵器杯・蓋があり、SB 901のそれと同時期である。なお、平面形では、竪穴住居とも考えたが、カマド・柱穴等の施設が検出されなかったことから土坑とした。

SK 907 (図版29・110・112)

SK 906の東側約50cmと近接した土坑で東西2.0m×南北2.7mの台形で、深さ20cmの大きさがある。覆土の状況及び出土遺物は、SK 906と全く同様であり、同一時期のものと考えられる。

SX 908 (図版30)

調査区の南西隅に位置し、関川段丘崖にむかって落ち込んでいる性格不明の遺構である。覆土は包含層と同様の黒褐色土である。出土遺物は、土師器・須恵器が比較的多量に見られる。なお、調査の観察によると、本遺構が段丘崖に切られていることが確認され、関川による段丘面(高田面)の形成時期を考える上での資料として興味深い。

2) 中 世

a. B 地 区

SE 311 (図版24)

G 23区にある円形の素掘井戸で、SB 275を切っている。長径2m、短径1.8m、深さは確認面から2.8mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。底面には厚さ40~60cmのゴミを含む黒色土があり、木製皿・曲物側板・底板・箸・棒状木製品・珠洲焼すり鉢(19)が出土している。これらの製品の表面は焦げているものが著しく多い。

SB 340 (図版22・106)

G 22・23区にある3間(5.3m)×3間(4.25m)の東西棟建物(東偏5度)である。柱間寸法は桁行・梁間とも不揃いで、しかも東側柱列と南側柱列が直交しない。掘立柱建物とするには再度検討を要する。柱掘形は径30~45cmの円形で、深さは20~60cmである。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。

SB 341 (図版22・106)

G 22・23区にある2間(4.15m)×2間(3.5m)の南北棟建物(東偏4度)である。西側柱列北第2柱は確認しえない。柱間寸法は、桁行2.1m等間、梁間1.75m等間と推定される。柱掘形は径30~45cmの円形で、深さは25~55cmである。柱痕跡は径約15cmである。

SE 327 (図版22・106)

G 22区にある円形の素掘井戸である。直径1.5mで、確認面から3.5mで底面に達する。底面は灰色砂質粘土層に達し、湧水が著しい。底面には厚さ30cm程の植物遺体等を含む黒色土があり、珠洲焼すり鉢(20)、

曲物の側板および底板が出土している。

SA 342 (図版22・106)

G 22区にある3間(5.8m)の東西方向(西偏4度)の柵である。柱間寸法はほぼ等間である。柱掘形は一辺25~35cmの方形で、深さ55~65cmである。掘形埋土は黒褐色土、柱痕跡は径8cmである。

SD 283 (図版22・23)

C・E 23区にある東西溝である。幅30~50cm、深さ5~25cmで西へいくに従い深くなる。覆土は黒褐色土で、重複するすべての遺構を切っている。

SB 345 (図版22・106)

G 22区にある3間(5.6m)×1間(北3.5m・南3.2m)の南北棟建物(東偏4度)である。柱間寸法は桁行が北から2.2m・1.7m・1.7mである。柱掘形は一辺40~70cmの方形で、深さ55~75cmである。覆土は黒味をおびた暗茶色土である。柱痕跡は径20cmである。

SE 344 (図版22)

G 22区にある円形の素掘井戸である。長径1.2m・短径1.1m、深さは確認面から1.8mである。内部充滿土は上面から黒灰色土・暗灰色土・黒色土で、ゴミ等を含む黒色土は存在していない。

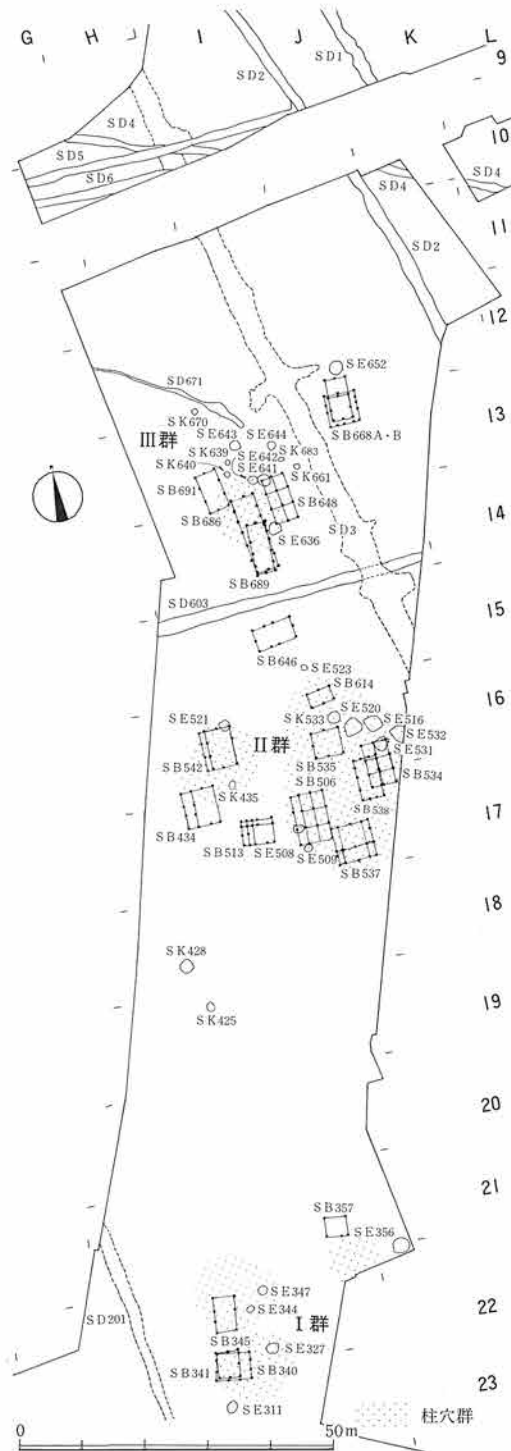
確認面から1.5m下の黒色土からは土師器・須恵器・珠洲焼などが出土し、木製品等の出土はない。

SE 347 (図版22・107)

G 22区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.5m、短径1.3mで、確認面から2.8mで底面に達する。底面は灰色砂質粘土層に達している。底面には厚さ30~40cmの植物遺体等を含む黒色土があり、自然木の樹枝・丸太材が出土している。

SB 357 (図版21)

H 21区にある3間(3.48m)×2間(3.25m)の東西棟建物(東偏10度)である。農業用水路による攪乱をうけ、北側柱列東第2・第3柱穴・南側柱列第3柱穴は確認しえない。柱間寸法は、桁行・梁間とも不揃いである。柱掘形は径30~45cmの円形で、深さは20~40cmである。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱



第50図 中世遺構配置図

痕跡は径約15cmである。南側柱列東第2柱穴が南東、南西隅の柱穴を結ぶ直線上に位置しないことから、桁行も2間であったと見るべきかも知れない。

SE 356 (図版21・107)

I 21・22区にわたってある円形の素掘井戸で、SD 355を切っている。長径2.6m、短径2.3m、深さ6～25cmの浅いくぼ地の南西寄にある。長径1.7m、短径1.5mで、確認面から2.8mまで掘り下げたが、湧水および側壁の崩壊が著しいため中断する。ボーリングによればあと約1mで底面に達する。内部充満土は上面から暗茶褐色土・灰黒色土・黒色土・暗灰色土となり、底面に至るものと思われる。3層目の黒色土からは植物の遺体やゴミのほか径15～20cmの割石が3個出土したのみで、人工的遺物は全く出土していない。

SK 425 (図版20)

G 19(4)区にある土坑である。長径1.4m、短径1.1mの楕円形で、深さは10cmと浅い。覆土は黒褐色土で、重複する畝状小溝より新しい。

SK 428 (図版20・107, 第51図)

G 18 (18・19)区にある土坑である。平面形はやや楕円形で長径2.2m、短径2.0mである。土坑底面には凹凸があり、側壁の一部に段を有する。本土坑は下層(3～6層)が堆積したのち、3層上面で火を焚いており、遺物は上層(1・2層)中より検出された(24)。

SE 508 (図版19)

I 17区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.5m、短径1.2m、深さは確認面から3.1mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から黒色土・暗褐色土・暗黒色粘土・暗灰色土となっている。確認面から2.3mの暗黒色粘土からは土師質土器(34)・珠洲焼片・火鑽白片が出土し、2.7m下の暗黒色土は植物遺体を含むゴミの層で、直径15cm前後の焼石と自然礫が出土している。

SE 509 (図版19)

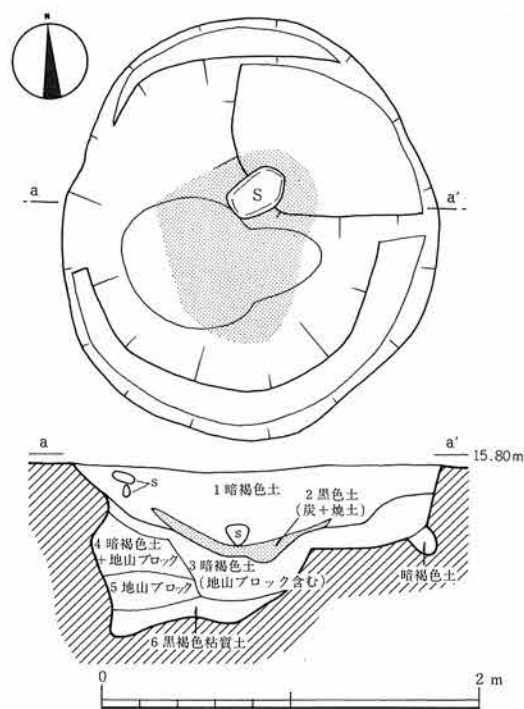
I 17区にある円形の素掘井戸である。直径1.3mで、深さは確認面から3.9mである。底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から黒色土・暗褐色土・暗灰色土となり、植物遺体等を含む黒色土は存在していない。現地表面下3.3mの暗灰色土から土師質土器(35)・自然木の樹枝・竹が出土している。

SB 506 (図版19)

I 17区にある3間(7.75m)×3間(5.3m)の南北棟有廂建物である。廂の北第3柱穴および南妻東第2柱は確認しえない。柱間寸法は、桁行2.58m等間、梁間1.95m等間に廂1.4mが付く。柱掘形は一辺40～50cmの方形で、深さは40～60cmであるが、廂および東側柱列には径約35cmの円形に近いものが多い。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。方位はSB 504とほぼ一致する。

SB 537 (図版19)

I 17区にある3間(5.75m)×4間(6.15m)の南北棟総柱の東西に廂を有する建物である。北側柱列東



第51図 SK 428実測図

第2・第4・第5柱穴はSB 504と重複する。方位は2度西偏し、SB 504とはほぼ一致する。柱間寸法は、桁行は北から1.75m・1.75m・2.35mで、梁間は東から1.85m・1.95mの身舎に1.2mの廂が東西に付く。柱掘形は径35～65cmの円形が多く、深さは20～60cmである。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。

SB 534 (図版19)

I・J 16・17区にある3間(6.6m)×2間(4.4m)の南北棟総柱建物(西偏5度)である。南東隅の柱穴は確認しえない。柱間寸法は桁行が北から2.1m・2.4m・2.1mで、梁間が2.2mの等間である。柱掘形は一辺30～50cmの丸味をおびた方形で、深さ40～60cmであるが、東柱のみ深さ12～20cmと浅い。掘形埋土は黒色土を主体とし、柱痕跡は径約15cmである。北妻の柱はSE 531に切られている。

SB 538 (図版19)

I・J 16・17区にある4間(6.5m)×3間(3.7m)の南北棟建物(西偏4度)である。柱間は身舎西入が4間、東入が3間と不揃いである。柱間寸法は東桁行が約2.2m等間、西桁行は北2間が1.5m等間、南2間が1.8m等間である。梁間は1.2m等間である。柱掘形は西入南から第1・2柱、東入南から第1～3柱が一辺35～60cmの丸味をおびた方形、ほかは径30cm前後の円形で、深さ30～50cmである。

SE 517 (図版19)

I 17区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.6m、短径1.1mで東側に小さな段がある。深さは確認面から2.8mで底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から黒色土・灰黒色土・暗黒色土・暗灰色土となっている。確認面から約2.3m下の暗黒色土は約50cmの厚さがあるが、小砂利を含み、若干の植物遺体を含む程度で、土器類・木器類は1点も出土していない。

SB 535 (図版19)

I 16区にある2間(4.55m)×2間(4.05m)の東西棟建物である。東側柱列北第2の柱穴はSD 518によって破壊され、遺存しない。方位は2度西偏する。柱間寸法は、桁行が東から2.45m・2.1m、梁間が北から2.15m・1.9mと不揃いである。柱掘形は径30～50cmの円形で、深さは55cm前後である。掘形埋土は黒色土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。

SE 516 (図版19)

I・J 16区にある楕円形の素掘井戸である。長径2.5m・短径1.5mで、深さは確認面から3.2mである。底面は灰色砂質粘土層に達する。内部充填土は上面から黒色土・灰黒色土・暗灰色土となり、植物遺体等を含む暗黒色土はない。確認面から約1m下の黒色土からは木片・珠洲焼片口鉢(12)・土師質土器(37・38)・刀子が、約3m下の暗灰色土からは大形曲物の側板や小形の曲物底板が出土している。大形の曲物側板は井戸枠として利用された可能性もあるが、出土量は多くなく、底面に据えられた状況でもない。

SE 520 (図版19)

I 16区にある不整形の素掘井戸である。長径2.6m・短径2.5m、深さは確認面から4.3mである。底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から、暗黒色土・暗灰色粘土・暗灰黒色土・暗灰色粘土(若干の植物性繊維を含む)である。確認面から80cm下の暗黒色土からは珠洲焼(32)・須恵器・砥石が、2m下の暗灰黒色土はゴミを若干含み、板材・折敷片・曲物底板が、3m下の暗灰色粘土下面から折敷片・曲物側板片が出土している。

SE 531 (図版19)

I・J 16区にある楕円形の素掘井戸で、SD 36を切っている。長径2.5m、短径2.0m、深さは確認面から

3.3mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から灰黒色土・暗黒色土・灰黒色粘土・暗灰色土である。確認面から2.2m下の暗黒色土中から直径10cm前後の自然礫（表面に煤が付着し焼けている）が6個、2.6m下の灰黒色粘土には若干のゴミが混じる程度で板材・木製紡錘車が出土している。

SE 532 (図版19)

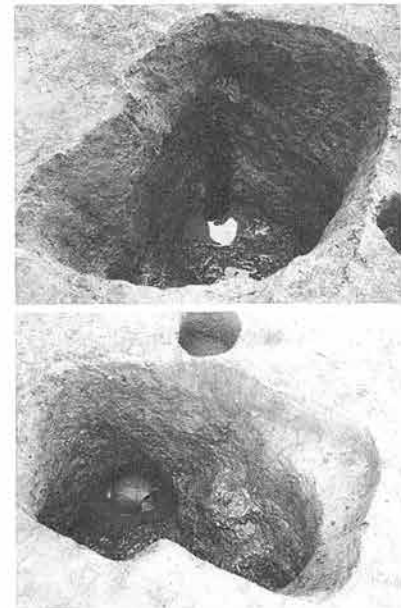
J16区にある円形の素掘井戸で、東側半分は法線外になっている。長径2.5mの大形井戸で、確認面から2.4mまで掘り下げたが、側壁の崩壊や湧水が激しいため途中で中断した。内部充満土は灰黒色土で、土師質土器(36)が1点出土している。

SK 533 (図版19)

I16区にある径約1.9m、深さ約55cmの土坑である。埋土は黒色土を主体とする。下部に投げ込みと思われる石がある。

SB 513 (図版19)

H17区にある4間(4.9m)×3間(3.9m)の東西棟建物(東偏2度)であり、柱穴の中には柱筋から若干ずれものがある。桁行の西第2・3柱の棟通り・梁間の北第2柱の棟通りの3ヶ所に間仕切りと思われる柱穴がある。北東隅の柱は用水路に破壊されている。柱間寸法は南北とも約1m・約1.2m・1.5~1.7mで一致する。柱掘形は径15~40cmの円形あるいは丸味をおびた方形である。掘形埋土は黒褐色土である。



第52図 SE435

SB 434 (図版19)

H17区付近にある建物で、方位は西偏5度である。東西3間(5.3m)、南北3間(5.8m)で、西側に廂をもつ。南北方向の柱列の柱間寸法は南北各1間が2.1m、中央が1.6m、廂の出は1.6mである。身舎の東側柱筋は2間と考えられる。柱掘形は径20~50cmの円形で、深さは20~50cmである。掘形埋土は暗褐色である。

SE 435 (図版19, 第52図)

H16(23)区にある井戸の可能性のある土坑である。平面形は長方形で東側が鉤形になっており、長軸135cm・短軸85~95cmである。深さは1.65mと井戸としては比較的浅く、北側に2つの段を有する。覆土は上層暗褐色土の下に堆積の厚い黄褐色土と薄い黒褐色土の相互層があり、最下層は黒色土である。南東隅には自然木が直立した状況で出土した。これは底面に10cm程食い込んでいる。また南西隅付近、確認面から約1m下の黒褐色土中からはほぼ完形の珠洲焼の甕(2)が出土している。

SB 542 (図版19)

H16区にある東西3間(5.0m)×南北3間(6.2m)の建物で、西側に廂をもつ。方位はSB434と同じく西偏5度である。柱間寸法は廂と身舎の西入側が、南北各1間が2.0m、中央が2.2m、廂の出は90cm、身舎の南北柱列は西より1.5m・2.5mである。柱掘形は径25~50cmほどの円形で、深さ25~60cmである。掘形埋土は暗褐色土である。SE521と重複するが、前後関係は不明である。

SE 521 (図版19)

H16区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.8m・短径1.5m、深さは確認面から3.3mである。西側に幅約30cmの段をL字状にもっている。底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から灰黒

色土・暗黒灰色土・暗灰色土となっている。確認面から2m下の灰黒色土からは直径20～30cmの焼石（表面が黒く、煤が付着し焼けている）が3個、2.5m下の暗黒灰色土には植物遺体を含み、木片・折敷・曲物側板が、3m下の暗灰色土には若干のゴミが混じり、青磁碗片（52）・珠洲焼のすり鉢片（18）が出土している。

SB 614（図版19）

I 16区にある2間（3.96m）×1間（2.22m）の東西棟建物である。方位は13度東偏する。桁行の柱間は1.98m等間である。柱掘形は一辺約35cmの方形ないし円形で、深さは25～50cmである。柱痕跡は径約15cmである。

SE 523（図版18）

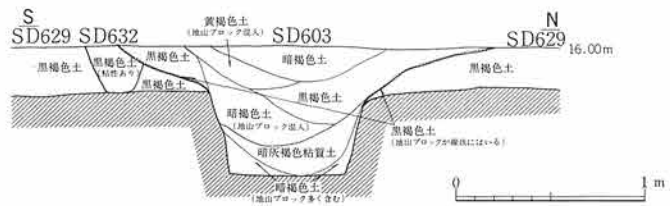
I 15区にある円形の素掘井戸である。長径1.0m・短径90cm、深さは確認面から2.3mで底面に達する。内部充填土は上面から底面まで暗黒色土である。確認面から約2.1mで植物遺体やゴミが検出され、このゴミの中より曲物の底板・木片の他に直径15～20cmの自然石（表面に煤が付着し焼けている）が7個出土している。

SB 649（図版18）

I 15区にある3間（6.4m）×2間（3.5m）の東西棟建物である。方位は10度西偏する。柱間寸法は桁行が西から1.8m・2.4m・2.2mと中央1間が長く両端が短い。梁間は約1.8m等間である。柱掘形は一辺30～60cmの丸味をおびた方形で、深さ40～65cmである。掘形埋土は黒褐色土で、SD 634の覆土を明瞭に切り込んでいる。

SD 603（図版18、第53図）

G 15区から J 14区にある東西溝である。方向は西偏3～4度で、幅約1m、深さ45～60cmである。底面の高さは東から西へ低くなる。断面は底面と壁面が角張る形で、底面はほとんど平坦である。覆土は自然堆積の暗褐色ないしは黒褐色土である。出土



第53図 S D 603断面図

遺物は少ないが、底面ちかい高さから珠洲焼の破片が出土している。南側にはSD 632が平行している。

SD 632（図版18）

G 15区から J 14区にあるSD 603と平行する幅20～30cm、深さ15～25cmの小さな溝である。覆土は粘性のある黒褐色土である。

SB 686（図版18）

I 14区にある6間（11.9m）×2間（3.65m）の南北棟建物（西偏7度）である。柱間寸法は桁行が北側1間が1.3m、2・3間が2.0m、4・5・6間が2.2mとなる。梁間は西より2.15m、1.5mとなる。柱掘形は径25～50cmの円形で、深さは25～60cmである。掘形埋土は黒褐色で、SD 633・SD 634を明瞭に切り込んでいる。

SB 689（図版18）

I 14区でSB 686と重複する位置にある5間（7.9m）×2間（3.0m）の南北棟建物（西偏1度）である。柱間寸法は桁行が北より1.5m・1.4m・1.9m・1.2mであり、梁間がほぼ等間である。柱掘形は径25～50cm

の円形で、深さ20～60cmである。掘形埋土は黒褐色で、SD 633・SD 634を切る。SD 686との切り合い関係は不明である。

SE 636 (図版18)

I 14区にある円形の素掘井戸で、南側は新しい攪乱で上面はこわされている。長径2 m、短径1.8 m、深さは確認面から3.1 mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から灰黒色土・暗黒色土・灰黒色土(ゴミ混入)である。確認面から2.5 m下の灰黒色土(ゴミ混入)からは、曲物底板・漆器・白磁碗片(50)・珠洲焼(10)のほかにも表面に煤が付着し、焼けている自然石と割石が合計3個出土している。

SB 648 (図版18)

I 13・14区にある3間(7.0 m)×2間(3.5 m)の南北棟建物(西偏10度)である。SB 687と方向が一致する。束柱が存在する。柱間寸法は桁行が北より2.3 m・2.5 m・2.2 mで、梁間ではほぼ等間である。柱掘形は径25～40 cmの円形で、深さ25～50 cmである。掘形埋土は黒褐色で、SD 633・SD 634を切る。方向からみてSB 687と同時存在と考えられる。

SE 641 (図版17)

I 13区にある円形の素掘井戸で、SD 611を切っている。直径1.8 m、深さは確認面から2.1 mで底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から暗茶褐色土・黒色土・灰黒色土である。確認面から1.3 m下の暗茶褐色土から土師器・須恵器が、1.9 m下の黒色土から長径約45 cm、短径20 cm弱の扁平な石と須恵器が出土している。

SE 642 (図版17)

I 13区にある素掘の円形井戸である。直径1.4 m、深さは確認面から3 mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から灰黒色土・暗灰色粘土・灰黒色粘土・灰黒色土(ゴミを含む)である。確認面から2 m下の灰黒色粘土から木片・箸が、2.5 m下の灰黒色土(ゴミを含む)から、内面に楓をあしらった黒漆塗小皿・匙・板材のほかにも自然木・ヨシなどが出土している。

SB 691 (図版17・18)

H 13区にある3間(6.0 m)×2間(3.3 m)の南北棟建物(西偏13度)である。柱間寸法はやや不揃いであるが、桁行では中央が、梁間では東側が長い。柱掘形は径30～50 cmの円形で、深さ30～50 cmである。

SE 661 (図版17)

I 12区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.2 m、短径1 m、深さは確認面から2.8 mで底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から黒色土・暗灰色土・黒色土(ゴミを含む)である。確認面から2.3 m下の黒色土からは板材・箸などの木製品のほかにも樹木の枝・丸材が出土している。

SE 644 (図版17)

I 13区にある楕円形の素掘井戸である。長径1.3 m、短径1.1 m、深さは確認面から92 cmで、ほかの井戸に比して深さは非常に浅い。内部充填土は上面から底面まで黒褐色土の単層で、土師器片が2～3点出土したにすぎない。

SE 643 (図版17)

I 13区にある隅丸方形の素掘井戸である。長径1.6 m、短径1.4 m、深さは確認面から3.6 mで、底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から黒色土・黒灰色土(ゴミを含む)である。確認面から1 m下の黒色土より須恵器・土師器・珠洲焼(26)などの土器類のほかにも直径20～30 cmの自然礫が25個、2.8 m下の暗黒色土から木材片や棒状木製品と表面が黒く焼けた自然石が6個出土している。

SK 639・SK 640・SK 670 (図版17)

SK 639・SK 640はI 13区, SK 670はH 12区にある径約1 mの円形の土坑である。覆土は周辺の井戸の上層と同様の黒褐色土であるが, SK 639は深さ70cm, SK 640は深さ85cmと浅く, 井戸とは考えられない。ただし, SK 670は深さ1.9mと深い, 井戸か否かは不明である。ともに出土遺物は皆無である。

SD 671 (図版17)

G～I 12・I 13区にある南東から北西にのびる溝である。幅は20～35cm, 南側端部で1.8mと広がる。深さは3～20cmで北東方向へ徐々に浅くなる。覆土は黒褐色土で重複するすべての遺構を切っている。出土遺物はきわめて少量であり, 須恵器片しか出土していないが覆土が付近の中世のピットと同一の黒褐色土であることから中世の溝と思われる。

SK 626 (図版17)

J 12 (25) 区にある土坑である。平面形は隅丸方形で一辺85cm, 断面形はコの字形で深さ1.1mである。覆土は黒褐色土で, 重複する小溝を切っている。下層より珠洲焼片が出土している。

SB 668 A (図版17)

J 12・13区にある3間(約7m)×2間(約3.3m)の南北棟建物(西偏1.5度)であり, 桁行の北第2柱の棟通りに間仕切りかと思われる柱穴がある。柱間寸法は桁行が1.9～2.7mと不揃いであり, 梁間は1.5m・1.8mである。柱掘形は上面が一辺25～45cmの丸味をおびた方形で, 底面は円形となり, 深さは30～50cmである。掘形埋土は黒褐色土で, やや大形の柱穴には地山土が若干含まれる。埋土が黒く, 柱痕跡は不明であるが, 底面径から15cm以下と思われる。SB 668 Bとは重なっているが, 発掘調査中に確認されたのはAのみであり, 柱穴もAの方がやや大形でしっかりしている。

SB 668 B (図版17)

J 12・13区にある間数不整の建物(西偏0.5度)であり, 東西柱筋(4.8m)は北が2間, 南が4間であり, 南北柱筋は西が3間(5.1m), 東が4間(4.9m)である。柱間寸法も一定していないが, 東側柱筋の北第1・4柱間が約1.5m, 北第2・3柱間が約90cmである点に規則性がうかがえる。柱掘形は径25～45cmの円形あるいは丸味をおびた方形で, 深さ15～45cmである。掘形埋土は黒褐色土で, 柱痕跡は不明である。SB 668 Aと重なっており, 整理作業の時点で確認したものである。

SE 652 (図版16)

J 12区にある円形の素掘井戸である。直径2.2m, 深さは確認面から3.1mで底面は灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から黒色土・灰黒色土・暗灰色土・黒色土(ゴミを含む)である。確認面下1.3mで土師器片・須恵器片が, 2.5m下の黒色土(ゴミを含む)から平瓦片・鍬の柄・黒漆塗椀・フック状のものがさし込まれた木製品や自然木が出土している。また, 直径10～25cmの表面が焼けた自然礫が4個出土している。

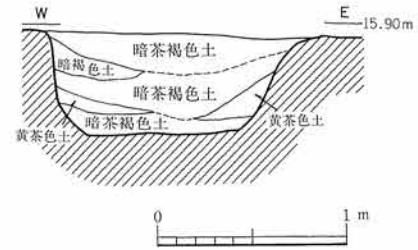
b C 地区

SD 1 (図版12・14・86, 第54図)

C地区のI 6区からK 9区にある西偏約25度の溝である。幅約1.5m, 深さ50～60cmの比較的大きな溝である。底面の高さは南から北へ低くなる。覆土は暗褐色土が主体で, 地山ブロックを含んだ流れ込みの層が両側にみとめられる。出土遺物は中世のものを含み, 磨滅したものが多い。耕地整理前の農道に沿った位置にあり, 時期は中世以降と考えられる。

SD 2 (図版12・14・86)

C地区のI7区からJ9区, B地区のJ10区からK12区にある溝で, 方向はSD 1と平行である。幅1.5~2.0mで, 南ほど広く, 深さは30~50cmで, 南ほど深くなっている。覆土は暗褐色土で, 下層ではこれに地山ブロックが混入する。出土遺物は少ないが, 越前焼かと思われる破片がある。



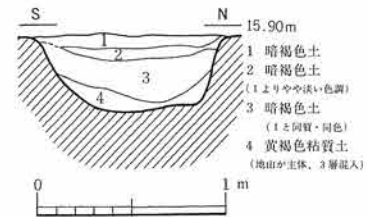
第54図 SD 1 断面図

SD 4 (図版13)

C地区南端のH9区からI10区にある溝で, 方位は東偏18度である。B地区ではK10区からL11区にのびる。幅約1m, 深さ30~40cmである。B地区の東端では断面がV字状にちかくなる。覆土は暗褐色で, 出土遺物は少ない。

SD 5 (図版13, 第55図)

C地区の南端にある東西溝である。方位は西偏3度で, SD 603と平行である。幅約1m, 深さ40cmで, 覆土は暗褐色土を主体とする。南側に2.5~3mの間隔をおいてSD 6が平行にのびている。この2本の溝の間は道の可能性が考えられる。出土遺物はほとんどない。SD 4よりも新しい。



第55図 SD 5 断面図

SD 6 (図版13)

C地区の南端にある東西溝である。方向はSD 5とほぼ平行である。幅は1~1.4mで東へいくほど広く, 深さも同様に西側が浅く(約20cm), 東側が深い(50cm)。覆土はSD 5とほぼ同じで, 出土遺物はごく少ない。

SD 54 (図版11)

C地区のI5区からJ5区にある幅約50cm, 深さ15cmほどの溝で, 覆土は暗褐色土である。方向はSD 1とほぼ直交する。

3 遺 物

A 奈良・平安時代

1) 土 器

今池遺跡で出土した奈良・平安時代の土器は遺構と包含層を含めて、全体でコンテナ約100箱である。したがってすべての土器を網羅して報告することは不可能であり、ここでは出土量の多い遺構の出土土器に重点をおき、そのほかの遺構と包含層出土の土器は特徴のあるものに限って図化した。今池遺跡では良好な一括土器と考えられる資料がいくつかあり、奈良・平安時代の8世紀から9世紀の土器様相がほぼ把握しうるものと考えられる。頸城地方を含めて、越後の当期の土器様相が解明されていない現状では、こうした一括土器の分析がとくに要請され、かつ今池遺跡群の遺構の変遷の把握にも不可欠の作業である。

今池遺跡出土の土器は実年代で8世紀から9世紀のものが大半で、一部は10世紀にくだるものと考えられる。土器は須恵器・土師器が大半で、わずかに緑釉陶器・灰釉陶器が含まれる。

須恵器 胎土・色調や手法の特徴により、いくつかの生産地から供給されていることが推察される。これらの須恵器のおもな生産地は現在知られている頸城平野の窯跡・窯跡群¹⁾であると判断される。しかし、須恵器窯の発掘調査はほとんどおこなわれておらず、各窯跡・窯跡群の実態は不明確であり、消費地の製品との対比・同定は容易ではない。そのため、胎土・色調などによる分類はしていない。器種は供膳形態では高台をもたない無台杯、高台をもつ有台杯、有台杯と対をなす杯蓋が主体で、高杯や稜椀などが若干ある。杯では身が深く、椀あるいは鉢と呼称するのが適当なものもあるが、無台杯・有台杯に統一した。ただし、身が比較的浅く、もっとも一般的なタイプを有台杯A、身が深くて大形のタイプを有台杯B、身が深くて小形のタイプを有台杯Cと分類した。杯類のうち、法量によりさらに分類されるものはそれぞれのなかで分類した。貯蔵形態では長頸瓶(壺)・短頸壺・小瓶・有耳瓶・横瓶・甕などがある。これらはいずれも器種が豊富であり、かつ全体の器形が不明なものも多く、すべてのものについて明確な器種分類はなしえなかった。短頸壺にも蓋をもつものがあり、これは杯蓋と区別する意味で壺蓋とした。

土師器 煮沸形態と供膳形態がある。8～9世紀ではこれらのうちとくに供膳形態のあり方が大きく変化している。すなわち、8世紀代ではほとんど供膳形態がみられないが、9世紀では須恵器の供膳形態と交代する傾向が顕著になる。供膳形態は須恵器の杯類とは器形が異なるものもあり、椀ともすべき器形もあるが明確な基準がないため杯とし、高台をもつものを椀とした。煮沸形態は甕と鍋があり、甕はほとんどみられない。土師器は8世紀前半頃までは古墳時代以来の製作技法を踏襲するものと、ロクロを使用し叩き技法をもった須恵器の製作技法と共通するものの2者が存在する。かつてこれらをそれぞれ「土師器A」・「土師器B」とし、その歴史的背景についても言及したことがある²⁾(第56図)。土師器Aの甕は安定した平底で、胴部内外面を刷毛目、口縁部内外面を横撫でする。土師器Bの甕は丸底で胴部上半をロクロ撫でかき目、下半を縦方向に篋削りする。なかには叩き目をそのまま残すか、痕跡が残るものもある。土師器Aは甕のほかに、鉢・甗などがあり、土師器Bには杯・鉢・鍋などの器種がある。土師器Aの胎土は

1) 第4図参照

2) 坂井秀弥『栗原遺跡』第6次調査概報(前掲)

土師器Aは「非ロクロ土師器」、土師器Bは「ロクロ土師器」という区別も一面ではできる。

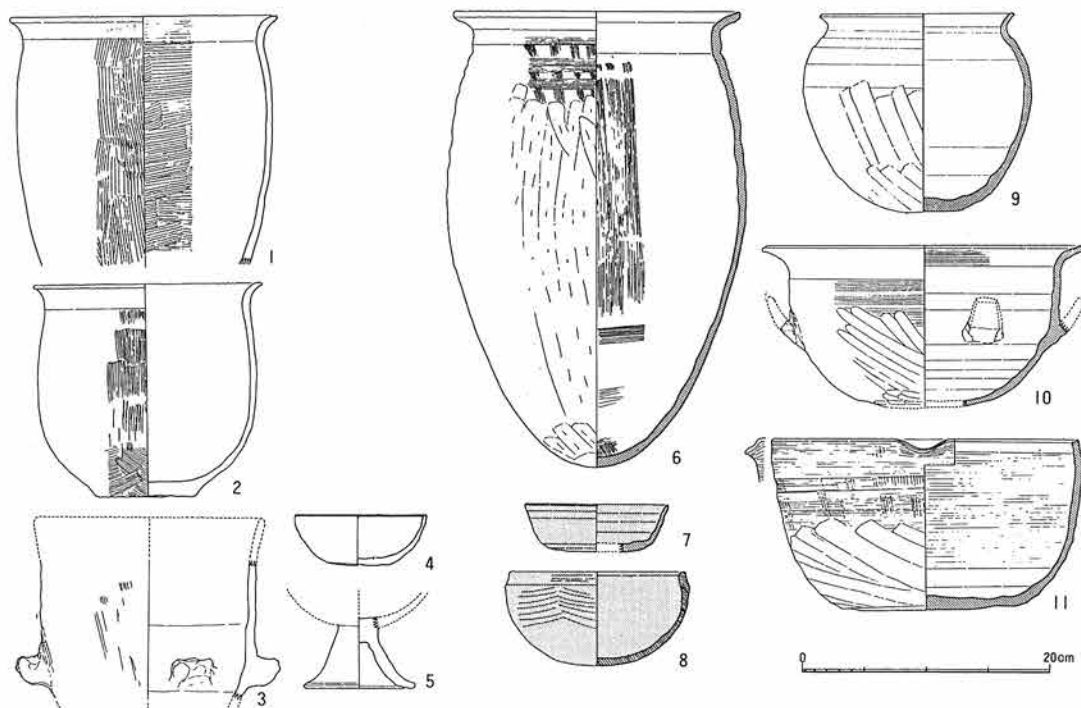
2～3mm大の小礫を多く含み、土師器Bの胎土は小礫が散見されるものの、相対的に土師器Aより精良である。色調は土師器Bが明るい。土師器Bは須恵器の製作技法と一致する点が多く、須恵器工人の関与が想定され、この成立は須恵器生産の開始とともに「律令的土器生産体制」の成立を示唆するといえる。今池遺跡ではもっとも古い時期の土師器に土師器Aがみられるが、大部分は土師器Bであり、とくにことわらない限り土師器は土師器Bをさすこととする。

施釉陶器 SD 3 IV層出土土器に緑釉陶器が1点あり、灰釉陶器はA地区を中心に数点存在するのみである。

以下、個別に説明を加えるが、まず良好な一括土器を述べ、そののちにその他の遺構と包含層のものについて述べることとする。今池遺跡の土器は8世紀から9世紀までの時期にほぼ集中し、この間を4基の土坑と2つの溝の一括土器と単純な時期相を示すA地区の土器によって、その変化を把握することが可能である。もとより、消費地での資料であるため、一括土器といえどもある程度の時期幅は当然のこととして考慮される必要があり、事実、明らかに時期が遡ると思われるものが共伴する例は多い。しかし、一方では須恵器窯という生産遺跡では望めない土師器との共伴関係が知られ、生活に即した土器構成の実態を把握することが可能である。これによって、土器様相の変化が鮮明にとらえられる部分もあるかと思われる。このことを念頭におき、一括土器の標準資料を年代順にみれば、第7表のごとくなる。なお、SK 257とSK 102は若干の時期差があるようであり、また、それぞれの一括土器は互いに重複する時期もあると思われる。実年代については決定する根拠は直接的にはまったくないが、畿内平城宮編年と対比可能な新井市栗原遺跡 SD 25一括土器、畿内からの搬入品でしかもある程度時期が限定される特殊な須恵器の小形長頸瓶（平城宮分類「壺G」）、施釉陶器との共伴関係がおおよそその手がかりである。子安遺跡・下新町遺跡を含めた8世紀から10世紀の土器編年については「第VI章考察」

第7表 一括土器の年代

	基準資料	年代
I	A地区(古)	8C前半
II	SK 24	8C中葉
III	SK 21B	8C後半
IV	SK 257 SK 102	8C末～ 9C前半
V	SD 201一括	9C前半～ 中葉
VI	SD 3VI層	9C後半



第56図 土師器Aと土師器B (新井市栗原遺跡出土土器 土師器A：1～5 土師器B：6～11)

において、その概要を述べることにしたい。

a) SK 24出土土器 (図版31・130)

SK 24はC地区のL 3区にある大形の土坑で、当地区ではSK 21に次ぐ土器の出土量がある。この土坑は深さが約1.3mあり、覆土は暗黒色の木炭を多く含む層を介して、大略2つに弁別される。これより上は自然堆積層、これより下は人為的な埋土と考えられる。土器はこのうち、上層に多く出土しており、資料の一括性はやや不安定であると思われる。下層出土の土器は5・6・21・24・30である。土器の出土個体数は概算で約100点位と推定されるが、土師器は小破片が多く個体数は不分明である。須恵器杯類はすべて篋切りである。これらの土器は8世紀中葉前後(Ⅱ期)に比定される。

須恵器

無台杯・有台杯・長頸壺・短頸壺・横瓶・大甕がある。長頸壺・短頸壺・横瓶は各1点で、大甕の胴部破片は叩き目の種類では3~4種存在する³⁾。

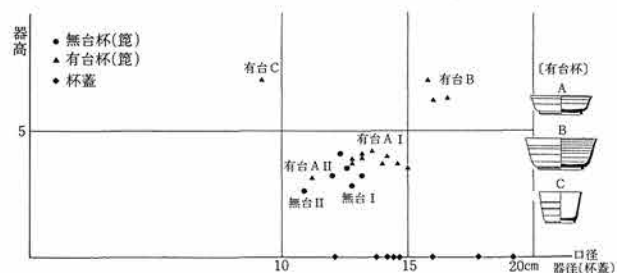
無台杯(1~6) 法量から無台杯Ⅰ(2~6)と無台杯Ⅱ(1)のほぼ大小2器種に分類される。小さい無台杯Ⅱはごく少ない。無台杯Ⅰは口径12.0~13.2cm・器高2.8~3.5cm、無台杯Ⅱは口径10.9cm・器高2.6cmで、両者の径高指数⁴⁾は約25と共通している。底部は篋切りで、器壁が厚く、丸味をもつ。体部との境は丸く不明瞭で、体部下位はやや張る。口縁部は器壁が薄くなり、わずかに外反するものもある(2・6)。端部は丸くおさまる。体部から底部内面はロクロ撫で⁴⁾で、5は内面中央に撫でを加える。体部外面はロクロ撫でが丁寧で、凹凸は少ない。いずれも焼成は堅緻で、胎土精良である。色調は灰色で、口縁部外面が重ね焼きにより黒変する。6の底面には3本の平行の篋刻線がある。

無台杯Ⅱは、1以外にほとんど同じ器種がない。底部篋切りで、ほかはロクロ撫でである。体部下端はややくぼむが、そのほかの諸点は無台杯Ⅰと共通する。

有台杯(7~21) 法量からみて、身が浅い有台杯Aでは大小2種(有台杯AⅠ・有台杯AⅡ)のほか、身の深い有台杯B・有台杯Cがある。いずれも胎土・焼成などほとんど共通する。有台杯Aでは径高指数23~30である。

有台杯AⅠ(8~16)は身が浅くて大きいもので、口径13~15cmとやや幅があり、さらに2つの器種に細分される可能性をもつ。これに対応する杯蓋は2種に分離する。器高は3.5~4.2cmである。杯部は無台杯Ⅰとほぼ同じ形態と特徴をもつ。底部から体部のたちあがりは丸味をもち、やや腰が張り、口縁部は外反する。高台はやや内面に付され、接地面がロクロ撫でによりくぼみ、おおむね内端接地となる。底面は篋切りで粗い撫でがなされ、ほかはロクロ撫で⁴⁾で、内面中央にかるく撫でを加えるものがある(9・13)。

有台杯AⅡ(7)は身が浅くて小さいもので、口径11.4cm・器高3.2cmである。個体数は少ない。形態と手法の特徴は有台杯AⅠと共通する。内面全体に自然釉がかかる。



第57図 SK 24出土須恵器杯・杯蓋法量分布図

3)調整技法の呼称は基本的に奈良国立文化財研究所『平城宮報告書』にしたがった。

4) 径高指数 = 器高 ÷ 口径 × 100

有台杯B(18~20)は身が深くて大きいもので、口径15.6~16.6cm・器高6.2~7.0cmである。18の体部外面中位には一条の篋による沈線がめぐり、金属器を模作したものである。これは体部内外面のロクロ撫でが丁寧であり、底面の全面にロクロ削りが施されることから、とくにつくりのよいものである。これを含めて、身が深いことをのぞけば、形態は有台杯Aと共通し、高台もとくに高くはない。底面はいずれもロクロ削りされ、内面中央には撫でが加えられる。器壁が厚く、大形であることから、とくに重量感がある。17は有台杯Bと考えられる。

有台杯C(21)は身が深くて小さいもので、体部外面に2条の沈線がめぐり、器面のロクロ撫では丁寧であり、きれいな仕上がりである。底面は篋切り痕をそのまま残す。有台杯Cとしては金属器模作品で、器高が高いなど特殊例とみられる。

杯蓋(23~32) 有台杯に対応する蓋である。23は口径12.2cmで有台杯AⅠ(7)と、24~28は口径14~16cmで有台杯AⅡとそれぞれ対応するものと思われる。31・32は口径17.8~19.2cmであり、身の深い有台杯Bと対応する可能性もあるが、身の浅い有台杯でさらに大きいものが存在することも考えられる。

23はほかのものより器径に対し、やや器高が高く、天井部は水平で、縁部に段をもつ。端部は折り曲げるようにしてつくり、その下端は丸い。つまみは小さく中央がわずかに突出する。天井部は篋切り痕を残し、ロクロ削りはなされない。ほかはロクロ撫でである。口縁部に歪みがあり、粗雑なつくりである。

24~28は27をのぞくと口径14cm前後となる。天井部はほとんど水平で、器高は低く、全体に偏平である。縁部はわずかに屈曲し、周縁部が高くなる。屈折した端部は長くはなく、25をのぞいて細く尖り気味である。つまみは24が器径に比し比較的大きく偏平であり、ほかは中央がくぼむ。24は天井部のロクロ削りがなされず、篋切り痕を残す。ほかはロクロ削りがなされているが、丁寧なものではない。24・29は内面中央にさらに撫でを加える。28の内面にはわずかに墨痕がみられるが、顕著な磨滅はみられない。

31・32は天井部中央を欠く。32が端部の下への屈折が長く、古い要素がみられる。

以上の杯蓋の胎土・焼成・色調などはやや多様であり、形態などからも生産地のちがいや若干の時期幅は存在する可能性がある。

長頸壺(22) 口縁部のみ遺存する破片で口縁端部も欠く。外面に篋による浅い沈線がめぐり、全体の器形は不明である。

短頸壺(33) 口頸部を欠く。肩が張る胴部に低い高台が付される。胴部下半は器壁が厚く、上半は薄い。外面にはかすかに平行叩き目が残し、下半がロクロ削り、ほかはロクロ撫でである。内面下半と外面に淡緑色の自然釉がかかる。

甕(第58図) 良好な例は少ない。第58図は外面に斜格子叩き目、内面に同心円叩き目を施すものである。

土師器

土師器は遺存状況が不良なものが多く、復原できるものは少ない。器種は甕だけである。ロクロを使用したもの(土師器B)が大半で、土師器Aはごく少数散見される程度である。

甕(34~40) 35~37は口縁部で、35がロクロを使用した土師器Aである。37は口縁端部に面をもつが、35・36は丸くおさまる。大・中・小ほどの区別はあるようであり、35は小形品、36・37は中形品かと思われる。38~40は胴部破片である。

38は上半部で縦方向の撫でののちにロクロ撫でしてある。39は胴部下半と思われ、縦方向の篋削りであり、40は叩き目をそのまま残す。甕の可能性のある34はかなり磨滅しているが、内面にはロクロ撫でと思



第58図 S K24出土須恵器甕拓影

われる凹凸がみられる。底面は撫でかと思われ、黒斑がある。胎土は2~3mm大の小礫が散見されるが、淡褐色を呈し、土師器Bに共通する。

b) SK 21 B 出土土器 (図版32・130)

SK 21はC地区のL・M 4区、SE 20の西側にある大形の土坑であり、土器の出土量が多い。この土坑は、部分的に覆土が異なっており、これによってSK 21 AとSK 21 Bとに区分した。SK 21 Aは北西側で、覆土は黒っぽく軟質であり、SK 21 Bは南東側でSE 20に接する位置にあり、覆土はSK 21 Aよりも灰色がかり、硬質である(第24図)。両者の区分は不明な部分もある。それぞれの土器様相はかなり近似し、同一個体の破片が両者から出土しているものも含まれているが、ここでは分けてとりあつかうこととする。

SK 21 Bの土器は須恵器が多く、土師器が少ない。須恵器の器種は杯類がとくに多く、器種構成に特殊性がみられる。時期は8世紀の後半を中心とする時期(Ⅲ期)に比定される。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・広口鉢・大甕などがある。無台杯には底部糸切りが若干例みられる。⁵⁾

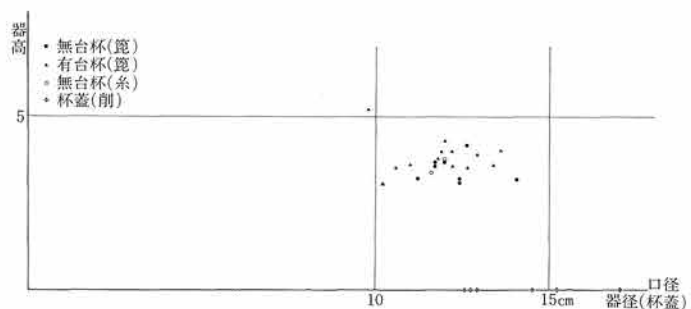
無台杯(47~56) 55・56は底部糸切りであり、ほかは篋切りである。

篋切りの無台杯(47~54)は口径11.2~14.0cm・器高は3.1~4.2cmである。これらのうち、口径の大きい54と器高が高い53をのぞくと、口径11.2~12.4cm・器高3.1~3.4cmとなり、ほとんど法量差はない。53は底部がとくに丸く、体部のひらきが大きいなど特異な器形であり、ほかのものとは明瞭に区別される。47~53を無台杯Ⅰ、54を無台杯Ⅱとする。

無台杯Ⅰ(47~53)は、径高指数約30で、51・52をのぞくと底部はかなり丸い。器壁は51以外厚い。体部のひらきは直線的で、端部は丸くおさまる。51は底部が水平よりややくぼむこと、体部外面のロクロ撫での凹凸が顕著なことから、ほかのものより新しい要素がうかがえる。調整はいずれも底部に篋切り痕を明瞭にとどめ、そのほかはロクロ撫でである。内面中央に撫でを加えるものはない。

無台杯Ⅱ(54)は量が少なく、明確に一器種として存在しないものと思われる。54は口径14cm・器高3.2cmで、径高指数は約23で器形は扁平である。全体の器壁は厚い。底面は篋切りで、ほかはロクロ撫で、内面中央に撫でを加える。

糸切りの無台杯は55・56である。糸切りのものの数量は篋切りに対してかなり少なく、概算で6対1程度であろう。これらの色調は淡黄灰色を呈し、篋切りのものと区別され、やや軟質な感じを与える。口径約12cm前後・器高3.5cm前後で、法量は篋切りの無台杯Ⅱと同じであり、器形も類似している。すなわち口径と底径の差が比較的小さく、体部のひらきも大きくない。底径指数は、約60⁶⁾である。こうした特徴は糸切りの無台杯のなかでは古い要素として指摘されよう。糸切りの条線が太いこともこの一要素かもしれない。底面は糸切り不調整で、ほかはロクロ撫でである。篋切りのものに比して、底部内面の凹凸は少ない。口



第59図 SK 21 B 出土須恵器杯・杯蓋法量分布図

5) 静止の糸切り例はなく、すべて回転糸切りであり、篋切りもすべて回転篋切りである。下新町遺跡・子

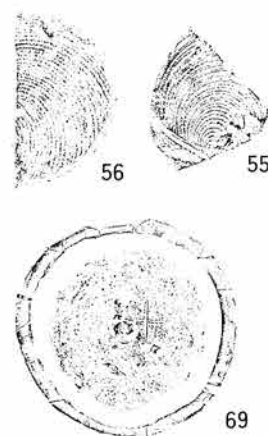
安遺跡も同様である。

6) 底径指数=底径÷口径×100

縁部外面に重ね焼きによる黒変がみられる。

有台杯 (57~73) 有台杯Aと有台杯Cがある。有台杯Aでは法量分布からみると、明瞭な分化はみとめられないが、口径11cm前後のもの(有台杯AⅡ, 57~59)とそれ以上のもの(有台杯AⅠ, 60~70), に分けられるようである。71・72は口縁部を欠いているが大ぶりであり、身の深い有台杯Bの可能性が高い。径高指数は有台杯Aが27~36で、SK 24出土のものよりかなり大きい。

有台杯AⅠ(60~70)は口径12cm前後で相対的に径高指数の大きいもの(60~65)と13cm前後で相対的に径高指数の小さいもの(66~70)とにさらに細分される可能性をもつが、さほど明瞭ではない。口径の小さいものでは比較的身が深く、口径の大きいものは浅い。底部は器壁が厚いものもある(63・67)が、薄いものもある(60・62)。底部から体部は丸いものが大半であるものの、60のように若干角張るものもある。60は底部が薄いこと、体部と底部の境が明瞭なこと、体部が直線的であり口縁部が外反しないなど、ほかのものとは異なっている。ほかはおおむね体部は丸味をもってたちあがり、口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。64は口縁部が外反しない。高台は60と64がほかと異なる。大部分は接地面がロクロ撫でによりくぼみ、内端接地となる。これに対し60は底部との接合部分がとくに小さく、接地面が外方へのびており、64は内端が高く、外端接地となる。底部は篋切り、ほかはロクロ撫で、内面中央に撫でを加えるものはない。69の底面に「十」の篋記号がある。



第60図 SK21B出土須恵器
杯底部拓影 1:3

有台杯AⅡ(57~59)は57・59が有台杯Ⅰと形態が類似しているのに対し、58はやや異なる。すなわち、体部の器壁がとくに薄く、直立気味にたちあがって、口縁は外反し、底部は中央がくぼむ。さらに高台は底部のやや内側に付されている。色調は青灰色で、ほかのものと区別され、生産地の違いか時期差を示す可能性がある。

有台杯C(73)は1点のみである。口径9.8cm・器高5.2cmで、体部のひらきはやや大きい。高台は外端接地で、高台外周に貼り付け痕が明瞭に残る。

以上のほか72は身の深い形態の可能性をもつ。底部と体部の境は明瞭であり、底面にはかすかにロクロ削りが観察され、糸切りの可能性もあろう。

杯蓋(74~79) 杯蓋は有台杯に比し遺存度のよいものが少ない。いずれも天井部はロクロ削りで切り離し技法は不明である。口径は74~76が13cm弱(杯蓋Ⅱ), 77・78が15cm前後(杯蓋Ⅰ), 79が17cm(杯蓋Ⅲ)とほぼ三分される。74~76の小形品は全体の器壁が薄く、大形品は厚い。形態では76の天井部が笠形となるほかは、水平かなだらかであり、78は縁部の屈曲がなくそのまま端部となる。ほかは縁部が屈曲したのち端部となる。つまみは76が擬宝珠状となり、77・79は中央の突出がやや小さい。内面中央に撫ではみられない。76・77の天井部には厚く自然釉がかかる。76は内面がなめらかなことと器壁が薄いことから、糸切りと考えられる。

広口鉢(80) 口径25.4cm・器高17.4cmを測る。短く開く口縁部は端面をもつ。体部下半はロクロ削りで、その上はカキ目、体部内面下部は撫で、その上はカキ目である。口縁部は内外面ともロクロ撫で、底面はロクロ削りである。全体の1/6破片で、SK21Aからも同一個体の破片が出土している。

大甕(81) 口径24.0cmで、口頸部は短くひらき、端面をもつ。胴部内面は同心円叩き目、外面は平行叩き目のちにカキ目を加える。口縁部はロクロ撫でである。

土師器

土師器はごく少ない。杯と甕がある。

杯 (82) 内面黒色処理・篋磨きを施す。外面は磨滅して不明瞭ながら、一方向の篋削りのようである。このほかには杯はみられない。

甕 (83~85) 83・84は底部である。83はほとんど表面が剝離し不明であるが、84は底面が糸切り不調整であり、内面にはロクロ撫でによる凹凸がある。いずれも胎土に2mmほどの小礫を含む。84は外面が茶褐色に変色する。85は口縁部であり、内外面ロクロ撫でである。口縁部は直線的にひらき、端部は丸くおさまる。胎土は精良である。

c) SK 21 A 出土土器 (図版32・33・130・131・140)

SK 21 A 出土土器は様相がほとんど SK 21 B と同じである。わずかではあるが、新しい時期のものが含まれている。土器の大半は須恵器であり、しかも杯類が量的に卓越していることは SK 21 B と同様である。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・大甕・有耳壺などがある。

無台杯 (87~94) 93・94が糸切りで、ほかは篋切りである。篋切りの92と糸切りの93はほかよりも新しい時期と考えられる。

篋切りの無台杯 (87~92) は口径11~12cmのものに限られ、単一の器種とみられる。器高は3~3.5cm前後である。92は器壁が薄く、口縁部内面がくぼむなどの特徴から SD 3 IV 層出土土器に典型的なタイプとみられ、時期的にも新しい。これ以外はほとんど形態・手法は共通する。底部はわずかに丸みを持ち、体部は直線的にたちあがり、口縁部は外反せず丸くおさまる。底面は篋切り痕をそのまま残し、ほかはロクロ撫でである。88と91には篋記号がある。88は内面中央に「八」字状の線、91は底面に二本の平行線がみられる。このふたつは外面に火だすきがみられる。すべて口縁部外面に重ね焼きによる黒変がある。胎土にはいずれも3~5mm大の小礫が含まれる。

糸切りの無台杯 (93・94) は量的に少ない。93は形態・手法・胎土などが SD 201一括土器に典型的なタイプで、87~91の無台杯とは時期が異なるものと考えられる。94は灰色を呈し、底部の器壁が厚く、93とは異なる。口径11.8cm・器高3.5cmで、篋切りのものと同じ大きさである。ただし、口径と底径の比率が2対1であり形態は異なる。底部はわずかに中くぼみとなり、体部下端はくぼむ。口縁部は外反する。底部内面はロクロによる凹凸がほとんどなく底部と体部の境は沈線状となっている。内面はよく磨滅する。

有台杯 (95~108) 107・108が糸切りのほかはすべて篋切りである。108は SD 201一括土器や、SD 3 IV 層出土土器にみられるもので、時期的に新しいと考えられる。

篋切りの有台杯 (95~106) は A タイプばかりで、口径は約10cm~14cmまでの幅がある。形態その他では SK 21 B と共通している。97~102が有台杯 A II で103~107が有台杯 A I である。これらのなかで口径11cm前後の97・98は SK 21 B の52と共通する特徴をもつ。すなわち、全体の器壁が薄く、底部外縁部が低く、中央がくぼみ、高台が底面のやや内側に付される。106の底面には「十」の篋記号がみられる。107は底面が篋削りされている。

糸切りの有台杯 (107・108) は量は少ない。このうち108は明らかに時期が異なるものと考えられるが、107は口径が約10cm・器高3.9cmで、篋切りの95とほぼ同じ大きさである。底面が水平であり、体部下端は稜をもたず、丸味をもつなど、篋切りのものと形態上類似している。SK 21 B の糸切りの無台杯 (56) は体

部下端にくぼみがなく、篋切りのものと類似し、有台杯(107)はこうした杯部に高台を付した形態であり、56と107は同時期の同一生産地の無台杯・有台杯のセットと考えられる。糸切りの条線が太いことや底部内面にロクロの凹凸がないことも両者共通する。高台は底面との接合面が細く、接地面は外端が外方へ大きくのびる。

杯蓋(109~114) いずれも天井部がロクロ削りされているが、篋切りと考えられる。112は篋切り痕が残る。口径に比し、器高は高くなく、偏平である。天井部から縁部はなだらかで、やや屈曲して縁部となる。縁端部の屈折は短く、112は端部は丸くおさまる。つまみは中央に突起をもつが、周縁に対して中央が低いもの(109・111・114)と比較的高いものがある。天井部中央はロクロ削りでほかはロクロ撫⁷⁾である。削りの範囲は1/2程度、112はこれより狭い。113はSK 21北西側の底面にある小さなピット出土で、完存品である。

有耳壺(115) 小さな破片が多く、全体の器形復原にはやや不確定の要素が残る。脚台をもち、胴部には上下2条の突帯と有孔の耳をもつ特殊な器形である。耳は上下とも2個ずつ遺存しているが、全体数は不明である。突帯は肩部につくものが断面がきれいな方形であるのに対し、腹部につくものは断面が台形となり、稜があまい。耳は上下の方向に断面円形の孔をもつ。耳の各面は篋によって調整され、稜線が明瞭である。胴部下位には2条の篋による沈線がめぐる。脚台は外方へ張り出し、端面が広い。胴部外面下半はロクロ削り、ほかはロクロ撫⁷⁾で、内面は上半がカキ目、下半が刷毛目である。胎土は精良で、焼成も堅緻である。これとほぼ同一の器形とも考えられるものが東頸城郡浦川原村今熊窯跡で採集されている(第126図)。

甕(86・116) 口径48cmのとくに大きなもの(86)と口径23cmのもの(116)がある。86は幅広の口縁端部をもつ。口縁部は横撫⁸⁾であり、胴部外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目である。叩き目はすり消しによってほとんど凹凸がなくなっている。内面の同心円叩き目は中心から放射状の界線をもつやや特殊なものである。この種の叩き目はSD 201一括土器横瓶(269)にもみられる。胎土は精良であり、つくりはきわめてよい。116はゆるく外反した口縁部端に面をもつもので、口縁部外面には平行叩き目痕がかすかに残る。

土師器

杯と甕がある。杯はほとんどなく、甕の復原個体はない。

杯(117) 口径13.6cm・器高4.1cmの内面黒色処理・篋磨きの杯である。器壁が厚く、重量感がある。内面の篋磨きは体部が横方向である。中央は磨滅しており、磨きの方向は不明である。底面と体部下端は手持ちの篋削りである(図版140)。体部外面は横撫⁷⁾である。製作にロクロが使用されたかどうかは不明である。

d) SK 102出土土器(図版34・131・138・139)

B地区南端にちかいC 29区にある大形の土坑である。覆土上層は自然堆積かと思われる黒色土であり、土器はこの層中からもかなり出土している。上層出土の土器は133・135・138・141~144・148・150・152~154・158・159である。158の大甕は一部SK 101出土の破片を含む。全体の土器の個体数は概算で約80点位であろう。須恵器杯類には糸切りのものがかなり含まれている。土師器の供膳形態が少数ではあるが

7) カキ目と刷毛目は原体が同一で、ロクロ回転を利用したものをカキ目という。

8) このような大形品ではロクロ回転を利用した撫⁷⁾を施すことが可能かどうかは不明である。

一定数存在する。SK 257出土土器と様相は類似するが、須恵器の糸切りの割合がこれより大きく、新しい傾向がみられ、9世紀初頭から前半頃に比定されるⅣ期の一括資料である。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・小瓶・小形長頸瓶・大甕・横瓶などがある。小形長頸瓶は畿内を中心に分布する器形であり、搬入品と考えられる。

無台杯(132~138) 篋切り(132~135)と糸切り(136~138)の両者がある。底部が残存する15点のうち10点が篋切り、5点が糸切りであり、両者の比率は2対1である。

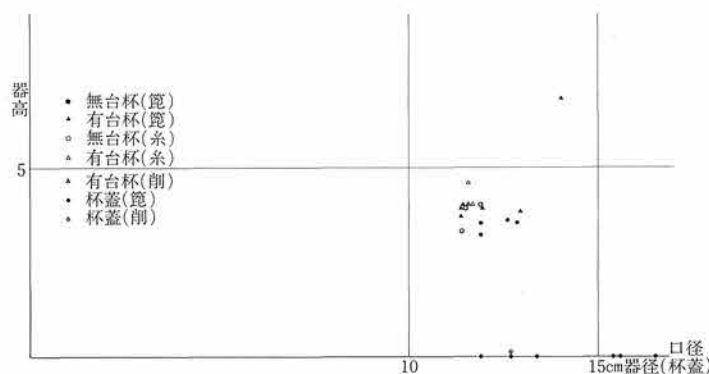
篋切りの無台杯(132~135)は口径12~13cm・器高3.5cm前後・径高指数約28である。これ以外の大きさのものはなく、SK 21との対比では大形品がないことが指摘される。底部はほとんど水平であり、体部下端は丸味があまりなく、直線的にたちあがる。口縁部はわずかに外反するものがある(133・134)。底面は篋切り、ほかはロクロ撫でである。

糸切りの無台杯(136~138)は口径12.5cm前後・器高3.5cm前後で、篋切りのものとほとんど同じ大きさである。しかし、底径指数は52で底径は口径の約1/2で、器形は明らかに篋切りの無台杯とは異なる。136は器壁が薄く、体部下端がくぼむなどの器形の特徴や胎土・色調などの点がSD 201一括土器に多い糸切り無台杯と同一であり、ほかのものよりやや新しいと思われる。137はやや深い器形で、体部下半が丸くなり、口縁部がわずかに外反する。底面が糸切りではほかはロクロ撫でである。口縁部外面に重ね焼きによる黒変がみられ、ほかは淡褐色であるが焼成は堅緻である。138も淡褐色で同じく焼成は堅緻で、体部下端のくぼみがない。胎土に3mm大ほどの小礫が散見される。

有台杯(139~149) 篋切り(139~141・147)と糸切り(142~144・148)がある。145は底面全面がロクロ削りで、146は底部中央を欠き、両者とも切り離し技法は不明であるが、形態などからみて、145は糸切り、146は篋切りと考えられる。法量では篋切り・糸切りとも大きな差はなく、それぞれ身の浅いものと深いものの2種類が存在するようである。

篋切りの有台杯は身の浅い有台杯A(139~141)と深い有台杯B(147)がある。有台杯Aでは146をのぞくと口径11.5cm前後・器高4cm弱で、径高指数33前後である。146は口径が大きいことと体部下半の丸味や高台の形態からみて、やや古い要素がうかがえる。139~141は底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的にたちあがる。底部は器壁が比較的薄い。高台は接地面がくぼむが、この面がほぼ水平となる。底面篋切りではほかはロクロ撫でである。139はSK 21Bの無台杯(58)、SK 21Aの無台杯(97・98)と同じ特徴をもち、140・141と区別される。身の深い有台杯B(147)は口径14.2cm・器高6.8cmである。器種としてはSK 24の有台杯Bに相当するものと思われるが、口径が小さくなっている。SK 21ではこの器種が不明瞭であり、SK 24の時期からそのまま同じ器種として存続したかは不明である。底部は器壁が薄く、中央がややくぼみ、底部と体部との境が明瞭で、直線的にたちあがるなど、Aタイプと同じ特徴をもつ。胎土は白色粒子が多く含まれる。

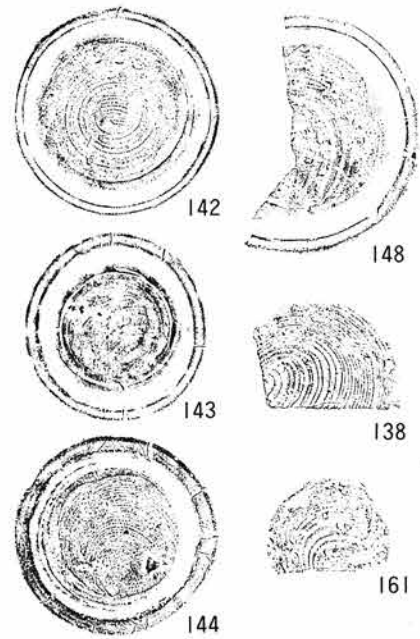
糸切りの有台杯も篋切りの有台杯同様、身の浅い有台杯A(142~144)と深い有台杯B(148)がある。149は底部中



第61図 SK 102出土須恵器杯・杯蓋法量分布図

央を欠くが、ロクロ削りがわずかにみとめられることと、体部と底部の境が明瞭な稜をもつことから、糸切りの可能性が考えられる。

糸切りの有台杯 A (142~145) は口径11.5cm前後・器高4cm前後で、径高指数35前後である。糸切りの有台杯は篋切りのものに比して、相対的に全体の器壁が薄く、底部と体部の境が明瞭で、体部が直線的にたちあがる傾向がある。また、底部内面に凹凸が少なく、平滑に仕上げられている。底面には糸切り痕を残すが、ロクロ削りを加えている(第62図・図版138)。削りは外周だけ施すもの(144)と中央ちかくまで及ぶもの(142・143)がある。142はとくにロクロ削りが丁寧に施されており、ほかの部分の器面もきれいに仕上げられている。144は底面の高台内側に段があり、底部の器壁が厚い。143は高台がやや内側に付される。高台の形態は143・144が幅広で内端接地、142が幅が狭く外端接地となる。接地面はいずれもくぼんだ面をもつ。145は高台が比較的高い。142・144が淡灰色、143が灰色で、焼成は堅緻である。



第62図 S K 102出土須恵器底部拓影

1 : 3

糸切りの有台杯 B (148・149) では、148の底面に条線の粗い糸切りが観察され、149は丁寧なロクロ削りが施されている。

杯蓋 (150~156) 天井部に明瞭な篋切り痕を残すもの(150・151)があるが、多くは篋削りされ、これらについては切り離しは不明である。しかし、杯蓋の製作技法は基本的に無台杯・有台杯と同一であり、これらに一定量の糸切り技法が存在することからすれば、篋削りされた蓋のなかに糸切りされたものもあることが類推される。153には糸切り痕とみられるかすかな痕跡がみられ、152はこれと同じつくりである。10) 154はこれと同じつくりである。10) 155・156は形態に古い要素を残すこと、内面中央に撫でを加えること、焼成堅緻でつくりがよいことなどから、時期的に古いものとみられよう。なお、153・154の内面中央に墨痕がみられるが、顕著な磨滅はみられない。

大甕 (157~159) いずれも口径40cm以上の大形品である。口縁端部のつくりはそれぞれ異なる。157は外反する口縁部の端に外傾した広い面をもつ。内面は刷毛目が丁寧に施され、口縁上端に「工」の記号がみられる。158は直線的にひらく口縁部が端部で外反し、上下にのびる面をもつ。外面には2単位の波状文を配する。同一個体の破片がSK 101から出土している。159は直線的に大きく開くと思われる口縁部に外傾した広い面をもつ。

小瓶 (160) 全体の器形は不明である。

9) 荻野繁春ほか『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会 1981

10) 杯類で篋切りのものと糸切りのものの相違点のひとつに、底部内面にロクロ撫での凹凸があまり目立たないことがあげられる。とくに篋切りのものは底部内面の周縁に器壁が厚くなる部分がおおむねみられ

る。これは製作時における底部と体部との接合法のひとつは起因するのであろうが、こうした特徴は篋切りの杯蓋にも同様にみられる。これをひとつの目安にして杯蓋の切り離し技法をおおよそ類推することは可能であろう。

小形長頸瓶(161) 底面に糸切り痕(第62図)をもち、内面にシボリ痕がみられる。シボリ痕はロクロ撫でのあとに生じたものである。この器種は今池遺跡でこれを含めて総計4個体出土した(216・296・666)が、これまで新潟県内では出土例のないものである。¹¹⁾器形は666のような口頸部と216のような胴部をもつ。内面の底部と胴部の境にはわずかな亀裂がある。色調は淡灰色ないしは灰色で、器肉の中央は淡茶色から灰色の縞状となる。この土器は畿内地方を中心に分布すること、当地方で焼造した形跡が現在のところ確認できないこと、胎土などの特徴から、畿内地方からの搬入品と考えられる。この器種は奈良時代末から平安時代初頭の比較的短時間に製作されていることから、SK 102出土土器の年代の考定するうえでの一指標となりうるものと考えられる。

土師器

甕のほかには杯・椀・蓋がある。椀と蓋はとくにめずらしい。

杯(162~164・167~169) 162は底部のみ遺存するもので、甕との識別がむずかしいが、内面にロクロ撫での凹凸が少ないことから、杯に含めておく。167・169をのぞいて、底部は糸切り不調整である。169は体部下端と底面がロクロ削りであり、167は底部に小さな高台状の突帯がつくり出されており、内外面を篋磨きする。ほぼ全形が知られる168は口径約13cm・器高4cm弱で、須恵器の糸切りの無台杯と大きさ・形態が類似する。

椀(165) 高台をもつタイプを杯と分けて椀とする。奈良時代にはみられない器形で、平安時代に新しく出現するものと考えられる。1点のみ存在するにすぎない。体部と高台下端を欠く。底部内面は篋磨きのようである。高台は幅が狭く、比較的高いと推定される。

蓋(166) 口縁部は薄く、外反するもので、天井部にはロクロ削りが施される。

甕(170~172) 口縁部から胴部上半部を残すものばかりである。口縁部は胴部から直線的に短くひらき、端部に面をもつ。171の胴部は丸味をもつと考えられるが、170・172は肩が張らないものと思われる。170・172の内面はカキ目で、172の胴部中位から下半は下から上への篋削りである。172の胎土にはとくに1~2mm大の小礫が多く含まれる。

e) SK 257出土土器(図版35・131・132)

B地区のF23区にある大形の土坑である。覆土は上層まで自然堆積層ではなく、埋め土と考えられ、比較的安定した一括性をもつものと思われる。出土土器は個体数で概算80点位で、そのうち約半数強が須恵器であろうと思われる。須恵器の杯類には糸切りのものが含まれているが、その占有率はSK 102よりも少なく、SK 102と重複する時期を含みつつ、若干これより古いものと考えられ、8世紀末葉から9世紀初頭前後(Ⅳ期)に比定されよう。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・長頸瓶・大甕などがある。

無台杯(173~180) 篋切りのもの(173~178)と糸切りのもの(179・180)がある。切り離し技法が判明する10点の無台杯のうち8点が篋切りであり、SK 102出土土器(篋対糸=2対1)に比して篋切りの占める割合が多い。法量では篋切りと糸切りに大きな差はない。

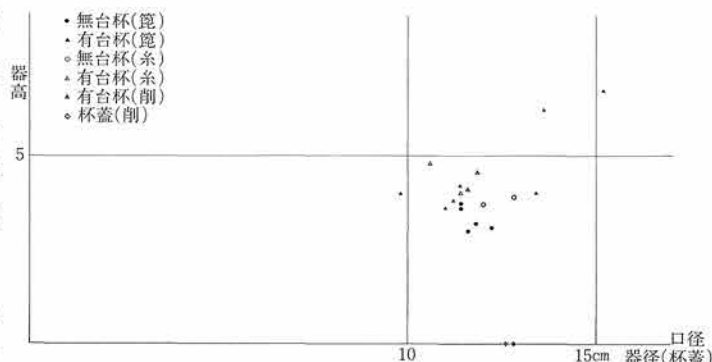
篋切りの無台杯(173~178)は口径11.4~12.2cm・器高3.0~3.7cm・径高指数29前後である。底部は水

11) 主要な分布地域は畿内であり、畿外では出土例は少ない。

12) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1976

平かわずかに丸味をもち、体部は直線的にたちあがる。175は若干外反する。底面は篋切りで、ほかはロクロ撫である。174は内面中央に弱い撫である。口縁部外面は重ね焼きにより黒変する。178の底部には墨書がある(728)。

糸切りの無台杯(179・180)は180が口径12.8cmとやや大きい。両者はほとんど同じ形態と手法であり、SK 102出土無



第63図 SK 257出土須恵器杯・杯蓋法量分布図

台杯(137)と共通する。底径指数は52~56で底径は口径の1/2をわずかに上回る。体部下端は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。口縁部外面は重ね焼きによる黒変がみられる。灰色を呈し、焼成堅緻である。

有台杯(181~193) 篋切りのもの(181~184・187~191)と糸切りのもの(192・193)がある。185・186はロクロ削りにより不明であるが、185はSK 102有台杯(142)と同じ形態・手法であり、糸切りと考えられる。切り離し技法が判明する13点のうち、糸切りのものは2点であり、無台杯同様篋切りが多い。篋切り・糸切りの両者を合せて、有台杯A・有台杯B・有台杯Cの三種がある。

篋切りの有台杯は有台杯A(181~184・187)、有台杯B(188~191)がある。有台杯Aはおもに口径によって、有台杯AⅠ(187、口径13.4cm・器高4.0cm・径高指数30)、有台杯AⅡ(182~184、口径11cm強・器高4cm前後・径高指数34)、有台杯AⅢ(181、口径9.8cm・器高4.0cm・径高指数41)の3種に分けられる。187は法量やつくりからみて、やや古い要素をもつ。184は底部と体部の境が明瞭であり、体部が直線的にたちあがり、器面がきれいに仕上げられている。高台は接地面にくぼむ面をもち、おおむね内端接地となる。182の内面中央には撫でが加えられる。

有台杯Bは、口径13.6~15.2cm・器高6.2~6.7cm・径高指数45である。口縁部は190が外反し、189・191は外反しない。188は体部と底部の境が明瞭である。4点とも底部内面に撫でが加えられている。188の高台は189~191に比し、外側に付され、やや高い。

糸切りの有台杯は有台杯A(185・193、口径14.5cm前後・器高約4.0cm・径高指数35)と有台杯C(192、口径10.6cm・器高4.8cm・径高指数45)に分けられる。185はSK 102有台杯(142)と同じつくりである。底面の糸切り痕はすべてロクロ削りにより消されている。193はSK 102有台杯(143)と同じつくりであり、糸切り痕は中央に残り、高台が底部のやや内側に付されている。192は底面の中央に糸切り痕を残す。高台は器形に比してやや高い。外面は褐色がかかるが、焼成は堅緻である。

杯蓋(194~196) 実測したものは3点であるが、このほかに7~8点存在する。天井部はロクロ削りで切り離しは不明であるが、杯類と同じく、糸切りのものは少ないと思われる。器径はいずれも13cm前後である。天井部から周縁部は段となり、屈折した端部の高さは低くて、丸くおさまる。つまみは、扁平なもの(194)とやや高いもの(195)がある。

長頸瓶(197・198) 197は胴部上半を欠く。つくりがとくによく、焼成堅緻である。胴部下半はとくに丁寧なロクロ削りで、底面に幅広の安定した高台を付す。底面には高台の貼り付け前のロクロ削りの痕跡がみられる。そのほかはロクロ撫である。口頸部と胴部との接合はいわゆる三段成形である。胴部上面に暗褐色の自然釉がかかる。頸部が細いこと、つくりがとくによいことから水瓶と考えられる。198は高さのある高台であり、胴部の形状は不明である。

土師器

杯・甕・鍋がある。

杯 (199~201) 199は底部の周縁を篋削りする。200は底部糸切り不調整である。201は口径約14.5cm, 器高約4.5cmほどに復原される。底部は糸切りであろう。須恵器の糸切り無台杯よりもひとまわり大きい。胎土は精良であり, 焼成は堅緻である。内外面ロクロ撫でである。

甕 (202~212) 全形を復原できるものはない。口径からみて, 小形品 (205~207) とこれより大きいもの (208~212) がある。小形品は短い口頸部が若干内彎気味となり, 207は端部が短くたちあがる。口縁部内面に炭火物の付着するものが多い。大きいものは口縁部が直線的で, 端部に面をもつもの (208・212) と丸くおさまるもの (209~211) がある。胴部は判然とないが, やや丸くなるものが多いようである。いずれも内外面ともロクロ撫でで, 212は胴部中ほどに上から下への篋削りがなされる。204は甕の底部と思われ, 上から下の斜方向に篋削りがなされる。胎土は204・207・208・212には1~3mm大の小礫が散見される。

鍋 (213) 鍋は甕に比しごく少ない。213は口径27.4cmで, 体部から口縁部はゆるく屈折し, 端部は丸くおさまる。体部下半に上から下への篋削りがなされる。

f) SD 201一括土器 (土器溜り出土) (図版36・37・132・133・138~140)

SD 201はB地区の南辺部, F 21~25区にある南北方向の大きな溝 (幅約2m・深さ約50cm) である。このなかのF 24 (19) 区の溝西壁面に多量の土器が集中して検出された。これらの土器は溝の壁面の直上の位置にあり, SD 201の掘削に近い時期を示すものと考えられる。溝覆土最上層からは中世遺物も出土しており, 覆土出土土器の総体では一括性に乏しいものであるが, この土器溜り出土土器は一括資料として把握することができる。土器溜り出土の土器を「SD 201一括土器」とし, これ以外のSD 201出土土器と区別する。ここではSD 201一括土器について述べ, 一括外土器については別項で述べる。

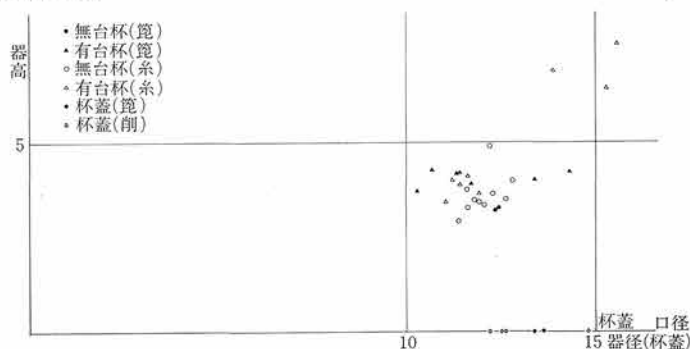
SD 201一括土器の個体数は概算で約100点である。それぞれの土器の遺存度はおおむね良好で, 土師器をのぞけば, 小破片は少ない。須恵器の杯類には糸切りのものも多く, 土師器では供膳形態の杯類が一定量を占め, 須恵器の供膳形態との数量比率は5対1ないしは4対1程度である。しかし, 供膳形態の主体はあくまでも須恵器である。SK 102出土土器と共通する一面はあるものの, 糸切りの杯類が篋切りを凌駕するという明瞭な相違点があり, SK 102出土土器より新しい傾向がうかがえる。実年代では9世紀前半から中葉 (V期) に定される。

須恵器

無台杯・有台杯・横瓶・壺蓋・大甕がある。大甕は小破片がごく少量あるのみであり, 器種構成の一特殊性が指摘される。総個体数の約7割は図化した。

無台杯 (227・228・237~247) 篋切り
のもの (227・228) と糸切りのもの (237
~247) がある。篋切りのものはごく少
なく, 4対1程度で糸切りが多く, しか
も篋切りのものは小破片が多い。

篋切りの無台杯 (227・228) は両者とも
法量がほぼ同じであるが, 全く異なる
つくりをもつ。すなわち, 227は全体の



第64図 SD 201出土一括須恵器杯・杯蓋法量分布図

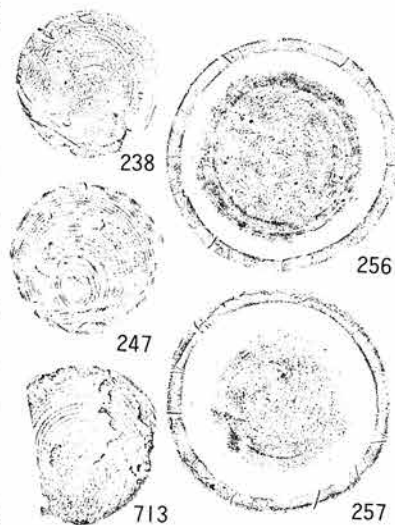
器壁が薄いのに対し228は器壁が厚い。227はSD 3Ⅳ層出土土器に多い無台杯に類似し、相対的に新しい傾向がうかがえる。227は底部がほとんど水平で中央がわずかにくぼみ、体部は直線的にたちあがる。口径12.5cm・器高3.3cm・径高指数26で、偏平な器形である。口縁部内面に顕著なくぼみはないが、SD 3Ⅳ層出土土器に一般的なタイプと胎土・焼成なども共通する。

糸切りの無台杯(237~247)は口径11.4~13.0cm・器高3.0~4.0cmである。器高がとくに高い246(径高指数40)をのぞけば、径高指数は29である。これらは形態・法量や胎土・焼成から、ほぼ4種に分けられる。ひとつは237~243のグループであり、もっとも量が多い。口径11.4~12.6cm・器高3.0~3.6cmとこのなかでは小さく、底部を含めて全体の器壁は薄い。もっとも焼成堅緻、胎土精良であり、体部下端がくぼみ、淡灰色を呈する。丸味をもってたちあがり、口縁部は外反する。底径指数は50~58である。底面は中央のくぼみがやや大きい。244・245のグループは口径12.8cm・器高3.0~4.0cmと相対的に大きい。体部下半のふくらみは小さい。246は器高がとくに高く、やや特異である。胎土・色調などはSK 257無台杯(180)と類似し、口縁部外面が重ね焼きで黒変し、体部下半から底部は褐色を呈している。247は底部に「夫」の墨書をもつ(712)。これと全く同じつくりの土器がもう1点ある(墨書土器713)。これも同一の手の「夫」の墨書がある。胎土がやや粗い感じを受け、底部の糸切りの外周に粘土が付着している(第65図)。

有台杯(229~236・248~259・267) 篋切りのもの(229~236)と糸切りのもの(248~257)がある。258は底面全面がロクロ削りであり、糸切りと考えられる。篋切り・糸切りを含めて、有台杯Aと有台杯Bがある。篋切りと糸切りの数量比率は無台杯とは異なり、両者ほぼ同数である。ただし、篋切りのものは遺存度が相対的によくない。

篋切りの有台杯A(229~236)は法量からみて、相対的に大きい有台杯AⅠ(234・235,口径13.4~14.3cm・器高4.0~4.2cm・径高指数30)と相対的に小さい有台杯AⅡ(229~233,口径10.3~11.7cm・器高3.7~4.3cm・径高指数37)の2種ある。236は有台杯AⅠになろう。有台杯AⅠの234・235はともに全体の1/6程度を残す破片であり、遺存度はよくない。相対的に古い時期に属すると思われる。有台杯AⅡはSK102出土土器やSK 257出土土器の同じ法量のものとは大きな相違点がなく、器形・手法の特徴ともほぼ共通している。229・230は口径11cm未満で、ほかのものと区別されるかもしれない。

糸切りの有台杯(248~258)は有台杯A(248~255)と有台杯B(256~258)がある。有台杯Aは口径11.0~12.0cm・器高3.5~4.2cm・径高指数34である。篋切りのものに比し、やや器形が偏平である。これは身が相対的に浅いことによる。底部内面はほとんど平滑であり、体部との境は明瞭で、沈線状となるものがある(250・252)。体部のたちあがりも篋切りのものより直線的である。体部外面にカキ目のような条線が器面にみられるものがある(248・253・255,図版140)。底部は糸切りののちにロクロ削りを施すが、その範囲は広いもの(250・253・254)と狭いもの(248・249・252・255)がある。狭いものは高台接合部までロクロ削りをするもので、底部周縁が水平ではなく、斜めになり、底部中央とは段をつくる。高台は底面の内側につくものも多く、外端接地となるものもある(253・254)。口径がやや大きめの250は底部がほとんど水平で、底面の糸切り痕がロクロ削りによって消され中央にわずかに残るだけで、高台が低く、接地面の幅が狭いなど、SK 102出土の有台杯(142)と共通する。252



第65図 SD201出土一括土器須恵器拓影

は外面の体部と底部との境が明瞭な稜をつくり、SD 3 IV層出土の糸切り有台杯に類似する。糸切りの無台杯とは異なり灰色で焼成堅緻のものが多い。253の口縁部には油煙状の付着物がみられる。

身が深くて大形の有台杯B (256~258) は口径13.9~15.9cm・器高6.4~7.6cmで、径高指数は平均47である。256は底面がほぼ全面にロクロ削りされ、中央にわずかに糸切り痕を残すのみで、258は全面ロクロ削りされる。257は明瞭にロクロ削りが観察されるが、高台の貼り付けによるロクロ撫でによって糸切り痕が消されるのみで、中央には比較的広くこれが残る(第65図)。底面のロクロ削りの施し方のちがいは形態のちがいとも関係しているようであり、256・258は体部のたちあがりか、257より直立気味で、ほとんど直線的である。また、257は底面が周縁部を含めてほとんど水平であるのに対し、256・258は底部周縁部が斜めになり、底部と体部の境が明瞭な稜をつくる。器壁は257が相対的に厚い。こうした諸点からみると、257がより篋切りの有台杯に類似しており、古い様相がうかがえる。3点とも底部中央には撫では加えられていない。高台を欠く259は体部がほぼ直線的なことからすれば、糸切りの有台杯Bと考えられる。

以上のほか、口縁部破片の267は全形が不明であるが、身のとくに深い小形の有台杯(たとえばSK 391出土・482)と考えられる。

杯蓋(260~265) 260~262・265は天井部ロクロ削りで、263・264が篋切り痕をそのまま残す。ロクロ削りの260~262のうち、260・262は天井部の器壁が相対的に薄く、均一に仕上げられていることからすれば糸切りがなされている可能性が考えられる。胎土・焼成・色調は261が淡灰色で、篋切りの263・264と共通し、260・262は灰色・暗褐色で、焼成はとくに堅緻である。口径は265が14.8cmでやや大きく、ほかは11.2~12.6cmである。260~264では大きさ・形態ともに大きな相違はなく、縁部にわずかな段をもち、鋭く屈折して口縁端部となる。ただ263は天井部の篋切りとその外側のロクロ撫での部分との境にわずかな段がある。つまみは260がとくに中央がすどく突き出る。このつまみは身の色と違って淡灰色を呈している。比較的大きい265は天井部の器壁が厚く、内面の凹凸からみると篋切りがなされているものと思われる。このつまみは高い。

壺蓋(266) 短頸壺の蓋であり、ほぼ完存する。天井部から縁部はなだらかであり、口縁部は鋭角に屈折し、端部は尖り気味ではあるが丸くおさまる。つまみは擬宝珠状の高いものが付される。天井部は全面ロクロ削りされ、ほかはロクロ撫でである。内外面とも丁寧に仕上げられている。

横瓶(268・269) 268は口頸部を欠く。胴部は両端をのぞいて内外面ともに丁寧にロクロ撫でされ、両端は格子叩き目が残る。269はほぼ全形を残す。口縁部はやや開き、外傾する端面をもつ。胴部両端はカキ目が施され、ほかはロクロ撫でされる。内面は同心円叩き目である。この叩き目は放射状に中央から一条のびる線をもつものである。

土師器

杯・甕・鍋がある。杯は一定量存在するものの、供膳形態の多くは須恵器である。

杯(273~279) 275は内面黒色処理している。279は口径16.6cm・器高5.5cmと大きい。ほかは口径11.5~13.2cm・器高3.3~4.5cmであり、須恵器無台杯とほぼ一致した法量である。底部は276・277が糸切り痕をそのまま残し、273は手持ちの篋削り、278はロクロ削りによって、それぞれ底面と体部下端を調整する。275・279は器面があれど、不明である。278は暗茶褐色を呈し、ほかのものとやや異なる。胎土は甕と異なり、精良である。

甕(270~272・280~287) 法量から、小形甕(286)・中形甕(284)・大形甕(280~283・285)に分けられる。小形甕の286は口径11.1cmで、楕円形の胴部に短くひらく口縁部をもつ。端部は明瞭な面をもたない。

底部は糸切り不調整の平底と推定される。内外面ともロクロ撫でである。外面口頸部と口縁部内面に煤が付着する。中形甕の284は口径15.2cmで、口縁部端が屈折して短くたちあがる。胴部は楕円形である。底部は平底であろう。内外面ロクロ撫でである。胴部上半から口縁部内面と胴部内面下半に煤の付着がみられる。大形甕は口径21~26cmである。短く直線的にひらく口縁部の端部はいずれも面をもつ。しかし、屈折してたちあがるものはない。282・285の胴部外面は上から下の篋削りが観察される。この種の大形甕は287のような丸底の底部をもつものと推定される。287は器面があれており、調整は判然としないが、篋削りとみられる。

鍋(288) 口径33.4cmである。口縁部は短く直線的で、体部は中位で大きく曲がり底部となる。

g) SD 3 IV層出土土器(図版38・39・133・134・136・138・139)

SD 3はC地区南辺からB地区北辺部にある大規模な南北溝で、もっともまとまった遺物が出土した。溝の覆土は4層に大別される。このうち、最下層のIV層とその上のIII層は長期にわたる堆積層ではなく、短期間に形成されたと考えられる。これらの層からはまとまった遺物が出土し、とくにIV層出土土器は多量であり、これは良好な一括土器である。IV層とIII層の出土土器はほとんど共通する様相を呈し、時期差もほとんどないものと思われるが、ここでは一応両者を分けて述べる。IV層・III層ともすべてB地区出土のものである。

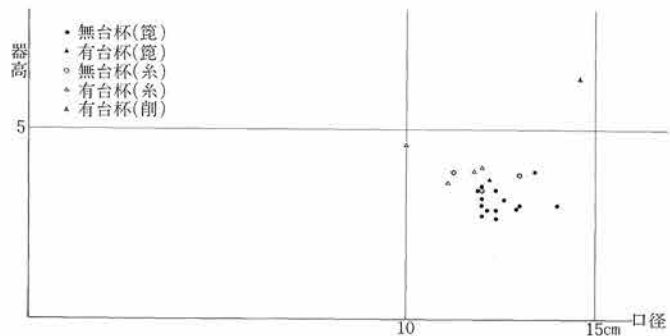
SD 3 IV層出土土器は須恵器・土師器のほかに緑釉陶器が1点のみ含まれる。出土個体数は400~500個体位とみられる。須恵器と土師器の比率は土師器が多い。これは土師器の供膳形態の杯類がとくに多いことに起因し、これがSD 3 IV層出土土器とそれ以前の土器群とを明確に区別する一特色となっている。供膳形態で土師器の占める割合は、全体の3/4ほどとみられる。須恵器の杯類には篋切りのものと糸切りのものがある。篋切りの杯は器形が偏平で、器壁がとくに薄く、これ以前のものとは一見して識別されるほど、特色あるものである。実年代は9世紀後半(VI期)に比定される。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・長頸瓶・短頸壺・小瓶類・有耳瓶・横瓶・大甕などがある。杯類以外では全体の器形がわかるものが少なく、器種を明確に分けられなかった。杯類以外はおおむね図化した。有台杯は無台杯よりかなり量が少ない。無台杯313は墨書があり(726)、308の内面に墨痕がみられる。

無台杯(307~327) 篋切りのもの(307~320)と糸切りのもの(321~327)がある。両者の比率は7対3くらいで篋切りが多く、遺存度も篋切りのものがかなりよい。篋切りの無台杯は灰色ないしは暗灰色を呈し、焼成堅緻であるのに対し、糸切りの無台杯は淡灰色であり、ほとんどのものが一見して識別される。したがって、このふたつは生産地を異にするものと考えられる。

篋切りの無台杯(307~320)は口径12~14cm・器高2.7~3.8cmで、量的には口径12.5cm前後・器高3cm前後のものもっとも多い。318はやや大ぶりであり、法量に多少のばらつきがあるもののほぼひとつの器種とみてよいであろう。平均的な径高指数は25で、糸切りの径高指数29よりも小さい。器形は偏平であり、器



第66図 SD3IV層出土須恵器杯法量分布図

壁はどの部分もかなり薄い。器面にはロクロの凹凸が顕著で灰色と暗灰色の色が縞状になっている(図版139-312)。この縞状の痕跡はロクロ撫での際、指に付着した水分と粘土によるものとも観察される。底部は篋切りで、これをそのまま残すものがほとんどであり、一部にかかる指撫でを加えるものがある(309・316, 図版139-309)。底部に板状の圧痕を残すもの(図版139-312)が多く、また全体に中央がややくぼむ。底部と体部の境は比較的明瞭であり、体部は大きく直線的にひらき、口縁部は若干直立気味になる。これは口縁部内側にあるくぼみと対応するものである。底部内面の外側がわずかにふくらみ、底部と体部の境は明瞭にくぼむものが多い。こうした特徴はほとんどの時期でも篋切りの杯類にみられるものであり、製作技法はこれらと基本的に共通していることがうかがえる。ただ、底部をかなりの薄さに保ちつつ、篋によって切り離すことはある種の技術的な高さをしのばせる。胎土は白色小粒子を含むが、精良で、焼成堅緻である。口縁部外面は重ね焼きにより黒変している。

糸切りの無台杯(321-327)は篋切りの無台杯に比して量が少なく、全形が知られるものが少ない。全形が復原されるものでは体部のたちあがり直立気味のもの(321)とひらくもの(322・323)がある。口径11.2-13.0cm・器高2.8-3.9cmで、径高指数は29前後である。体部下端はくぼみ、324はこれがとくに大きい。たちあがり丸味をもちつつ、口縁部はほとんど外反しない。器面は篋切りのものよりロクロによる凹凸が少なく、内面はとくになめらかである。色調は淡灰色で、篋切りのものよりかなり白っぽい。ただし、322は灰色であり、ほかのものと異なる。焼成は比較的堅緻であるが、磨滅しているものが多い。

有台杯(328-340) 篋切りのもの(337・338)と糸切りのもの(328-335)がある。両者の比率は糸切りが圧倒的に多い。336・339はロクロ削りで切り離しは不明、340は底部の大半を欠き不明である。ただ339はつくりからみて、糸切りであろう。身の浅い有台杯A(329-331・338)、身が深くて大形の有台杯B(334・335・339・340)、身が深くて小形の有台杯C(328)の各タイプがある。個体数が若干多い有台杯Aでも篋切りは338のほか1点しか含まれておらず、糸切りと篋切りの比率は大形品と推定される332・333をのぞいても9対2である。なお336は底面をロクロ削りされ、底部内面が平滑なことから糸切りと推定される。340も糸切りの可能性が高い。各タイプの比率では有台杯Bが有台杯Aにせまる数量を占めることが注目される。

篋切りの有台杯の338は口径12.3cm・器高3.7cmで、身が比較的浅く、体部下半が丸いことなど、篋切り有台杯のなかではやや古い要素をもつものと考えられる。337は底部の器壁が薄く、均一であり、高台が底面外縁に付される特色をもつ。高台は接地面がくぼみ、外端接地となる。器高は6.5cmほどと推定される。やや小ぶりであるが有台杯Bに含めておく。底面は篋切りののちに、中央をのぞきロクロ削りを施す。

糸切りの有台杯A(329-331)は、口径11.1-12.0cm・器高3.6-4.0cm・径高指数34である。329は体部から口縁部のたちあがりの長さがほかのものより短い、形態・手法は共通する。底部は高台の中央が低く、外縁が高くなり、高台の貼り付け部は斜めとなる。底部と体部の境はきわめて明瞭な稜をもち、これが角張っている。329はこの部分がやや突出気味である。体部から口縁部のたちあがりはほぼ直線で、外反せずそのまま端部となる。高台は底面の内側に付され、接地面に明瞭な面をもち、内端接地である。底面は高台貼り付け部がロクロ削りされ、その内側には糸切り痕が残る。ただし、329は底面の遺存部に全面ロクロ削りが施される。内面は器面がなめらかである。灰色を呈し、焼成堅緻であり、糸切り無台杯とは色調が異なる。

糸切り有台杯Bでは339のみが全形が知られる。口径14.6cm・器高6.3cm・径高指数44である。334・335を含めて、底部の高台貼り付け部は斜めになり、その内側は水平にちかい。底部と体部の境は明瞭で、稜

をなし、体部はほとんど直線であり、そのまま口縁端部となる。内面は平滑である。こうしたつくりは糸切り有台杯Aと同様である。332と333は底部の器壁の厚さなどから有台杯Bと考えられる。333の高台貼り付け部はロクロ削りによって斜めになり、底部中央の高さは高台接地面とほとんどかわらない。332は底部を打ち欠いて円形に調整したようであり、333は底部と体部の接合部できれいに剝離している。ともに内面はきわめてなめらかである。なお、有台杯の底部を欠いて円形に調整するのは、SD 3 IV層出土土器で、小形瓶か有台杯と思われるものが1点(第67図)、ほかでも時期を限らず、いくつかみられ、有台杯のひとつの再利用のあり方がうかがわれる。

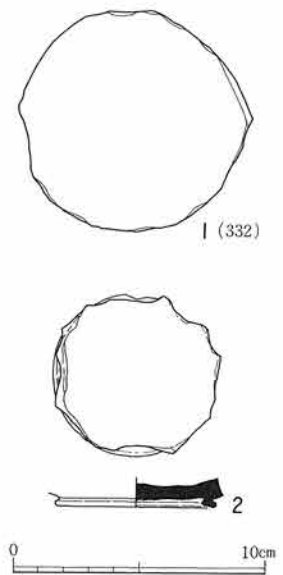
小形の有台杯C(328)は口径10.0cm・器高4.7cm・径高指数46である。体部下端は斜上方へ短くたちあがったのち、ゆるく屈曲して、直線的に口縁部へいたる。底部の糸切りは削りによって消去されず、高台貼り付け部分のみ、ロクロ撫でされる。淡灰色を呈し、糸切り無台杯に類した色調・胎土で焼成もやや軟質である。

杯蓋(341~343) 杯蓋は有台杯が少ないことと関連してごく個体数が少なく、全体でも小破片が8点である。341は天井部がきれいにロクロ削りされ、内面の凹凸が少なく、なめらかである。342は口縁部で、縁部は屈折せず、端部内側に小さなくぼみをつくるのみである。胎土中に白色小粒子を含み、口縁部外面に重ね焼きによる黒変がみられる。343は端部が明瞭に屈折する。

長頸瓶(345・346・352・353・356・362・363) 口頸部は345・346のようにラッパ状にひらいたのち端部で外反し、外側に広い面をもつ。356はかなり大形であるが、基本的なつくりは共通しており、長頸瓶と考えておく。胴部は不分明なものが多い。353は胴部高が比較的lowく、肩が張る。この口頸部は比較的細い。高台は胴部下端からそのまま高台外側につらなる位置にあり、外端接地で、接地面は内側へひろくのびる。高台の付け方は篋切りの有台杯と類似する。内面および胴部外面上半はロクロ撫で、外面下半はロクロ削りである。口頸部内面にはシボリ痕がみられる。362は胴下半部を残す。器形はB地区包含層出土の長頸瓶(662)と類似し、内面は撫で、外面はロクロ削り、底面は不調整でこの部分の器面には凹凸がある。内面は広い範囲に自然釉がかかり、口頸部は比較的太いものと推定される。363は胴上半部のみで、外面に灰と自然釉を厚くかぶる。352は口頸部から胴部の一部しかなく、全形は不明であるが、長頸瓶の可能性もある。口頸部の破損面は水平で、かつ丸く磨滅しており、欠けた後に打ち欠いて新たに口縁部をつくったことも考えられる。いずれも胎土精良で、焼成堅緻である。352はとくに白っぽい。

短頸壺(354・355・357) 比較的の小形のもの(354・355)と大形のもの(357)がある。354は口縁端部を欠くがほぼ全形を残す。底部は糸切り不調整の平底であり、胴部はやや肩が張るものの、球形にちかい。胴部内外面はロクロ撫で、底部内面中央までこれが及ぶ。355はこれよりやや大ぶりであるが、器形はほぼ354に類すると考えられる。胴下半部をロクロ削りし、ほかはロクロ撫でである。357は口縁部が短く直立するだけで、胴部は肩が張らず、球形にちかい。胴部外面下半をロクロ削り、胴上半部は内外面ロクロ撫で、胴部内面下半は撫でである。

小瓶類(344・347~351) いずれも全体の器形は復原できない。344は口径4.6cmのごく小さいものである。平瓶の口頸部と考えられる。347は口頸部下端から胴上半部を残す。肩に浅い沈線をもつ。胎土・色調は351と類似しており、351



第67図 底部再利用有台杯

の胴上半部の可能性が強い。348～351は胴部のみ遺存するものである。348は下ぶくれの形態で、高台径が小さい。底面は糸切り痕が残る。胴下半部はロクロ削りである。器形からすると唾壺の胴部に類似する。349～351は肩が張る形態であり、長頸瓶353を小形化した形態である。350は内外面ロクロ撫でであるが、349・351の外面上半はロクロ削りを施す。349の底面はロクロ削り、351の底面は不明瞭ながら篋切りのようである。

横瓶 (364・365) 364は器壁が厚く、外面にはわずかに叩き目が残る。内面はロクロ撫で、外面は叩き目の後にロクロ撫で・カキ目を施す。365は粘土板の接合部を残す破片で、外面にカキ目を施す。

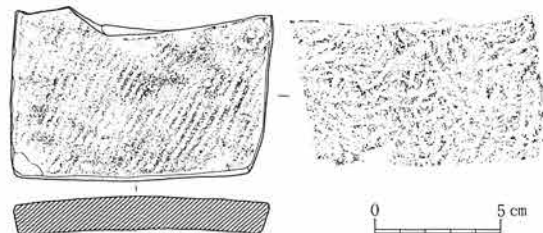
有耳瓶 (358) 胴部肩に耳をもつ小破片で、土器の復原にはやや不安を残す。耳は1個のみ遺存し、全体の数は不明である。耳は篋で丁寧整形され横方向に円形の孔を穿つ。耳の上位には2条の沈線があり、外面には平行叩き目とカキ目、内面には同心円叩き目とロクロ撫でがみられる。白灰色で焼成堅緻である。

広口鉢 (359) 口縁部を欠き全体の器形は不明であり、長頸瓶・短頸壺などの可能性も考えられるが大形で高台をもたず、長頸瓶と考えにくいこと、体部下半の形態に丸味がなく、短頸壺とも考えにくく、SK 21 B出土広口鉢 (80) に類似した器形、すなわち、肩からあまり離れない位置で短い口頸部となるものと推定される。内面に広く自然釉がかかっていることも、この想定を裏付けよう。この土器は灰白色で、白色の大きな粒子を含み、胎土は粗くほかのものと大きく異なる。頸城地方の窯跡出土の須恵器で、これに類似した胎土・色調のものは知られておらず、他地域から搬入された可能性が強い。県内では北蒲原郡豊浦町曾根遺跡出土の須恵器に類似する。¹³⁾ 底面には焼成時の大きい付着物があり、この部分の調整は不明で、ほかはロクロ撫でである。

甕 (360・361・367～373) 360は口縁部で端部は内傾する面をもつ。胴部外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目である。361は平底の底部で、外面は平行叩き目、内面は撫でである。底面も撫でにより平滑である。胴部内面下端には接合によると思われる器壁のふくらみがある。製作技法は粘土板の上に胴部を巻き上げたものと思われる。367～373は胴部破片である。叩き目は多様であり、内面同心円・外面平行といったもの (367) は少ない。368は外面平行叩き目、内面は凹凸の少ない格子叩き目である。369は外面が斜格子である。370は外面平行叩き目・内面同心円で、叩き目や色調・胎土は有耳瓶 (358) に類似する。371は内外面とも細い平行叩き目、372は外面平行叩き目、内面は弧の大きい同心円叩き目である。373は外面が細かい平行叩き目で、内面はなめらかであるが、わずかなくぼみがみられる。拓影では珠州系陶器に類似する感じを受けるが、叩き目の凹凸や内面のくぼみが小さく、胎土・色調なども異なる。第68図は須恵器片を再利用したと思われるものである。10cm×6cmほどの長方形で、図で示す上の側面をのぞき、すべての面が磨滅している。研磨具として使用したものであろう。

土師器

杯・椀・甕・鍋などのほか、器種が明確でないものがいくつかある。杯では内面黒色処理した黒色土師器がある。黒色土師器は実測図では多いが、これは内面に篋磨きを施しているため、遺存度がよいことによる。杯のなかでは2割未満であろう。供膳形態全体で須恵



第68図 転用須恵器片 (S D3Ⅳ層)

13) 家田順一郎『曾根遺跡』Ⅰ・Ⅱ 豊浦町教育委員会 1981・1982

曾根遺跡出土土器は豊浦町教育委員会で実見した。これらの須恵器は近接する笹神丘陵に展開する

一大窯跡群で生産されたものが多いと推定され、この製品が頸城地方の今池遺跡までもたらされたことも想定されよう。

器と土師器のそれぞれの数量比率は、1対4ほどで、圧倒的に土師器が多い。¹⁴⁾ 特殊な器種の425・426をのぞいて、すべてロクロを使用している。

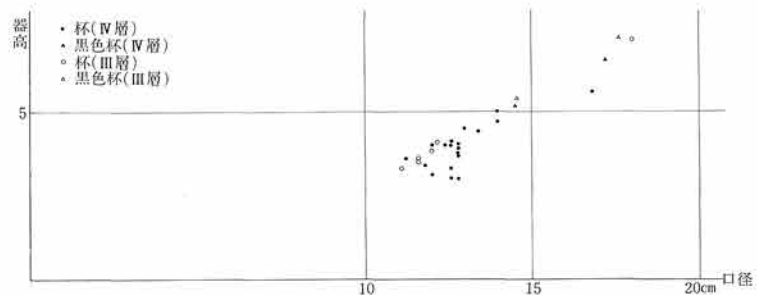
杯 (374~417) 高台をもたないものを杯とする。407~417が内面黒色処理した黒色土師器である。法量からみると、口径17~18cm前後の大形品・杯Ⅰ (399・400・413・414)、口径14~15cmの中形品・杯Ⅱ (395・396・410~412)、これ以下の小形品・杯Ⅲに大別される。量的には小形品がもっとも多い。黒色土師器は中・大形品が多いようである。形態上は土師器と黒色土師器では大きな差はないが、体部下端がくぼまず、底部外周に稜をもたない点が相違点として指摘される。これは黒色土師器が体部下端から底面を篋削り (ロクロ削りが大半) により調整されることによる。土師器は底部が糸切り不調整で、体部下端のくぼみもそのまま残しており、黒色土師器は内面に篋磨きと黒色処理を加えていることから、製作工程上で土師器よりもかなり手間がかかっていることは明瞭である。

もっとも数の多い小形品・杯Ⅲは、口径11~13cm・器高2.5~4.5cm・径高指数24~35である。大半は径高指数30前後である。器高が低く偏平な器形のもの (384~386)、器高の高いもの (393・394) などもある。底径指数は50前後である。須恵器の糸切り無台杯と形態は類似し、製作技法はほとんど同一と考えられる。外面はロクロ撫での凹凸を残すのに対して、内面はほぼ全面が丁寧にロクロ撫でされ、器面はなめらかである。杯Ⅰ・杯Ⅱは径高指数が35~40とやや大きいものの、器形はおおよそ杯Ⅲと共通する。胎土はきわめて精良で、淡褐色を呈する。焼成は軟質で、もろく、器面はあれているものが多い。

黒色土師器も器形は体部下半がふくらみをもつ点をのぞくと共通する。内面の篋磨きは口縁部外面まで及ぶ。413の口縁部外面は炭素の吸着により、黒斑状となる。417の体部下端は手持ち篋削りによって調整される。

甕 (427~440・442~444) 全体の器形を復原できるものはない。口径11~13cmの小形甕 (427~429) と口径20cm以上の大形甕 (435~440) がある。小形甕の口縁部は内彎気味に開くもの (427) と屈折して外反するもの (428・429) がある。胴部は丸味をもつものと推定され、底部は431のように底径5cm前後のものと考えられる。底面は杯と同様に糸切り不調整であり、底径もほぼ同じ大きさである。ただし、甕はたちあがりの角度が大きいことと内面にロクロ撫での凹凸がみられることで杯と識別される。435~440の口縁部は大きくひらいて端部が上へ屈折するもの (435)、直線的にひらき端面をもつもの (436~439)、端部が屈折して短くたちあがるもの (440) がある。437の胴部下半には外面に平行叩き目、内面に木口のような弧を描く圧痕があり、この部分がくぼんでいる。これらの底部は不明である。底部には丸底のもの (442) と平底のもの (443・444) とがある。

442は内面に刷毛目、外面に平行叩き目が施される。443・444は底面が糸切り不調整で、ほかはロクロ撫で、内面にはロクロの凹凸がよく残る。442の胎土は437と類似しており、同一個体の可能性がある。443・444は442よりも胎土



第69図 SD3III・IV層出土土師器杯法量分布図

14) 底部の1/2以上を残す個体を算出したところ、総計174点のうち、須恵器は42点であった。土師器は小形甕が杯と似た底部をしており、これと混同するもの

があると予想される反面、土器自体がかなりもろく、遺存状況が不良であることを勘案すれば、この数字はおおよその傾向を反映しているものと考えられる。

が精良である。440の底部はおそらく平底であろう。

鍋 (441・445・446) 446は内面黒色処理した黒色土師器である。441は口径37cmの大きなもので、口縁は屈折してわずかにたちあがる。445の口縁部は甕(440)と同じつくりで、屈折してたちあがる。446は半球形の体部に端部がわずかにたちあがる口縁部をもつ。内面は篋磨きがなされ、黒色処理される。

その他(418~426) 以上のほかにやや特異な器形のものがある。いずれも全体の器形はわからない。418は一般的な杯の底部に径7mmの円形の孔を穿ったものである。用途不明。穿孔は焼成後であろう。419・420は皿かと思われるものである。421は底部から体部がほとんどたちあがらず、大きくひらく皿かと思われる。底面は糸切り不調整である。422は椀などの高台であろう。423は底部に円形の高台の剝離痕があり、大形の有台の皿などと考えられる。424は脚台か高台である。内外面ともロクロ撫でである。器部との接合部で剝離する。425は底面に円形の剝離痕があり、二次焼成を受けているとみられることから、有台の甕かと思われるが、有台の甕は当地方にはほとんどみられない。調整はロクロ不使用であろう。426は形態と二次焼成を受けていることから、土製支脚と考えられる。上面がくぼみ、この側面部分が太い。指おさえでつくっている。

緑釉陶器 (366)

手付瓶の底部と考えられるものが1点ある。底径15.5cmで、底部外周にはわずかな段がある。釉はほとんど剝落しており、施釉範囲は不明瞭であるが、体部外面には淡黄緑色の釉が確認される。器肉は淡黄白色を呈する。軟質の焼きあがり、いわゆる「軟陶」である。

h) SD 3Ⅲ層出土土器 (図版41・134・139・140)

SD 3のⅢ層とⅣ層はそれぞれ粘土層と砂利層で明瞭に区別されるが、出土土器の様相はほとんどかわりなく、Ⅳ層出土土器を補う資料としてよいであろう。

須恵器

無台杯 (447~450) 447・448が篋切りで、Ⅳ層出土の篋切り無台杯と全く同じつくりである。448の内外面には黒い漆かとも思われる付着物がある(図版139)。449・450は糸切りである。449は口径12.0cm・器高2.9cmで、糸切り無台杯ではとくに偏平な器形である。色調・胎土はⅣ層出土のものと共通する。

杯蓋 (451・452) 451は天井部をロクロ削りする。452は器壁がごく薄く、口縁部はⅣ層出土の342のようなものと推定される。つまみは大きい、中央がくぼむ。天井部から体部は段をなす。天井部は自然釉で調整が不明瞭であるものの、わずかな凹凸は篋切りの痕跡とみられる。つくりはⅣ層出土に一般的な篋切り無台杯と共通し、両者は同じ製作技法でつくられたものとみられる。Ⅳ層出土の篋切りの有台杯(337)と胎土・色調などが類似しており、両者が対をなす可能性が考えられる。この杯蓋の内面は墨痕がみられ、よく磨滅していることから、転用硯として使用されたと考えられる。なお、口縁部を意識的に打ち欠いたような形状をしていることは注目される(図版140)。

小瓶 (453) 口頸部を欠くが、胴部は完存する。胴部はやや偏平で、肩に一条の凹線が配される。胴部上半には2条の沈線がめぐる。高台は低く、底面の外周に付される。底面は篋切りのようであり、胴部下端はロクロ削りする。胎土に小礫¹⁵⁾を含み、淡灰色を呈し、Ⅳ層出土広口鉢(359)と同じく頸城地方以外で生産された可能性がある。

壺類 (454~458) 454は平底で、胴部下端に斜方向に篋削りを施す。底面は平滑である。455・456は長

15) 豊浦町曾根遺跡(前掲)で同形・同じつくりの小瓶が出土している(『曾根遺跡』I 55図3)。

頸瓶の胴部と考えられる。456の底面は糸切りである。高台は安定した接地面で、内側へのびる。457は口縁部を欠くが、大形の短頸壺と考えられる。肩が張り、外面にカキ目が施される。458は横瓶である。

大甕(459・460) 459は口縁端部が外傾した面をもつ。胴部内面は同心円叩き目、外面は平行叩き目とカキ目である。460はとくに大形の甕で胴部内面に同心円叩き目、外面に平行叩き目がなされる。

土師器

杯(461~468・472~475) 467・468・474・475が黒色土師器である。第69図のとおり、472・474が杯Ⅱ、473・475が杯Ⅰ、その他が杯Ⅲである。468は底部の器壁が厚く、体部のたちあがり直線的であり、やや特異である。そのほかはⅣ層出土と全く同じである。

甕(469・470) 469は口径13.6cmで、口縁部のつくりはⅣ層出土(440)と同じく、短く屈折してたちあがる。470は底部糸切りである。

鍋(476) 口径36cmを測る大形品で、器壁も厚い。口縁端部は面をもつ。体部下半は外面平行叩き目である。

脚台(471) 小形の脚台で、体部の形状は不明である。Ⅳ層出土の425と同じく、調整にはロクロが使用されておらず、外面に刷毛目がみられる。体部内面は黒色を呈する。有台甕とも考えられる。

i) SK 391出土土器(図版42・134)

B地区のD22・23区にあるSK 391は奈良時代(SK 391B)と平安時代(SK 391A)の土坑が重複したものである。SK 391A出土の有台杯(494)は本来SK 391Bにもなっていたものであろう。高杯脚部(496)もその可能性がある。

SK 391B出土土器(477~489)

土器様相は8世紀初頭から前半のA地区の土器と類似するものの、土師器はロクロ使用のもの(土師器B)がかなり含まれており、これより新しい要素をもつ。ロクロ不使用の土師器Aと土師器Bの数量比率は3対7程度である。須恵器杯類には糸切りはみられない。図版42のほかに壺蓋がある(第74図4)。

須恵器(477~484) 477は無台杯で、口径11.6cm・器高3.6cmを測る。底部は丸味が強く、体部は外反しながらたちあがる。A地区出土の無台杯(590)と大きさ・つくりとも共通する。478は口径11.0cmの小形の有台杯で、口縁は強く外反する。479は口径13.2cmの杯蓋である。内面中央は広い範囲にわたり撫でが加えられている。480は体部に2条の沈線をめぐらす金属器模作の有台杯である。この沈線は底面の高台内側にも2条の重圏文となる(第71図)。一般的な有台杯と異なり、体部はほとんど直立する。底面には篋切りののちにロクロ撫でを施しているが、さほど丁寧調整されていない。A地区出土の601・602と胎土・つくりとも同じである。481は口径15.0cm・器高4.3cmの有台杯である。底面は篋切りののちにロクロ撫でされる。体部は腰が張り、口縁は外反する。A地区出土の597・598と同じつくりである。SK 391A出土の有台杯(494)も同じつくりと大きさであり、本来SK 391Bに属するものとみられる。高台は低く、内端接地である。482は口径7.6cm・器高7.8cmで、一般的な有台杯Cよりはかなり身が深く、特異な器形である。体部は腰がくびれ、口縁部がひろがり、端部でわずかに内彎する。体部と底部の境は鋭い稜をつくる。体部下半はロクロ撫での後にしぼられてくびれており、内面にはかすかにシボリ痕がみられる。高台は底部周縁に付される。高台の高さは低いが、貼り付けであり、接地面には強くロクロ撫でを施している。底面は篋切り痕を残す。底部内面にはロクロ撫でが及んでいない。483は体部に2条の沈線をめぐらす大形で身の深い有台杯Bである。口径16.8cm・器高7.2cmで、体部は腰が強く張り、口縁部は外反する。体

部中位に2条の浅い沈線をめぐらす。底面は丁寧にロクロ削りを施す。内面中央には撫でを加え、全体のつくりはとくによい。SK 24出土の18と類似するが、全体に若干大ぶりなこと、沈線が体部中位に配されること、体部の腰の張りが強く、口縁の外反度が大きいことなどの相違があり、当例が相対的に古様であることが考えられる。484は長頸壺の胴部下半である。胴部の形態は全体に偏平で、肩が張るものである。胴部下端はロクロ削りし、内面中央は撫でており、ほかはロクロ撫でである。高台は強く外方へふんばり、端部が広い面をなす。

土師器(485~489) 図化したものでは485をのぞいて、いずれもロクロ使用の土師器である。485は口縁部がゆるく外反する鉢である。胎土に小礫を多く含み、茶褐色を呈する。486~489はロクロ使用の甕である。色調は485よりも明るく淡褐色から明褐色を呈し、胎土は小礫を若干含むほかは精良である。この小礫は意図的に混入した可能性がある。口縁部は胴部からくの字状に屈折し、端部は丸くおさまるもの(486・489)と面をもつもの(487・488)がある。489の内面はカキ目で、外面下半に下から上への篋削りが施される。甕の胴部破片はロクロの使用が想定されたとしても、外面には縦方向に篋削りされるものが多く、叩き目をそのまま残すものは少ない。胎土には小礫を多く含む。

SK 391 A 出土土器(490~499)

SK 391 A 出土土器はSK 391 Bとかなり時期的に隔絶する。土器様相はSD 201一括土器に類する。

須恵器(490~496) 490~492・494は有台杯、493は無台杯である。490は底部が篋切り、491がロクロ削り、492・493が糸切りである。494はSK 391 Bからの混入であろう。493は口径13.4cm・器高4.0cm・底径5.0cmで、底径が口径に対して小さい(底径指数42)。淡灰色を呈し、やや軟質である。体部外面にはロクロの凹凸が明瞭であるが、内面はなめらかである。495は瓶類の口頸部である。口縁部は外反し、端部に広い面をもつ。496は高杯脚部と考えられる。脚裾部は広く外方へのび、端部は下方へ短く屈折する。遺存部上端は杯部との接合部で剥離している。

土師器(497~499) 497~499は甕である。497は口径24.0cmで、口縁端部は上方へつまみあげられ、外側に面をもつ。498は糸切り不調整の底部で、外面に煤が付着している。内面はロクロの凹凸が明瞭である。499は口径12.4cmの小形甕で、胴部は丸味をもち、口縁部は短く外方へひらく。端部はやや内彎し、丸くおさまる。499と498は胎土・色調などが類似しており、同一個体の可能性が強い。

j) SK 223 出土土器(図版42・134)

SK 223はB地区南辺のSB 206の東に接している土坑で、SD 203によって切られていた。出土土器はSK 102・SD 201一括土器と共通する点が多い。

須恵器(500~509) 無台杯(500~504)には篋切り(500・501)と、糸切り(502~504)とがある。501の内面中央には撫でが加えられている。502・504はSD 201一括土器に多い糸切り無台杯(237~242)と全く同じつくりである。503はこれより焼成がやや軟質で、体部下半に屈折部があり、502などとは異なる。有台杯は身の深い有台杯B(507・508)が篋切りである。505・506はSD 201一括土器の糸切り有台杯(253・254)などと共通する。ともに底面には糸切り痕が比較的広く残る。507の内面中央には撫でが加えられる。509は高杯脚筒部で一条の沈線を配する。遺存部の上面は杯部との接合部で剥離する。

土師器(510~512) 510は口径13.8cm・器高3.8cmで内面黒色処理した杯である。外面は器面があらわれており、調整は不明である。511は高杯である。土師器の高杯は今池遺跡ではごく少ない。胎土は精良、淡明褐色を呈し、杯と同じ。内面にシボリ痕をとどめる。512は口径21cm・復原高33cmを測る長胴の甕である。

土師器の甕で全体の器形をほぼ復原できるものは少なく、貴重である。底部は欠損するが丸底と考えられる。口縁部はくの字状に外反し、端面をつくる。胴部上半はロクロ撫で、下半は外面平行叩き目、内面同心円叩き目である。篋削りはみられない。

k) SD 321出土土器 (図版43・134・135)

SD 321はB地区南辺部の建物群を画す東西溝である。身が深くて大形の有台杯Bがとくに目立つことが注目される。SD 201一括外土器の小形長頸瓶(296)の破片が含まれている。出土土器はSK 102とSD 201一括土器と類似する。

須恵器(513~534) 513~518は無台杯で、515~517が糸切りである。篋切りの513・514はSK 102の無台杯(132)などと大きさ・つくりなど共通する。515はSD 201一括土器の無台杯(237~242)と全く同じつくりである。これに対して、516は器壁がやや厚く口径13.3cmとやや大ぶりでSD 201一括土器の244に類似する。518は口径14.0cm・器高5.5cmで、高台をもたないタイプでは最も身が深い形態で特異である。これと同じ器形のものにはほかにはみられない。底面は篋切りで、中央が大きくくぼむ。内面はロクロ撫でである。底面に墨書がある(717)。519~523・525~532は有台杯である。全体の中で身が深くて大形の有台杯B(525~532)が多く、器種構成では特殊性が看取される。底部は、篋切り(520~523・525~527)と糸切り(532)があり、528~531は全面がロクロ削りされる。ロクロ削りのものは、529・530をのぞいて糸切りと考えて大過ないと思われる。篋切りの有台杯Aでは520が小さい。522は口縁部が外反し、相対的に古い要素をもつ。篋切りの有台杯Bでは526と527がやや大ぶりで、口縁の外反がやや強く、高台が安定した内端接地であり、時期的に古い要素をもつのにに対し、525は底部の器壁が薄く高台に安定性がなく、底面の内側に付されており、新しい傾向が感じられる。526の底部内面には撫でが施されている。529は口径に対して底径が小さく、体部の開きが大きいなど形態上やや特異である。高台は径が小さく、細くて安定性がない外端接地である。器壁は厚く重量感がある。底部の器壁が厚く、凹凸のあることからすれば底面がロクロ削りされるものの、篋切りの可能性も考えられる。530も底面の全面がロクロ削りされているが、底部の器壁が均一でなく、周縁にふくらみをもつこと、底部と体部の境が角張らず、丸味をもつこと、口縁部がやや外反することなどから篋切りと考えられる。有台杯Bは有台杯Aよりも一般に製作が丁寧であることから、ロクロ削りされているものでも切り離しは篋切りの可能性は高いといえる。530の高台は、低く安定した内端接地で篋切りのものと共通する。糸切りが残るものと糸切りと考えられる有台杯には、有台杯Aと有台杯Bがある。有台杯Aでは519が小形で若干身が深い。体部は直線的にたちあがる。523は全体につくりがよく、底面はきれいにロクロ削りされ、ほかは丁寧にロクロ撫でされる。内面の底部と体部の境は沈線状となる。高台は比較的高く、断面は方形である。内面に薄く漆の付着が見られる。有台杯B(531・532)では、532の底面中央にわずかに糸切り痕を残す。530は全面がロクロ削りで、糸切り痕を消していると推定される。これに対して531・532は底部がほとんど水平であり、体部との境が明瞭で角張り、体部は直線的である。内面の底部と体部の境は沈線状となる。528は篋切りと思われる。杯蓋(524)は天井部がロクロ削りされる。天井部の器壁は比較的薄く、内面がなめらかなことから糸切りであろう。SD 201一括土器(262)と大きさ・つくりが同じである。

533は全体のほぼ半分を残す横瓶である。口縁部はほぼ水平な面をもつ。胴部外面は平行叩き目とカキ目、内面は同心円叩き目である。内面の叩き目は円板充填部付近をのぞいて全面におよぶ。

534は大甕口縁部である。口径23cmで、端部はほぼ水平な面をもつ。

土師器(535~537) 535は糸切り不調整の杯底部である。体部下端はくぼまない。536は甕の底部であり、底面糸切り不調整である。537は内面黒処理した大きな杯である。器壁が厚く、SK 21A出土の杯(117)に類似する。底面は手持ちの篋削りで、体部外面はロクロ撫でされる。内面は篋磨きで黒色処理される。底面付近は黒斑状に変色する。

l) SD 323出土土器(図版43)

B地区E~H21区にある東西溝である。出土量は多くはない。出土土器はSD 321出土土器やSD 201一括土器、SD 3Ⅳ層出土土器に類似するものである。

須恵器(542~549) 542は篋切りの無台杯である。底部は若干くぼむがほぼ水平で、体部は器壁が薄く、開き気味である。口径12.9cm・器高2.9cmでSD 3Ⅳ層出土の篋切り無台杯に類似するが、底面の篋切り痕が撫でて調整されていること、底部の器壁がやや厚いことなどのちがいはある。543は糸切り有台杯で、SD 201一括土器のものに類似する。544は篋切りの有台杯Aで、大きいことから、相対的に古いものであろう。底部はすべて遺存しており、遺存部は底部を円形に意図的に打ち欠いたようであり、再利用された可能性が強い。底面がロクロ削りされる545もこれと同様に円形に打ち欠いた形跡がある。底面に「十」の篋記号がある。底部内面はなめらかであり、糸切りと推定される。大きさからみて有台杯Bの可能性もある。有台杯Bの548は底面が丁寧なロクロ削りである。底部内面はくぼむが、なめらかであること、底面のロクロ削りと高台の形態・貼り付け方はSD 321出土有台杯A(523)と類似し、糸切りと考えられる。549は底面中央に糸切り痕を残す。SD 3Ⅳ層出土有台杯B(340)と類似したつくりである。高台と体部下半の一部に板状の圧痕がみられる。547は天井部篋切りの杯蓋である。546は短頸壺の底部かと思われる。

土師器(550~552) 550は体部のひらきの大きい杯と推定される。底面と体部下端にロクロ削りがされる。551は甕口縁部で、端部は上方へつまみあげられ、外側に面をもつ。552も同じつくりの口縁部をもつ。体部外面下半には下から上への篋削りが施される。

m) SD 324出土土器(図版43)

B地区のSD 323の北側にある東西溝である。出土量は多くはない。出土土器はSD 321・SD 323と類似すると考えられる。

須恵器(553~556・563) 553は篋切りの有台杯であり、形態・手法はSD 201一括土器の篋切り有台杯(233)と共通する。554は糸切りでありSD 323出土の有台杯(543)と同じ手法である。底面中央に糸切り痕が残り、高台貼り付け部はロクロ削りによって斜めになる。555は底部中央を欠くが、形態やつくりは554と類似しており、糸切りであろう。底部の欠損面はきれいな弧を示しており、底部粘土板と体部との接合部で剥離・欠損したものであると思われる。556は篋切りである。563は長頸壺の口頸部である。口頸部は細く、口縁部もさほど開かない形態であろう。中ほどに一条の凹線をめぐらす、この端は合っていない。

土師器(557~562) 557・558は杯である。底面は糸切りである。562は高台をもつ椀である。土師器で高台をもつものはきわめて少ない。高台は断面方形であり、さほど高くない。器面が剥離しており調整不明である。560・561は甕底部である。559は甕で口縁端部は上へつまみあげられ、面をもつ。体部外面下半に篋削りが施される。

n) SD 201一括外土器(図版37・137)

SD 201には一括土器として良好な土器溜りがあり、これについては既述したとおりである。これ以外

でも SD 201は比較的出土量が多かった。時期的には土器溜り出土の一括土器とほとんど同じ時期のものが多い。

須恵器 (289~297・306) 289~291は糸切りの無台杯である。289・290はつくりが全く同じもので、底径は口径に比してやや大きい。淡灰色で、やや軟質である。291は底面に「夫」の墨書をもつ(710)。灰色を呈し、焼成堅緻である。以上の無台杯は土器溜りとごく近い位置で出土している。292・293は糸切りの有台杯である。293は底面の高さが低く、体部下端の稜が角張っており、SD 201一括土器よりも SD 3 IV 層出土例に類似する。292は SD 201一括土器例(253)と同じである。294は口径46cmの甕で、器形は SB 275出土の甕(588)と類するものであろう。295は長頸瓶の口頸部である。口縁端部は広く上下にのびる。口縁部のひらきは大きくない。296は小形長頸瓶である。SK 102・SK 120の出土例よりやや大きい。底面は糸切り不調整で、板状の圧痕がみられるほかは内外面ロクロ撫であり、シボリ痕はほとんどみられない。これは器形が細くくびれていないことと関連しよう。破損状況を見ると、ロクロ水挽きによる成形ではなく、粘土紐成形とみられる。器面は青灰色を呈し、器肉は赤褐色を呈する。焼成堅緻である。297は長頸壺の口頸部である。大きくラッパ状にひらく口頸部で2条の沈線をもつ。8世紀代の可能性がある。306は口径約60cmを測る甕であり、全出土品のなかで最大のものである。口縁部は大きく長くひらき、端部は上下へのびる。外面には波状文が2段に配される。その下には平行叩き目と思われる圧痕がある。胎土・焼成はB地区包含層出土の大甕(675)と類似し、両者とも暗黄緑色の自然釉がかかる。675は SD 201の上層にあたる位置から出土している。

土師器 (298~305) 298は糸切りの杯である。体部下端はくぼまず、体部外面にはほとんどロクロ撫での凹凸を残している。口縁部はやや外反する。糸切り後は再調整されていない。299も杯であるが遺存状況が不良で、調整は不明である。300は黒色土師器杯である。301は糸切り不調整の甕の底部である。302の器形は不明であるが、大形の器種の底部である。底部の粘土板の接合部から破損している。内面は刷毛目で、外面は粗い撫である。胎土は甕類とかわりない。303は甕で口縁端部に面をもつ。304は強くくの字に外反する口縁部をもち、胴部は球形と推定される甕である。土師器甕は小形甕をのぞけば、ほとんど長胴形であり、このように球形の胴部をもつものは少ない。内外面ロクロ撫であり、内面にはその後に刷毛目が施される。口縁端部は短く屈折してたちあがる。305は鍋である。体部下半に上から下への篋削りが施される。

o) B地区遺構出土土器(図版35・43・44・132・134~138・140)

ここではこれまで述べた遺構以外の土器について説明する。

SD 104出土土器(214・215) SD 104はB地区南辺の建物 SB 115の雨落溝である。土器の出土量は多く、SK 102とほぼ同じ時期に比定される。214は篋切りの杯蓋である。天井部から縁部は屈曲する。215は製塩土器である。製塩土器はこれ以外にほとんどみられない。これは全体の約1/10を残す破片で復原にやや不安を残す。外面に粘土帯を明瞭にとどめ、内面は指頭圧痕と粗い撫である。底部は欠損するが、おそらく平底であろう。内陸部の遺跡での出土例では新井市栗原遺跡に8世紀前半のものがある。

SK 120出土土器(216~221) SK 120はB地区のE28区にある浅い土坑で、小形長頸瓶(216)や稜椀(221)など特殊な器種を含む。時期はSK 102ないしはSD 201一括土器とほぼ同じであろう。216は小形長頸瓶である。色調は青灰色で、器肉は暗紫色を呈する。焼成はとくに堅緻である。一見して、ほかの土器と異なり、器形の特殊性とあわせて、搬入品と考えられる。口頸部を欠き、体部は上半と下半の破片で、接合

部がない。底面は糸切り不調整で、体部下半はロクロ撫でのちシボリ痕がみられる。体部と底部の状況からみて成形方法は底部に粘土紐を巻きつけたものと推定される。217は高杯の脚部と考えられる。脚端部は丸くおさまる。筒部内面にシボリ痕をとどめる。218は糸切りの無台杯である。体部は直線的にひらき、SD 201一括土器の糸切り無台杯(244)などと焼成・つくりが類似する。219は糸切りで高台の内側は器壁が厚く、ロクロ削りはなされない。高台の外側は器壁が薄い。220は底面にロクロ削りが施され、切り離しが不明であるが、形態・つくりからみて、糸切りであろう。221は口径17.8cm・器高7.7cmの金属器模作の稜椀である。この器種はほかにA地区(615)とB地区の包含層(652)から出土している。焼成はとくに堅緻ではないが、胎土精良で、器面の内外面の調整は丁寧である。体部中位に稜をもち、口縁部は外反する。高台は幅がせまくて高く、一般的な有台杯の高台とは異なるつくりである。体部下半から底面は丁寧にロクロ削りされ、ほかはロクロ撫である。底面に篋記号がある。これは焼成後に刻されたものである。なお、これと同一個体の破片がSK 121から出土している。以上のほかに第74図2・3がある。

SK 140出土土器(222~226) SK 140はB地区南辺のE26区にある土坑であり、SB 106にともなう時期の可能性がある。出土土器はA地区出土の古い時期の土器と類似し、8世紀前半に比定される。土師器甕は図化しなかったが、土師器Aが主体である。222は土師器の小皿で、胎土に小礫を多く含み、刷毛目調整がみられることから、土師器Aと考えられる。内面には指おさえがなされる。口縁部をわずかに欠くが、ほぼ完存する。口径8.3cm・器高3.0cmである。ほかに類例をみない特異な器形である。223・224は篋切りの有台杯で、口径14cm前後で、体部は腰が張り、外反する。底部内面は撫でを加える。225は口径15.4cmの杯蓋で、天井部はロクロ削りされ、天井部内面は撫でが施される。226は天井部にロクロ削りがなされず、天井部から縁部はわずかに段をなす。天井部内面は撫でが施される。

SK 208出土土器(586・587) 586は口径に対して、とくに器高の高い器形である。器部は筒状となり、ほぼ口縁部まで直立する。高台は幅のせまいもので、端部は丸くおさまる。外面は口縁部をのぞき、丁寧にロクロ削りしたのちに高台を貼り付けている。内面はロクロ撫でで、上半はとくに入念に施されており、器面がなめらかである。587は須恵器の高杯脚部である。時期は不明確であるが、8世紀と考えられる。

SB 106出土土器(564) 器形・つくり・胎土などやや特異な有台杯で、器壁は全体に薄く、高台は接地面が比較的丸く、外側へ低くふんばる。底面はロクロ削りされている(図版138)。しかしながら、糸切りがなされていないことは、底面に丸味をもつことと底部内面に篋切り特有の凹凸があることから、篋切り有台杯でもごく古い時期のものともみられる。8世紀前半でも古い時期に遡るものと思われる。

SD 141出土土器(565) 短頸壺の蓋である。天井部は中央がくぼみ、丸味をもって屈曲して縁部となる。口縁端部は内側へ屈折して、外傾する面は明瞭にくぼむ。天井部はロクロ削りとみられるが、自然釉でよくわからない。内面中央にはかるく撫でが施される。短頸壺の蓋としては古い様相を示し、8世紀前半まで遡る可能性がある。

SD 132出土土器(566) つまみをもたない蓋であり、稜椀の蓋と考えられる。天井部はほぼ水平な面から稜をもって縁部へつらなり、ゆるく屈折して端となる。天井部全面は入念にロクロ削りされる。稜椀の蓋はほかにA地区で出土している(616)。

SK 145出土土器(567) 全く欠損していない完存の杯蓋である。つくりや胎土・色調などはSK 140出土の226と同じである。

SB 107出土土器(568) 内面に暗文をもつ特殊な黒色土師器で、つくりはよい。口径15.8cm・器高6.9cmと大ぶりで、器形は通常の土師器杯と異なり、底径が大きく、安定性のある形態である。器壁も厚い。内

面に篋磨きを施したのち体部にラセン状の暗文を加え、口縁内側に2条の沈線をめぐらす(図版140)。外面も篋磨きを施しており、器面はなめらかである。底面も同様である。底部内面は磨滅している。内面に暗文を配する黒色土師器は当地方に類例がないが、胎土やつくりからは搬入品とは考えられない。

SK 382出土土器(576) 小形の土師器甕である。平底であり、内面には刷毛目が施され、胎土の点からも土師器Aと考えられる。外面は判然としないが、縦方向の刷毛目かと思われる。胎土に小礫を多く含む。

SK 609出土土器(575) 口縁部を欠損する小壺である。口頸部は細く、胴部は肩が張り、底部はわずかに丸い。胴部下半から底面はロクロ削りを施す。自然釉が厚くかかった形跡があるが、ほとんど剥落している。灰白色を呈し、やや特異な色調である。

SB 275出土土器(588) 口径48cmの大形の須恵器甕である。口頸部は短くひらき、口径は胴部径に比し大きく、底部は大きな平底で、甕としてはやや特殊な器形である。SD 201一括外土器(294)もほぼ同じ形態と考えられる。胴部外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目で、底部内面は撫でである。焼成は軟質で茶褐色を呈する。

SD 202出土土器(569~572) 569は篋切りの有台杯である。570は糸切りと考えられる有台杯Bで、底面は全面ロクロ削りされる。571は篋切りの有台杯Bで、器壁は厚い。底部は丸くなり、体部との境に稜をもつなど、やや特異なかたちをとる。内面中央は撫でを加える。572は短頸壺の蓋である。口縁端部は内傾する面をもつ。つまみは高くずんぐりしている。天井部はロクロ削りである。短頸壺の蓋はSD 141出土例(565)、SD 201一括土器例(266)などがある。SD 202出土土器はSK 102と近い時期と考えられる。

SD 320出土土器(538~541) SD 320はB地区南辺の建物群を画する溝である。土器出土量は多くない。538は篋切りの無台杯である。比較的偏平な器形で、体部は大きくひらく。539は底面がロクロ削りで、底部と体部の境が明瞭であること、体部のたちあがりほとんど直線であること、底部内面がなめらかで凹凸がないことから糸切りと考えられる。540は杯かと思われる。胎土は5mm大の礫を含み、精良ではない。541は土師器Aの平底の甕である。胎土に1~2mm大の小礫を多く含む。SD 320出土土器は時期的な幅をもつ。

SK 332出土土器(573・574) 573は広口の小壺で、口縁部の一部を欠損するほかは完存する。口縁端部は肥厚し、外側に丸味のある面をもつ。胴部は肩が張り、底部は平底ではなく、丸い。底面は篋切り痕を残す。胴部上半には一条の沈線がめぐる。底面をのぞきロクロ撫でである。574は土師器の鉢である。この器形はいわゆる鉄鉢形であり、あまり例のないものである。体部から底部は丸くなり、体部上半はほぼ直立し、端部は面をなす。器面はあれているが、ロクロ撫での凹凸はみられる。胎土は小礫を多く含み精良ではない。こうした胎土は比較的古いタイプの土師器Bの甕によくみられるものであり、時期は不明確ながら8世紀中葉まで遡ろう。

SD 501出土土器(577~579) SD 501はB地区中ほどにある溝である。土器の出土量は少ない。577は口縁部を一部欠損するほかは完存する広口小壺で、胴部に対して口縁部が大きくひらく。底部は水平ではなく若干の丸味をもつ。底面は篋切りののちロクロ撫でし、ほかはロクロ撫でである。578は黒色土師器の杯である。口径19.5cmで、SD 3Ⅳ層出土土器の土師器杯のもっとも大きな杯Ⅲに相当する。内面は篋磨きののち、黒色処理し、外面は下半をロクロ削り、上半をロクロ撫でする。外面には油煙のような黒色の付着物がみられる。579は口頸部を欠く有台の短頸壺である。肩から胴部下半は丸くすばまり、底部に低い高台を付す。胴部下端はロクロ削り、ほかはロクロ撫でである。底面は撫でられているが篋切り痕のようなくぼみが残る。胴部と口頸部の接合部で欠損しており、接合部内面は肥厚し、その部分に指頭圧痕がみ

られる。時期的には577と579が相対的に古く、8世紀中葉前後に遡る可能性がある。577の広口小壺は富山県小矢部市平桜岡山3号窯跡¹⁶⁾に類品がみられる。

SB 651出土土器(580~585) 580は糸切りの無台杯である。口径に対して底径が大きく、糸切り無台杯としてはやや特異であり篋切りのものに類似する。581は天井部の中央にかすかに糸切り痕をとどめる杯蓋である。582・583は糸切りの土師器杯である。582は器高が低く、底径が大きい。584は小甕である。口縁部はゆるく屈曲して、受口状となり、胴部は丸味をもつ。585は長胴形の甕である。口縁部は端部が短く屈折してたちあがる。底部は丸底であろう。外面上半はカキ目、下半は変則的な格子叩き目である。内面は刷毛目である。583・585はカマド内出土である。出土遺物は9世紀中葉から後半に比定される。

P) C地区遺構出土土器(図版33・131・138)

SK 37出土土器(41~46) 41~43が土師器A, 44~46が土師器Bである。41・42は口縁部がゆるく外反し、胴部は丸味をもたない。口縁部内外面が横撫で、胴部内面は横方向の刷毛目、胴部外面は縦方向の刷毛目である。43は底部で、内面に刷毛目、外面に斜方向の篋削り、底面に手持ちの篋削りがなされる。44・45に対して46の口縁部は明瞭に外反する。44のほうが器壁が厚い。44・45の胎土には2~4mm大の小礫が含まれるほかは精良で淡褐色を呈する。46の胎土にはこれより小砂粒が多く含まれるが、41~43よりは精良である。41~43は44・45ほど大きな小礫は含まれないが砂粒の含有量は多く、土師器Aと土師器Bの胎土の差や色調の相違は比較的明瞭である。

SK 25出土土器(118~127) 須恵器杯はすべて篋切りであり、時期はSK 24とほぼ同一と考えられる。無台杯(118~121)は口径13.5cm前後のもの(118~120)とこれよりやや小さいもの(121)がある。122・123はともに身の浅い有台杯である。122はSK 24出土の有台杯(8)と全く同じつくりである。123もほぼそれと器形が類似するが、底面がきれいにロクロ削りされている。124はこれらより大きな有台杯でやはり身の浅い。この有台杯は体部と底部の境が明瞭に稜となり、直線的にたちあがるなど、やや特異な器形である。底面はロクロ削りである。126は壺の口縁部かと思われるが、器形は不明である。127は大甕の口縁部で、外面に波状文を配する。

SE 20出土土器(128・129) 128は井戸の底にちかい黒色泥層から出土した有台杯である。底部糸切りである。形態・つくりは、SK 102出土土器例(144)・SD 201一括土器(250)と類似し、底面の糸切り周縁部をロクロ削りし、高台を付している(図版138)。この篋削りはスムーズにおこなわれず、篋の切れ目が残っている。内外面に水垢が付着し、灰黒色を呈する。129は篋切りの無台の底面に墨書と漆書きとがある(724)。全く欠損していない完存品である。この杯は大きさ・つくりともにSD 3Ⅳ層出土に一般的な篋切り無台と同じとみられる。全体の器壁はごく薄く底部は若干くぼみ、外面にはロクロによる凹凸が著しい。内外面に水垢が付着し、灰黒色を呈する。この土器は井戸が放棄された時期、128は井戸使用の時期の一端を示すと考えられる。

SK 50出土土器(130・131) 131は長頸壺の口縁部である。130は土師器甕である。口縁部に面をもつ。

Q) A地区出土土器(図版45・135・136・140)

A地区出土土器は奈良時代と平安時代の2時期にはほぼ限られる。この両者の間は1世紀以上のへだたり

16) 伊藤隆三『富山県小矢部市平桜岡山3号窯跡』(小矢部市教育委員会 1981) これによれば窯跡は

8世紀前葉に比定されている。

があり、しかもそれぞれあまり時期幅をもっておらず、遺構と包含層を分けずに時期ごとに記述する。土器の大半は奈良時代の土器である。

奈良時代

出土土器は比較的多い。遺構ではSK 906・SX 908・SB 901の柱穴から多く出土している。奈良時代の土器は、古墳時代以来の系譜をひく土師器Aが主体をなすことからみて、まずB地区・C地区のこれまで述べた一括土器よりも古いことがうかがわれ、須恵器もSK 24よりも古い要素が指摘される。8世紀の初頭から前半に比定されている新井市栗原遺跡SD 25出土土器¹⁷⁾と類似した土器様相を呈しており、これとほぼ併行するか若干新しい時期に比定される(I期)。なお、金属器を模作した器種がいくつかあることは注目される。

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・稜椀・長頸壺・横瓶・大甕などがある。

無台杯(589・590) 杯では有台杯に対して無台杯の数が少ないことが指摘される。数量比率は1対4ほどであろうか。589と590は口径が若干異なり、大小の別器種となるかもしれない。栗原遺跡SD 25出土土器では口径11cm前後のもの¹⁷⁾と13cm前後の2器種あり、589・590とほぼ対応するようである。いずれも形態は類似し(径高指数28)、底部は丸味をもち、体部は強く外反して口縁となる。底面篋切りで、ほかはロクロ撫である。590の内面中央には撫でが加えられる。589はSX 908、590はSK 906出土。

有台杯(591~602) 有台杯は小形で身の深い有台杯C(591~593)、身の浅い有台杯A(594~602)がある。

有台杯A(594~602)は法量から大・小2種に分けられる。大きい有台杯A I(596~602)のうち601・602は体部外面と底面に沈線をめぐらしており、金属器の模作品と考えられる。この2点は口径15.5cm前後・器高5cmくらいでほぼ同じであり、器形やつくり・胎土・焼成などが全く同じである。ほかのものに比して体部のたちあがり直立気味であり、相対的に器壁がやや薄い。高台は安定した内端接地である。沈線は体部中位のほか底部の高台外側に1条、内側に3条を配する。これは先端が尖った篋で、ロクロ回転を利用して施しており、沈線が1回以上めぐり、引きはじめとあとでは2条となり交差部分もある。底面はロクロ削りで底部内面に入念に撫でを加える。その他の有台杯Iは口径13.4~15.0cm・器高3.8~4.8cmである。599がやや器高が高い。体部は腰が張り、口縁が外反するもの(597~599)とこれがないもの(600)がある。高台は599をのぞいて低い内端接地である。599の高台は高く、外方へ強くふんばる。596の高台は接地面が丸くなり、ほかのものとは全く異なる。この土器は底面がきれいにロクロ撫でされ、つくりがよい。高台内側には高台貼り付け時につけられたと思われる爪状¹⁸⁾圧痕がめぐり、胎土がとくに精良で焼成はきわめて堅緻である。ほかは底部篋切りで、598はロクロ削りされる。599・600は底部内面に撫でを加える。599は相対的に古いことが考えられる。600の底部内面には2本の平行線の篋記号がある。出土地点は596がC 21区ピット123、597・601がSK 906、600がSB 901、598がC 16区、602がD 23区、599がF 21区ピット80である。

比較的小さい有台杯A II(594・595)は2点ともほとんど同じ大きさである。点数は有台杯A Iよりも少ないようである。口径11.6~12.0cm・器高3.0~3.2cm・径高指数26である。体部下半は丸く、口縁部は

17) 坂井秀弥『栗原遺跡』第4次・第5次発掘調査概報 新潟県教育委員会・新井市教育委員会 1982

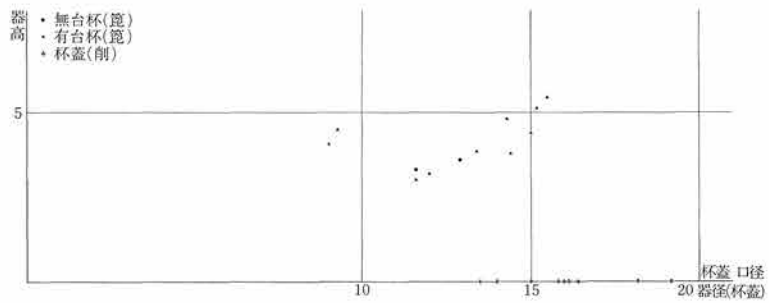
18) これについては『老洞古窯跡群発掘調査報告書』(前掲)に例が紹介されている。栗原遺跡でも出土

している。

19) A地区は独自にグリッドを設定しており、B・C地区のグリッドとは異なる。第Ⅲ章1A参照。

外反する。高台は低く、内端接地である。ともに SX 908 出土。

有台杯 C (591~593) は口径 9.0~9.2cm・器高 4.1~4.5cm・径高指数 47 である。591 と 592 は同じ大きさとつくりである。ほかの有台杯と同様に体部の腰が張り、口縁が外反する。底部内面に撫でを施



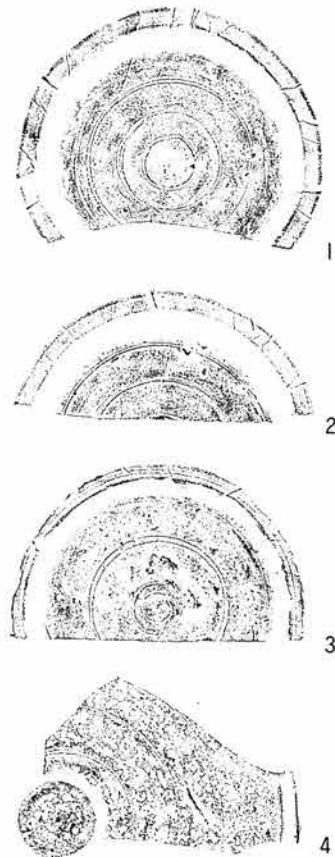
第70図 A地区出土須恵器杯・杯蓋法量分布図

す。593 は底部破片で、たちあがりは直立気味、高台は体部下端をつまみ出すようにつくっており、591 などとは異なる。身がかなり深いものであろうか。591 はピット 80, 593 は G 19 区出土である。

杯蓋 (603~613) 612・613 が口径 18~19cm で、とくに大きく、ほかは 13~16cm である。器形はいずれも偏平である。器高がやや高い 609・611 は天井部が丸味をもち、全く屈曲せずそのまま縁部となり、やや古い様相を呈する。ほかのものは天井部が水平となり、縁部がわずかに高くなり、下方へ屈曲して端部となる。612 は縁部の屈曲が比較的明瞭であり、下方への屈折は内側へはいる。610・612 はつまみがとくに高く、天井部のロクロ削りが丁寧であり、胎土・焼成はよく、つくりもよいことから一般的な杯とは異なる器種にとまなう可能性がある。その他のつまみは偏平で、中央があまり尖らない。608 は中央のくぼみが大きい。608 のつまみは相対的に小形である。天井部はすべてロクロ削りされる。その範囲は 607 と 608 が 1/2 程度で、ほかはさらに広く削りを施す。607 と 608 は天井部にロクロの凹凸がやや大きい。すべて内面に撫でを加えるが、608 はこれがかかる施されている。それぞれの出土地点は、603 が SB 901, 604・605・607・610・613 が SX 908, 608 が SK 907, 612 が C 21 区ピット 123, 606 が F 15 区, 611 が F 25 区である。

稜椀 (614~616) 615 は当遺跡でも類例のある形態であるが、614 は当地方でほとんど類例のない特殊なものである。614 は口径 18.0cm である。器部の底部は丸くなり、屈折して口縁までほとんど直線的にたちあがる。口縁端部は丸くなるが、内側にかすかに内傾する面をつくる。体部と底部の境には一条の凹線をめぐらし、底部には一条の鋭い突帯をつくりだしている。底部はロクロ削りを入念に施し、ほかはロクロ撫でで、底部内面には撫でを施す。胎土には小礫が散見される。焼成は堅緻で、灰色を呈する。底面に自然釉がかかり、倒置して焼成されたことがわかる。蓋の可能性も考えられる。全体の 1/3 を残す。D 21 区出土。615 は体部の稜が明瞭なもので、口縁は大きく外反する。A 25 区出土。616 は稜椀の蓋で、つまみをもたない。外面はロクロ削り、内面はロクロ撫でである。SK 908 出土。これとほぼ同じ形態のものは SD 132 で出土している (566)。

横瓶 (617) 口縁部は外反したのち、屈折してたちあがる。端部は面をもつ。こうした口縁端部をもつものはめずらしい。胴部内面には同心円叩き目がみられる。胎土が緻密で、焼成はとくによく、



第71図 金層器模作須恵器杯・杯蓋
1 A地区(601) 2 A地区(602)
3 S K 391 B(480) 4 B地区(657)

ほかの須恵器と区別される。D14区出土。

瓶類 (618・619) 618は口頸部が遺存するもので、突帯を配するなど通有の形態とつくりではなく、特殊な瓶と考えられる。口縁部は外反し、端部は下へのび、この面に一条の突帯がつくられている。口頸部下端には細い突帯がめぐり、これを境にして胴部となる。暗灰色を呈し、焼成堅緻である。つくりはとくによい。F13区ピット25出土。619は口径18.7cmのやや大形のものである。口縁部は大きくひらき、中位に2条の沈線がめぐり、これと同じ器形はほかにない。胎土はとくによい。F8区出土。

土師器

土師器は土師器Aを主体とし、土師器Bがいくらかある。器種は甕がほとんどであるが、黒色土師器・赤彩土師器がごく少量含まれる。

杯 (620～622) 620と621は内外面に赤彩を施し、622は内外面を黒色処理する。620・621は須恵器の杯に類似した器形と推定され、底部に回転の篋削りがなされていることからみて、ロクロの使用が考えられる。胎土も淡褐色で土師器Bと共通する。622は内外面を黒色研磨する。内面を黒色処理するものはいくつみられるが、外面まで黒色処理するのは、これ一点のみである。器形は身の浅い皿と考えられる。焼成はきわめて堅緻であり、器内は灰褐色を呈する。底面にはかすかにロクロ削りの痕跡があり、ロクロ使用である。底部内面の外周が肥厚するのは須恵器と同様である。620はF15区、621はH21区、622はSX908出土である。

甕 (623～634) 627は小形で丸い胴部をもち、甕でないことも考えられる。

632のみ土師器Bで、ほかは土師器Aである。623・625・626は平底であり、624は器壁が薄く丸底風である。土師器Aは胴部内面に横方向の刷毛目、外面に縦方向の刷毛目を施し、口縁部は内外面とも横撫である。632は土師器Bで胴部外面に篋削りを施す。図示したもの以外の甕で土師器Bのもの多くは、外面に叩き目をそのまま残さず、篋削りとカキ目・横撫などを施すものである。土師器Aは体部と口縁部がゆるく屈曲し、口縁部は短く外反するのに対し、土師器Bはくの字状に明確に屈折する。出土地点は、623・629・631がF15区、624がI15区、625がD14区、626・632がSX908、627がC16区ピット13、628がD18区ピット42、630がSK906、633がF13区ピット25、634がSB901である。

平安時代

A地区出土の平安時代の土器は、A地区南側調査区の北端部に集中して出土する。灰釉陶器を含み、時期はSD3Ⅳ層出土土器以降の、ほぼ9世紀後半から10世紀に比定される。

須恵器 (635～638) 635は篋切りの無台杯で、SD3Ⅳ層出土土器に典型的なタイプである。F6区出土。636は小形の長頸瓶の胴部下半と思われる。C15区出土。637は有耳瓶である。耳の数は不明である。有耳瓶はほかにSD3Ⅳ層に1点出土している(358)。耳の形状は側面観が台形となり、円形の孔を穿つ。H7区出土。638は甕の胴部上半である。外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目である。外面の叩き目は凹部がU字状の断面となり、凸部が尖る。内面は叩き目の凹凸が少ない。通有の須恵器よりやや軟質の焼きあがりである。F13区ピット25出土。

土師器 (642・643) とともに黒色土師器である。

灰釉陶器 (639～641) 639は皿の口縁部で、器壁は比較的厚い。内面のみ施釉される。640は三日月高台で、器壁は薄い。底部以外に施釉される。641は640よりも幅広の高台で、内面に釉の流れがかかる。639は内面施釉で、均一に釉がかかること、器壁が比較的厚いことからK-14窯(黒笹14号窯、以下同様に略す)

式に遡る可能性もあり、ほかは美濃・大原2号窯式に比定されよう。639はI7区、640はF7区、641はH8区出土である。

r) B地区南半部包含層出土土器 (図版46・136・137)

須恵器

無台杯 (644~650) 644はSD3IV層出土の底部篋切り無台杯と同じタイプのものである。内外面に焼成時に付着したと思われる黒色の水玉状の斑点がある。E26(11)区出土。645~650は糸切りの無台杯である。いくつかの形態がみられる。645~647は口径に対して、底径が大きいもので、底径指数57~68を示す。645は体部下端が大きくくぼむ。SD203出土の墨書土器(719)もこれと同じ作りである。646・647は篋切りのものとほとんどかわりない形態となる。3点とも焼成がやや軟質である。645はF23(1)区、646はD24(25)区、647はE24(16)区、648はE23(17)区出土である。646は647と類似する形態で、底部に716と同一の手の墨書「夫」がある。649の底面にも不鮮明ではあるが墨書「夫」がある。650は口径に対して底径が小さいものであり、底径指数40で、底径は口径の1/2を大きく下回る。E30(10)区出土。ここではとりあげていないが墨書土器(730)もこれと同様に底径が口径に対して小さい形態である。

有台杯 (651・653~655) 糸切りの有台杯で、底部の外端部が外方へ引き出されている。高台貼り付け部はロクロ削りで斜めになる。E27(23)区出土。653~655は口径に対して、とくに身の深いものである。653の高台はごく低く、体部下端がつまみ出されたような形態である。E29(6)区出土。654の高台も低いが、接地部は面をなす。F22(22)区出土。655は高台が剥離する。E27(28)区出土。

稜椀 (652) 小破片であり、大きさは復原できないが、221とほぼ同じものと推定される。外面にやや粗い沈線をめぐらす。D23(13)区出土。

杯蓋 (656・657) 656は内面に墨痕のある転用碗である。内面はよく磨滅する。E25(5)区出土。657は天井部に沈線で3条の重圏文を施すもの(第71図)で、金属器模作の有台杯(480・601・602など)にともなう蓋である。色調・胎土も共通する。内面中央には撫でを加える。G23(11)区出土。

高杯 (658・665) 658は高杯の杯部で脚部を欠く。杯部は浅く、口縁が屈折して短くたちあがる。杯蓋を逆転したような形態である。杯部外面はロクロ削りで、内面はロクロ撫でである。焼成は軟質である。高杯という器種はごくまれである。E24(12)区出土。665は高杯脚部である。太い筒部をもつ。脚部内外面にはシボリ痕がみられ、杯部内面には撫でが施される。焼成は良好であり、胎土は精良で、灰色を呈す。C29(1)区出土。

短頸壺 (659~661・668) 659は外面に暗褐色の厚い自然釉がかかり、蓋と同時に焼成した痕跡が残る。口縁部は短く直立する。E28(4)区出土。660はやや内傾してたちあがる口縁である。E28(3)区出土。661は口縁部と底部を欠くがおそらく短頸壺であろう。外面に叩き目がかすかに残る。

長頸瓶 (662~664) 662は胴部上半を欠く。口頸部は太い筒状で、比較的短く、端部は上下にひき出されて広い面をもつ。胴部下半は丸い器形で、内面には強い撫で、外面には丁寧なロクロ削りを施す。高台は高く、外方へふんばる。胎土は精良で、焼成堅緻である。H22(16)区出土。664は底面を含めて、外面は丁寧にロクロ削りされており、高台が細く、SK120出土の稜椀(221)に類似し、稜椀の可能性もある。内面は撫でである。D26(24)区出土。

小形長頸瓶 (666) SK102出土例(161)、SK120出土例(216)と同じく、搬入品と考えられるものである。口頸部を残すものはこれだけである。口縁部は外反が大きく、端部は丸くおさまる。胴部肩は稜をな

す。頸部内面にシボリ痕が残る。暗灰色を呈する。E27区出土。この器種の出土地点は4個体ともすべてB地区南辺部に集中している。

広口小壺(667) 底面は糸切り不調整である。

小瓶類(669~673) 胴部が扁平で肩の張るもの(671・672)とやや胴部の高いもの(669・673)がある。672は胴部下半に沈線をめぐらし、肩部に凹線を配する。底面に糸切り痕を残すものはなく、ロクロ削りが施されている。669はD26(24)区、670はE24(14)区、671はD27(1)区、672はE23(17)区、673はE28(4)区出土。

大甕(674・675) 674は口縁部が短くたちあがり、内傾する端面をもつ。通有の甕とは形態が異なり、器高は低いであろう。C27区出土。675は大形で、口縁部が発達し、端部は面をもつ。外面に波状文がめぐる。SD201の上層のF25(4)出土。

土師器

甕(678・679) B地区南辺出土の土師器は土師器Bがほとんどであるが、この2点は土師器Aである。678は胴部が丸味をもち、比較的小形のものであろう。D27(10)区出土。679は粘土紐の巻き上げ痕が残る。F28(4)区出土。

鍋(676) D30(9)区出土で、SB125・SB126などの9世紀後半から10世紀の建物にともなうものである。体部外面にはカキ目・格子叩き目、内面にはカキ目ないしは刷毛目が施される。677は器形が不明であるが、鉢などの可能性がある。底面には篋削りが施される。

s) C地区包含層出土土器(図版47・136)

須恵器(680~689) 680・681は体部に沈線をめぐらす有台杯である。680はJ3区、681はI3区出土。682は身のやや浅い篋切りの有台杯である。ただし、底面はロクロ削りである。I3(5)区出土。683は底面と体部下端にロクロ削りされるが、篋切りと思われる痕跡があり、器形そのものが不明である。一応、無台杯と考えておくと、つまみのない蓋などの可能性も考えられる。J4(14)区出土。684はすべてが完存する杯蓋であり、天井部はロクロ削りされる。器壁が薄く、均一なことから糸切りのものであろう。SD201一括土器(260)とほとんど同じつくりである。I8(5)区出土。685は口径17.4cmの大形の杯蓋である。天井部ロクロ削りで、内面には撫でを施す。SK24出土杯蓋よりもやや古様か。K3(23)区出土。686・687は短頸壺である。686は2条単位の沈線を肩部上位にめぐらす。J3(5)区出土。687は肩が稜をなすものである。K2(16)区出土。688は器面が青灰色、器肉が明褐色で特異である。小形長頸瓶の胴部の可能性がある。K5(15)区出土。689は長頸壺の口縁部でSK50出土例(131)と類似しており、同一個体とも考えられる。

土師器(690~699) 690は甕かあるいは椀・杯などである。ロクロ調整がなされている。底面は篋削りが粗く施される。明褐色を呈する。L9(13)区出土。691は糸切りの杯である。焼成はとくに堅緻であり、通有の土師器と全く異なることから須恵器の可能性もある。色調は明褐色である。692は黒色土師器で底面には篋削りが施される。I7(14)区出土。693は大形の杯である。I7(14)区出土。口縁端部は面をもち、体部下半に篋削りが施される。

t) B地区北半部包含層出土土器(図版47・136)

須恵器(700~705・707・709) 700は篋切りの有台杯である。身が深く、有台杯Bともいえるが器壁は全

体に薄く、小ぶりであることは異なる。体部下半はすぼまり、内端接地となり、安定感に乏しい。SD 3 IV層出土土器の有台杯(337)の系譜と考えられ、これよりは新しい要素がうかがえる。胎土に白色粒子を多く含み外面の自然釉の感じも337と同様である。701は大形でやや身の深い有台杯Bである。底面は篋切り、ほかはロクロ撫で、底部内面に撫でを加える。胎土・焼成はよい。奈良時代の所産であろう。H 17(21)区出土。702は天井部がロクロ削りの杯蓋であり、つまみの中央が大きくくぼむ。I 17(23)区出土。703は長頸瓶の口頸部で、口縁端部の面は小さい。K 11(21)区出土。704は大ぶりの把手である。篋で面取りされている。SD 3最上層J 14(22)区出土。705は短頸壺の蓋で口縁部は面をもたない。H 21(22)区出土。707は、平底の大きな甕であり、全体の器形はSB 275出土例(588)のようなものと考えられる。胴部と底部の境は篋削りを施す。焼成は軟質である。709は大甕で、口縁端部は外方へ長くのび、外傾する広い面をもつ。内面に同心円叩き目が施される。I 14(1)区出土。

土師器(706・708) この2点はI 17(12)区の同一地点から出土したものである。いずれも土師器Bの甕である。706の内面は刷毛目、外面にはカキ目の下に叩き目がかすかに残り、下半部は篋削りを施す。708は表面が剥離するが外面は篋削りが施される。底部の器壁は比較的薄く、均一である。全形がほぼ復原できた土師器の長胴甕はこれ1点であり、貴重な例である。これと同じものは新井市栗原遺跡²⁰⁾で出土している。8世紀前半まで遡る可能性がある。

u) その他の土器

これまで述べてきた土器のほかいくつか特殊な土器例をあげておく。

同心円叩き目の杯(第72図1・2) 2点ともSK 339から出土している須恵器杯である。1は底面篋切り不調整の無台杯で口縁部が一部欠損するがほぼ完形である。内面の同心円叩き目とロクロ撫での前後関係は不明瞭であるが、ロクロ撫でのちに叩き目が施されたようにみられる。2は有台杯で体部の稜が明瞭であり、体部が大きく開く。内面の底部と体部との境も明瞭で凹線状にくぼむ。器形としてはSK 25出土土器(124)に類似する。底面はロクロ削りで篋切りの痕跡がわずかに残る。高台はやや細く、外方へふんばる。内面の同心円叩き目とロクロ撫での前後関係は1と同様と観察される。杯類に内面叩き目を残す例は古墳時代の畿内陶邑窯の製品に報告例²¹⁾があり、これが外面の篋削りに関係するという意見もあるが²²⁾、1は外面に篋削りはなされていない。

漆付着の土器(図版140) SD 3 IV層出土の土師器杯である。内面に厚く漆が付着している。漆が付着したのちに割れたようである。紙などの付着はみとめられない。

再利用の土師器杯(第72図3・図版140) 土師器杯の欠けた口縁部に油煙らしき黒色の付着物がある。この部分はえぐられ、割れ口は意図的に欠いたようである。土器は全体の約1/2を残す。J 3(19)区出土。

須恵器甕破片(第73図1) C地区のSD 5から出土した須恵器胴部破片である。外面は平行叩き目が水平と斜めとに方向を違えて施されており、内面は外面の叩きが水平の部分に同心円叩き目を、斜めの部分に平行叩き目を施す。外面の平行叩き目は一見珠洲焼のものに類似し、胎土・色調も通有の須恵器とは異なる。内面は淡灰褐色で、外面は淡灰色を呈し、焼成堅緻である。平安時代中期頃の所産とみられる。

把手(第73図2) 角状の把手であり、器種は甕か鍋のいずれかと考えられる。甕は奈良時代でも前半

20) 『栗原遺跡』第6次調査概報(前掲)

22) 植野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』

21) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

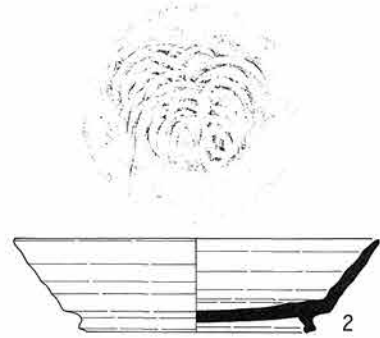
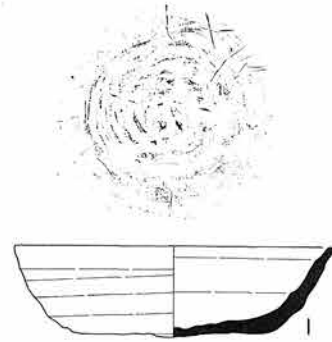
2 奈良大学文学部文化財学科 1983

には衰退するとみられる器種であり、今池遺跡では出土例はまれである。これはB地区の中世井戸 SE 448から出土したものであり、土師器Aである。

補遺(第74図) これまでの記述からもれていたものをあげておく。1は胴部を欠失するが、脚台をもつ横瓶と考えられる。口縁部は端部に外傾する面をもつ。胴部内面に刷毛目が施される。SD 203出土。2は有台杯か稜碗かと思われる。底面はロクロ削りが丁寧に施され、細い高台が付される。全体につくりはよく、一般的な杯とは考えられない。内面には撫でが施される。3は有台杯と考えられるが、高台は接地面が丸く、やや特異である。底面には糸切り痕が残る。2・3ともにSK 120出土。4はSK 391 B壺出土の短頸壺の蓋である。天井部から縁部は丸くなる。つまみは偏平である。8世紀前半と考えられる。

2) 硯(図版137)

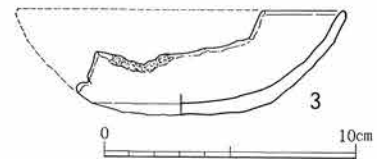
口径18.5cm・底径20.8cm・高さ7.4cmをはかる圈足硯である。硯部と台部を連続的に形成したもので、硯部の外端には一条の突帯がめぐらされている。陸と海の境界は明確で、陸の周縁部は若干高くなり内堤状を呈している。圈足部には透かし孔が8個穿たれている。透かし孔の上辺は丸味をおびるように作り出され、下辺は直線的である。圈足下面には2条の突帯がめぐり、圈足端は内傾している。D27区とG24区から上下に別れて出土した。



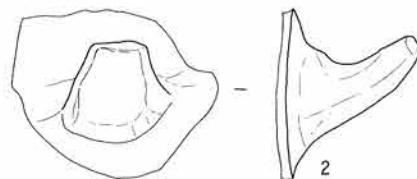
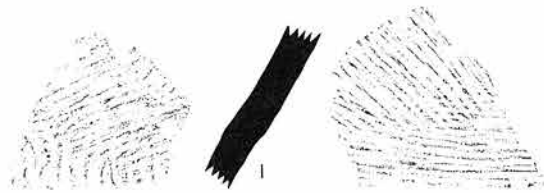
3) 墨書・篋書土器(図版48・141)

本遺跡からは墨書土器21点、篋書土器1点が出土している(第8表)。ともにすべて須恵器である。

墨書土器の傾向としては、「夫」の文字が非常に多い点が注目できる。21点中10点までが「夫」であり、しかもそのうち4点(710~713)がSD 201(F24区)から出土している。710・711は小さな文字で、3画目の最後をややはね気味にしている点や4画目の筆のはらい具合が類似する。712・713は大きな文字で、4画目をのびやかに引いている点が類似する。これらはそれぞれ同一の手になるものかと思われる。またSK 223出土の比較的大きな文字で記された「夫」(714)も、のびやかさという点では712・713に共通する特徴をもっている。SD 133出土の「夫」(715)は、1・2・3画が710・711に感じが似るが、4画目は趣きをやや異にする。F23(4)区より出土した「夫」(716)は、割れていたものを接合したために全体がとらえにくくなっている。2画目をやや上がり気味に

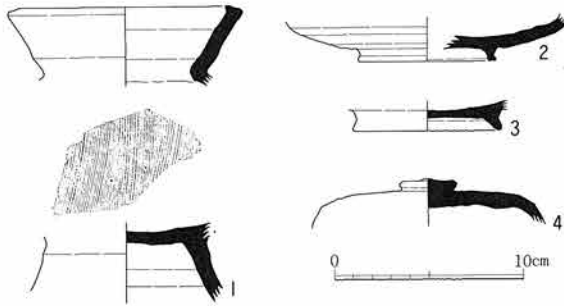


第72図 叩き目の杯と再利用杯



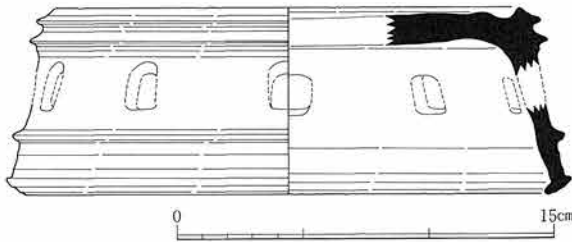
第73図 須恵器甕破片・把手

1:3



第74図 その他の須恵器

まに解釈できる。ただ「夫」の墨書をもつ須恵器の大部分がF24区およびG24区に集中することから、¹⁾ 期的にも共通する遺物をともなうSB206・SB274などSD141とSD320に囲まれた建物群に関するものであったことは推定可能である。



第75図 円面硯

「天」と読める文字は2点ある。G23(23)区出土の蓋の内側に記された文字は小さいながら明瞭である(718)。3画目の最後をややはね気味にしている点に特徴がある。しかしSD203出土の杯底面に記された文字(719)は極端に薄れており、²⁾ ここでは一応「天」としたが再考を要するかもしれない。「天」の文字は真野町国分寺出土の古瓦に篋書きされている例はあるが、墨書の例は県内には今のところ見当たらない。

D28(4)区出土の杯底面に記された文字(720)は、薄れてはいるが「稻」と読める。県内では、六日町の長表遺跡で「稻人」ないし「稲人」と読める墨書土器が出土した例がある。³⁾ SK257出土の杯底面に記された文字(728)も薄れてはいるが「満」の字のくずしに似る。M3区ピット1出土の杯底面に記された文字(721)は、「廣禾」と見える。最初の文字は13画目の点が見えないが「廣」と解してよかろう。後者は「和」ないし「利」のようにも思われるが、いずれとも決し難い。あるいは全く別の文字かも知れない。この2文字はおそらく人名を表わすと思われ、今後とも検討を要する。SB29-7出土の杯底面の文字(722)は大半が欠失しているが、M3区ピット1の「廣」の上部によく似ている。SK21出土の蓋天井に記された2文字(723)は、こじんまりしすぎている上、判読が難しい。ただ2文字のうち下の方は「家」であるかも知れない。

SE20出土の杯底面には「廿」および「ツ」が記されている(724)。「廿」は漢字(にじゅう)であるか記号であるか定かではないが、「井」ではない。「ツ」は「廿」よりも後に漆で記されたものである。それはこの土器がかなり長い間使用されていたことを示すようである。この土器が井戸中から検出されたことは井戸を埋める時の儀礼的な意味をもつようにも思われるが、その行為と「廿」ないし「ツ」の関係は不明である。なお、「廿」を数字とした場合、県内にはその例はないものの「万」「十」「七」「三」などの墨書が曾根遺跡から出土している。⁴⁾

SK223出土の杯底面に書かれた文字は薄れてよく解らなくなっている(725)。見方によっては「邸」・

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成 I』1983

2) 新潟県教育委員会『南佐渡』1958

3) 池田 享ほか『長表遺跡』六日町教育委員会 1975

4) 前掲『曾根遺跡II』

第8表 今池遺跡出土の墨書土器

No.	文字	土器の種類・器種・記載位置	出土地点・遺構	No.	文字	土器の種類・器種・記載位置	出土地点・遺構
710	夫	須恵器・杯・底外	SD201(F24-19)	720	満 <small>(か)</small>	須恵器・杯・底外	D28-4
711	夫	須恵器・杯・底外	SD201(F24)	728	満 <small>(か)</small>	須恵器・杯底外	SK257
712	夫	須恵器・杯・底外	SD201(F24)	721	廣和	須恵器・杯・底外	M3-pit 1
713	夫	須恵器・杯・底外	SD201(F24-19)	722	廣	須恵器・杯・底外	SB29-7
714	夫	須恵器・杯・底外	SK223	723	□家	須恵器・蓋・天外	SK21
715	夫	須恵器・杯・底外	SD133(D26)	724	廿ツ	須恵器・杯・底外	SE20
716	夫	須恵器・杯・底外	F23-4	725	□	須恵器・杯・底外	SK223
717	夫	須恵器・杯・底外	SD321(G23-19)	726	舟	須恵器・杯・口縁外	SD(I12-北)
646	夫	須恵器・杯・底外	D24(25)	727	□	須恵器・杯・底外	SD104
649	夫	須恵器・杯・底外	F23(24)	729	◇ (記号か)	須恵器・杯・底外	SD202(F24-23)
718	天 <small>(か)</small>	須恵器・蓋・天内	G23-23	730	ス (記号か)	須恵器・杯・口縁外	T18-19
719	天 <small>(か)</small>	須恵器・杯・底外	SD203				

「郷」などにもとれる。またSD 3出土の杯口縁部に記された墨書(726)およびSD 104出土の杯底面に記された墨書(727)は、土器そのものが一部しか残っていないために、もとは何という文字であったかは不明である。

SD 202出土の杯底面の墨書(729)およびI 18(19)区出土の杯口縁部に記された墨書(730)は、ともに記号であろう。なお前者は墨痕が明瞭でなく、図示したよりも今少し簡単であったかも知れない。

篋書土器はC19区から出土した蓋(第76図)のみである。「田」の文字が明瞭に読み取れる。「田」を墨書した例は横滝山遺跡⁵⁾、金井町大字千種字本屋敷⁶⁾などにみられる。

山田英雄氏は、「単に一字のみでは、特殊な場合を除いては、その一字をいかに解釈するかに努力しても大きな成果を期待しえない。集団の人名が判明して、その人名の一部が単字となっていることを証明しうれば、その字の記してある土器はその人物の所有、若しくは支配下にあることを示すことになる。」と記している⁷⁾。本遺跡の場合も、特に「夫」などは興味をそそられるところであるが、上記の墨書あるいは篋書を傍証しうる資料は何もなく、紹介にとどめざるを得ない。

4) 瓦(図版49・142)

今池遺跡から出土した瓦類は、丸瓦・平瓦がある。平瓦がほとんどであり、丸瓦は2片のみである。いずれも小片であり、全体の大きさなどがわかるものは少ない。

今回の調査地域からは瓦葺き建物は検出されておらず、瓦の分布は、SD 1・SD 3・SD 201の覆土最上層、もしくは中世の井戸(SE 652)など、中世の遺構の周辺に集中している。

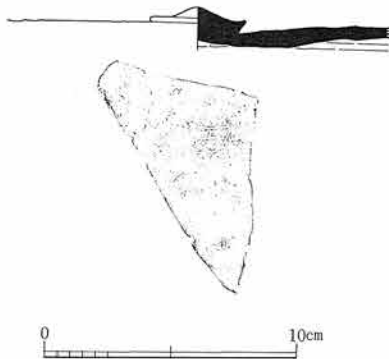
丸瓦(14・15) 丸瓦は2点出土した。いずれもSD 201の覆土最上層から出土している。無段行基式丸瓦の端部である。凹面には糸切り痕は認められず、布目痕が顕著である。第一次成形は粘土板巻きつけか、

5) 寺村光晴ほか『横滝山廃寺跡発掘調査概報』寺泊町教育委員会 1983

6) 椎名仙卓『佐渡金井村本屋敷出土の墨書土器』『古代』

32 早稲田大学考古学会 1959

7) 山田英雄『文字について』『曾根遺跡Ⅱ』豊浦町教育委員会 1982



第76図 篋書土器

粘土紐巻き上げかは不明。布は3cm×3cm範囲に17~18本の糸数を数え、平瓦の布目より粗い。凸面は叩き目を縦位篋削りで丁寧に消し、さらに撫でている。分割断面には丁寧に篋削り調整を施す。側面は凸・凹面とも面取りする。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は緻密で、わずかに白色粒を混入する。厚さ1.8cmを測る。

平瓦(1~13) 平瓦は16片(15個体)出土している。

凹面には、斜位に糸切り痕が認められ、第一次成形は粘土板巻きつけによると思われる。桶状模骨痕は認められない。厚さは端部・側面・中央部とも比較的均一である。厚さにより2種

に大別される。A類は3cm前後の厚手のもので、B類は1.8~2.4cmの薄手である。布目圧痕は3cm×3cmの範囲では、端面に平行する糸数19~27本、側面に平行する糸数20~28本である。多くは20~25本の本数に集中する。布目圧痕後調整しないものがほとんどであるが、3・11のように、撫でによる指頭圧痕の残るものがある。

側面は篋削り調整される。厚さによるA・B類は、側面調整手法においても差異が看取される。つまり、

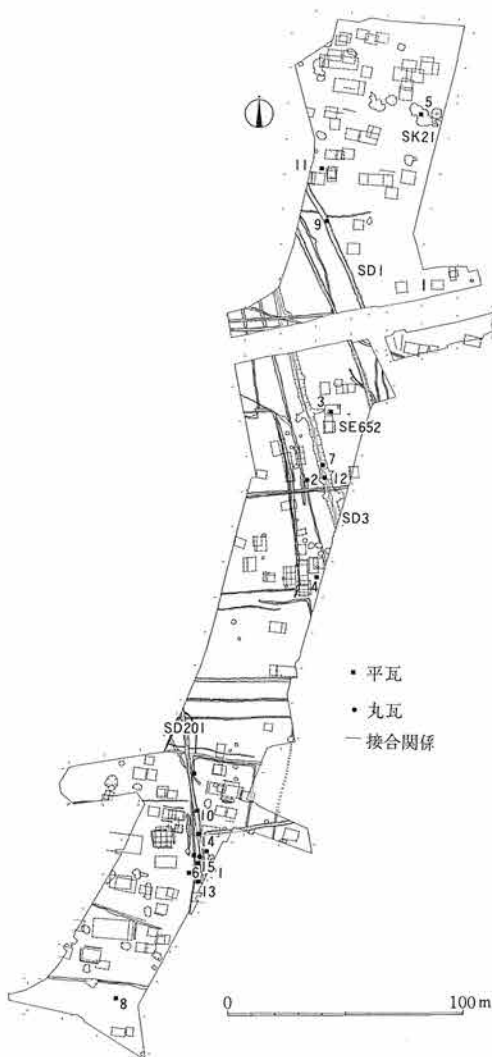
A類(1・3・6・10・11)は、篋削りの角度が凹面に対し、鈍角的に削られ、凹面・凸面とも面取りする。B類(4・5・9・12)は凹面に対し鋭角的に削り、凹面もしくは凸面のうち、一面のみに面取りを施す。また横断面の形状もA類は大きく彎曲するのに対し、B類は彎曲が小さく、扁平である。

端面は横位に篋削りするもの(11)と円弧状に篋削りするもの(6・図版49)の2種がある。

凸面成形は、縄巻き板の叩きしめによる。縄目は側縁にはほぼ平行し、狭端部から広端部まで連続している。叩きしめの後、撫で調整を施すもの(3・7~9・12・13)、指により縦位に撫でを施すもの(5・6・10)、縦位に刷毛撫でを施すもの(1・11)、無調整のもの(2・4)がある。また乾燥時、立てかけによる棒状圧痕のあるもの(4)などがある。

胎土は緻密で、白色粒・黒色粒をわずかに混入する。焼成は薄手(B類)は硬質であり、厚手(A類)は軟質の傾向を示す。色調は灰色を呈する。1には凹凸両面に濃緑色の自然釉が付着する。

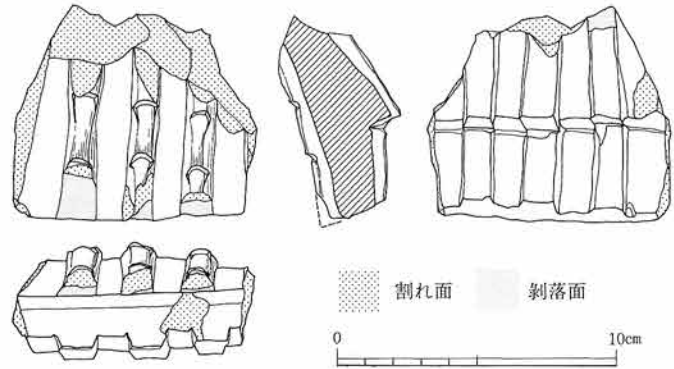
平瓦製作技法については桶巻きづくりか、一枚づくりかの判別は難しい。今池遺跡例については、①極状の模骨痕跡が認められないこと、②各部の厚さは均一であり、桶巻き技法にみられる叩きしめによる厚さの不均衡



第77図 今池遺跡瓦分布図

は認められないこと、③分割に際して、考えられる分割角度は不明であり、また分割突帯の痕跡がないこと、④凹面に糸切り痕を有するものが多いこと、以上4点から粘土板による一枚づくりと考えたい。

また出土した瓦は、凹・凸面ともわずかに摩耗している。5は凹・凸・側面にすられた面があり、砥石として再



第78図 瓦 塔

利用されたことが想定される。9は彎曲度が少なく偏平であり、ほかの平瓦とは形状を異にし、道具瓦の可能性も考えられる。3は井戸 SE 652から出土しており、割れ口まで炭化物が付着する。とくに1は凹・凸面とも敲打を受け凹凸が激しい。

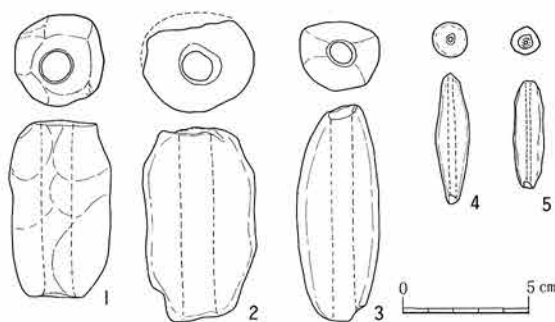
5) 瓦 塔 (図版136)

屋根の平瓦部分は撫で調整され、丸瓦は粘土紐を貼り付けた後に、半截竹管で刻目を施し、丸瓦を1枚づつ表現している。軒先の地垂木部分は削り込みにより一本づつ表現し、角はきちっとしている。軒先部は撫で調整され、無文である。

屋根部には煤が付着している。胎土には細砂粒が含まれ、色調は暗灰色を呈し、焼成は硬質である。SD 3 最上層 (I層) 出土。なお、県内で瓦塔はこれまでに佐渡郡羽茂町小泊窯跡群と西蒲原郡黒崎町緒立遺跡²⁾から出土している。

6) 土 製 品 (図版145, 第79図・第80図)

土錘 土錘は形態から2種類に分類される。1・2は不整円筒形を呈し、長軸線に沿って孔が上から下へ貫通している。孔は棒状工具を直線的に通し、生乾きの段階で引き抜いたものであろう。1の表面には墨が付着している。色調は灰褐色を呈している。2は赤褐色を呈している。2点とも胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。3～5は中央部がふくらむ紡錘形を呈している。孔は片側から穿ったもの



第79図 土 錘

第9表 土錘計測値

挿図No.	全長(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地
1	7.0	1.4	100	SD387
2	7.5	1.2	108	D23(7)区
3	8.5	1.0	76	SD3
4	5.2	0.25	7	SK101
5	4.3	0.20		SK391B

1) 本間・酒川「小泊発見古瓦の文様に就て」『佐渡史苑』
2 1927

2) 吉田恵二ほか『緒立八幡神社発掘調査報告書』黒崎町教育委員会 1982

(4・5)と棒状工具を直線的に通し、生乾きの段階で引き抜いたもの(3)がある。いずれも胎土に砂粒を含んでいるが、小形のものは少ない。色調は赤褐色ないし灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

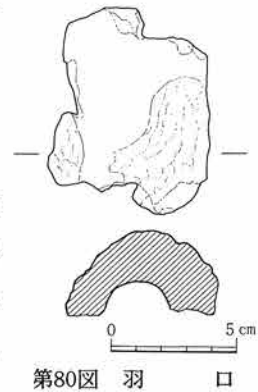
羽口 現長約8cm・推定直径約6cmの羽口の端部である。端部にはガラス質の溶解物が付着している。また、表面にも鉄が付着し、錆が湧出している。中央部には直径約3cmの孔が貫通している。孔は焼成前の生乾きの段階で棒状のものを引き抜いたものである。全体に高熱を受けているために内面は橙褐色を呈している。C地区J3区出土。なお、鉄滓も数点出土している。

7) 木 製 品 (第81図)

SE 20の基底面近くから出土したものである。日常生活用具であり、曲物のほかに加工材がある。

曲物(1~3) 1・2は二枚重ねの側板で同一個体である。縫合せは幅5~7mmの桜皮で縫いつけられている。段潜りは不明であるが2列である。内面には縦位の鋸目はない。3は底板ないしは蓋板である。全体的に平滑に仕上げられ、周側面も丁寧に仕上げられている。周側面のたち切りは垂直である。直径約17cmを測る。

加工材(4) 現長29.8cm・幅2.8cm・厚さ約4.5mmの板材である。両側面は削り調整されている。実測図右側端部は折れているが左側端部は鋭い刃物で斜めに削られ、圭頭状を呈している。

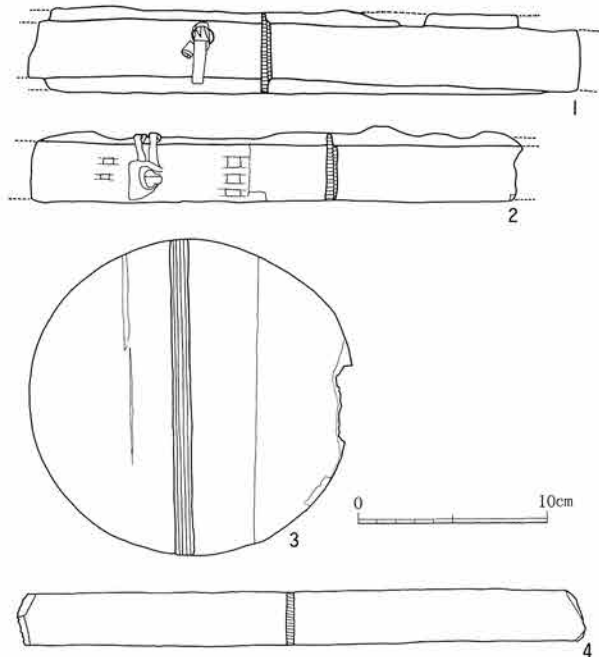


第80図 羽 口

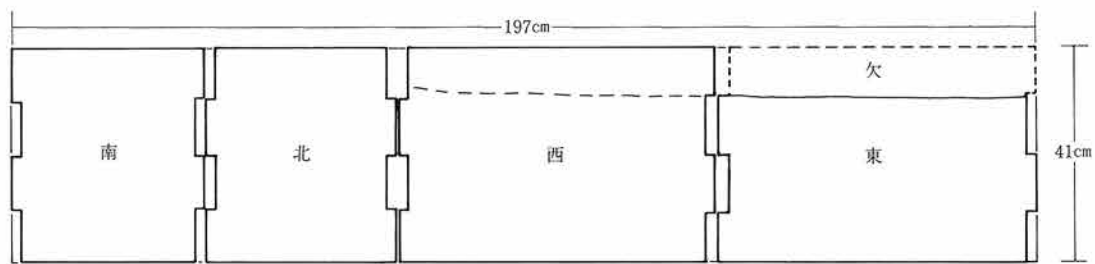
8) 井 戸 杵 部 材 (図版50・143)

平安時代の井戸 SE 20は木杵を使用したものであり、底面から約1.8m程の高さまでこれが遺存していた。井戸杵は基本的に次の3種類がある。(1)井戸杵の側面をなす板(側板)、(2)側板を内側で支持する板(内杵)、(3)井戸底面の杵(下杵)がある。井戸杵に使用された木材はほとんどなんらかの材料を転用したとみられる加工痕がある。

側板(1~6) 長いもの(3)で1.3m、短いもの(6)で90cm遺存する。これらはいずれも上下2段に組まれた側板の下段のものである。上段のものは長いものでも30cmほどしか遺存していない。5だけが幅7cmでとくに細い。このほかは幅17cmのもの(4)、22cmのもの(3・6)、30mのもの(1・2)に分けられ、幅の同じものは、それぞれ厚さもほぼ共通しており、同一の板から加工された可能性が考えられる。板の下端部は5・6が丸く、1~4は水平である。丸いものは井戸杵に転用される以前に加工した面そのものとみられ、1~4は新たに手斧で削られたようである。1~3の板下端部にちかい面には表面を手斧ではつった痕がある。これがみられる部分は木の厚さが厚い部分であ



第81図 SE20出土木製品



第82図 SE20井戸部材復原図

り、これをなくすためにはつったものと思われる。2をのぞくと、いずれもノミによる穿孔、あるいは柄がみられる。3の柄のつくり出しは鋸で切り込んだ痕跡が残る。また板の表面に一部皮が残る。いずれも針葉樹であろう。

内枠(7~12) 7・8が上段の内枠で、上位にあったため、遺存状態はよくない。7は長さ88cm・幅9.5cm・厚さ4.5cmで、両端に凹部を鋸とノミでつくる。8は残存長83cm・幅9cmで両端に凸部をつくる。木来7と同じ長さ、幅をもっていたと推定され、同一材から得られたものと考えられる。長さは本来3尺に切断したものであろう。下段の内枠を組み合わせた平面形が長方形であるのに対し、これはほぼ正方形であり、井戸の平面もほぼ正方形であったと考えられる。

9~12は下段の内枠であり、柄のつくり方が上段とは異なり、組み合わせた平面形は長方形である。長いもの(9・10)は東と西に位置するもので、長さ90cm・幅12cm・厚さ5cmである。長さ3尺・幅4寸に切断されたものであろう。この両端には4cm×4cmの方形の穴をあける。短いもの(11・12)は南・北に位置するもので、両端を柄とする。長さ66cm・幅12cm・厚さ5cmであり、幅・厚さが長い部材と同じであることから一枚の板からつったものと考えられ、表面の木目からみると、図の状態では左から10・9・12・11とつながっていたものと推定される。組み合わせた時に井戸の内側に面していた部分の上部は角がなく、丸く磨滅している。これは使用されていた時、釣瓶などが触れたことによるものであろう。この磨滅は下枠にもみられる。7~12の板材は広葉樹のようである。

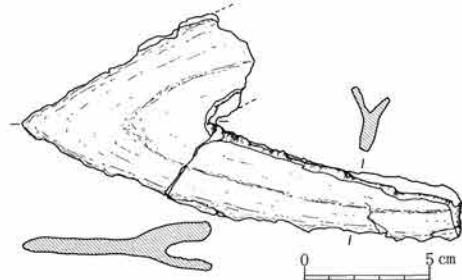
下枠(13・14) 13は西側に位置し、14は南側に位置するものである。4枚の板は幅や材の状況から一見して同一材からつくられたもので、木目などから原材を復原すると第82図のようになる。この材は全長197cm・幅41cm・厚さ1.6cmである。下側面には10~13cmほどの間隔で釘穴がある。両端の柄はノミでつくる。表面はきれいに削られており、きわめて固くてとのった材であることから、井戸部材に転用される前は家屋のなかでも人目に触れる場所に使用されていた部材とみられる。13は組み合せて設置した直後に一部が割れて、内枠の外側に落ち、14は同じ部分が欠けている。この割れは地山の泥炭層中に自然木があり、これによって計画どおりに井戸枠を設置できなかったことによると考えられる。

9) 鉄製品

SB 902の北側柱列東第3柱穴より出土した、風呂鍬の鍬先と考えられるものである。片側の基部に近い部分は欠損しているが、V字形で先端に刃部をもち、内側に風呂を装着させ刃床部をつくるための溝がある。なお、類似した形状のものに犁の刃先があるが、犁は片面を一枚の鉄板で覆っていることから、それとは明らかに異なっている。また、現在使用されている風呂鍬は、刃先と風呂を溝によらずに固定する方法で、その変化は大きい。法量は、現存長17.5cm・現存幅は基部で12cm程度である。

10) 石 製 品 (図版55・56)

中世の項で一括してあつかったので、ここではふれない。
134頁参照。



第83図 鉄製品

B 中 世

中世の出土遺物は珠洲焼と称されている陶器や青磁・白磁などの舶載磁器、漆器・曲物・横槌などの木製品、刀子・刀などの鉄製品などがある。第84図は中世の遺構外から出土した遺物分布図である。遺物は12列から28列までまんべんなく出土しているものの、大略2グループに分けられる。12~17列と21~24列で、検出された中世の遺構の分布とほぼ一致する。遺物の出土状況は、まとまっておらず、個々の破片が単発的に出土した。

1) 土 器 ・ 陶 器 (図版51・52・136・148)

土器・陶器類の遺物は平箱で約2箱で絶対量は少ない。記述は遺構内・遺構外を問わず説明することとする。

珠洲焼 (1~33)

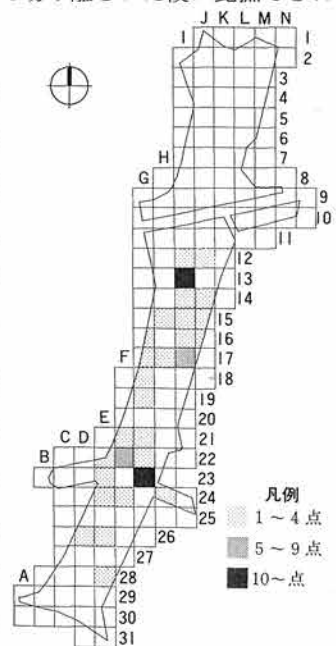
器形は甕・壺・鉢・すり鉢の4種がある。総体的に色調は黝黒色ないしは暗灰色をし、胎土に細砂粒が混入され、焼成は堅緻なものが多い。

甕 (1~10) 口縁の形態から2種に大別される。直立気味にたちあがり、外反するもの(1・2)と口縁が玉縁状を呈し強く外方へ折りまげたもの(3)がある。いずれも口頸部の内外面はロクロ撫でである。4~10は肩部ないしは胴部片で、外面には平行条線状叩き目が、内面にはおさえの凹痕がある。外面の叩き目は幅1cmで2~3条のものが多く、10のように細かいものもある。

なお、2は口径13.1cm・底径18.1cm・高さ34.3cmで、頸部下半から肩部にかけて篋状工具で1条の沈線がある。窯印であろうか。胴部下半には輪積痕があり、底部は静止糸切りで切り離された後に篋撫でされている。SE 435出土。

鉢 (11・12) 口縁形態から2種に大別される。11は内彎気味にたちあがり、端部は内側につまみあげられている。12は内削状の口縁で、作りはすり鉢と同じである。2点とも体部はロクロ撫で、内面にはすり目が施されていない。11の体部下半には輪積痕がみられ、底部は篋撫でされている。

すり鉢 (13~32) 口縁形態が3種に大別される。口縁が厚く、端部が丸味をもっているもの(13)、口縁の端部がほぼ水中で外側につまみだされたもの(14・15・19~22)、口縁端部が内側へつまみ出され、外削状を呈するもの(23)がある。いずれも内外面ともにロクロ撫で、すり目が施されている。なお、15にはすり目がないところから鉢の類に入るものかもしれない。すり目は総体的に太くて粗いものが多い。中には細くて曲線を描くもの(28)、細くて密なもの(16・32)がある。すり目の条線単位は13が幅2.6cmで13本、16が幅2.1cmで17本である。19は片口付すり鉢で器形は非常に歪んでいる。体部はロクロ撫で、体部下半には指圧痕がある。底



第84図 中世遺物分布図

部の切り離しは静止糸切りで、底部縁辺のみが撫でられている。すり目は幅2.8cmで10本で、「米」の字状に施されている。SE 311出土。

壺 (33) 刻画のある壺である。肩部はK 9 (11) 区、底部はSD 1出土のもので、同一個体と思われる。頸部から肩部にかけては先の鋭い工具で木葉が2葉写実的に描かれている。肩部には横走する3条の太い沈線があり、木葉の個所からゆるく折れ曲り、胴部に垂下している。3条の沈線下は篋削りされている。底部は胴部上半から垂下すると思われる3条の沈線がたちあがり付近までである。垂下する3条の沈線の端部は横走する5条の沈線でつながれている。おそらく文様割付は4単位文様であろう。底部のたちあがりまで篋削りされ、底部は撫でられている。灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を含み焼成は堅緻である。

施釉陶器 (43~49)

美濃焼・瀬戸焼などがある。器形は壺および水滴で鉄釉のかかったものが多い。

瀬戸焼 46は肩の張らない小壺で口縁は平縁である。鉄釉が表裏にかけられている。胎土には小石が若干含まれ、素地は暗灰色をしている。47は小壺の胴部片である。胴部はロク口撫でで底部の切り離しは回転糸切りである。内面・外面に鉄釉が施されているが、外面の胴部下半は素地のままで釉溜りがみられる。胎土は緻密で素地は暗灰色をしている。48は内外面に鉄釉のかかった水滴である。短い注口部は貼り付けられたもので、注口部の左上には楕円形の貼り付けがある。胎土は緻密で暗灰色をしている。43・44は壺の口縁で、端部が玉縁状をしている。鉄釉が表裏にかけられているもの(44)とないもの(43)がある。胎土は緻密で素地は明灰色をしている。43・44は素地がほかのものとは異なっているためほかの窯のものであろうか。43・44を除いたおおよその年代は15世紀から16世紀中頃のものであろう。

美濃焼 45は短頸壺で、鉄釉がかけられている。釉の表面はザラついている。胎土はやや粗く、素地は赤褐色をしている。16世紀前半頃のものであろう。49は東海産のいわゆる山茶碗である。器壁はごく薄く、口縁部が外反し、端部がわずかに肥厚する。白灰色を呈し、焼成堅緻である。B地区SD 3最上層出土。14世紀頃のものか。

舶載磁器 (50~52)

白磁と青磁があり、いずれも破片である。これらはすべて中国産で青磁は浙江省竜泉窯の製品とみられる。50は白磁碗で推定口径11.5cmで内外面に白色釉が施されている。口縁端部内面は釉が削り取られており、口禿げの白磁といわれるものであろう。素地は灰白色で中に黒色の斑点がある。51・52は青磁である。51は高台部である。見込み中央に菊花文様があり、その周囲に鬘草様のものが描かれている。高台は削り出しで、高台内面には兜巾が見られる。高台内面および畳付を除いた内外面に釉が施されている。青灰色を呈し、貫入が入っている。素地は灰白色で、黒い細かい斑点がある。52は推定口径18.7cmの碗である。器面には削り出しの素弁蓮花文を施し、蓮花文の中線は鑄につくられている。素地は淡灰色で、中には細かい黒色の斑点がある。青磁釉の色調は青緑色で器面には貫入が入っている。

土師質土器 (34~42)

井戸から出土したものが多い。一般的に灯明皿と呼ばれている土器で、器形は皿ないしは杯形をしている。器形の特徴から4種類に大別される。胎土は緻密で暗褐色ないしは橙褐色をしているものが多い。

A類 34・35は口径8.5cm・高さ2cm弱の小形製品である。底部はゆるやかな丸底状を呈し、器体の下半部に稜線を有している。口縁部内外面とも横撫でで、底部には指頭圧痕状のくぼみがある。35には口縁部の内外面を中心にタール状の油煙が付着している。

B類 36~40は口径9~13cm・高さ2.5~3cmで、口縁は内彎気味にたちあがり端部は肥厚している。

底部は平底で、内外面ともに横撫である。38の内外面にはタール状の油煙が点々と付着している。

C類 41は口径12cm・高さ2.8cmで、口縁は底部から内彎気味にたちあがり、端部は尖っている。底部はゆるやかな丸底状を呈し、体部下半部に稜線を有している。

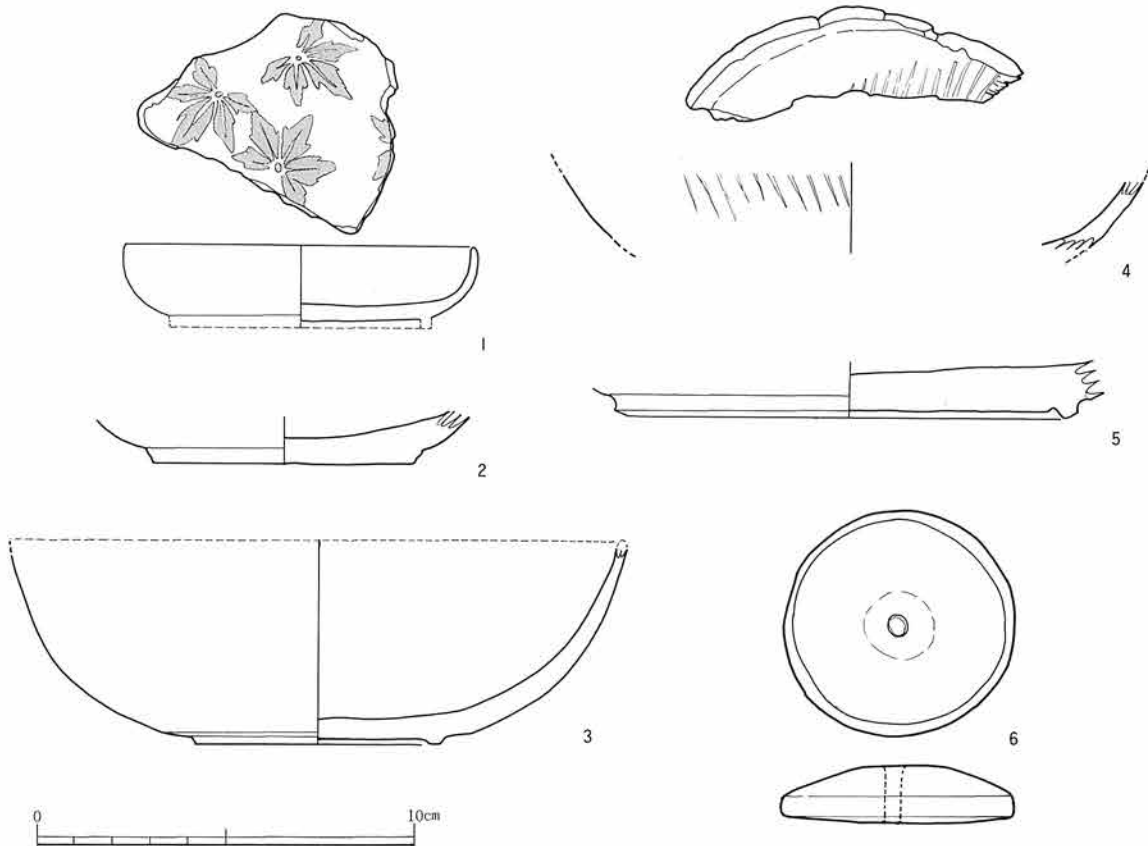
D類 42は口径12.5cm・高さ3.2cmで、口縁は底部から内彎気味にたちあがり、端部は外削状をしている。底部は平底で篋で撫でられている。体部は内外面ともに横撫である。

2) 木製品 (図版53・54・144・145)

木製品はすべて井戸より出土したものである。漆器・曲物・折敷・匙・箸などの日常生活用具と槌・鉋などの農工具のほか用途不明の加工製品がある。木製品の材質は正式な鑑定を経ていないので、材質については記述しないこととする。

日常生活用具

漆器 皿・碗の二種があり、いずれも漆が表裏に塗布されている。1は口径9.8cmを測る高台付の黒漆塗小皿である。高台部は欠失して明確ではないが削り出したものである。内面には黒漆地に赤漆で楓の葉が描かれている。2は底径6.9cmを測る黒漆塗の碗である。高台は削り出しであるがベタ底である。高台のたちあがり部から上部にかけて回転ロクロによる削り痕があり、内外面に黒漆が塗布されている。3は口径約16.3cm・高さ5.3cmの黒漆塗の碗である。高台のたちあがり部から口縁部まで回転ロクロによる削り痕があり、内外面に黒漆が塗布されている。なお、高台部および底部外面には塗布されていない。4は黒漆塗の碗の体部片である。内外面に黒漆が塗布され、赤漆で斜行平行線が描かれている。体部外面には回転ロクロによる削り痕が見られる。5は底径11.7cmの大形皿と思われる。高台は削り出しで、高台内面



第85図 漆器・紡錘車
 1 SE642 2・3 SE652
 4 SE636 5 SE311 6 SE531

にはさらに抉りが入っている。表裏ともに木質部全体が炭化しているため、漆が塗布されていたか否かは不明である。

曲物(1~11) 蓋ないしは底板と側板がある。1~10は蓋ないしは底板で、直径から大略4種に分けられる。小形のもの直径9~12cm(1・2)、小形と中形の間で直径16.5cm前後のもの(3)、中形のもは直径19~23cm(4~7)、大形のもは直径30cm(8・9)である。8と9は同一個体と思われる。全体的に表裏ともに円滑に仕上げられており、7の周側面には丸味を出すために削った手斧痕がある。1・4の周側面には釘穴があり、1には竹釘が残っている。周側面のたち切りは垂直なものと片側へ傾斜しているもの(4)がある。なお、2の片面には黒漆状のものが塗布されている。11は厚さ3mmの板材を三枚重ねて曲げこんだ側板で表裏を図示した。端部は幅1cmの桜皮で縫合せられ、内面には縦位の鋸目が施されている。

折敷(12~15・18) 正方形のもの四隅がたち落されて八角形を呈すものがある。12は一辺19.2cmの正方形で端部は鋸で切断されている。端部から約1.5cm内側には直径4mmの孔が2個片側から穿たれている。15は四隅がたち落されて八角形を呈し、一辺15.2cmを測る。端部は鋸で切断され、側面は円滑に削られている。側面のほぼ中央部に直径2.5mmの円孔が片側から穿たれている。13・14は木端状のもので非常に薄く、14には小孔が穿たれている。18は木端状のもので、隅はさい断されている。幅2.5mm・厚さ1.2mmの細長い棒を樹皮で結束したものである。木端の下方端部は折れているが、両側面は樹皮で結束されているところから、一つの目的を持ったものと考えられ、折敷を二次的に再利用した可能性が多分にある。

匙(16) 一本の樹木から削り出してつくったものである。推定全長約34cmで、柄部は端部から約9cmの所でL字状に屈曲し、その角度は約53度である。身部と柄部のなす角度も約50~55度で柄部の屈曲角度とほぼ同じである。柄部及び身部の内面は丁寧に削り込まれ、削痕が顕著に見られる。しかし身部の背は材質全体が腐敗しているため加工痕の有無は不明である。身部の中央は浅くくぼんでいる。

箸(19~26) 断面方形の材の上下端を4~5回削って先を尖らしたもの(20・24)と角を全体的に削りおとして多面体とし、先端部を削りおとしたものがある。長さは18.5~21cmを測る。

火鑽臼(17) 現存長13.7cm・幅2.5cmで、合計7個の穴が2列にわたって穿たれている。穴は上面が広く、下面が狭い。深さは1~2cmで底面は丸くくぼみ、側面とともに黒く焼けて炭化している。

農工具

横槌(36) 全長40.8cm、柄の長さ17.8cm、直径は頭部で8.6cmである。一本の丸太材からつくり出したもので、表面は丁寧に削られているのに対して両端部は荒く円頭ぎみに削られている。頭部のほぼ中央部が若干くぼんでいる。長期の使用で敲き減ったものと思われ、ワラ打ちなどに用いられた横槌である。

鍬(37) 現存長41.5cmを測る鍬の柄部と思われる。柄頭は把止めのように若干ふくらみをもっている。全体的に丁寧に削り調整され円滑になっているが、柄頭から下方へ約15~20cm下った所では若干の凹凸があり、握りの部分と思われる。

紡織具

紡錘車(第85図) 下面径6.1cm・上面径2cm・高さ1.5cm・孔径6mmの木製品である。下から約7mm上った所に稜があり、全体的に削り調整され、表面は円滑に仕上げられている。

加工材

板材(27・29~35) 加工痕のある板材であるが用途は不明である。27は隅がたち落されている。側縁部は丁寧に削り調整されている。一辺14.3cm程度の方形になるものであろうか。29・30は厚手のもので、30

には3ヶ所の釘穴がある。31の上端部は斜めに削り落されている。34は現存長57.5cmで上端は鋸で切断されている。裏面は平坦に仕上げられているが表面には凹凸がある。上端から3～6cm間隔で釘穴がある。裏面に鉄錆が付着しているところから鉄釘を打ったものであろう。35は断面が台形を呈し、側縁部は斜めに削り落されている。側縁端部が弧を描いている所から全体的に丸くなるものと思われる。推定直径約37cmで桶の底板の一部であろう。

棒状木製品(38~40) 38は全長65.5cmで丸太材を割って作り出したものである。頭部は削り調整され平頭で、先端は篋状になっている。裏面には割面が一部残っている。全体的に腐敗が進んでいるため、加工痕は明瞭でない。39・40は直径約2.5cmの丸太材で、面取りされている。2点とも先端部が細くなるもので、表面は火を受けて黒く焼けている。

その他の木製品(28) フック状のものが差込まれた製品である。フックを受ける材木の四周は丁寧に仕上げられ、上部は丸味をおびるように削られ、その先端近くはさらに削り込みが入れられている。フック状のものは90度の角度で柄穴に連結されている。フック状の上面・先端部は削り調整されている。現存長30.5cm・厚さ2cmを測る。たてかけるかもしくは打ちつけて、ものを吊り下げるものと思われるが、現存部には、それらを示すような痕跡はない。

第10表 井戸出土木製品一覧表

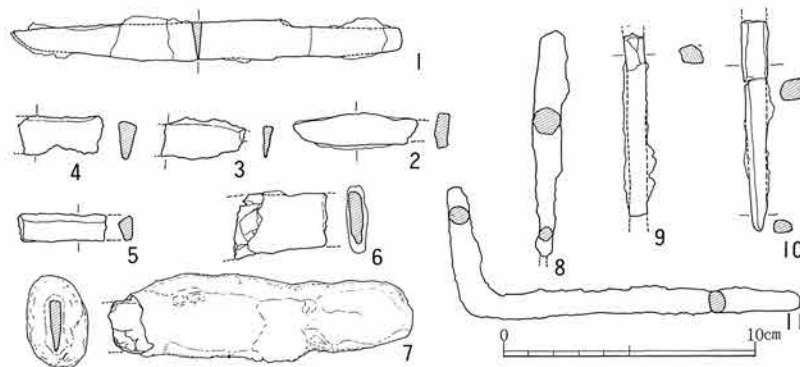
井戸番号	出土木製品 (P.L.No.)	挿図No.	井戸番号	出土木製品 (P.L.No.)	挿図No.
SE311	5・6・20~23・36・39・40	5	SE531		6
SE508	17		SE661	19・29	
SE516	4・7・11		SE636	32・35	4
SE520	2・3・10・13・14・18・30・34		SE642	1・16・24~26・31	1
SE521	12・15		SE643	38	
SE523	8・9・33		SE652	27・28・37	2・3

3) 鉄製品 (第86図・図版145)

刀子・刀・釘などが出土している。全体的に錆化が進んでおり、さらに破片が多いため用途および特徴は詳細に把握されない。

刀子(1~5) 1は全長15.5cmの平棟造りの刀子である。茎部は両関式で目釘穴の有無は判然としない。2~5は身部の破片で、断面は逆二等辺三角形をしている。1はSE428出土。

刀(6・7) 平棟造りの刀身部片である。6は身幅が若干広がる傾向があり、刀身部と茎部の境界付近とも考えられる。SK516出土。7の断面周辺には銅錆が若干湧出している。SK516出土。



第86図 鉄製品

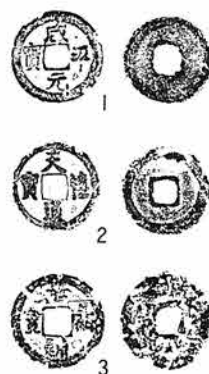
釘（8～10） 断面が方形のものと丸形のものがある。全体的に長く、先端部が尖り、断面も太いところから釘ではないかもしれない。おそらくほかの用途のものであろう。

11は扉の支え金具と思われる。屈曲部の断面は方形で、打込部と思われる長辺の先端にいくに従って断面も方形から楕円形になり薄くなっていく。先端付近には木質部が付着している。

4) 銭 貨 (第87図)

銭貨は合計5枚出土している。いずれも遺構外の遺物包含層から出土している。図示したものについて鑄造年代が古いものから順に並べると、1は咸平元宝（北宋咸平元年 998年）でもう一枚の銭貨が裏面に付着している。2は天禧通宝（北宋天禧年間 1017～1022年）、3は元祐通宝（北宋元祐元年 1086年）である。このほかに「符」という文字のある銭貨片があるが、文字の書体から祥符元宝（北宋大中祥符元年 1008年）であろう。

いずれも銅銭で渡来銭である。直径は1・2が2.4cm、3が2.5cmを測る。



第87図 銭 貨
(1 : 2)

5) 石 製 品 (図版55・56・146・147)

奈良・平安時代のものも含めて報告する。出土地点から奈良・平安時代と判断されるのは、3・4・6・13・15・18・19であるが、ほかにもいくつかあると思われる。1～4は有孔石製品である。

1 楕円形を呈し、断面は台形。図の上部中央では正・裏面からの穿孔がおこなわれ、断面のほぼ中央で結合している。正面には装飾と思われる車模様の彫刻がみられる。また、周囲は研磨による丁寧な成形が施されたものと思われるが、石自体の風化作用が著しく進行しているため研磨の方向等は不明である。石質は安山岩。B地区F25区出土。 2 図の上部中央の孔は、1と同様な穿孔方法によっている。また、その上方に径1.5mm・深さ1mmほどの回転作業によったと思われる穴がみられるが、おそらく穿孔位置の転移の痕跡と考えられるものである。次にこの石製品を構成する主要な6つの面は、丁寧な研磨作業によって作り出されている。そして、面と面とによって挟まれた稜へも新たに研磨面をつくり出している。当初、本資料の用途を手持ちの砥石と考えていたが、多面体にしていくなど全体を曲面に仕上げようとの意図もみうけられ、多分に装飾品としての機能も考えられよう。石質は泥岩。SE 311出土。

3・4 それぞれ紡錘車の欠損品と思われる。3は断面が台形をなし、4は全体を扁平な円柱形に仕上げている。石質は3・4ともに凝灰岩。3はA地区SK 906、4はC地区J 3区出土。

5～9 手持ちの砥石であるが、それぞれ形状は一方が肉厚、他方が細くしぼり込まれている直方体である。(図版は、肉厚を上、他を下に図化する)

5・7・9はそれぞれ正・裏面と両側面に作業面をもち、上下の両端面には、素材切り出し時の浅い溝状の工具痕と思われるものが数本残る。石質は、5・7が凝灰岩、9が砂岩。5はB地区F26区、7はI14区、9はG23区出土。

6・8 前者は側面に、後者は正・裏・側面と上端面との成す稜付近にそれぞれ断面U字形の擦溝がみられる。擦溝の成因としては、丸味をもった対象物の存在が考えられる。石質は両者とも凝灰岩。6はA地区F 8区、8はB地区I14区出土。

10は瓦の破片を砥石として再利用したものと思われる。正・裏面と上・下両端面にそれぞれ磨痕が認められる。B地区F23区出土。

11・12はスクリーントーンの部分に摩痕が認められる。石質は、11が砂岩、12が凝灰岩。11はB地区、12はB地区E25区出土。

13は転石を加工し置砥石とした資料である。正・裏面と両側面とに作業面をもつ。また側面には、断面V字形の刃研ぎ様の溝が数本縦走する。石質は砂岩。SK 15出土。

14・15はそれぞれ断面がV字形・U字形の擦痕がみられる。石質は両者とも砂岩。14はSD 201、15はSD 3Ⅲ層出土。

16・17は正面中央付近に叩き潰しによってつくられたと思われる凹部をもつ。17は、全面にわたり煤・タール状の付着物が顕著に認められ、それは凹部においてとくに著しい。また裏面には、斜位方向に数本の擦溝がみられる。ほかに近似する資料が16を合せ3点出土しているが、それらには、上記した付着物は全く認められず、両者の用途の違いが想定される。石質は両者とも安山岩。16はB地区H24区、17はSE 532出土。

18は楕円形の転石を素材としたもので、上・下両端に叩き潰し様の痕跡があることから、叩き石と思われる資料である。石質は安山岩。SD 324出土。

19は直方体を呈する。全体に煤の付着が目立ち、クラックが多いことから火気の影響を十分に受けたと思われる。SK 24出土。ほかに同質の石材で平坦な多面をもつもの、そして平坦面をもたないまでも、火気の影響下にあったと思われる資料が多数出土している。これらは、住居のカマド構築の用材として使用された可能性がある。また、これらの石材の供給地としては遺跡に最も近い所で、米山西麓の第三期層が推定される。

C 古墳時代

古式土師器 (図版52・137)

A地区F17区にほぼ集中して出土している。出土状態は単発的で、奈良・平安期の遺物と混在して出土し、まとまったものは数少ない。器形から甕・壺・器台・高杯・蓋があるが遺物量はきわめて少ない。相対的に胎土は精選され、焼成もよく、茶褐色ないしは淡褐色をしているものが多い。

甕 (53~55) 56は口頸部片で、頸部は強く屈曲し口縁は外反している。口縁帯には櫛歯状工具で浅くダレた平行凹線が施されている。口縁帯の内外面は横撫で調整されている。53は口縁が外反し、口唇部が外削状をしている。口頸部の内外面は横撫で調整で、内面の頸部下半および外面には刷毛目が施されている。55は口頸部がくの字状に屈曲し、口縁は外反している。胴部は丸くまるまって底部へ移行し、台付甕になるものである。口頸部は横撫で調整で、頸部以下には刷毛目が施されている。胴部下半には煤が付着している。

壺 (56・57) 56の口頸部はくの字状にくびれて、口縁は外向している。口頸部から胴部上半までは横撫で調整である。下半は篋磨き調整されているが、部分的に刷毛目が残存している。57は口縁が欠失しているが形態的に椀になるものかもしれない。器面が荒れているため調整等は明確ではないが外面に丹が塗布されている。

器台 (58・59) 58は器台の受部で口縁は内彎気味にゆるくたちあがり、端部は肥厚している。内外面とも篋磨きされ、丹が塗布されている。59は受部の口縁が大きく外反し、中間に稜を持っている。器面は

非常に荒れていて調整は明確ではないが、部分的に篋磨きが見られる。また、内外面に丹が部分的に残存している所から内外面に丹が塗布されていたものであろう。

高杯 (60・61) 脚部で裾部がハの字状に開くものであろう。61は杯部と脚部の接合部に突起があり、いわゆる「組合せ技法」を採用している。外面は縦位の篋磨きで、内面には輪積痕がある。60の内面にはしぼり痕がある。

蓋 (62) つまみの直径2.4cm・高さ6.7cm・口径9.6cmで、ハの字状に大きく開き、端部に至る。内面の端部近くと外面は篋磨きされ、外面には丹が塗布されている。

本遺跡で出土した古式土師器は量的に少なく、一括資料として取扱うことには問題がある。器形は甕・壺・器台・高杯・蓋の5器種ある。特徴的手法は篋磨き・凹線文・刷毛目などで、北陸地方における弥生式土器終末から古式土師器にかけて普遍的に見られるものである。吉岡康暢氏の編年¹⁾に従えば、北陸の土師器の第一様式から第三様式の範疇にはいるものである。なお、高杯は器形的特徴などから時期的にやや下降するものであろう。

4 小 結

A 奈良・平安時代

今池遺跡の奈良・平安時代の内容はとくに豊富であり、きわめて重要な成果が得られた。遺跡は頸城平野第一の河川、関川に面した沖積段丘上に立地し、今回調査した範囲内でも南北約600mにも及ぶ。時期は奈良・平安時代の8世紀前半から10世紀の間であり、検出された遺構は掘立柱建物約100棟のほか竪穴住居2棟・井戸2基・および多種多様の土坑・溝がある。今日の調査は発掘面積20,000㎡以上でありながら調査範囲の幅が約40mに限定されており、遺跡の全貌を把握することはできなかったが、とりあえず調査範囲の遺構の構成や変遷などの大略をまとめておきたい。

1) 前半期の主要建物群

奈良・平安時代の8世紀から10世紀の間で、遺跡の内容・性格は変化している。この変化は9世紀中葉頃を境に生じており、これより前半と後半とに大別される。前半期は8世紀前半から9世紀前半頃にあたり、遺構は大規模な掘立柱建物を含む建物群が一定の範囲内に集中する傾向が顕著で、非集落的なあり方であり、後半期は9世紀中葉以降の一般集落的なあり方となる。

前半期の建物群はA・B・Cの各地区にそれぞれ1群ずつ、計3群がある。ここではA地区の建物群をA建物群、B地区の建物群をB建物群、C地区の建物群をC建物群と呼称する。この時期の建物数は全体の約7割を占める。大規模な建物の大半はこの時期のものである。3つの建物群は8世紀前半から中葉には成立するが、継続期間はそれぞれ異なる(第88図)。A建物群は8世紀前半から中葉の短期間であるが、C建物群は8世紀いっぱい、B建物群は9世紀前半までそれぞれ継続するとみられる。以下、各建物群を概観する。

A建物群 A地区の南辺部に存在し、北側は小規模な東西溝SD 904によって画されると推定される。8世紀前半から中葉の短期間営まれたものであり、遺構数は少ない。建物は総計3棟で、いずれも東西棟で

1) 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』3月号 1967

ある。総柱建物は1棟である。全容が不明なSB 902は梁間の長さや柱掘形の大きさからみて、桁行8間ほどと推定され、B地区のSB 105に匹敵する規模と考えられる。建物群はさらに西側にのびている可能性が想定される。この地区の奈良時代の遺構が短期で廃絶するのは、段丘南縁辺に立地し、関川や別所川の浸食を受けやすい河川攻撃面にあたることも一要因として想定される。

B建物群 B地区の南辺部に位置する8世紀前半から9世紀前半の建物群である。2本の東西溝SD 113・SD 321によって南北を画され、東側はSD 320ないしはSD 389によって画される。西側の区画施設は検出されていないが、この建物群の区画は南北約100mを測り、東西は80m以上の方形区画と考えられる。建物数は約40棟で、小規模な建物のなかには若干ではあるが後半期(9世紀中葉以降)に含まれるものもある。方形区画の東半部にはさらに溝が方形にめぐる。すなわち、SD 321の南側に平行するSD 320は東西両端が直角に屈折し、南北溝となり、SB 274・SB 275などの建物をコの字状に囲んでいる。南側は未検出であるが、おそらくSD 113までの間に東西溝が存在するものと推定される。

建物は桁行9間(東1間は廂)のSB 105が最大で、SB 205もこれに匹敵する規模と推定される。このほかに桁行5間の建物が4棟、4間の建物が2棟あるが明確に南北棟と判断されるものはなく、総柱建物は2棟(SB 242・SB 407)である。建物は配置からみて、東西のふたつの群に大別される。西側は前述のSB 274を中心とするもので、東側はSB 105・SB 106を中心とするものである。後者のSB 105とSB 106の2棟の建物は方向と柱通り(SB 105身舎東入柱列とSB 106東妻柱列)が一致し、計画的に南北に配置されたことが知られ、これらがこの建物群のなかで主要な機能を果していたと推察される。今回検出された唯一の円面硯はこの付近の包含層から出土しており、建物の性格の一端を示す遺物として注目される。B建物群の南北長は約100mであるが、かりに東西幅も約100mで正方形の区画であったと想定すれば、SB 105とSB 106は中心よりやや西側に位置する。ただ、SB 105の身舎東入柱列とSB 106東妻柱列の南北軸とSD 320(南北部)の延長線は約45m(150尺)で、SD 320を基点とした100m方形を想定すると、さきの2つの建物の南北軸がほぼ中心に位置する。また、SB 105南側柱列とSB 106の南側柱列は21.3m(約70尺)、SB 105南側柱列とSD 113は約18m(60尺)、SB 106北側柱列とSD 113は約45m(150尺)となり、それぞれ一定の計画性がうかがえる。これらの建物の方位は東偏4度であり、B建物群のなかではもっとも古い時期に造営されたものと考えられる。時期が古いことは、少量の柱掘形埋土内の出土土器や位置関係からみてこれらの建物と併存するとみられる土坑出土の土器が、I期の土器を主体とすることから推測される。以上のことからB建物群は8世紀前半にSD 113を南限とし、SB 105・SB 106を中心に成立したものと推察される。

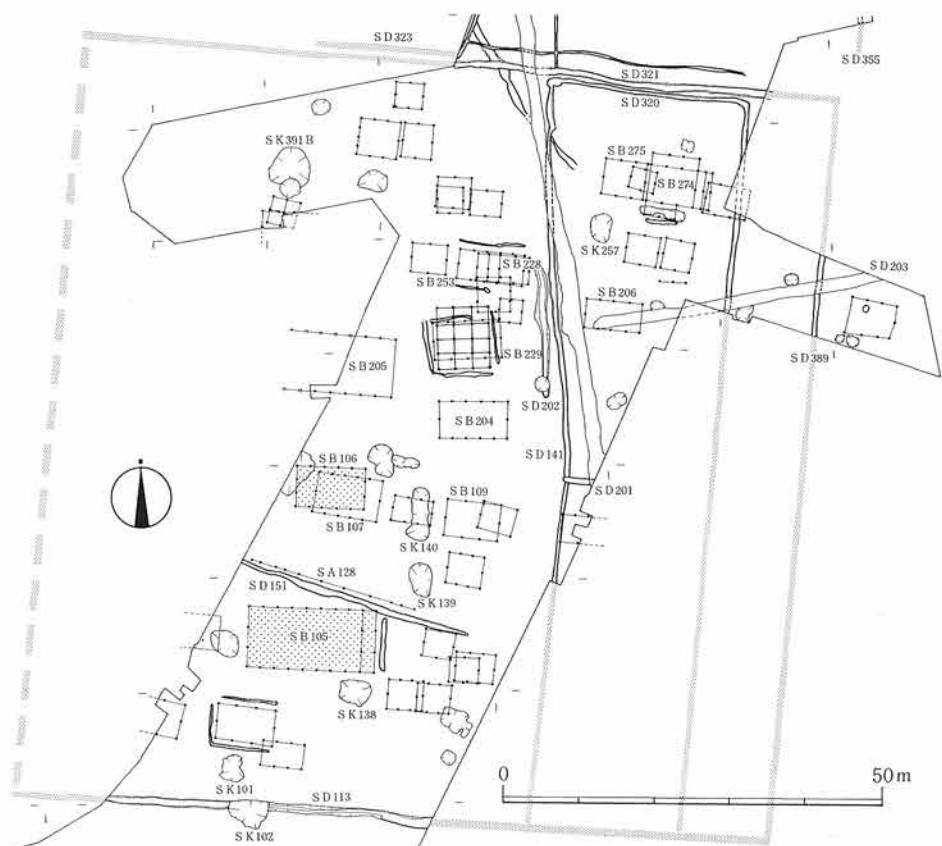
一方、SD 141とSD 320によって囲まれる西側の建物群はSB 274・SB 275・SB 206などを中心に構成される。SB 274とSB 275は東西にならび、しかも柱列が一致することから、1棟の建物の可能性をな

土器	主要建物群			主要遺構		
	A	B	C	A地区	B地区	C地区
前 半 期	I (710)	■	■	SB 902	SK 140	SK 47
				SB 901		
	II (750)	■	■	SK 906	SB 105	SK 50
				SX 908	SB 106	SK 24
					SK 391 B	SK 25
	III	■	■			SK 21
	IV (800)	■	■		SB 274	
				SK 257		
後 半 期	V (850)	■	■		SD 201	SE 20
					SB 651	
		SB 126				
	VI (900)	■	■		SD 3	
VII (1000)	■	■	SB 903			

第88図 今池遺跡の遺構変遷

残しているが、いずれにしろ柱掘形の規模や廂の存在などから、中心的機能を果していたものと考えられる。墨書土器のなかで「夫」のものはこの付近で集中的に出土しており、これがSB 274などと関連をもつ可能性は高い。SB 274・SB 275の建物の方位は東偏8度であり、SB 206もこれと同様である。B建物群の建物方向はさきのSB 105・SB 106に代表される東偏4度前後の建物とこの東偏8度前後の建物とに大別される。同一方向の建物は同時に存在した可能性を示すものと考えられ、SB 274・SB 275は柱掘形出土土器とSK 257出土土器からみて、8世紀末から9世紀前半を中心に造営されたと推測される。したがって、SB 105・SB 106より新しい時期の建物群と考えられ、この間に若干の時間差がみられる。B建物群は包含層出土の土器を含めてⅢ期の土器は少なく、ほとんど建物が存在しなかった時期もあったと考えられる。他方、東偏8度前後の方位をとる建物はSD 141の西側にもいくつか存在する。SB 107・SB 253などがその例である。SB 107はSB 106と重複するが、柱掘形出土土器からみてSB 274とほぼ同時期とみなされ、この時期の建物がSD 141によって規制されてはいない可能性が強い。SD 141は出土遺物に8世紀前半から中葉のものがかかり含まれることから、SD 113と同様に8世紀前半につくられたとみられ、当初は直接SB 274・SB 275の建物を囲繞することを目的に掘られたものとは考えられない。なお、SD 321・SD 320の方向はSB 274・SB 275とほぼ同じく、SD 113はSB 105・SB 106とほぼ同じであり、B建物群を囲む南北の東西溝の方向は若干異なっている。

建物のほかには土坑がいくつか存在する。土坑の機能は多くが廃棄穴とみられ、一定の建物と関連するものと考えられる。たとえば、SB 107とSK 174、SB 106とSK 140、SB 274とSK 257などである。井戸はSE 114の1基だけであるが、これはⅣ～Ⅵ期であり、SB 105などとは併存はしない。建物には雨落溝がともなうものがある。SB 115を囲むSD 104・SD 111はこれにあたり、このほかにも、その可能性が



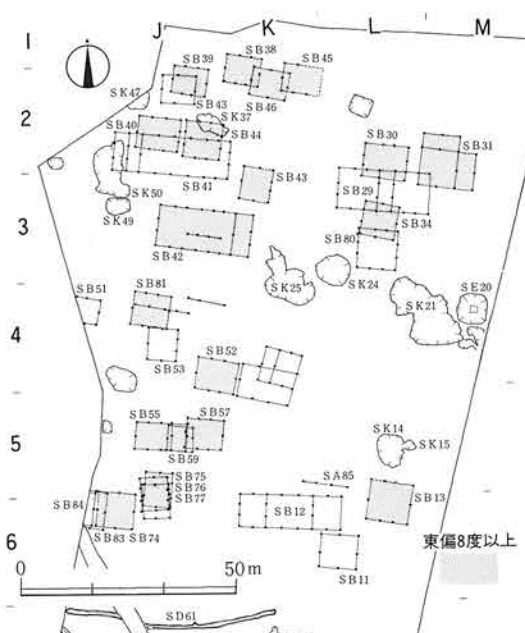
第89図 B建物群の遺構配置

存在するものがいくつかある。畝状小溝は区画する溝の内外に分布し、8世紀の遺構と併存することが考えられるものはない。しかし、東偏8度の畝状小溝はSB 274などと一定の関連性がみられ、これと併存する可能性が考えられる。

C建物群 C地区の北半部にある建物群で、8世紀前半から8世紀後半までが主要な継続期間と考えられる。9世紀以降は小規模な建物が存在した可能性はあるが、大規模な建物はないとみられる。建物群を画する明確な施設はないが、南側の東西溝SD 61はその可能性をもつ。北側は櫛池川の蛇行した河道が湾入している。建物が集中する範囲は南北約70m、東西は約50m以上である。建物数は約35棟を数える。南北棟と判断される建物は同一建物の建て替えによる3棟(SB 75~77)だけであり、総柱建物はない。建物の規模は桁行8間を最大とし、7間の建物が3棟ある。

建物は東側中央部にはなく、この部分を取り囲むように分布している。B建物群のように、柱通りが一致する複数の建物は明確にはみとめられないが、建物の方向を基準にすると2つのグループに分けられる。ひとつは東偏4~5度のもので、もうひとつは東偏8~10度のものである(第90図)。東偏4~5度の建物にはSB 12・SB 29・SB 80・SB 41・SB 82・SB 53・SB 55・SB 75・SB 74などがあり、これ以外はほとんど東偏8~10度となる。それぞれのグループの建物のなかでは互いに重複するものがほとんどなく、これを同時存在の建物とみることも可能のようであるが、確たる根拠は見い出せない。柱穴の切り合い関係では東偏の角度が大きいものが古いとみなされる場合は少数ではあるが存在する。とすると東偏角度の大きい建物群から小さい建物群への変遷が想定されるが、これはB建物群の変遷と相反する。C建物群と櫛池川を介して北側にある下新町遺跡A期建物群(8世紀中葉~後半)は東偏9度前後であり、C建物群の新しい時期の建物と同時存在したと考えられるが、そうするとさきの建物群の変遷とは相反することになる。したがって、同一方向の建物がすべて同時存在であるとみなすことはできず、ある程度の方角の相違があっても同時に存在した可能性も考慮する必要がある。

C建物群の建物はやや特異な構造をもつものいくつかある。廂をもつ建物は3棟(SB 31・SB 41・SB 42)あり、SB 31は東側のほか北側にも廂をもつが、ほかは東西の廂である。ただし、SB 41・SB 42は身舎と廂が同一間数ではなく、廂が3間、身舎が2間となっている。間仕切りと考えられる柱穴はSB 12・SB 29・SB 55にあり、SB 42もその可能性が強い。間仕切りと廂の区別が困難なものもあるが、廂となる柱穴は小さいことを前提に判断した。また、妻の間数が東西で異なるものとして、SB 43・SB 53・SB 41があり、一方の妻に柱がないものとしてSB 12・SB 29などがある。柱のない妻はいずれも東側である。こうした建物はB建物群にも2棟(SB 205・SB 206)があるが、これらも東妻に柱がないものである。¹⁾



第90図 C建物群の遺構配置

1) 栗原遺跡にも1例あるが、これも東妻に柱がないものである。なお、こうした妻に柱がない建物は

れも大規模な建物であることは注目される。

この建物群には井戸が1基のみ存在する（SE 20）が、これは掘形内出土の土器より9世紀前半頃に構築されたものと考えられ、大半の建物の推定時期と若干異なる。井戸が放棄されたのは9世紀後半とみられる。SE 20は石敷の位置と方向からみて、使用は南西の方向から井戸に向かうと推定され、井戸の南西方向に同時期の建物の存在を想定することもできよう。

2) 溝の時期と機能

検出された遺構のなかで、溝は時代や規模・形状が多様であり、数も多い。前述した主要な建物群を区画する溝はその一例であるが、前半期から後半期を通して注目される溝はいくつかある（第91図、第11表）。明確に後半期に属するのはSD 201・SD 203とSD 3である。ともに遺物の出土状況から、SD 201・SD 203はV期（9世紀前半～中葉）、SD 3はVI期（9世紀後半）に掘削されたと考えられる。その他の溝は掘削期について不分明なものが多いが、SD 3と8～9mの間隔で平行するSD 611以外はおおむね前半期に遡るものと推定される。

まず、建物を区画するという機能が比較的明確なのはA建物群のSD 904（SD 905）、B建物群のSD 113・SD 321・SD 389・SD 141・SD 320などである。これらは建物群の成立年代からみて、8世紀前半から中葉にかけて掘られたものとみられるが、SD 113とSD 321に若干の方向の差があることやSD 321出土土器がほぼIV期（8世紀末～9世紀前半）に属することは多少の問題点である。しかし、SD 113とSD 321の南北間は約99mで、SB 106北側柱列とSD 113・SD 321の間はそれぞれ45m・54mとなり、これらの距離は約330尺・150尺・180尺という整数値になることから、ある程度の計画性が感じられる。また、SD 321出土のIV期の土器はSB 274・SB 275の時期におもに投棄されたとみることができし、区画自体が元来正確な方形でないことも想定され、建物群成立当期に四方を囲む溝がつけられたと考えておきたい。なお、このなかにあるSD 151とこの北側にともなうSA 128は方向が子安遺跡の建物（10世紀前半頃）とほぼ一致することから、後半期の可能性がある。

次に、B建物群北側に3本平行する東西溝SD 323・SD 324・SD 387は方位が西偏2度で、SD 321などと明瞭に異なる。この3本の溝は正確に平行であることや出土遺物から同時期と推定される。出土遺物はIV期を主体とする。少なくとも、SD 201によって切られることから、これよりは古い。ところが、SD 323は西側で115度の角度で屈折し、SD 321の北側でさらに屈折し、SD 321とは交差しない。その西側は調査区外へのびるので不明であるが、この点からみればSD 323とSD 321は同時に併存した可能性が考えられる。ただし、SD 323などの掘削された年代が8世紀前半から中葉まで遡るかどうかは不明であり、SD 321が機能していた時期にSD 323が掘削されたということが推定されるにとどまる。3本の溝のなかでは中央のSD 324がとくに深く、覆土が人為的な埋め土であるとみられることはその機能と関連して注目される。なお、SD 321の北側とSD 387南側は約15mで50尺となる。

これら3本の溝の北側にさらに3本の溝（SD 433・SD 431・SD 501）がある。SD 501は直角に屈折し、東西部分はSD 431とはつながらないものの、同一方向にある。これらの溝とSD 433は4～6mの間隔で平行し、両者間にはほとんど遺構がみられない。3本の溝の方向はSD 323などとほぼ同様で西偏1～3度である。SD 387北側とSD 431南側は約30mで100尺となる。これらの溝は出土遺物が少ないが、方向からみてSD 323などと同一時期に掘削された可能性が考えられる。またSD 501の南北部の北側延長上には南北溝SD 633・SD 634の2本が平行して存在する。これらは北側へいくと西へ偏向し、さらに西側でほぼ直角に屈折する。南側の部分は方向がSD 433などと一致する。SD 433の北側とSD 633の東西部の

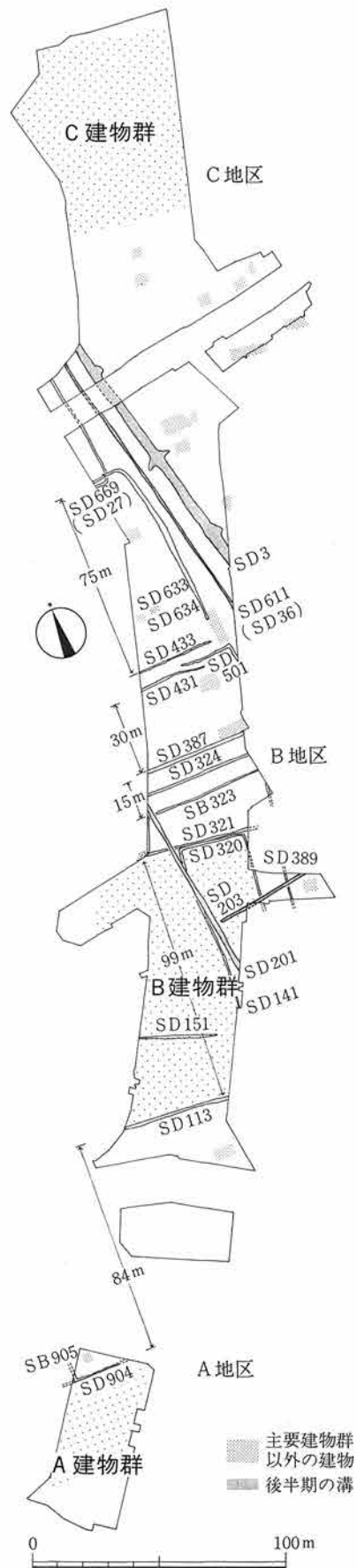
第11表 主な溝の概要

地区	溝番号	方向	方位	備考
A	SD904	東西	西偏2度	
	SD905	南北	"	SD904とT字状に交差
B	SD113	東西	東偏2~4度	
	SD151	東西	東偏17度	北側にSA128が位置
	SD141	南北	0度前後	直角に屈折してSD320となる
	SD320	東西・南北	東偏6~7度	北辺SD321と平行
	SD321	東西	"	
	SD323	東西(南北)	西偏2度(東偏22度)	115度で屈折、SD321と平行
	SD324	東西	"	SD323と7.0m間隔で平行
	SD387	東西	"	SD324と8.4m間隔で平行
	SD201	南北	西偏9度	SD141・SD321・SD323を切る 9世紀前半~中葉開削
	SD203	東西	"	SD201とT字状に接する
	SD431	東西	西偏1~3度	延長線上にSD501が位置
	SD501	東西・南北	"	カギ状に屈折
	SD433	東西	"	東端検出
	SD633	南北	西偏3度(南側) 西偏15度(北側)	ゆるくカーブする、南端検出
	SD634	南北	"	SD633に沿う 南側はSD433と直角
	SD669(SD27)	南北・東西	西偏7度	カギ状に屈折
	SD3	南北	西偏14度	9世紀後半開削
SD611(SD36)	南北	"	SD3と8~9m間隔で平行	
下新町	SD21	東西	東偏25度	A・B2本の溝、10世紀開削
	SD22	南北	"	SD21と直角に交差

間は約75m(250尺)である。こうした点からみるとSD633・SD634はSD433などと同一時期の可能性が考えられる。SD633の東西部から北側にはカギ状に屈折するSD669がさらに存在する。SD669は西偏約7度である。

以上の点からすると、建物群を区画する溝以外の溝もほとんど方向が一致することが注目され、直角に屈折するなどの形状をもつものや5m前後の距離で平行するといった配置、さらには互いの距離が尺度で50単位の整数値となることから、一定の計画的な設置状況がうかがえる。したがって、これらの機能は不明な点があるものの、土地区画に関連したものであり、部分的には道路などの利用も想定される。畝状小溝の分布についてもこれらとの明瞭な関係が察知されることは、証左の一つといえよう。

ところで、後半期に掘削されるSD201・SD203とSD3は上記の溝よりかなり大規模である。とくにSD3は幅3m~4m、深さ約1.8mととくに大きい。SD201・SD203はT字状に接するが、接点に陸橋部を残しており、つながって



第91図 今池遺跡の主な溝

はおらず、機能的には農業用水などの水路とは考えられず、一種の大規模な土地区画にともなうものとの推定も可能である。一方、SD 3は土地区画以外の機能を考慮する必要がある。一部に石敷の施設をもち、この東側に接して9世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴住居などが存在しており、なんらかの関係が考えられる。この溝が掘削される9世紀後半にはすでに大規模な建物群は廃絶していたとみられ、この周辺がそれまでとは異なった土地利用の対象地に変化したことも考慮される。溝の方向は西偏14度であり、土地の傾斜線にほぼ一致し、ほかの建物とはかなり相違することを勘案すると、農業用水路とする見方もできる。いずれにしろ、これだけの規模の溝を掘る労働力は莫大なものであり、この背景に存在する権力、あるいは経済力の所在はとくに興味ある問題である。

9世紀中葉以降、建物の集中はみられなくなり、SD 42IやSB 504などの桁行5間以上の建物もおお存しながらも、すでに土地の景観は大きく変貌していたであろう。この時代は律令体制が揺らぎはじめ、王朝国家体制への階梯にあり、今池遺跡の盛衰はまさにこれを象徴するかのようである。

B 中 世

中世の遺構はB地区の中央から北側とC地区の南端に分布している。遺構は掘立柱建物と井戸・土坑・溝などである。建物と井戸はそれぞれ総数約20でほぼ等しい。これらは居住区を構成するものであり、溝は土地の区画に関連すると思われるものがある。建物は図上で復原したものもかなりあり、不確定な要素も残る一方、復原しえなかったものもあろうかと思われる。これについては第50図(79頁)に柱穴群として、その分布を示した。

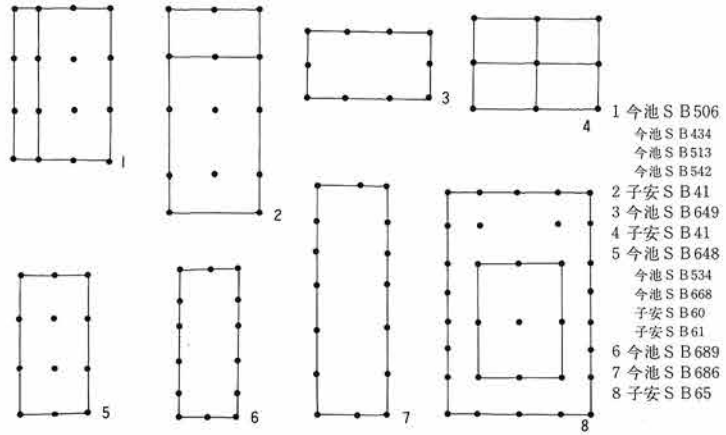
集落構成 居住区を構成する建物と井戸の分布はほぼ3群に分られる。Ⅰ群はB地区中央、グリッドの22列付近のものであり、これはさらに東西に分かれる可能性がある。建物4棟・井戸5基である。建物は比較的小規模であり、その方向はほぼ方位に一致する。Ⅱ群はグリッドの16列付近であり、建物10棟・井戸8基を数える。もっとも遺構が集中しており、さらに東側へのびるものと考えられ、復原しえなかった柱穴群も多数存在する。廂をもつ比較的大きい建物がいくつかある。建物の方向はSB 646・SB 614がやや西偏し、SB 513がやや東偏するほかは、ほぼ方位に一致する。Ⅲ群は東西溝SD 603によってⅡ群と画されるものであり、グリッド13列付近を中心とする。Ⅲ群のほぼ中央にある南北溝SD 3は平安時代に掘削されたものであるが、中世には最上層まで完全には埋没せずに残っており、これを考慮すればⅢ群はSB 668A・Bを中心とする一群とSB 648・SB 686を中心とする一群とに分けることもできる。遺構は建物6棟・井戸6基である。建物にはSB 686のような長いものがある。建物の方向はSD 3の東側のSB 668A・BとSB 689がほぼ方位に一致するほかはやや西偏する。これらの建物の方向は子安遺跡で検出された中世建物とほぼ同じものである(第V章参照)。

溝のなかではSD 1・SD 2が昭和40年頃の耕地整理以前の地割とほぼ一致するもので、比較的新しいものとみられるが、SD 5・SD 6のほぼ平行する2本の溝とSD 603の溝は西偏約3度で、建物とほぼ一致する。このうち、SD 5とSD 6は約3mの間隔をもって平行しており、溝の間は幅約10尺の道路とも考えられる。SD 6とSD 603は約70mの距離があるが同じ方向であり、土地を区画する溝と推定される。

これらの遺構は出土遺物からみて、13世紀後半から14世紀頃と考えられ、子安遺跡の中世遺構より相対的にわずかに新しいとみられる。

建物 中世の建物は、従来、県内ではほとんど調査例がなく、その実態が不明であったが、今回の今池遺跡と子安遺跡の調査でいくつかの建物が判明した(第92図)。中世の掘立柱建物は奈良・平安時代のもの

と比較して、いくつかの相違点がある。まず、柱掘形が相対的に小形で、平面が丸いものが多い。また掘形埋土が黒っぽい。これは柱穴の掘り込み面が暗褐色の包含層中かその上面であることを示唆する。次に、総柱建物が比較的目立つことがあげられる。奈良・平安時代にも総柱建物があるが、これは一般に高床構造をもつ倉とみられ、本来、



第92図 中世建物模式図 (1:400)

物資の貯蔵を目的としたものである。ところが、中世の総柱建物は倉とみるよりも居住を目的とした建物として考えたほうがよいものが多い。たとえば子安遺跡のSB 65のように廂をもつ総柱建物は、床をもった家屋とみられる。奈良・平安時代の掘立柱建物の床構造は明確ではないが、中世にはいつてからは床をもつ家屋が、一定数存在することが推察される。これと同様に、廂をもつ建物はめずらしい存在ではない。一方、建物の柱間がひとつの桁や梁のなかで一定しないものが多いことが注目される。等間の柱間寸法が多い奈良・平安時代の建物とは対照的である。

井戸 本遺跡では井戸が21基検出された。いずれも素掘りの円形ないしは楕円形の井戸である。規模は長径1.5mから2m前後・短径1.5m前後、深さは約3m前後を測るものが多い。中には92cm (SE 644)と浅いものや4.3m (SE 520)と深いものもある。浅いものを除くと、井戸の底面はいずれも灰色砂質粘土層に達している。

井戸底面の土層と掘形から井戸の使用状況がある程度把握され、大略5つのタイプに分類される。①井戸の最下層がゴミを含む黒色土ないしは暗黒色土で、遺物を含んでいるもの、②最下層は全くゴミを含まない暗灰色土であるが、遺物を含むもの (SE 344・SE 509・SE 516)、③最下層がゴミを含まない暗灰色土ないしは暗灰色粘土で、この暗灰色土ないしは暗灰色粘土層上に黒色土ないしは暗黒色土があり、上下両層に遺物を含むもの (SE 516・SE 520・SE 521)、④最下層が暗灰色土ないしは暗灰色粘土で、遺物を全く含まないもの (SE 356・SE 508・SE 517)、⑤上面から底面まで単一層で最下部にゴミを含み、かつ遺物が含まれているもの (SE 523) がある。なお、SE 644は上面から底面まで単一層であるが、浅く、底面にゴミ等もなく井戸としての機能を果たすとは考えられず、別の性格を有するものであろうと思われる。底面にある土砂の色調・腐敗度などから黒味をおびる度合の強弱によって、使用期間がある程度推測されるものと考えれば、①のタイプは井戸の掘形の崩壊もなく、当初から長期にわたって使用されて廃絶されたもの、②のタイプは短期間使用され、その後壁等が崩壊し廃絶されたもの、③のタイプは使用中に側壁等の一部が崩壊したものの、井戸としての機能を失なわず再度長期にわたって使用され、廃絶されたもの、④のタイプは井戸の掘形はしっかりと掘ったが、掘方途中ないしは掘上がり直後に側壁の一部等が崩壊したものの、井戸の機能を失なわなかったために長期にわたって使用され、廃絶したもの、⑤のタイプは①のタイプではあるが、廃絶の際には埋められず、自然に埋没していったものと考えられる。これらの各種のタイプの井戸が同時期にすべて存在していたとは考えられず、各種のタイプの井戸が組み合わせられて、建物と有機的関連をもっていたものと思われる。しかし、井戸内出土の遺物は相対的に少ないた

め、個々の井戸の時間差や建物との相関関係を把握することはできなかった。

井戸内出土の遺物には①意識的に埋納したもの、②湧水濾過のために礫や木炭の間に土器片などを充塞するもの、③使用中に土器や他の用具等を誤って落としたもの、④井戸廃棄の際に土砂とともに放棄したのがある。本遺跡の井戸底面から出土した木製品や土器類は③に属するものと思われるが、21基中9基で礫が出土している。礫は直径15～20cmの自然石ないしは割石で、表面が焼けて媒が付着しているものと火を全く受けていないものがある。井戸中に入っている礫の数は2～9個で、SE 643では直径20～30cmの自然石で火を受けていないものが25個出土している。井戸底のゴミを含む黒色土から出土するもの（SE 356・SE 508・SE 523・SE 636・SE 652）、ゴミを含む黒色土より上層で出土するもの（SE 521・SE 531・SE 641）とゴミを含む黒色土・ゴミを含む黒色土より上層から出土するもの（SE 643）がある。礫の量からすれば、礫が井戸底に設備された「まなこ」的なもので一種の濾過的役割を果たしたものとは考えられない。ゴミを含み黒色土から出土する礫は意識的に埋納された可能性もあるが、埋土から出土することを考えれば、廃棄の段階で意識的に投入された可能性が非常に多い。井戸廃棄の際の呪術的儀礼の一つであろうか。礫が入っている井戸は一概には言われないが、ゴミを含む黒色土があって長期にわたって使用されていた井戸に多い傾向がある。礫（自然石・焼石）のもつ意味、礫をともなう井戸とともなわない井戸などについては今後の資料の蓄積をまって再考する必要があるだろう。

遺物（陶磁器類） 中国から渡来してきた青磁や白磁と日本で焼かれた珠洲焼のほかに瀬戸焼などが出土している。このうちもっとも出土量の多いものは珠洲焼である。珠洲焼は甕・鉢・すり鉢の3種が主体であり、甕は叩きしめ技法で、表面に平行条線状叩き目が、鉢・すり鉢はロクロ成形で、内外面に横撫で痕が、底部には静止糸切り痕がある。また、胎土・色調などからも石川県の珠洲市周辺で焼かれた珠洲焼に近以している。遺物の出土状況から一括資料としては問題があるため、相対的に年代を考えていくことにする。

甕は口径が大きく、口頸部はくの字状に屈曲し、口縁は玉縁状を呈している。器形の最大幅は胴部上半で、胴部には平行条線状叩き目が施されている。壺は口縁が弓なりに外反はせず、こんもりと丸まった肩から曲線を描いて底部へ移行している。鉢・すり鉢は、器体が内彎気味にたちあがり、口唇部は平縁となる。口唇部内面に櫛目文を施したものは一点もないが、すり目は直線的に施され、すり目の単位間隔は粗で太い。なかには曲線的なものも若干含まれているが量的にはきわめて少ない。このような器形・調整手法などから珠洲焼の年代を考えると、本遺跡出土の珠洲焼は13世紀から14世紀にかけてのものが主で、珠洲焼の第Ⅲ期²⁾に属するものであろう。壺の頸部下半から胴部上半にかけて篋状工具による線刻文が施されたものや木葉文を施したものも、この期に属するもので、舶載磁器（青磁・白磁）とともに使用されたものであろう。なお、すり鉢で内面のすり目単位間隔が密で細いものは15世紀頃のものと思われ、珠洲焼の第Ⅴ期に属するものであろう。おそらく、施釉陶器（瀬戸焼の鉄釉水滴・鉄釉小壺など）も該期のものであろう。

2) 石川県郷土資料館『珠洲古陶』開館10周年記念特別展図録』 1978

第Ⅳ章 下新町遺跡の調査

1 調査の概要と経過

A 調査の準備

「調査に至る経過」(第Ⅰ章1)で述べたように、下新町遺跡の調査は昭和56年度上半期に行う予定で、北陸地建と一応の合意をみていたが、今池遺跡の発掘調査時期等の関係から、流動的な要素も残されていた。そこで、昭和55年度今池遺跡A地区の調査終了時より、北陸地建との間で再度、今後の発掘計画について協議が繰り返された。昭和55年12月の協議で北陸地建から、55年度当初には、56～57年度にかけて調査が完了する予定で計画を進めていた今池・下新町遺跡の発掘調査を、56年度中に完了してほしいとの申し入れがあった。しかし、県教委では現体制における最大限の対応として、56年度に今池遺跡A地区残部・今池遺跡C地区・下新町遺跡の、また57年度に今池遺跡B地区の発掘調査を予定しているとし、合意するに至らなかった。北陸地建ではこの協議内容を局内で検討した後、昭和56年3月12日に56年度の調査範囲は、今池遺跡B地区・C地区のボックス工事及び下新町遺跡のアバット工事等に係る部分とし、調査面積は全体の2分の1(約11,300㎡)で対応してもらいたいとの提案があった。また、その区域について遺跡確認の調査の実施の依頼があった。県教委では現地確認の実施を了解し、その調査結果をもって昭和56年度の調査範囲について協議・決定することとし、この提案を保留した。現地確認は雪どけを待って4月22日に北陸地建の関係者とともに実施され、今池・下新町地内は現・旧河道部を除いてすべて遺跡であり、さらに一連のものと考えられるほか、遺跡の密度も当初の予想より濃いと判断された。この結果をうけて、翌23日に昭和56年度の発掘調査は下新町遺跡・今池遺跡C地区の一部、合計9,000㎡及び今池遺跡A地区の残部について実施することとし、日程は6月より11月上旬までとすることで合意した。この合意をうけて、同日午後より上越市教育委員会及び地元周辺の町内会長に調査の概要を説明し、作業員確保等の協力を依頼した。その結果、特に上越市教育委員会の格段の協力により、調査の前日までに必要作業員数を確保し、発掘調査実施の運びとなった。

B 発掘調査

発掘調査は、6月1日より9月9日までの間、調査員3～4名、作業員50名前後により、調査対象面積4,600㎡について調査を実施した。現況は畑地であったが、用地買収後荒地化していた。

グリッドの設定 4月22日の現地確認における試掘調査の結果、竪穴住居を主体とする集落跡であろうと推定され、55年度に実施された今池遺跡A地区の調査で検出された掘立柱建物は検出されないだろうと考えられた。そのためグリッドは、国土地理院の座標系を使用せず、センター杭No.375を基点とし、センター杭No.370を結んだ線を基線にして、15m方眼を組み大グリッドとした。グリッドの呼称は今池遺跡と同様に東西をアルファベット、南北を数字にして「C4区」のごとく両者の組み合わせによっておこなった。大グリッドはさらに3m方眼に区分けし、1～25の小グリッドとした(31頁図参照)。グリッドの設定

にかかる杭の打設は業者に委託した。杭の呼称はグリッドの北西隅の杭とグリッド名を一致させた。レベル原点は各グリッド杭に任意設定し、ベンチ・マークより標高を求めた。

発掘方法 発掘方法はまず、表土と洪水堆積層である黄褐色粘質土を重機により除去した後、平安時代の洪水堆積層及び包含層を人力により掘りあげ、地山面で遺構確認をした。

包含層の遺物はグリッドごとに取りあげた。遺構は種別ごとに番号をつけたが、整理時に通し番号に打ちかえた。建物柱穴と認定されなかったピットは、遺物の出土したものに限り、大グリッドごとにピット番号をつけた。

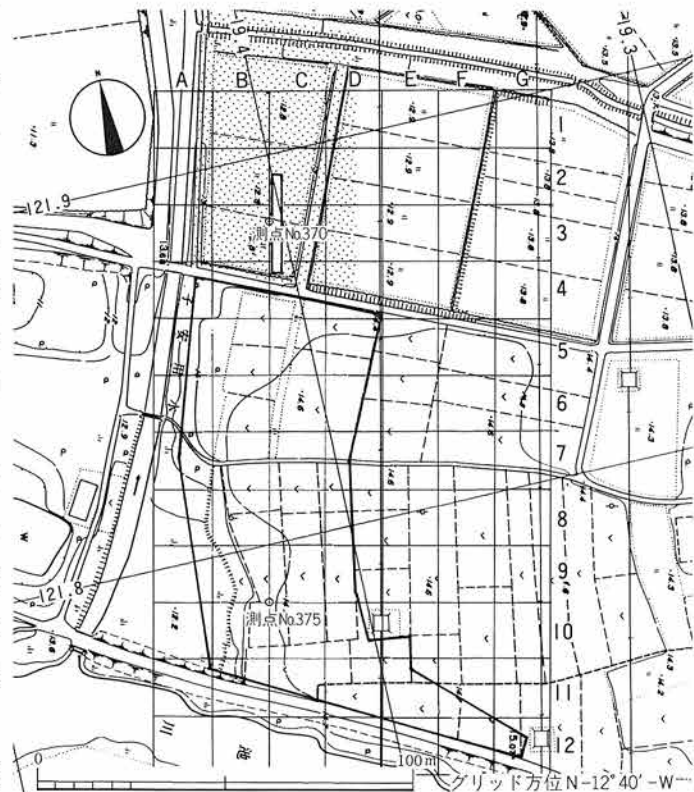
土層観察は南北方向ではグリッド設定の基線であるB・C列の境界にセクションベルトを設定し、また、東西方向では6・7列及び10・11列の境界にセクションベルトを設定して行った。遺構平面図は簡易遣り方により1/20で作成した。

経過 6月1日から発掘調査を開始するため、5月25日より器材を搬入し事前準備に入り、予定どおり6月1日より発掘作業に入った。

遺物の分布状況は、掘立柱建物及び井戸の付近に集中していたほかは、全般に密度はさほど濃くなかった。また、量的には比較的少ない遺物量であった。そのため、重機による洪水堆積層の排土もあいまって、地山面までの掘り下げ作業は早く進んだ。当初は平安時代の竪穴住居を主体とする集落遺跡を想定していたが、予想とは全く異なる掘立柱建物を主体とする遺跡であり、時代も奈良時代から平安時代にかけて3時期に分けられることが判明した。また、県内では4例目と発見例の少ない緑釉陶器の出土もみた。

発掘作業は東から西へと順次進めた。まず、調査区北側のD5区では洪水堆積層下面より永楽通宝及び瀬戸焼灰釉皿が出土したことにより、洪水堆積層の形成年代の上限を把握することができた。しかし、これにともなう遺構は確認されなかった。次に、D8・9区では総柱の建物、D・E10区では多数の重複する柱穴群を検出した。さらに、D・E11区では素掘りの井戸3基・建物1棟が検出されたが、建物は櫛池川の堤防の下へのびており、全体を知るには至らなかった。また、D・E10区の柱穴群より平安時代中頃の緑釉陶器・灰釉陶器、E11区の井戸（SE14）よりは同時期の緑釉陶器が出土した。この柱穴群はその後の検討で重複する2棟の建物であることが判明し、これらの建物を中心とする調査区東側の建物群はほぼ同一方位を示していることから、平安時代中頃の遺構群（C期）と考えた。これらを調査中に仮に「南地区の遺構群」と呼んだ。

調査が西に進むにつれて、6列を東西に走る溝（SD21）が検出され、南地区の遺構群と同一方向であ



第93図 下新町遺跡グリッド設定図

昭和47年8月撮影・昭和48年7月測図
座標系第8系 建設省北陸地建

ることがわかったほか、一度洪水堆積土により埋まった後、再び掘り直された溝（SD 21B）が、ほぼ同一方向で重複していることがわかった。この溝の掘り直しと南地区の建物群の重複とは関連性があるものと考えた。すなわち、平安時代の中頃に建物・井戸・溝などの施設によって営まれたこの地が、洪水による被害を受けたものの、放棄することなく、建物の建て替え・溝の掘り直しをするなど、引き続き営みを続けたことが判明した。

次にB・C地区の調査においては、南地区の遺構群とは異なる方位を示す建物群が整然と配置していた。この時期の遺構群は、B 6 区の2棟の建物（SB 1・SB 2）、A・B 7 区の建物（SB 3）及びC 7 区の土坑（SK 31）等がある。また、建物（SB 2）とSK 31は上述した溝（SD 21）に切られているほか、出土遺物も南地区の遺構群のものとは異なり、奈良時代後半に比定されるもの（A期）である。そのなかでとくに注目された遺物は、須恵器有台杯の底面に「東家」と書かれた墨書土器である。南地区の遺構とは異なる時代のこれらを、調査中には仮に「北地区の遺構群」と呼んだ。

さらに、B 7 区では建物（SB 3）と重複する建物（SB 4）、B・C 8 区では建物（SB 5）及びB 8 区の井戸（SE 12）が検出された。これらは北地区・南地区のいずれの建物群とも異なる方位を示している。出土遺物からSE 11と同時期のB期にあたるものであった。また、井戸（SE 12）を埋めた後のくぼ地から遺物が検出された。これらの遺構群の一部は、河川跡である大きな落ち込みに切られていることが判明した。この河川跡は明治時代の更正図では櫛池川の河道として記されていることから、大正年間に実施された河川改修以前の流路であることが判明した。そのため、調査は重機により落ち込みの斜面を明らかにするにとどめた（177頁写真）。

調査が終りに近づいた頃、A 5・6 区でシルト質の河川堆積層に掘り込まれた溝（SD 22）が検出された。この溝は前述した溝（SD 21）と直交する方向で、これより北側のみ検出されたが、南側では櫛池川の流路変更により削りとられて検出されなかった。この溝はその位置関係などから、SD 21と同時期のものであろうと考えた。

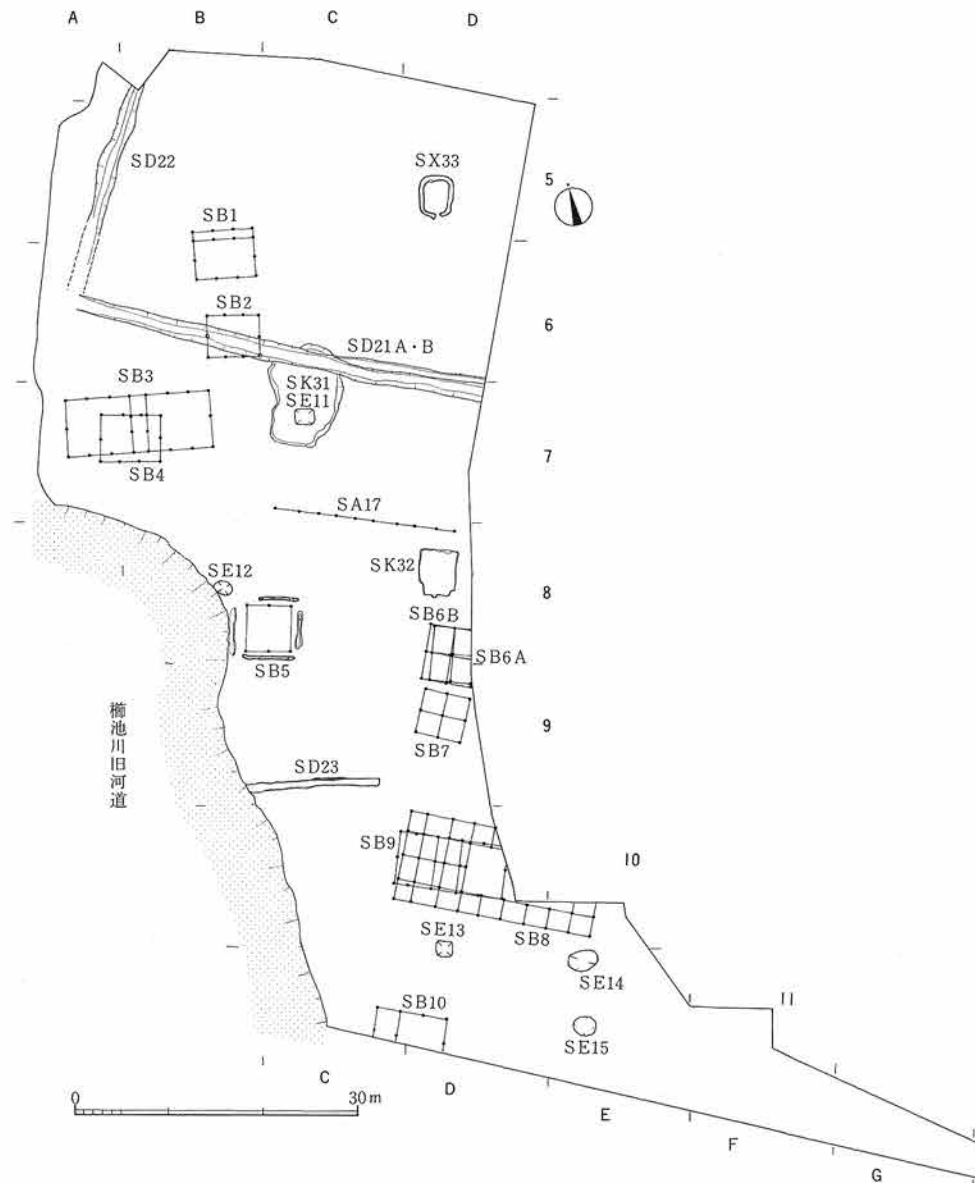
以上のように、下新町遺跡は奈良時代後半と平安時代前半及び平安時代中頃の3時期を主体として構成されている。しかし、遺跡の西側を櫛池川の旧河道により切られているため全容ないし規模については知ることはできなかった。ただ、調査前のテストピット程度の若干の試掘により遺跡の性格を推定することの危険性を痛感した。なお、井戸跡を掘り進める場合、壁の崩落が予想されたため、安全対策として、角材と板材を用いて木枠をつくり、壁面を保護する処置をとったほか、しばらく作業を休止する際には、角材と板材を用いて孔口に覆いをするなど配慮した。さらに、遺跡内での部外者（特に近隣の小学生）の事故防止のため、周辺の小学校長に事情を説明し、協力を依頼するとともに、遺跡全体を杭とトラロープを用いて囲い、要所に立札を設置した。

調査は、8月24日より作業員の主力を今池遺跡C地区の調査にまわし、井戸跡完掘及び平面図作成等の残務作業のための作業員約10名を残し、当初の計画であった8月31日より若干遅れて9月9日に調査を完了し、引き渡しを行った。

砂埋め保存 発掘調査の進行にともない、県内では初めて規則正しく配置した掘立柱建物群を検出したほか、県内では出土例の少ない緑釉陶器等の出土品を得るなど、一般集落とは異なる性格の遺跡の一部であることが確認され、保存対策を講ずる必要があると判断された。そのため、7月17日に北陸地建に遺跡の重要性について説明するとともに、保存対策をとる必要性を強調した。さらに7月21日協議を継続したが、道路工事の緊急性が強調され結論はもち越された。用地買収が完了し、周辺では工事が進捗している

ことによりルート変更は不可能であることや橋脚に設計変更することは費用面で困難であるばかりでなく、橋台工事により遺構がかなり破壊される可能性が強いと見解が一致した。そこで、保存の一方法として、砂により遺構面を30～40cmの厚さで埋めた後工事に入ることで検討することとなった。8月21日検討の結果について協議し、工事発注後に砂を用いて厚さ30cmで埋めたことで合意し、8月31付けの文書をもって北陸地建に砂埋め保存について依頼した。

以上のような道路建設工事の切迫したなかで、遺跡の保存処置としての砂埋め方法はやむを得ないものと考えたが、しかし、はたしてこの方法で遺構が保存されたか否かは今後の問題として残る。



第94図 遺跡遺構配置図

2 遺 跡

A 概要と層序

1) 概 要 (図版57・第94図)

検出された主な遺構は、掘立柱建物11・井戸5・柵1・溝4・土坑2及び性格不明遺構1などである。これは、奈良時代後半の時期(A期)と平安時代前半の時期(B期)及び平安時代中頃の時期(C期)の3時期が存在する。個々の遺構については、柱穴以外ピットを中心として年代決定を欠くものが多い。遺構はグリッド5列より北では、溝(SD 22)のほかに年代を決定できるものは全くないのに加え、その数もきわめて少なく、6列より南に大部分が集中している。しかし、調査対象地の西側では大正年間の河川改修以前の櫛池川の河道により遺構の一部も切られているため、遺跡の全容を知ることはできない。

奈良時代後半の時期(A期) 奈良時代後半の遺構は、掘立柱建物3(SB 1・SB 2・SB 3)・土坑(SK 31)・溝(SD 23)である。建物及び溝は、ほぼ同一方位を示す。掘立柱建物の柱穴は建物の規模に比例して大小の差はあるものの、平面形が方形となるのに加えて、柱穴掘形内の埋土が茶褐色で、平安時代のもものが暗褐色ないし黒褐色であるのと明瞭に区別される。また建物(SB 2)及び土坑(SK 31)は、平安時代中頃の時期の2溝さらに、SK 31は平安時代前半の時期の井戸(SE 11)に切られている。そのためSK 31出土土器は、SE 11にともなうと考えられる若干の遺物の混入がみられる。しかし、これをのぞけばA期の時期を決定しうる一括資料としてとらえられる。そのなかでも注目されるものに、杯の底部に「東家」と書かれた墨書土器がある。溝は同時期の遺構群からは南に離れて位置し、同時期の建物と同方向に走っている。

平安時代前半の時期(B期) この時期の遺構は、掘立柱建物2(SB 4・SB 5)・井戸2(SE 11・SE 12)である。建物は東偏15度である。建物の柱穴は平面形が方形になることに加えて、掘形内の埋土は暗褐色であり、奈良時代後半の時期のものとは区別される。また、建物(SB 4)は奈良時代後半の建物(SB 3)と重複関係にある。建物(SB 5)には周囲に明瞭な小溝がある。これらの建物からの出土遺物は比較的多い。井戸(SE 11)は、平面形が方形で外側が縦板、内側が横板の二重の井戸枠をもつ。遺物は埋土より若干出土している。ただ掘り込み上面では、平面的掘り下げにおいてはA期のSK 31の覆土とほとんど区別ができず、遺物が混在する結果となった。井戸(SE 12)は平面形が楕円形の素掘りであり、一部を櫛池川の旧河道により切られている。遺物は、井戸埋めたて後の土層より多量に出土している。年代は建物同様B期に近いものである。

平安時代中頃の時期(C期) 平安時代中頃の遺構は、掘立柱建物6(SB 6 A・SB 6 B・SB 7・SB 8・SB 9・SB 10)・井戸3(SE 13・SE 14・SE 15)・柵1(SA 17)・溝3(SD 21 A・SD 21 B・SD 22)・土坑1(SK 32)である。当期の遺構は、建物の重複(SB 8とSB 9)・建て替え(SB 6 AとSB 6 B)と溝の掘り直し(SD 21 AとSD 21 B)から2時期に細別できる。また、方位にも若干の変化がみられるが、井戸・土坑を除くと、おおむね東偏20~25度または、それに直交する方位をとっている。建物の柱穴は、建物の規模に比例して大小の差はあるものの、平面形は方形のものが多いが、A期の柱穴に比して不ぞろいのもが見られる。また、柱穴掘形内の埋土は、細別した前半では暗褐色であるのに対し、後半のもの

は黒褐色と差が認められる。出土遺物は特に建物（SB 8・SB 9）に集中し、緑釉陶器・灰釉陶器もかなり出土している。井戸は平面形が楕円形ないしは隅丸方形であるが、いずれも素掘りである。出土遺物はいずれも多量であったが、とくに井戸（SE 14）より緑釉陶器・灰釉陶器が出土している。土坑（SK 32）は建物群の北側に位置し、平面形は方形である。これらの遺構群の北側を区画するように柵（SA 17）及び溝（SD 21A・SD 21B）があり、建物の方位と全く同じ方向に走っている。とくに溝は一度洪水堆積土で埋まった後、再び掘り直されており、建物の建て替え等とこの洪水堆積土の存在には、強い関連性があるものと考えられる。溝（SD 21）と直交する溝（SD 22）は、直交部より北側では検出されたものの、南側については櫛池川の流路変更により削除されているため検出されなかった。

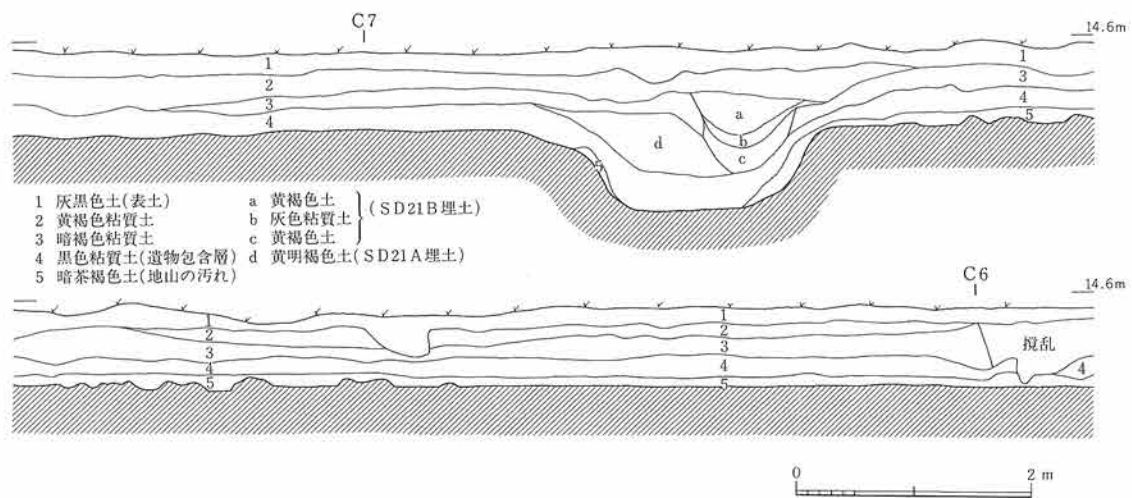
（2） 層 序

今回の調査対象地は、西側を櫛池川の旧河道に切られているため、遺跡のどのような位置にあたるか不明である。この微地形は南北方向では南から北へ、東西方向では東から西へわずかに傾斜している。調査区の南端と北端約110mの間の比高差は30cmで、東西方向はこれより傾斜度が小さい。

土層は北側と南西側の一部を除き地表面から地山面まで5層に分けられる（第95図）。表土は15～20cmの厚さで畑の耕作土である。

表土の下は黄褐色土が厚さ25～40cm前後（黄褐色粘質土）あり、北側の一部を除きほぼ遺跡全体に認められる。土質は微粒砂あるいはシルト質で混入物が少なく有機質なども含まない。発掘当初、この層は大正年間に行われた櫛池川の河川改修による掘削残土を、畑地造成のために盛土したものと考えたが、土層の分布がきわめて広範なことや均一な土質であること、さらにほぼ水平に堆積しているため下層の凹凸に強く影響されていることなどから、洪水による堆積層と推定された。また、地元の古老より聞きとり調査をした結果、川沿いの畑には残土を入れた部分もあるが、調査区全面に入れた事実はないとのことで、この推定を補強することとなった。この層の形成年代については、同層の下面より永楽通宝と瀬戸焼灰釉皿（第105図）が出土していることから、15世紀を上限とする時期であることが判明した。

黄褐色粘質土の下は、暗褐色土が厚さ10～20cm前後（暗褐色粘質土）あり、南西側の一部を除きかなり



第95図 土層断面図

広い範囲に認められる。土質は粘性が強く混入物が少なく均一であり、上層の黄褐色粘質土と同じく洪水堆積により形成されたものと推定された。この層の形成年代については、SD 21 Aを覆っており、しかもSD 21 Bに掘り込まれていることから、平安時代中頃のC期で分けた2小期の前半と後半との間に形成されたものである。この年代は出土遺物より10世紀後半を中心とする時期と考えられる。また、この洪水により被害を受けた建物の建て替え、溝の掘り直しが行われたものと考えられる。なお、6列のSD 21の南側でこの堆積層が著しく厚くなっているのは、SD 21 Bを掘り下げた残土を積んだ結果によるもので、その後充分な整地が行われなかったものと考えられる。

包含層は、これらの洪水堆積層に覆われた黒色粘質土である。粘性が強く、厚さ30cm程度である。包含層中からは奈良時代及び平安時代の遺物が出土したが、それぞれが別々の層を形成していたかどうか確認することはできなかった。

包含層より下層には、地山土が変質したものと考えられる暗茶褐色土の粘質土が、厚さ10cm程度見られ、その直下に若干の色調の変化はあるものの、同質の地山層がある。地山面は標高13.8m～14.0m前後である。

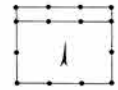
なお、黄褐色粘質土・暗褐色粘質土・包含層の3層は、ゴボウ・長芋の栽培による攪乱を受けている部分が多く、断続的な層序となっている。

B 遺構各説

1) A 期

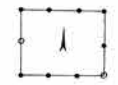
SB 1 (図版58・114)

B 6 区の北東隅近くにある東西3間(6.3m)×南北3間(5.2m)の身舎の北側に廂をもつ東西棟建物(東偏9度)である。柱間寸法は廂の出を除き桁行・梁間とも2.1m等間である。廂の出は1.0mである。柱穴の掘形は南側柱と北入側柱の柱穴で一辺50～60cmの方形で、深さ50～60cmとよく揃っている。両妻側の中央柱穴はやや小さく一辺40cmの方形で、深さ40cmである。また、廂の柱穴は一辺35～40cmの方形で、深さ50～60cmである。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は25cmほどで比較的良好に揃っている。掘形埋土は地山土を主体とした茶褐色土である。



SB 2 (図版58・115)

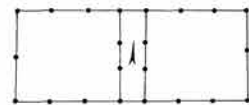
B 6 区の南東隅近くにある東西3間(5.7m)×南北2間(4.4m)の東西棟建物(東偏9度)である。南東隅の柱穴と西妻側中央の柱穴は、B期に属するSD 21により破壊されて遺存しない。柱間寸法は桁行1.9m等間・梁間2.2m等間である。柱穴の掘形は一辺70～100cmの方形で、深さ50～60cmと大きさはやや不揃いである。検出された柱穴すべてに柱痕跡が認められ、その径は25cmほどで比較的良好に揃っている。掘形埋土は地山土を主体とした茶褐色土である。



この建物の東妻柱列とSB 1の東妻柱列はほぼ一直線上に並んでおり、両者の間隔は4.0mである。

SB 3 (図版59・115)

A・B 7 区の北隅近くにある東西7間(15.4m)×南北2間(6.2m)の東西棟建物(東偏9度)で、馬通りをもつ。柱間寸法は、馬通り部を除き桁行2.2～2.4mとやや不揃いである。馬通り部の柱の間隔は1.6mである。また梁間は3.1m等間である。南北側柱列及び両妻柱列の柱穴の掘形は、一辺80～



120cmの方形で、深さ50~80cmと大きさはやや不揃いである。これらの柱穴のすべてに柱痕跡が認められ、その径は20~30cmほどで比較よく揃っている。なおこれらの半数近くの柱穴に、柱痕跡が複数認められ、建て替えの可能性がある。また、馬通りの柱穴の掘形は、径30cmの円形で深さ25cmと規模は小さい。この規模の小さい4個の柱穴を間仕切りと考えると、7間の中央の馬通りをはさんで、その東西に3間ずつの部屋がある建物とみることができる。掘形埋土はいずれも地山土を主体とした茶褐色土である。

この建物の東妻柱列とSB 1の西妻柱列は、ほぼ一直線上に並んでおり、両者の中間のSB 2をはさんで12.0mほど隔たっている。

SD 23 (図版60)

SB 9の北西、B・C 9区の南側に位置する、幅80~100cm、深さ30cmの東西溝である。溝の方位は、9度東偏しており、A期の建物群の棟通りと同一方向となっている。この溝の東端はC 9区で終結し、また西側は河川改修前の櫛池川の河道により切られている。なお、出土遺物はなかったものの、溝の方位が建物の方位と一致するため、A期の建物群の南側を区画する溝と考えた。

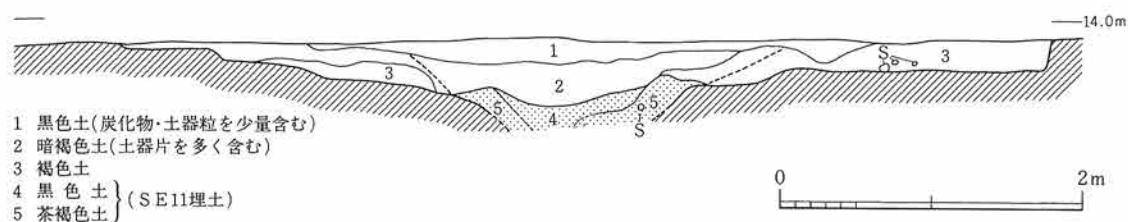
SK 31 (図版59・123, 第96図)

C 7区に位置する、南北8.5m・東西8mの不整形で、深さ20~40cmの土坑である。掘形の底面は平坦ではなく、複雑な凹凸が見られるが、全体的には南から北へむかってゆるやかに傾斜する。この土坑のほぼ中央にはSE 11が掘り込まれている。なお、北側はSD 21に切られている。掘形の覆土は平面の掘り下げでは判然としなかったが、断面観察により3層に分かれている。下層は円礫を含む暗褐色土でその上面の一部に埋めたて貼床状の平坦面をつくっている部分がある。この層はB期のSE 11の掘形部分で切れていることから、井戸構築時に周辺の整地を行ったものと考えられる。この層の上に、SE 11を覆うように下層とほぼ同質の暗褐色土がある。この層は、SE 11を廃棄し埋めたて後に形成されたものである。遺物は、多量に出土しており、若干の遺物がB期に比定されるほかは、その大部分はA期に属する遺物であると考え、A期の時期想定のため基本資料とした。なお、下層の遺物の中には「東家」と墨書された須恵器が出土している。上層は黒色土(腐植土)が自然堆積したものである。

2) B 期

SE 11 (図版59・118・119, 第97・98図)

SB 3の東約9mのC 7区に位置し、A期のSK 31のほぼ中央で覆土中より掘り込まれた木枠組の井戸である。井戸の掘形は壁面が崩落している部分もあるが、方形で二段掘りとなっている。上部では東西2.1m・南北1.7mで、底部では東西50cm・南北40cmとなっている。また、段部では東西1.6m・南北1.5mである。深さは3.15mを測る。その底面より30cm上った部分の北寄りに井戸枠を据えている。井戸枠は縦長の側板を一辺に3枚ずつ斜めに打ち込んで四方を囲んだ後、その内側に長さ40cm・幅10cm程の板を四方



第96図 SK 31断面図

から中心に向かって隙間なく、斜めに並べて基底部としている。この基底部には濾過装置として、こぶし大の礫を数十個入れている。石質は関川で容易に採取できる輝石安山岩が大半を占める。基底部の縦板によって区画された上部に、内法60cmほどの横板を井籠組にして積み上げている。横板は最下段の一段のみが残存していたが、その内側に上段の横板が落ち込んでいた。また、横板の断片は四方を囲っている縦板の上端付近からも出土している。最下段の南北2枚の横板は両端の上端部を欠き、東西2枚の横板は、両端の上下両端部を相欠きにし、積み合わせたものである。2段目以上の横板は、両端の上下両端部を相欠きにし、上下に積み合わせたものと考えられる。

井戸枠設置後、井籠組内面を除いた掘形は地山土により埋め戻されている。この埋め土は上層と下層の2層に分けられ(第98図)、その下層からは須恵器杯小破片・加工木材が出土し、また上層からは灰釉長頸瓶片(図版62-52)が出土している。

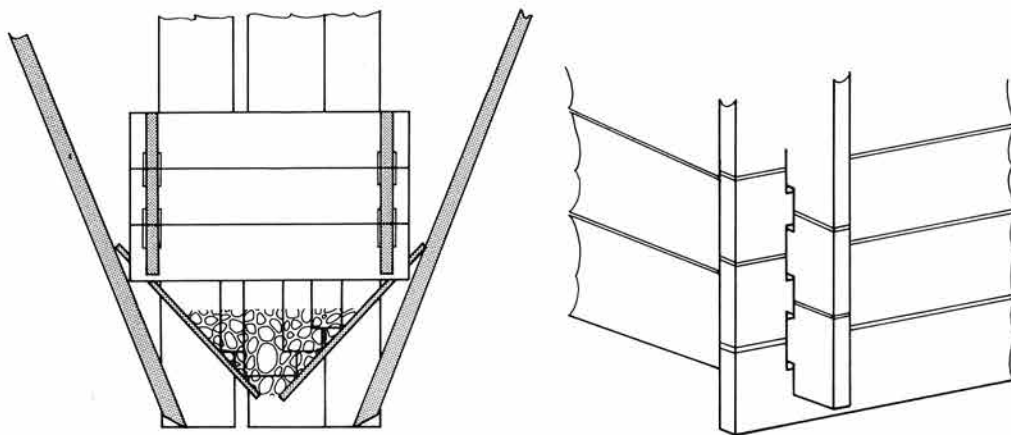
井戸は廃棄後埋められている。この埋め土は4層に分けられ、その最下層より須恵器杯(図版62-46)・斎串(第107図)及び植物の種子(図版152)が出土し、また、その上層からはこぶし大の礫・焼石が投げこまれたような状態で出土している。なお、SE 11はA期のSK 31の覆土を切って構築されているため、A期の遺物も混在している。

SE 12 (図版59・120, 第99図)

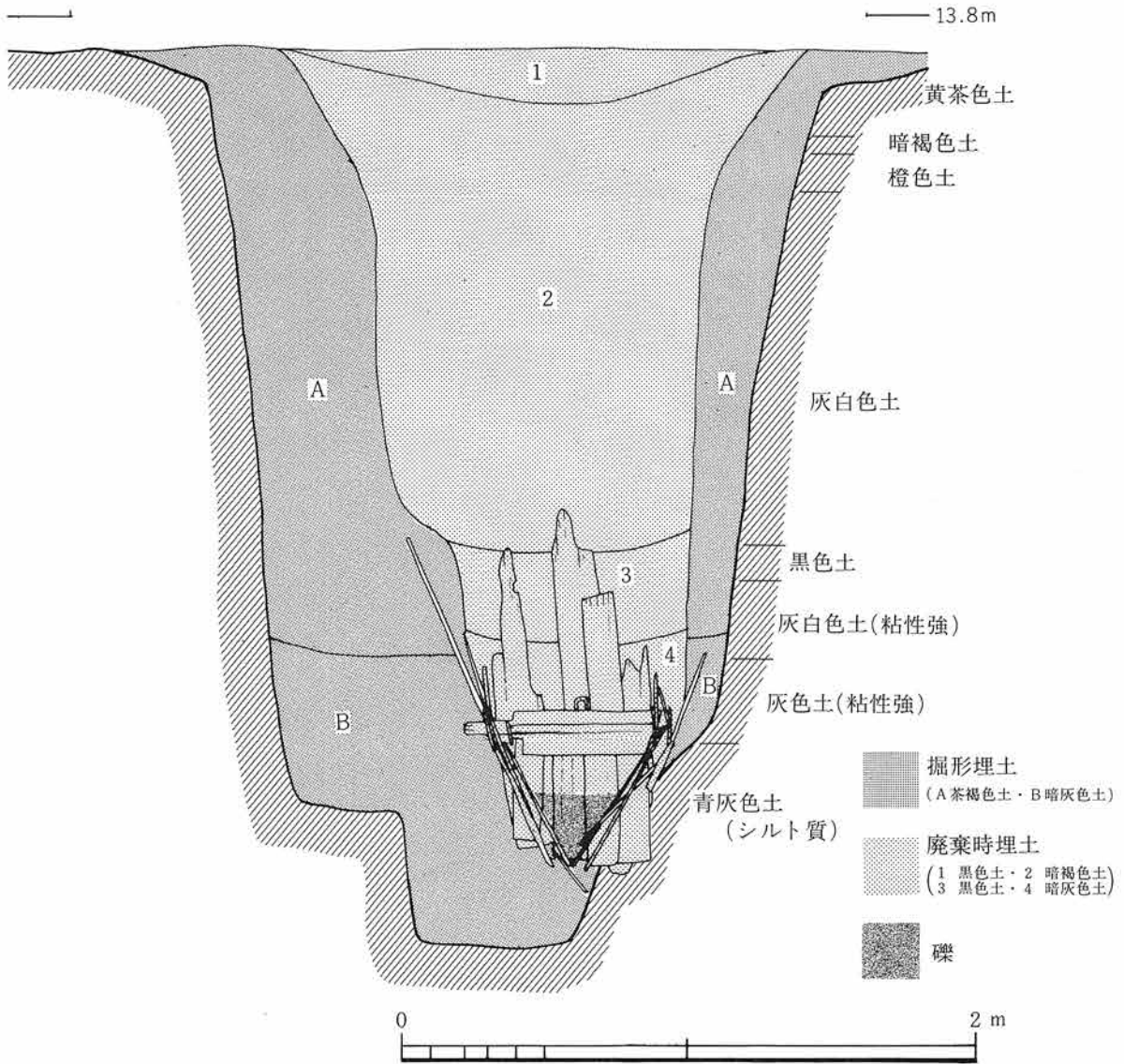
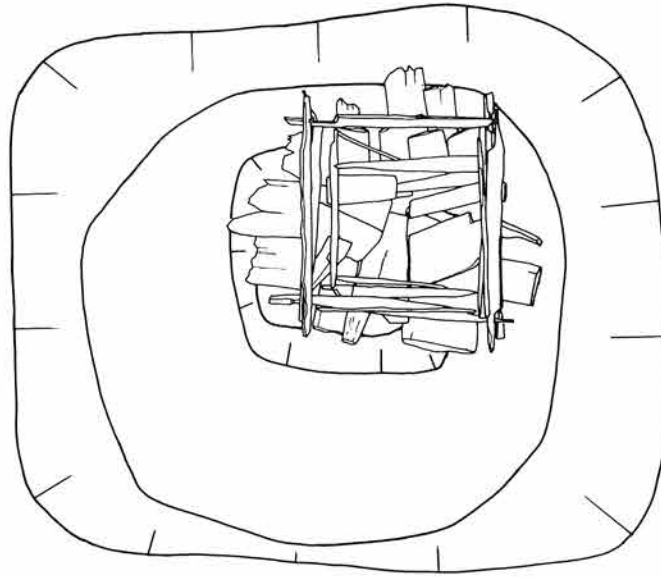
D 8区に位置する素掘りの井戸である。南西側の平面形で1/3、深さ1/2の範囲は、大正年間の櫛池川の河川改修以前の河道による浸食をうけ削りとられている。そのため、井戸の掘形は上部は推定で長軸3.3m・短軸2.7mで、底部は長軸1.4m・短軸40cmの楕円形となり、深さは1.8mである。また壁面中位に幅10~25cmの小段が2段認められる。この井戸は廃棄された際に底面から2段ある上の段付近まで地山土(茶褐色土)により埋めたてられている。その上層には、黒色土が上面まで堆積している。この層で、下層の地山土による埋め土に近い部分からは、長頸瓶(図版62-56)、杯(図版62-53)等の遺物が出土しており、井戸を廃棄し埋めたてた際に残ったくぼ地に、一括して投棄されたものと考えられる。時期的には井戸廃棄後から、さほど時間の経過はないものと推測される。

SB 4 (図版59・115)

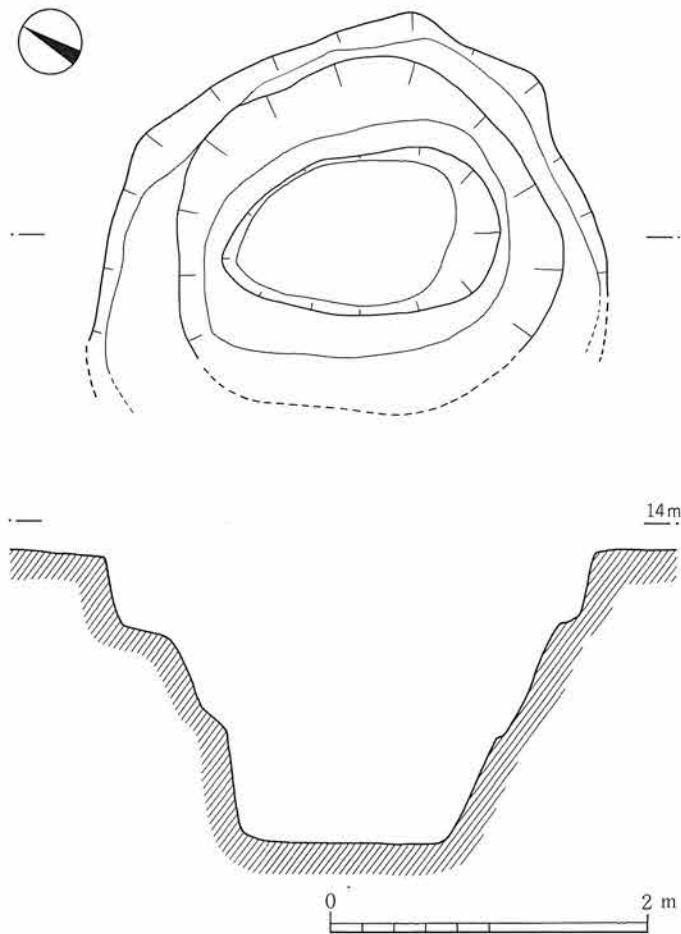
A期に属するSB 3と重複関係にある、東西3間(6.6m)×南北2間(5.0m)の東西棟建物(東偏15度)



第97図 SE 11井戸枠復原模式図



第98図 S E11実測図



第99図 SE12実測図

である。柱間寸法は桁行2.2m等間・梁間2.5m等間である。柱穴の掘形は西妻側中央の柱穴を除き、一辺50~80cmの方形で、深さ50~60cmと大きさは不揃いである。また西妻側中央の柱穴は一辺40cmの方形で、深さ30cmとなっている。西妻側中央の柱穴を除くすべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は30cmほどで比較的良好揃っている。掘形埋土は暗褐色土である。



SB 5 (図版59・116)

B・C 8区の南隅近くにある東西2間(5.0m)×南北1間(5.0m)の方形の建物(東偏14度)である。柱間寸法は、南・北側柱列で2.5m等間である。柱穴の掘形は一辺80~100cmの方形で深さ80~90cmと大きさはよく揃っている。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は30cmでよく揃っている。掘形埋土は暗褐色土である。



なお、この建物の周囲には、幅40cmほどで、深さ25cmの小溝4本がめぐる。

3) C 期

SB 6 A・B (図版60・116)

調査区の東隅D 8・9区に位置し、一部は調査区域外にのびる南北2間×東西2間の総柱建物と推定される。この建物は一回建て替えが行われ、その際に建物の方位・柱間寸法の手直しが見られる。新旧関係は柱穴の重複関係により確認された。ここでは、旧建物(SB 6 A)



と新建物（SB 6 B）とに分けて述べる。

SB 6 Aは、南北2間（6.0m）×東西2間（5.4m）の総柱建物（東偏24度）と推定されるが、東側柱列は南東隅の柱穴以外調査区域外のため不明である。柱間寸法は南北方向で3.0m等間、東西方向で2.7m等間である。柱穴の掘形は一辺60～70cmの方形で、深さ30～40cmと大きさはよく揃っている。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は25cm程で比較的良好に揃っている。掘形埋土は暗褐色土である。

SB 6 Bは南北2間（6.0m）×東西2間（4.8m）の総柱建物（東偏21度）と推定されるが、東側柱列は南東隅の柱穴以外調査区域外のため不明である。柱間寸法は南北方向で3.0m等間、東西方向で2.3m等間である。柱穴の掘形は一辺50～70cmの方形で、深さ60～70cmと大きさはよく揃っている。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は30cmほどで比較的良好に揃っている。掘形埋土は黒褐色土である。そのため、柱穴の重複関係は、SB 6 Aの掘形埋土が暗褐色土であるのと、埋土の差により明瞭に区別してとらえることができた。

SB 7（図版60・116）

SB 6の南に隣接し、D 9区にある東西2間（5.0m）×南北2間（4.8m）の方形に近い総柱建物（東偏25度）である。柱間寸法は東西方向で2.5m等間、南北方向で2.4m等間である。柱穴の掘形は一辺40～50cmの方形で、深さ50～70cmと大きさはよく揃っている。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は30cmほどで比較的良好に揃っている。掘形埋土は暗褐色土である。



この建物の東側柱列とSB 6 Aの東側柱列は、同一線上に並ぶものと推定される。

SB 8（図版61・116）

調査区域東隅のC・D・E10区に位置し、一部が調査区域外にのびる東西9間（20.8m）×南北4間（9.6m）の東西棟建物（東偏25度）で、四面に廂がつくものと推定される。また身舎の西側2間は総柱となっている。なお、この建物の西側は大きな攪乱を受け、柱穴掘形の底面付近のみが残存するものもある。桁行方向の柱間寸法は西廂の出は

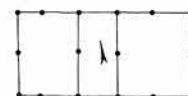


1.8m、東廂の出は2.0m、身舎の7間は2.1～2.7mと不揃いであるほか、柱筋も一直線上に並ばずかなりの歪みがある。梁間方向の柱間寸法は北廂の出は2.3m、南廂の出は2.0m、身舎の2間は2.6～2.7mである。これも柱筋に若干の歪みがある。柱穴の掘形は攪乱を受けたものを除くと、一辺70～100cmの方形で、深さ50～90cmと大きさも不揃いである。これらの柱穴のほとんどに柱痕跡が認められ、その径は25～30cmほどで比較的良好に揃っている。掘形埋土は暗褐色土であるほか、数個の柱穴では根固めに1個から数個の礫を用いている。北廂柱列の西第5柱穴埋土より灰釉陶器が出土している。

なお、ここでは身舎の西側2間に総柱を用いた建物と考えたが、東第8柱列までと西第1・2柱列を切りはなし、東側に四面廂の東西7間×南北4間の東西棟建物と西側に南北3間×東西1間の南北棟建物の2棟の建物が、併存した可能性も残しておきたい。

SB 9（図版61・116）

C・D10区でSB 8と重複関係にある、東西5間（11.8m）×南北2間（5.6m）の東西棟建物（東偏21度）で、馬通りをもつ。北東隅の柱穴は調査区域外のため検出されていない。この建物の中央部は大きな攪乱を受け、柱穴掘形の底面付近のみが残存するものもある。桁行の柱間寸法は西端の1間が1.5m、残る4間が2.5～2.7m



となっている。また梁間の柱間寸法は西妻側で2.8m等間であるが、東妻側では南隅の間のみが2.8mで、

ほかは不揃いである。柱穴の掘形は、攪乱を受けたものを除くと、一辺60～80cmの方形で、深さ50～55cmと比較的よく揃っている。これらの柱穴の6個に柱痕跡が認められ、その径は25～30cmほどで比較的よく揃っている。掘形埋土は黒褐色土であり、柱穴の重複関係からみて建物（SB 8）より新しい。また、柱筋は厳密には直交せず、かなり歪みがある。

なお、馬通り中央にある2個の柱穴を間仕切りと考えると、5間の中央の馬通りをはさんで、その東西に2間ずつの部屋がある建物とみることができる。

SB 10 (図版61・117)

調査区南隅C・D11区にある南北2間以上×東西3間(7.5m)の身舎の西側に廂をもつ南北棟建物(東偏24度)と推定される。しかし、北第3柱穴より南側は調査区域外へのびており全容は不明である。また、廂の北第2柱穴は攪乱により掘形底面にわずかに柱痕跡をとどめるのみで、規模等は不明である。柱間寸法は桁行・梁間・廂の出ともに2.5m等間である。柱穴の掘形は一辺50～60cmで、深さ50～60cmと大きさはよく揃っている。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、その径は20cmほどで比較的よく揃っている。掘形埋土は、暗褐色土である。



SE 13 (図版61・121, 第100図)

SB 8の南約4mのD10・11区の境に位置する素掘りの井戸である。掘形は上部で南北1.7m・東西1.9m、底部で南北75cm・東西90cmの隅丸方形で、深さ1.85mである。また、壁面中位に幅5～10cmの段がみられる。この井戸は、放棄後に埋め戻されたもので、埋め土より須恵器杯・瓶などが出土した。

SE 14 (図版61・121, 第100図)

SB 8の南東端の、E11区に位置する素掘りの井戸である。掘形は上部で南北2.25m・東西2.95m、底部で南北1.15m・東西1.6mの楕円形で、深さ2.4mである。また、壁面中位に段がみられ、東側では幅70cmを測る。この井戸は放棄された後に自然堆積によって埋没したものである。土層観察によると、有機質に富む黒色土層が4層認められた。この4層の中でも第7層及び第11層には、植物の根などが多くみられる。これは廃棄後に春から秋にかけて井戸内に繁茂した植物が、分解しきらずに残り、有機質に富んだ土壌を生成したものと考えられる。これから推察すれば、この井戸は廃棄後数年で埋没したことになる。なお、出土遺物には第4層と第6層から灰釉陶器、第10層から緑釉陶器及び須恵器などがみられるが、いずれもSB 8及びSB 9から廃棄されたものが流れこんだものと考えられる。

SE 15 (図版61・122, 第100図)

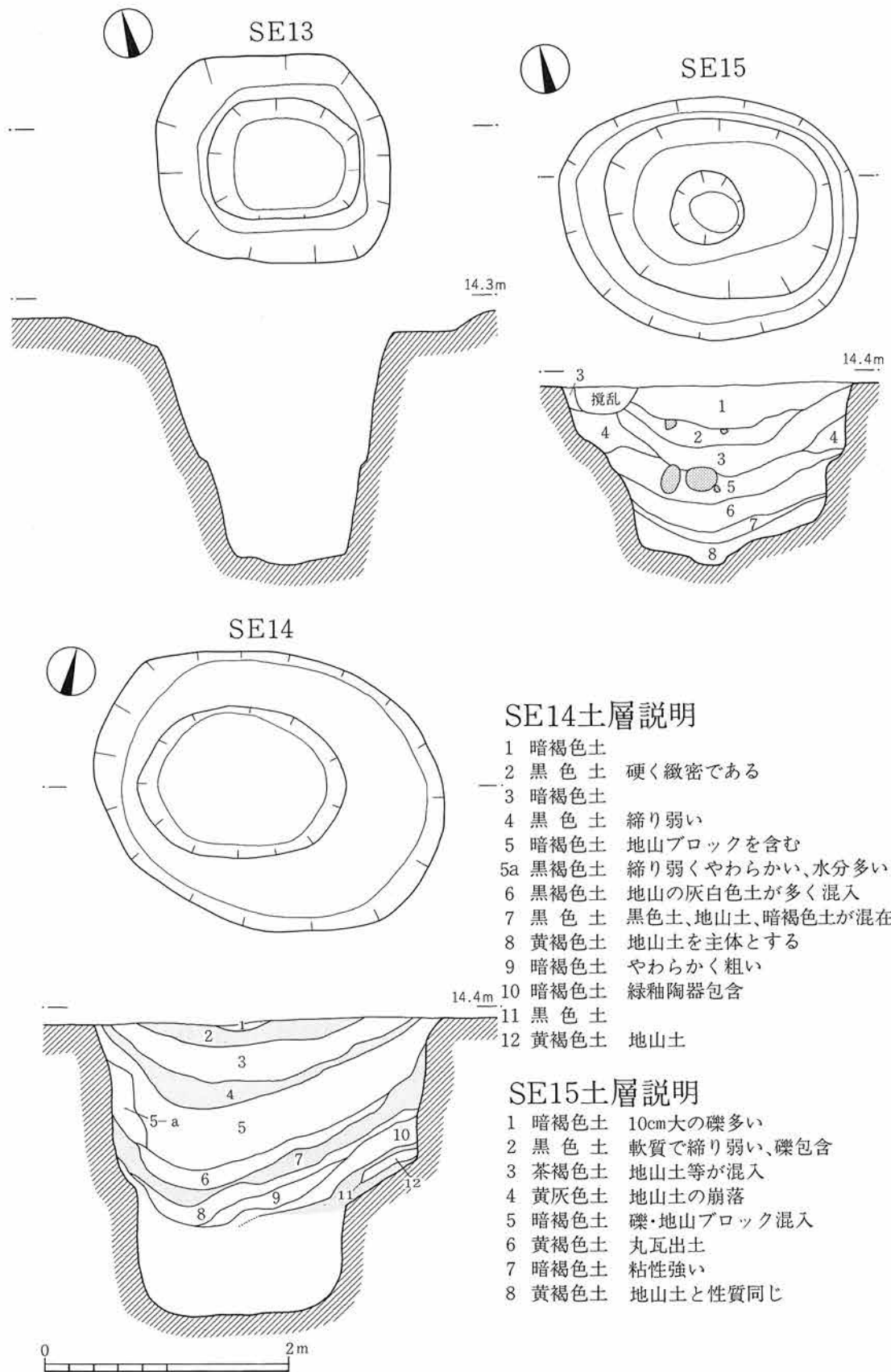
SE 14の南方約4mの、E11区に位置する素掘りの井戸である。掘形は、上部で南北2m・東西2.5m、底部で南北95cm・東西1.5mの楕円形で、さらに井戸中央部に直径60cmの円形の掘り込みをもつ。深さは1.8mである。また、壁面中位に幅5～25cmの段がみられる。この井戸の土層は細別できるが、地山土を多量に混入することや、大きな礫が投入されていることから、井戸放棄後に人為的に埋めたてられたものと考えられる。出土遺物は、埋め土の第6層より丸瓦、第7層より須恵器の瓶・甕・杯などが出土している。

SA 17 (図版59)

SK 32の北側、C7区の南隅に東西に並ぶ8個の柱穴列(東偏25度)である。柱間寸法は2.0～2.5mと一定しない。柱穴の掘形は径30～60cmの円形で、深さ40～60cmと不揃いであり、またこの時期の建物の柱穴よりかなり小さい。

SD 21 A・B (図版58・59・123, 第101図)

D7区からA6区にのびる東西溝で、東側は調査区域外へのび、北西側のA6区では旧櫛池川(第IV章



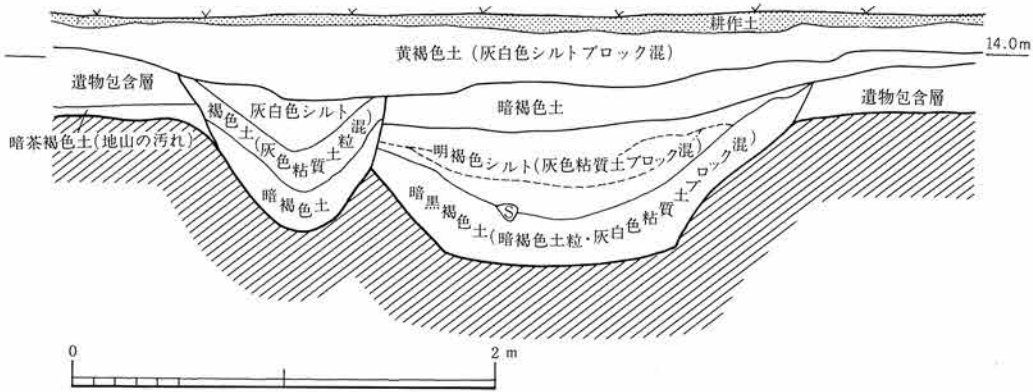
SE14土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 黒色土 硬く緻密である
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土 締り弱い
- 5 暗褐色土 地山ブロックを含む
- 5a 黒褐色土 締り弱くやわらかい、水分多い
- 6 黒褐色土 地山の灰白色土が多く混入
- 7 黒色土 黒色土、地山土、暗褐色土が混在
- 8 黄褐色土 地山土を主体とする
- 9 暗褐色土 やわらかく粗い
- 10 暗褐色土 緑釉陶器包含
- 11 黒色土
- 12 黄褐色土 地山土

SE15土層説明

- 1 暗褐色土 10cm大の礫多い
- 2 黒色土 軟質で締り弱い、礫包含
- 3 茶褐色土 地山土等が混入
- 4 黄灰色土 地山土の崩落
- 5 暗褐色土 礫・地山ブロック混入
- 6 黄褐色土 丸瓦出土
- 7 暗褐色土 粘性強い
- 8 黄褐色土 地山土と性質同じ

第100図 SE13・SE14・SE15実測図



第101図 SD 21A・B断面図

2の概要で述べた河川改修以前の櫛池川の河道とは異なる)の堆積層中に掘り込まれているが、北西調査区域端では耕作により削平され検出されなかった。この溝は断面観察により、一度埋没した後、掘り直しが行われ、溝の規模・方位に若干の手直しが認められる。ここでは旧溝 (SD 21A)と新溝 (SD 21B)とに分けて述べることにする。

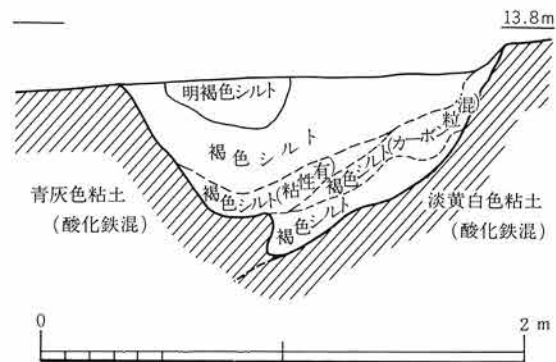
SD 21AはB 7区より東では幅2.3m・深さ65cmであるが、これより西側では次第に幅を狭め、北西端では幅1.5mとなる。溝の方位は、25度東偏しており、SB 8の棟通りと同一方位となっている。溝の底には包含層に近い粘質のある暗黒褐色土が厚さ20cmほど堆積していた。この層には瓦片及び須恵器など若干の遺物を含んでいた。この上層には水成堆積と考えられる明褐色シルトが厚さ40cmほど堆積していた。さらにその上層には遺跡のかんりの部分で包含層を覆っている洪水堆積により形成された暗褐色土が覆っている。また、この溝の掘削によりSB 2の柱穴の掘形の一部及びSK 31を壊わしている。

SD 21BはSD 21Aが洪水堆積による暗褐色土に覆われた後、ほぼ重複するような形で掘り直された溝で、幅1.0m・深さ60cmである。溝の方位はSD 21Aと若干異なり、21度東偏し、SB 9の棟通りと同一方位となっている。溝の底には上述した洪水堆積による暗褐色土とほぼ同質の層が厚さ20cmほど堆積していた。この層に遺物は認められない。この上層には褐色土及び水成堆積と考えられる灰白色シルトが厚さ40cmほど堆積している。さらにその上層には遺跡の大部分を覆っている洪水堆積により形成された黄褐色土が覆っている。

これら新旧両溝はC期の建物群の主体と考えられ、重複関係にあるSB 9とSB 8の棟通りとそれぞれに同一方位となるなど密接な関連性が見られる。このことはC期前半のSB 8を主体とする建物群ではSD 21Aにより、また、C期後半のSB 9を主体とする建物群ではSD 21Bにより、それぞれ北側の区画を行ったものと考えられる。

SD 22 (図版58・123, 第102図)

調査区の北西隅を南北に走る溝で、幅は1.5m・深さ65cmである。この溝は旧櫛池川の堆積層中に掘り込まれているが、北側では河川の浸食により切られて検出されなかった。また、南側のSD 21と交わる部分付近は耕作により削平され、検出されなかったもの



第102図 SD 22断面図

の、溝の方位は25度東偏しており、前述したSD 21 Aと直交することがほぼ確実と考えられる。また、SD 21 Aでも北西側のA 6区では、旧櫛池川の河川堆積層中に掘り込まれているなど、類似した状況にあることから、両者は同時期のものであると考える。溝の大部分はSD 21 Aとは異なり粘性の強い褐色シルトにより埋まっているが、上層に部分的であるが、SD 21 Aと同様の水成堆積による明褐色シルトが認められた。洪水堆積層により覆われるまでの間に自然堆積した下層の堆積層の違いは、周辺に掘り上げられた土が流れ込んで主体を形成したものと考えられるので、溝の掘り込まれた場所の土層の差と考えて差し支えないだろう。なお、出土遺物は全く見られなかった。

SK 32 (図版59)

調査区の中央東寄りのD 8区に位置する、東西4.8m・南北3.9mの不整ではあるもののほぼ長方形を呈する深さ20cmほどの土坑である。覆土は暗褐色土が一様に堆積していた。この層には若干の土師器・須恵器をふくんでいた。また、平面形は竪穴住居と類似した形状であるが、カマドは確認されなかったほか、検出された5個のピットは柱穴の配置と異なるため土坑と考えた。

4) その他の遺構

SX 33 (図版58)

調査区の北東側D 5区にある方形周溝状の遺構である。溝は幅50cm・深さ8cmで、東西3.5m・南北4.3mの範囲を巡っているが、南側中央の50cmの幅のみ溝は存在せず、陸橋状になっている。一見したところ、いわゆる方形周溝墓に類似するが、内部に土坑等の施設は検出されていない。出土遺物は見られなかったが、隣接するC 6区等で古式土師器(図版64-148・149)が出土している。

3 遺 物

下新町遺跡からは、分布の濃淡はあるものの、全域から遺物が出土しており、それらは土器類・瓦・井戸部材・木製品・石製品などに分けられる。出土遺物のうち土器類の出土が圧倒的に多く、瓦などは少量である。

遺物は、SK 31の一括遺物を除けば、遺構にともなったものは少なく、土器や瓦は大部分が包含層に混在して出土した。土器の分布状況は各建物付近に集中しているという特徴がある。これらの遺物のなかでとくに注目すべきものとしては、A期のSK 31の多量の遺物、C期のSB 8・9付近及びSE 14より集中的に出土した緑釉陶器・灰釉陶器があげられる。これらは遺構年代を想定する際の基準資料として大きな意味をもっている。

遺物の整理はなお未完了であるが、ここでは遺構にともなって出土した遺物を主としてとりあげ、包含層出土の遺物は、その代表的なものを抽出し、現在までに知ることができたことを述べる。

以下、節を5項に分け、土器類(奈良・平安時代の土師器・須恵器)・特殊土器類(施釉陶器・墨書土器)・瓦・井戸部材・その他の遺物(木製品・石製品・植物種子等・古式土師器・中世陶器・銭貨)の順に記載をする。

A 土器 (奈良・平安時代の土師器・須恵器)

遺物のなかでもっとも多くを占めるのは、奈良・平安時代の土師器・須恵器であって、SK 31の一括遺

物を除けば、その大部分は包含層からの出土である。土師器・須恵器の割合はほぼ同等であるが、土師器は磨滅がひどく、図化できないものが大半である。ほかには施釉陶器がおよそ40個体分ある。ここでは、遺構にともなって出土した遺物については、各遺構ごとに説明し、また、包含層出土の遺物及び建物の柱穴として抽出できなかったピット等から出土した遺物については、それぞれに説明を加える。施釉陶器及び墨書土器等の説明については項をあらためる。

1) 遺構内出土土器

a SK 31出土土器 (図版62・149)

本土坑からは若干のB期の遺物が見られるもののA期を代表すると考えられる多量の須恵器・土師器¹⁾が出土している。須恵器は248個体以上が数えられ、器種構成も多彩である。これに比べ土師器はいずれも小片で、磨滅したものが多く復原に堪えうるものはない。ただ、単純に器種のわかるものの個体数をみれば、須恵器のそれに匹敵するものと思われる。器種には無台杯・甕などがある。また、古式土師器の高杯脚部が1点出土している。このほかに墨書土器4点・刻線文土器1点・土錘3点が出土している。

須恵器 器種には無台杯・有台杯・杯蓋・皿・長頸瓶・短頸壺・横瓶がある。これを無台杯・有台杯・杯蓋・皿の供膳形態と、甕をはじめとする貯蔵形態に大別すると、前者が81%、後者が19%となる。また、供膳形態のうち杯のしめる割合が70%と高く、組成は単純である。なお、ここでは器形の推定できない貯蔵器類は記述しないことにする。

無台杯 (1~15) 1~14はいずれも底部が篋切りのものである。大別すると、2~4・7のように口径に対する器高の割合が小さいもの(A)と、5・6・9~13のように大きいもの(B)²⁾になる。Aは口径11.3~12.2cmと相対的に小さく、逆にBには12.6cm以上の大きいものが多い。しかし、調整技法には両者の間に大きな差異はみられず、いずれも篋切り後に外底面の一部もしくは全面を粗く撫でるが、篋切り痕が完全に消えるほど丁寧ではない。また、内外面はロクロ撫でによって調整されており、器面は滑らかである。ロクロの回転方向は明瞭にわかるものだけをみるとすべてが右回転で、左回転のものは1例もない。形態的な特徴をみると、2・4・7のように底部が若干突出し、篋切り痕を割合よく残すものがAだけにみられ、Bでは12のように外底面の中央でやや内彎するものを除いて、ほとんど平らになっている。また、底部から直線的にたちあがり、そのまま口縁部に至るもの(1・2・4・6・10~12)と、口縁部付近で外反しながら開くもの(3・5・9・13)があり、とくに5は強く外反する。いずれも口縁端部は丸い。胎土には、ほとんどが1~2mmの白色もしくは黒色微砂粒を含む。焼成は1・2・6・7を除いて良好で、灰色もしくは暗灰色を呈する。なお、7の外底面には、焼成後に施された2本の平行刻線文がみられる。

15は糸切りのものである。糸切りの後には撫でなどの調整を全く行っておらず、底部端外側の強い撫でによりできる稜によって、底部と体部が明瞭に区切られる。内外面はいずれも丁寧なロクロ撫でによって調整されている。形態は底部から口縁部にかけてゆるく内彎しながら大きく開き、端部は丸くおさまる。口径12.0cm・器高2.7cmでBに分類される。焼成は堅緻で、口縁部には重ね焼痕が残る。器壁はほかに比べ

1) 器種がわかるものの数量

り小さいものをA、大きいものをBとした。

2) 口径に対する器高の割合(口径÷器高)が、3.8よ

て薄い。

有台杯(16~35) 無台杯と同様に、篋切り(16~31・35)と糸切り(32~34)に分けられる。篋切りのものは、35を除いて器高3.5~4.0cmの中ですべておさまり、口径で若干のパラツキがみられる。最小は18の10.9cm、最大は31の14.0cmで、それぞれの間には急激な口径の変化は現れない。高台はいずれも篋切りの後に貼り付けられたもので、ロクロ撫でによって調整されている。ハの字状につくものが多く、概して低い。また、接地部は内端部のもの(18・20~26・28~31)が多く、外端部のもの(19・27)は少ない。高台付近の篋切り痕は、高台貼り付け後に一緒に撫でられて消えているか、もしくは不明瞭になっているものがほとんどであるが、外底面全体に撫でが施されているもの(17・20・25)もある。しかし、この場合でも篋切り痕を完全に消すまでには至っていない。調整は内外面ともロクロ撫でで、篋削りなどを施しているものはみられない。形態的には、底部からほぼ直線的にたちあがりそのまま口縁部端に至るものがほとんどであるが、20・25・28・29のように、口縁部端で外反して開くものがわずかにある。いずれも胎土は緻密で堅く焼きしまっており、灰色または暗灰色を呈するが、19は酸化焰焼成で赤褐色を呈する。35はコップ状の深い杯である。高台部から若干外へ張り出した後、ほとんど垂直にたちあがり、口縁部端でわずかに外反する。端部は撫でによって平らな面を作り出している。高台は篋切り後の貼り付けであるが、高台と底部端の間は篋状工具によって削りが施され、底部との境を明瞭にしている。外底面は、篋切り痕を残しながら割合丁寧な撫でが施されている。また、内外面はロクロ撫でで調整されており、体部外面中央部には2本の平行沈線が巡らされている。胎土・焼成とも良好で、暗灰色を呈する。なお、18の高台部には、焼成時のスサが付着している。

32~34は糸切りである。糸切りの後に、高台貼り付け部分にロクロ篋削りを施している。いずれも底部端と体部の境は、篋切りのものとは異なり明瞭な稜をもっている。また、内外面の調整はロクロ撫でによるが、内底部と体部内面の区切りは、撫でを行う前に篋によって整形されており、曲面を呈していない。胎土にはいずれも1~2mmの白色および黒色砂粒を含み、焼成は堅緻である。32・34は暗灰色、33は黒灰色を呈する。32は割れ口が底部端に沿っており、転用硯(第104図)と類似することや内底面が磨滅して滑らかになっていることから、これも硯に転用されていた可能性が考えられる。34は口径14.4cm・器高6.4cmと大形の杯で、高台内側の外底面には同心円の二重孤文が篋状工具によって施されている。

皿(36) 底部篋切り後に、不定方向の粗い撫でを施す。内外面ともロクロ撫でによって調整されている。胎土には1~2mmの白色砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。灰色を呈し、口縁部外面には重ね焼痕が残る。口径14.6cm・器高2.4cm。

杯蓋(37~40) 37は天井部篋切り後、粗い撫でにより調整されている。天井部中央に偏平な擬宝珠様のつまみを有する。天井部は中心に向ってくぼんでおり、外観はやや外反しながら下って端部に至る。口縁部は短く内傾して下り、端部は丸い。胎土には1~2mmの白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻で淡灰色を呈する。38~40はいずれも天井部をロクロ削りで調整している。つまみはすべて欠失している。38は天井内側半分がほぼ平らで、外下方へ向ってのびる。端部はやや内傾し、断面三角形を呈する。39は天井部からやや内彎気味に下り、そのまま口縁部に至る。端部は内傾し、鈍い稜をへて丸く屈曲する。40は天井部中央からほぼ直線的に下方へ下り、口縁部に至る。端部は丸味を帯び、天井外側と内面をロクロ撫でで調整する。

b SD 21出土土器 (図版62)

須恵器及び土師器が少量出土しているのみである。いずれも小片で特に土師器は磨滅が著しい。須恵器には、無台杯・有台杯・杯蓋・甕がみられるが、器形を復原しうるものは杯の2点(42・43)のみである。

無台杯(42) 底部篋切り後に、不定方向の粗い撫でを施す。底部と体部の境は鈍い稜をもち、やや内彎しながら口縁部に至り、ゆるく外反して開く。端部は丸い。内外面ともロクロ撫でによって調整している。胎土には1~2mmの白色砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。外面黒灰色、内面は灰色を呈する。口径12.8cm・器高3.5cm。

有台杯(43) 残存部が少ないため詳細は不明である。高台は低く、内端部で接地している。高台底部はやや丸味をもってふくらむ。底部から体部にかけて内彎気味にたちあがり、口縁部で外反して開く。胎土・焼成とも良好である。口径13.9cm・器高4.3cm。

c SE 11出土土器 (図版62・149)

SE 11では井戸使用時の土器はなく、埋め土の中から検出されたものである。出土土器は須恵器杯・杯蓋・瓶・甕、土師器杯、灰釉長頸瓶等がみられる。本井戸出土の土器は、SK 31の土器群に様相が似ている。44~47は須恵器杯である。44は厚手のつくりであり、外傾度が大きい。45は糸切り底で、体部内外面はロクロ撫でによって調整されている。46は井戸枠内埋め土の最下層より出土した。47は糸切り底をもった杯の中でも、もっとも大きい部類に属するものである。48は土師器杯である。底部は糸切りで、体部は内彎気味に大きくたちあがる。焼成は堅緻で、茶褐色を呈する。口径12.4cm・器高3.7cm。49は須恵器杯蓋では天井部内面に刻線文がある。51は壺肩部である。肩部と胴部の接合面で破損している。中央に直径2.3cmの孔がある。細頸がついたのであろう。また、半環状の把手が肩部より胴部についていたと思われる破損痕がある。本遺跡ではほかに例をみない器形である。52は井戸覆土第2層の上部から出土した灰釉長頸瓶の頸部小破片である。

d SK 32出土土器 (図版63)

覆土内から少量の土器が出土しているが、器形を復原できるものはほとんどない。須恵器は無台杯・有台杯・杯蓋・長頸瓶がみられ、土師器では無台杯・小形甕がある。

71は須恵器の長頸瓶である。頸部からやや内彎しながら肩に至り、明瞭な稜をもって胴部へ移行していくものである。肩上部には、篋状工具によって巾3mmの鋭い沈線が1本巡らされている。外面には、暗緑色の自然釉が厚くかかり調整は不明であるが、内面と同様にロクロ撫でと思われる。胎土には黒色斑点が多くみられ、焼成は堅緻で灰色を呈する。

72は土師器の小形甕である。やや張り出した胴部から頸部に至り、くの字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部は、ほぼ直角に短く内傾して丸くおさまる。内外面ともロクロ撫でによって、割合丁寧に仕上げられている。外面には炭化物の付着がみられ、煮沸具として用いられたことがわかる。胎土には1~2mmの黒色砂粒を少量含み、焼成は良好である。内面は淡褐色、外面は暗褐色を呈する。口径は11.2cmを測る。

e SE 13出土土器 (図版62)

遺物は埋め戻しの土から検出された。須恵器杯・壺・甕が多く、土師器も少量出土している。

須恵器杯57~59は器壁が薄く、外方に角度を大きくとる器形である。57は篋切り底で、ほかは不明である。60は糸切り底で、体部下半部を人為的に打ち欠いたような状況を呈している。器底部内面は滑らかになっている。このような特徴はSK 31の32のそれと同様であり、転用碗に使用された可能性がある。61は壺である。胴部最大幅24cm、頸部との接合部の内径は6.8cmである。肩部には半環状の把手が付くが、大きさからみて双耳壺にはならないと思われる。口縁部と胴部下半を欠損しているため全体を知り得ないが、本遺跡ではほかに類をみない特殊な器形である。

f SE 14出土土器 (図版63・66・149)

遺物はすべて、自然堆積層から出土している。出土土器は施釉陶器をはじめ、須恵器杯・蓋・壺・甕・土師器甕等の小破片が少量出土した。62・63は灰釉陶器である。62は椀底部である。63は瓶底部であり、径9.8cmの幅広の低い高台を貼り付けている。第4層と第6層から出土した破片が接合している。異なる層位出土の遺物が接合したことは、井戸の埋没が予想以上に早いことを傍証するものと思われる。64の緑釉陶器は第10層から出土した。190・193は甕胴部破片で、格子叩き目をもつ。

g SE 15出土土器 (図版63・66)

遺物はすべて埋め土の中から出土したもので、須恵器杯・蓋・長頸瓶・甕・丸瓦・土師器甕がある。66は須恵器杯であり、口径16.4cm・底径10.1cm・器高6.4cmで底部は篋切り底である。91・92と同様にこの器形の中ではもっとも大きい器種に属するものである。68は長頸瓶である。肩部との接合部で直径9.7cmを測る。径の割合に比して肩部高の低い器形に属するものである。この他に191など、甕胴部破片が多く出土している。これらは格子叩き目をもつ。

h SE 12出土土器 (図版62・149)

井戸覆土上部の自然堆積層より出土したものを図示した。須恵器杯・蓋・長頸瓶・甕・土師器甕が出土した。53は口径11.8cm、器高3.8cm、篋切りの杯である。口縁部はあまり開かない。56は口縁部が欠損するが、ほぼ完形の長頸瓶である。推定高25.5cm・胴部最大径17cm・高台径11cm。胴部は直径に対して器高が高く、全体に細身である。高台は外方にはらず、直立している。器面は全体にロクロ撫で調整が施される。55は長頸瓶頸部である。56と比較すると頸部の直径が小さく、小形である。

2) その他の土器

ここでは、その他の遺構及び包含層より出土した土器について、須恵器・土師器をそれぞれ器種別に概説する。

須恵器・土師器 (図版63・64・66・149)

須恵器

無台杯・有台杯・杯蓋・短頸壺蓋・高杯・甕・長頸瓶・短頸壺・横瓶・皿

無台杯 (73~79) 73~78はいずれも底部篋切りのもので、SK 31の無台杯Bに属するものである。口径11.2~12.6cmを測る。73・77は口径に対する底径の割合が小さく、底部から大きく開く形態をとる。器

壁は既して薄い。74～76・78は、底部から体部にかけてゆるやかに内彎もしくは直線的に口縁部に至るものである。調整は内外面ともロクロ撫でである。

79は底部から口縁部にかけて、直線的に大きく開く糸切りの杯である。調整は内外面ともロクロ撫で、割合丁寧に仕上げられている。

有台杯(80～93) いずれも篋切りである。口径11.6～17.8cm・器高3.7～6.0cmで、大別すると3つのグループに分類できる。80～83はSK 31の有台杯と同じ形態となる。84・85は口径の割に器高が低く、口縁部の外傾度も著しいものである。84は外底面に刻線文をもつ。内外面ともロクロ撫でを施す。91～93は口径15.9～17.5cm・器高5.7～6.0cmで、有台杯の中ではもっとも大形の器種である。底部から内彎気味にたちあがり、口縁部は外反して開く。91は体部内面に意識的に多くの条線を巡らしている。SK 31の中にも、同様の技法をもつもの(28)がある。

皿(94～97・109) 口径は13.2～16.8cmである。94～96は篋切りで、直斜的にたちあがり体部及び内面はロクロ撫でである。97は篋切り後切り後粗く撫でられている。体部は、やや内彎気味にたちあがる。109は高台をもつ皿と考えられる。口径15.1cm・器高2.1cmで、高台をもつ皿はとくにめずらしい器形である。赤褐色を呈し、一見土師器風であるが、焼成堅緻である。

杯蓋(98～107) 98～101は天井径14.4～15cm・器高2.1～2.3cm、器径に比べて器高が低く、つまみ径も大きいのが特徴である。99・102は糸切り痕が認められる。104～106は天井径16.2～18.1cm・器高3～4.1cmを測る。器高が高く外面は口縁部以外ロクロ削りである。107は径14.9cm。

短頸壺蓋(108) 口径13.7cm・天井径11.5cm、遺存部高3cm。内面は撫で調整、外面は自然釉が付着し調整は不明である。SK 31と遺構外出土の破片が接合している。

高杯(110) 脚部破片である。脚部径3.6cm、杯部中央に径8mmの小孔が穿たれる。

甕(111～114) いずれも口縁部破片で全体の器形は不明であるが、111～113は卵形の体部に外反する口縁部をつけたものと思われる。口径は30～50cmと大形のものである。114は口縁部からくの字状に屈曲し、ゆるくふくらむ胴部をもつものであろう。外面は格子叩き目、内面には同心円叩き目がみられる。

図版66-182～193で叩きの種類を示した。叩きの種類は、格子叩き目(182～191)と刻みを持った叩き目(192・193)に分類できる。前者はさらに叩き目の格子が大きいもの(184)と細かなものに分けることができる。当具の種類は1同心円(190・192) 2線状(186・189・191) 3格子目(182・193) 4放射状(184・187・188)に分類できる。これらの甕のうち190はB期に属すSE 14の自然堆積層より出土し、同じくB期のSE 15の埋め戻し土中より191が出土している。

長頸瓶(116～121) 116～118は口縁部、119～121は胴部から底部にかけての破片である。いずれも卵形の体部に外反する口縁部をつけるものと思われ、割合大形のものである。

短頸壺(115・122) 115はくの字状に屈曲した頸部から、やや内彎気味に口縁部に至り、端部は外側に突出した後に内傾して丸くおさまる。外面には格子叩き目を残す。口径16.2cm。122は肩の張ったイチジク形の器体に、やや外傾した短い口縁部をもつものである。口縁部端は平らな面を作り出している。肩部から頸部はロクロ削り、底部にかけては手持ちで左上から右下へ削りを施す。ほぼ全面に暗緑色及び透明な自然釉がかかる。焼きひずみが著しい。口径10.3cm・器高14.1cm。

横瓶(123・124) 123は頸部から口縁部にかけてである。端部はやや外反した後に、逆くの字状に短くたちあがる。口径9.1cm。124は胴部片であり、全体の器形はつかめない。外面は条線状叩き目及びカキ目を残し、内面は同心円の叩きを残す。いずれも暗灰色を呈し、同一個体の可能性もある。

土師器

磨滅の著しいものが多く、なおかつ小片のため器種を推定できるものが少ない。杯・椀・甕・小形甕・甗がみられる。

杯 (125~139) いずれも糸切り、ロクロ撫でのものである。口径は12.0~16.6cmで、底部から内彎気味に外上方へたちあがり、口縁部で外反して開くもの (126~128・130~132・134・135・137) と、口縁部が外反せずにそのまま端部に至るもの (125・129・133・136) がある。口縁部端は、いずれも丸くおさまる。底部と体部の境には明瞭な稜をもつものがほとんどであるが、126・128・131は稜をもたず、丸味をもって底部に至る。138はほかに比べて器壁が厚く、底部は強い撫でによって段を有するものである。胎土にはいずれも1~2mmの砂粒を含み、赤褐色もしくは淡褐色を呈する。139は黒色土師器である。体部から内彎してたちあがり、口縁部でやや外反して開く。口縁部端は丸くおさまる。体部外面は丁寧な篋磨きを施し、内面は滑沢を帯びている。胎土は緻密で焼成も良く、外面は赤褐色を呈する。口径14.5cm。

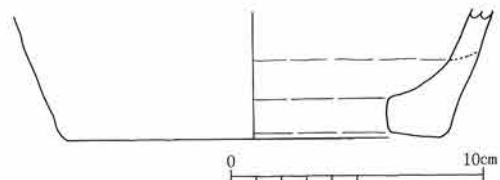
椀 (141~143) いずれも底部のみである。糸切りの後に、ハの字状に開く高い高台を付けており、端部は丸くおさまる。高台径7.4~7.8cmである。内外面とも割合丁寧なロクロ撫でを施す。胎土は緻密で、1~2mmの砂粒を少量含む。褐色もしくは赤褐色を呈する。

甕 (144・145) 144は頸部からやや内彎気味にたちあがり、口縁部端で丸くおさまる。胴部以下は、どのような形態をとるのか不明である。内外面ともロクロ撫で、胎土には1~3mmの砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。145は口縁部がくの字状に開く長胴・丸底の甕と思われる。胴部外面は格子叩き目、内面は同心円叩き目を残し、胴上部から口縁内側にかけて刷毛による撫でが施されている。胎土は緻密で、暗灰褐色を呈する。外面には炭化物の付着が著しい。

小形甕 (146・147) 146は胴部からはほぼ直線的にたちあがり、頸部から外傾して口縁部に至る。口径10.8cmで、赤褐色を呈する。147は底部糸切りでややふくらんだ胴部をもち、くの字状に外反して口縁部に至る。内外面ともロクロ撫で、器壁は薄い。胎土には1~2mmの砂粒を少量含み、褐色を呈する。口径9.8cm・器高9.8cmである。

甗 (第103図)

本遺跡で出土した唯一の甗である。底部の1/3が遺存する。底径14.8cm・孔径10.6cm。黄茶色を呈し砂粒を多く含む。底部より3cmのところを輪積痕が認められる。また、不明瞭であるが底部の環を作った上に粘土を重ねているらしい接合面もある。外面の器面調整は不明であるが、内面は粗い刷毛目が認められる。このような甗の類例は乏しいが、胎土からみて奈良時代の所産と考えられる。



第103図 遺構外出土土器

B 特殊土器類

1) 施釉陶器 (図版62・63・65・149・150)

緑釉陶器8点、灰釉陶器およそ30点と少量ではあるが、SD 21より南側の遺構及び包含層から出土し、SD 21より北側には全く見られない。いずれも破片であるが、その特徴を知ることができるものも多く、生産地及び年代決定をできるものを含む点で重要な資料である。緑釉陶器はC 7区出土の1点を除くとほ

かはすべて SE 14 及び SB 8・9 付近に限られる。また、灰釉陶器も SE 11 の埋土の 1 点、B～D 6～8 区より各 1・2 点ずつ出土したものを除くと SB 8・9 の柱穴より 1 点、SE 14 の 4 点、SE 15 の 1 点及び SB 8・9 付近の包含層出土の 15 点と、緑釉陶器と同様の集中傾向が見られる。

緑釉陶器 8 点あり、すべて破片であるが、器種はすべて碗 (64・166～169) と考えられる。遺構にともなうものとしては、SE 14 の第 10 層から出土の 1 点 (64) のみで、C 7 区より出土の 1 点 (168) 及び表面採集による 1 点 (169) を除くと、ほかはすべて SB 8・9 付近の C 区及び D 10 区の包含層より出土した。碗の特徴は 168 を除くすべてと同様である。胎土は軟質であるが緻密で灰白色を呈する。法量は、64 で口径 16.9cm・高台径 6.9cm・器高 6.2cm であり、ほかも近似した数値をとる。形態の特徴は 64 で口縁部がまっすぐたち、先端をまるくおさめる。体部はゆるく彎曲する。高台は低く、外側で接地し、内面に段をもつ輪高台³⁾である。成形技法は体部外面はロクロ削りの後に撫で調整、内面はロクロ撫で調整を施している。高台は底部を糸切りした後貼り付け、底部に撫で調整を施す。器全面に淡緑色の釉を刷毛塗りで施す。168 は胎土・法量及び成形技法は上述したものと同様であるが、形態の特徴は、口縁部がやや内彎し、先端が尖り気味であること及び器全面に淡緑色の釉を刷毛塗りで施しているものの淡緑褐色に変質している点⁴⁾は、上述したものと異なっている。

灰釉陶器 32 点あり、小破片のため器種の不明のものも多いが、碗 (153～159)・皿 (150～152)・長頸瓶 (52・63) がある。遺構にともなうものとしては、C 期の SE 14 より出土の 4 点 (62・63)・SE 15 の埋土より 1 点、建物 (SB 8) の柱穴より 1 点 (157) であり、B 期では SE 11 の埋土から出土の 1 点 (52) のみである。なお、63 は SE 14 の第 4 層と第 6 層から出土した 3 点が接合したものである。また、包含層及び建物の柱穴として抽出できなかったピットより出土の遺物は、B～D・6～8 区より出土のもの (150・151・158) 及び D 10 区を中心とする SB 8・9 付近より出土のもの (152～156・159～165) があり、緑釉陶器同様の分布の集中状況が認められる。なお、ここにあげなかった小破片もかなりあり、これも同様の分布状況となっている。

長頸瓶 (52) は SE 11 の埋土より出土したもので頸部の小破片である。胎土は緻密で灰白色を呈する。形態の特徴は肩部から口縁部にむかってゆるく外反し、器壁も次第に薄くなっている。成形技法は内外面ともロクロ撫でによる調整を施す。灰釉は内外面ともすべてに比較的厚く施す。

長頸瓶 (63) は高台から胴部下半の破片で、高台径は 9.2cm である。胎土は緻密で灰白色を呈する。高台は幅 1.2cm の輪高台で外側で接地する。胴部はゆるく彎曲する。成形技法は、内面がロクロ撫で、外面ロクロ削りにより調整を施す。灰釉は残存部には施されていないが、頸部等へ施釉した際のたれと思われる灰釉が、内外面とも付着している。

皿 は器形の明らかな 3 点 (150・151・152) について見ると 150 は D 7 22) 区、151 は C 7 (7) 区、152 は C 10 (15) 区の包含層より出土したものである。152 の特徴をあげると、胎土は緻密であり灰色を呈する。法量は口径 13.4cm・高台径 6.0cm・器高 3.0cm である。形態の特徴は口縁部はゆるく外反し、先端をまるくおさめる。体部はゆるく彎曲する。高台はやや低く、幅が広がり、内面下半がやや内彎する。接地面は平坦面となる。成形技法は内外面ともロクロ撫で、とくに口縁部外面は強い撫で調整を施す。灰釉は漬け掛けで外面体部上半及び見込みを除いた内面に施す。なお、152 は転用硯に再利用されている。ほかの 2 点 (150・151) も、口径がそれぞれ 13.0cm・13.6cm と法量にばらつきはあるものの、ほかの特徴は 152 と類

3) いわゆる近江系である。

みられる。

4) 器面の撫で調整痕のくぼみに、点々と淡緑色の釉が

似している。

椀は、器形の明らかな7点について施釉法の違いにより刷毛塗りのもの(154・157)と漬け掛けのもの(153・155・156・158・159)とに分類し、それぞれについて説明を加える。

刷毛塗りのものでは154はD10区のSB 8の南側に位置するピットより出土したものである。胎土は緻密であり灰色を呈する。法量は口径14.0cm・高台径6.4cm・器高4.4cmである。形態の特徴は口縁部はわずかに外反し、先端を丸くおさめ、器壁はきわめて薄手である。体部はゆるく彎曲する。高台は比較的細長く、外に開き、内面下半が内彎し、外面下端が内傾し、断面が三日月形となる。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けで、底部は撫で調整を施す。なお、見込みには直接の重ね焼き痕が見られる。灰釉は刷毛塗りにより、内外面とも体部上半に施す。157はSB 8の柱穴より出土したものである。胎土は緻密であり灰色を呈する。法量は口径13.4cm・高台径6.7cm・器高4.4cmである。形態の特徴は口縁部は先端を外反させ、丸くおさめ、器壁はきわめて薄手である。体部はゆるく彎曲する。高台は比較的細長く、内面下半が内彎し、外面下端が内傾し、断面は三日月形となる。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けで、底部は撫で調整を施す。なお、見込みには直接の重ね焼き痕が見られる。灰釉は刷毛塗りにより、外面体部上半及び見込みを除いた内面に施す。

次に施釉法が漬け掛けのものについて見ると、153はD 9 (22) 区、155はD10 (3) 区、156はD10 (23) 区、158はB 6 (12) 区、159はD10 (24) 区の、いずれも包含層より出土したものである。155の特徴をあげると、胎土は緻密であり灰色を呈する。法量は口径14.2cm・高台径6.7cm・器高4.3cmである。形態の特徴は口縁部は外反し、先端をまるくおさめる。体部はゆるく彎曲する。高台は比較的細長く、外へ開き、内面下半がゆるく内彎し、外面下端が内傾し、断面は三日月形に近い。成形技法は内外面ともロクロ撫での調整を施す。高台は貼り付けで、底部は撫で調整を施す。なお、見込みに直接の重ね焼き痕が見られる。灰釉は漬け掛けにより、内外面とも体部上半に施す。ほかの4点も、法量では、153は口径13.6cm・156は高台径6.8cm・158は口径14.0cm・159は口径15.4cmと、ばらつきが見られるものの、ほかの特徴は155と類似している。

その他の灰釉陶器では、高台付近のみの破片のもの(62・160~165)がある。SE 14より出土したもの(62)を除くと、160はD11 (14) 区、161はD11 (3) 区、162はD10 (3) 区、163はD 9 (23) 区、164はD10 (23) 区、165はD10 (20) 区とがいずれも包含層より出土したものである。ここでは、それぞれについて簡単にふれ、体部下半の彎曲の具合及び上述したものの特徴の共通性から、器種を推定する。

まず、62は胎土は緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台はやや低く、幅が広がり、内面下半がやや内彎し、外面下端が内傾し、断面は三日月形に近い。高台径は5.8cmである。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。灰釉は漬け掛けにより、内外面とも体部上半に施す。このような特徴から、62は椀と推定される。

160は胎土は緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台の高さがやや低いものの、内面下半がやや内彎し、外面下端が内傾し、断面が三日月形に近い。高台径は5.8cmである。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。灰釉は漬け掛けにより体部上半に施す。このような特徴から、160は椀と推定される。

161は胎土が緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台の高さがやや低く、幅が広がり、内面下半がわずかに内彎する。高台径は6.0cmである。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。灰釉は漬け掛けにより、体部上半に施す。このような特徴は上述した皿のそれに類似する。

162は胎土は緻密であり灰色を呈する。形態の特徴は高台は比較的細長く、外に開き、内面下半が内彎する。高台径は7.7cmである。成形技法は高台は貼付けで、見込みはロクロ撫で調整を施す。灰釉は見込みに一筋施されている。しかし、破片が小さいため施釉法は不明である。このような特徴から、162は椀と推定される。

163は、胎土は緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台は比較的細く、断面長方形である。高台径は6.8cmである。体部はゆるく彎曲する。成形技法は、内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。なお、見込みにトチンを用いた重ね焼き痕が見られる。灰釉は刷毛塗りにより、底部、高台内面を除いた部分すべてに、比較的厚く施す。このような特徴と体部の彎曲の具合からみて皿と考えられる。

164は胎土は緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台は比較的細長く、外に開き、内面下半がわずかに内彎し、外面下端が内傾し、断面は三日月形となる。高台径は、7.3cmである。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。なお、見込みに直接に重ね焼き痕が見られる。灰釉は刷毛塗りにより、見込みを含む内面に施す。これらの特徴から164は、椀と考えられる。

165は胎土は緻密であり灰白色を呈する。形態の特徴は高台は内面がわずかに内彎しているが、断面は長方形に近い。高台径は6.0cmである。成形技法は内外面ともロクロ撫で調整を施す。高台は貼り付けである。灰釉は刷毛塗りにより、見込みを含む内面全体に施す。165はこのような特徴と、とくに体部の彎曲の具合から皿と考えられる。これに比較的類似しているものに163がある。

以上のように、下新町遺跡の灰釉陶器は椀と皿を主体としている。これらは、形態の特徴及び施釉法の違い等により、それぞれ2種類に分類できる。椀では、施釉法が刷毛塗りで、とくに高台の特徴が比較的細長く、断面が三日月形となるもの(154・157・164)とに、施釉法が漬け掛けで、高台の特徴が比較的細長く、断面が三日月形に近いもの(62・153・155・156・158~160・162)とに分類できる。皿でも同様に、施釉法が刷毛塗りで、高台が比較的細く、断面長方形のもの(163・165)と施釉法が漬け掛けで、高台がやや低く、幅の広いもの(150~152・161)とに分類できる。

2) 墨書土器 (図版65・150)

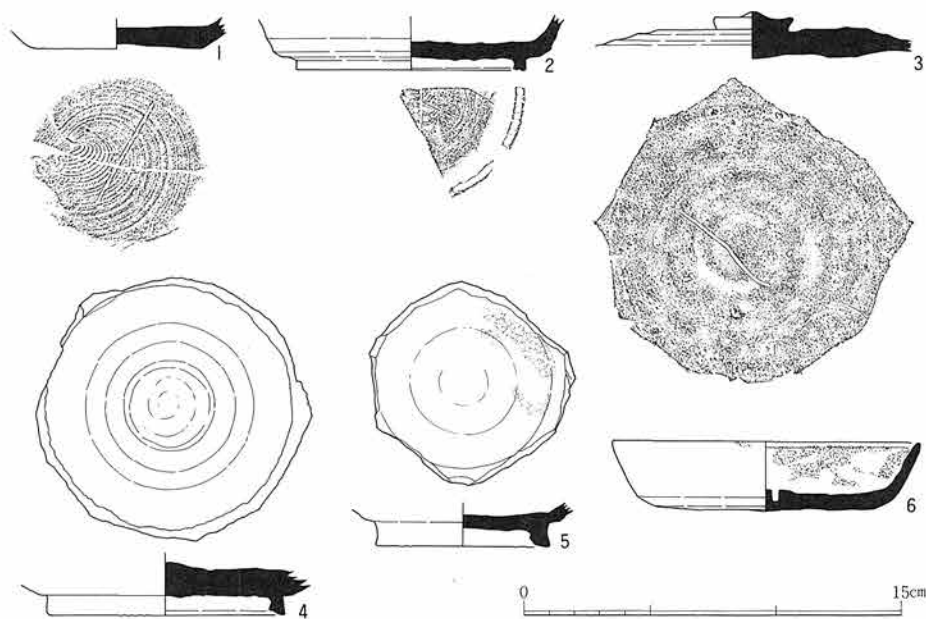
本遺跡出土の墨書土器は全部で12点ある(第12表)。このうち文字としての形がわかるのは「物」「溜」「上」「東家」「内」の5点である。「物」は偏の部分に墨のにじみがあり、今一つ明瞭でない部分もあるが「物」と読んでさしつかえないと思われる。全体にやや扁平であることからすれば、これで完結しているわけではなく、脚の部分があったのかも知れない。「溜」は傍の上部に欠けがあり同時に墨も薄れている。また土器の半分が欠失しているために下部も「目」で止まるのか「貝」となるのか不明であるが、文字全体の感

第12表 下新町遺跡出土の墨書土器

No.	文字	土器の種類・器種・記載位置	出土地点ないし遺構	No.	文字	土器の種類・器種・記載位置	出土地点ないし遺構
172	東家	須恵器・杯・底外	SK31	174	上	須恵器・杯・口縁外	E10区
176	夂	須恵器・杯・底外	D7(7)区	171	溜	須恵器・杯・底外	SK31
177	ハ	須恵器・杯・底外	B8区ピット4	173	ソ	須恵器・杯・口縁外	SA17
175	ナ	須恵器・杯・底外	SK32	170	物	須恵器・杯・底外	SK31
180	歹	須恵器・蓋・頂外	E1区	179	丌(記号か)	須恵器・杯・底	D11(5)区
181	𠂔	須恵器・杯・口縁外	C8・D9区ピット35	178	内	須恵器・杯・底外	SK31

じからすれば「濱」であったのが欠けたり薄れたりしたものと思われる。偏の方も薄れているために「𠂔」（さんずい）とも「土」（つちへん）とも読める。しかし「濱」に「土」のつく文字はなく、元来は「濱」であったとみるのがもっとも自然であろう。「上」は1画目が強く反っているものの、「上」以外に読みようがない。「東家」は篋切りのため中心部が不明瞭になっている。このため「冢」の冠が「冫」（わかんむり）であったか「ウ」（うかんむり）であったかは定かでない。ここでは点を認めることができないので、「冫」としておく。「内」も下部を欠失しているが、そのまま読んでおいて良いと思われる。

これらの文字が人名・地名・所属名などのうちどれに属すのかは不明である。「上」の類例を求めると県内では曾根遺跡で「上殿」と書かれた墨書土器が出土している。⁵⁾「曾根遺跡Ⅰ」の報告書にみえる『上殿』の二字はこの遺跡が単なる農民の集落址ではないことを示しており、或いは郡衙との関係を暗示するものかも知れない⁶⁾といわれるが、本遺跡の「上」がそうした意味をもつものかどうかはわからない。ただ「東家」は何らかの建物の存在を連想させる。通常、東屋と書く場合は「あずまや」と読み、「①四方へ檐（のき）を葺きおろした家屋。寄棟あるいは入母屋造。②四方の柱だけで、壁がなく四方葺きおろしの屋根の小屋。庭園などの休息所とする。亭（ちん）」⁷⁾といった意味がある。奈良平安時代に東屋と称される建物があったことは『寧楽遺文』『平安遺文』に引く文書によって知りうる。宝亀3年（772）の「大和国春日莊券」には檜皮葺敷屋・檜皮葺倉・草葺倉とともに草葺東屋が1軒あったことが記されている。天平勝宝8年（756）の「東大寺越前国桑原庄券第二田地雑物」にも長さ3丈3尺5寸広さ1丈7尺6寸の前後に廂のついた草葺板敷の東屋1軒のほか、長さ2丈7尺広さ1丈5尺の草葺東屋1軒があったことが記されている。さらに長元元年（1028）の「上野国交替実録帳」からも郡家に所属する建物で東屋と称される建物があったことを知り得る。今、東家の用例をほかに見出すことができないために速断はできないが、東家が東屋に通ずると考えれば庄家・郡家、ひいては国府に所属する建物を意味するとみることができる。



第104図 その他の特殊土器

5) 『曾根遺跡Ⅰ』前掲

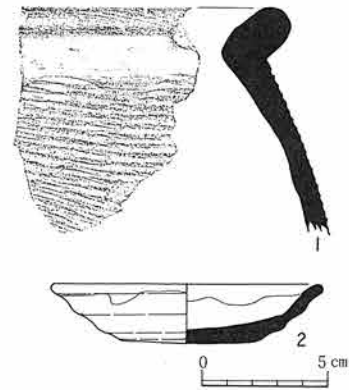
7) 新村 出編『広辞苑』第2版 岩波書店 1971

6) 山田英雄「文字について」『曾根遺跡Ⅱ』前掲

そして本遺跡の遺構に即して考えれば、「物」「濱」「東家」「内」が出土したSK 31がSB 1・SB 2・SB 3と関連するものであると思われることから、これらの文字はそこに住んだ人の名あるいは建物を表現したとも考えられる。

3) その他

刻線文土器(第104図1~3) すべて須恵器で、1は糸切り無台杯の外底面に、長さ4.7cmの直線を焼成前に刻んだものである。2は有台杯の外底面に、「×」を刻む。内底面及び断面には、黒褐色のピッチ様のものが付着している。3は杯蓋の内面に、長さ4.5cmの直線を刻んだものである。



第105図 中世陶器

転用硯(第104図4・5) いずれも須恵器有台杯の内底面を利用したものである。底部端に沿って人為的に打ち欠かれており、平面形を丸く整えている。使用面は良く擦られており、滑らかである。5には墨が一部残る。

灯火器(第104図6) 底部糸切りの須恵器無台杯を利用したものである。内外面はロクロ撫でを施し、内底面には、焼成前に穿ったと思われる穴(径2.5mm・深さ5mm)がある。内面には炭化物の付着が著しい。口径12.7cmで、器高は2.7cmと浅い。

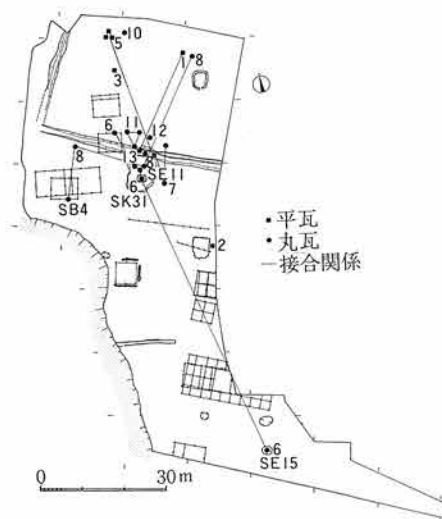
古式土師器(図版62-41, 図版64-148・149) 本遺跡では3個体出土している。いずれも高杯の脚部である。41はSK 31から出土した。杯部と裾部を欠いている。脚部が膨らむ特徴などから5世紀ころのものかと考えられる。148も杯部と裾部を欠いている。透かしが2個一対で向きあって穿たれる。149も杯部と裾部を欠いている。脚は膨らみをもたず直線的に成形される。下位に透かしが2個対称に穿たれる。

中世陶器(第105図1・2) 1は珠洲焼甕の口縁部破片である。2は瀬戸焼の小皿である。D 5(3)区で洪水堆積層(黄褐色土)の直下から出土した。口径10.7cm・器高2.3cm。口縁部から内面にかけてはロクロ撫でがみられる。また、内面は使用により撫での跡がわからないほどに滑らかである。底部は糸切りである。口縁部内側1cmほどと外面の一部に淡黄緑色の灰釉が施される。

C 瓦(図版67・151)

下新町遺跡では、点数が少なく、いずれも小片であるが、丸瓦・平瓦が見られる。これらは、調査区全体に点在するが、C 7区のSK 31・SE 11からは比較的多く出土している。また、丸瓦(6)はSE 11とSE 15の埋土より出土した破片が接合したもので、このような例は、ほかにも何点か認められた。なお、量的には丸瓦が平瓦よりわずかに多い。

丸瓦(6~13) 丸瓦は17片、8個体出土した。全容を推定できるものには6がある。6は無段の行基式の丸瓦であるが、広端部を欠損する。現存長29cm・幅15cmを測る。直径16cm前後の円筒を半割したものである。凸面は撫でが



第106図 瓦分布図

不十分なため、叩き目がわずかに残る。平行叩き目を円弧状に反復して叩いたのち、削り・横撫で調整を施している。狭端部は幅1.0~1.5cm、2条にわたって強く横撫でされ、段をなす。狭端右隅は斜位に篋削りの面取りを施す。側面は截面を篋削りし、凸面側は面取る。凹面は糸切り痕が縦にのこり、布目圧痕がつく。側面の凹面には、布目痕を残すくぼみが残る、分割の際の棒状圧痕と考えられる。布目は3cm×3cmの範囲に20本×23本を数え、かなり細かい。狭端部凹面は横篋削りされる。

ほかの丸瓦はいずれも凸面は叩き後に、丁寧に縦位の篋削りを施し、さらに撫でて叩きを丁寧に消している。側面は篋削りし、凹面・凸面は面取りを施す。凹面にはほとんどのものに不鮮明ながら糸切り痕が残り、上に布目圧痕がつく。布目は6と同様に細かいものと、3cm×3cmに15本~18本前後と粗いものがある。端部は横撫でによる面取りがなされる。厚さは1.5~2.4cmの間に集中する傾向にある。9のように厚さ0.8cm前後の粘土板巻き合せ痕を有するものがあり、凹面糸切り痕の存在から、第1次成形は粘土板巻きつけ技法によるものと考えられる。胎土には黒色粒をわずかに混入し、色調は青灰色を呈する。

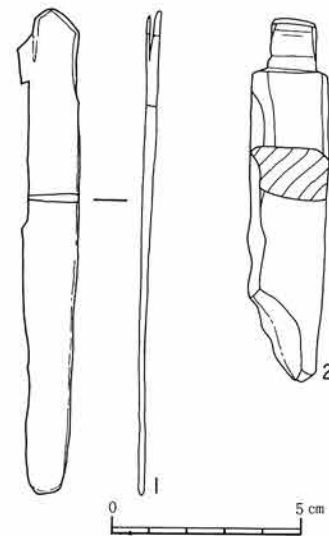
平瓦(1~4) 平瓦は6片5個体出土した。いずれも小片であり、全容を推定できるものはない。1は広端隅部と狭端隅部である。接合はしないが、調整・胎土・焼成などの特徴から同一個体と考えられる。凹面は縦位の糸切り痕と布目圧痕を残す。糸数は3cm×3cm内に24本×24本を数え、布目は細かい。向橋窯跡・今池遺跡出土例と類似する。布目圧痕と一部撫でて調整している。狭端部は指により撫でて面取りを施す。広端部は篋削りで面取りする。側面は凹面に対し、直角に近い角度で篋削りし、凸面・凹面の2面取りを行う。凸面は側縁にほぼ平行して縄巻き板により叩きしめる。叩きしめは左から順に施す。叩き原体は燃糸右上り左下りL(1段)である。縄叩きは狭端から広端まで連続するものと思われる。厚さは3cm前後で厚手である。凹面は黒色自然釉がかかり、凸面は灰色を呈す。胎土には白色粒がわずかに混入し、焼成は硬質である。

ほかの平瓦はいずれも細片であるが、凹面は20~24本の糸数をかぞえる細かい布目痕を残す。布目痕下には、わずかに斜位の糸切り痕が認められる。広端部凹面は篋削りによる面取りを施す。2~4は2.5cm以上の厚手なつくりを呈する。凸面は、縄目叩きが側縁にほぼ平行して叩きしめられ、今池遺跡の例と類似する。5は端部凸面を横撫でにより丸く仕上げられている。色調は灰色を呈し、5には濃緑色の自然釉が付着する。胎土には白色粒がわずかに混入し、焼成は硬質である。

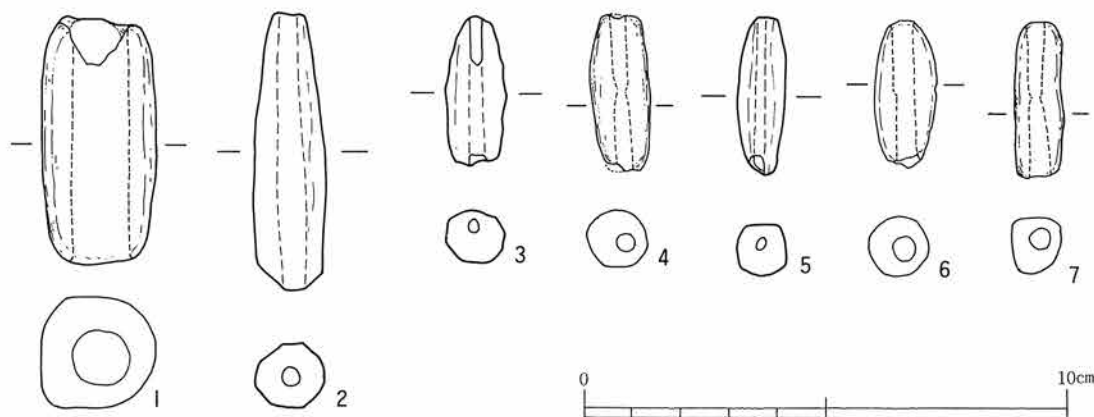
瓦は全体的にみて、表面は磨耗をうけており、特徴的には今池遺跡の例と類似する。

D 井戸梓部材(図版68・153)

1~6・11・13・14は縦板材である。1は長さ112.3cm・幅14cm・厚さ5.0cm。表面に長さ3.5cmの工具痕がみられ、下端から3分の1位の箇所には7.5cm×5.8cmの孔が穿たれている。2は長さ124cm・幅20.8cm・厚さ2.0cm。下端は一面を削り尖らせている。上端の一部に切断面が残っていることからほかの縦板材を含め、使用時のおよその長さが予想できる。3は長さ120.6cm・幅16.5cm・厚さ2.7cm。下端近くに1.3cm×1.0cmの孔が穿たれている。1・3は転用材である。5・6は工具痕がある。6は斧等で切断したものであろう。縦板材の木取りは板目



第107図 SE11出土木製品



第108図 土 錘

材が主である。12は木枠底をつくるために斜めに設置された板材である。長さ47cm・幅11.5cm・厚さ1.6cmである。底部に用いられたほかの用材も規格性をもつ。木取りは柵目板を用いるのが主である。

7～10は木枠の横組み材である。7～9は両欠きの板である。9は長さ80cm・幅21.5cm・厚さ2.5cm。表面は風化が進んでいるが、手斧痕が部分的に残っている。10は最下段の用材である。長さ79.5cm・幅13.5cm・厚さ3.2cmである。

井戸枠用材は1・3のように明らかに転用材とわかるものがあるが、ほかの用材も今池遺跡C地区のSE 20の例などからみて、転用材を使用した可能性が強い。



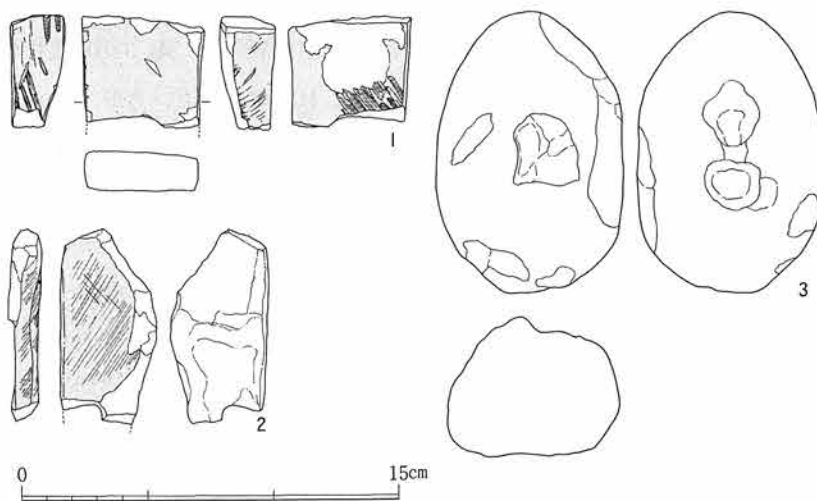
第109図 銭貨
1:1

E その他の遺物

土器・瓦・井戸枠部材以外の遺物をその他の遺物として扱った。この中には、木製品・土錘・銭貨・砥石・凹石・井戸出土種子がある。

木製品(第107図・図版152) 1はSE 11の木枠内より出土した斎串である。長さ12.8cm・幅1.1cmで、板目材の薄板の頭部を三角形につくり、もう一端を丸く削り出している。頭部を2枚に割り、側面に切り込みがある。2は遺存長9.6cm・幅2.0cm・厚さ1.3cmの用途不明木製品である。一端に柄が作られている。

土錘(第108図・図版152) SK 31より4本(2～5)、遺構外より3本(1・6・7)出土している。長さ2.9～5.6cmで、最大径は1.0～2.4cmである。1・2・5は棒状のものに粘土塊をまきつけた後に、撫でに



第110図 砥石・凹石

よって成形したものである。3・4・6・7は粘土塊を成形・調整した後に、棒状工具で両端から穿孔したもので、中央部で孔のくい違いが観察される。3は孔を開け始めたものの、途中でやめており、貫通していない。また、これらは穿孔の際の指の跡が明瞭に残る。それぞれの重量は、1が24.3g、2が10.4g、3が3.6g、4が4.3g、5が3.7g、6が4.0g、7が3.3gである。

銭貨(第109図) D5(3)区から3枚の銭貨が、瀬戸焼の小皿とともに出土している。1枚は割れて細片化している。第109図は種類のわかる唯一のもので永楽通宝である。直径2.5cmで、中央の穴は一片0.6cmである。もう一枚は磨滅が著しく□□元宝と読めるのみである。

砥石(第110図1・2・図版152) 1はD10(14)区から出土したものである。表裏側面いずれにも研磨面を有し、裏・側面には幅1.5mm前後の断面U字形の浅い擦溝が走る。石材は砂岩である。2はSB6Bの南辺の中央の柱穴から出土した。研磨面は表・側面に残り、ほかは破損している。石材は粘板岩である。

凹石(第110図3・図版152) SE11井戸枠内礫敷中より出土している。くぼみは表・裏面ともに認められる。石材は輝石安山岩である。

種子(図版152) SE11井戸枠内泥土から、モモ・ウメなどの植物の種子が多く出土している。ほかには炭化米などがみられる。

4 小 結

A 遺構の時期区分

下新町遺跡で検出された遺構には、建物をはじめ、井戸・溝・土坑などがある。これらは建物を中心として、その重複関係はもとより、配置状況及び方位・柱穴の掘形等の類似性から、A期・B期及びC期の3群に分けることができた。この3群の年代については、それぞれの遺構などからの出土遺物及び今池遺跡等の出土遺物の対比から、A期は奈良時代後半(8世紀後半)、B期は平安時代前半(9世紀後半を中心とする時期)、C期は平安時代中頃(10世紀後半を中心とする時期)である。なおC期は建物の建て替え、溝の掘り直し等重複関係が見られ、前半と後半の2小期に細分される。ここでは、各時期の遺構の配置状況及びC期の遺構の変遷について述べてみたい。

A期 A期で注目される遺構はSB3を主体とする3棟の建物である。これらはいずれも東偏9度の方位をとっているほか、SB1の両妻柱列のいずれかの延長線上にSB2・SB3の東妻柱列が位置するという、きわめて規則性の強い配置状況をとっている。また、柱穴の掘形も、方形(長方形も含む)で一定しており、各建物ごとに規模が一定している。重複関係では、SK31及びSB2はC期のSD21に切られている。また、SK31はB期のSE11にも切られている。この時期の年代を決定する際の基準となる資料がSK31より出土し、その中に「東家」という建物名をさしたと思われる墨書土器が含まれる。このように、建物の配置の規則性や注目すべき出土遺物から、一般集落とは異なる性格の遺跡ではないかとの推測がなされたが、西側が旧櫛池川の流路変遷により削りとられているため、全容の把握には至らなかった。

B期 この時期は、出土遺物から見ればA期とC期の中間に位置づけられる。当期の建物SB4・SB5は方位が東偏15度であること、柱穴の掘形が方形で一定していることなど考え合わせると、A期・C期のいずれとも若干異なった特徴が見られる。なお、井戸SE12はSB5に隣接して掘り込まれている。さらにSE11は、A期のSK31の覆土中に掘りこまれている。

C期 C期の遺構はSD 21 AとSD 21 Bの重複関係で顕著に見られるように、一度洪水により埋まった後、再度同位置に若干の方向の手直しをし掘り直されている。建物の一部にも溝と同様の方向の手直しを加えて重複するものが認められることから、建物の建て替えは洪水による被害によるものと考え、洪水前をC期前半・洪水後をC期後半とした。なお、出土遺物には時間差がほとんどないことから、同地で継続して営みがあったことを示している。さらに、同期の年代決定は、SB 8・SB 9付近でとくに集中して出土した緑釉陶器・灰釉陶器により行った。

C期前半は、SD 21 A・SD 22及びSA 17により北側及び西側を区画し、建物・井戸等を配置する。とくに建物は、9間×4間の規模の大きな四面廂のSB 8¹⁾を主体として、SB 6 A・SB 7・SB 10より構成される。これらは、いずれも東偏24～25度の方位をとり、区画する溝なども一致するもので、強い規則性が見られる。柱穴の掘形は方形ではあるが、規模にばらつきが多く一定しない。また、これらの建物は規模の大きな四面廂の建物SB 8・総柱の建物SB 6 A・SB 7、西側に廂をもつ南北棟建物と推定されるSB 9と、その種類にも多様性が見られる。

C期後半は、掘り直された溝SD 21 Bにより北側を再区画した後、SB 6 A及びSB 8を同じ位置でSB 6 B及びSB 9に建て直しをしている。そのうち、主体となる建物SB 9は5間×2間とSB 8より規模がかなり小さくなっている。なお、建て替えの見られないSB 7・SB 10は、継続して使用された可能性もある。なお、再構築された建物・溝は、いずれも東偏21度の方位をとっている。柱穴の掘形は形状・規模とも規則性が失われていき、ややまるみをもつものが目立ってくる。

このように、C期で注目されるのは、洪水による被害を受けたと考えられるSB 6 A・SB 8・SD 21 AがSB 6 B・SB 9・SD 21 Bにと再構築されており、これら両者の間に大きな変化がみられる点である。まず、遺構の方位が東偏25度のものを、東偏21度としている。次に、SB 9及びSD 21 Bは前半のものと比較するとかなり規模が小さくなっており、その変遷過程を知ることができる。また、柱穴の掘形については、その規模の規格性では前者・後者とも一定しないものが目立つが、形状では前者は方形を保っているものの、後者には丸味をもったものが見られ、次第に規則性が失われていく状況がわかる。なお、井戸は建物に隣接して3基構築されている。井戸上面には洪水堆積層（暗褐色粘質土）は確認できなかったが、SE 13・SE 15は人為的に埋め込まれているのに対し、SE 14は自然堆積により埋まっているという差が見られ、それをもって前半と後半とに分けることが可能かもしれない。

このように、柱穴掘形には規則性は少ないものの、建物等の配置状況には一定の規則性があり、また主体となるSB 8はかなりの規模をもつものである。さらに、緑釉陶器・灰釉陶器も出土していることから、一般集落とは異なる性格の遺跡であることが推定される。

B 出土遺物

下新町遺跡で出土した遺物の主体を占めるのは、「奈良時代後半（8世紀後半）の土師器・須恵器及び平安時代中頃（10世紀後半を中心とする時期）の土師器・須恵器・施釉陶器であり、平安時代前半（9世紀後半を中心とする時期）の遺物は少ない²⁾。3者は連続するものでなく、その間に空白期間をもつため、遺物は独立した3時期に分けることができる。ここでは、遺物の主体を占めるA期・C期の2時期の土器を中心に

1) 柱間寸法を重視すれば、7間×4間の四面に廂をもつ東西棟建物とも考えられる。

2) 「遺構の時期区分」（同節A）で大別したとおりである。

述べてみたい。なお、B期の年代については今池遺跡等の出土遺物から想定したものである。

奈良時代後半（8世紀後半）の遺物はSK 31より出土した34を除く多量の遺物により代表することができよう。しかし、この時期の遺物のうち土師器は、須恵器に匹敵する出土量があるものの、全体に磨滅がひどく、図化できないものがほとんどである。器種には無台杯・甕などが確認されている。須恵器には、無台杯・有台杯・杯蓋・長頸壺・横瓶等があるが、その8割以上が供膳形態である。その器種構成の特徴を簡単にふれてみると、無台杯はすべてが底部篋切りによるもので、口径が11.3～12.2cmで器高との比率の大きいもの（A）と口径が12.6cm以上で器高との比率の小さいもの（B）とに分類される。次に、有台杯は32～34の底部糸切りのものが若干見られるが、大半は底部篋切りによるものである。これらは、35のみコップ状の深い杯であるほかは、口径10.9～14.0cm・器高3.5～4.0cmのなかにおさまる。また、糸切りのものは34が口径14.4cm・器高6.4cmと大ぶりなほかは、篋切りのものと同等である。皿（36）は底部篋切りによるもので、口径14.6cm・器高2.4cmである。この器種は稀少であり、注目される。

以上のように、SK 31における須恵器は無台杯（A）・無台杯（B）・有台杯・35に見られるコップ状の有台杯・34のような大ぶりの有台杯・杯蓋・皿・長頸瓶・短頸壺・横瓶により構成されている。また、杯・皿における製作技法は底部篋切りによるものが大半を占めるが、若干糸切りのものも見られる。体部は両者ともロクロ無でを施している。このような器種構成及び製作技法の特徴から、この一括資料が編年体系を組み立てる上での基本資料となろう。また、杯類における法量の違いは、用途との関連性があるのかもしれない。

なお、SK 31からは以上のような一括遺物のほか墨書土器が3点出土している。そのうち「東家」と墨書されたものは、特定の建物を示すものと推定され、遺構群の性格を検討する上での手掛りとなろう。

平安時代中頃（10世紀後半を中心とする時期）の遺物は、遺構出土の一括遺物に恵まれていないため、その時期決定の根拠となった施釉陶器について述べよう。まず、緑釉陶器はいずれも胎土が軟質で灰白色を呈し、高台は内面に段をもつ輪高台で、器全面に淡緑色の釉を刷毛塗りで施す、いわゆる近江系である。製作年代については、滋賀県水口町峰道1号古窯跡に近い類例を見ることができ、これより年代が推定される⁴⁾。灰釉陶器は碗・皿を主体とするが、施釉法等の特徴から大きくⅠ類とⅡ類の2種類に分けられる。まず、碗・皿のⅠ類は、刷毛塗りの施釉法をとるもので、碗では口縁部がきわめて薄手で、高台が比較的細長く、断面三角形となる。また、皿でも同様に、高台が比較的細く、断面長方形である。碗・皿のⅡ類は漬け掛けの施釉法をとるもので、碗では、口縁部はⅠ類より厚く、高台もⅠ類より厚いが比較的細長く、断面三角形に近い。また、皿では、高台がやや低く、幅が広がる。これらの特徴をもつ灰釉陶器の生産地については、その特徴の対比⁵⁾により、すべて美濃窯⁶⁾で生産されたもので、その製作年代については、施釉法⁷⁾を中心として美濃窯の資料の特徴を対比した結果、Ⅰ類は光ヶ丘1号窯式（K-90期）・Ⅱ類は大原2号窯式（O-53期）⁸⁾に区分されるものと考えた。

3) ここでいう有台杯は、34・35のごとく、法量の異なるものを除いたものである。

4) 松沢 修「水口町峰道1号古窯跡出土の遺物について」『滋賀文化財だより』39 財団法人滋賀県文化財保護協会1980「…以上の器形・手法等の特徴や…〈中略〉…それらはO-53期の、平安時代後半のものと考えられる。」

5) 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』211 ニューサイエンス社 1982
同上「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台

ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ—小牧市篠岡古窯址群』小牧市教育委員会 1981

同上「編年的位置づけ」『正家1号窯発掘調査報告書』恵那市教育委員会 1983

6) 名古屋大学文学部助手斎藤孝正氏の御教示による。

7) 斎藤孝正 1983 前掲書

8) 刷毛塗りと漬け掛けの差を中心とすれば、上記のごとく分類されるが、器種等の特徴が、美濃窯の編年に全く一致するものではなく、さらに検討を必要とするものである。

Ⅳ 下新町遺跡の調査

以上のように、この時期の遺物は生産地である窯跡のほぼ明らかな施釉陶器の出土により、その製作時期は、ほぼK-90期からO-53期の範囲でとらえることができた。そこで、これらを根拠として、流通過程等も考慮に入れば、「出土遺物」(同章3)で取り上げた遺物についても、時期決定をすることができるだろう。

このように、下新町遺跡では、奈良時代後半(8世紀後半)と平安時代前半(9世紀後半を中心とする時期)及び平安時代中頃(10世紀後半を中心とする時期)と時期想定をする基準となった遺物や墨書土器等の特殊な遺物も多く、さらに、掘立柱建物を主体とする遺構群など、大きな成果をおさめることができた。今後、同地方における資料の増加も予想され、いずれより明瞭に本遺跡の性格づけがなされるであろうことを期待したい。



下新町遺跡の櫛池川旧河道(向うの鉄塔付近が今池遺跡)

第V章 子安遺跡の調査

1 調査の概要と経過

A 昭和57年度

1) 試掘調査

「調査に至る経過」(第I章2)で述べたように、子安遺跡の調査はかなり逼迫した状況のなかで実施された。現地は表面採集では遺物の散布がみとめられないため、まず試掘調査が必要とされた。試掘調査は遺物の散布が著しい字「古屋敷」(第124図参照)の畑の東側を対象とした。これは当該地の北側ではすでに道路建設のための盛土がなされており、南側は地形より遺跡の範囲外と判断されたことによる。実施したのは7月20日・21日の2日間である。この時期は今池遺跡の調査が継続中であり、これより調査員1名と作業員約30名をさき、試掘調査を行った。

現地は以前一部宅地であり、家屋の基礎などの障害物がかなり存在し、東西に一本の生活道路が通っていた。こうしたなかで、まず、もっとも地形が高く、遺構の存在が予想され、かつ障害物のない地点に幅5m・長さ40mのトレンチを2本、直交する位置に設定した(第111図a・b)。

aトレンチは道路南側に東西方向に、bトレンチは北側に南北方向に設定し、aトレンチから作業を始めた。当初、重機を使用しないで発掘したところ、表土下に黄茶色の土層が存在し、その下に暗褐色の包含層が確認されたことから、重機を導入し、表土と黄茶色土を除去した。この黄茶色土は後に洪水堆積層と推定されたものである。包含層には平安時代の土師器を中心に、須恵器と若干の灰釉陶器片が含まれており、発掘前に予想した遺跡の年代観とほぼ一致する結果を得た。遺構はさほど多くなかったが土坑・ピットなどが検出された。bトレンチでは家屋によりかなり攪乱を受けており、遺物の出土量も少なかったが、包含層は薄くみとめられた。

一方、この周辺についても重機を利用して坪掘りし(第111図c~i)、土層の観察を実施した結果、第111図のように本調査の対象地を決定した。対象地の面積は6,600㎡である。なお、bトレンチを含めた北半部の発掘は重機を最大限に利用して実施するのが適当であると判断された。

2) 本調査

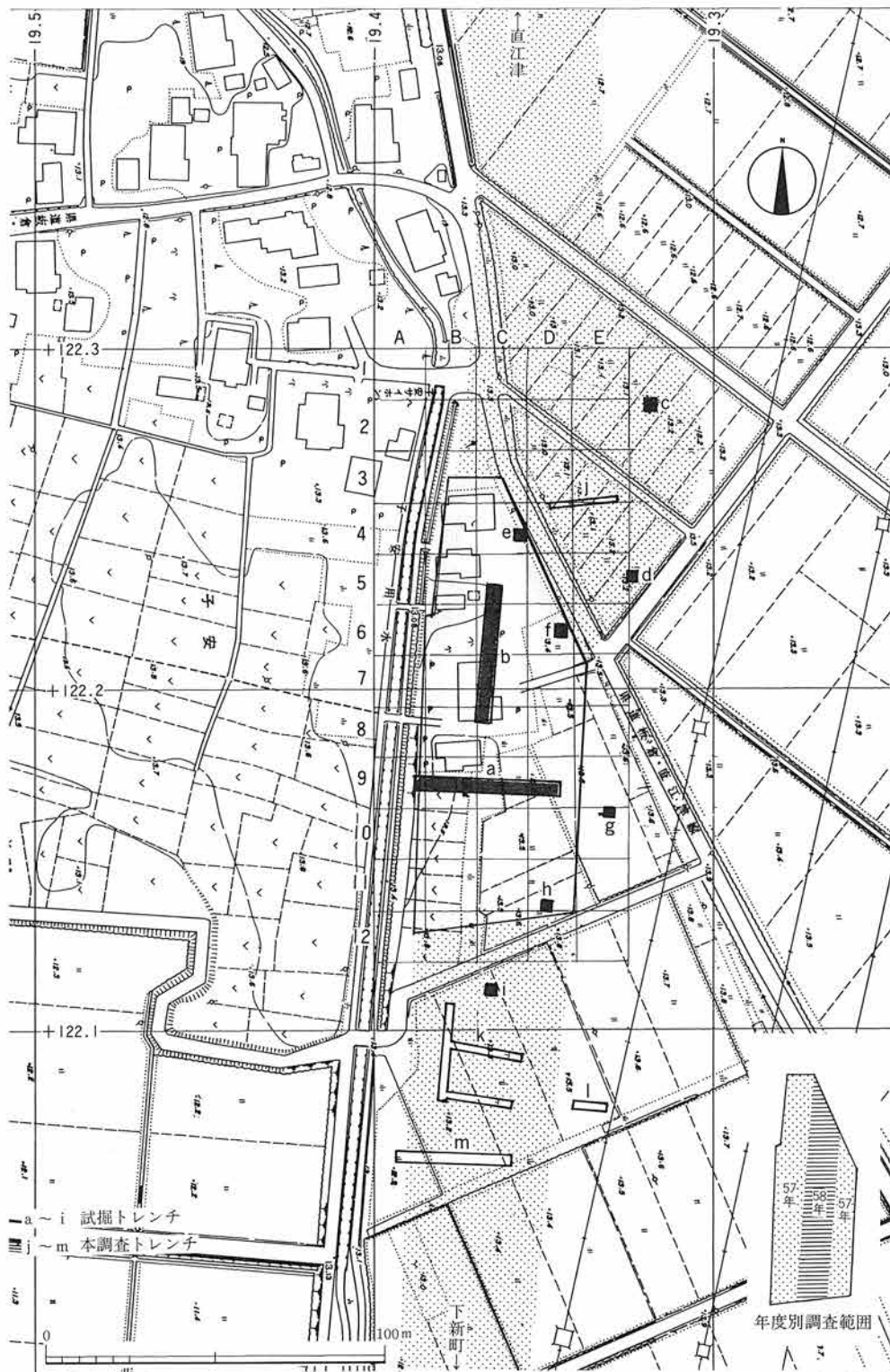
試掘調査の結果を受けて、建設省と協議した結果、9月1日より本調査を実施することとした。しかし、工事工程が迫っているため、本年度の発掘範囲はまず法線の両側の工事用道路部分に限り、次年度に中央部分を発掘調査することとした。

グリッドの設定 グリッドは方向を国土地理院の座標系第8系に一致させ、15m方眼を大グリッドにした。グリッド呼称は東西をアルファベット、南北を数字にして「A1区」のごとく両者の組み合わせによった。大グリッドはさらに3m方眼に区分けし、1~25の小グリッドとした(31頁参照)。グリッドの基準線

V 子安遺跡の調査

は北を+122.3の緯線，西を-19.4の経線とし，それぞれ1列の北とA列の西をこれにあわせた。グリッドの設定にかかる杭の打設は表土除去後に業者委託により実施した。このほかに小グリッドの3mごとにも地区割杭を打った。杭の呼称はグリッドの北西隅の杭とグリッド名を一致させた。杭は調査範囲内について打設したが，次年度の調査にそなえて，子安用水西側の宅地内に地主の了解を得て2本の杭を打設した。レベル原点は任意設定し，ベンチ・マークより標高を求めた(13.37m)。

発掘方法 発掘方法は今池遺跡と基本的には同様である。まず，表土と洪水堆積層である黄茶色土を重



第111図 子安遺跡のグリッド設定図

昭和47年8月撮影・昭和48年7月測図
座標系第8系 建設省北陸地建

機により排土し、包含層を人力により掘り下げた後、地山面で遺構検出した。ただし、グリッドの7列より北側は一部重機により地山面まで排土した。

包含層の遺物は、グリッドごとにとりあげた。遺構は種別ごとに番号をつけず、すべて1番から通し番号とした。建物柱穴と認定されなかったピットは遺物の出土したものに限り大グリッドごとに番号をつけた。畝状小溝も遺物の出土したものに限り遺構番号を付した。遺構は1/100の略図を一枚作成し、随時目測で遺構を記入してゆき、遺構番号をつけ、重複しないよう配慮した。この略図には、覆土の観察や切り合いなども書き入れた。

土層観察は、南北方向は58年度調査区との壁面で行い、東西方向はB7区にトレンチを設定して行った。遺構平面図は簡易遣り方により1/20で作成した。なお、ここではトレンチャーを導入しての排水溝を掘削せず、適宜、素掘りの溝を掘って集水し、ポンプ排水した。調査区中央の東西の道路は生活道路であり、この部分については道路をつけ替えて発掘した。

経過 9月1日から作業員を入れた発掘体制をとるため、8月24日より、ユンボとブルドーザーを投入し、表土剥ぎと排土の移動を開始し、8月31日には今池遺跡から器材を搬入し、発掘作業に着手した。最初の一週間は子安遺跡で全員が作業できるスペースがとれず、今池遺跡の調査を併行し、そののち今池遺跡の作業を中断して、子安遺跡に全勢力を注いだ。

全般に遺物の出土量がきわめて少なく、わずかにSB10付近とB9・10区付近に集中していたのみで作業は早く進行した。SB10は当初柱穴の一部のみ検出されたものであるが、次年度分の範囲へ一部拡張して、ひとつの建物を分断して調査することを避けた。当初平安時代の遺構を予想していたが、これより新しい時期のものがあつた、これらの追求にかなりの時間を要した。

まず、調査区東側縁辺のSD1とSD6は、包含層上の洪水堆積層を切り込んでいることからある程度時期が新しいと考えられたが、D・E6区に幅約1mのトレンチを設定し、ここで断面を観察して規模を把握し、SD6のほかの部分については掘りあげず、平面プランを確認することにとどめた。SD1についてはこれより浅く規模が小さかつたこともあつて発掘した。次に調査区の南西隅では河川跡と思われる大きな落ち込みが検出された。これは平面形が直線的でなく、湾入部があり、自然河川と考えられた。洪水堆積層との関係は不詳であつたが、トレンチを設定して断面観察したところ、包含層のつづきが落ち込んでおり、平安時代の遺構と同時期とも考えられた。しかし遺物は検出されなかつた。そのため、これも平面プランを把握するにとどめ、発掘はしなかつた。ただ、この河川は明治期の更正図や地形などからは容易に予想できないものであり、櫛池川などの河川の流路変動が遺跡の消長と関連することも考慮して、調査区の南側に重機によりトレンチ(k~m)を発掘し、この流路を追求した。

以上のほかに調査の終りに近づいて、中世の素掘りの井戸が3基検出された。これらは径が1mほどで掘りにくく、掘り進むにつれて壁が崩落するなど、むずかしい点もいくつかあつた。この遺構は、当遺跡が中世まで断続的に営まれたことを示すとともに、近くに建物などの存在を示唆するものであつた。また、これ以降今池遺跡でもこれと同じ遺構が数多く検出され、中世に対する大きな関心を喚起した点で、大きな意義をもつ遺構となつた。

調査は当初の計画どおり、1ヶ月で終了し、9月28日からは今池遺跡の調査を再開した。調査期間中は稲刈りで作業員も激減し、台風にとまなう大雨などにより作業が遅延したことをつけ加えておく。最終的な調査面積は3,400m²である。

B 昭和 58 年度

57年に建設省と協議した結果にもとづいて、調査終了期日を5月20日という前提で本線道路敷の発掘調査に着手した。なお、グリッド・標高は前年と同じにした。発掘方法も昨年と基本的に同じで、表土と洪水堆積層である黄茶色土を重機で排土し、包含層を人力により掘り下げ、地山面で遺構を確認した。グリッドの7列より北側は包含層が非常に薄く、攪乱を受けている部分が多いので全面重機により地山面まで排土した。排水についてはトレンチャーで排水溝を掘削し、集水枘からポンプ排水した。

経過 4月14日から作業員を入れた実質的発掘調査に着手するために、4月8日からユンボを稼働させ、表土と洪水堆積層を排土した。排土については側道部分が工事用道路として利用されているため、トラックで調査対象地外へ搬出した。排土の段階でグリッドの7列以北および10列以南では遺物の出土量も少なくなっており、SD 4・SX 59は包含層の上の洪水堆積層を切って構築され、SX 59周辺からは五輪塔の水輪・宝篋印塔の基礎が出土した。グリッド7列以北は、部分的に包含層が薄く残っているが大半は旧宅地で、土台や屋敷林の根で地山面まで攪乱されていた。このため、グリッドの7列以北については地山面までユンボで掘り下げた。13日には基準杭の打設・器材の搬入も完了し、予定通り14日から着手した。

22日には調査対象地全域の包含層の除去は終了した。遺物量は前年と同様全般的に少なかったが、少ない中でもSB 67・SB 65周辺には多かった。遺構については当初SB 10のような平安期の建物跡を想定していたが、直径20～30cmの小形のピットや直径1.5m前後の大形の土坑状のものが検出された。とくにC 9・10区では小形のピットが数多くあり、東西南北に並び建物跡として想定されたが、はっきりと断言できる程ではなかった。さらに、小形のピットはほぼ東西に走る畝状小溝を切って掘り込まれており、畝状小溝よりは時期的に新しいものと判断された。

大形の土坑状のものを掘り下げる一方、これら小ピットの関連を追求するために遺構の精査をした。調査対象地の地山の土質は粘質が強く、乾燥しにくく、また晴天が続くと乾燥し過ぎて固くなり、遺構の精査は困難をきわめた。大形の土坑状のものは掘り進めて行くと、下駄や曲物が出土し、いずれも底面が青灰色砂質粘土層に達し、深さも2.3～2.8mとなり中世の井戸と判断された。小形ピットについては確実に建物跡となるものが確認された。建物は総柱の南北棟が多く、主軸方向から大略2時期に分れるものと思われる。井戸と同一時期頃のものと思われる。建物の柱並びは平安期のものとは異なり、一般的に悪く、その規模も小さい。今後、この種の小形ピットについては充分注意していかなくてはならないと思われる。

前年度調査をした本線敷の西側で数多く検出された畝状小溝はグリッドC列のほぼ中央部を南北に走り西に曲るSD 12・70の内側にしかなく、SD 12・70は境界溝としての性格が強いのではないかとと思われる。SB 67は調査区中央を東西に走る生活道路を除去して検出されたもので、古代の建物跡である。

調査は当初の予定通り5月19日には実測および写真撮影を行い、20日にはすべて現地作業が完了した。最終的な調査面積は3,200㎡である。



第112図 作業風景

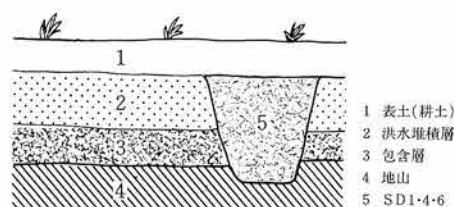
2 遺 跡

A 層 序

今回の調査区は遺跡全体からみれば東辺部にあたるものと考えられ、微地形は南北方向では南から北へ、東西方向では西から東へわずかに傾斜している。調査区南端とB6区北端の約90m間の比高は40cmで、東西方向はこれより傾斜が小さい。

土層は表土から地山までは3層に分けられる(第113図)。表土は15~25cmの厚さで、水田や畑の耕作土である。水田部では表土の下部に床土(黄褐色土)がある。

表土の下は黄茶色土が厚さ10cm前後(灰褐色土)あり、どの部分にもみられる。土質は微砂粒、あるいはシルトで、混入物が少なく、有機質なども含まない。当初これは畑などを造成するための盛土と考えたが、全く同じ層が下新町遺跡でも検出されており、この土層の分布が広汎なことやきわめて



第113図 基本層序模式図

均質な土質であることから、洪水堆積によるものと考えに至った。このことは当遺跡の調査時に上越地方を襲った台風が関川が氾濫した際、実際に観察された洪水堆積層によりわかったことである。この層の形成年代、すなわち洪水のあった時期であるが、当層からは宝篋印塔(第122図)や永楽通宝(第123図)が出土していること、当層の下からは珠洲焼などの中世遺物が検出されること、当層を切り込む遺構SX59からは内耳鍋(図版74-74)、SD1からは近世陶器(図版74-75)が出土していることから、15~16世紀に比定することができよう。なお、下新町遺跡でも同時に形成されたと考えられる洪水堆積層より永楽通宝と瀬戸・美濃焼灰釉皿(第105図)が出土しており、子安遺跡の所見と合致する。

包含層はこの洪水堆積層に覆われた暗褐色土である。粘性が強く、厚さは15~25cmである。包含層中から平安時代と中世の遺物が出土するが、両者が別々の層を形成するものではない。包含層の分布は調査範囲内だけではなく、県道をはさんだ東側のjトレンチ(第111図)やbトレンチの東端部でも検出された。ただし、遺物の包含は確認できなかったが、その土質・色調からみて、包含層と同一層とみられる。ただjトレンチでは地下水位が高く還元土壌となり、地山が淡青灰色、包含層が灰黒色となる。

包含層の直下が地山で、黄褐色の粘質土である。地山面は標高13m前後である。調査区内では地山面から約40cmまでは酸化土壌であるが、これより下は還元状態のため青灰色粘土となる。また、地山面下1.5m前後の深さに黒色粘土層が厚さ10cm前後で存在する。この黒色粘土層は今池遺跡・下新町遺跡でもみられたが、性格は不詳である。

B 概 観

検出された遺構は、掘立柱建物・畝状小溝・井戸・溝・墓などのほか自然河川跡がある。これらは平安時代・中世・近世の3時期にほぼ大別されるが、個々の遺構について明確な年代決定の決め手を欠くものもある。遺構はグリッドの5列より北では近世の溝のほかは全くなく、6列より南に大半が分布する。平安時代の畝状小溝や中世の掘立柱建物などは、これまで県内ではあまり報告例がなく、とくに注目される。

平安時代 平安時代の遺構は掘立柱建物2棟(SB10・SB67)と畝状小溝である。掘立柱建物はともに

中世の掘立柱建物より柱穴が大きく、平面形が方形となることに加えて、柱穴掘形の埋土が茶褐色で、中世のものが黒褐色であるのと明瞭に区別される。遺構の覆土（埋土）の相違は溝についても同じである。

畝状小溝は細く浅い溝の集合であり、調査区中央西半部に集中して分布する。これらの出土遺物は微量であるが、中世のものは含まれておらず、SB 41・SB 65など中世の建物の柱穴や井戸に切られていることからみて平安時代と推定される。東西の溝が平行して数多くあり、この東側に南北の溝が一条存在する。

中世 中世に属する遺構は、掘立柱建物9・柵2・井戸8・土坑・墓・溝である。当期の遺構覆土（埋土）は平安時代のものより黒く、柱穴にあつては、小さく丸い傾向にある。建物の重複と方向からみると2時期に分けられるようである。掘立柱建物としたもののほかには建物とするにはやや問題を残すものもあるが、従来県内には報告例がなく、注目される。

井戸はいずれも平面形が円形で素掘りである。出土遺物は多くはない。河川跡の年代は不詳であるが、平安時代の畝状小溝を切っており、SD 4が河川跡埋土を切ることから、中世頃に機能していたものではないかと考えられる。

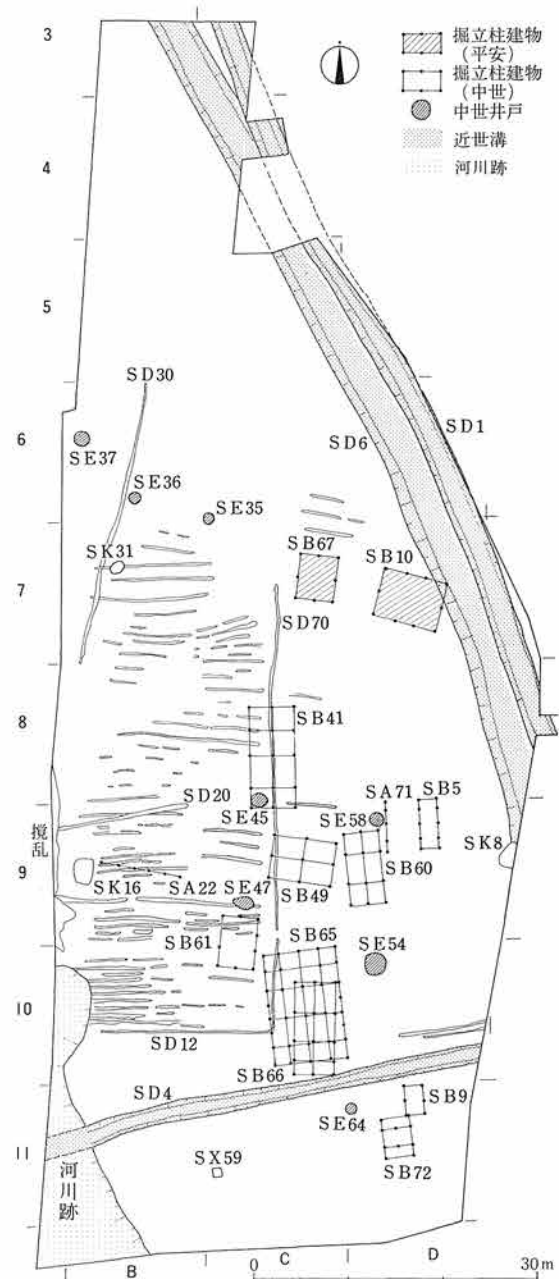
近世 包含層・洪水堆積層を切って存在する遺構で、SD 1・SD 4・SD 6の比較的大きい溝がある。建物などの遺構はない。それぞれの時期は出土遺物がないか、ごくわずかであり、近世といっても漠然とした時期である。SD 1とSD 6は同じ位置にほぼ同じ方向にあり、切り合い関係はあるが同じ性格のものと推定され、SD 4などもこれと直交する方向であり、類似したものと思われる。

C 遺 構 各 説

1) 平 安 時 代

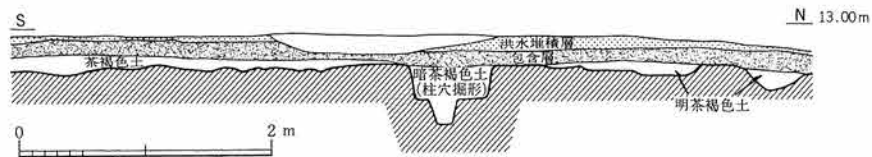
SB 10 (図版70・125)

D 7区にある3間(6.9m)×2間(5.1m)の東西棟建物(東偏16度)である。北東隅の柱穴はSD 6により破壊され、遺存しない。柱間寸法は桁行・梁間とも等間である。柱掘形は一辺60~70cmの方形で、深



第114図 遺構配置模式図

いっても漠然とした時期である。SD 1とSD 6は同じ位置にほぼ同じ方向にあり、切り合い関係はあるが同じ性格のものと推定され、SD 4などもこれと直交する方向であり、類似したものと思われる。



第115図 SB10南北セクション 1/20

さは50～70cmである。掘形埋土は地山土を主体とする。柱痕跡は径約20cmである。

柱穴の掘り込み面は包含層の下である（第115図）。建物付近は包含層中から比較的遺物が多く出土した。

SB 67（図版70）

C 7区にある2間（4.8m）×2間（3.7m）の南北棟建物（東偏約3度）である。北西隅の柱穴は昭和57年度の試掘調査のトレンチによって破壊され、遺存していない。柱間寸法は桁行・梁間で異なり、桁行は2.3～2.5m、梁間は1.8mである。柱掘形は一辺50～70cmの丸味をおびた方形で深さは40～60cmである。掘形埋土は地山土が主体で中には黒色土のものもある。柱痕跡は径約25cmである。

SK 50（図版71）

C 9区にある土坑である。長径1.2m・短径90cm・深さ7cmの浅い楕円形で底面は舟底状を呈している。覆土は暗褐色土で、しまり・粘質もある。土師器・須恵器片が出土している。

畝状小溝（図版69・124）

今池遺跡でも多数検出された、細くて浅い小さな溝である。今池遺跡で分類したA類のみで、B類は存在しない。

発掘区中央やや南側の西半部にほとんど集中して分布する。これらは南北約50m・東西約20mの方形を呈する範囲内に、東西方向に多数平行して並ぶ。東西溝の東側には細い南北溝（SD 12・70）が溝群を区画するように存在する。このSD 12は南端で西へ直角に曲り、東西方向の溝群を区画する。SD 12・SD 70は幅20～40cm・深さ約10cmで、ほかの東西溝と大きな規模格差はない。C 8区ではSD 70と約2mの間隔で平行する溝があり、両者は関連するものと考えられる。

東西溝は途切れている箇所も多いが、それぞれの位置関係からみて、ある程度一定の間隔と方向性が看取される。溝の総数は40～50条であり、それぞれの間隔は北半部で1.3～1.5m、南半部でこれより短く1m以下である。1条の溝はおおむね幅20～30cm、深さ数cm、深いもので10cmほどである。東西溝のうちSE 47に切られるSD 48とその西側のSD 13・SD 14はほかのものより幅が広く、深い。また、地山面がわずかに低くなる調査区西端までのびており、ほかの溝が調査区西端部までのびていない点と比し、特異である。さらに、この溝を境にして各溝間の間隔が異なっているようであり、ほかの溝とは違った性格をもつと考えられる。

これらの畝状小溝はいずれもSB 41・SB 61・SB 65・SE 45など中世の遺構に切られており、覆土は茶褐色で、粘性を帯び、しまりがある。遺物の包含量は少ない。また、南端部では河川跡にも切られている。

一方、SB 67の北側にも3条の溝がある。これらは1.7～1.8mの間隔で東西方向に平行して存在する。この方向はSB 10・SB 67と同じく東偏する。それぞれの溝は幅約35cm・深さ約8cmである。なお、先述した方形区画の溝群の東側のC 8・C 9区にもこれと同様の溝がある。ただし、C 8区の溝は南北溝に切られている。

2) 中 世

SB 5 (図版71・126)

D 9区にある4間(5.4m)×1間(1.85m)の南北棟建物である。方向はほぼ方位に沿う。桁行は柱間が等間ではなく、南北両端が1.1m、中央2間が1.6mとなる。柱掘形は径25~40cmの円形で、深さは35~70cmである。埋土は黒褐色土である。この建物の西方3.5mの位置に南北方向の柵 SA 71が存在するが、両者は方向が一致し、柱間寸法も同一であることから、関連することが想定され、あるいは同一の建物を構成する可能性をもつ。

SA 71 (図版71)

C 9区にある柵列である。5本のピットで南北に構成され、西へ約3度偏向している。延長5.5mで柱掘形は直径25~30cmの円形で、深さは35~40cmである。柱間寸法は0.9~1.2mで一定していない。埋土は黒茶褐色土で、粘質に乏しくしまりもない。SB 5と関連する可能性が強い。

SB 60 (図版71・127)

C 9区にある3間(7.8m)×2間(3.6m)の南北棟建物(西偏約6度)である。総柱で柱間寸法は桁行・梁間で異なっている。桁行は北から1間目と3間目が2.0mであるのに対して2間目は3.2mで間隔が広い。梁間は1.8mである。柱掘形は直径30~40cmの円形で、深さは30~40cmで中には50~60cmを測る深いものもある。埋土は黒茶褐色土で粘質・しまりともない。

SB 49 (図版71・127)

C 9区にある2間(6.5m)×2間(4.6m)の東西棟建物(東偏約9度)である。総柱で柱間寸法は桁行3.2m・梁間2.3mで桁行が長い。柱掘形は円形で直径30~40cm、深さは30~50cmを測る。埋土は黒褐色土で炭化物が混入している。SD 70を切っていることからSD 70より時期的に新しいものである。

SB 41 (図版71・128)

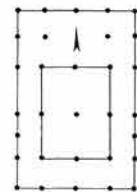
C 8区にある4間(10.8m)×2間(4.8m)の南北棟建物(西偏約1度)である。総柱で柱間寸法は桁行2.3~2.5mで北側から3間目が3.5mと長い。梁間2.3~2.5mである。なお、東側桁行の北から1間目の柱穴は用地買収前に建てられていた家屋によって破壊されている。柱掘形は直径20~30cmの円形で深さは30~60cmを測る。埋土は黒褐色土で炭化物の混入が著しい。SD 70および畝状小溝を切っており、更にSE 45を切っていることから時期的に新しいものである。

SB 61 (図版71・128)

C 9・10区にまたがって所在する3間(5.5m)×2間(4.0m)の南北棟建物(東偏約5度)である。総柱で柱間寸法は桁行・梁間ともに1.8~2.0mである。なお桁行の西・中央列の北から1間目には柱穴はない。柱掘形は直径20~40cmの円形で、深さは40~60cmを測る。埋土はSB 41と同じ黒茶褐色土である。

SB 65 (図版72・128)

C 10区にある5間(11.9m)×4間(7.7m)の四面廂南北棟建物(西偏7度)である。身舎は2間(6.3m)×2間(4.5m)の総柱建物である。柱間寸法は桁行が北から3.1m・3.2mで、梁間は2.25m等間である。廂の出は北へ3.8m(2間)、南へ1.9m、東・西へ1.6mである。東廂の北から第6柱は排水溝で破壊され遺存しないが、東・西廂の柱列には、身舎の柱間中央に対応する位置に柱穴があり、7間になっている。柱掘形は、身舎の東・西入柱列の柱穴が一辺40~50cmの方形で、深さ60~80cm、ほかは径30cm前後の円形で、深さ35~55cmである。



SB 66 (図版72・128)

C10区にある3間(9.9m)×2間(4.3m)の南北棟建物(西偏約1度)である。総柱で、柱間寸法は桁行3.2~3.4m・梁間2.2mである。柱掘形は直径40~50cmの円形および楕円形で、深さは40~60cmを測る。埋土は黒褐色土で炭化物の混入が著しい。

SB 9 (図版72)

D11区にある2間(3.2m)×1間(2.0m)の南北棟建物である。桁行の柱間は両者とも等間ではなく、平面形も若干の歪みがある。柱掘形は径20~30cmの円形で、深さは25~45cmである。埋土は黒褐色土である。方向はSB 5と同じく方位にちかい。

SB 72 (図版72)

D11区のSB 9に接してある南北棟建物である。桁行は3間(4.2m)であるが、柱間は等間ではなく、中央が長い(2.0m)。梁間は北妻・南妻とも1間であるが、東柱とも考えられる柱穴が存在する。歪みが著しい。柱掘形は径20~25cmの円形で、深さは20~50cmである。埋土は黒褐色である。

SA 22 (図版71)

B 9区にある5間の東西方向の柵である。畝状小溝を切り込み、柱穴埋土は暗褐色である。柱掘形は20~30cmの円形で深さは40cm前後である。方位は東偏する。

SE 35 (図版70・126)

C 6区とC 7区の境界付近にある素掘りの円形井戸である。長径1.25m・短径1.15mで深さは2.5mである。内部充填土は上面から黄灰色土・黒褐色土・灰黒色粘土であり、底面から約50cmまでは藁等が敷きつめたように堆積していた。灰黒色粘土および藁等の堆積物中から木製仏像・蓋・杓子・箸のほかに珠洲焼の甕片が出土している。なお、底面は青灰色砂質粘土になり湧水が著しい。

SE 36 (図版70・126)

B 6区にある素掘りの円形井戸である。長径1.3m・短径1.25m・深さは2.4mである。内部充填土は上面から黒褐色土・黄褐色土・暗茶褐色土・灰黄褐色土(黄褐色・灰色・黒色のブロックを含む)・灰黒色土であり、底面は青灰色砂質粘土となって湧水が著しい。灰黒色土は底面から約1.3mの厚さがあり、植物遺体のほかに曲物の底板片や黒漆塗の木製椀が出土している。

SE 37 (図版70・126)

B 6区の西側にある2段掘りの円形井戸である。上面は長径1.7m・短径1.45mで深さ80cm位の所の中央部に長径1.1m・短径1.4mの円形の穴が穿たれている。深さは全体で2.3mを測り、底面は青灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から茶褐色土・黄褐色土・黒褐色土・暗黒色土・灰黒色土であり、暗黒色土には植物遺体などが多く含まれている。暗黒色土からは人頭大の礫(表面が黒く焼けている)が5個と珠洲焼の破片・青磁碗片・木片が出土している。なお、井戸枠はなく素掘りである。

SE 45 (図版71・129)

C 8とC 9区の境界にある楕円形の素掘り井戸で、SB 41よりも古い時期のものである。長径1.8m・短径1.45m・深さ2.82mで、底面は青灰色砂質粘土層に達している。内部充填土は上面から黒色土・暗灰色土・灰黒色土・黒色土で灰黒色土からは植物遺体などのほかに下駄・木片と直径15~20cmの割石(表面が黒く焦げている)が1個出土している。

SE 47 (図版71・129)

C 9区にある楕円形の素掘り井戸である。長径2.4m, 短径1.4mの浅いくぼ地の東部に穿たれた井戸で、

井戸の長径1.2m・短径95cm・深さは2.8mで底面は青灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から黒色土・黒茶褐色土・茶褐色土・暗灰色土・灰黒色土で、歴然たる有機質を含む土層はない。暗灰色土中から直径10cm内外の自然礫が20～30個出土した。灰黒色土からは板材・箸・楔などの木製品が出土している。

SE 54 (図版72・129)

D10区にある円形素掘りの井戸である。長径2.5m・短径2.4mで本遺跡で確認された井戸中最大規模を有している。深さ2.4mまで掘り下げたが湧水が著しく、側壁が崩壊して危険なため底面までは発掘しなかった。内部充満土は上面から灰褐色土・暗茶褐色土・暗灰黒色土・黒色土・暗灰色土となり、暗灰色土から直径25～30cmの割石(表面は焼けて煤が付着している。)が4～5個のほかに曲物の底板・側板や珠洲焼の甍片・鉢片が出土している。

SE 58 (図版71・129)

D9区にある円形の素掘り井戸である。長径1.6m・短径1.4m・深さは2.9mで底面は青灰色砂質粘土層に達している。内部充満土は上面から黒色土・黒茶褐色土・灰黒色土・暗灰色土で、灰黒色土には有機質の植物遺体が多く含まれ、藁と思われるものは完全には腐敗せずに残っている。板材・火鑽白が出土している。

SE 64 (図版72)

D11区にある円形の素掘り井戸である。長径1.3m・短径1.2mで、深さ2.3mまで掘り下げたが、湧水が著しく、壁面が崩壊し危険なため、途中で掘ることを中止した。ボーリング探査によれば、あと40cmで底面に達し、底面は青灰色砂質粘土であることが確認されている。内部充満土は上層から灰黄色土・暗茶褐色土・暗灰黒色土・灰黒色土・暗灰色土であり、灰黒色土中から瓜・桃などの種子のほかに板材や棒、珠洲焼が出土している。また、暗灰黒色土からは直径20cm強の自然礫が4個出土しているが、表面は焼けてはいない。

SK 31 (図版70)

B7区にある楕円形の土坑で東西に走る畝状小溝を切って掘られている。長径1.5m・短径1.2m・深さ76cmで底面は舟底状を呈している。覆土は上層から暗褐色土・黒色土・茶褐色土で、遺物は一点も出土していない。

SK 16 (図版71・124)

B9区にある平面長方形の土坑である。長辺2.6m・短辺2.0mで深さは68cmである。埋土は灰黒色土で、穀磨白上臼・石鉢の他に灰釉丸皿が出土している。

SD 30 (図版70・125)

B6・7区に位置する南北溝である。SD20と同じく覆土は黒褐色で、畝状小溝を切る。幅30～50cm、深さ約10cmで、全長約30mである。

SD 20 (図版71・124)

B9区北辺に位置する東西溝である。覆土は黒褐色で、畝状小溝を切る。幅30～40cm、深さ約15cmである。

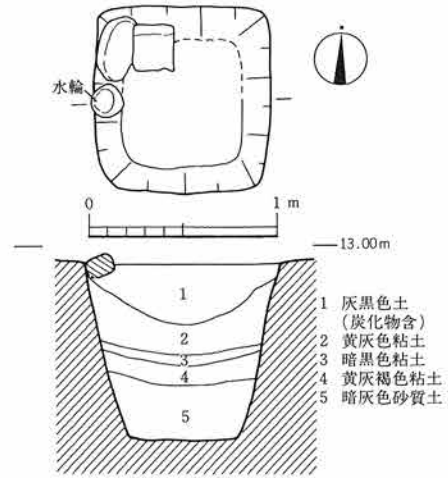
SK 73 (図版70)

C6区にある全長10.5m・幅1.3m・深さ30cmの土坑である。主軸は西へ約27度偏向している。南北端および東側に段がある。覆土は粘質のある暗黒色土で遺物は全く出土していない。なお、北端の段下の底

面は樹木の根によって攪乱を受けている。

SX 59 (図版72・129)

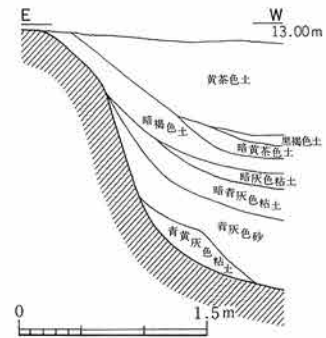
C 11区にある方形の墓坑である。上面の長辺1.05m・短辺98cm, 底面の長辺60cm・短辺50cmで、深さは1.08mである。内部充満土は上面から灰黒色土・黄灰色土・暗黒色土・黄灰褐色土・暗灰色砂質土で底面から曲物の底板・側板片が出土している。上面の北東隅には自然石と五輪塔の水輪、宝篋印塔の塔身ないしは五輪塔の地輪と思われるものがあり、水輪の下から土師質の内耳鍋片が出土している。骨片は全く見られないものの、この曲物と内耳鍋は骨蔵器として使用された可能性が多分にある。本遺構の周辺部から宝篋印塔の基礎・五輪塔の水輪が出土していることは墳墓の可能性を一層裏付けるものであろう。



第116図 SX 59実測図

河川跡 (図版69)

調査区南西部に位置する。トレンチで深さや層位を確認したが、すべては発掘しなかった。覆土中には包含層から連続して落ち込む層 (暗褐色土) が存在する。これはいったん河川が包含層を切った後に包含層が流れ込んだものと考えられ、最上層の黄茶色土は洪水堆積層と同一とみられる。出土遺物はない。この河川は調査区南側に設定したトレンチ (第111図k~m) でそのつながりを追求したところ、1・mトレンチでは包含層が存在せず、この部分では包含層が河川によって浸食されたことがわかる。SD 4は河川跡が埋没した後に掘られたものである。河川を完全に埋めた洪水はおそ



第117図 河川跡断面図

くとも16世紀には生じたものと推定され、畝状小溝との切り合い関係より、この河道は中世の間に形成されたものと推定される。なお、この河川は調査区から北西方向を指向しており、子安の集落東辺に点在する水田はこの旧河道を反映したものかもしれない。

3) 近 世

SD 1 (図版69・125・126)

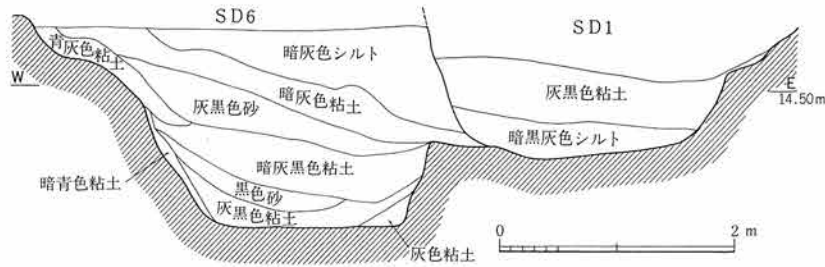
調査区東側縁辺に位置する溝で、SD 6とほぼ同じ方向で重複する。SD 6よりは新しい。幅約1.5m・深さ50~60cmである。覆土はほぼ2層に分けられ、上層は灰黒色粘土、下層は暗黒灰色シルト層である。出土遺物はごく少ないが、古代の瓦片 (図版67-14)、中世の天目茶碗 (60)・近世陶器 (75) を含む。

SD 6 (図版69・125・126)

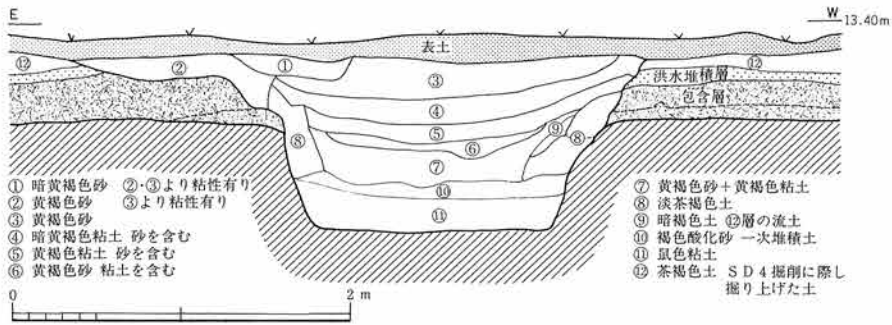
SD 1とほぼ同じ位置に同じ方向で存在する。トレンチによって規模を把握したが、時期が新しいことも考慮してすべては発掘しなかった。規模はSD 1より大きく、幅3~5m・深さ約1mである。覆土は砂・シルト・粘土が互層となっている。出土遺物はない。SD 1とSD 6の位置と方向は、現在の子安用水と関連すると考えられる。

SD 4 (図版72)

調査区南側に位置する東西溝で、方向はSD 1などとほぼ直交する。包含層上の洪水堆積層を切り込んでおり、上端幅約1.2m・下端幅70cmで底面は平坦である。底面のレベルは西側が低い。出土遺物はない。



第118図 SD1・SD6断面図



第119図 SD4断面図

3 遺物

出土遺物は平安時代・中世・近世の各期にわたるが、出土総量はコンテナ3～4箱程度である。遺物の大半は平安時代のもので占められ、中世・近世のものは少ない。遺物はほとんどが土器・陶器類であり、ほかに木器・石製品・石塔類・銭貨などがある。以下、平安時代と中世・近世に分けて記述するが、一部時期の確定がむずかしいものは、後者に含めた。

A 平安時代の遺物 (図版73・75・154)

1点の石をのぞきすべて土器類である。当期の土器が遺物の主体をなすとはいえ、出土量はさほど多くはなく、全体に遺存度は良好ではない。土坑・溝などの一括資料はないが、土器様相は単純であり、遺物の年代はさほど幅がないと考えられる。それは当期の建物が2棟(SB10・SB67)しか存在しないことから類推される。

ここで、図化したものは比較的遺存度のよいもののほか、全体の器種・器形を網羅すべく選定したものである。土器類は須恵器・土師器・灰釉陶器に分けられる。これら三者の量的な比率は土師器が圧倒的に多く、須恵器は少ない。灰釉陶器はごくわずかである。具体的な比率は一括資料を欠いているため、明確にしがたい面もあるが、包含層出土

第13表 B9区包含層出土土器の構成

種別	器種	個体数	比率(%)
須恵器	大 甕	2	4.8
	短頸壺	1	2.4
	壺 (長頸瓶?)	2	4.8
	無台杯	1	2.4
	有台杯	2	4.8
土師器	杯	20	47.6
	小 甕	7	16.7
	大 甕	4	9.5
	鍋	1	2.4
灰釉	碗	2	4.8
計		42	100.2

機能	須恵器	土師器	灰釉	
供膳	3 (12%)	20 (80%)	2 (8%)	25
貯蔵	5	0	0	5
煮沸	0	12	0	12
計	8	32	2	42

の土器で、量的にもっとも豊富なB9区の土器を抽出すると、第13表のとおりである。すなわち、全体の個体数の8割弱を土師器が占め、須恵器は2割弱しかない。これらをさらに機能別にみると、土師器は煮沸形態全体と供膳形態の大部分(80%)を占め、須恵器は貯蔵形態全体と供膳形態の一部(12%)を担っている。煮沸形態と貯蔵形態は当地方で本格的に須恵器生産が開始される7世紀末から8世紀初頭以来、それぞれ土師器と須恵器の機能分化が明瞭であるが、¹⁾この土器群にはすでにそういった様相がみられないことは注目される。このことはこの土器群が奈良時代の土器様式とは全く異なった土器様式に所属することを明示していよう。

1) 須 恵 器 (1~19・81~88・90~91・94~96)

無台杯・有台杯・杯蓋・長頸瓶・小瓶・大甕などの器種がある。いずれも全体の1/3から1/10程度を残す破片ばかりで、全体の器形を知りえないものが多い。

無台杯(1) 口径13.5cm・器高3.1cmの浅いものである。器壁はごく薄く、器面にロクロ撫での痕跡がよく残る。底部は篋切りである。これは今池遺跡SD3Ⅳ層出土土器に多い無台杯と、器形・手法・胎土・焼成などの特徴が共通する。C10区出土。これ以外の無台杯は小破片が若干存在するのみである。

有台杯(2~6・10) 底部から口縁部まで遺存するものはなく、全体の器形は不明な点もあるが、残存部の器形からいくつかの器種に分類される。量は少ない。器形の相違は一面では製作年代の差を反映するものと考えられる。

2は口径14cmとやや大ぶりで、全体のつくりはよい。4も底部からみて同様のものであろう。底部から体部は丸味をもって立ちあがり、口縁部は短く外反する。高台は安定した内端接地で、接地面はロクロ撫でにより大きくくぼむ。底部は4が篋切りである。全体に器壁が厚く、焼成は堅緻である。2はB9区、4は試掘9トレンチ出土である。

3は口径10.8cmと2より小さく、明らかにつくりも異なる。底部と体部の境は丸味をもちつつも、比較的明瞭であり、器壁も薄い。底部は欠失するが、糸切りと推定される。焼成は堅緻である。C10区出土。

5は底部のみで、杯でない可能性もあるが、一応小形の杯と考えておく。高台は低く、底面中央にわずかに糸切り痕をとどめる。B8区出土。

6は口径14cm・器高5.2cmで、やや大ぶりで身もやや深い。器壁は無台杯1と同様にごく薄い。高台は低く不安定で、接地面は丸くなる。体部は口縁が大きく開き、底部周縁に高台がとりつき、底部は篋切りと思われる。胎土は細砂粒を多く含み、ややざらついた器面となる。B9区出土。

10は底部を欠き、全体が不明であるが、口縁の開きが大きく、体部は内彎気味に立ちあがることから、灰釉碗に類似する器形をとるものと推される。色調はほかのものよりやや白っぽい。C10区出土。

杯蓋(7~9) 蓋も個体数が少なく、全形を知りえるものはない。天井部を残す7は底く偏平なつまみをもち、ほとんど水平な天井部外面は篋削りを施す。D10区出土。8・9は天井部から縁部を残す。8は縁部を折り返し、下端部を丸くおさめる。天井部は篋削りをする。9の天井部は篋削りがみられず、縁部下端はわずかに外方へ引き出されている。8・9ともに堅緻。B10区出土。

長頸瓶(11・12) いずれも口縁部破片で、胴部の遺存例はない。口縁部は11・12ともに上方へつまみあげられるが、12のほうが器壁が厚く、端部の立ちあがりも大きい。11は胎土・色調など下新町遺跡SE12出土の長頸瓶(56)と同じである。11はC10区、12はSD67出土。このほか16・17が長頸瓶の底部の可

1) 坂井秀弥「越後における7・8世紀の土器様相と画期」『信濃』35-4 1983

能性をもつが、やや大形なことなどから確定しがたいので壺類底部として後述する。

小瓶(13) 口縁部と胴部下半を欠く。胴部上半は丸味をもち、口頸部はラッパ状に開く。外面はロクロ撫で、内面は口頸部から胴部上端にかけて凹凸が著しく、エゴテなどの工具によって撫でられたことが想定される。頸部内面にはさらにシボリ痕が観察される。胎土は細砂を多く含み、器面はざらつく。中世井戸と考えられる SE 36 上層出土。

大甕(18・19・81~88・90・91・93~96) 破片ばかりであるが、胴部破片は叩き目が多様であることから、できる限り図化した。18は外反する口縁の端部に外傾する面をもつ。19は口径38cmと大きい。口縁端部は外傾する面をもち、端面は凹線状となる。18・19とも波状文などの施文はない。18がC 9区、19が中世井戸 SE 45 出土。

このほかに胴部破片がいくつかある(図版75)。ここでは、ほとんどの個体の叩き目について拓影化した。81のように外面が平行、内面が同心円というオーソドックスな叩き目は少なく、内外面ともにきわめて多様である。81は外面が平行叩き目ののちカキ目、内面は同心円叩き目である。外面の叩き目には木目かと思われるものが直交してみられる。試掘 a トレンチ出土。82は外面が彫りの浅い斜格子、内面が同心円である。斜格子叩き目には一方に平行する木目状の条線がみられる。B10区出土。83は器壁が薄く、断面のカーブが大きいことから小形品と考えられる。外面は丁寧な撫で、内面は彫りの浅い格子である。B 9 区出土。84は外面が彫りの深い細かく粗い格子で、器面はざらつく。内面は断面U字形の彫りの浅い平行叩き目で、これに直交する条線は木目かと思われる。B11区出土。85は外面が平行、内面が平行と同心円の組み合わせで、順序は前者から後者である。中世井戸 SE 45 第1層出土。86は木目に直交する平行で内面は彫りの浅い格子である。試掘 a トレンチ出土。87は外面が平行、内面は撫でで消されているが同心円と思われる。中世井戸 SE 35 出土。88は外面が木目に直交する平行、内面が断面U字形の太い平行叩き目である。B 9 区出土。90・91・95は同一個体で中世井戸 SE 37 から出土している。外面が一見珠洲焼の叩き目に類する平行叩き目で、内面は平行叩き目ののち撫でられる。93は外面が断面U字形の平行叩き目で、内面は撫でによって平滑である。94は外面が84と類似する細かくて粗い格子で、内面は平行叩き目と同心円叩き目である。焼成がやや軟質で黄灰色を呈する点で、特徴的である。

以上、叩き目の種類を概観すると、外面では84・94のような細かく粗い格子叩き目、90(91・95・96)のような各条線が不揃いの平行叩き目など、内面では83・86のような格子叩き目、90のような比較的細い平行叩き目、84・88のような太い平行叩き目、85・94のような平行叩き目と同心円叩き目(重弧)の組み合わせなどが注目される。

壺類底部(15~17) 小形のもの(15)、大形のもの(16・17)ともに高台外側からそのまま胴部へたちあがるものである。15は小形瓶の底部かと思われる。底面中央に糸切り痕をわずかにとどめる。試掘 a トレンチ出土。16は高台貼り付け部が明瞭に残り、つくりは粗雑である。底部内面は不定方向の刷毛目が施され(99)、高台貼り付けにともなう指頭圧痕が外面にある。高台は高くなく、内端部は丸い。大きさからみて長頸瓶と思われる。C10区出土。17は16よりやや大きく、高台は高く、内端があがる。底面にはいくつか指頭圧痕がみられ、「×」とみられる篋記号がある(100)。底部の内外面中央はよく磨滅しており、なんらかの二次的使用が想定されるが、墨痕はない。底部内面には自然釉が付着する。大形の長頸瓶かと思われる。B 9 区出土。

瓶類把手(14) 断面円形の環状の把手である。胴部との接合部が残っており、これからみると胴部の器壁は4mmである。側面には指頭圧痕がみられる。

2) 土 師 器 (20~43・48~57・89・92)

杯・碗・大碗・甕などの器種がある。黒色土師器もここに含める。ここでいう杯は高台をもたないものを指しているが、須恵器の無台杯とは器形が異なる。すなわち、口径と底径の比率が須恵器より大きく、「碗」ともいうべき器形を呈する。しかし、「杯」と「碗」とを区別する明確な基準がないため、便宜上「杯」とした。高台をもつものは灰釉碗と器形が類似し、「碗」と称することにする。土師器は須恵器に比して出土量が多いとはいえ、ほとんどがきわめて脆弱な器質であり、遺存状況はとくに不良である。整理では水洗いを極力避けたものの、取り上げの際にも土器の表面が土に付着して剥落するような状態であり、全体の器形まで復原できたものはごく少ない。逆にいえば、こうした土器の脆弱性は当期を特徴づけるものであろう。

杯 (20~29・31~38・40~42) 全体の器形がわかるものは出土量に対してごく少ない。20~23の4点では20・21がやや小さく、口径11.5~12.0cm・器高3.4cmであり、22・23は口径13.0~13.5cm・器高4.1~4.2cmである。内面黒色処理の42もこれとほぼ同じ大きさである。底径と口径との大きさは明確な相関関係が看取できず、底径はいずれも5~6cmである。口径と底径の比率は20~22がほぼ2対1で、23は2.6対1である。ただし、個体数が少ないうえに遺存度の不良な資料によるものであることには留意したい。底部破片は底径5~7cmで明確に分類はされない。

体部は内彎気味にたちあがり、口縁部が短く外反する。底部はわずかにくぼむものが多い。底面は糸切りをそのままとどめ、そのほかはロクロ撫である。ロクロ撫では内面が丁寧になされ、器面にほとんど凹凸がない。40~42は内面黒色処理・篋磨きをする以外、調整は同じで、底面にも糸切りをそのまま残す。底部外縁から体部のたちあがりにかけては、明瞭にくぼむものとこれがはっきりしないもの、くぼまずに丸味をもつものなどがある。糸切りには条線がとくに細かいもの(31・32)・粗いもの(35)などのちがいがあり、最終的な切り離し部に凹凸があるもの(31)などがある。条線の相違は糸原体のちがいを反映するものであろうが、器形・胎土などとの関係はないものと思われる。38・39の底面には焼成前に施したとみられる篋記号がある。それぞれの出土地点は22・24がB9区、27・28がB10区、23・32・39がB11区、20・26・33がD7区ピット5、38がD8区、29・40がD7区、25がC10区、31がSB67、21がSB10-3、34・37が試掘aトレンチ、42がSK50である。

碗 (30) 杯に高台を貼り付けた器形かと思われ、ほかに1点計2点が検出されたのみである。高台は高く、強く外方へ張り出し、端部は丸くおさまる。焼成は比較的よい。B4区出土。

大碗 (43) 口径20cmを測る。底部を欠くが、大形の碗かと思われる。口縁部は直立する。内外面ともロクロ撫で、外面に煤の付着がみられる。B11区出土。

甕 (49~56・89・92) 49~52が小形甕、53~56が大形甕である。小形甕は全体を残すものはない。52は口縁部から胴部上半を残す。口縁部は直線的にひらき端部は丸くおさまる。胴部上半はやや丸味をもつ。内外面ともロクロ撫である。底部はおそらく、49~51のように平底であろう。外面に煤が付着する。口径14cm、B11区出土。49~51は胴部下半から底部である。底面は糸切り不調整で、底径は6cm前後である。この大きさは杯とほぼ同じであるが、胴部のたちあがり杯よりも直立気味であること、二次焼成を受けていること、内面にロクロ撫での凹凸が目立つことなどにより識別される。49がB11区、50がB9区、51がD7区ピット7出土である。

大形甕は口縁部から胴部上端を残すものばかりであるが、全体の器形は長胴で丸底かと思われる。口縁

部は端部が上方へつまみあげられて端面をもつもの(53)、丸くおさまるもの(54・55)、口縁端部外面が凹線状となるものなどいくつかの形態がみられる。いずれも内外面ロクロ撫でである。胴部上半までロクロ撫でであり、下半から底部にかけては89・92のように叩き目を施すものと思われる。内面に叩き目をもつものはない。53がSB 10, 54が試掘aトレンチ, 55がD 8区, 56がB 9区, 89がB10区, 92がB11区から出土。

鍋(57) 口径37cm・推定器高15cmである。器壁は厚く、焼成は比較的よい。口縁部は短く直線的にひらき、端部は大甕53と同じく上方へつまみあげられるが、端部は丸くおさまる。体部は浅い半球状で丸底と思われる。内面および外面口縁部から体部上半はロクロ撫で、下半部に平行叩き目を施し、さらに叩き目の上部を横方向に篋削りしている。外面の口縁から5cm以下は煤の付着がみられる。B 9区出土。

高杯(48) 高杯の脚筒部と思われるものである。時期は平安時代でない可能性がある。B 8区出土。

3) 灰釉陶器(44~47)

器種は椀と皿である。図化した以外に椀の破片が2個体ある。胎土・色調・釉などすべて共通する。器肉はさほど緻密ではなく、露胎部の器面はややざらついている。

椀(44・45・47) 44は口径16cmである。口縁端部は外方へ短くのびる。内外面ともロクロ撫で、遺存部には全面淡白褐色の釉を施す。B9区出土。45も44とほとんど同じ形態であるが、釉は淡緑色を呈する。口縁部外端に小さな粘土粒がつくなど、丁寧なつくりではない。B 9区出土。47は底部で、直立する高台を付す。外面の高台貼り付け部をのぞきロクロ削りで、内外面の上部と内面中央に刷毛塗りかと思われる淡緑灰色の施釉がみられる。釉はほとんど剥落する。D 9区出土。

皿(46) 1点のみである。口縁端部は椀と同様、短く外方へのびる。内外面とも施釉されるが、ほとんど剥落する。C 8区出土。

4) 土器の特徴と年代

当遺跡の土器には良好な一括資料がなく、すべてが一時期に使用されたものとは即断できない面もある。しかし、須恵器の一部を除けば、あまり時期差を看取しえない様相を呈しており、ある程度一時期の器種構成を反映するものと考えられる。平安時代の遺構は併存したと推定される2棟の建物以外に居住施設は存在せず、今回の調査地点での生活は長くみても半世紀を超えないものと思われる。

さて、これらを一時期の土器構成とすると以下のことが指摘される。(1) 供膳形態は須恵器がごく少なく、土師器が主体を占めること、(2) 須恵器の大甕の叩き目に新種のもが目立つこと、(3) 少量ながら灰釉陶器が存在すること、などである。これらの諸点からみて、今池遺跡の一括資料のうち、これと比較象となるものはSD 3 IV層土器である。両者の相違点はSD 3には一定量の須恵器無台杯が存在するが、子安ではこれが一定量を占めないこと、子安では6・10などSD 3にはない須恵器が存在すること、SD 3には灰釉陶器が1点も含まれないことがあげられる。子安の須恵器杯のうち無台杯1はSD 3に典型的であり、有台杯3もSD 3中で若干例見受けられるが、有台杯2・4などはむしろSD 3の時期より遡るものである。また子安の灰釉陶器は底部内面中央にも刷毛塗りを加える手法から、美濃窯光ヶ丘1号窯に¹⁾比定される。灰釉陶器の有無がそのまま時期の新旧を反映するかどうかは検討を要するが、須恵器杯の減少を把えてみれば、子安遺跡の土器が相対的に今池遺跡SD 3 IV層土器よりは新しくなるものとみられる。

1) 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211 1982

今池遺跡の各々の一括土器については後述する予定であるが(第Ⅵ章1), 光ヶ丘1号窯がK-90窯期に併行することからみて、子安遺跡の土器は9世紀末葉から10世紀の前半の所産とみておきたい。²⁾

B 中世・近世の遺物

中世・近世の遺物は平安時代のものに比して少ない。中世に属する遺構は掘立柱建物が数棟と井戸8基で、平安時代のものより多いのであるが、遺物量はこれに比例していない。各期の遺構の性格が同一でないにしろ、平安時代と中世とでは日常容器の構成の質的な差や消費量のちがいが想定される。土器・陶器類のほか木器・石製品・石塔類などがある。中世のものが大半で、近世のものは陶器があるだけで、とくにことわらない限り中世の遺物をさす。なお、中世の遺物は鎌倉時代から戦国時代に至る時期幅がある。

1) 土器・陶器類(図版74・154)

¹⁾
珠洲焼, 瀬戸・美濃焼, 土師質土器のほか舶載品として青磁碗と天目茶碗がある。

珠洲焼(63~65・71~73・97・98) 器種は鉢・壺である。63は口径16.0cmの小形鉢である。口縁端部は面をもつ。灰黒色で堅緻である。SE 54下層出土。64は内面中央に自然釉がかかり、全く磨滅していないことから壺底部と考えられる。底面は静止糸切りである。灰黒色を呈し堅緻で63と類似する。SE 54下層出土。65はすり鉢である。底面は静止糸切りで、すり目はやや太い5本単位で全体で20条ほどと推定される。外面には粘土紐の接合痕がよく残る。内面はよく磨滅する。淡灰色を呈する。C10区出土。71は片口を残すすり鉢である。口縁端部は上方へつまみあげられ、端面をもつ。底面は静止糸切りである。すり目は細かい8本を1単位とし、「米」状に施すと思われる。内面はよく磨滅する。淡灰色を呈する。SE 37暗褐色土層出土。72は1/12の残存破片で、口径はやや不確定の要素がある。器壁は薄く、口縁端部は明瞭に面をもつ。内面下半はよく磨滅する。暗灰色で堅緻である。遺存部にはすり目は認められない。SE 35黒褐色土層出土。73はすり鉢底部で、内面はよく磨滅する。内面はロクロ撫での凹凸が著しい。底面は静止糸切りである。1/6を残す破片であるが、内面にすり目はない。暗灰色で堅緻である。B 6区出土。97は壺胴肩部の破片で、外面は平行叩き目で、内面はなめらかであり、丸いくぼみわずかにある。珠洲焼と考えられる。SE 37出土。98は珠洲焼特有の叩き目の破片である。外面に平行叩き目、内面には明瞭な丸いくぼみがある。SE 35黒褐色土層出土。96は外面は平行叩き目、内面は強い指撫でであるが、外面には叩き目がない部分もある。かなり大形の器形と推定される。胎土は1~2mm程度の不透明な白色粒子を多く含み、3~5mmの小礫も散見される。淡灰色でやや軟質である。中世井戸 SE 54下層出土であり、破片自体はかなり磨滅を受ける。珠洲焼以外の中世陶器と考えられる。

瀬戸・美濃焼(59・62) 59は美濃焼の灰釉丸皿である。口径9.8cm・器高2.2cmを測る。口縁部は折れ縁となり、内面体部に丸ノミによる削ぎを入れ、中央に先端が尖った篋で円とその中になんらかの刻みを入れる。高台の内外をのぞいて淡緑色の釉を施す。62は瀬戸焼の天目茶碗で、口径12cm・器高7cmを測る。丈高で腰の張りがほとんどなく、口縁部は短く直立し、わずかに外反する。高台は削り出しで低い。接地

2) 斎藤孝正「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃山台ニュータウン遺跡報告Ⅲ』(前掲 1981)
K-90窯期の上限年代は平城京東三坊大路東側溝(SD 650)上層資料・滋賀県鴨遺跡資料から、9世紀末葉まで遡る可能性がある。

3) 能登の珠洲窯以外でもこれと類似した製品を生産する在地窯が存在することは知られているが、越後の西南辺である頸城地方では珠洲窯の製品が直接流通した可能性は強いであろう。一応珠洲系陶器を含めて「珠洲焼」と称した。

面にわずかに糸切り痕をとどめる。高台の内側は中央が突出する。高台脇には段がある。外面の篋削りは体部中位まで及ぶ。釉は茶褐色で、内面全体と外面の2/3ほどに施す。釉の薄い部分は白っぽい胎土が透ける。露胎部は赤味がかった褐色を呈するが、器肉は淡黄灰色で、胎土は緻密でなく、軽量である。これに対し、60・61の天目茶碗は胎土がごく緻密で灰色を呈し、重量感があり、釉は黒味が強くて、一見して産地のちがいが看取され、舶載品とも考えられる。62はC10区出土。

土師質土器(66~70) 平安時代の土師器と比して胎土に砂を多く含み、硬質である。66・67は平たく厚い底部で、平高台ともいべき形態をとる。底面はともに糸切り不調整である。器形は皿か。66は試掘aトレンチ、67はC11区出土。69は胎土・手法など66・67と共通するが、底径8cmと大きい。大きな椀かと思われる。SB41柱穴出土。以上3点は明褐色を呈する。68は表面が磨滅しており、器形も判然としない。胎土は平安時代のもものと類似しており、中世でない可能性もある。D8区出土。70は66・67と器形・手法が全く異なる。口径15cm・器高2.7cmの比較的大きな皿であり、底部は不明瞭であるが糸切りではないと考えられる。体部中位から上は横撫でで、口縁端部は上へつまみあげられる。胎土は66・67よりは砂が少なく、色調も淡褐色でやや異なる。

内耳鍋(74) 口縁内側に環状の鈕をもつ鍋で、土師質である。全体の1/6を残す破片であるが、鈕は二つもつと考えられる。口径28cm・器高15~17cmと推定される。体部はひらきながらたちあがり、口縁は内外面にわずかな稜をもって短く直線的にひらく。口縁端部は面をもつ。内外面口クロ撫でで紐は貼り付けである。外面に煤が付着する。胎土は砂を多く含み、淡茶褐色を呈し、比較的硬質である。SX59第1層・B11区出土。

舶載陶磁器(58・60・61) 58は青磁の鎗蓮弁文碗の口縁部小片である。蓮花文を刻し、釉は青緑色を呈する。竜泉窯系。SE37出土。60・61は天目茶碗で、62とは全く異なる胎土・釉であり、舶載品の可能性が強い。60はSD1出土で表面に傷が多い。器壁は厚く、あまり腰は張らず、口縁部は外反する。釉は黒褐色で、外面下位の釉のたまりは茶褐色となり、口縁部外面は薄くコバルトブルーとなる。胎土は緻密で硬質である。内面下位にみえる細かい線状の傷は使用痕の可能性が強い。61は60より口縁部の外反が少ないもので、胎土は60と類似する。釉は内外面とも茶褐色の地に黒いにじみが下方に垂れている。C12区出土。

近世陶磁器(75~77) 75は切立碗で、内面と体部外面に淡白褐色の釉がかかる。76は浅いヒダ皿で、内面と体部外面に暗灰緑色の釉がかかる。77は碗の底部で、暗黄緑色の釉が均一にかかる。内面に焼成時のトチン痕が4点のこる。3点とも削り出しの高台をもつ。75がSD1、76・77がB8区の攪乱坑出土である。いずれも唐津焼か。

小結 以上の土器類の年代であるが、まず珠洲焼では63・71・72の鉢・すり鉢は口縁部が上方へつまみあげられて鋭角となるか、あるいは丁寧に調整された端面をもつ。すり目は71のすり鉢が細く、少ないことから、珠洲焼第Ⅱ期・第Ⅲ期に比定され、13世紀代の年代観が得られる⁴⁾。焼成がやや軟質ですり目のやや太くて多い65は、14世紀に下る要素をもつ。一方、青磁碗も蓮弁を丁寧に刻んでおり、13世紀後半に比定され、天目茶碗も同様の可能性が強い。これらに対し、土師質土器は越後における実態がほとんど不明であり、比較資料に乏しい面がある。これらは底部が糸切りのもものとそうでないものの2種がある。平安時代からの土師器製作技法を考慮すれば底部のちがいが年代の相違を反映し、糸切りのもものが古い可能性も考えられる。

4) 吉岡康暢「珠洲陶の編年をめぐる問題」『珠洲法住寺第3号窯』石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会 1977

このほかでは、瀬戸の天目茶碗は丈高の器形と高台のつくりなどから、15世紀後半に、美濃灰釉丸皿は16世紀中頃にそれぞれ比定され⁵⁾、さきの一群と異なる時期が存在することがわかる。内耳鍋は県内で全く類例がみられないが、長野県の例からみて、15~16世紀に比定されよう⁶⁾。したがって、中世の遺物は鎌倉時代(13世紀前後)と室町時代から戦国時代(15~16世紀)にかけての二時期に大別することができよう。遺構との関連では、SE 37が13世紀、SX 59・SK 16が15~16世紀に比定される。

2) 木製品 (図版76・155)

図示したものは井戸および墳墓から出土したものである。遺物は調査後の保存処置をあやまり、原形をそくなって図示することができなかつたものもある。また木質については理科学的検討を経していないのでふれることはできなかつた。

日常生活用具

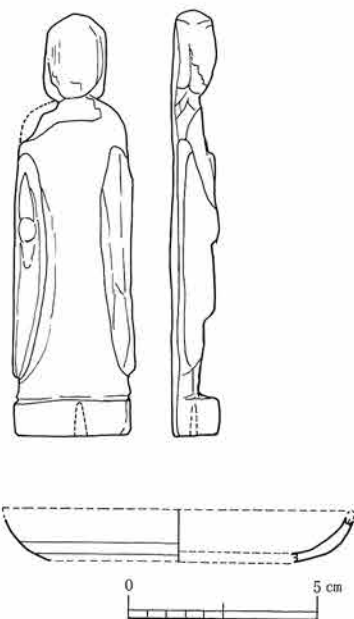
蓋(1) 直径17.8cmで断面台形の把手が付されている。把手は竹釘4本で円板にとめられている。円板の上下には2個1対の円形の補修孔が穿たれている。把手中央部には方形の削り込みがあり、つまみがさらに付されたものであろうか。把手をまたぐように2個1対の孔が3ヶ所にあるが、その目的は不明である。表裏には一見漆状のものが全面に付着しているが、煮汁の「アク」が長年にわたって付着したものであると思われる。SE 35出土。

曲物(2~5) 2は曲物の底板で直径約19cmである。全体的に腐食が著しく調整痕等については不明である。なお、縁辺部に釘穴等はない。SE 54出土。3は曲物の側板片で、裏面には斜行する浅い鋸目が細かく施され、全体的に表面がこげている。SE 54出土。4は底板で直径約21cmである。表面には手斧痕があり、直径4mmの釘穴が1個穿たれている。縁辺部は削痕が顕著に見られる。本資料はSX 59より出土していることから納骨容器の一部で、「あか桶」と呼称されるものであろう。5は板目を利用したもので縁辺部は鋭く削り取られ角張っている。縁辺には直径2mm・深さ5mmの釘穴がある。曲物底板としては縁辺で1.8cmと厚く、中央部ではさらに2.6cmと厚くなり用途の異なるものかもしれない。SE 64出土。

杓子(6) 現存長約20cmで、長方形の板より把部を削り出したものである。把部は握りやすくするために縁辺部が丸味をもつよう加工されている。全体的に腐食が著しい。SE 35出土。

箸(7・8) 杉材の板を長さ20cm前後、径5~7mmの断面長方形の細棒に切断し、これの端部を3回ほど削って先細りとしたものである。いずれも完形品ではない。7はSE 47、8はSE 35出土。

折敷(11~13) 11は一辺15.5cm・厚さ1.5mmのへぎ板を加工したもので、12は四隅が削られ、平面形は八角形となる。角折敷の底板である。縁辺には方2mmの穴が穿たれている。いずれもSE 35出土。13は一辺20.9cm・厚さ7mmを測り、両端部は面をとるよう削られている。直径4~5mmの釘穴が2個穿たれている。釘穴の位置が縁と平行なので折敷とするには問題が残るが、一応この範囲に入れておきたい。



第120図 仏像・漆器

5) 榎崎彰一『瀬戸・美濃』日本陶磁全集 中央公論社 1976

6) 小林秀夫「長野県における内耳土器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市その5 長野県教育委員会 1982

SE 24出土。

漆器(第120図2) 推定口径9.3cmを測る黒漆塗りの小皿片であり、高台が付されるのか否かは不明である。口縁のたちあがりはゆるく内彎気味で、体部下半には2条の稜がみられる。SE 35出土。

火鑽臼(10) 全長20.1cm・幅3.2cm・厚さ1.3cmを測る。火鑽の穴は5個づつ2列に穿たれている。上面径は8~10mmで内面は黒くこげている。上下端は削り落され、下端から7.5cmの所には切り込みが左側面に2ヶ所、右側面に1ヶ所見られる。SE 58出土。

下駄(21) 台長25.7cm・台幅14.3cm・台厚1.8cmを測る偏平な下駄で、後尾が構内に仕上げられている。台と歯が一木でつくり出された連歯下駄と呼称されているものであり、目は表から裏へ穿たれている。台は使用による磨滅が顕著で、足裏のあたる跡が浅くくぼみ、目の部分には鼻緒ずれがみられる。SE 24出土。

楔状製品(9) 全長8.7cmで断面三角形の楔状製品で、頭部は斜めに削られ、先端部は薄く鋭く削り出されている。全体的に遺存状況は良好である。SE 47出土。

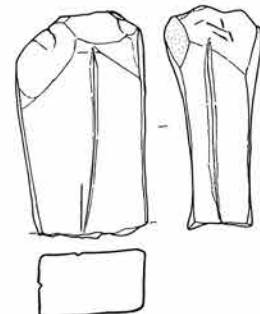
用途不明木製品

板材(14~18・20) 面取りされ釘穴のあるものと全く釘穴のないものがある。14は上下面が鋸で切断され、上面の半分はL字状に削られている。3~4mmの釘穴が4個穿たれている。SX 59出土。15は幅10.2cmで表面には手斧痕が顕著にみられ、直径3mmの孔が約5.0~5.5cm間隔で片側に沿って3個穿たれている。方形の蒸器の側板の一部とも考えられる。SE 58出土。16は幅広い板材で表面には手斧痕がみられる。裏面は焼け焦げている。SE 58出土。17は上下面ともに鋸で切断されており、表面には手斧痕がみられる。ほかの板材に比して厚さは厚く1.8cmを測る。SE 64出土。18は全長28.5cm・厚さ4mmで断面は台形を呈している。頭部は圭頭状に削られ、下部は2本の足がでるように半月形に削り出されている。頭部から5.0~5.5cmの所の両側面には抉りの切り込みが入れている。上半部を見るかぎりでは塔婆的であるが墨書銘文などはない。SE 47出土。20は上面に切断面があり、表面には方向が一定しないものの細条線が多数見られるが、裏面は腐食が著しく明確ではない。穴は直径3~5mmで4個穿たれている。また、右側面の下部には抉りの孔がある。16とともに建築材の一部であろうか。SE 47出土。

杭状製品(19) 全長31cmで断面楕円形の杭状製品である。頭部は丁寧に削られ丸味をおびている。頭部から先端部までは面取りされ、先端部は細く尖っている。全体に焼け焦げている。SE 64出土。

仏像(第120図1)

全高11.1cm・像高10.1cm・肩幅約2.5cmを測り、一枚の板材から彫り出した地藏菩薩像である。遺存状況は木質が腐食しているため軟弱で、彫りの細部については不明な所が多い。右肩および左手の部分は欠失している。顔の側面には長く垂れた耳があり、衣の左右の裾は大きく彫り込まれ、右手が袖口より出ている。左手は欠失しているが右手より高くあがっており宝珠等を持ったものであろう。裏面は偏平で円滑に仕上げられている。蓮台は無文で、下面から直径3mmの釘穴が穿たれている。おそらく板に打ち込まれた釘に差し込んだものであろう。SE 35出土。



3) 石製品(図版74・156)

砥石・石臼・石鉢の3種がある。石臼は茶臼と穀磨臼とがあり、いずれも石材は輝石安山岩である。

第121図 砥石実測図(2:5)

砥石 (第121図) 凝灰岩質の手持砥石である。断面は長方形で四面に磨面をもち、中央部は磨き込まれて肉薄になっている。正面および左側面にはU字状の筋が1条ある。

茶臼 (78) 推定直径19.5cm・高さ12.3cmの上臼である。側面には「引き手」を差し込む穴が穿たれている。上面から下面に向って穴が貫通している。

穀磨臼 (79) 上面径24.5cm・下面径28.5cm・高さ15.3cmの上臼である。最大幅は下半部にあり、どっしりとした安定感を持っている。磨面中央部には方3cm・深さ3.5cmの「柄穴」が穿たれている。磨面および側面は非常に荒れており磨面には幅広で粗いすり目が施されている。SK 16出土。

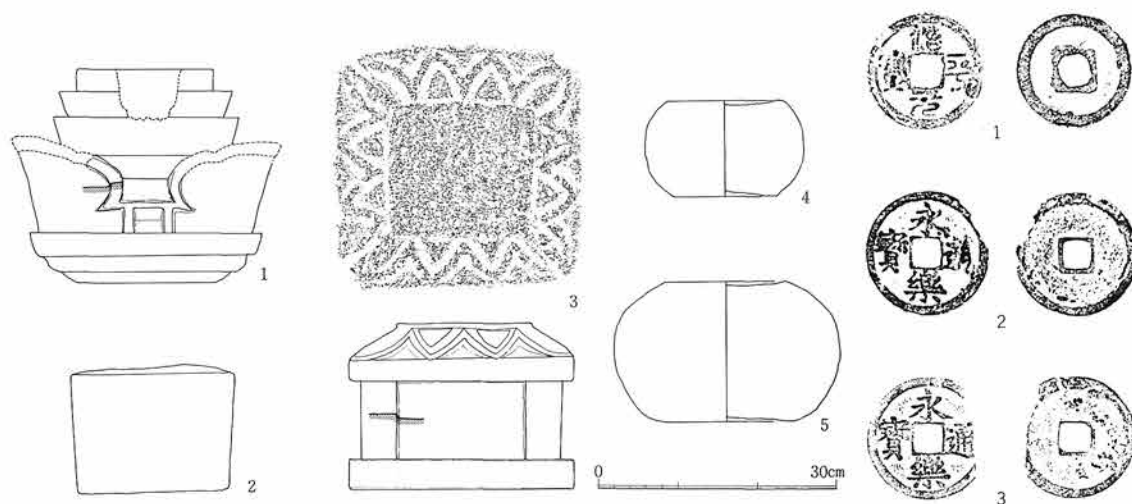
石鉢 (80) 口径38cm・底径36cm・高さ18.5cmを測る。器面は非常に荒れているものの、内面には磨かれた痕跡があり、石皿的要素を持って使用された可能性が多分にある。SK 16出土。

4) 石 塔 (図版156)

宝篋印塔と五輪塔があり、墓坑 SX 59やその周辺部の洪水堆積層中から多く出土している。石材は宝篋印塔の基礎を除いて輝石安山岩である。

宝篋印塔 (1・3) 1は笠で高さは26.5cm、幅は軒部で28cmを測る。軒部を中心にして下へ2段、上へ5段としたものである。下段は角が意図的に落されて丸味をおびているのに対して上段の角は鋭角的に削られ、段と段との境界部には細かい鑿の痕が見られる。隅飾突起は四隅とも先端部が欠失しているが、幅1.5~1.8cmで輪郭がとられている。隅飾の下部は軒隅から約1cm内側に切り込み、わずかに外反気味に刻み出している。柄穴は直径8cm・深さ6.5cmで、柄穴底面には鑿痕が顕著に見られる。O8区の遺物包含層上層の洪水堆積層出土。3は基礎で高さ20.7cm・幅28.3cmで上部段型には彫りの深い反花座が彫り込まれている。格座間は長辺15.5cm・短辺9.8cmの長方形で銘文等はない。角閃石安山岩でC11区出土。

五輪塔 (2・4・5) 2・4・5は五輪塔の地輪もしくは宝篋印塔の塔身と思われるものである。幅は上面で17.5cm・下面が19cmで下部がわずかに幅広である。4・5は水輪で両者とも上面・下面ともにくぼんでいる。4は最大幅20cm・高さ12.2cm、5は最大幅28.3cm・高さ17.6cmで、2点とも最大幅に比して高さが低く安定している。2・4はSX 59墓坑中、8はSX 59付近の遺物包含層上層の洪水堆積層出土。



第122図 石 塔

第123図 銭 貨 (2・3)

5) 銭 貨 (第123図)

銭貨は合計3枚出土している。1は治平元宝(北宋治平元年 1064年)、2・3は永楽通宝(明永楽6年 1408年)である。直径は1が2.3cm、2は2.5cmを測る。いずれも洪水堆積層より出土。

6) 瓦 (図版67・151)

近世の溝SD 1から丸瓦片1点(14)が出土している。無段の丸瓦狭端部である。凸面は叩き目を丁寧に縦位の篋削りで消す。側面は分割断面を篋削りする。凸・凹面とも面取りを施す。凹面端部は横位に篋削りを施す。布目は粗い。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成は硬質である。今池遺跡・下新町遺跡出土の瓦と同様に奈良時代の瓦と考えられる。

4 小 結

A 調 査 成 果

今回の子安遺跡の調査区では、平安時代・中世・近世の3時期がみとめられ、中世はさらに鎌倉時代の13世紀前後と室町時代の15世紀後半から16世紀中頃までの2時期に分けられる。これらの時期のうち、建物が存在し、直接生活とかかわる遺構が存在したのは平安時代と中世前半期の2時期である。

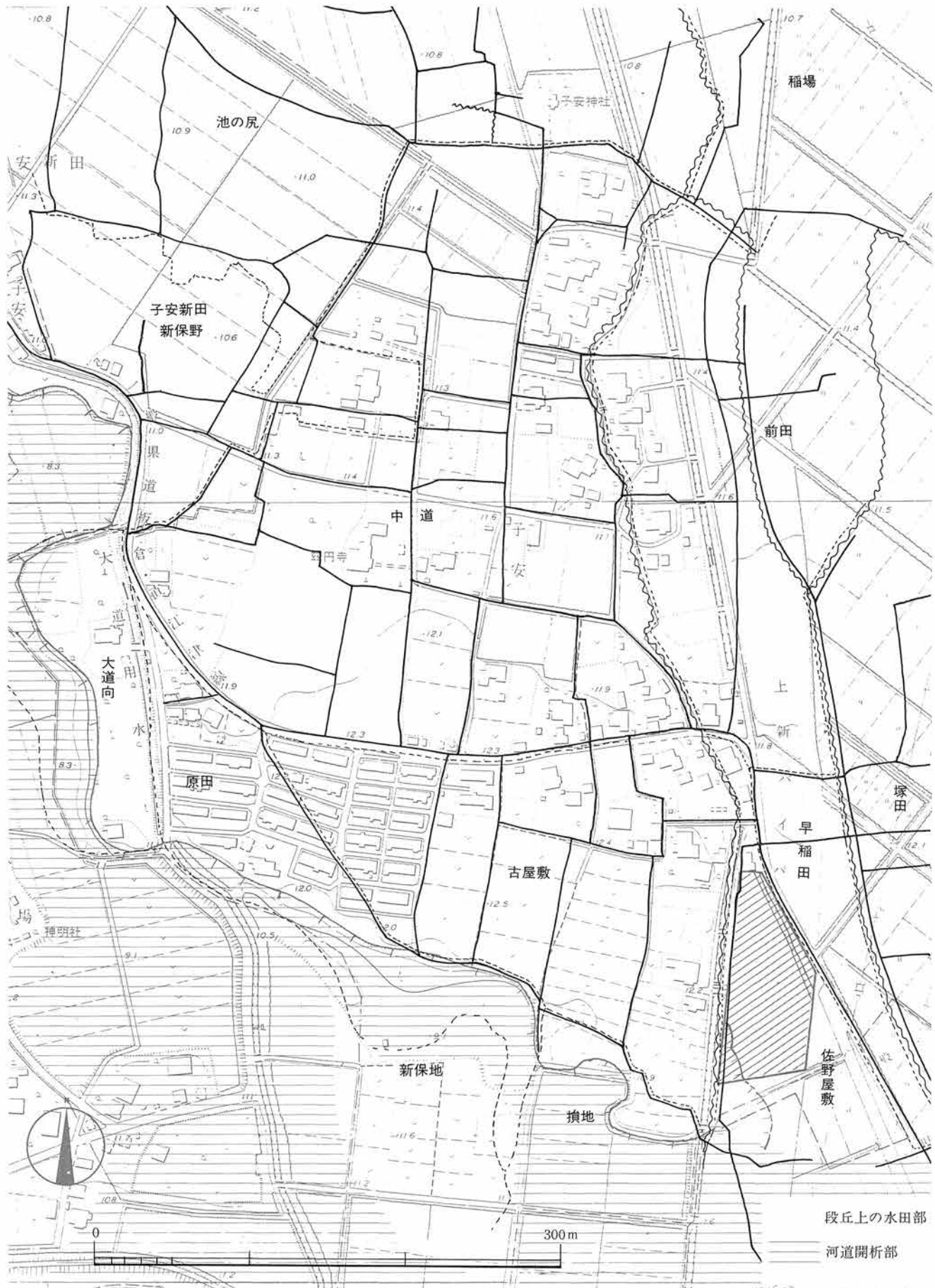
平安時代では2棟の掘立柱建物と畠の畝とも考えられる畝状小溝がある。出土している土器はほぼ9世紀末から10世紀前半頃に比定され、当地での生活が長期にわたって継続していた痕跡はない。建物は桁行2間～3間・梁間2間で、規模は大きくない。畝状小溝は区画された南北50m・東西25mの範囲内(約1反)に存在し、この溝群を区画する小溝もある。この遺構と建物との時期的な関係は明確にしがたい面もあるが、両者が併存している可能性も充分にある。この種の遺構は今池遺跡でも時期決定が困難であるが、9世紀前後の建物群と重複しない位置関係にあるものも存在し、それらの遺構と併存する可能性が指摘される。したがって、子安遺跡の場合も建物が営まれた時期に比定される可能性もある。少なくとも中世以降にはくだらない。畝状小溝の性格については今後検討する必要があるが、この遺構が畠であるとすれば、水田以外の耕作地の存在や実態を示すものとしておおいに注目される。そして、これが建物との同時存在とすれば、宅地ともなう畠という平安時代の一景観が復原されるのである。¹⁾

一方、中世では建物が営まれたのは鎌倉時代の13世紀前後である。検出された建物は9棟で、井戸が8基ある。建物ではSB 9など建物とみるにはやや問題を残すものもあるが、束柱をもった建物が多く、SB 65のように5間×4間という四面廂をそなえたとみられる建物もある。建物の方向は方位に一致するか、これよりやや西偏するもの(SB 41・SB 5・SB 60・SB 65・SB 9・SB 72)と、方位より東偏するもの(SB 49・SB 61・SB 66)の2種に分類され、それぞれ時期を異にするとと思われる。

8基の井戸はすべて円形の素掘り井戸である。井戸は覆土から2種に大別され、時期が異なるものと思われる。平面確認の段階で最上層に洪水堆積層が丸く中心部にあるもの(SE 36・SE 58・SE 54・SE 64)と暗褐色だけのもの(SE 35・SE 37・SE 45・SE 47)とがある。これらの井戸は建物ともなうものと推定されるが、時期を明確に決定するほどの資料がないため不明と言わざるを得ない。いま、建物の方向に

1) 畠と宅地が同時に営まれたものと考え、律令的土地区分による「園地」ともみられる。「園地」は宅地の周辺に存在するものが多く、農民の自家消費

に供されることも考えられる。また、私地的性格が強いとされることは重要な側面であろう。(弥永貞三「律令的土地所有」『岩波講座日本歴史』3 1962)



第124図 子安遺跡周辺の地形と地割

上越市発行1/2,500地形図
昭和54年空撮・昭和56年現地調査

よって建物群を抽出し、それぞれが同時期に存在したと仮定すれば、SB 41と重複関係にあるSE 45は東偏する建物群と同時期のものと推定される。さらに、西偏するSB 41の柱穴はSE 45の覆土を切って作られている。よって、西偏する建物群は東偏する建物群より新しい時期のものであり、東偏する建物群と覆土が暗褐色の井戸、西偏する建物群と洪水堆積層が丸く中心部にある井戸にグルーピングされる。しかし、この2者の時間差については出土遺物からは判然としない。

方向によって建物群の抽出を行い、これらが同時期に存在したと考えれば、本遺跡では3棟あるいは5～6棟で構成された建物群に井戸がともなっている。これらは屋敷地（居住地）と思われる、この屋敷の居住者が舶載の青磁・天目茶碗を所有していたものであろう。舶載陶磁器や四面廂をもつ建物などから、本屋敷は下級農民層のものとは考えられず、しかるべき階層のものであると推定される。

中世集落のあり方は全国的に見ても未解明の部分が多く、新潟県内でも集落の実態に迫るような調査例はほとんどない。それだけに今回の調査で得た成果は貴重で、今後の周辺部の調査・研究に期待したい。

B 遺跡の時期と性格

今回の調査地点は、前述したとおり遺跡の東辺にあたりと考えられる。当遺跡における発掘調査は今回がはじめてであり、現状では遺跡の実態は不分明である。表面採集の所見によれば、遺跡の範囲は子安の集落のほぼ全域をおおうほどの規模をもち、東西・南北とも500m以上と推定される。

採集遺物で注目されるのは灰釉陶器である（第2図）。2点とも集落南部の畑で採集された。1は椀で、2は皿である。ともに高台は断面方形のいわゆる角高台であり、器壁は厚く、内面施釉である。K-14号窯式で猿投産かと推定される。K-14号窯式は現段階での研究成果によれば、少なくとも9世紀後半以前に遡ることが考えられる。この時期の灰釉陶器は、越後では南蒲原郡栄町半ノ木遺跡¹⁾に出土例があるにすぎず、灰釉陶器の出土地が最近とみに増加したとはいえ、出土例は依然少なく、その稀少性がうかがわれる。

さて、子安遺跡の時期的な初源であるが、今回の調査地に関する限り、9世紀中頃までは人々が定着した形跡はなく、採集遺物では須恵器に対して土師器が多く、灰釉陶器も散見されることから、奈良時代まで遡る可能性は少ないとみられる。いずれにしろ平安時代にはいつてから盛期を迎える遺跡とみられる。一方、中世遺物も比較的多く採集され、中世まで存続していたことが考えられる。

ところで、子安の集落は明治期の更正図をみると、一町方格となる地割が確認される（第124図）。一町方格の地割は方位から5度から10度ほど東偏する方向で、東西・南北とも5町ほどが復原される。通常、水田部では条里地割と関係して、一町方格の地割がみられる場合もある（第II章2参照）が、一般集落の地割は自然の地形に制約されていることが多いと思われる。子安の集落は沖積段丘の縁辺部にあたる微高地であり、とくに一町方格の地割が施行される地形ではないと考えられる。したがって、このやや特異とも思われる地割は、かつてここになんらかの計画的な土地区画がなされたことを示唆するものとみられる。かりに、古代まで遡って、このような一町方格の土地区画が施行されたとすれば、ひとつの都市計画がなされたこととなり子安遺跡の性格を象徴する点として注目される。子安遺跡に南接する今池遺跡は前述し

1) K-14号窯期の年代についてはなお見解の相違がみられる。最近、橋崎彰一氏と斎藤孝正氏はこれを9世紀後半に位置づけた（橋崎「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会 1983、斎藤「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古

学ジャーナル』211 1982）。一方、9世紀前半に比定する意見もなお根強い（吉田恵二「緑釉陶と灰釉陶の相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』211 など）。

2) 関 雅之ほか「半ノ木遺跡調査報告」前掲

たとおり、一般集落とは考えられない大規模な建物群を主体としており、これら建物群が9世紀中葉頃には廃絶し、その後は一般農村的な性格に変容したと推定される。先にみたK-14号窯式の灰釉陶器は9世紀中葉前後に遡る可能性もあり、今池遺跡の大規模な建物群が廃絶する画期的な時期にあたることも考えられる。とすれば両遺跡の消長が一連の動きのなかで理解され、子安遺跡の性格はおのずと決定されてこよう。今後の調査が期待される。



子安遺跡遠望（今池遺跡C地区より）

第Ⅵ章 考 察

1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器

今回の調査では今池遺跡を中心に豊富な土器が出土した。今池遺跡では8世紀から9世紀の良好な一括土器がいくつかあり、当期の土器様相はかなり明確に把握された。下新町遺跡では8世紀の一括土器はあるものの、10世紀代とみられる時期の一括土器はなく、子安遺跡でも同時期の一括土器はない。しかし、これらの10世紀代の土器のあり方は、比較的単純であり、包含層出土土器を中心にこれを抽出することは可能である。これらを加えることによって、今池遺跡群における8世紀から10世紀の土器様相が把握される。この時期は奈良時代から平安時代中期にあたり、律令体制の成立から崩壊という過程にある。

これまで、越後南西部の頸城地方における奈良・平安時代の土器は8世紀初頭から前半代を中心とする新井市栗原遺跡出土例のほかはほとんど不分明な状況であった。栗原遺跡は頸城郡衙かこれに類する性格が推定される遺跡で、その出土土器は遺跡の性格と関連して、須恵器生産の開始とこれに象徴される「律令的土器様式」の成立を明示するという、重要な歴史事象をものがたるものである。¹⁾しかし、8世紀中葉以降、土器様相がどのように展開するのかという問題は明らかではなかった。したがって、今池遺跡群出土の土器によって、頸城地方の奈良・平安時代の土器の概略が把握されることは意義深いものである。ただ、今池遺跡群の性格による特性は考慮する必要があり、また、この土器様相がそのまま越後全域の様相と理解することは妥当ではないであろう。越後国は長大な領域を有し、越後のなかでも地域によって隣接する地方の影響などによる地域色が存在することが予想される。なお、頸城地方における須恵器窯の実態はかなり明らかにされつつあるが、²⁾上越市向橋瓦窯跡をのぞいては調査がなされておらず、³⁾かならずしも明確ではない。⁴⁾

A I期からⅦ期の区分と暦年代

今池遺跡における一括土器とその推定年代はさきに述べたとおりで(88頁 第7表)、8世紀から9世紀までの約200年をI期からⅦ期に分けた。子安遺跡と下新町遺跡の土器(C期)はこれに続くものと考えられ、これをⅦ期とし、全体でI期からⅦ期に区分した(第125図)。この区分はあくまでも一括土器を主体として設定したものであり、それぞれの間で変化が大きいものと小さいものがあると思われる。また消費遺跡での一括土器という性格上、個々の土器の示す時期相には一定の幅があり、それぞれの一括土器か

1) 坂井秀弥『栗原遺跡』第4次・第5次調査概報 1982 前掲
坂井秀弥「越後における七・八世紀の土器様相と画期」『信濃』35-4 1983
坂井秀弥『栗原遺跡』第6次調査概報 前掲
以下、栗原遺跡の土器とこれに関連する土器生産についてはこれらによっており、とくに文献を明示しない。

2) 小島幸雄他『掘り起された古代のくびき』上越市立総合博物館考古特別展示図録 1983
3) 高田市文化財調査委員会『高田市文化財調査報告書11集』1969
4) 上越市教育委員会には採集品ではあるが多くの窯跡の土器が所蔵されている。今後この資料により、およそその実態は解明されるものと思われる。

ら任意に土器を抽出すれば、ほとんど変化のないもの、あるいは新旧関係が逆転するものがある。しかし、一括土器総体として個々を把握すれば、一定の傾向や様相差をとらえることは可能であり、ここにⅠ期からⅦ期までの時期設定がなされるのである。このうちⅣ期とⅦ期は前後に細分したが、Ⅳ期については大きな時期差はないと思われ、かなり時期的に重複するものとみられる。

暦年代はこれを直接示す根拠はまったくないが、次の点によりおおよその年代が推定される。まず、Ⅰ期のA地区の土器は栗原遺跡SD 25一括土器とかなり類似性が指摘されるが、栗原遺跡SD 25一括土器は平城宮Ⅰ土器⁵⁾と器種構成や土器の形態が共通しており、これを介してA地区の土器年代が比定される。次に畿内地方からの搬入品と考えられるSK 102出土の小形長頸瓶はおもに8世紀末から9世紀前半の間にみられ⁶⁾、これによってSK 102出土土器の年代が比定される。また、灰釉陶器との共伴関係も参考にされる。灰釉陶器の年代については近年かなり一致した見解に達していると考えられ、年代決定のひとつの資料にすることができるであろう。この点については、Ⅵ期のSD 3Ⅳ層土器に灰釉陶器が全く含まれていないのに対して、Ⅶ期の子安遺跡・下新町遺跡ではそれぞれ光ヶ丘1号窯式(K-90期)・大原2号窯式(O-53期)の灰釉陶器が一定量含まれていることが注目される。K-90期とO-53期は西暦900年前後から10世紀代に比定されており、これより先行するSD 3Ⅳ層土器はほぼ9世紀後半を中心とする時期と考えられる。以上3点をおおよその根拠として、それぞれの年代を推定した⁹⁾。

B 諸段階の設定とその様相

各期の詳細な土器様相については第Ⅲ章で述べたところであり、ここではまず土器構成の大きな変化に注目したい。8世紀から10世紀の土器はいうまでもなく須恵器と土師器を主体とする。これらの消長・展開や技法上の変化をみると、次の2点がとくに注目される。

まず第一には、供膳形態における須恵器と土師器の交代現象である。須恵器生産が開始されてまもない8世紀前半には、須恵器・土師器の機能分化が明瞭であり、供膳・貯蔵形態が須恵器、煮沸形態が土師器という北陸地方中西部(越前・加賀・能登・越中)と同じあり方がみられる。この機能分化はⅤ期まで明瞭であり、Ⅵ期以降みられなくなる。土師器の杯は8世紀代にもごくまれに存在し、Ⅳ期には5~10%、Ⅴ期には20%ほどの占有率(供膳形態に土師器が占める割合)を示し、平安時代以降微増する傾向がある。しかし、Ⅵ期では土師器の占有率は約70%に激増しており、この時期が大きな画期といえる。ただ、Ⅵ期の土師器杯の系譜はⅢ期までの杯ではなく、Ⅳ期に求められ、その点ではこうした動向がⅣ期に萌芽したことは注目される。

第二には、須恵器杯類の製作手法として底部の糸切り技法が篋切り技法とならんで、かなり盛行しており、この消長により一定の段階が設定されることである。糸切りの初現はⅢ期であり、これ以降Ⅳ期・Ⅴ期を中心にしてみられる。糸切りが全体で占める比率をみると、Ⅲ期はごく少なく、Ⅳ期はSK 257土器で15~20%、SK 102土器で30~35%となお篋切りが優勢であるが、Ⅴ期では糸切りが篋切りを完全に圧

5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅹ』1978

6) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1976

7) 斎藤孝正「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ』1981

8) 吉田恵二「緑釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』211 1982

9) 北陸地方中西部の編年が最近吉岡康暢氏によって発表された(『奈良平安時代の土器編年』『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983)が、ここでの年代観とほぼ一致していると考えられる。なお、今池遺跡群の土器は須恵器杯類の糸切り技法の展開という側面をのぞけば、北陸地方中西部の土器と共通する面は多い。

倒している。とくに無台杯ではこの傾向が強く、篋切りはほとんどみられない。Ⅵ期になると再び篋切りが盛行する。Ⅲ期の糸切り技法の存在は、その初現期の問題について重要であるが、相対的な製作技法のあり方からみれば、Ⅰ期からⅢ期までの篋切りの時期とⅣ・Ⅴ期の篋切り・糸切り併存ないしは糸切り主流の時期とに分けることができよう。須恵器の糸切り技法に関連して、土師器の杯・甕類でも糸切り底はⅣ期以降にみられるようであり、土師器についても須恵器と関連した糸切り技法の展開がみられるもの¹⁰⁾と思われる。

以上2点によりⅠ期からⅦ期を通観すると、ほぼ4つの段階に分けて考えることができる。すなわち、第1段階(Ⅰ～Ⅲ期)、第2段階(Ⅳ・Ⅴ期)、第3段階(Ⅵ期)、第4段階(Ⅶ期)である。以下、各段階ごとに概観する。

第1段階(Ⅰ～Ⅲ期)

ほぼ奈良時代にあたる。Ⅲ期にごく少量の糸切りの須恵器杯類が存在するが、ほかはすべて篋切りである。土師器はほとんど甕で占められるが、これに大きな変化がある。すなわちⅠ期では土師器A(非ロクロ土師器)が主体で、土師器B(ロクロ土師器)をわずかに含むが、Ⅱ期では土師器Bが主体であり、この間に大きな変化がある。Ⅲ期以降ではほとんどが土師器Bである。供膳形態ではⅠ期に赤彩土師器が若干例ある。これも土師器Bである。内外面黒色の土師器(第125図20、以下同図編年表の番号を示す)は特異である。赤彩土師器はⅡ期以降ほとんどでみられない。

須恵器有台杯A(身の浅い一般的な形態)はⅠ・Ⅱ期では口径13～15mの大形のものが多く、Ⅲ期には12～13cmのものが多くなる。これ以降この大きさが継承される。有台杯B(身の深い大形品)はⅠ期では金属器模倣品(7)をのぞけば、明確ではなく、Ⅱ期に定着する。有台杯C(身の深い小形品)はⅠ期から存在する。形態は無台杯・有台杯とも共通し、Ⅰ期は底部が突出気味で、体部下半が張り、口縁部が外反する。Ⅱ期以降この傾向は弱まる。糸切りの杯は無台杯・有台杯とも、篋切りのものと明確な形態差はなく、この点ではⅣ期以降と明瞭に異なる。すなわち、無台杯は口径に対して底径が大きく、有台杯は体部下半が丸味をおび、底部との境が不明瞭である。この点は糸切り杯の初段階の一特徴としてよいかもしれない。杯蓋は有台杯Aにともなうとみられ、この口径に対応する。Ⅰ期のものはつくりがごく丁寧で、天井部はロクロ削りが広範囲に施される。杯も含めて内面に撫でを加えるのもⅠ期に多い。杯と同様に糸切りとみられる杯蓋も存在する(58)。ただし、糸切り痕はロクロ削りで消されている。なお、下新町遺跡SK 31からⅢ期とみられる皿が出土しているが、今池遺跡では1点も出土していない。

第2段階(Ⅳ・Ⅴ期)

平安時代初頭の8世紀末から9世紀中葉の時期である。須恵器の糸切りが増加し(Ⅳ期)、さらに篋切りを凌駕する(Ⅴ期)。須恵器の杯類はⅢ期の大きさをほぼ継承し、器種構成にも大きな変化はみられない。ただし、土師器の供膳形態が微増する傾向はⅥ期の様相のきざしとして注目される。この土師器杯などの底部は糸切りの平底であり、Ⅲ期までのものとは形態も異なる。杯ばかりではなく、小形甕も底部糸切りのものが存在し、杯と甕が互に関連した製作技法によっていることが知られる。SK 102の碗(104)は

10) 須恵器杯類の糸切り技法は、北陸地方中西部ではほとんど未発達であり、10世紀以降についても一定の器形と関連して存在するだけで、かならずしも盛行してはいない。この点では今池遺跡群におけるこうした現象は特異とみられる。越後全域が同様な状況であったかどうかは、現状では資料不足のため明確

ではない。ただ越後北東部の豊浦町曾根遺跡の土器(前掲報告書)はむしろ北陸地方中西部の様相と類似しており、南西部の頸城地方とは異なっている。今後糸切り技法の流入経路は検討課題であるが、頸城地方の地理的位置などを考慮すれば、東海地方・信濃地方などとの関連は十分予想される。

		須 恵 器			
		寛切り無台杯 糸切り	寛切り有台杯A 糸切り	寛切り有台杯B・C 糸切り	杯蓋
I	A地区				
II	SK24				
III	SK21B				
IV	SK257				
V	SK102				
VI	SD3				
VII	子安				
VII	下新町				
		灰釉陶器			
		緑釉陶器			

第125図 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器

長頸壺・瓶 稜椀 短頸壺 横瓶 鉢		甕		土師器			備考	年代
				杯・椀	甕	鍋		
<p>14(618) 15(619) 16(614) 17(615) 18(617)</p>				<p>19(620) 20(622)</p>			19 赤彩土師器 20 黒色土師器 21~23 土師器4 (非ロクロ) 25 S K37出土	710
<p>41(22) 42(33)</p>		II		<p>21(630) 22(626) 23(634) 24(623) 25(45) 43(35) 44(36)</p>				
<p>59(80) 60(81) 61(86)</p>		III		<p>62(117)</p>			62 黒色土師器 53・61・62・S K21A出土 55 下新町S K31出土 58 糸切りか 糸切りか	750
<p>74(197)</p>		IV		<p>75(199) 76(205) 77(206) 78(207) 79(212) 80(213)</p>				
<p>98(161) 99(160) 100(157) 101(158)</p>				<p>102(168) 103(167) 104(165) 105(166)</p>			95・96 糸切りか	800
<p>127(295) 128(266) 129(269)</p>		V		<p>131(276) 132(286) 133(284) 134(285) 135(305)</p>				
<p>150(345) 151(347) 152(347) 153(456) 154(366) 155(357) 156(354) 157(358) 158(454) 159(459) 160(360) 161(361)</p>		VI		<p>162(386) 163(381) 164(388) 165(396) 166(473) 167(410) 168(413)</p>			154 緑色陶器 167・168・176 黒色土師器	850
<p>183(111) 184(17)</p>		VII		<p>187(22) 188(23) 189(30) 190(52) 191(50) 192(53) 193(56) 194(57)</p>				
<p>199(118)</p>				<p>202(125) 203(126) 204(131) 205(133) 206(136) 207(143)</p>			166~198 灰釉陶器 196 199 緑釉陶器	900
<p>200(20) 201(113)</p>				<p>208(147) 209(146) 210(144)</p>				

0 20cm

0 20cm

0 20cm

1000

Ⅶ期以降、とくに11世紀頃に盛行すると推測されるが、この段階ではまれである。

須恵器杯類は、篋切りのものは前段階より底部がさらに平らになり、体部のたちあがり直線的となる。底部の器壁も前段階よりは薄い傾向にある。糸切りの杯類は篋切りのものと明瞭な形態差がある。無台杯は底径が口径の1/2前後（底径指数50）で、「杯」というより「椀」ともいうべき形態となり、体部下端がくぼむものが多い。有台杯は底部の境が明瞭となり、体部から口縁部はほとんど直線的である。内面も底部と体部の境が明瞭であり、底部内面はとくになめらかで、器壁が均一である。これに対し篋切りの杯類は体部下半が丸く、底部との境が不明瞭で、内面の凹凸が大きい。杯蓋も篋切りと糸切りがあり、篋切りのものは天井部にロクロ削りをおこなわないか、粗くおこなうのみで、篋切り痕をとどめるものが多い。一方、糸切りのものは天井部にロクロ削りを比較的丁寧におこなっており、糸切り痕を消している。糸切りのものは内面がなめらかで器壁が相対的に薄くて均一なことは杯類と同様である。

第3段階（Ⅵ期）

8世紀前半以来の供膳形態における須恵器の主導的なあり方が崩れ、土師器杯が激増するという大きな画期であり、ある意味では「律令的土器様式」が瓦解する時期といえる。9世紀後半を中心とした時期である。須恵器では篋切りの無台杯が多い。糸切りはⅤ期に盛行していたが、当期には有台杯が多少あるだけである。篋切り有台杯はAタイプが明確ではない反面、Bタイプでもやや小ぶりなもの(145)がある。これに杯蓋がともなうものとみられる。篋切りの無台杯は次の段階ではほとんどみられなくなり、この時期を特徴づける存在である。これは偏平な器形で、器壁が底部を含めて2～3mmととくに薄く、器面はロクロ撫での凹凸が著しく、灰色から暗灰色の縞状を呈しているなど、前段階までの須恵器と明瞭に区別される。これに加えて、Ⅴ期では篋切りの無台杯が明確ではないことから、当期の篋切りの無台杯は、Ⅳ期の無台杯の系譜から生まれたものとは考えられない。

一方、土師器杯は底部糸切り不調整で、形態・手法ともにⅤ期の須恵器の糸切り無台杯とほぼ共通する。同じ形態で、内面黒色処理した黒色土師器が10～20%含まれるが、これについては底面から体部下半をロクロ削りする。高台をもつ椀は一般的ではない。土師器の甕・鍋は口縁端部が屈折して短くたちあがるものが多い。小形甕は杯と同様にすべて底部糸切りであるが、かなり大きなものでも糸切りのものがある(14)。外面を広範囲に篋削りをおこなうものはない。胎土は杯を含めて精良であり、焼成は軟質である。前段階までの甕・鍋には胎土に意図的に混入したとみられる小礫が含まれるが、当期以降はみられなくなる。

貯蔵形態の須恵器甕類も大きな変化がみられる。形態上では広く安定した平底があり、製作技法が変化したことがうかがえる。また、叩き目の種類はそれまで一般的であった外面の平行叩き目、内面の同心円叩き目という組み合わせが少なくなり、内面に平行や格子の叩き目を用い、これを消すものもある。ほかの瓶類は多様な器種があり、有耳瓶もみられる。

第4段階（Ⅶ期）

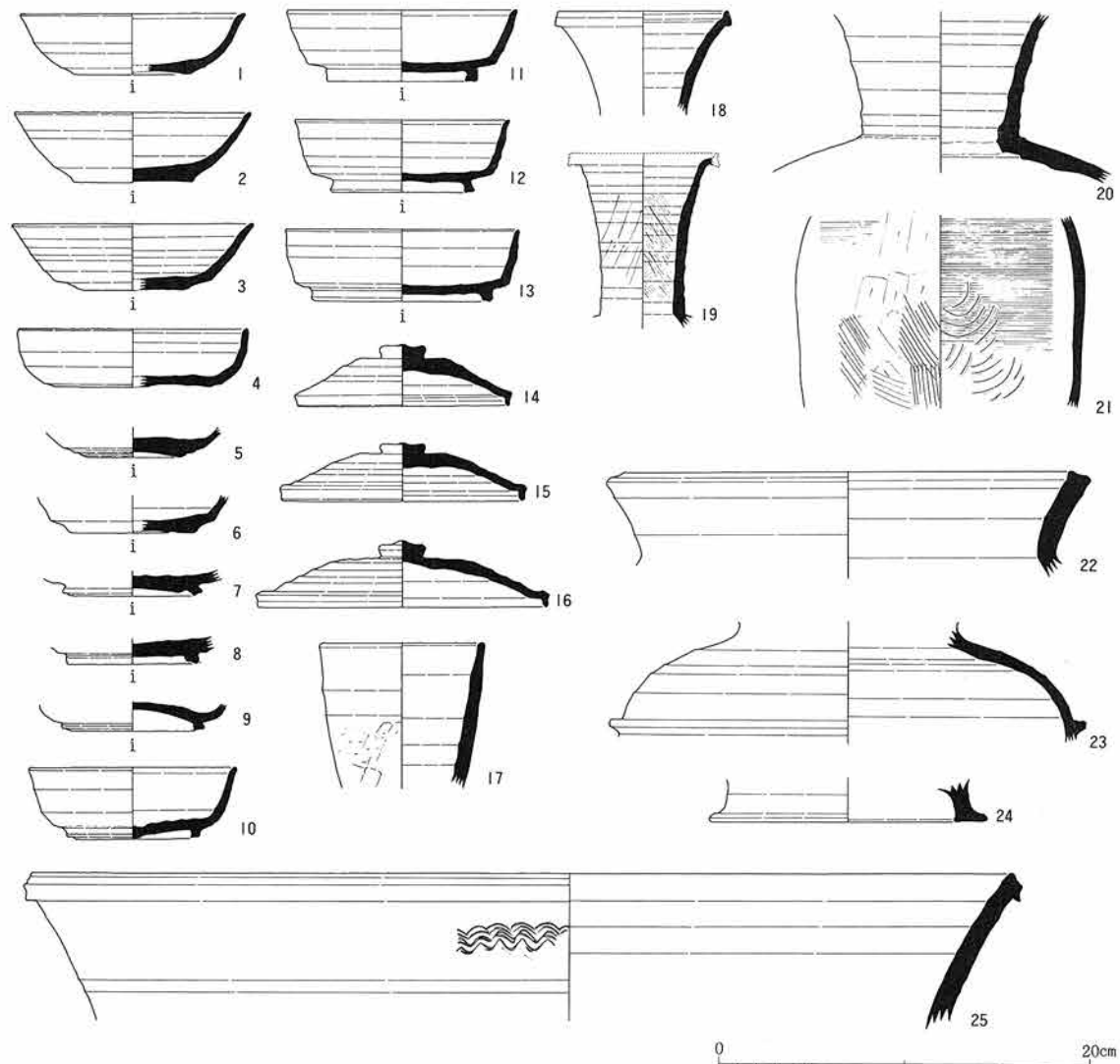
Ⅵ期を特徴づけた須恵器の篋切り無台杯もほとんどなくなり、供膳形態の大半が土師器となる。平安時代中期の10世紀にあたる。子安遺跡がこの前半、下新町遺跡が後半を中心とすると考えられる。灰釉陶器は稀少な存在ではなくなる。須恵器にはそれまでの杯とは異なる椀形の器種(182)があるが、少ない。灰釉陶器はほとんど美濃産で、子安遺跡は光ヶ丘1号窯式・下新町遺跡は大原2号窯式を主体とする。緑釉陶器はこれよりごく少なく、近江産とみられる。貯蔵形態は長頸瓶と大甕がほとんどで、器種は少ないようである。長頸瓶は口頸部が太くなる。甕類の叩き目は前段階よりさらに変種のものであらわれ、粗い格子や平行の叩き目、放射状のものなどが目立つ。土師器杯は前半期の子安遺跡ではⅥ期とほとんどかわら

ないが、後半期の下新町遺跡では胎土中に砂を含み、器壁が厚く、体部下端がくぼまないものも多く、一定の変化がうかがえる。高台をもつ碗は微増する傾向であるが、なお、高台をもたない杯が主体である。甕は大小ともに口縁部が屈曲せず、内彎しつつも単純なつくりとなる。

C 若干の問題点

8世紀から10世紀における土器の変遷を、以上のように理解すると、これから多くの問題が派生してくる。いまここでは多くを論じる用意はなく、須恵器窯との関係などについて若干述べるにとどめたい。

頸城地方の須恵器窯は頸城平野の東西の丘陵に分かれて分布している。東側に末野窯跡群と総称される本郷新溜窯跡・長峰窯跡・今熊窯跡などが存在し、西側には下馬場窯跡・向橋瓦窯跡・滝寺窯跡などがある。このうち下馬場窯跡は杯蓋の内面にかえりを有する段階で、現状では越後でもっとも古い時期、すなわち須恵器生産の開始期とみられる。この型式の須恵器は今池遺跡群には全くない。向橋瓦窯跡は今池遺跡群に隣接する本長者原廃寺¹¹⁾の瓦の生産地と推定されるが、瓦陶兼業窯であり、今池遺跡群の須恵器にも

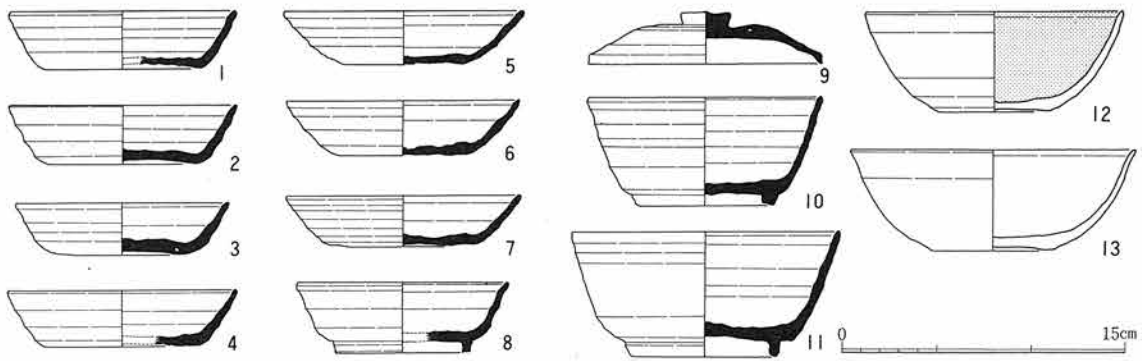


第126図 今熊窯跡採集の須恵器（新潟県教育委員会採集）

（注）iは糸切りを示す

11) 坂井秀弥「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討」前掲

向橋瓦窯の須恵器・瓦についてはこのなかで一部実測図を掲載した。瓦の分析は次節を参照されたい。



第127図 半ノ木遺跡出土土器

当窯の製品があるとみられる。

いま向橋瓦窯跡と今池遺跡群の須恵器を対比するとⅡ期、あるいはⅢ期に類似するものがみられる。¹²⁾一方、東側の末野窯跡群のうち、今熊窯跡の須恵器は採集品により、およその内容を知ることができる(第126図)。これらからみると、今熊窯跡の須恵器は今池遺跡出土のSD 201一括土器とまったく同じものを多く見出すことができる。ここで注目されるのは、有台杯のなかにごく少量ではあるが、篋切りのものが含まれていることであり、同一生産地で異なった手法を用いていた可能性が考えられることである。また、23・24はSK 21A出土の特殊な有耳壺(115)と類似している。

ところで、Ⅵ期の篋切り無台杯は現在のところ、生産地が不明である。この須恵器は器面などに特徴があり、他のものとよく識別される。越後でも地域を異にする中部の栄町半ノ木遺跡出土の土器¹³⁾(第127図)はこれとほぼ同じかこれより若干下る時期の9世紀末から10世紀初頭に位置づけられるとみられるが、この須恵器の系譜はⅥ期の土器に直接求められ、色調・胎土などは類似している。また、従来の越後中部地方のいくつかの調査例でも、9世紀後半から10世紀初頭前後の時期のものについては、これと類似した特徴をそなえている須恵器が多く出土している。しかしながら、この須恵器を生産した窯については確認されていない。今後、この生産地を究明する必要があるが、この時期の土器様相からみると、土器の生産体制そのものがかなり変動したことが推察され、それまでの頸城地方を単位とした須恵器の生産と流通の体制が崩壊し、さらに広域の生産体制が成立した可能性も考慮する必要があるであろう。

一方、土器器は杯が大量生産され、須恵器にとってかわるほどになるが、この変化も須恵器の変化と連係したものと考えられ、土器生産が大きく変貌したことがわかる。これは8世紀初頭以来継承されてきた「律令的土器様式」が崩壊したことを意味するとともに、これと深くかかわっていた「律令的土器生産体制」が崩れたことを示唆しよう。その時代の背景として、9世紀末から10世紀初頭には律令体制が崩れ王朝国家体制へ変化する¹⁴⁾という、社会体制の大きな変革を想起すべきであり、今後土器の生産体制の変遷についてもこの視点から再考する必要があるであろう。

12) 向橋窯跡の須恵器には糸切りが全くみられない。時代的には8世紀中葉頃に比定されよう。

13) 関 雅之ほか「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」(前掲1973)

14) 坂本賞三「王朝国家体制」『講座日本史』2 東京大学出版会 1970

坂本賞三「王朝国家」『古代の地方史』3 朝倉書店 1979

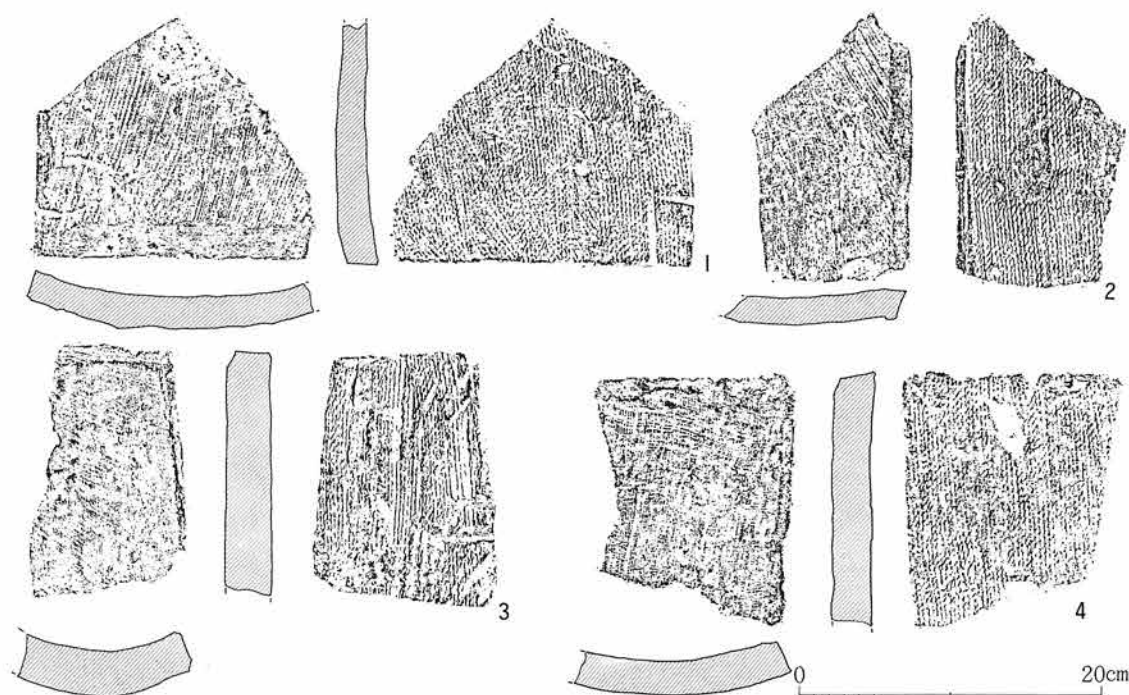
2 今池遺跡群出土の瓦について

頸城地方において、これまで発掘調査された古瓦出土遺跡は新井市栗原遺跡¹⁾・上越市向橋瓦窯跡²⁾の2遺跡のみであったが、今回の発掘調査によって新たに上越市今池・下新町・子安遺跡が追加された。なお、周辺で瓦の出土例を求めると表採資料ではあるが本長者原廃寺³⁾がこれに加えられる。

以下、まず両遺跡出土例の技法について説明を加え、今池遺跡群出土の瓦について略述する。

栗原遺跡出土の平瓦について詳細な分類・統計は行なわれていないが、凹面には糸切り痕・布目痕及び桶状の模骨痕を残す。側面(分割截面)は篋削り調整される。凸面は格子・斜格子・平行の叩き成形で、後に撫で調整されるものもある。端部は四隅もしくは二隅を切っているものがある。広端部がやや厚くなっており、叩きは均一でない。これらの平瓦は糸切り痕・模骨痕・分割のためのあたりが存在することから、粘土板桶巻き技法による3～4枚づくりと考えられる。なお、丸瓦は無段の行基式であり、凸面は叩きののちに丁寧な撫でを加えている。叩き痕の残るものは共通して平行叩きである。

向橋瓦窯跡出土の瓦で確認されているものは平瓦のみである(第128図)。凹面に糸切り痕・布目痕を残し、布は3cm×3cm範囲に20本～22本の糸数を数える。各部の厚さは均一であるが、厚手(3cm前後)と薄手(1.5cm～2.5cm)の2種が存在する。側面は篋削りされるが、厚手のものは凹面に対して直角もしくは鈍角に、薄手のものは鋭角に削られている。また、厚手のものは凹・凸両面を面取りし、薄手のものはどちらか一面を面取りする。凹面については四辺とも面取りもしくは撫で調整されるのが一般的である。凸面



第128図 上越市向橋瓦窯跡出土遺物

- 1) 昭和53年から6次にわたって調査され、塔跡と推定される基壇及び掘立柱建物群が検出された。
- 2) 昭和30年に高田市文化財調査委員会によって調査された。須恵器も焼いた瓦陶兼業窯である(『高田市

- 文化財調査報告第11集』前掲)。
- 3) 第Ⅱ章1(11頁)参照。坂井秀弥「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討」(前掲)に詳しい。

はいずれも縄巻き板によって叩き成形され、原体は右上りの撚糸Lである。叩きは側縁にほぼ平行し、縦位に施されるのが特徴的である。胎土は緻密で、白色粒・黒色粒をわずかに混入する。凸面には指による縦位の撫でを施す。凹面に模骨痕がなく、凸面には側縁に平行な叩きが施されることから一枚づくりと考えられる。

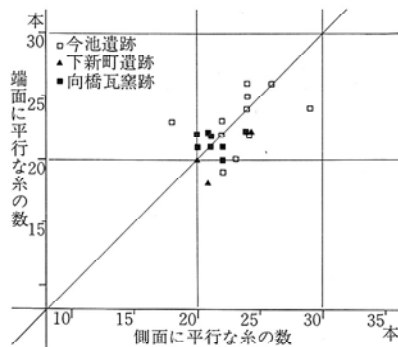
本長者原廃寺での表採資料は丸瓦片1・平瓦小片2～3であり、ここでは詳述しない。

今池・下新町遺跡出土の平瓦は、凹面に糸切り痕・布目痕を残し、布は3cm×3cm範囲に20本～28本の糸数を数える。側面は篋削り調整されるが、凹面に対して直角もしくは鈍角に削るものと、鋭角に削るものがある。面取りについては凹・凸両面を面取りするものと、どちらか一面を面取りするものがあり、また、厚手(3cm前後)と薄手(1.5cm～2.5cm)とがある。共通して、厚手のものは側面を直角・鈍角に削り、両面を面取りし、薄手のものは側面を鋭角に削り、一面を面取りする。凸面は縄巻き板によって叩きしめられるが、叩きしめは側縁にほぼ平行している。原体は右上りの撚糸Lであり、幅4cmに16条～18条を数える。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。胎土は緻密で、白色粒・黒色粒をわずかに混入する。丸瓦はいずれも無段の行基式であり、凸面は丁寧な篋削り・撫で調整されるが下新町例に平行叩き痕を残すものがある。なお、子安遺跡では無段・行基式の丸瓦1点のみが出土している。ここでの平瓦は模骨痕がなく、側縁に平行な叩きしめを行っていることから一枚づくりであると考えられる。また、出土状況はほとんど平安時代中期以降中世の遺構・包含層中からに限るという異様なものであった。中に両面が磨滅しているもの2点が今池遺跡で認められた。

さて、それぞれの出土瓦を比較すると、今池遺跡群例は次の5点で向橋瓦窯跡例と共通している。1は模骨痕がなく側縁に平行な叩きが施され、厚さも均一で一枚づくりと考えられること、2は布目の糸数が3cm×3cm範囲に20本～29本を数え、特に20本～25本に集中する傾向にあること(第129図)、3は凸面の叩きは縄巻き板により、原体は右上りの撚糸Lであること、4は厚手と薄手の二種存在すること、5は胎土中の混入物・焼成・自然釉の付着が類似することである。また、⁴⁾時期的には栗原遺跡の瓦はSK 63・SD 25の相伴土器から8世紀前半の所産と考えられ、向橋瓦窯跡の瓦は同時に焼かれた須恵器から8世紀中葉前後の所産と⁵⁾考えられている。

これらのことから次の4点が考察される。

1 頸城地方の平瓦製作技法は8世紀中頃を転換期として、粘土板桶巻きづくりから粘土板一枚づくりに変化している。



第129図 平瓦凹面布の比較

2 技法・胎土等の共通性から今池遺跡群出土の瓦は向橋瓦窯跡で生産されたものである可能性が強い。

なお、今池遺跡群出土の瓦がほとんど包含層や平安時代中期以降、中世までの遺構から検出されていることについては、

3 今池遺跡群周辺の遺跡で使用・廃棄された瓦が、平安時代中期以降、今池遺跡群に持ち込まれたものであり、その第1候補地は他に瓦の出土例を知らないいま隣接する本長者原廃寺であろう。

4 その目的・理由は不明であるが、例えば磨耗痕の存在から砥

4) 坂井秀弥『栗原遺跡』第4次・第5次発掘調査概報 第6次発掘調査概報 前掲

5) 坂井秀弥「本長者原廃寺跡の再検討」(前掲)前節 参照

石に再利用したと思われるものもある。

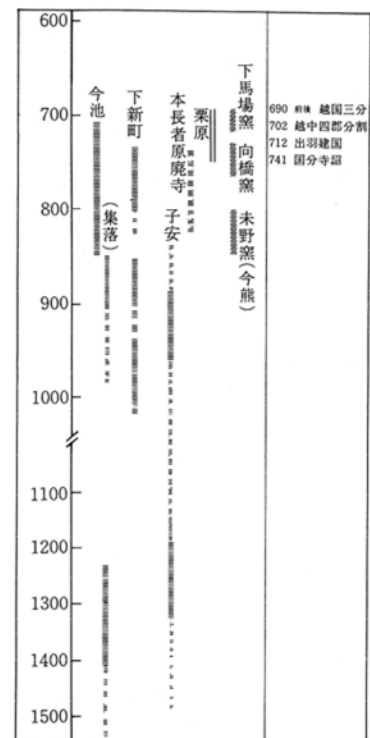
3 結 語

これまで、今池・下新町・子安の各遺跡の調査成果と遺物についての若干の考察を述べてきた。各遺跡の総括は第Ⅲ章から第Ⅴ章の「小結」で述べたとおりであるが、最後に、今池遺跡群の性格などを考えるために、3遺跡の調査成果を総合しておきたい。

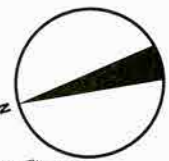
各遺跡の消長 3遺跡の消長は第130図のとおりである。これらの時期は今回の狭い調査範囲のなかでの所見にもとづいており、遺跡全体の状況は不明な部分が多いが、ひとまずこれをもとに考えることにしよう。3遺跡のなかでまず出現するのが今池遺跡である。今池遺跡は南北約600mもあり、奈良時代から平安時代初頭（8世紀前半から9世紀前半）の時期にほぼ3つの建物群が形成される。これらはいずれも桁行5間以上の大規模な建物を含んでおり、8世紀前半から中葉には成立していると考えられる。建物群は散在してはいるものの、広い範囲にほとんど同時に分布していることが注目される。これとほぼ併行するか、やや遅れて成立するのが、下新町遺跡（A期）である。下新町遺跡のA期はSK 31出土土器に代表され、8世紀の中葉から後半を中心にするものと考えられる。この時期には、今池遺跡のC地区北辺の建物群（C建物群）が継続して営まれていたと推測され、両者が同時に併存していたとみられる。今池遺跡C建物群と下新町遺跡は距離にして約200mしか離れていない（第131図）。現在、この間には櫛池川の河道が存在し、両者を明瞭に区分しているが、この河道が8世紀頃に存在したかどうかは不明なところであり（第Ⅱ章1）、今池遺跡C建物群と下新町遺跡のA期建物群が、同一の計画のもとに設定された可能性は高いといえる。それぞれの建物の方向もほぼ一致するものがあり、下新町遺跡の遺構分布はさらに南にのびる形勢である。したがって、当時の櫛池川の河道はここには存在せず、今池遺跡と下新町遺跡とはひとつの遺跡であったと推察されるのである。

このように考えると、8世紀中葉頃の今池遺跡は下新町遺跡まで含めて、南北約900m・8町ほどの広さをもつことになる。ただ、今池遺跡南端のA地区の建物群（A建物群）は8世紀前半でも早い時期に成立したのちは、継続して営まれず、8世紀中葉から後半にかけてはすでに廃絶したとみられ、下新町遺跡のA期建物群とは併存していない可能性もある。しかし、これをのぞいても南北約700mの広さを持ち、きわめて大規模な遺跡であることにはかわりない。

9世紀に入る頃になると、下新町遺跡の建物は廃絶したようであり、今池遺跡C建物群も同様のあり方を示すなかで、B地区南辺部の建物群（B建物群）だけは継続して営まれる。しかし、9世紀の中葉から後半にかけては、これまでみられた大規模な建物を中心とした建物群は消滅し、以後は一般集落と共通する遺構を中心に構成される。したがって、8世紀前半に形成される大規模な建物を中心とした建物群はこの時点で、脈絡が跡絶えることと



第130図 今池遺跡群の動態



第131図 今池遺跡と下新町遺跡の遺構配置図

なり、遺跡の性格が大きく変化したことがうかがえる。

一方、今池遺跡が変貌する9世紀中葉から後半にかけては、子安遺跡の動向が注目される。子安遺跡は今回の調査範囲内では最大限に遡ってみたとしても9世紀後半であるが、遺跡の中心地とみなされるところからはK-14窯式の灰釉陶器の椀と皿とが各1点ずつ採集されており、この遺跡が9世紀中葉頃にはかなり有力な階層の居住区として成立していたことが示唆される。とすれば、今池遺跡の大規模な建物群を継承する遺構を子安遺跡に想定することはできよう。かりに9世紀中葉に今池遺跡の建物群が子安遺跡に移動したと仮定すると、今回の調査範囲の遺構はそれからしばらくしてからのものと考えられる。ただ、このように仮定したとき問題となるのは、8世紀には今池遺跡と一連のものとして営れたとみられる下新町遺跡(C期)が10世紀中葉以降後半を中心として再び大規模な建物をともなって形成されることである。10世紀代の遺構は今池遺跡ではごく少数あるだけであり、この時期には今池遺跡と下新町遺跡とは一連のものではなかったと考えられる。子安遺跡は今回の調査では9世紀末から10世紀前半代の時期を中心としている。下新町遺跡C期の10世紀後半代を中心とする時期に、子安遺跡のほかの地点で遺跡自体が継続・維持されていたかどうかは不明であるが、採集遺物はこれとほぼ同時期とみられる土器もあり、10世紀代は前半・後半を通じて遺跡は存続した可能性が強い。なお、子安遺跡の成立期について、採集遺物に即してみれば、9世紀中葉を大きくさかのぼらないとみられ、下新町遺跡B期とほぼ同時に成立した可能性もある。

遺跡の特徴と性格 以上のように8世紀から10世紀の今池遺跡群の動態を把握したうえで、これらの遺跡の特徴を列挙すれば、次の諸点があげられる。

- 1 掘立柱建物で構成された建物群が存在する。建物群は東西棟建物が主体で桁行5間以上の建物をいくつか含み、周囲にこれらを区画する溝をもつものがある。
- 2 建物群は何回か建て替えがあり、明瞭に同一方位をとる建物があり、一定の計画性がうかがえる。
- 3 井戸はごく少数であり、今池遺跡では大規模な建物群と併存する井戸は検出されていない。
- 4 建物は総柱の倉庫様のものはごく少なく、群をなしていない。
- 5 出土遺物のなかでは、墨書土器・円面硯・瓦塔・畿内地方からの搬入土器などが注目される。

以上の点に加えて、8世紀前半にきわめて大きな規模で建物群が成立したということを勘案する必要がある。これに類する遺跡は越後では同一郡内(頸城郡)に所在する栗原遺跡がある。栗原遺跡は8世紀初頭に成立する遺跡で、「郡」の墨書土器を出土しており、頸城郡衙またはこれに類するもの、たとえば郡衙官人の居宅などが想定されている。遺構は今池遺跡のB建物群と同じく、8間×3間と5間×3間の東西棟2棟をほぼ南北に配置している。また、瓦敷をとまう方形の基壇がある。ただし、遺跡の存続期間は短く、8世紀中葉から後半には廃絶したと考えられる。

今池遺跡は土器からみれば、栗原遺跡よりもわずかに遅れて成立するとみられる。栗原遺跡の土器にはかえりをもつ杯蓋が少数ながら存在し、中心的な建物の時期を示すSD25一括土器は8世紀前半でも相対的に古様を呈する。焼成が不良で、褐色を呈するものが多いことも古い時期を裏づけるかもしれない。歴史的背景との関連でいうならば、大宝2年(702)の越中国四郡(頸城・古志・魚沼・蒲原)の越後国への編入¹⁾などによる地方行政組織の整備にともなって成立した可能性が考えられる。

このような土器の年代観からすると、今池遺跡は8世紀前半でも第1四半紀のうち、西暦でいえば720年頃にはその成立をみていたと考えられる。さて、この時期に大規模な建物がある程度の規格性をもって

1) 米沢 康「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」前掲

造営されたとすると、やはり律令体制の成立にともなうなんらかの背景を想定することができる。具体的にいえば、地方官衙か、地方官人層の居宅といったものがあげられる。ただし、国府とした場合、いま検出されている遺構はその中枢部にあたるものとは考えられない。一般に国府政庁域では正殿と両脇殿というコの字型の建物配置をとるとされるが、ここでは前後に大規模な建物が配置する例はあっても（今池遺跡B建物群SB 105・SB 106）、これに南北棟がともなうものはない。他方頸城郡衙としては、前述した新井市栗原遺跡周辺が有力視される。したがって、地方官衙を想定した場合、国府中枢部の政庁域や頸城郡衙とみるのは、やや困難と考えられる。これ以上のことは、現状では不分明といわざるをえない。ただ、今池遺跡群のなかで、その特性をある程度示唆するのは今池遺跡の東方に隣接する本長者原廃寺である。これについては別稿で述べたことがあるが、いまその概略を紹介し、今池遺跡群の性格を考える一助としよう（第5図）。

本長者原廃寺は『新井市史』（1973）ではじめて紹介された遺跡で、そのなかで塔の礎石らしき大きな石がかつて存在したこと、その大きな石が存在した地点は基壇の痕跡とみられる方形の畑であったこと、その周辺から古瓦が採集されることから、古代寺院の存在が推定され、越後国分寺の可能性が指摘された。これ以降、今日までまったく調査はなされていないが、昭和40年頃の耕地整理以前の地割を示す更正図（第6図）によれば、礎石とみられる石が所在した畑の他にも畑は存在する。この周辺は島状に点在する畑以外はすべて水田であり、畑の部分は元来高い部分であり、なんらかの構造物を想起させる。これらは塔以外の建物、すなわち金堂・講堂とみることもでき、これより国分寺に多い伽藍配置が推定される。また、当廃寺周辺の瓦やこれとの関係が考えられる今池遺跡群出土の瓦は、前節で述べたように向橋瓦窯跡から供給されたとみられる。向橋瓦窯跡は瓦陶兼業窯で出土須恵器から8世紀中葉頃の年代が考えられ、国分寺の可能性は充分考慮される。付近には国分寺などに関連するとみられる地名もなく、当廃寺が未調査の現状では、可能性を指摘するにとどめざるを得ないが、ほかに有力な国分寺比定地をみない以上、もっとも注目すべき遺跡といえる。仮にこれを国分寺とすれば、当然のこととして、周辺に国府が所在したことになり、今池遺跡群はその候補地としてあげられる。今池遺跡と下新町遺跡を含めると、南北は約8町であり、9世紀中葉以降子安遺跡にこれが移ったとすれば、子安遺跡にのこる一町方格の地割も国府との関係で説明することが可能である。また、前述したように（第Ⅱ章3）、中世の国府の所在地を暗示する「とひたのまき」比定地は今池遺跡群との位置関係では矛盾しないし、国衙領の分布状況もまた同様である。地理的な条件をあげるならば、関川に面するという点では河川交通に至便であることは注目され、沖積段丘上の高燥の地であることも有利な点である。このような仮説に立てば、越後国府は今池遺跡の年代から8世紀前半に頸城郡に設置されたことになる。越後国府は国域が確定する大宝2年（702）から和銅5年（712）の間か、これから間もない時点で頸城郡に設置されたとみるのが最も穏当であり、その点では矛盾しない。

以上、今池遺跡が越後国府である可能性を示唆したが、これまで述べた諸点はいずれも決定的な根拠とはならず、現在のところではこれを積極的に肯定することも否定することもできない。しかしながら、ここで、ひとつの重要な遺跡に接したことは事実であり、今後、今池遺跡群を学術的に究明する必要性が痛感される。今回の調査契機はバイパス建設にともなうものであり、バイパス開通によって遺跡周辺は急速に開発が進むことが十分に予測される。これをも含めて、今池遺跡群の今後をおおいに注視したい。

2) 坂井秀弥「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討」

3) 越後国から出羽国分置。和銅元年（708）に越後国

に出羽郡が建郡される。地域としては出羽国庄内地方をさすものとみられる。

別表1. 建物一覧表

今池遺跡

遺構	位置	規模	棟方向	主軸	桁行m	梁間m	廂m	柱穴cm	時期	備考
(古代)										
SB 7	M-9	2×2	EW	N-0°	4.1	5.2	無	80~100		2回以上の建て替え P52
SB 9	J-K-7・8	2×2	EW	N-1°-E	5.0	4.4	無	40~50		P52
SB 11	K-L-6	2×2	EW	N-5°-E	4.95	3.6	無	40~50		P43
SB 12	K-L-5・6	7×3	EW	N-4°-E	14.05	4.6	無	70~90		建て替え(?)・P43
SB 13	L-5・6	3×2	EW	N-10°-E	5.85	5.5	無	40~65		P43
SB 28	K-4	3×2	EW	N-12°-E	5.0	4.8	無	35~50		P50
SB 29	L-M-3	7×3	EW	N-5°-E	12.75	5.35	無	短辺100前後 長辺100~150		P44
SB 30	L-2・3	3×3	EW	N-6°-E	6.1	E5.0 W4.6	無	60~75		P44
SB 31	L-M-2・3	3×3		N-8°-E	7.6	5.2	有 E2.4 N2.1	60~75		P44
SB 34	L-3	2×2		N-12°-E	4.7	4.7	無	50~70		P44
SB 38	K-1・2	3×2	EW	N-12°-E	4.9	4.05	無	50~60		P49
SB 39	J-2	3×2	EW	N-11°-E	4.65	4.00	無	30~50		P49
SB 40	J-2	3× ^{3(E)} _{2(W)}	EW	N-8°-E	5.7	4.4	無	50~70		P48
SB 41	J-K-2・3	8×3	EW	N-5°-E	16.0	5.2	有 3.8	⊖ 60~80 ⊕ 20~40		P48
SB 42	J-K-3	7×3	EW	N-8°-E	13.0	5.6	有 2.45	80~100		P49
SB 43	K-3	2× ^{3(E)} _{2(W)}	EW	N-9°-E	4.4	4.7	無	⊖ 70~90 ⊕ 50~60		P49
SB 44	J-K-2	3×3	EW	N-8°-E	5.05	5.0	無	約50		P48
SB 45	K-2	2×2	EW	N-10°-E	3.9	3.6	無	40~50		P49
SB 46	K-2	2×2	EW	N-11°-E	5.15	3.9	無	70×40 40~50		P49
SB 51	I-4	×2	EW	N-5°-E		3.5	無	40		P50
SB 52	J-K-4・5	3×2	EW	N-10°-E	5.7	4.3	無	20~40		P50
SB 53	J-4	2× ^{3(E)} _{2(W)}		N-4°-E	4.0	4.5	無	⊖ 80~100 ⊕ 40		P50
SB 55	J-5	4×2	EW	N-4°-E	6.9	3.65	無	80		P50
SB 57	J-K-5	3×2	EW	N-5°-E	5.0	4.3	無	50~90		P51
SB 59	J-5	2×2		N-5°-E	3.5	3.5	無	30~60		P51
SB 60	K-7	3×2	EW	N-4°-E	5.3	E4.0 W4.3	無	40~60		P51
SB 66	K-4・5	3×2	EW	N-12°-E	N7.8 S7.3	4.5	無	35~70		P50
SB 69	L-9	3×2	EW	N-5°-W	4.75	4.55	無	30~50		P52
SB 74	I-J-6	2×2	EW	N-7°-E	5.45	4.9	無	50~70		P51
SB 75	I-5・6	3×2	NS	N-5°-E	4.7	3.8	無	40~50		P51
SB 76	I-5・6	3×2	NS	N-3°-E	4.7	3.8	無	40~50		P51
SB 77	I-5・6	3×2	NS	N-2°-W	4.7	3.8	無	40~50		P51
SB 80	L-3	3×3		N-5°-E	5.4	5.4	無	50~70		P44
SB 81	J-4	3×2	EW	N-10°-E	5.05	4.6	無	30~40		P50
SB 82	J-2	2×2	EW	N-4°-E	4.7	3.9	無	20~50		P49
SB 83	I-5・6	×2		N-8°-E		5.3	無	30~60		P51
SB 84	I-5・6	×2		N-7°-E		4.2	無	40~90		P51
SB1002	M-N-8	2×2	EW	N-11°-W	3.8	2.7	無	50~60		P52
SB1003	M-8・9	2×3	NS	N-5°-W	2.5	5.0	無	40~50		P52
SB 103	B-C-28	×2	EW	N-13°-E		4.65	無	70~85		P55
SB 105	C-D-27	9×3	EW	N-3°-E	16.95	8.25	有 1.9	80~100 前 40~50	前I	P55
SB 106	D-26	5×3	EW	N-3°-E	9.1	5.4	無	70~80	前I	P56
SB 107	D-26	5×2	EW	N-8°-E	8.6	5.3	無	60~100		P56
SB 108	E-26	3×2	EW	N-8°-E	5.10	E5.4 W5.2	無	約40		P57
SB 109	E-F-26	3×2	EW	N-6°-E	7.0	4.85	無	60~70		P57
SB 112	C-D-28	3×2	EW	N-6°-E	5.65	3.3	無	35~50		P55
SB 115	C-D-28	3×2	EW	N-6°-E	7.6	4.8	無	30~50		P55
SB 122	E-27	2×2	EW	N-9°-E	4.1	3.5	無	30~40		P58
SB 123	E-27	2×2	EW	N-5°-E	4.0	3.3	無	30~40		P58
SB 125	D-E-30	2×2	EW	N-3°-E	3.5	3.0	無	35~50	後	P53

遺 構	位 置	規 模	棟方向	主 軸	桁行m	梁間m	廂 m	柱 穴 cm	時期	備 考
SB 126	D-30	3×2	EW	N-7°-E	5.8	3.4	無	45~70	後	P53
SB 147	F-26	×2		N-4°-E		3.8	無	50~60		P57
SB 148	E-26・27	3×2	EW	N-11°-E	4.7	3.9	無	約40		P57
SB 149	E・F-26	2×2	EW	N-19°-E	4.55	E3.7 W3.5	無	40~50		P57
SB 168	E-27・28	3×2	EW	N-5°-E	4.7	3.7	無	30~45		P58
SB 173	E-27・28	3×2	EW	N-6°-E	4.5	3.7	無	25~50		P58
SB 177	C-27	×2		N-7°-W		4.3	無	60~70		P56
SB 178	E-27	3×2	EW	N-3°-E	5.0	3.8	無	20~40		P58
SB 204	E・F-25	5×2	EW	N-1°-E	9.15	4.9	無	⊕ 70~80 ⊙ 40~60		P59
SB 205	D・E-25	(7)×1	EW	N-7°-E		7.8	無	100~150		P59
SB 206	F・G-24	4×2	EW	N-7°-E	7.3	3.8	無	80~140	前Ⅳ	建て替え・P62
SB 228	E・F-24	4×2	EW	N-5°-E	6.9	3.55	無	60~70		P59
SB 229	E・F-24・25	4×2	EW	N-3°-E	8.7	5.10	無	65~80		P59
SB 242	E-24・25	3×4	NS	N-2°-W	8.4	6.8	無	40~60		総柱・P59
SB 253	E・F-24	5×2	EW	N-8°-E	N 8.4 S 8.7	E 4.0 W 3.5	無	60~80		P60
SB 259	G-23・24	2×2		N-10°-E	4.4	4.0	無	60~70		P62
SB 271	G-24	2×2		N-9°-E	3.95	3.95	無	70~80		P62
SB 274	G-23	5×4	EW	N-8°-E	8.4	8.0	有 N 1.5・S 1.6 E 1.1・1.0	80~110 廂 60~70	前Ⅳ	P63
SB 275	G-23	3×2	EW	N-9°-E	5.6	4.9	無	80~100	前Ⅳ	P63
SB 280	E-24	2×2	EW	N-6°-E	4.7	3.8	無	30~50		P60
SB 290	F-24	2×2		N-8°-E	3.2	3.0	無	60~70		A・B 2棟・P59
SB 291	E・F-21	3×3		N-1°-E	4.3	E 4.3 W 4.9	無	30~45		P59
SB 294	E・F-23	3×2	EW	N-3°-E	4.0	3.25	無	30~40		P60
SB 300	E-23	2×2	EW	N-5°-E	4.6	3.9	無	40~50		P60
SB 301	E-23	2×2		N-5°-E	3.45	3.5	無	40		P60
SB 318	G-23	2×2		N-14°-E	3.2	2.8	無	35~50		P64
SB 333	G・H-23	×2		N-8°-E		4.1	無	60~80		P64
SB 370	I-24	3×2	EW	N-13°-E	5.9	E 4.3 W 4.9	無	60~70		P65
SB 400	E-22	2×2		N-5°-E	N 3.8 S 3.5	3.5	無	40~50		P60
SB 407	D-23			N-12°-E			無	30~45		総柱(?)・P61
SB 408	D・E-22・23	3×2 ^{4(W)} (E)		N-7°-E	5.2	4.9	無	40~50		P61
SB 411	E-22・23	2×2		N-3°-E	4.1	4.5	無	40~60		P61
SB 412	C・D-23			N-2°-E			無	70~80		P61
SB 420	H-19・20	2×2	NS	N-2°-E	4.7	2.7	無	50~60		P67
SB 421	H・I-19・20	×2	EW	N-2°-E		4.14	無	55~75		P67
SB 430	H・I-18・19	3×2	EW	N-7°-E	6.8	4.3	無	45~70		P67
SB 504	I-16・17	7×2	NS	N-1°-E	15.45	4.2	有 0.9	50~80		P68
SB 505	I-16・17	6×2	NS	N-1°-E	13.5	3.5	無	45~60		P68
SB 522	G-16	2×2	EW	N-18°-E	4.3	3.8	無	35~50		P68
SB 541	H-16	2×2		N-4°-E	3.7	E 3.9 W 4.1	無	35~50		P68
SB 602	J・K-14	×3		N-5°-E		5.3	無	50~60		P71
SB 616	J・K-14	×2		N-2°-W		4.2	無	50~60		P71
SB 637	H-14	3×2	EW	N-11°-E	4.2	3.3	無	30~40		P70
SB 650	J・K-11・12	竪 穴							後	P72
SB 651	J-11・12	竪 穴							後	P73
SB 660	J-11・12	2×2		N-3°-W	4.7	3.7	無	45~70		P71
SB 664	J-11・12	3×2	NS	N-3°-W	E 5.0 W 5.3	N 3.9 S 4.1	無	30~60		建て替え・P71
SB 666	J-12	3×2	EW	N-2°-E	6.5	E 4.2 W 3.8	無	45~80		P71
SB 701	N-10	3×2	EW	N-13°-E	7.0	4.0	無	45~90		P73
SB 703	M-10・11	3×	EW	N-5°-E	3.3		無	⊕ 35~50 ⊙ 25~30		P73
SB 704	L・M-10・11	3×		N-7°-E	3.65		無	30~45		P73
SB 705	L-10・11	3×2	EW	N-11°-E	6.3	4.4	無	50~60		P73
SB 900	A地区	3×2	EW	N-1°-E	4.6	3.8	無	80~110	前Ⅰ	P77
SB 901	A地区	5×2	EW	N-4°-E	9.1	5.3	無	120~150	前Ⅰ	P77
SB 902	A地区	×3	EW	N-4°-E		6.9	無	70~130	前Ⅰ	P77

遺構	位置	規模	棟方向	主軸	桁行m	梁間m	間 m	柱穴 cm	時期	備考
SB 903 (中世)	A地区	2×2		N-4°-E	2.7	2.6	無	30~45	後	P77
SB 340	G-22-23	3×3	EW	N-4°-E	5.3	4.25	無	30~45	中世	P78
SB 341	G-22-23	2×2	NS	N-4°-E	4.15	3.5	無	30~45	中世	P78
SB 345	G-22	3×1	NS	N-4°-E	5.6	N3.5 S3.2	無	40~70	中世	P79
SB 357	H-21	3×2	EW	N-5°-E	3.48	3.25	無	30~45	中世	P79
SB 434	G·H-16·17	3×3		N-3°-W	5.3	5.8	有 1.6	20~50	中世	P82
SB 506	I-17	3×3	NS	N-1°-W	7.75	5.3	有 1.4	40~50	中世	P80
SB 513	H-17	4×3	EW	N-4°-E	4.9	3.9	無	15~40	中世	P82
SB 534	I·J-16·17	3×2	NS	N-3°-W	6.6	4.4	無	30~50	中世	総柱・P81
SB 535	I-16	2×2	EW	N-3°-W	4.55	4.05	無	30~50	中世	P81
SB 537	I-17	3×4	NS	N-4°-W	5.75	6.15	有 1.2	35~65	中世	P80
SB 538	I·J-16·17	4×3	NS	N-4°-W	6.5	3.7	無	30~60	中世	P81
SB 542	H-16	3×3		N-1°-W	5.0	6.2	有 0.9	25~50	中世	P82
SB 614	I-16	2×1	EW	N-13°-W	3.96	2.22	無	約35	中世	P83
SB 648	I-13-14	3×2	NS	N-9°-W	7.0	3.5	無	25~40	中世	P84
SB 649	I·H-15	3×2	EW	N-10°-W	6.4	3.5	無	30~60	中世	P83
SB 668A	J-12-13	3×2	NS	N-1.5°-W	約7.0	約3.3	無	25~45	中世	P85
SB 668B	J-12-13			N-0.5°-W	4.8	W5.1 E4.9	無	25~45	中世	P85
SB 686	I-14-15	6×2	NS	N-7°-W	11.9	3.65	無	25~50	中世	P83
SB 689	I-14	5×2	NS	N-1°-W	7.9	3.0	無	25~50	中世	P83
SB 691	H-13-14	3×2	NS	N-13°-W	6.0	3.3	無	30~50	中世	P84

下新町遺跡

遺構	位置	規模	棟方向	主軸	桁行m	梁間m	間 m	柱穴 cm	時期	備考
(古代)										
SB 1	B-5-6	3×3	EW	N-9°-E	6.3	5.2	有 1.0	50~60	A	P151
SB 2	B-6	3×2	EW	N-9°-E	5.7	4.4	無	70~100	A	P151
SB 3	A·B-7	7×2	EW	N-9°-E	15.4	6.2	無	80~120	A	馬通り有り 建て替え・P151
SB 4	A·B-7	3×2	EW	N-15°-E	6.6	5.0	無	50~80	B	P153
SB 5	B·C-8	2×1		N-14°-E	5.0	5.0	無		B	P155
SB 6A	D-8-9	2×2		N-24°-E	6.0	5.4	無	60~70	C	総柱・P155
SB 6B	D-8-9	2×2		N-21°-E	6.0	4.8	無	50~70	C	建て替え・P155
SB 7	D-9	2×2		N-25°-E	5.0	4.8	無	40~50	C	総柱・P156
SB 8	C~E-10	9×4	EW	N-25°-E	20.8	9.6	有 W1.8-E2.0 N2.3-S2.0	70~100	C	総柱・P156
SB 9	C·D-10	5×2	EW	N-21°-E	11.8	5.6	無	60~80	C	馬通り有り・P156
SB 10	C·D-11	×3	NS	N-24°-E		7.5	有 2.5	50~60	C	P157

子安遺跡

遺構	位置	規模	棟方向	主軸	桁行m	梁間m	間 m	柱穴 cm	時期	備考
(古代)										
SB 10	D-7	3×2	EW	N-16°-E	6.9	5.1	無	60~70		P183
SB 67	C-7	2×2	NS	N-3°-E	4.8	3.7	無	40~60		P184
(中世)										
SB 5	D-9	4×1	NS	N-3°-W	5.4	1.85	無	25~40	中世	P185
SB 9	D-11	2×1	NS	N-0°	3.2	2.0	無	20~30	中世	P186
SB 41	C-8-9	4×2	NS	N-1°-W	10.8	4.8	無	20~30	中世	総柱・P185
SB 49	C-9	2×2	EW	N-9°-E	6.5	4.6	無	30~40	中世	総柱・P185
SB 60	C-9	3×2	NS	N-6°-W	7.8	3.6	無	30~40	中世	総柱・P185
SB 61	C-9-10	3×2	NS	N-5°-E	5.5	4.0	無	20×40	中世	P185
SB 65	C-10	5×4	NS	N-7°-W	11.9	7.7	有 N-S1.9 E-W1.6	30~50	中世	四面間総柱・P185
SB 66	C-10	3×2	NS	N-1°-E	9.9	4.3	無	20~30	中世	総柱・P186
SB 72	D-11	3×2	NS	N-8°-W	4.2	N2.7 S3.0	無	20~25	中世	P186

別表2. 遺構索引

遺構番号	記載頁 (グリッド)	遺構番号	記載頁 (グリッド)	遺構番号	記載頁 (グリッド)	遺構番号	記載頁 (グリッド)	遺構番号	記載頁 (グリッド)
(今池)		SK 124	P 54	SK 304	P 64	SE 523	P 83	SD 905	P 78
SD 1	P 85	SA 128	P 58	SA 305	P 63	SE 531	P 81	SK 906	P 78
SD 2	P 86	SD 129	P 56	SK 310	(F23)	SE 532	P 82	SK 907	P 78
SD 3	P 53・69	SK 130	P 58	SE 311	P 78	SK 533	P 82	SX 908	P 78
SD 4	P 86	SK 138	P 58	SK 316	P 63	SD 601	P 71	(下新町)	
SD 5	P 86	SK 139	P 57	SA 319	P 63	SD 603	P 83	SE 11	P 152
SD 6	P 86	SK 140	P 57	SD 320	P 64	SD 604	P 69	SE 12	P 153
SK 10	P 52	SD 141	P 62	SD 321	P 64	SD 605	P 72	SE 13	P 157
SK 14	P 52	SD 151	P 58	SD 322	P 66	SD 606	P 72	SE 14	P 157
SK 15	P 52	SD 152	P 55	SD 323	P 66	SD 607	P 72	SE 15	P 157
SD 16	P 52	SD 157	(B・C29)	SD 324	P 67	SD 608	P 72	SA 17	P 157
SE 20	P 45	SK 174	P 56	SD 325	P 66	SK 609	(K12)	SD 21	P 157
SK 21	P 47	SA 179	P 57	SK 326	P 64	SK 610	P 70	SD 22	P 159
SK 22	P 47	SD 201	P 65	SE 327	P 78	SD 611	P 70	SD 23	P 152
SK 24	P 48	SD 202	P 60	SK 331	P 64	SK 612	P 70	SK 31	P 152
SK 25	P 48	SD 203	P 66	SK 332	P 65	SK 613	P 70	SK 32	P 160
SD 26	P 53	SK 208	P 60	SA 338	P 62	SK 626	P 85	SX 33	P 158
SD 27	P 53	SK 209	P 62	SK 339	P 65	SK 627	(K11)	(子安)	
SK 32	P 44	SD 210	P 57	SA 342	P 79	SD 629	P 70	SD 1	P 188
SD 36	P 53	SD 211	P 62	SE 344	P 79	SD 632	P 83	SD 4	P 188
SK 37	P 48	SD 214	P 60	SE 347	P 79	SD 633	P 70	SD 6	P 188
SK 47	P 48	SK 223	P 62	SD 351	P 66	SD 634	P 70	SK 8	(E9)
SA 48	P 50	SK 225	P 62	SD 355	P 65	SE 636	P 84	SD 12	P 184
SK 49	P 49	SK 233	P 59	SE 356	P 80	SK 639	P 85	SD 13	P 184
SK 50	P 49	SD 234	P 59	SK 371	P 65	SK 640	P 85	SD 14	P 184
SD 54	P 86	SK 236	P 59	SD 387	P 67	SE 641	P 84	SK 16	P 187
SK 56	P 50	SD 237	P 59	SD 389	P 65	SE 642	P 84	SD 20	P 187
SK 58	P 50	SK 243	P 59	SK 390	P 61	SE 643	P 84	SA 22	P 186
SD 61	P 51	SD 244	P 59	SK 391	P 61	SE 644	P 84	SD 30	P 187
SK 62	P 52	SD 245	(E24・25)	SK 409	P 61	SE 652	P 85	SK 31	P 187
SK 68	P 47	SD 246	P 59	SK 425	P 80	SD 654	P 69	SE 35	P 186
SA 72	P 49	SD 251	P 59	SK 428	P 80	SD 655	P 69	SE 36	P 186
SK 73	P 50	SD 254	P 60	SD 431	P 67	SD 656	P 69	SE 37	P 186
SA 78	P 50	SD 256	P 60	SD 433	P 67	SE 661	P 84	SE 45	P 186
SA 85	P 43	SK 257	P 63	SE 435	P 82	SD 667	P 69	SE 47	P 186
SK 1004	P 52	SK 258	(G23)	SK 448	P 61	SD 669	P 70	SD 48	P 184
SK 101	P 54	SK 260	P 59	SD 501	P 67	SK 670	P 85	SK 50	P 184
SK 102	P 55	SK 265	(F24)	SD 507	P 70	SD 671	P 85	SE 54	P 187
SD 104	P 55	SK 270	P 62	SE 508	P 80	SD 672	P 69	SE 58	P 187
SD 111	P 55	SK 278	(G23)	SE 509	P 80	SD 673	P 69	SX 59	P 188
SD 113	P 54	SD 283	P 79	SD 510	P 70	SD 674	P 69	SE 64	P 187
SE 114	P 56	SK 285	(E23)	SE 516	P 81	SE 683	(I13)	SD 70	P 184
SK 117	P 58	SA 292	P 60	SE 517	P 81	SA 706	P 73	SA 71	P 185
SK 118	P 58	SK 295	P 60	SD 518	(I16)	SA 709	P 73	SK 73	P 187
SK 120	P 58	SK 302	P 64	SE 520	P 81	SD 710	(L10・11)		
SK 121	P 59	SK 303	P 64	SE 521	P 82	SD 904	P 77		

図 版

凡 例

1. 遺構は遺跡ごとに一連番号を付し、建物（SB）・柵（SA）・土坑（SK）・井戸（SE）・その他（SX）などで分類した。
2. 遺構実測図の断面図は原則として平面図に示した位置のものであるが、建物の柱穴などはこの限りではない。
3. 遺構実測図の平面図の網目は発掘調査に際して掘削した排水路を示す。
4. 遺物は遺跡ごとに一連番号を付した。
5. 須恵器の杯実測図に「i」の付してあるものは底面に回転糸切痕が観察されるものである。「(i)」はその可能性が強いものである。
6. 遺物写真の縮尺率は図版目次に示した。



国土地理院発行 1/25,000地形図 高田東部・新井 (明治43年測図・昭和5年修正測図)

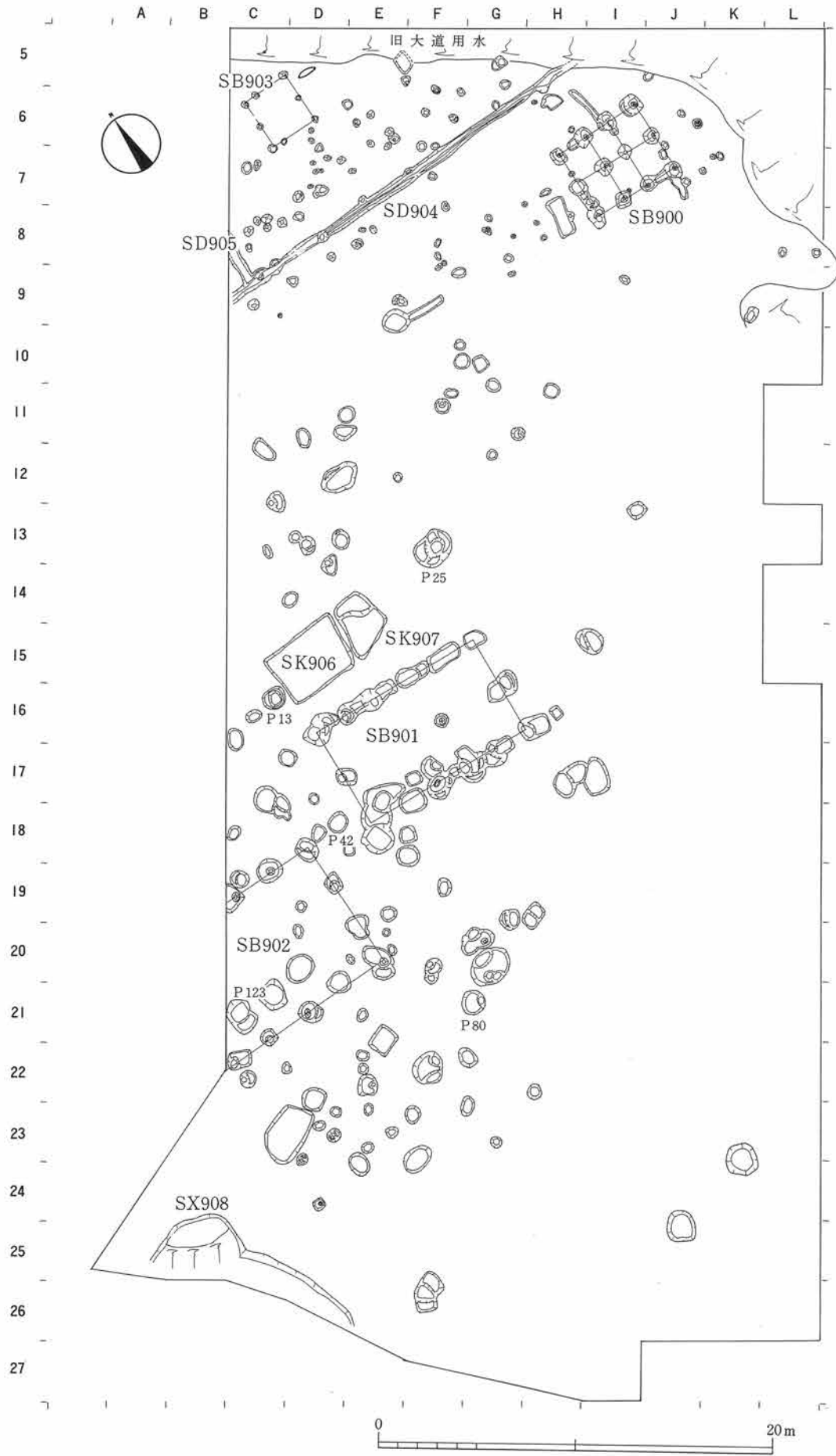


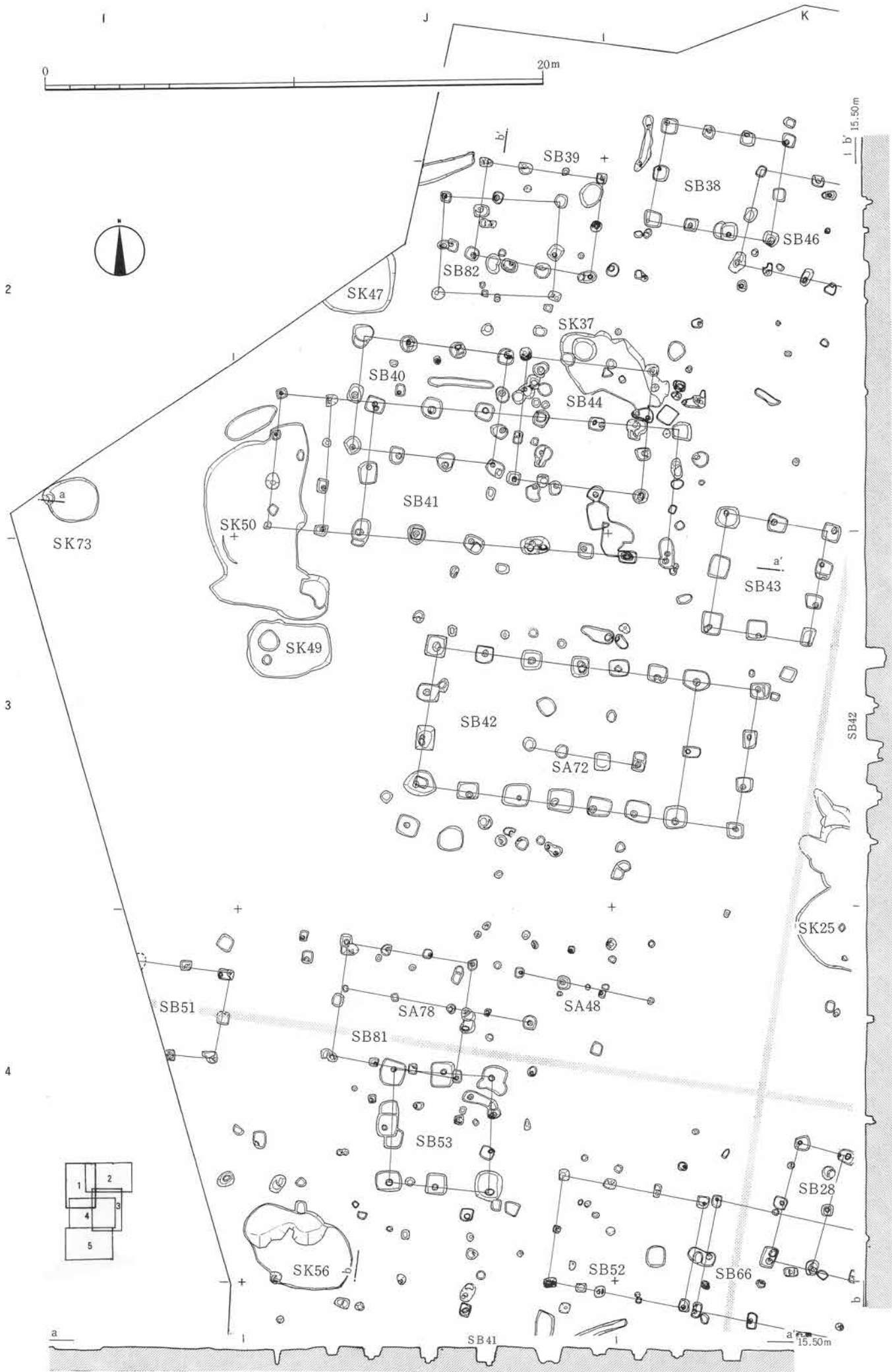








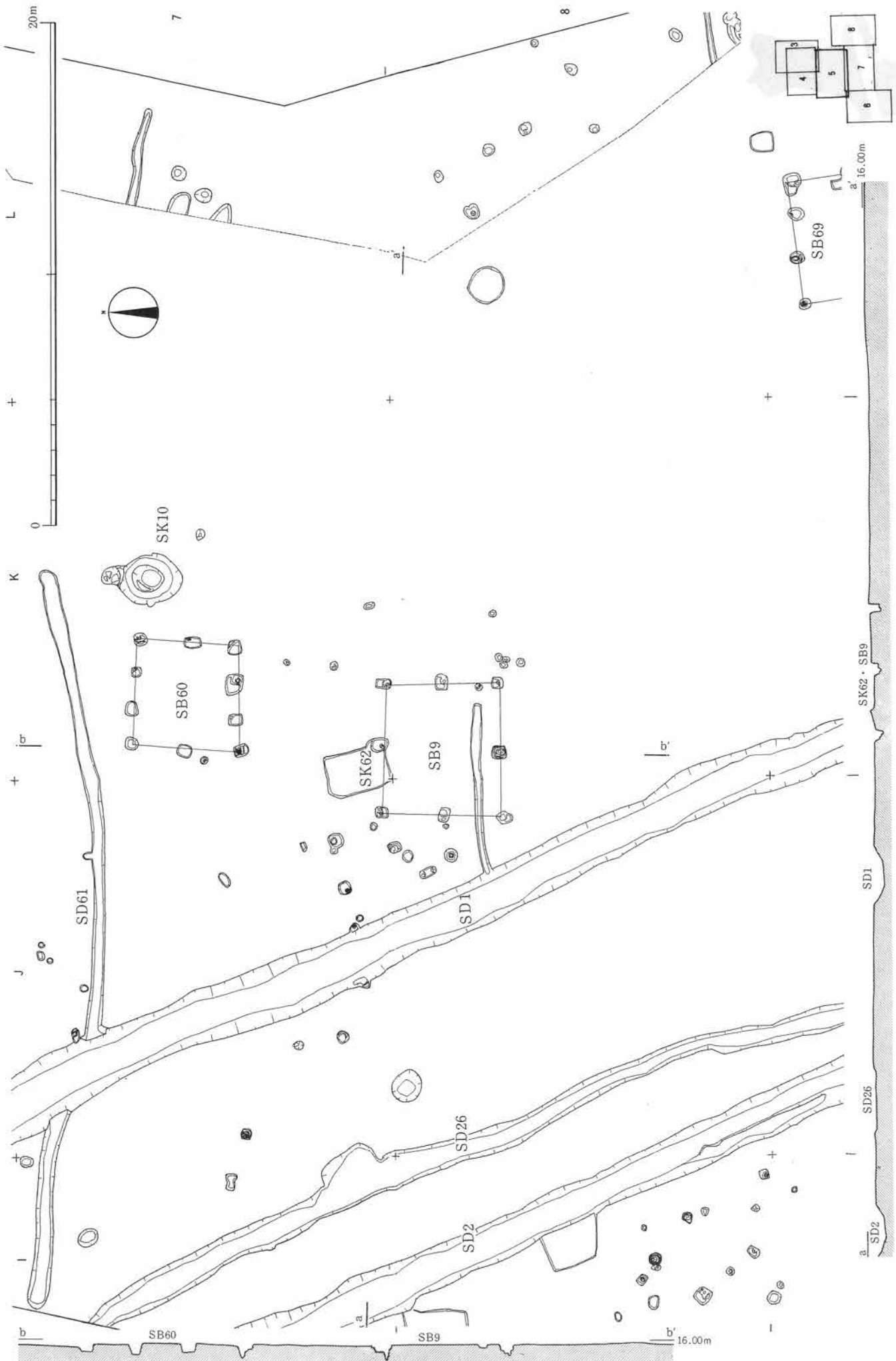


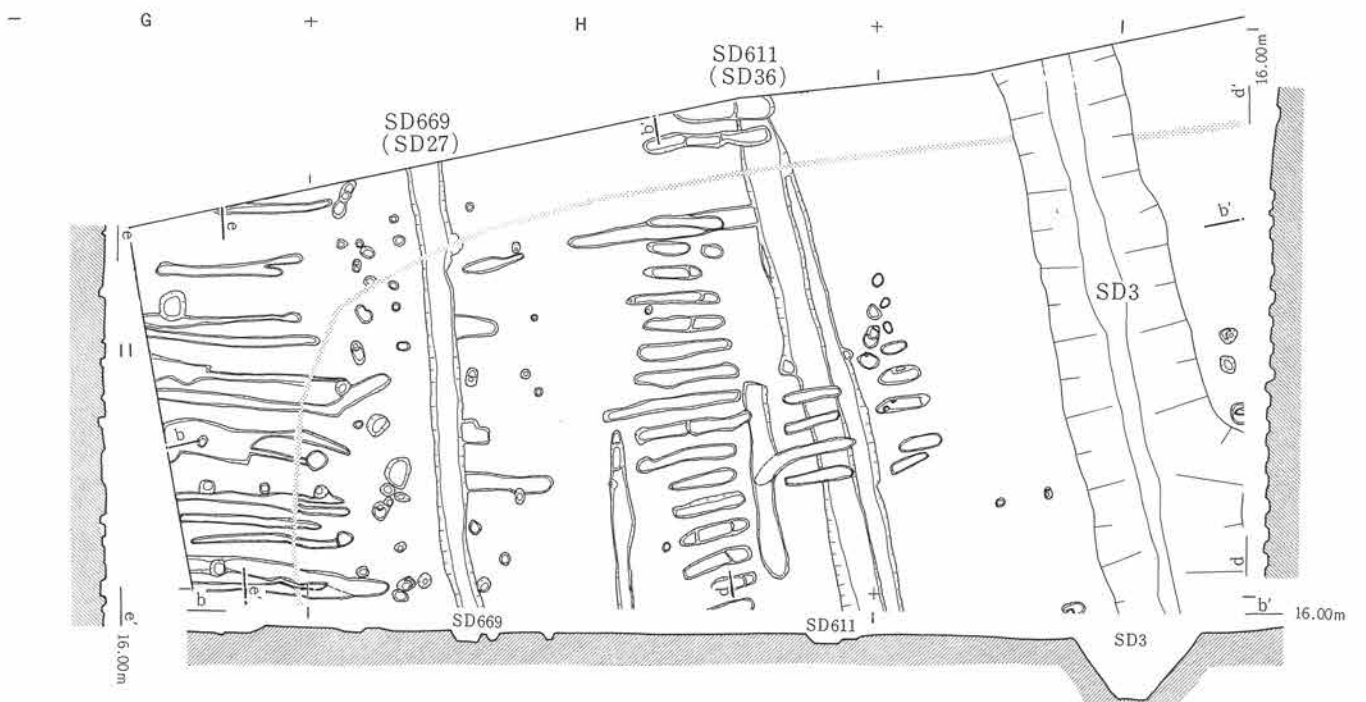
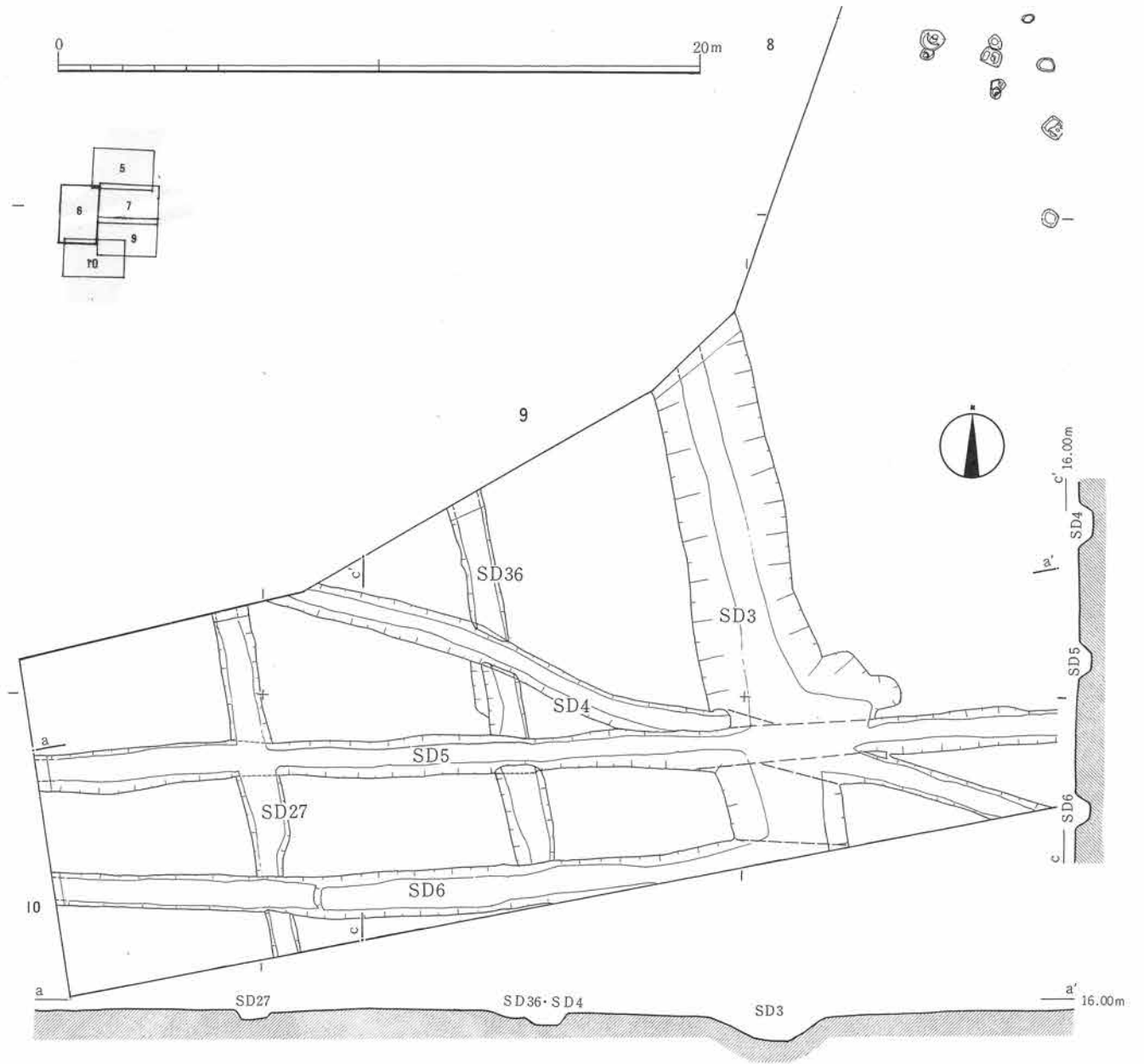




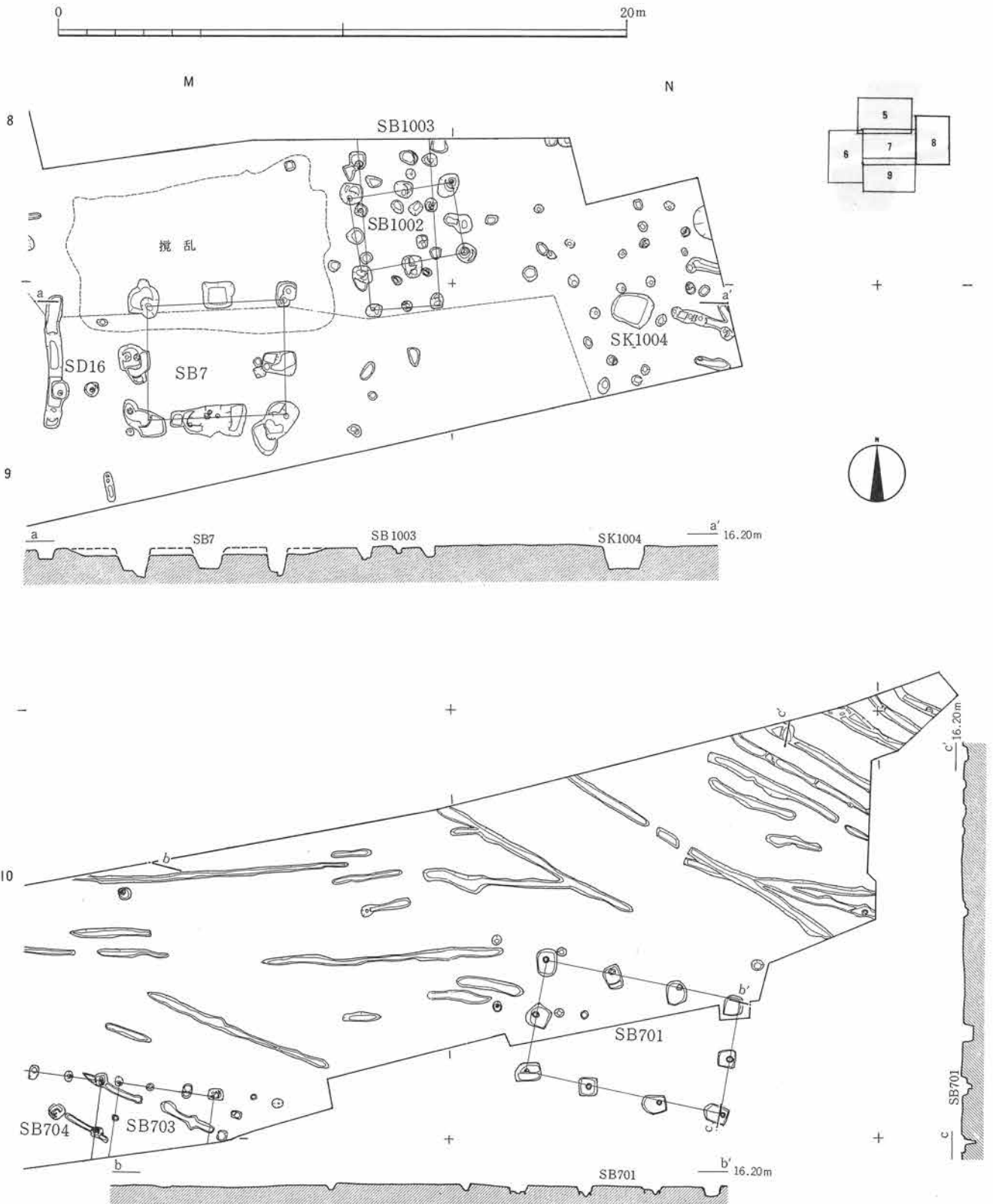




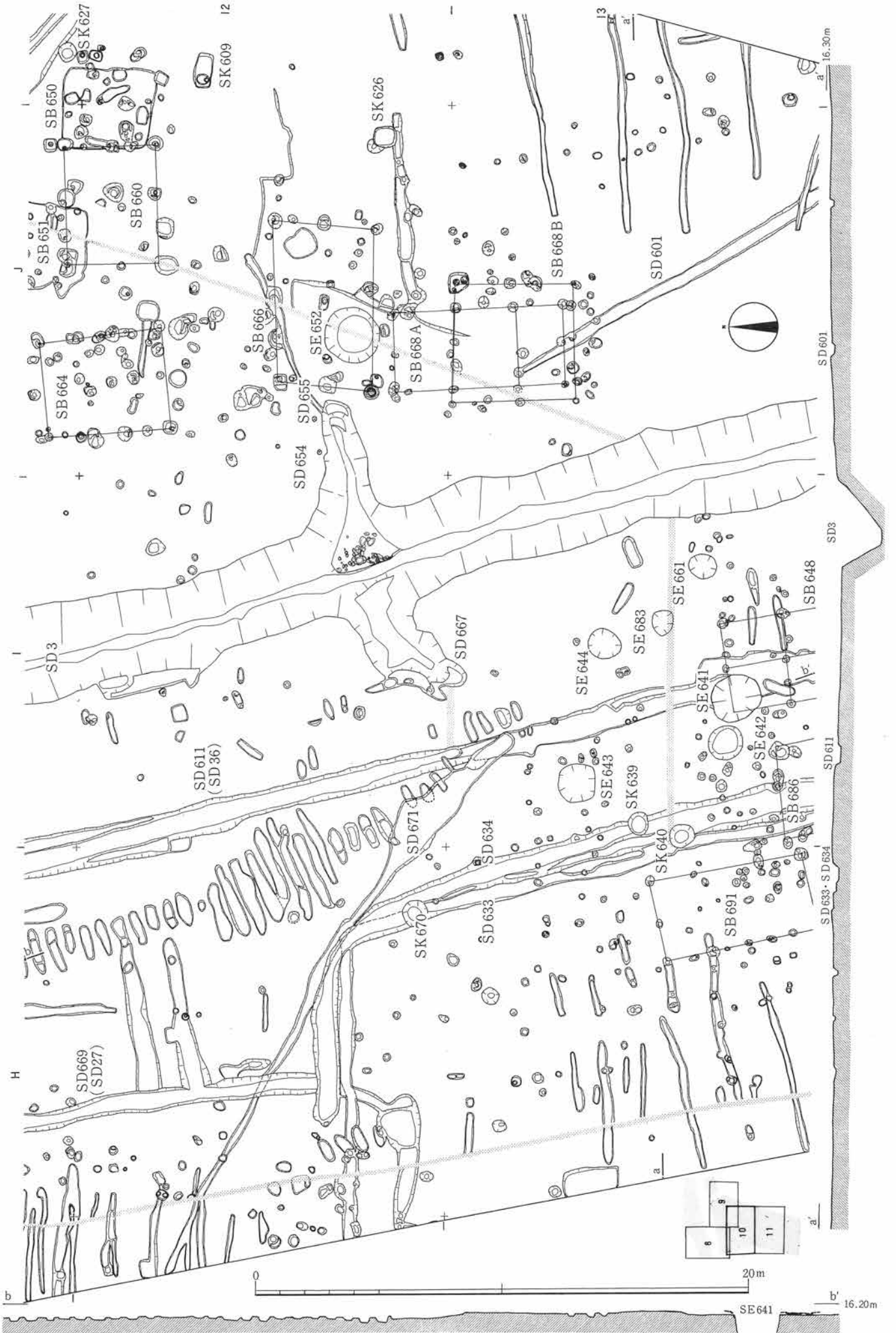












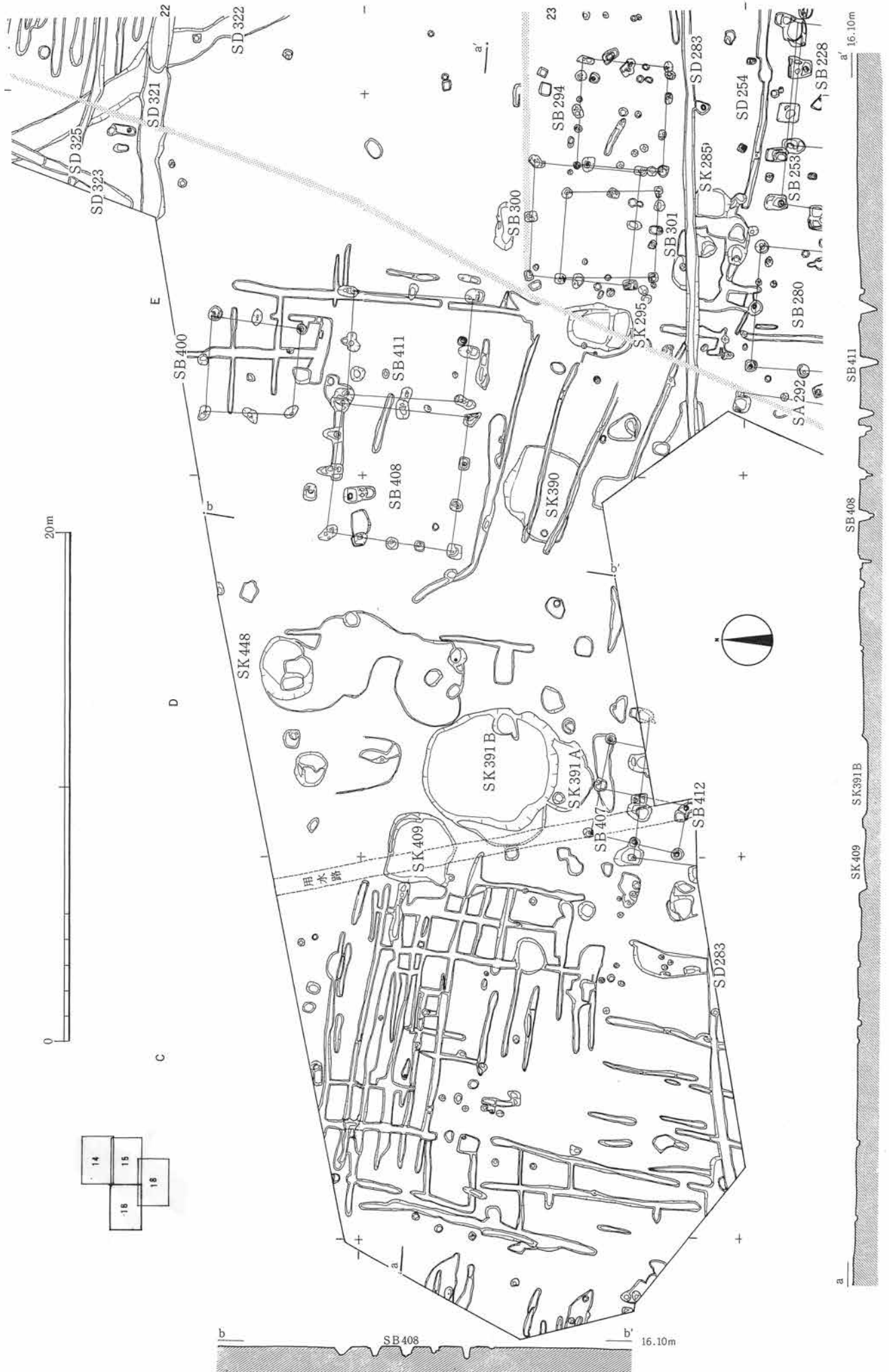








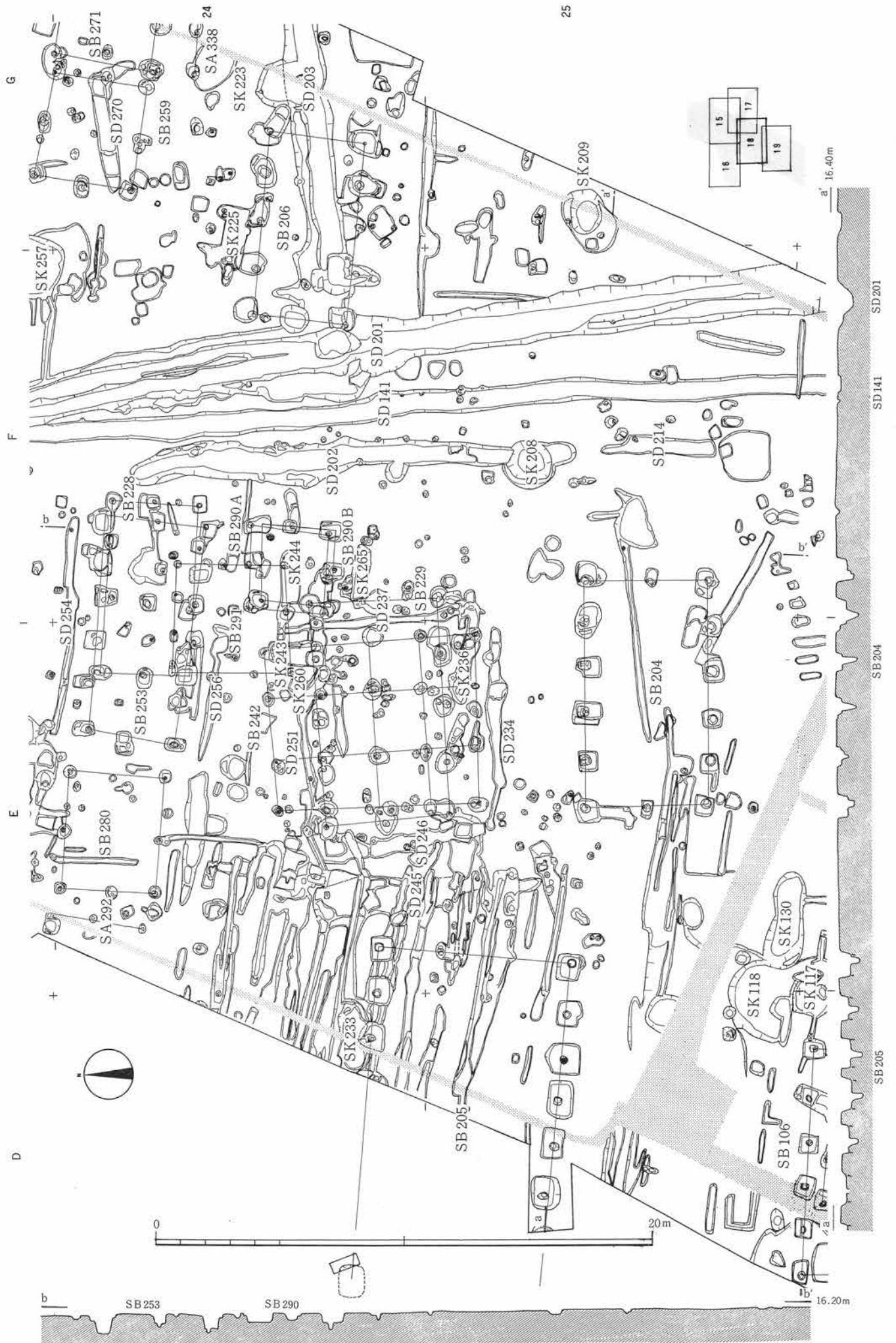


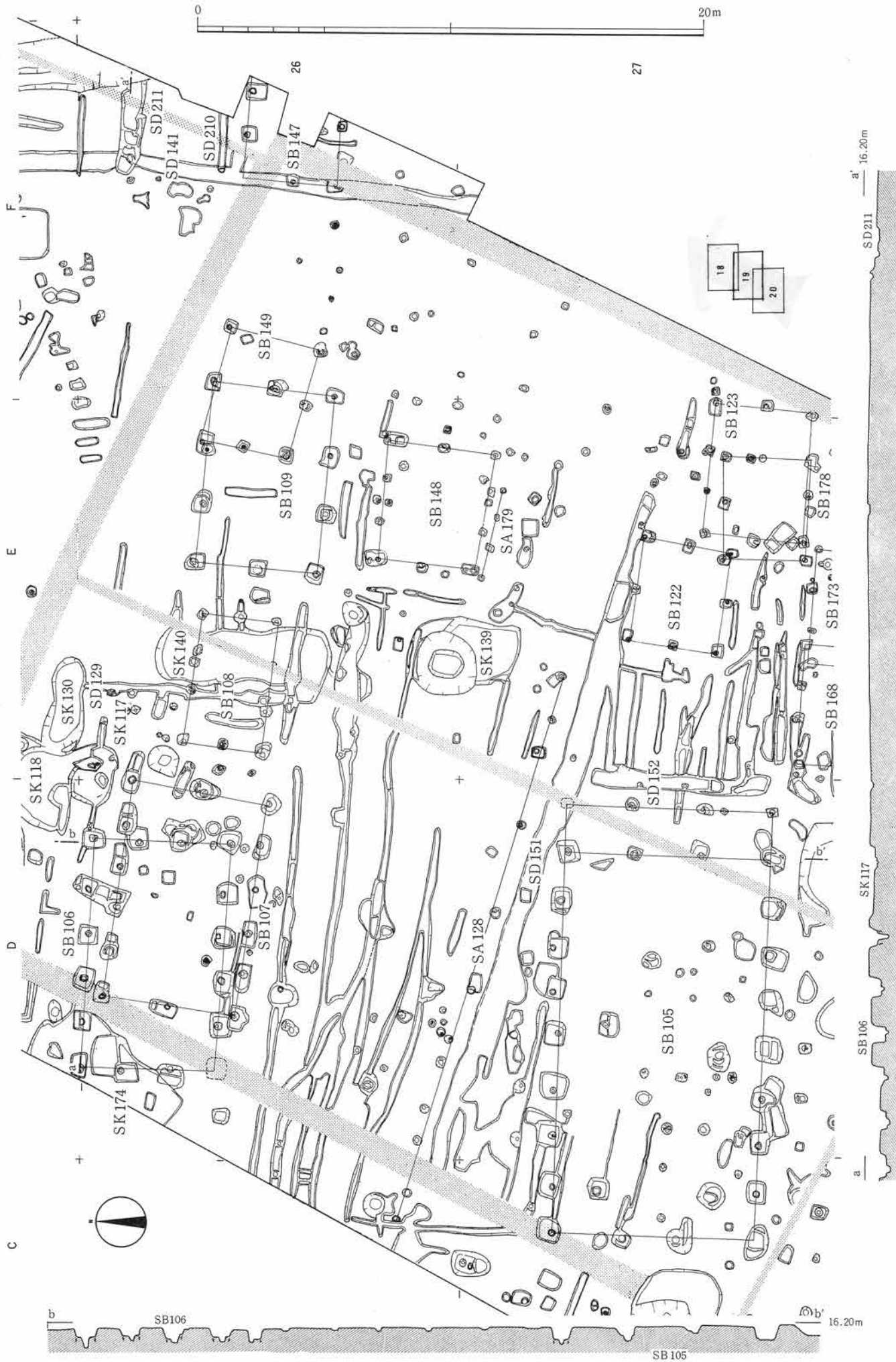




23

24

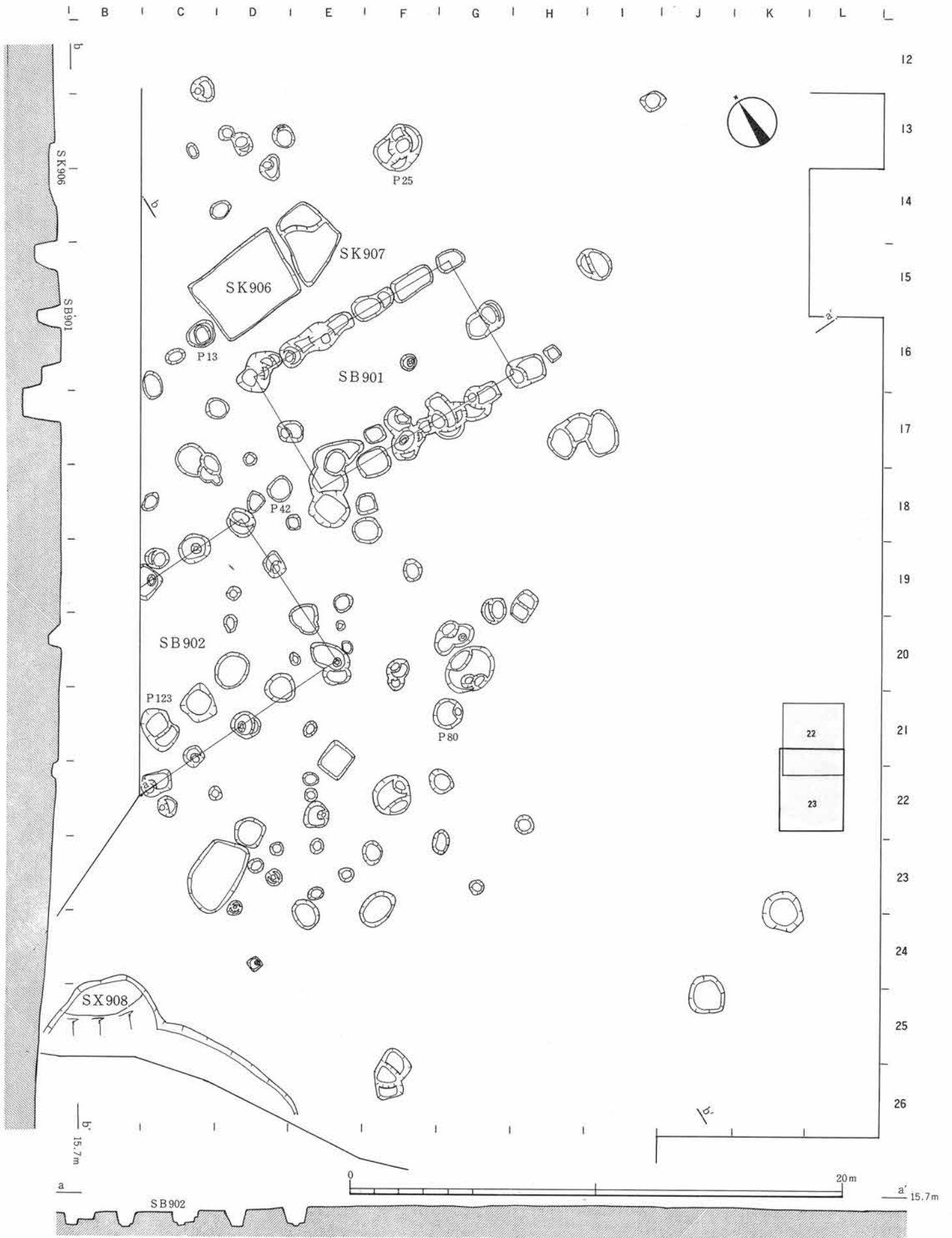




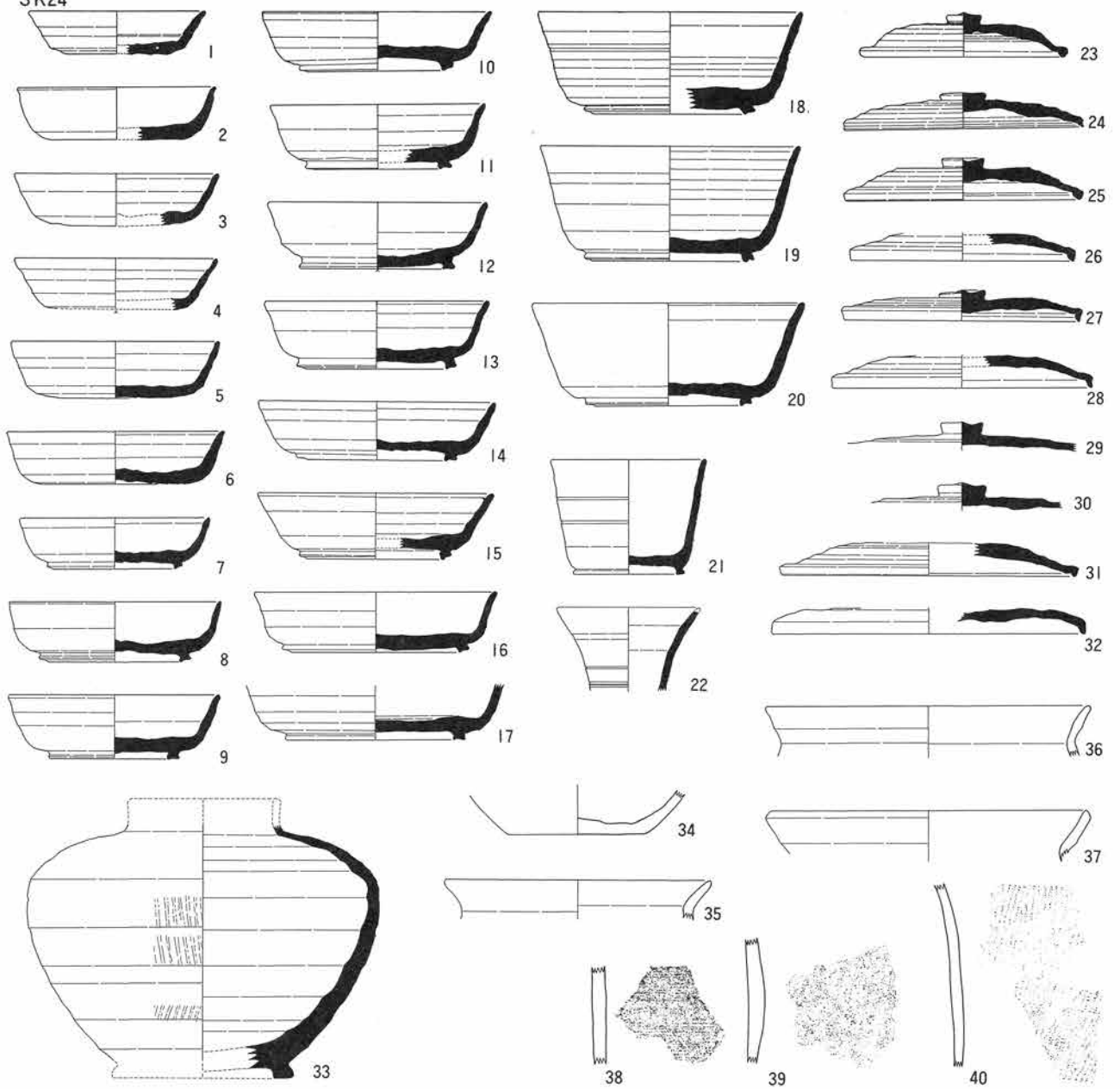






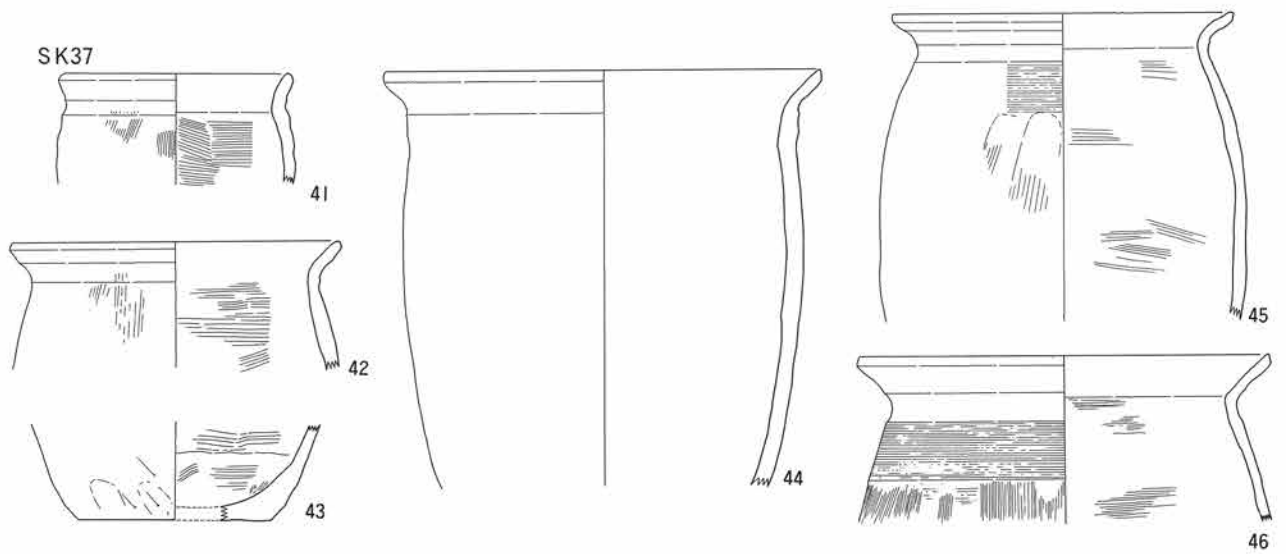


SK24



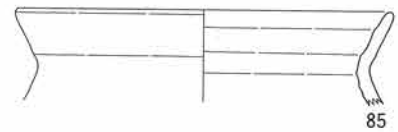
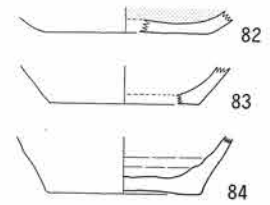
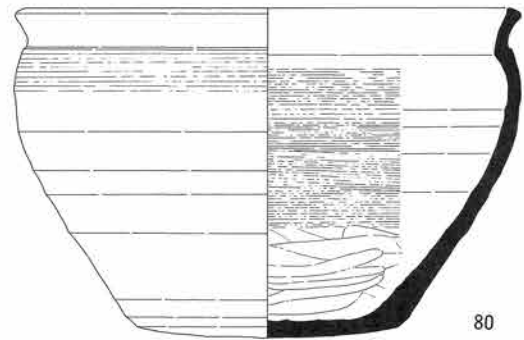
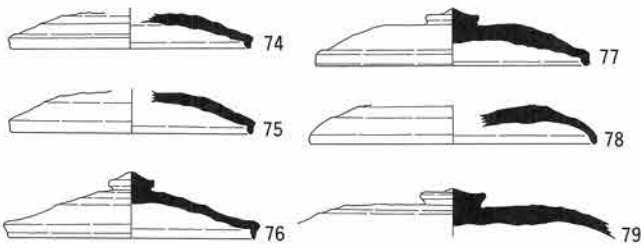
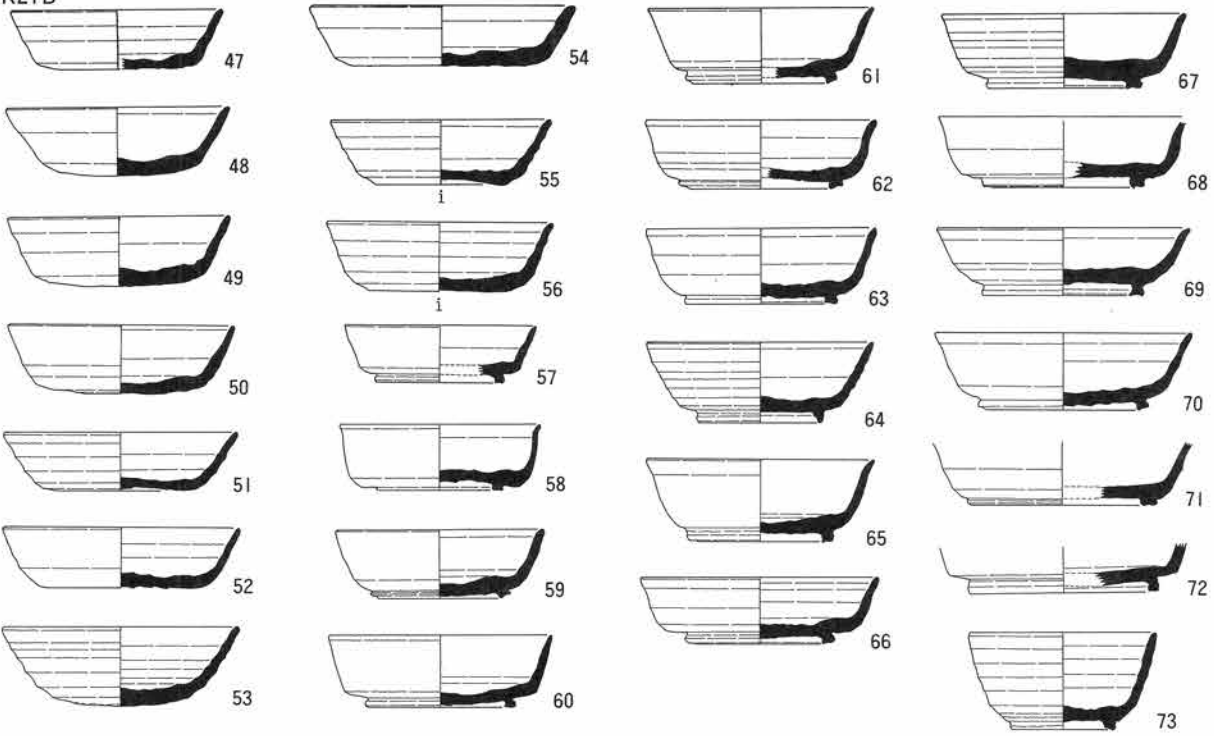
0 20cm

SK37



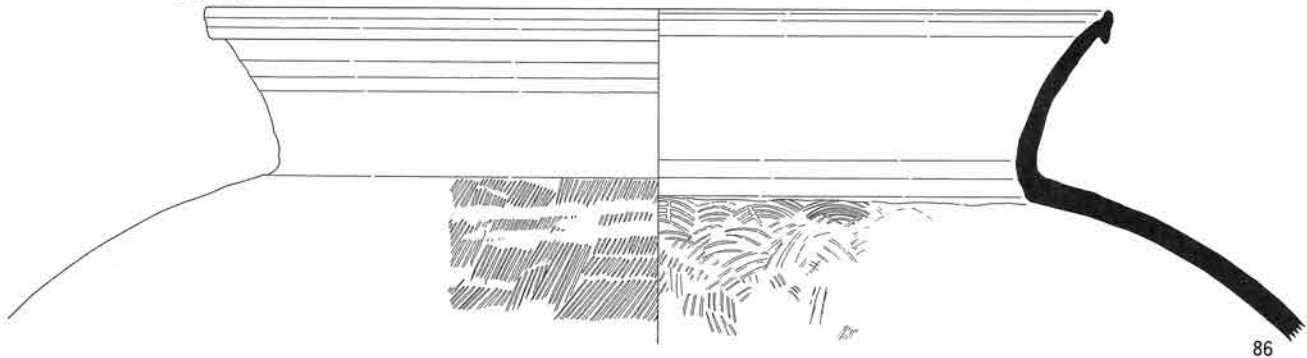
46

SK21B



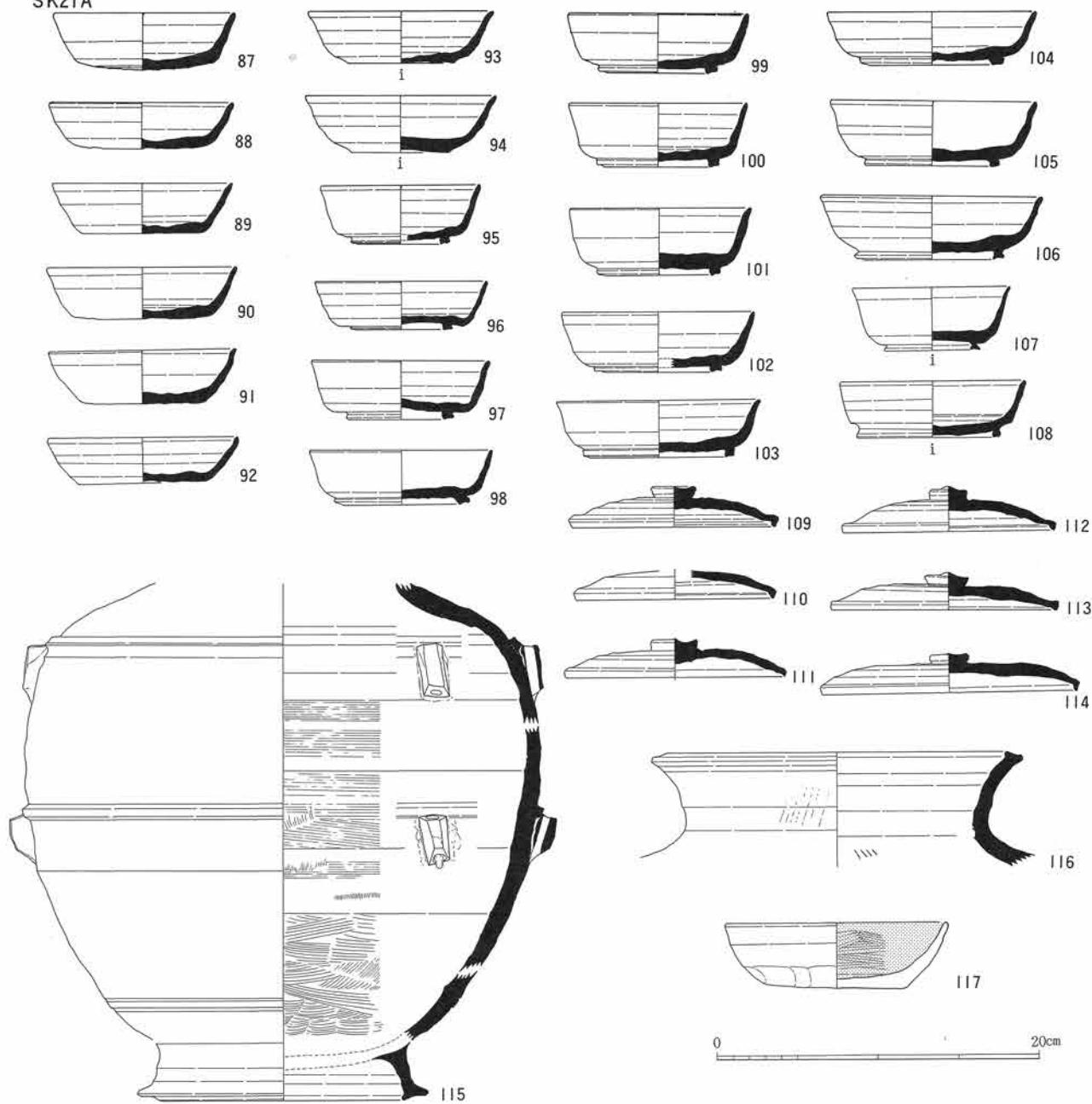
0 20cm

SK21A

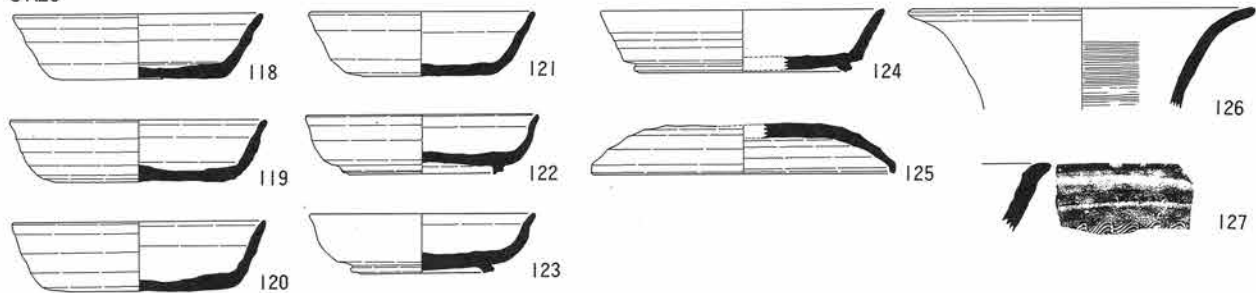


86

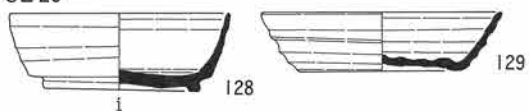
SK21A



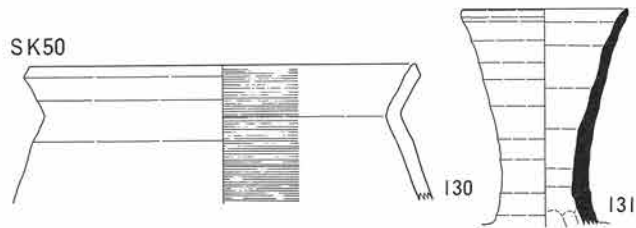
SK25



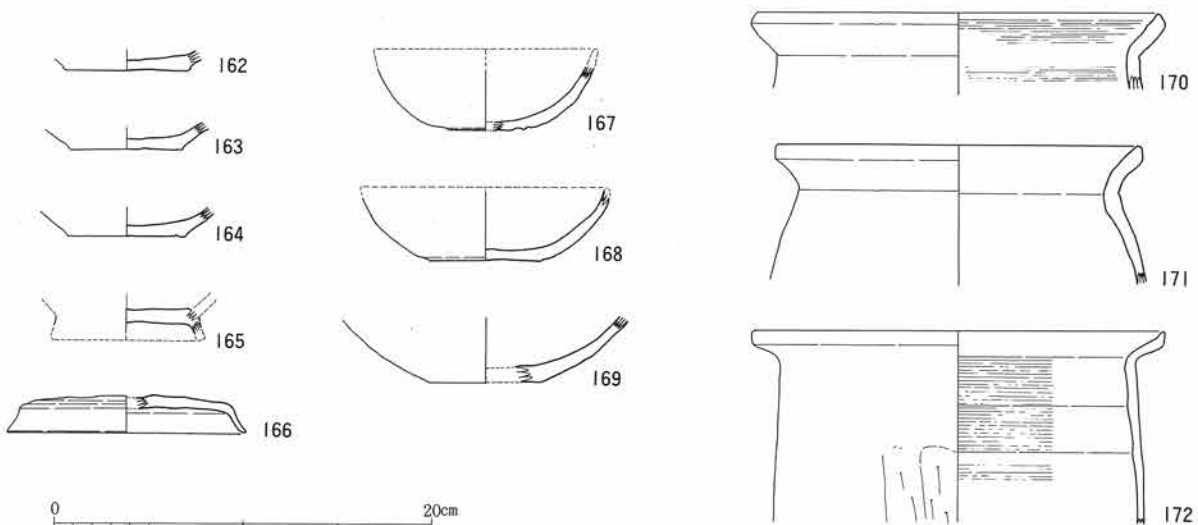
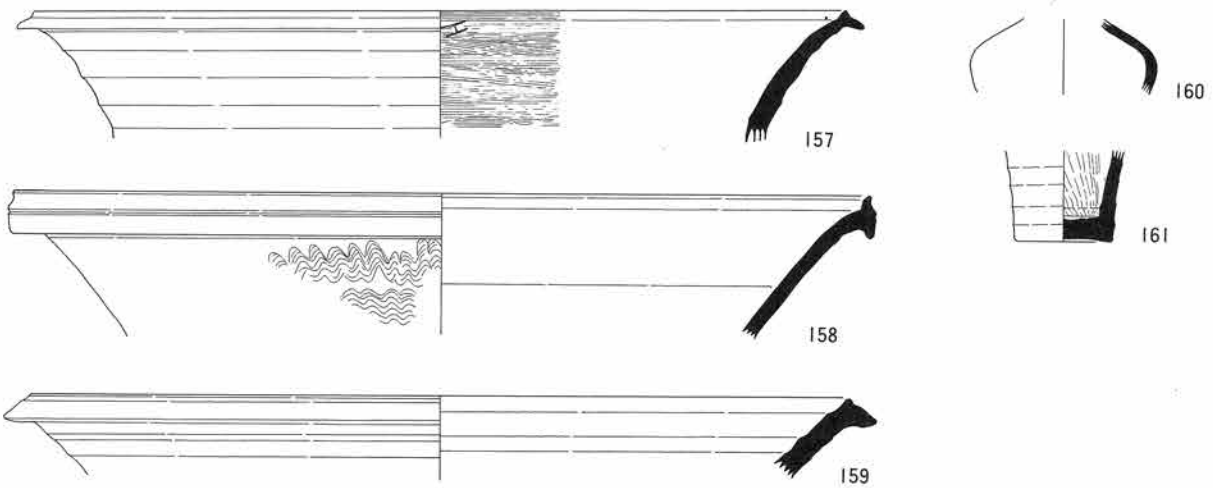
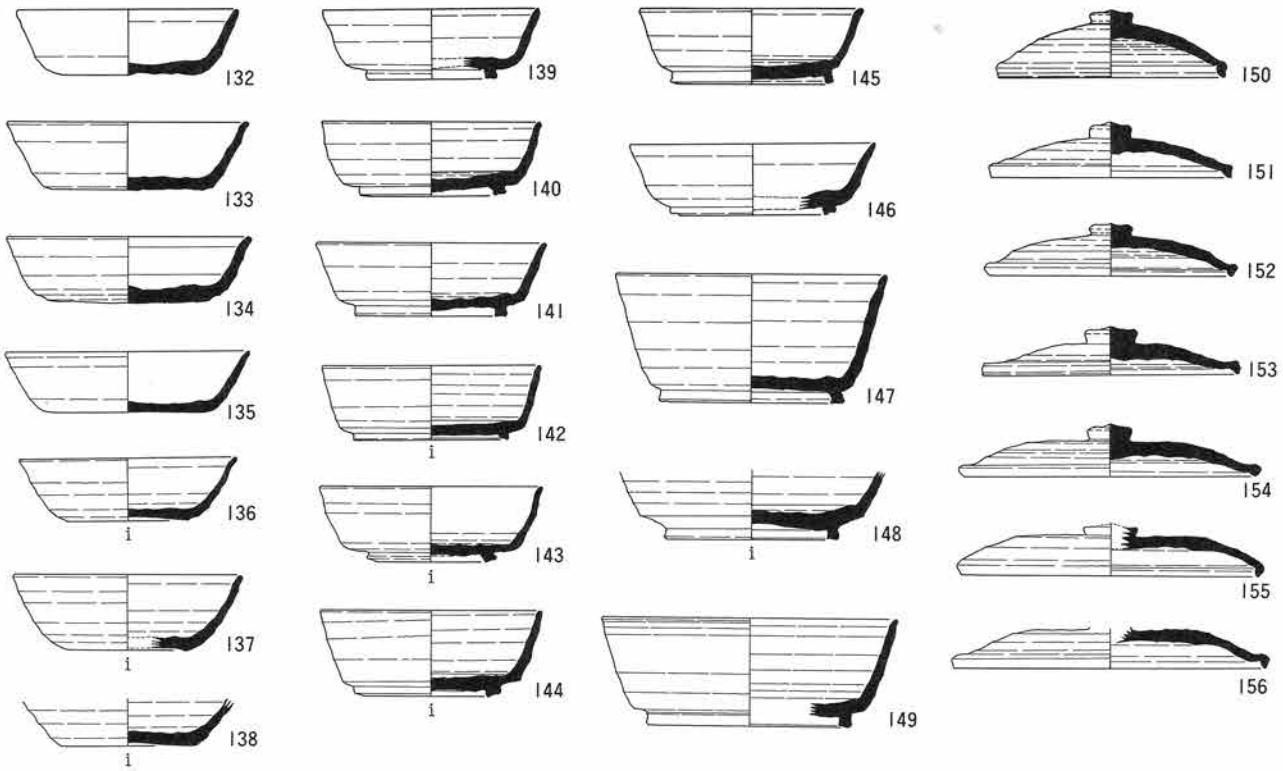
SE 20



SK50

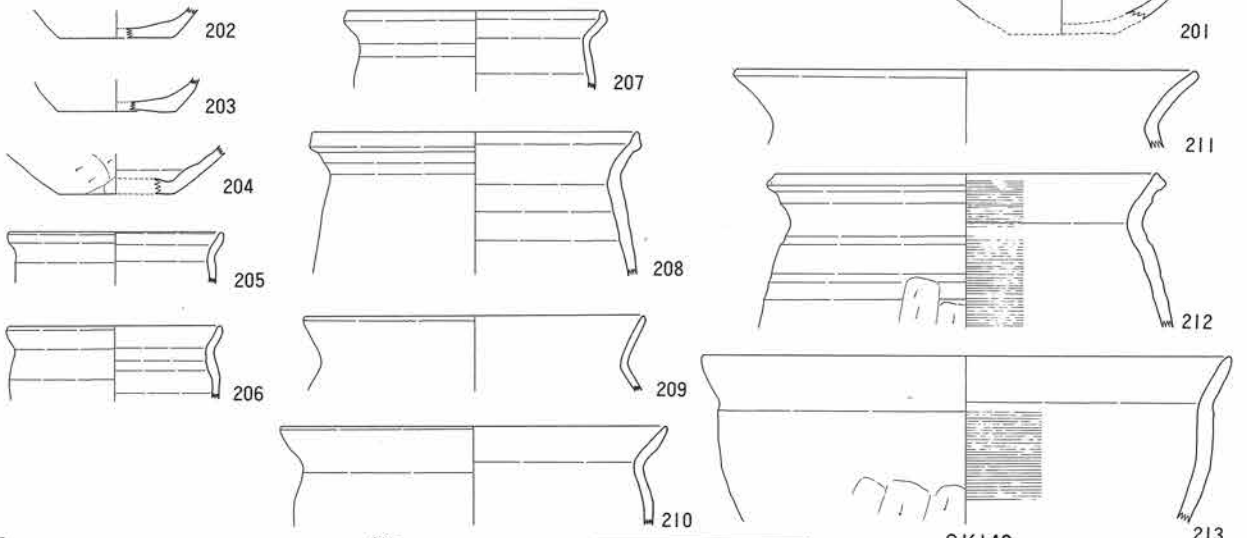
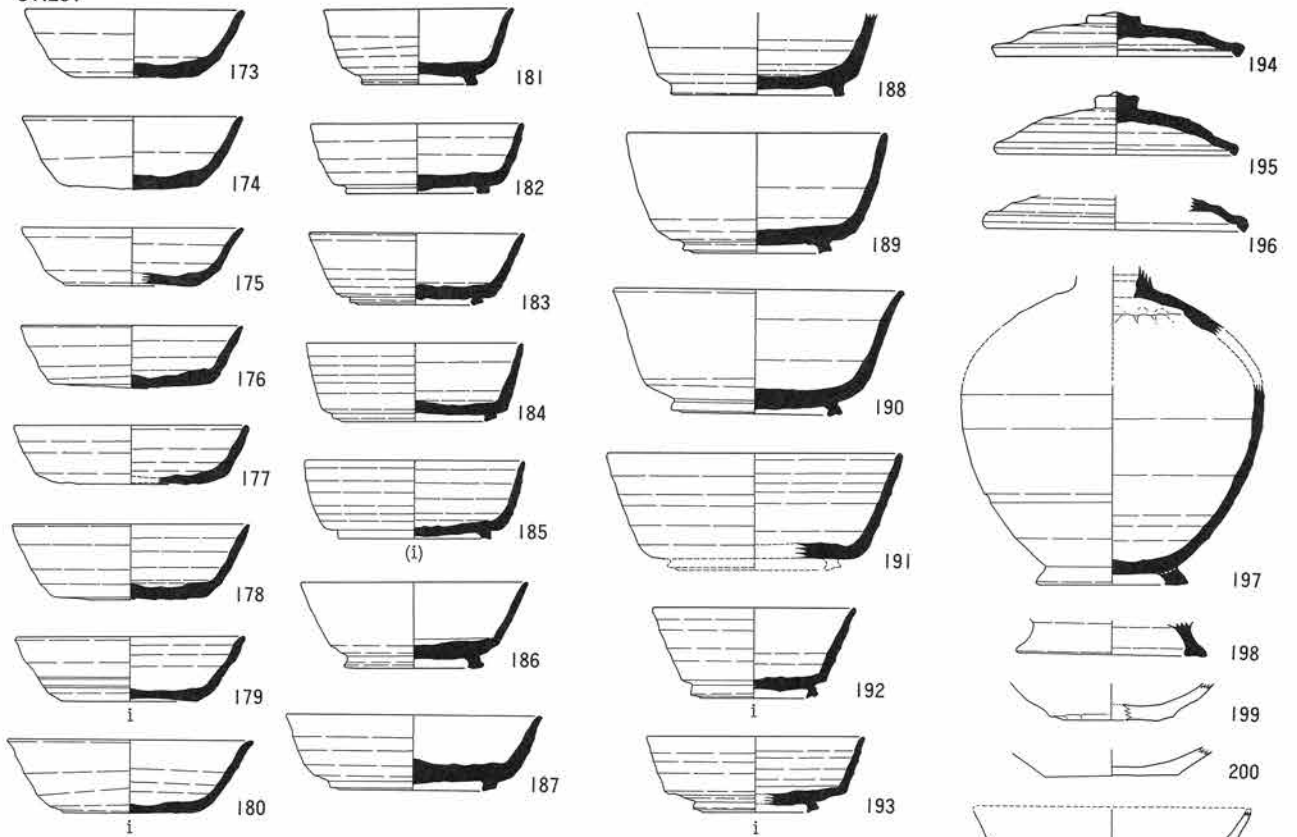


117 黑色土師器



0 20cm

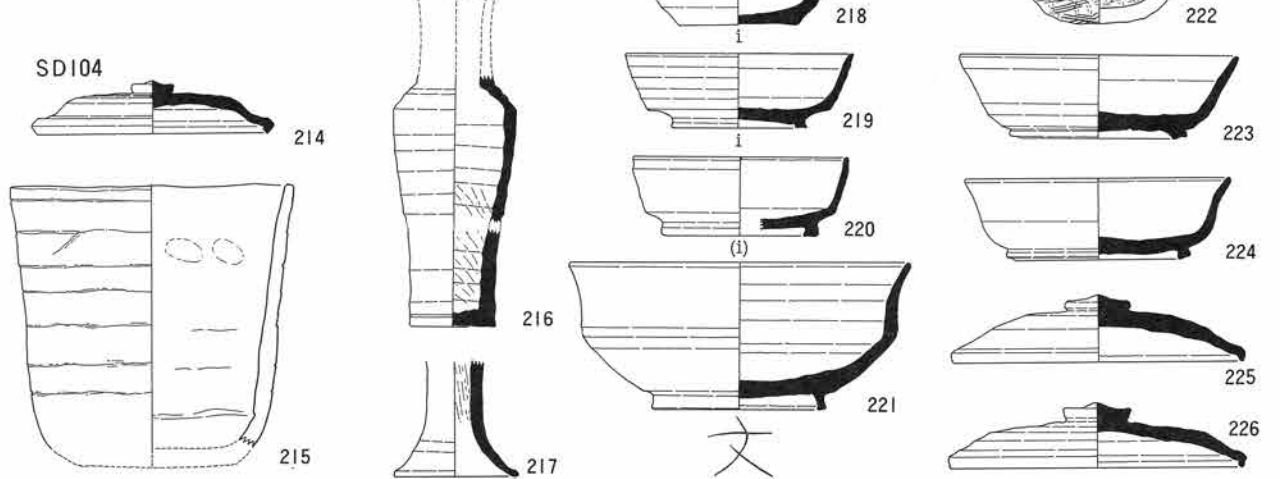
SK257

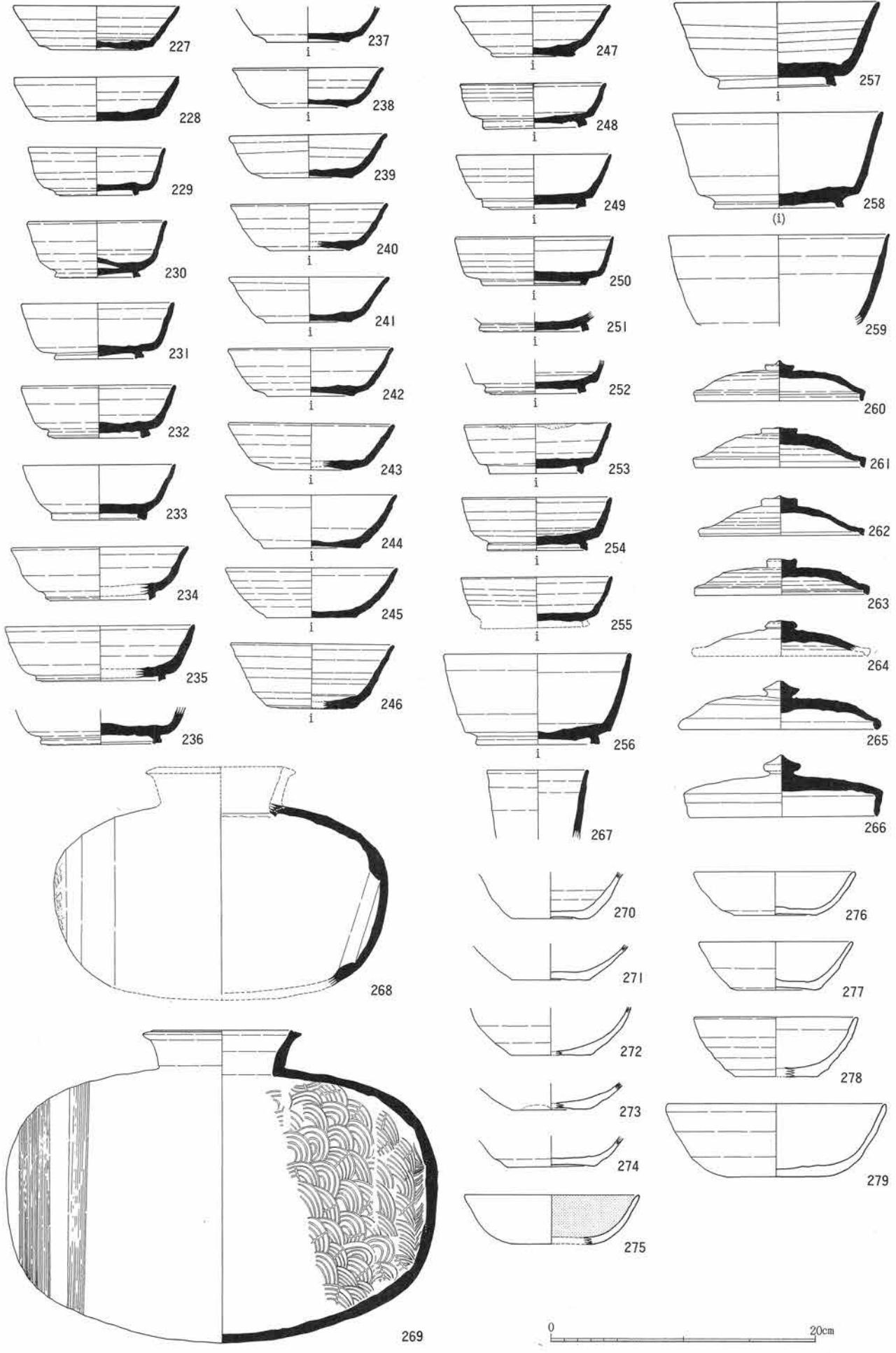


0 20cm

SK120

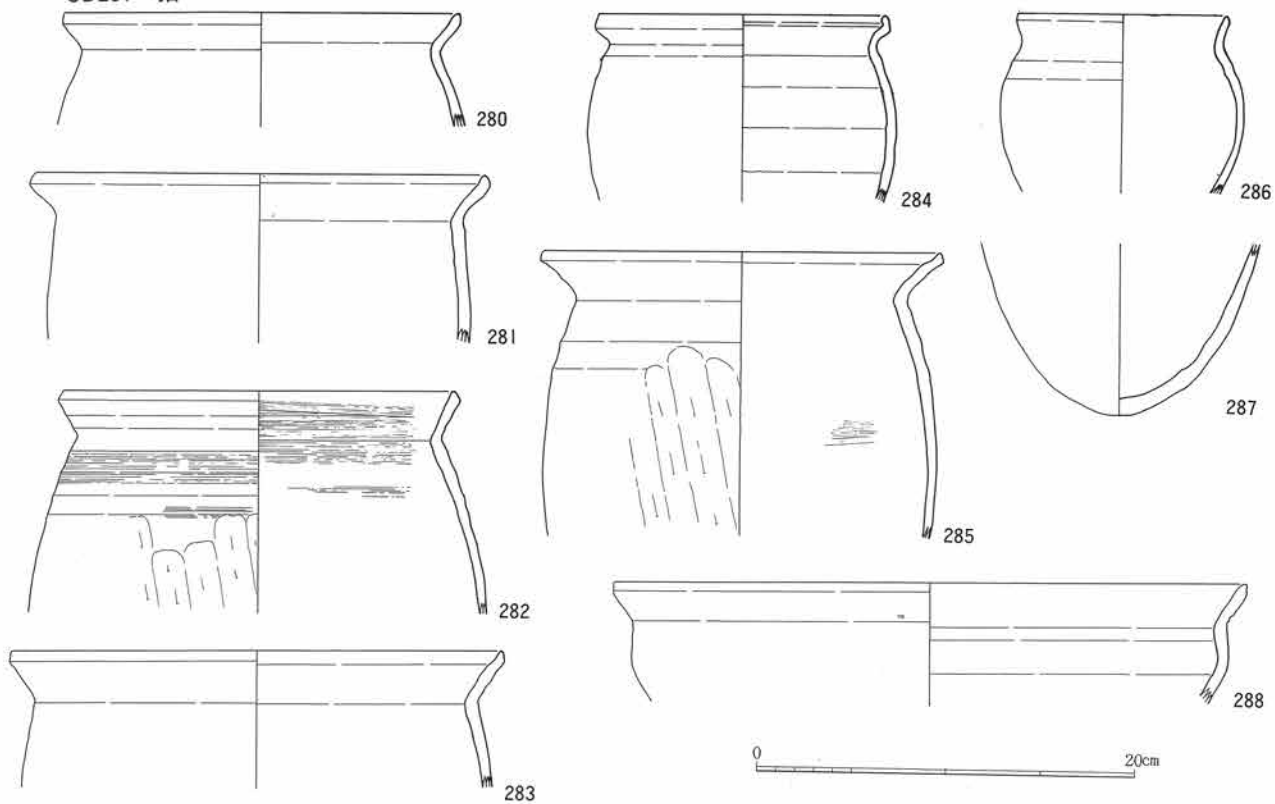
SD104



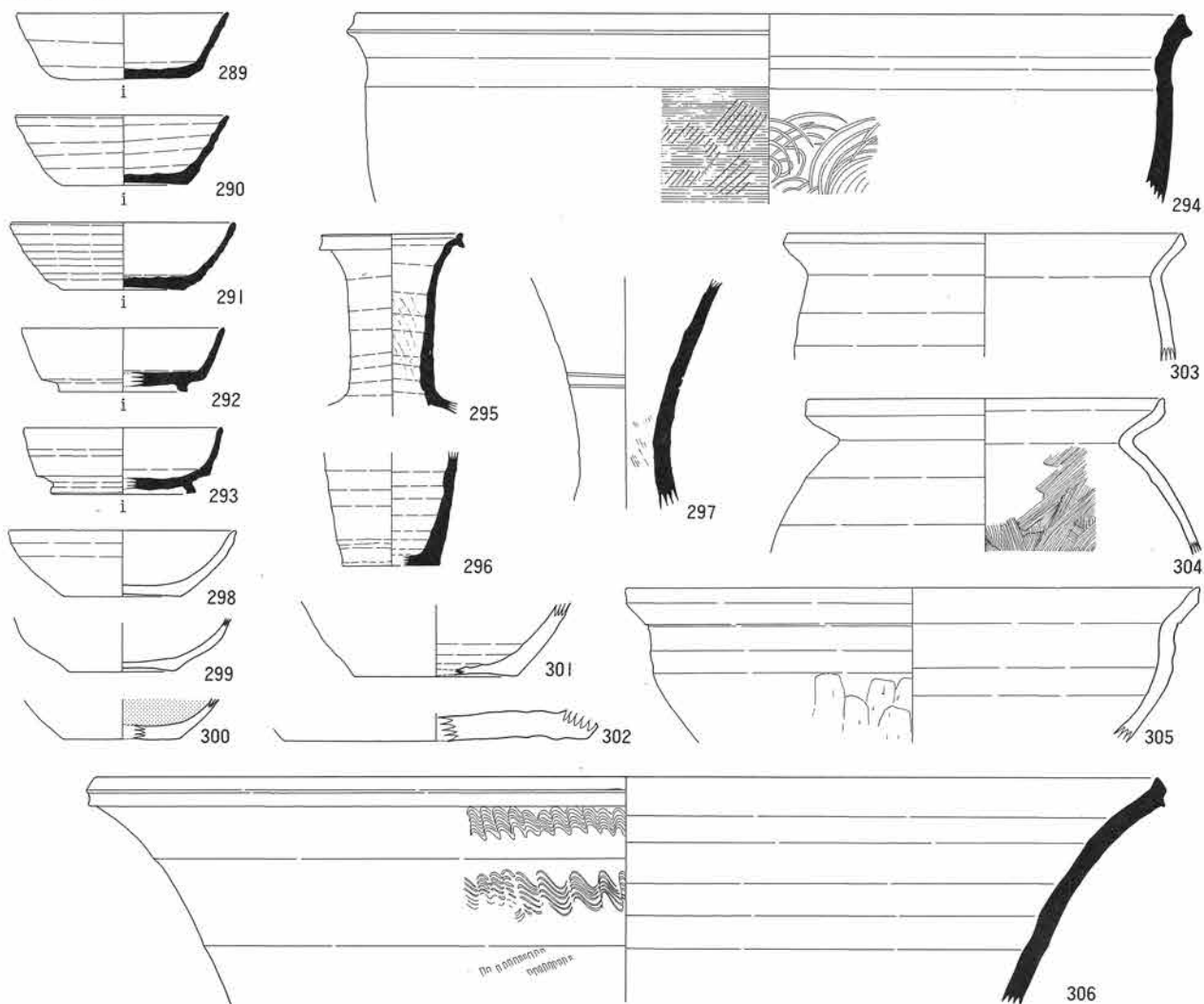


275 黑色土師器

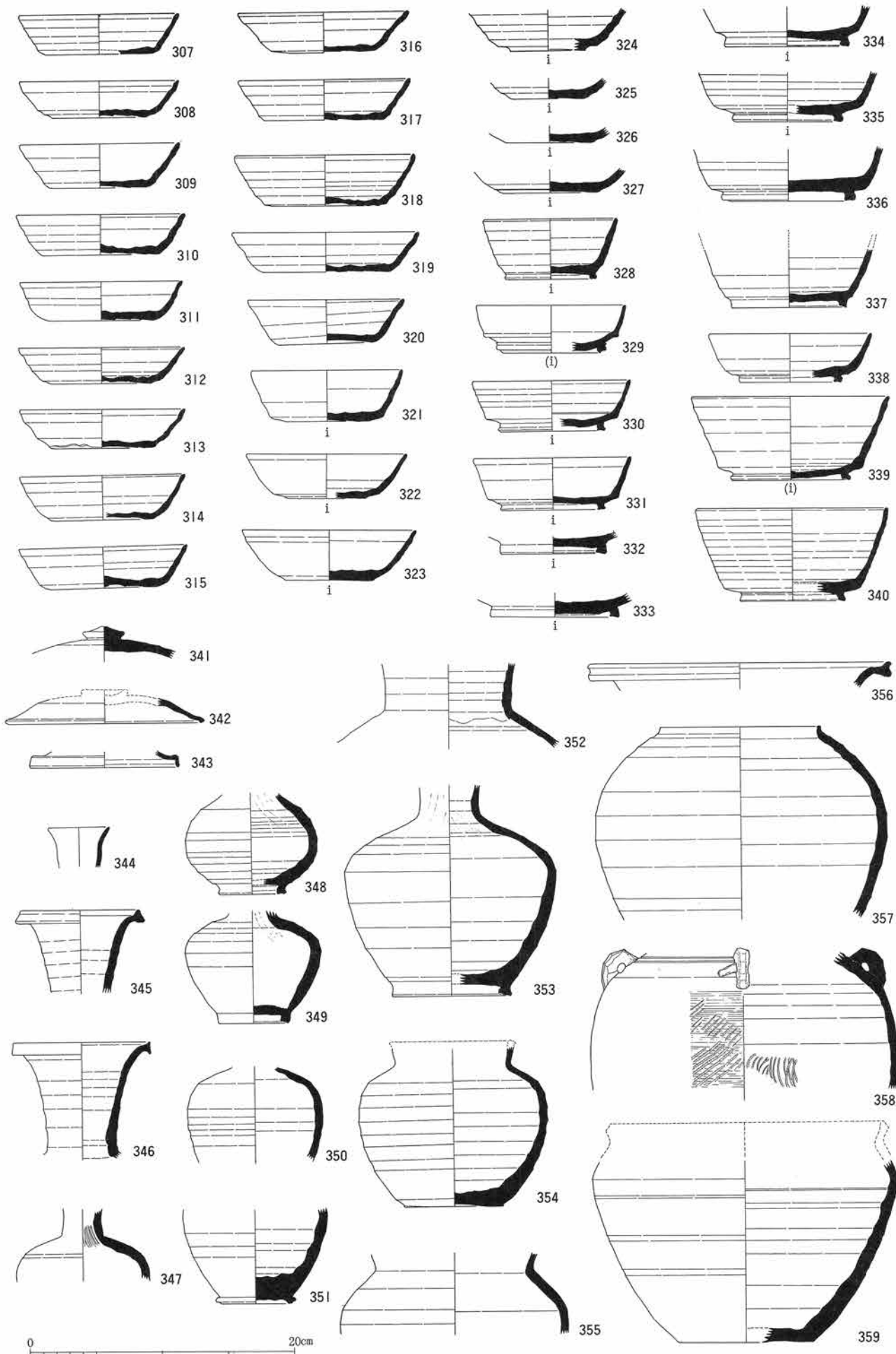
SD201-括

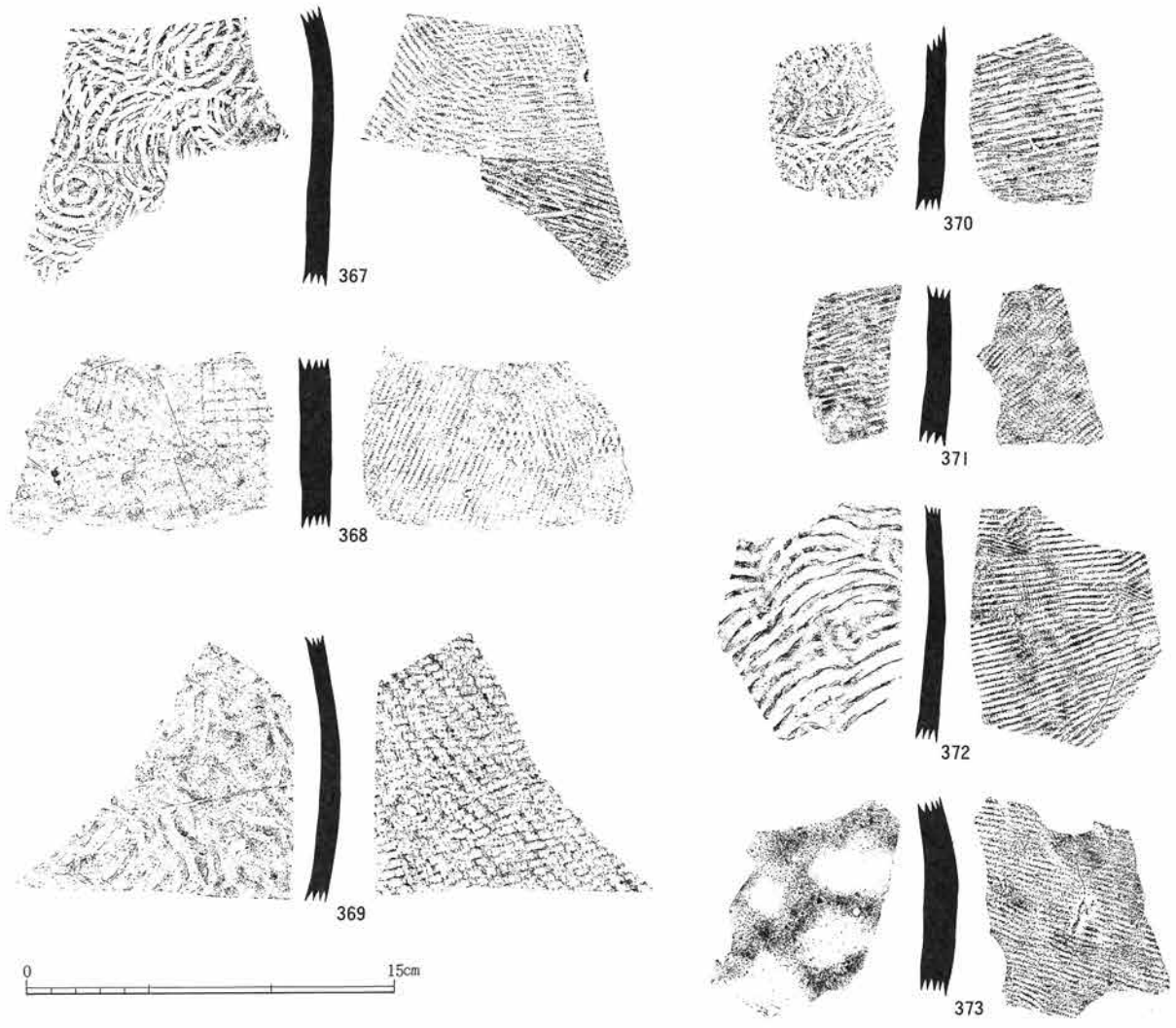
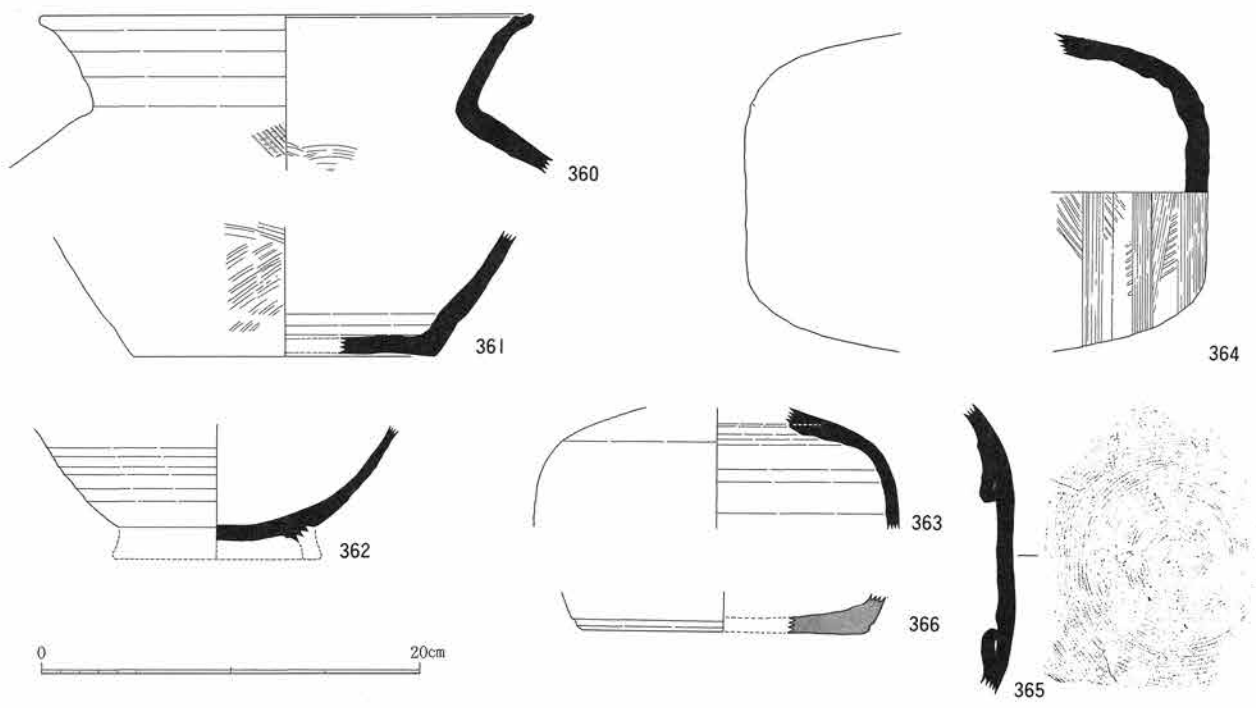


SD201-括外

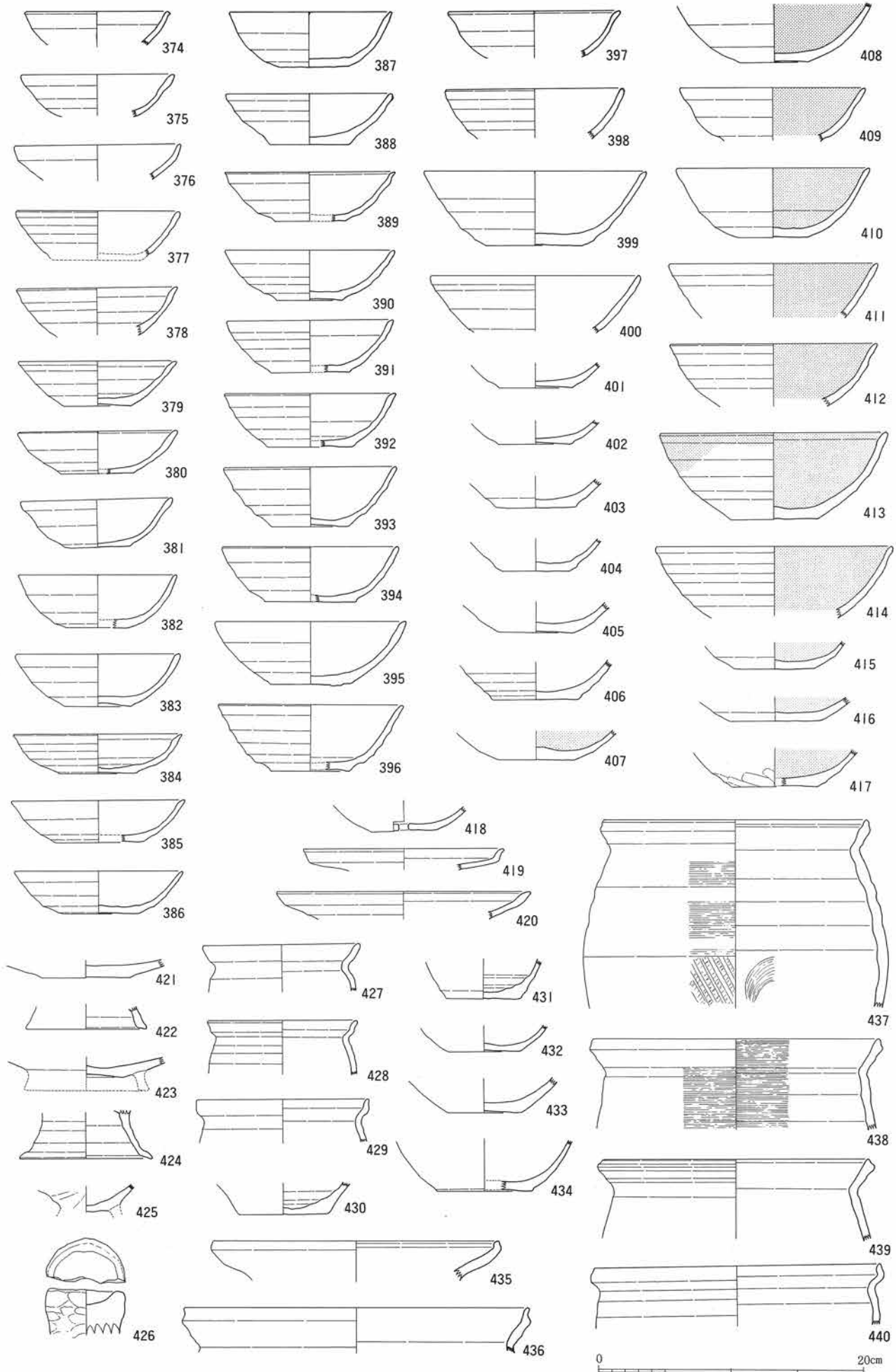


300 黑色土師器



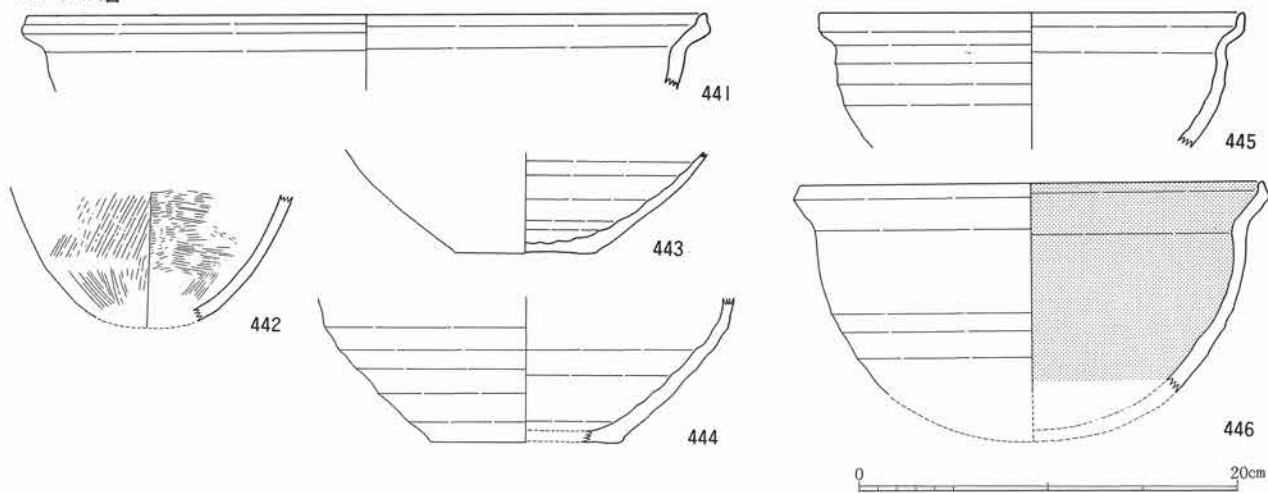


366 緑釉陶器

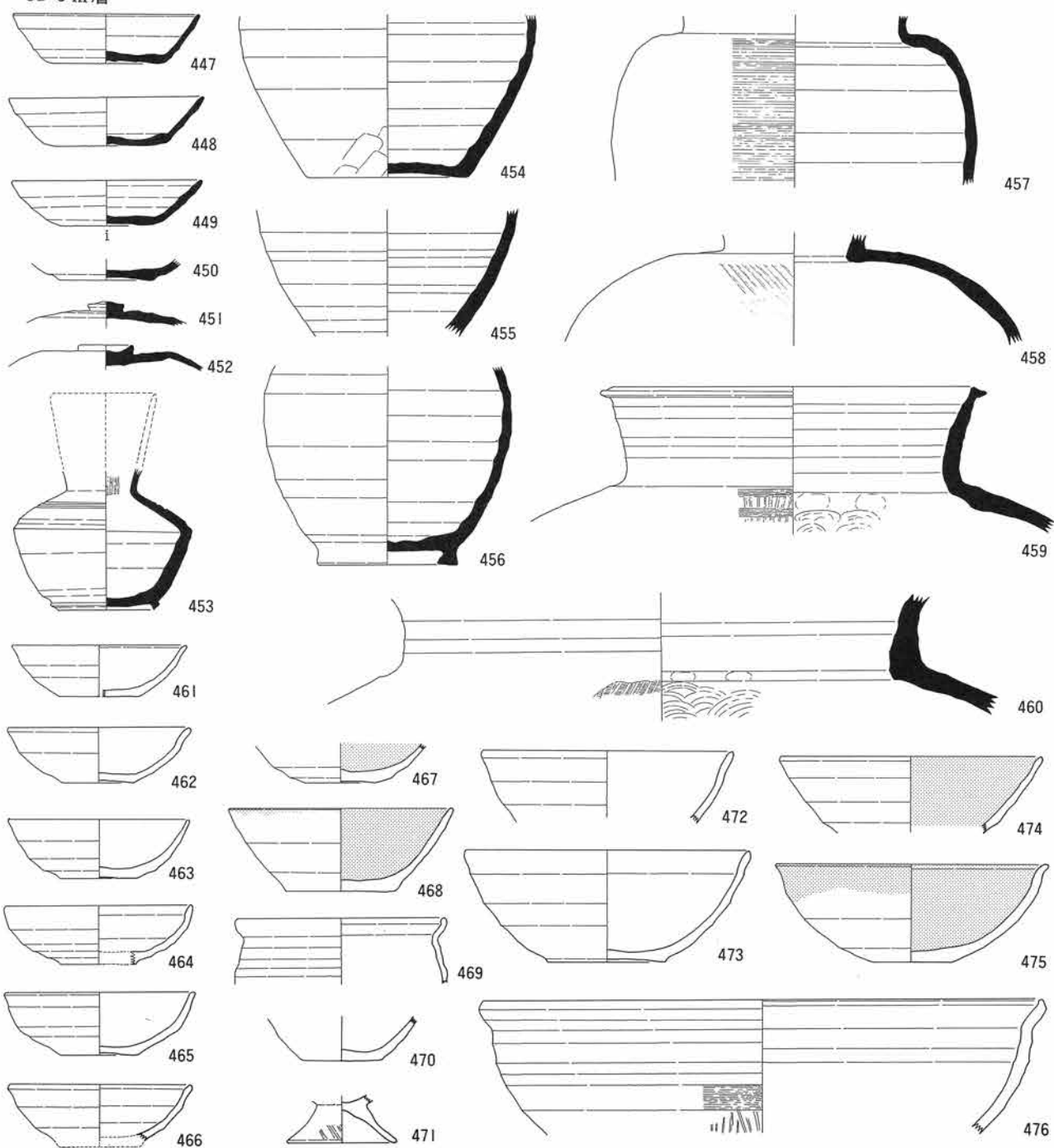


408~417 黒色土師器

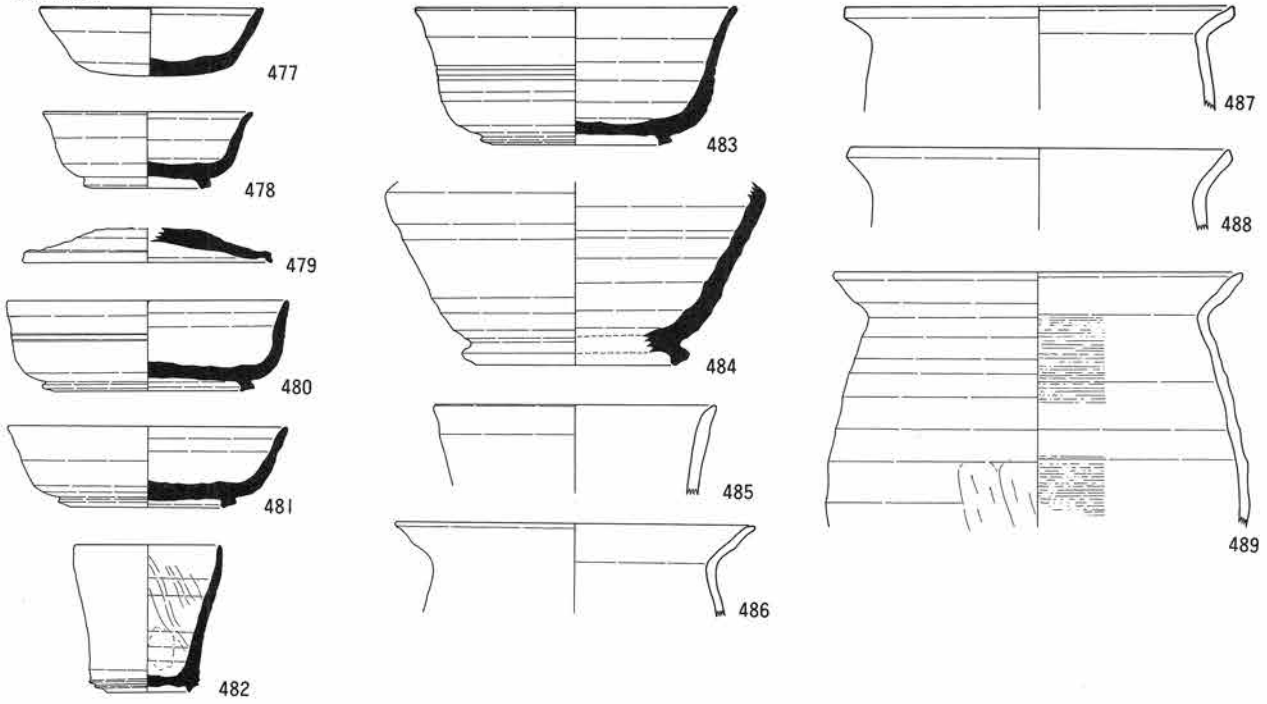
SD 3 IV層



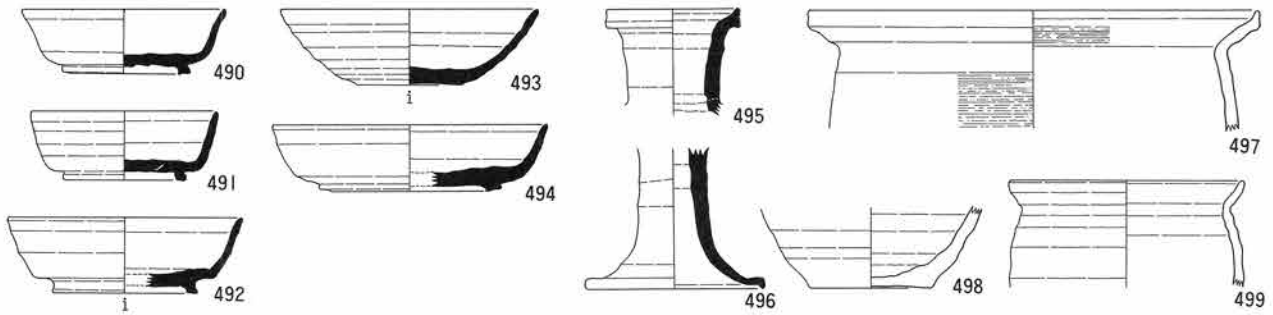
SD 3 III層



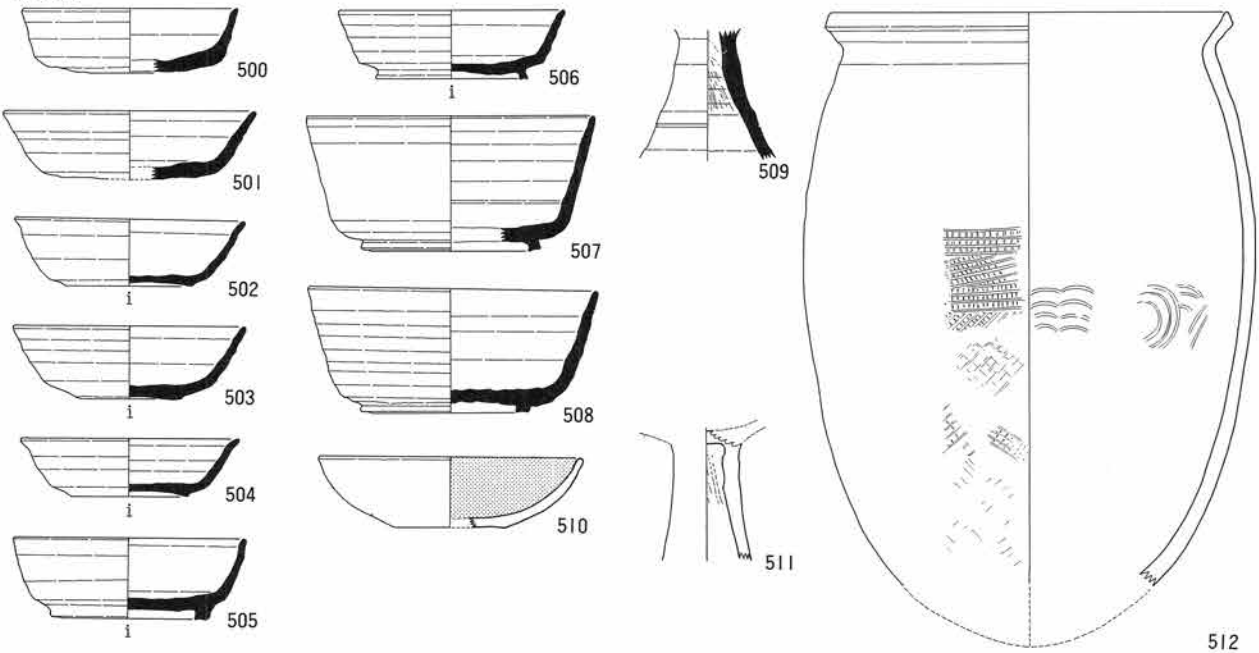
SK 391 B



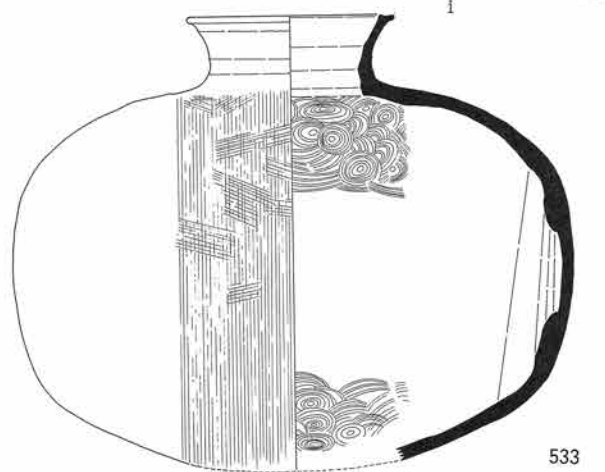
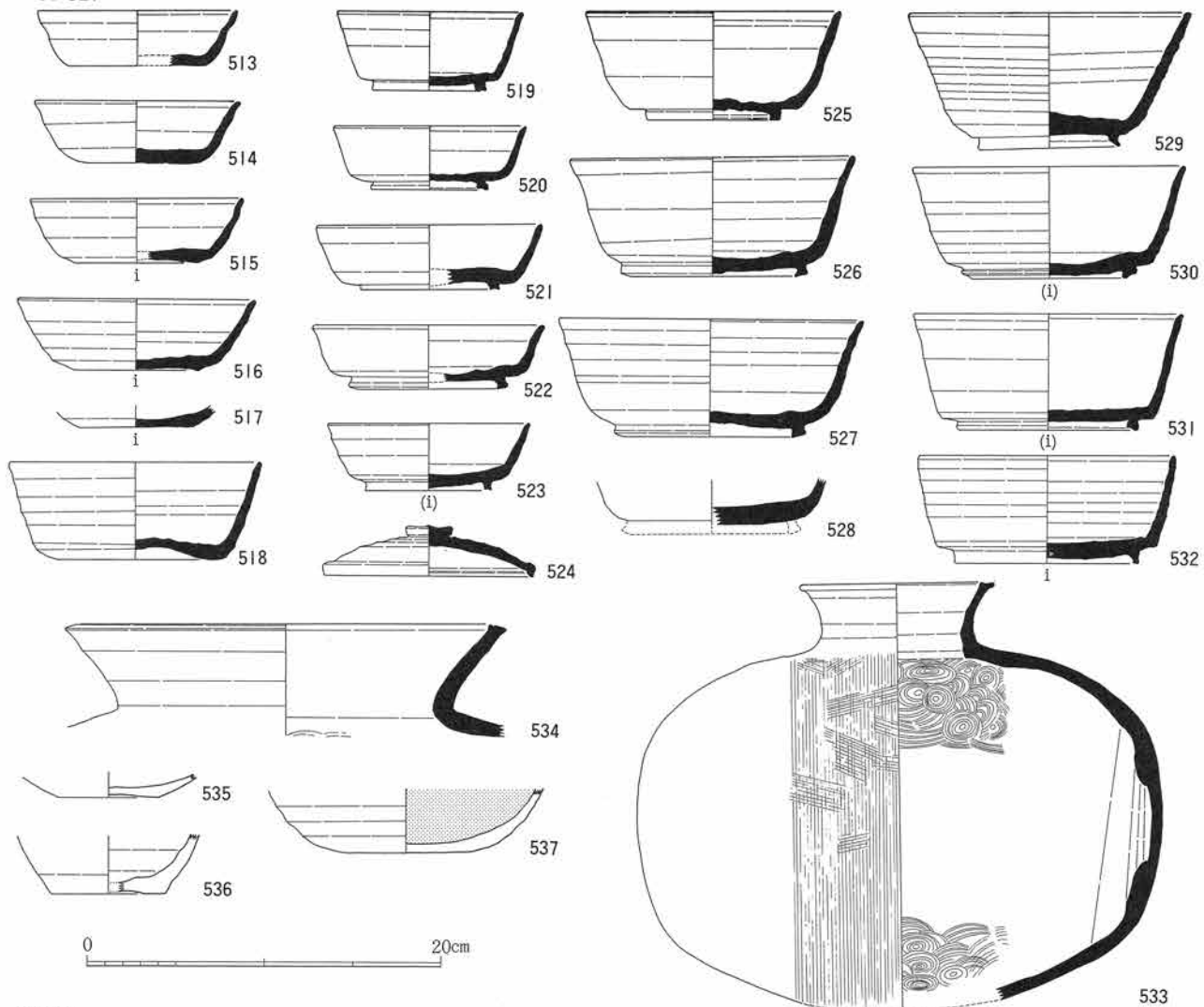
SK 391 A



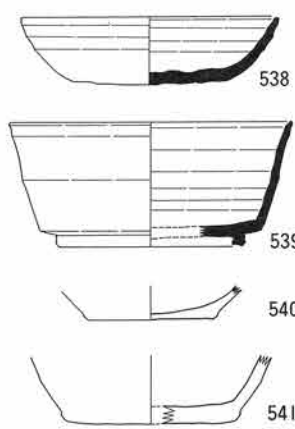
SK 223



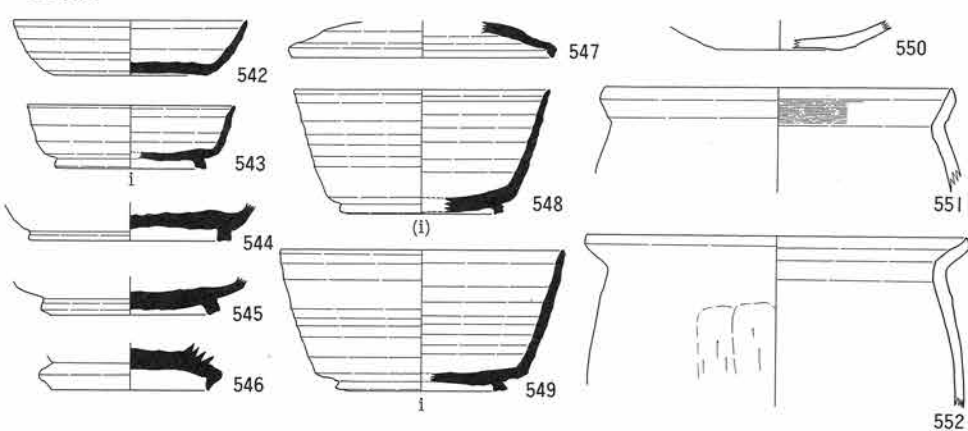
SD 321



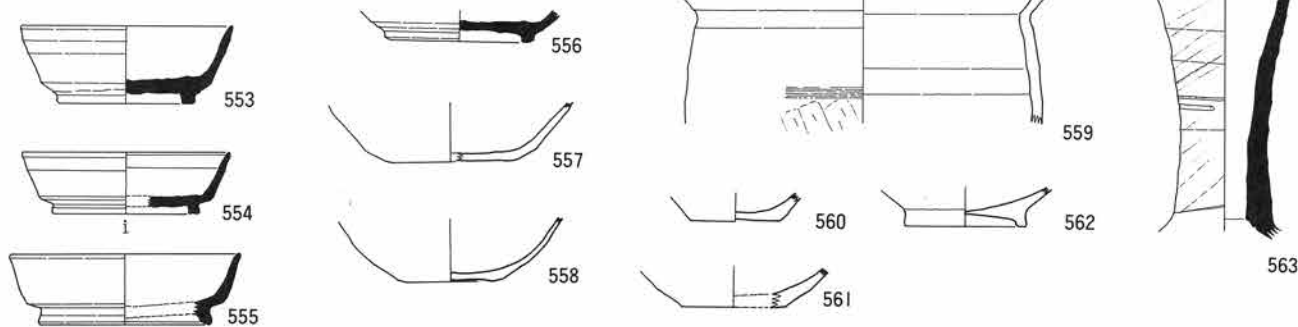
SD 320



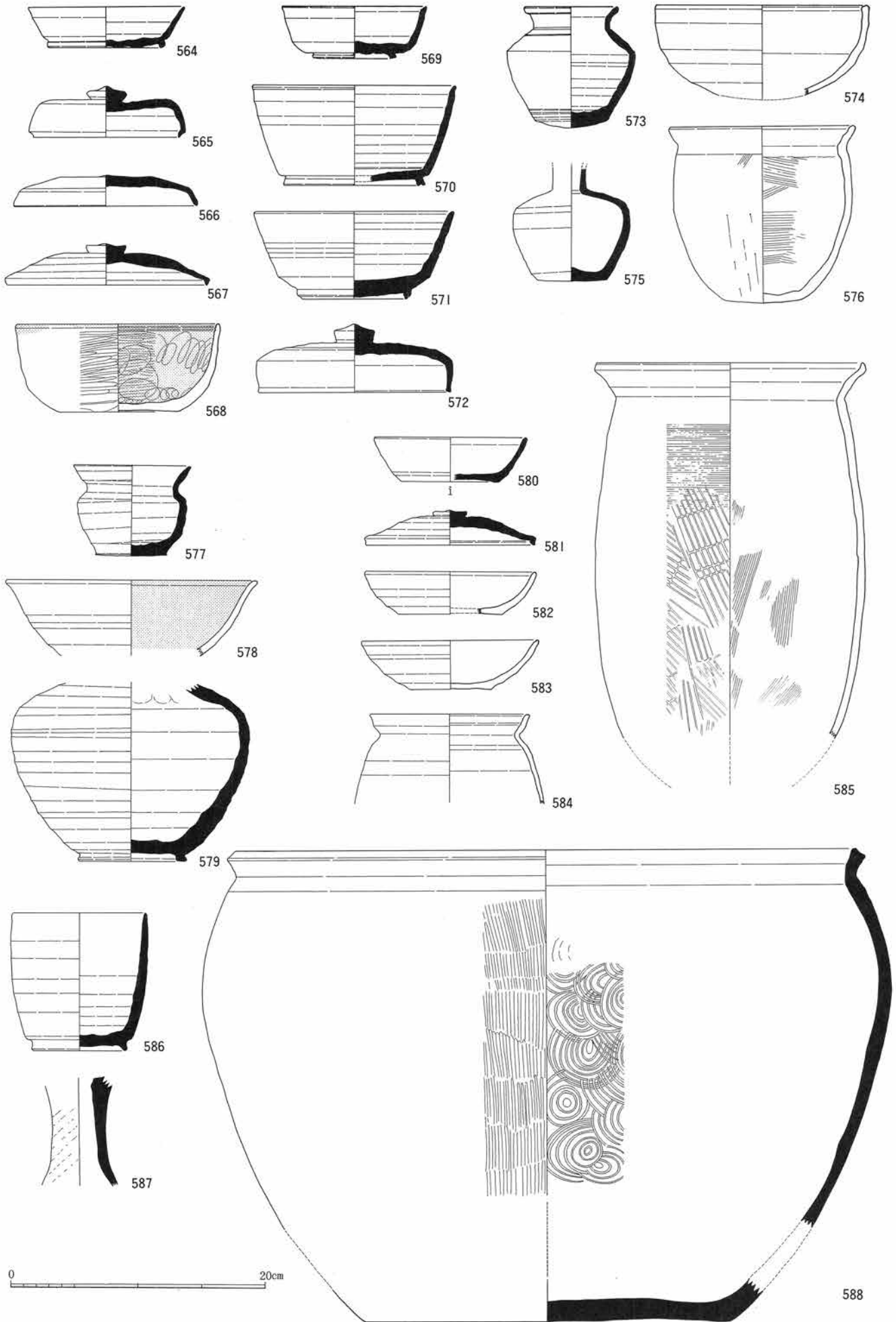
SD 323



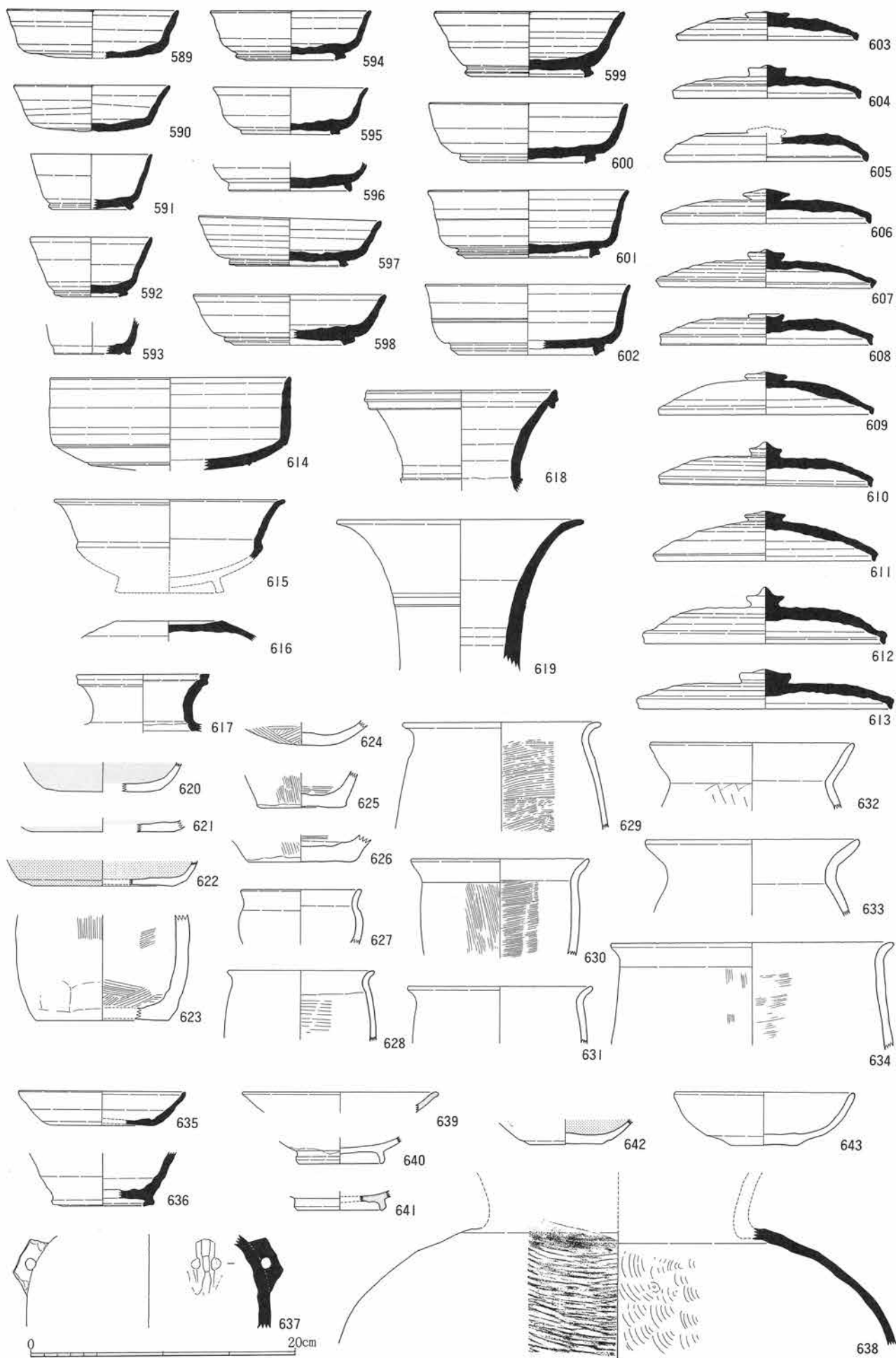
SD 324



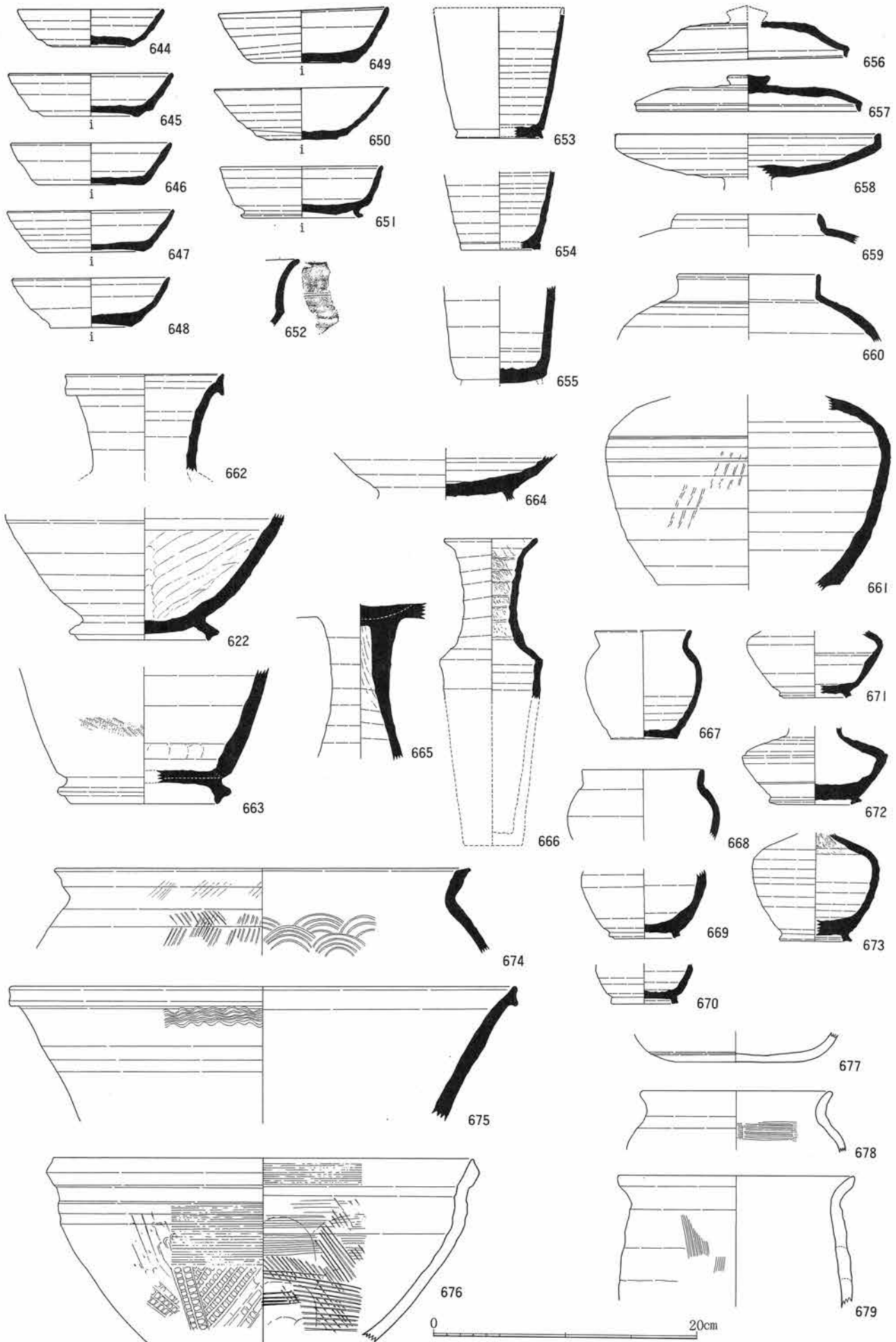
537 黑色土師器

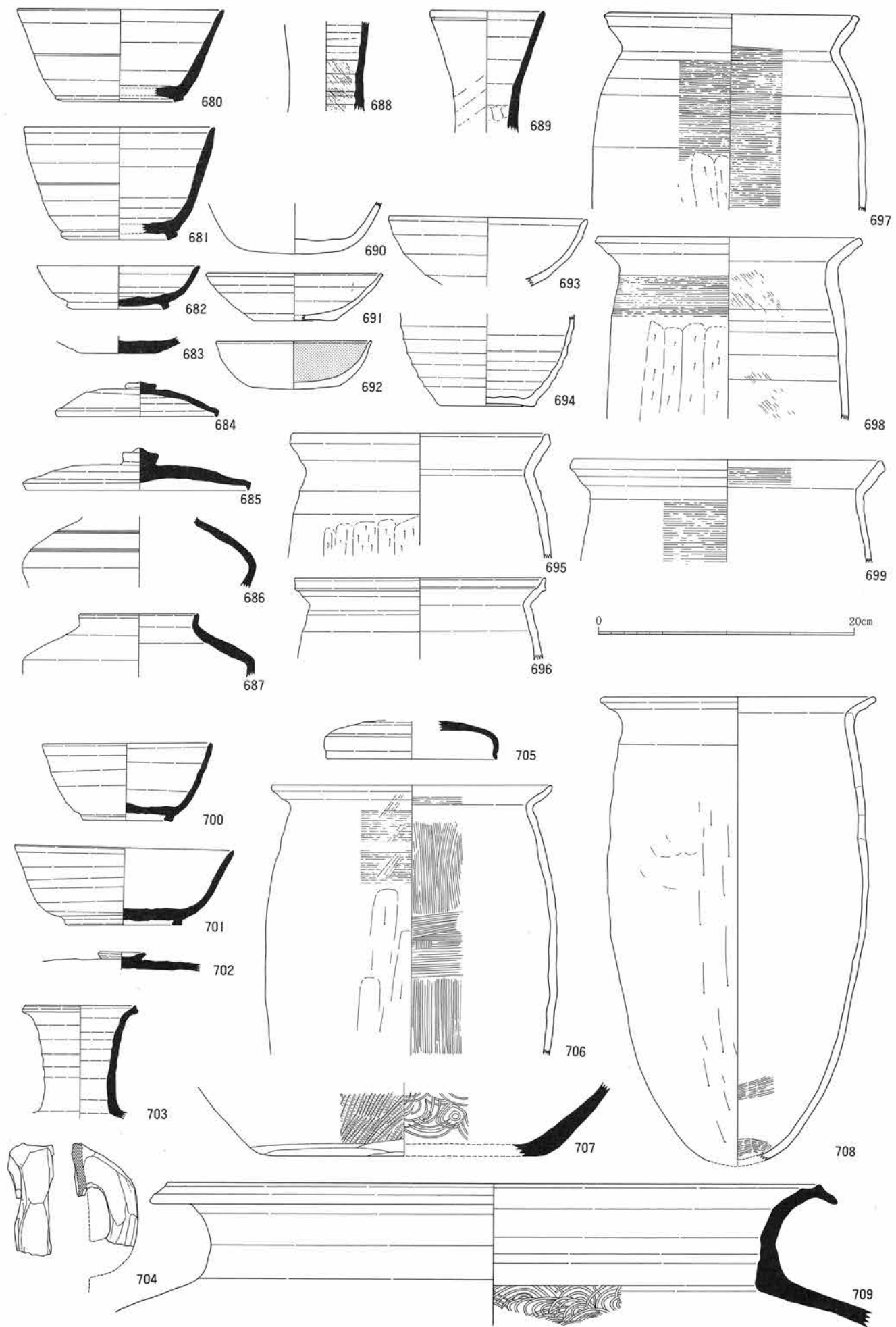


564 SB106 565 SD141 566 SD132 567 SK145 569~572 SD202
 573·574 SK332 575 SK609 576 SK332 577~579 SK501 580~585 SB651
 586·587 SK208 588 SB275
 568·578 黑色土師器

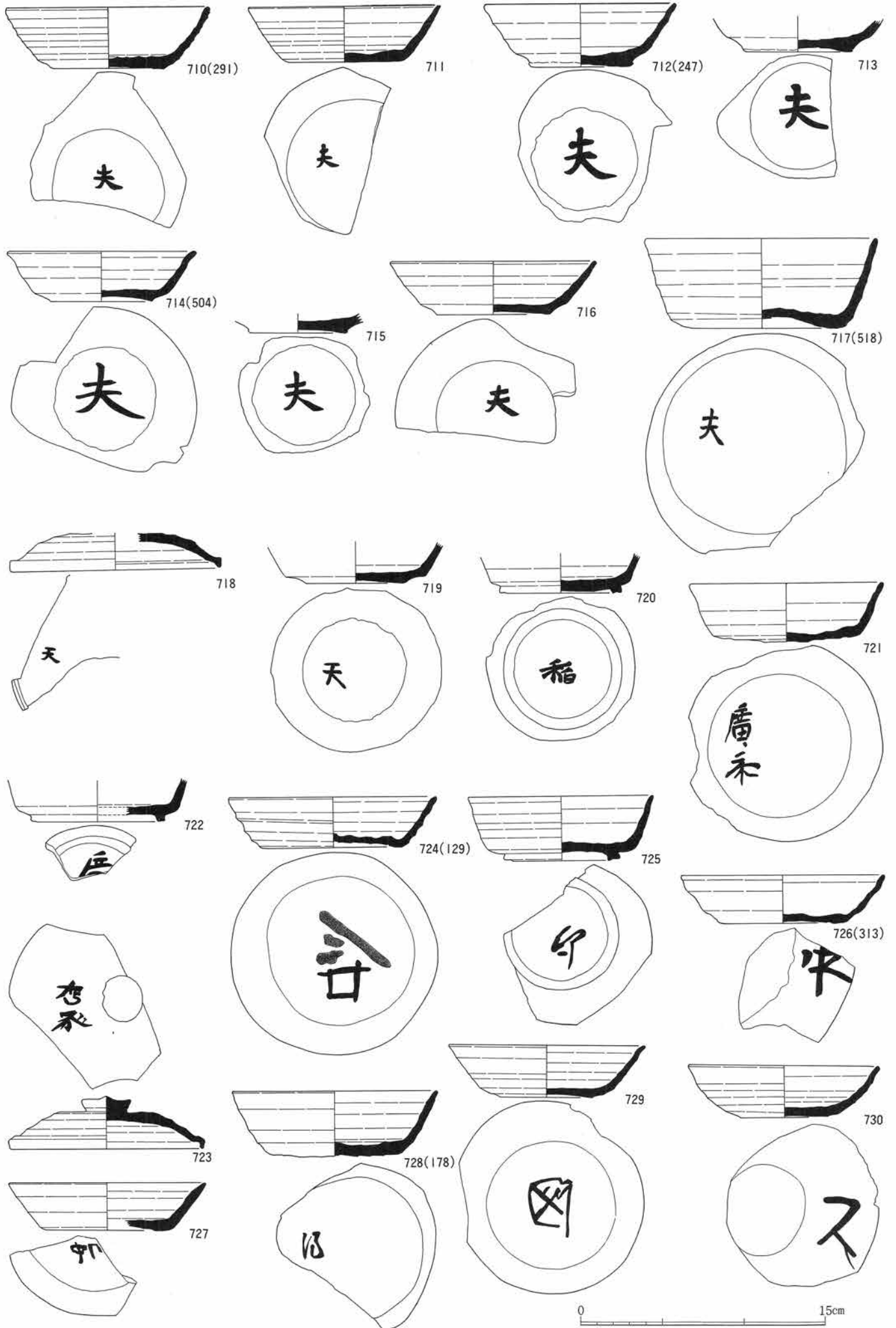


622・642 黑色土師器 620・621 赤彩土師器 639~641 灰釉陶器

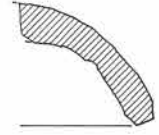
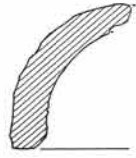
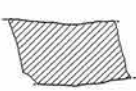
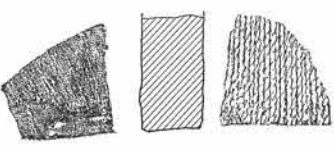
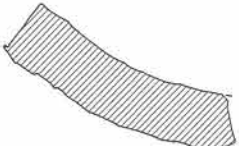
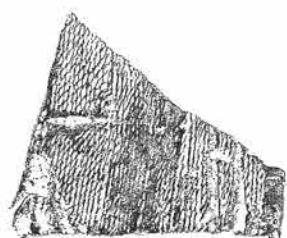
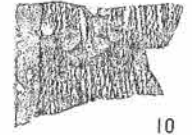
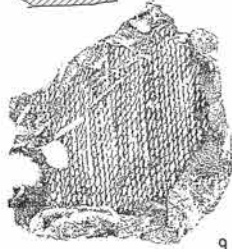
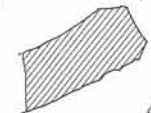
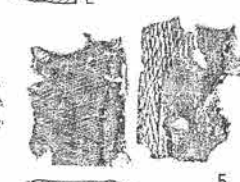
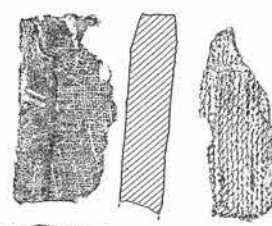
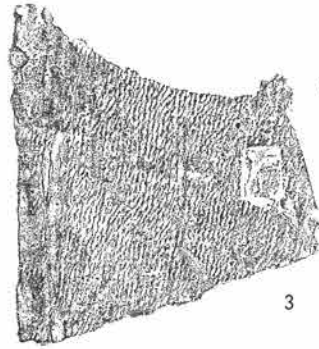
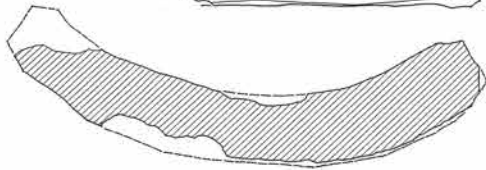
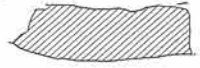
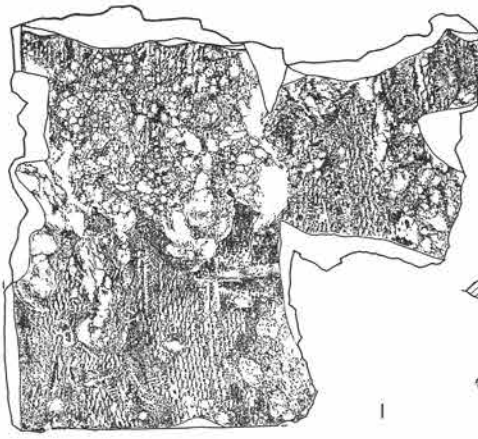
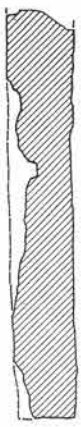
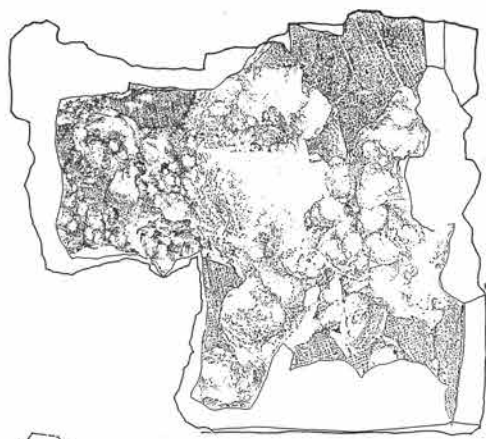
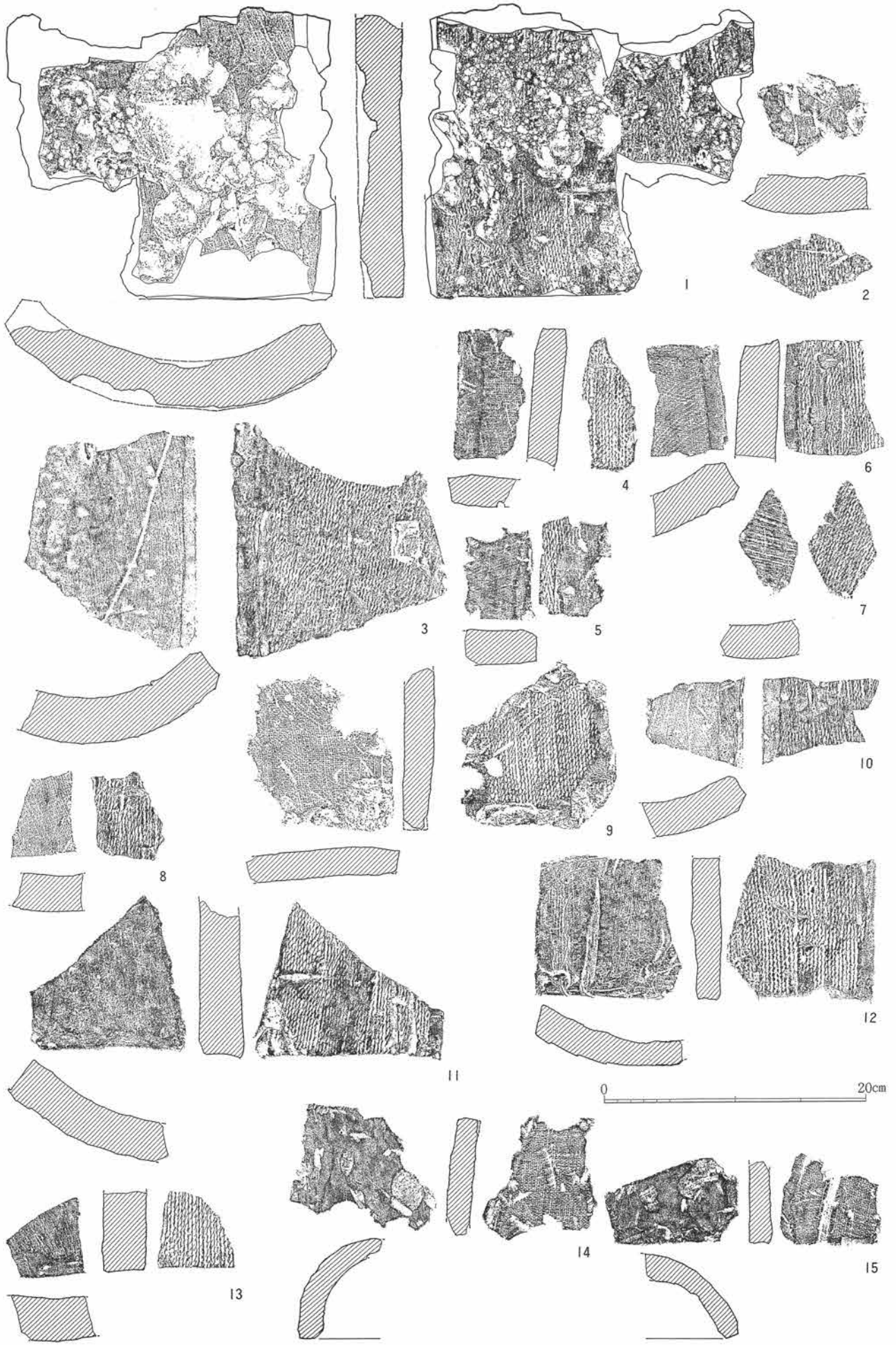




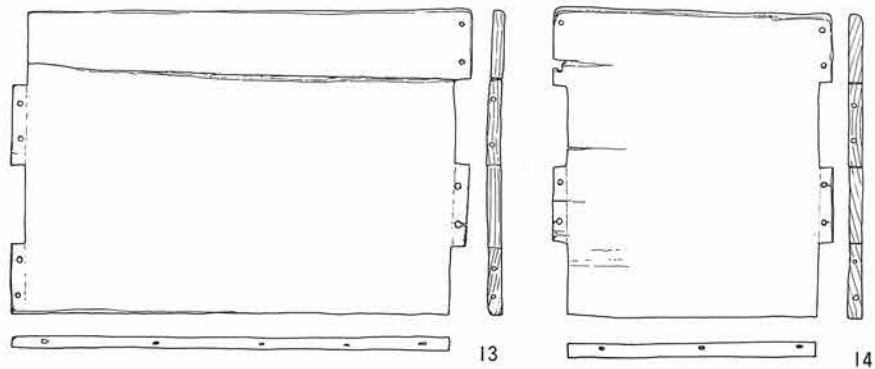
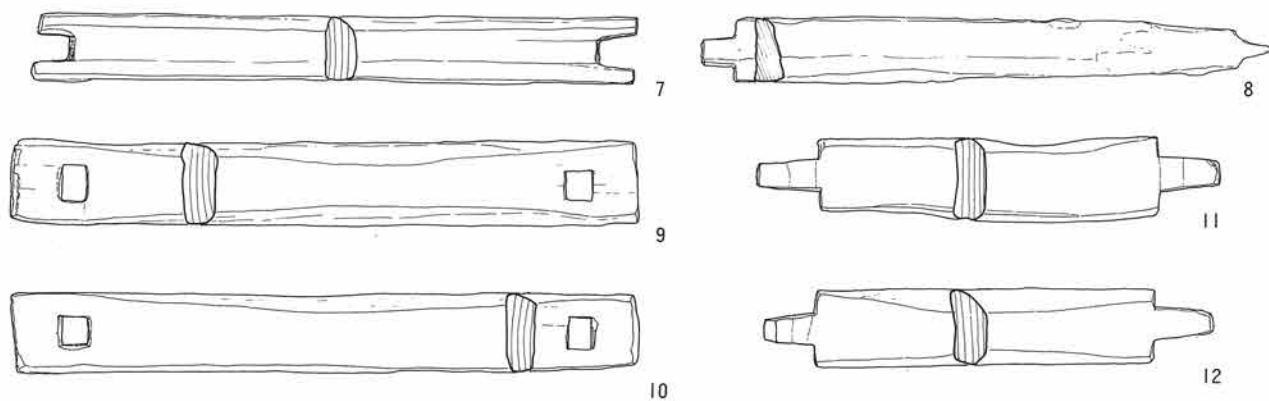
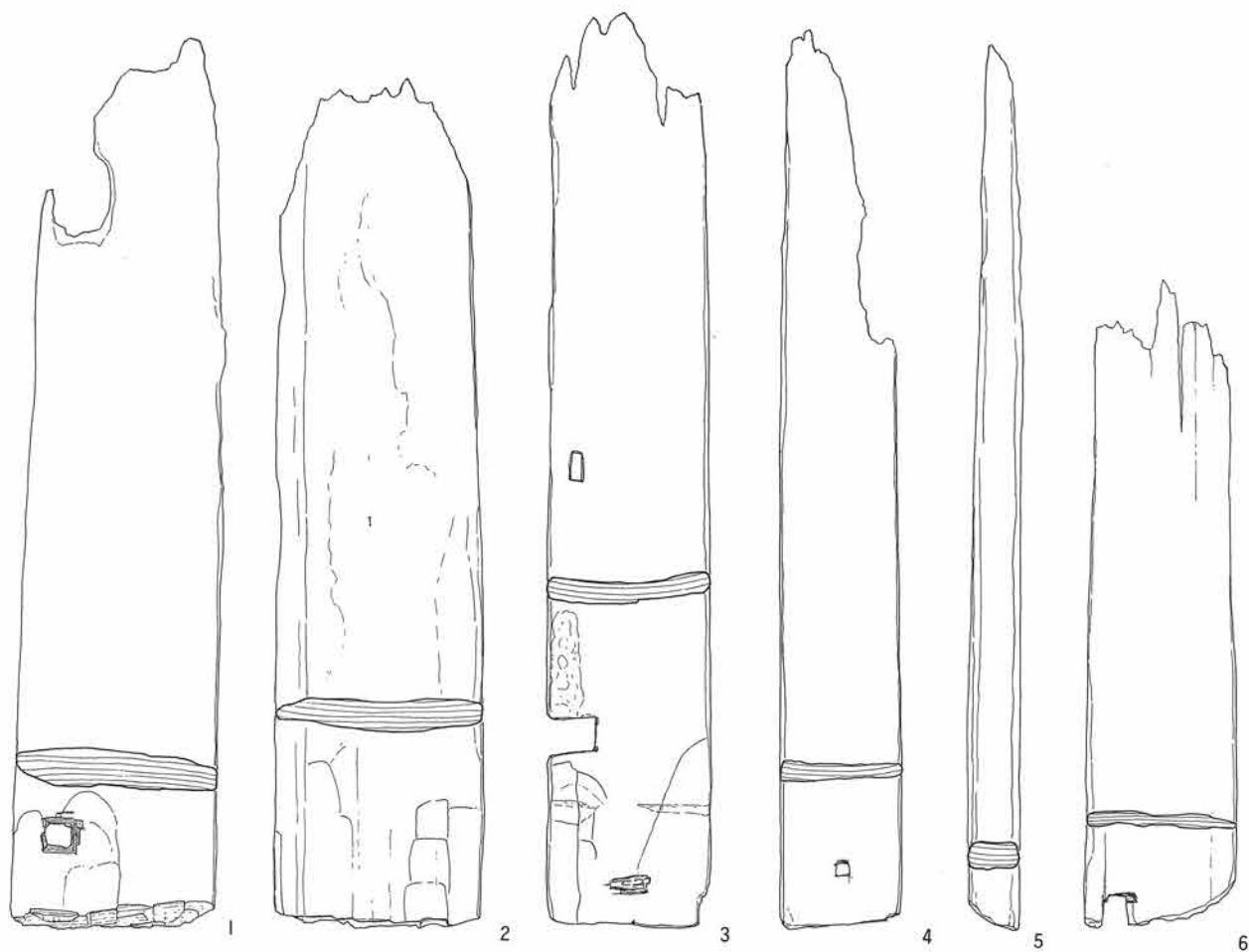
692 黑色土師器



()内の番号は土器実測図番号と一致

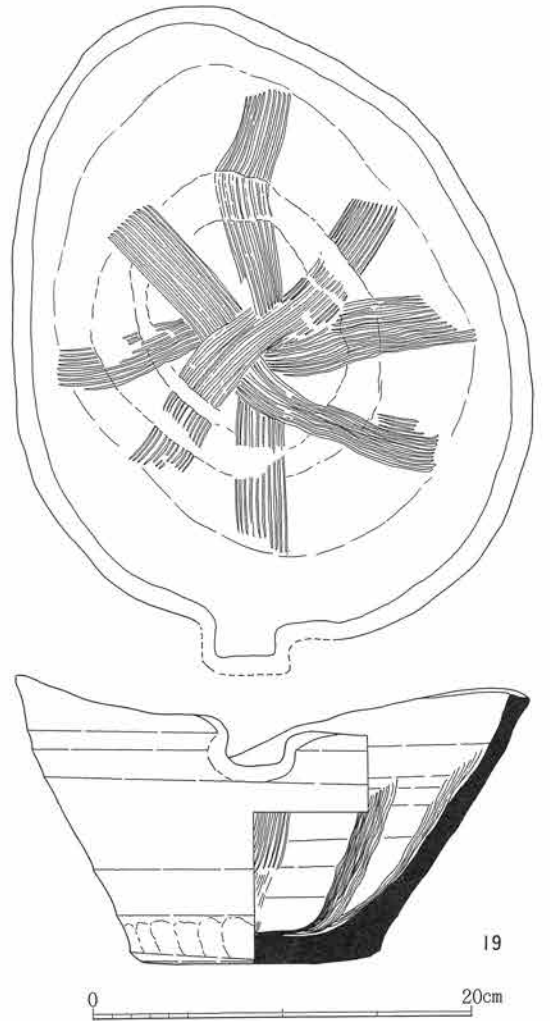
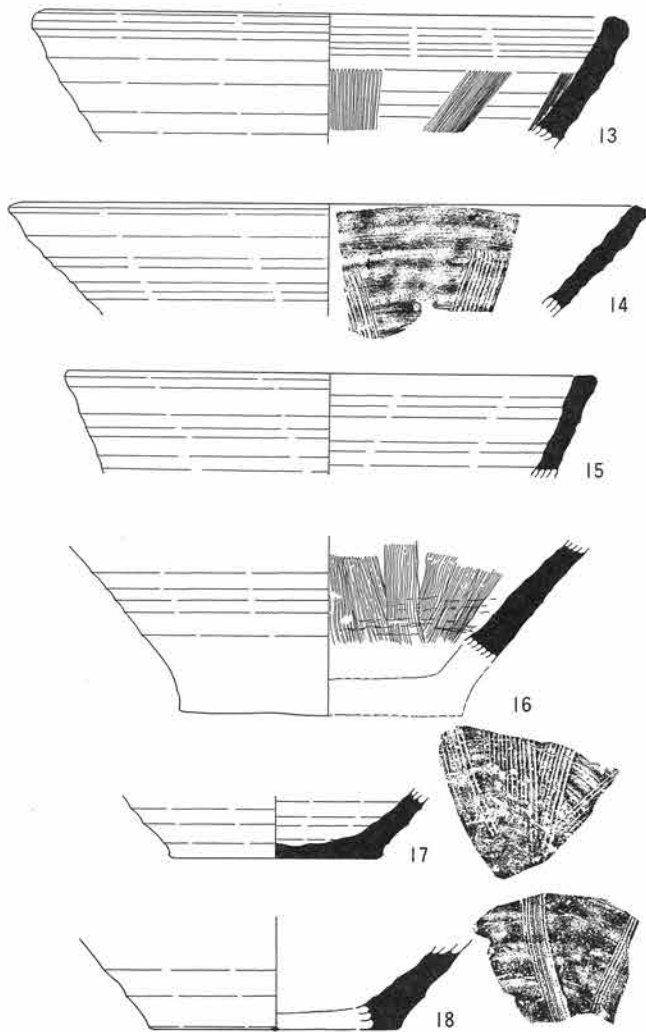
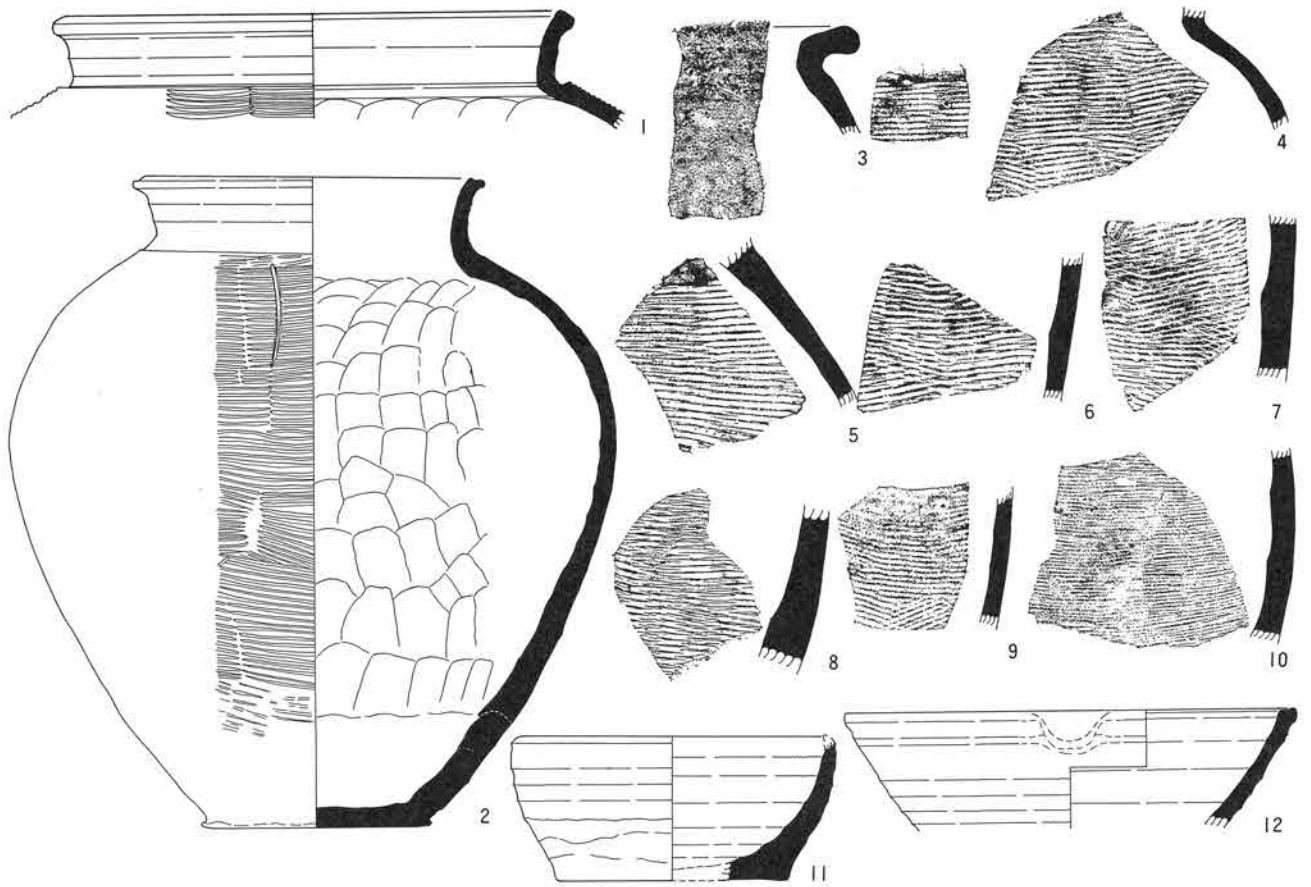


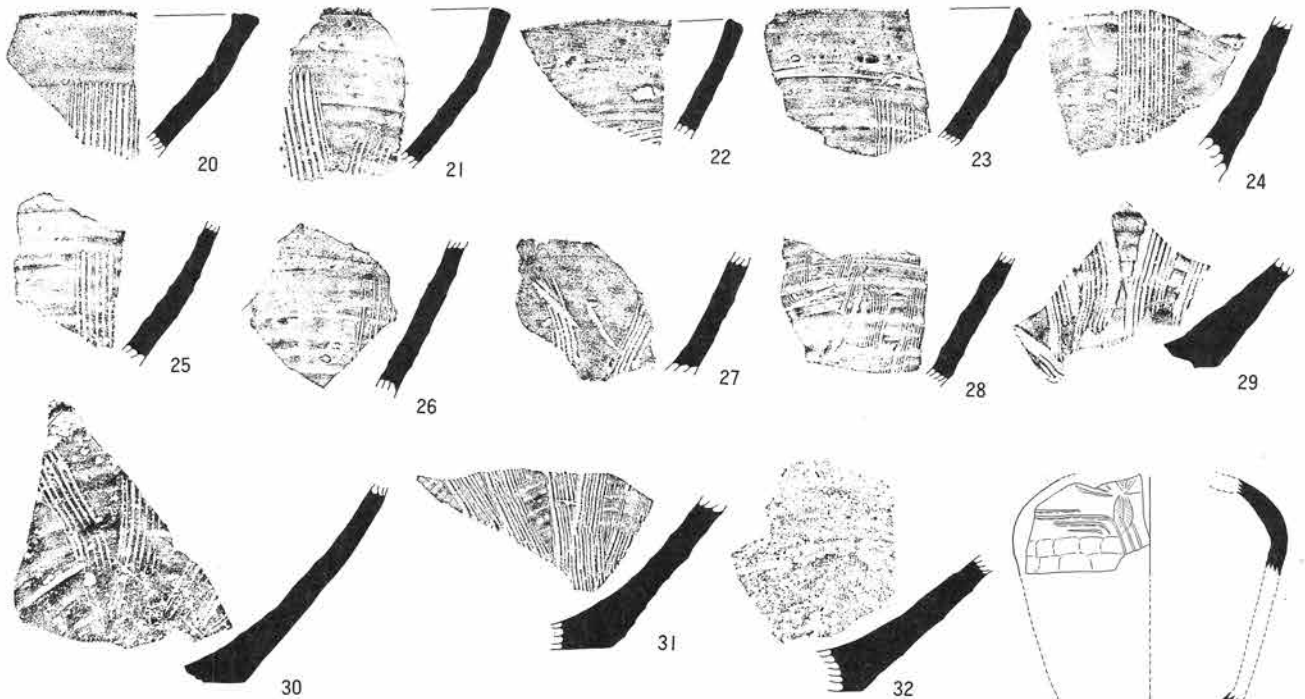
0 20cm



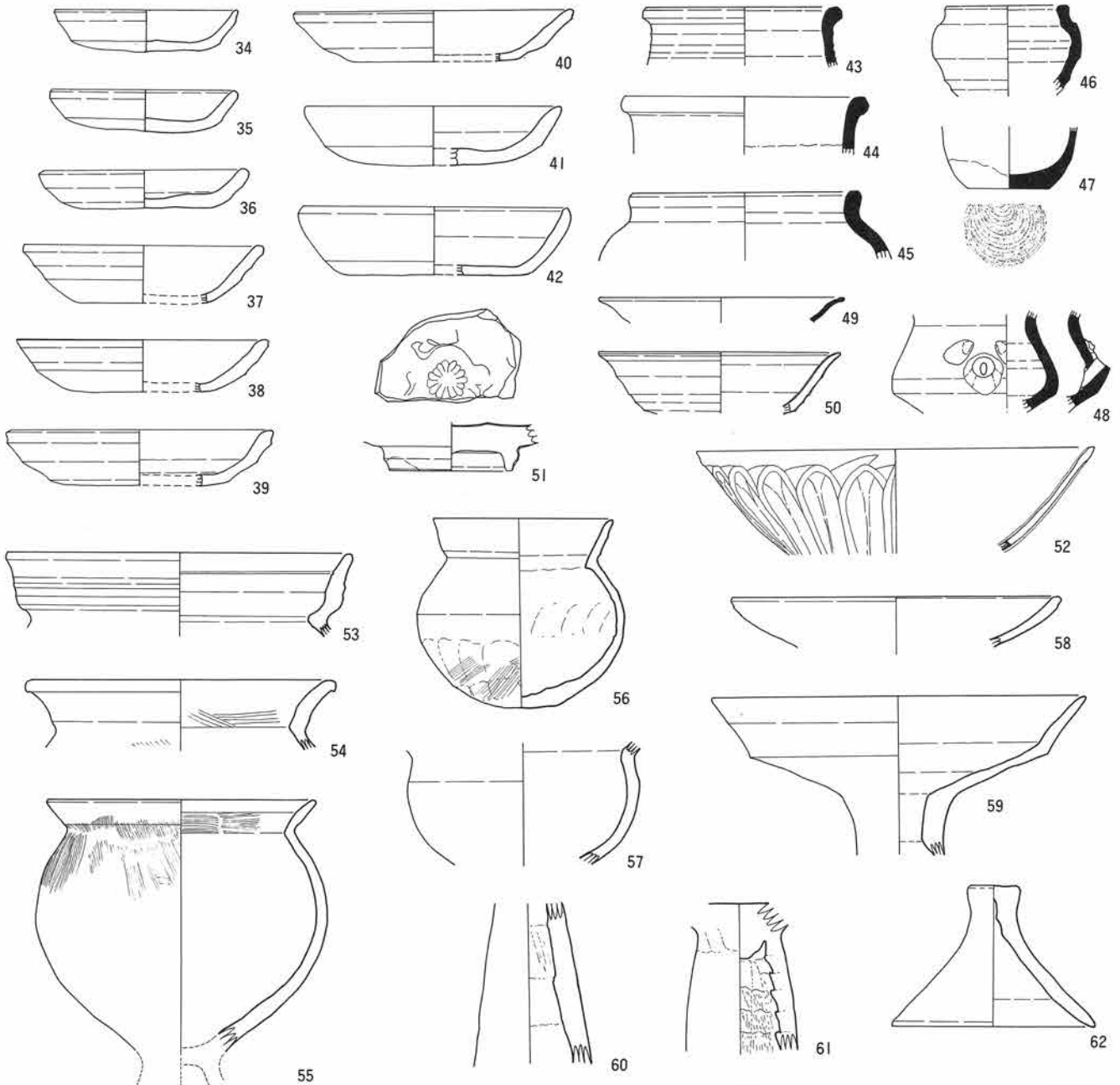
1-6 側板
 7・8 内枠(上段) 9 東側 10 西側
 9-12 内枠(下段) 11 北側 12 南側
 13・14 下枠 13 西側 14 南側



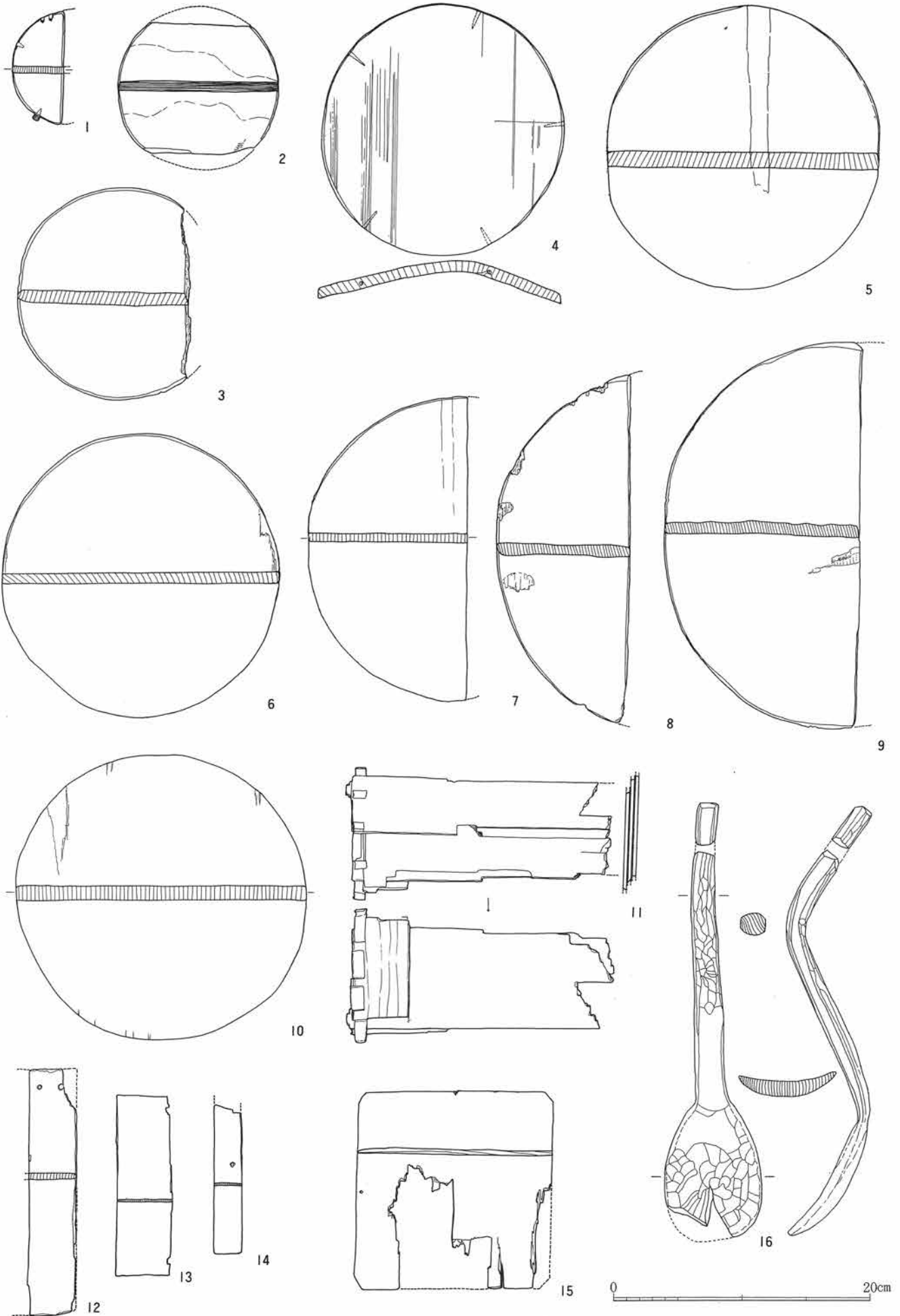


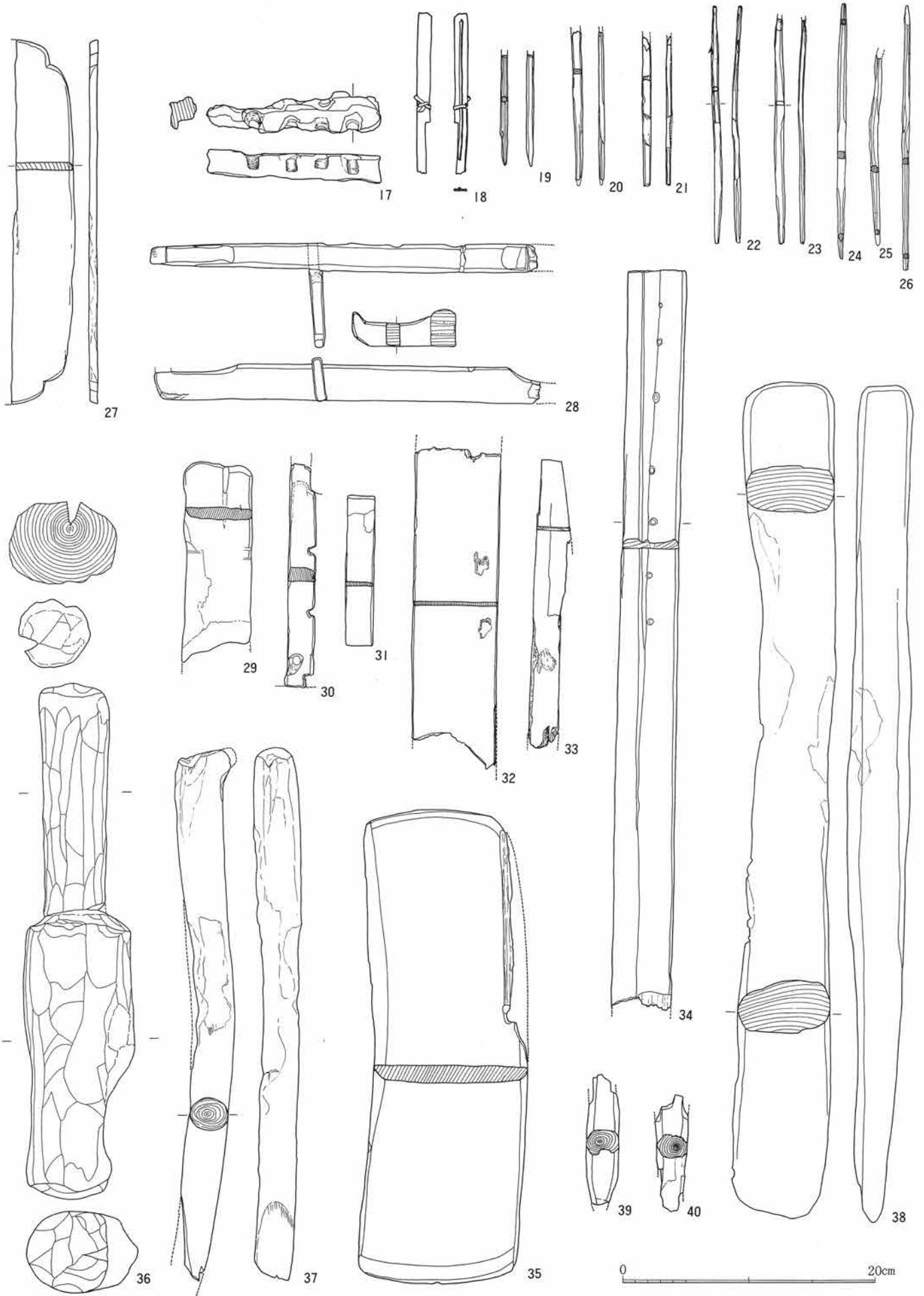


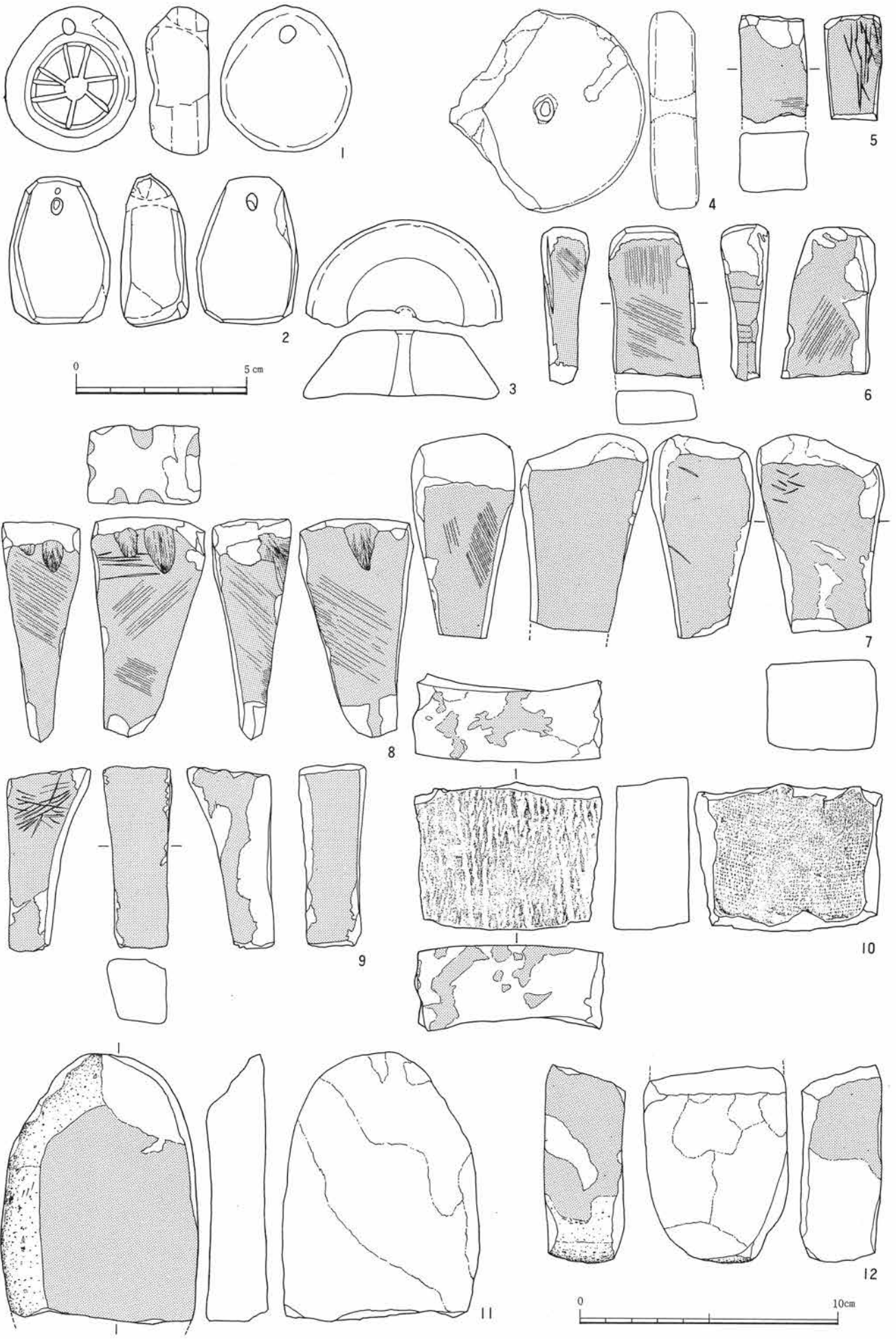
0 20cm



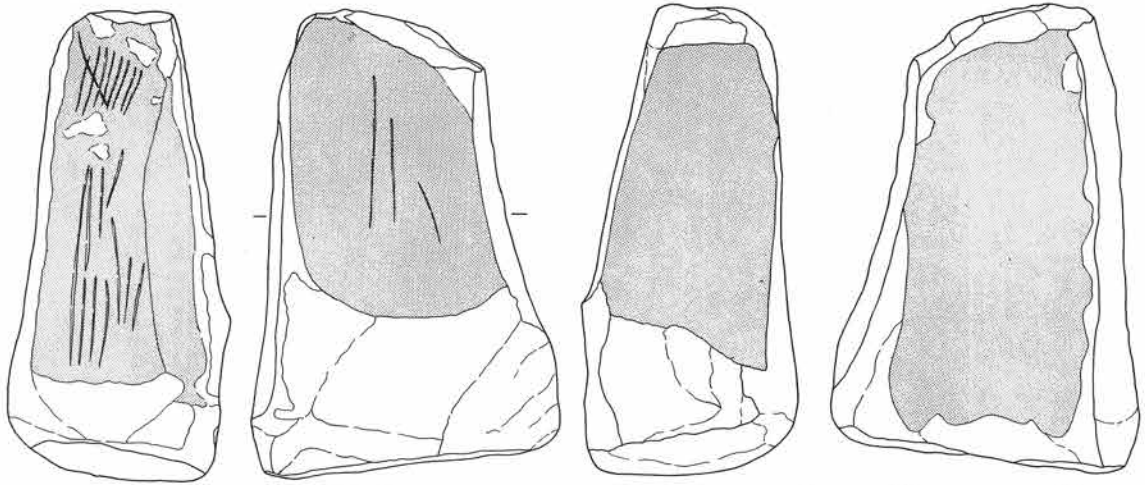
0 15cm



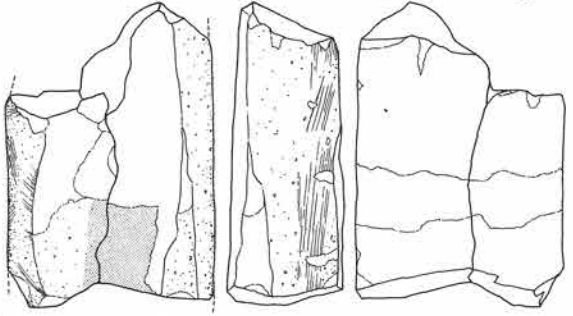
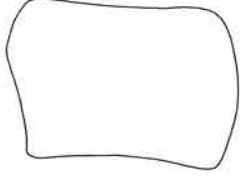




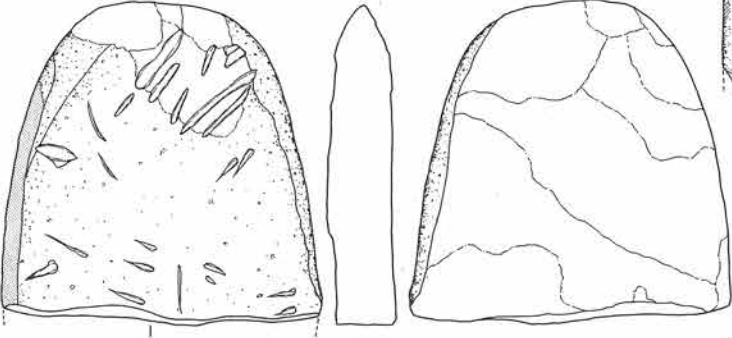
1~3 2:3 4~12 1:2



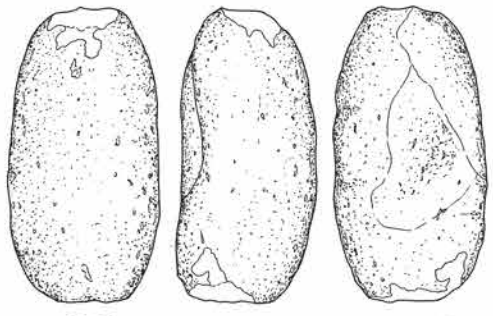
13



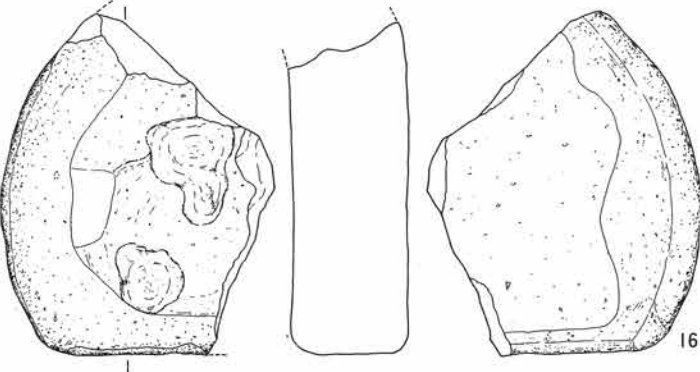
14



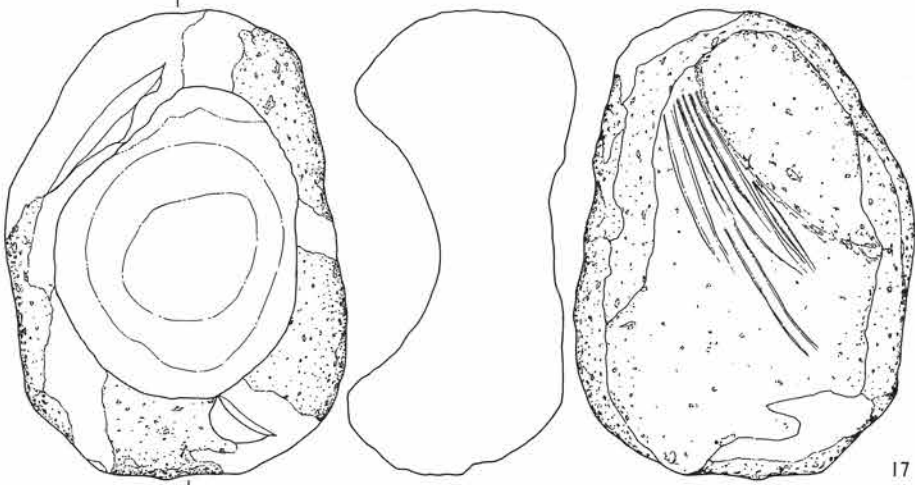
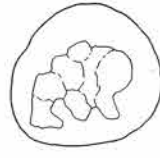
15



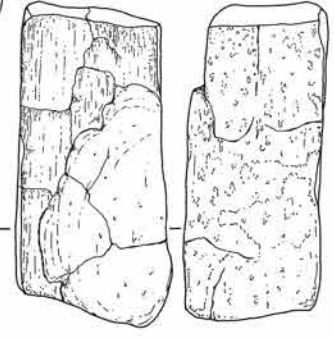
18



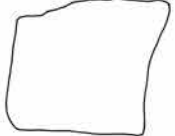
16



17

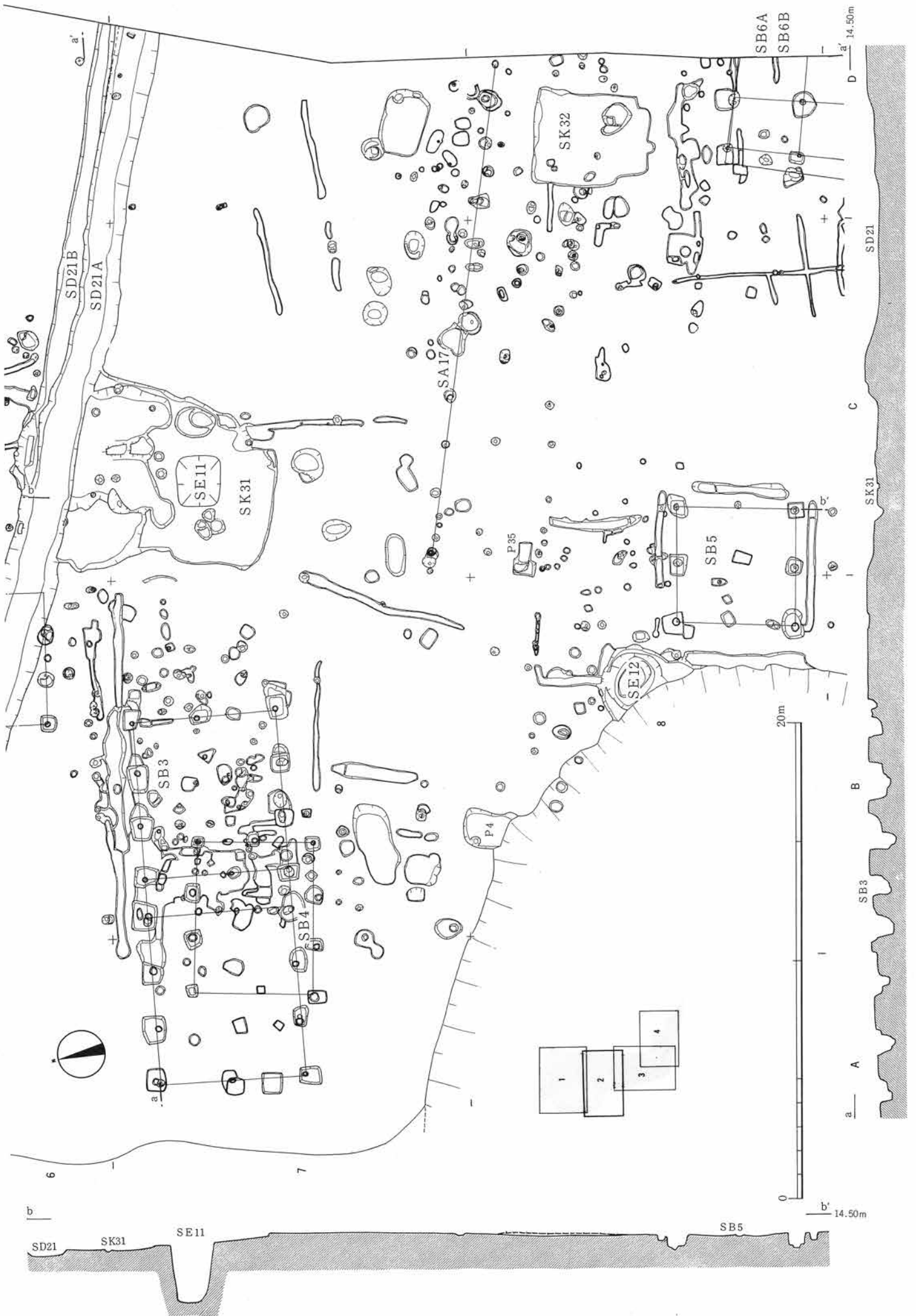


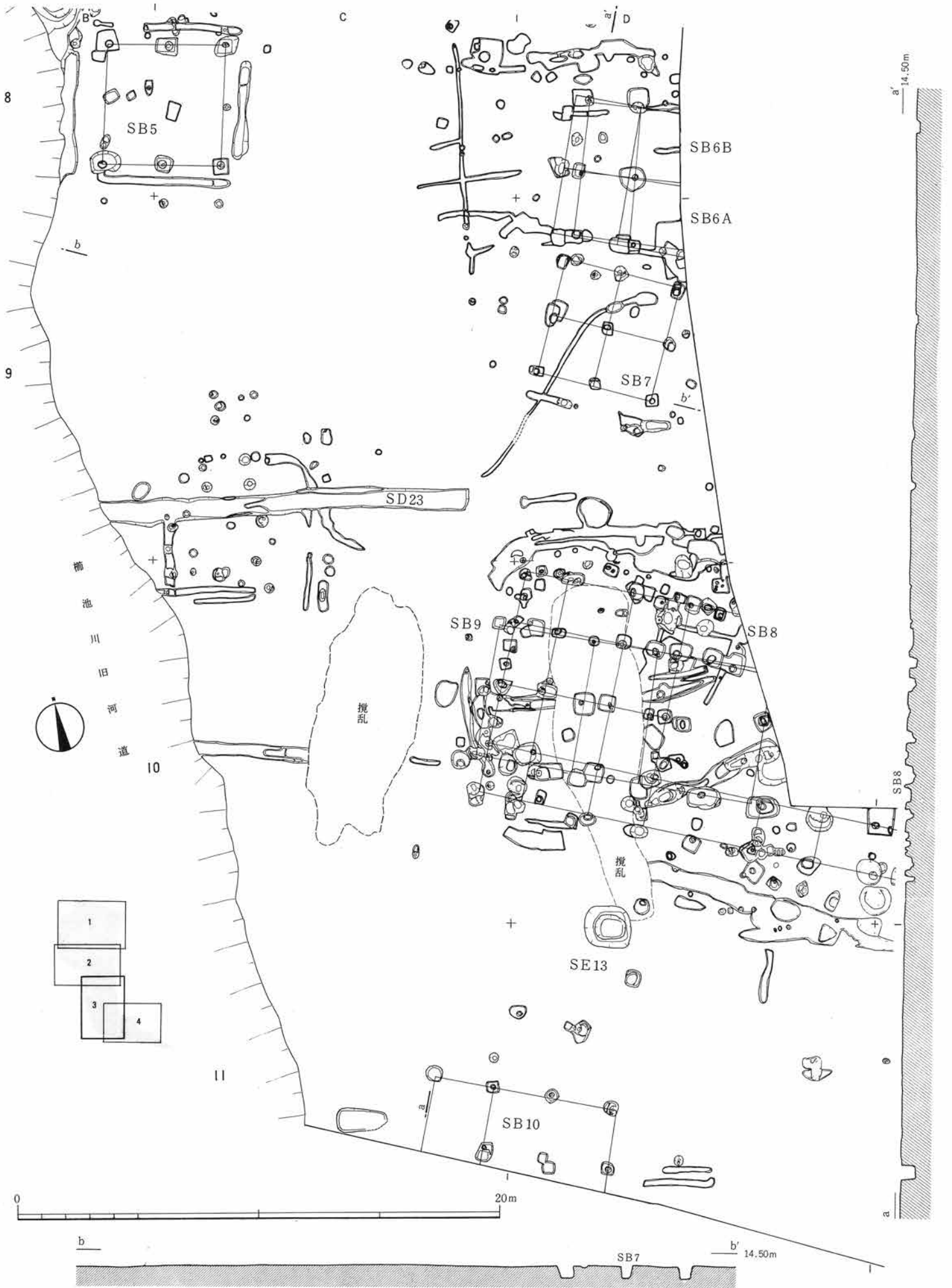
19





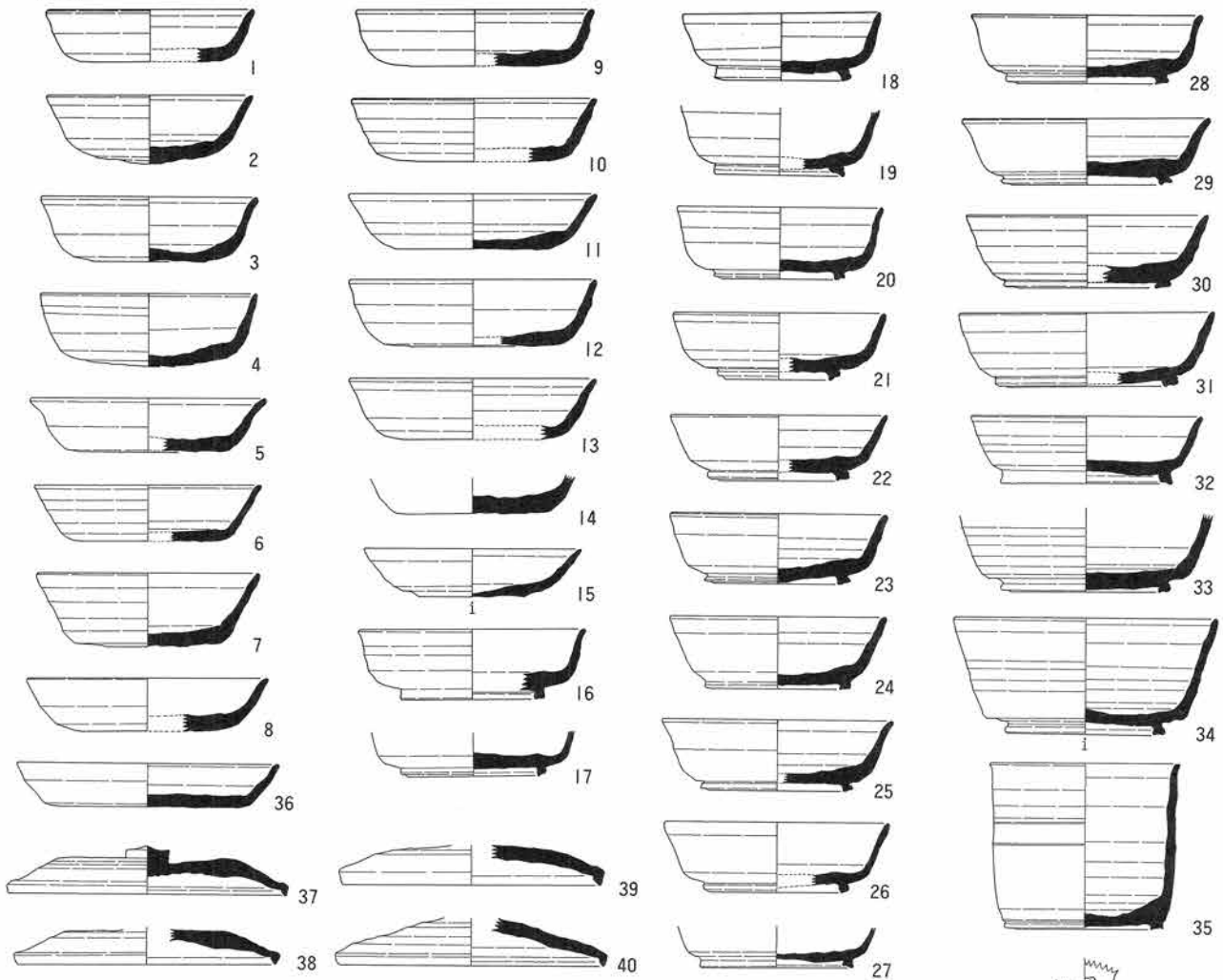




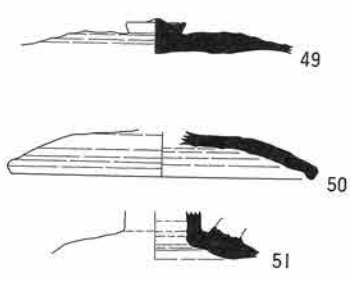
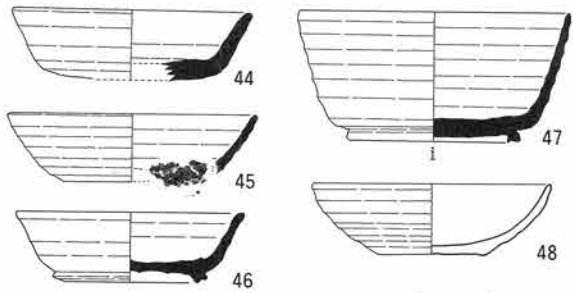




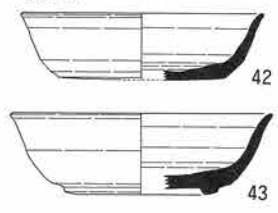
SK31



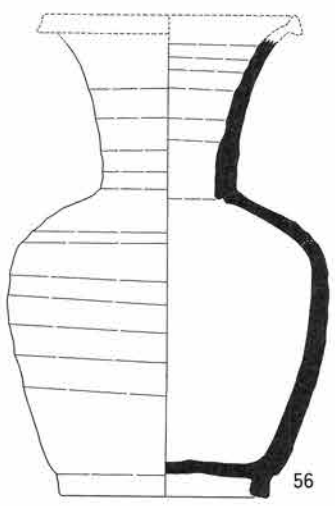
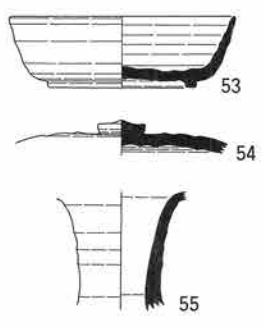
SE11



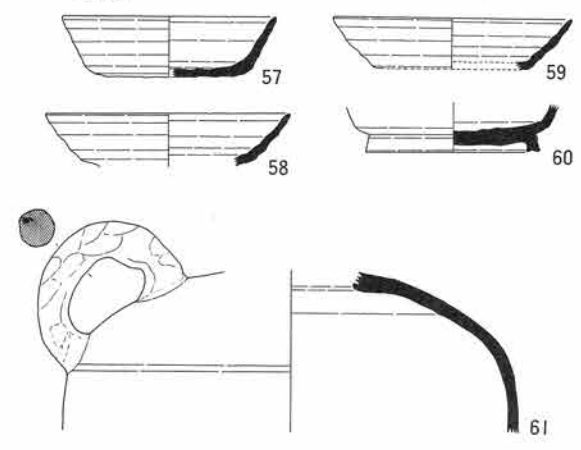
SD21



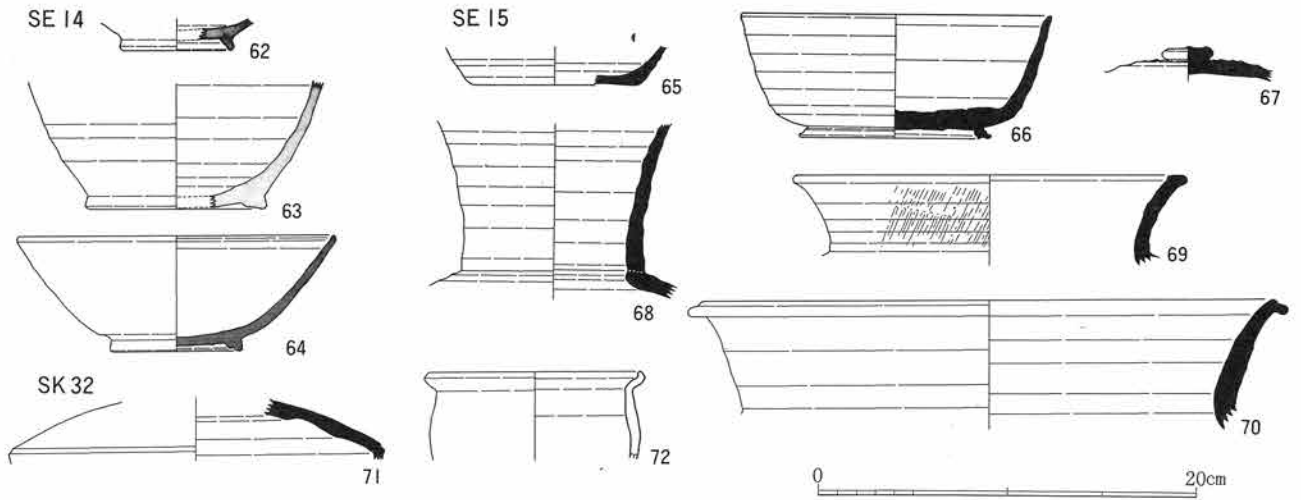
SE12



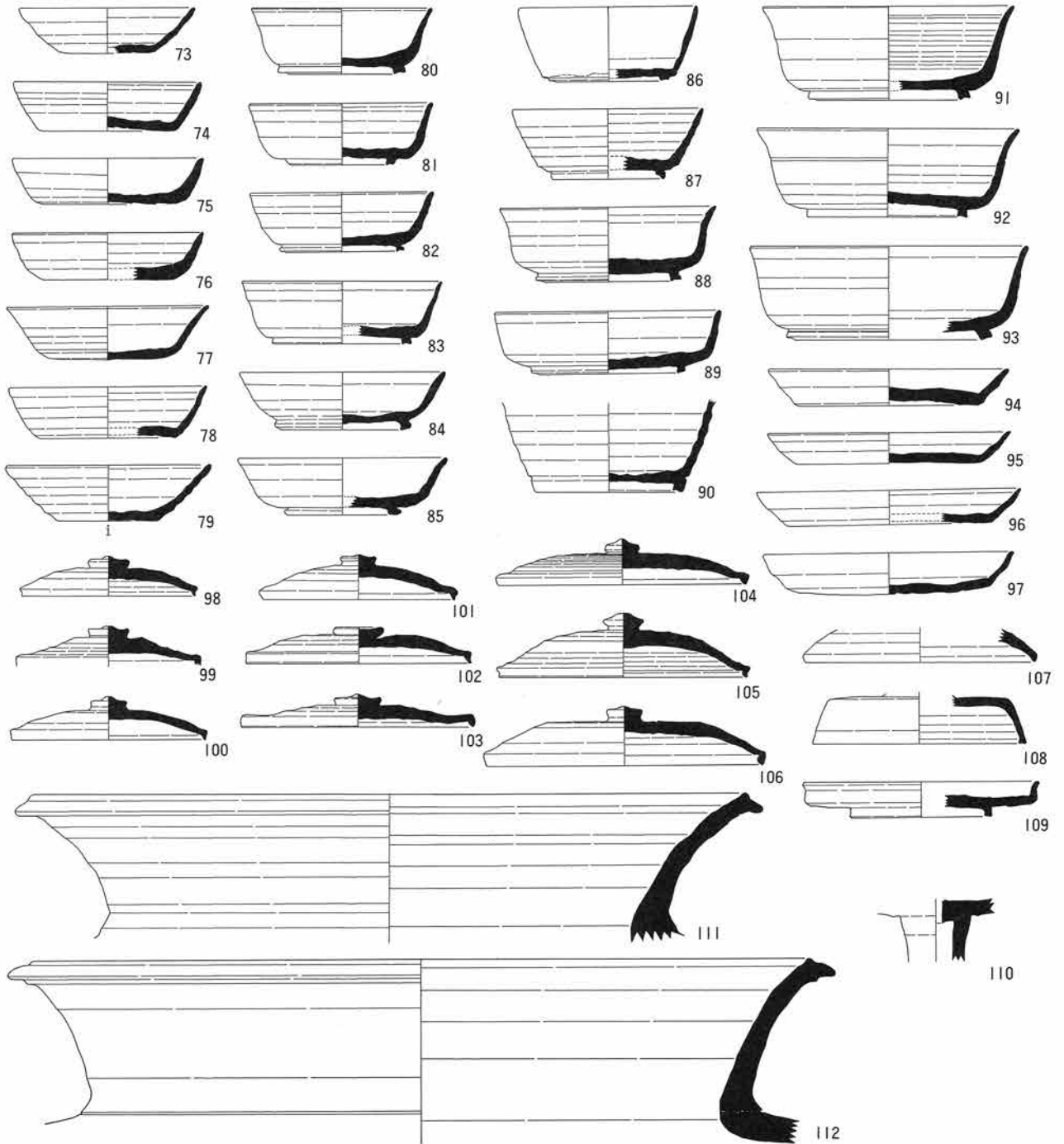
SE13

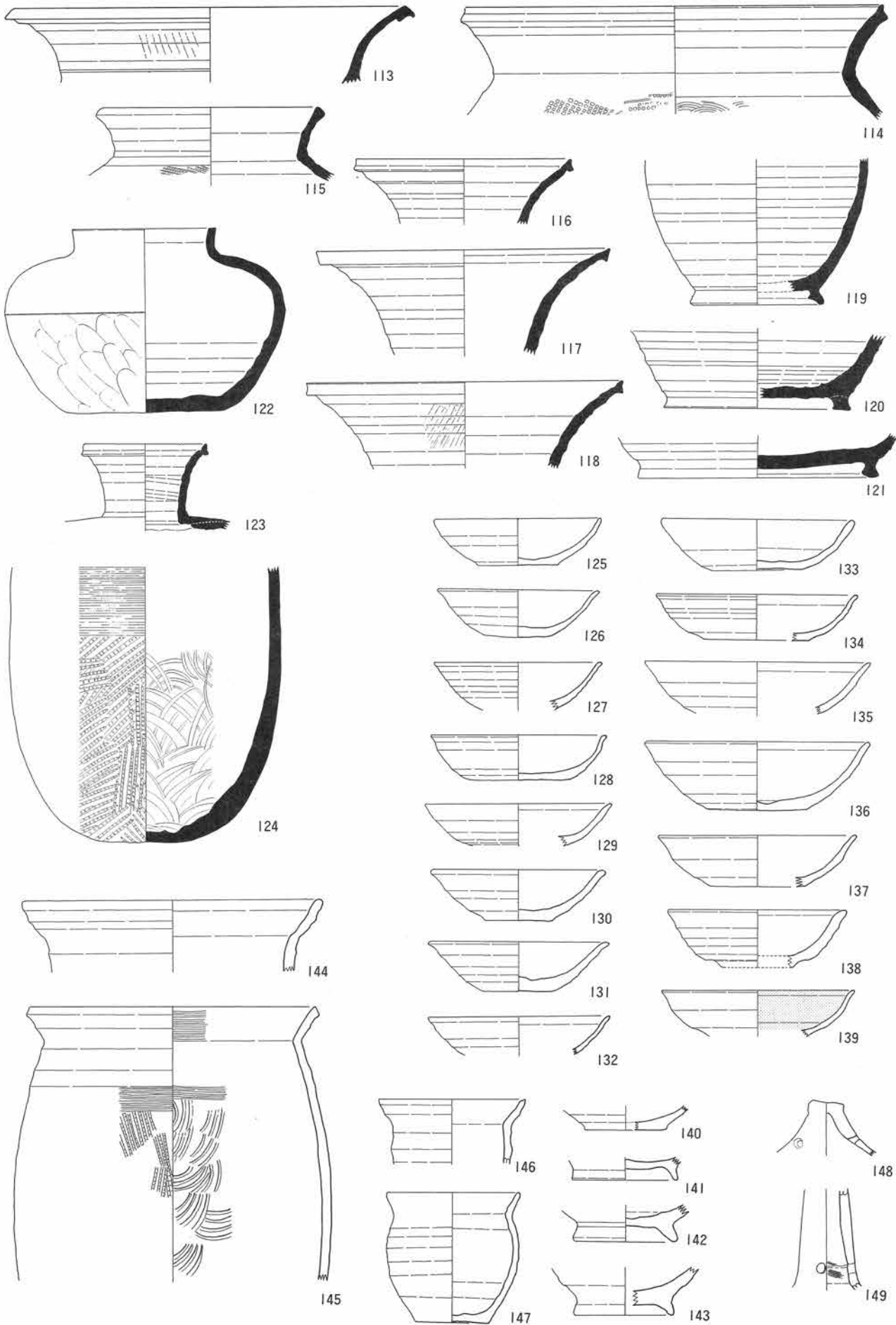


52 灰釉陶器

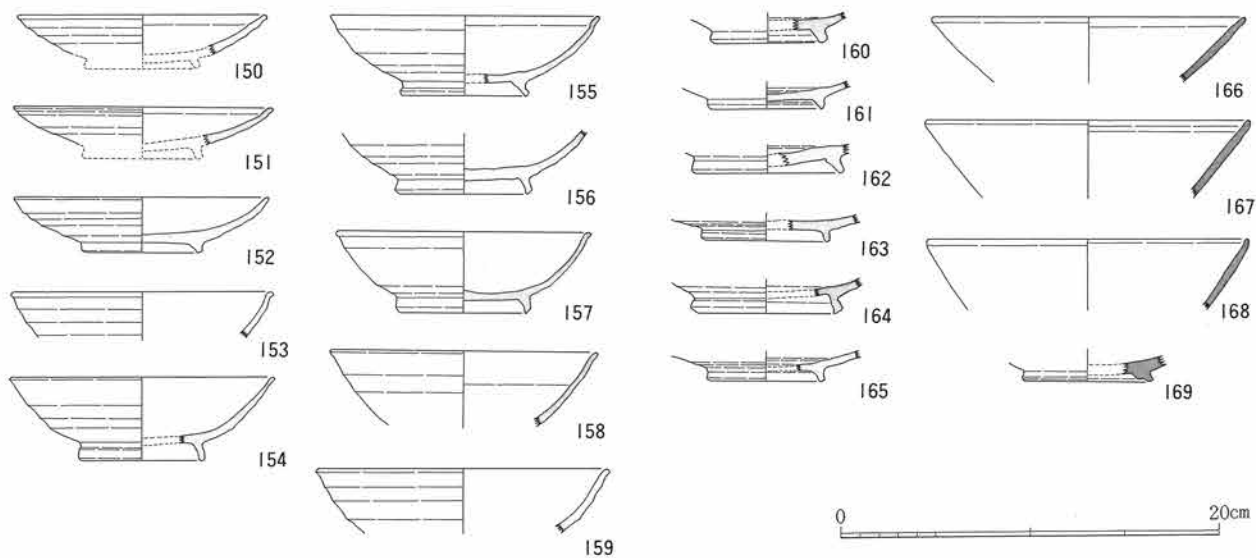


遺構外

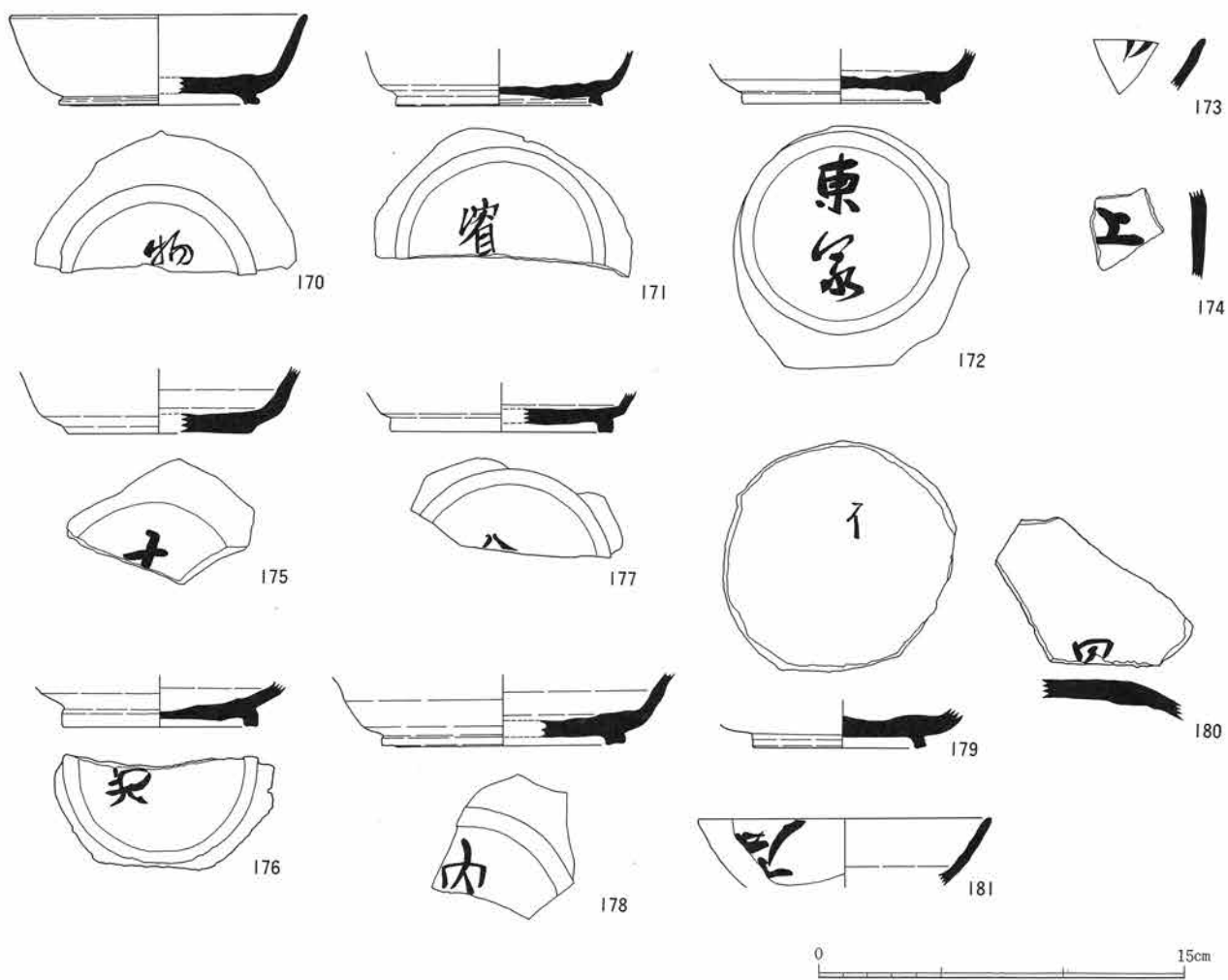




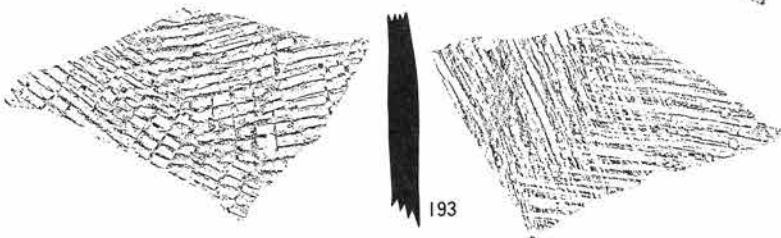
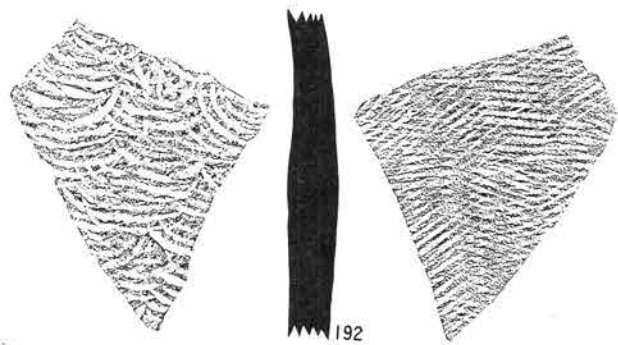
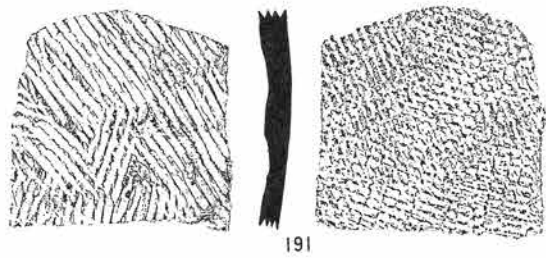
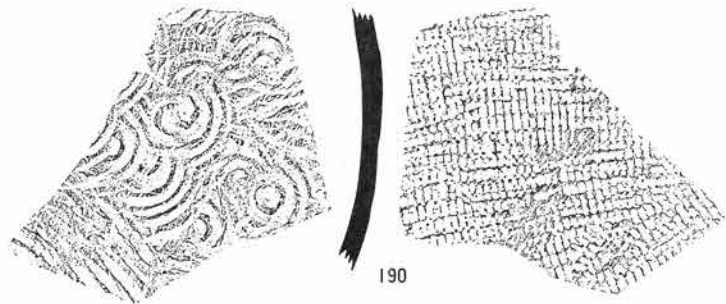
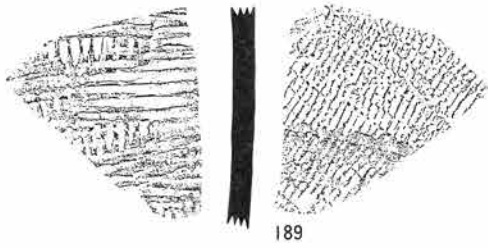
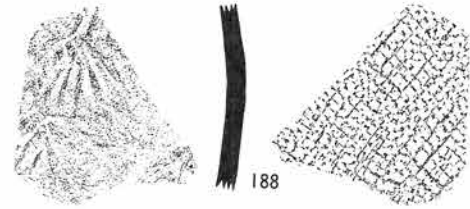
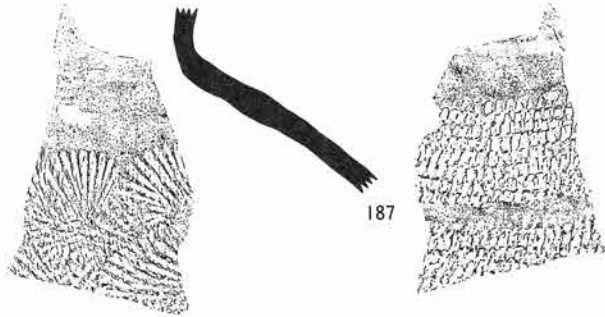
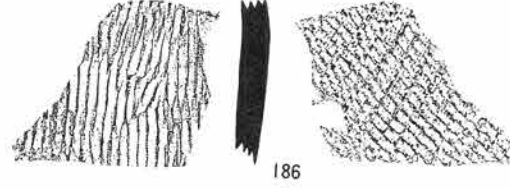
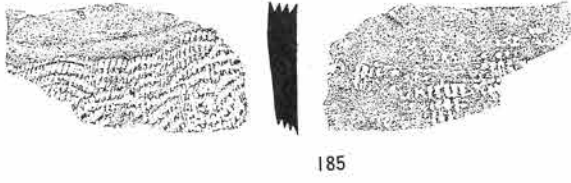
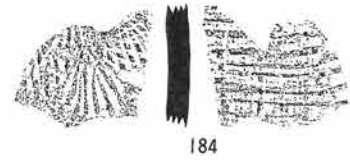
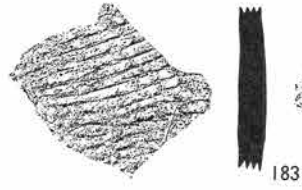
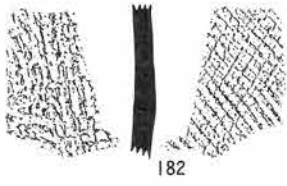
139 黑色土師器

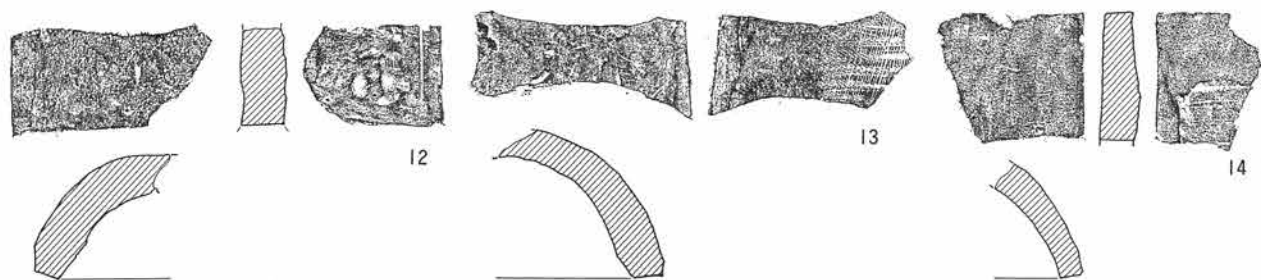
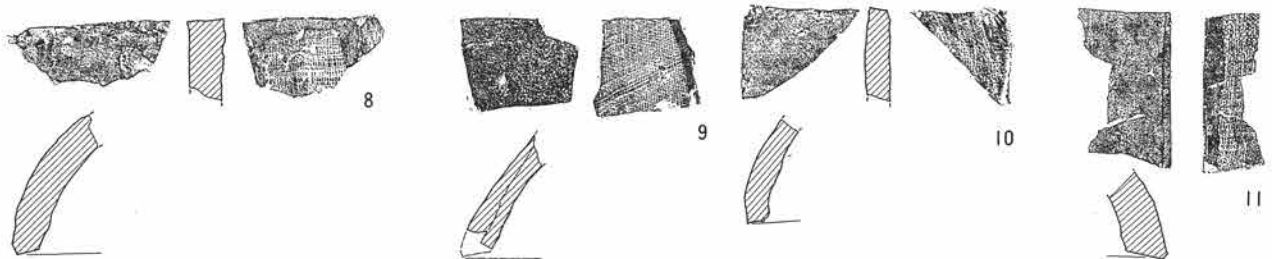
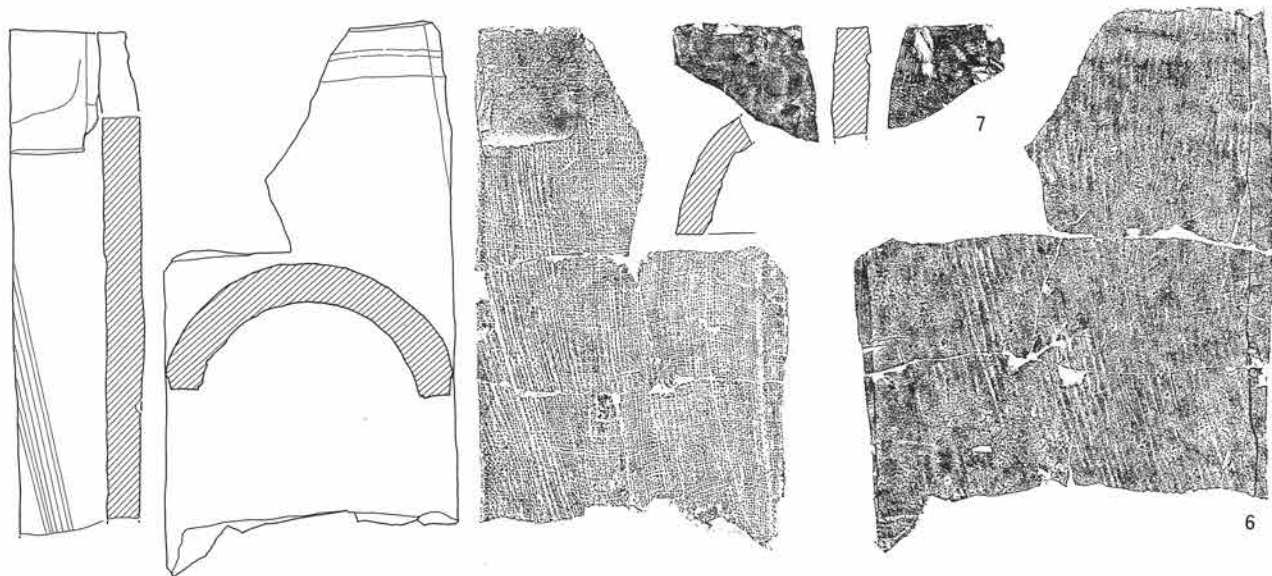
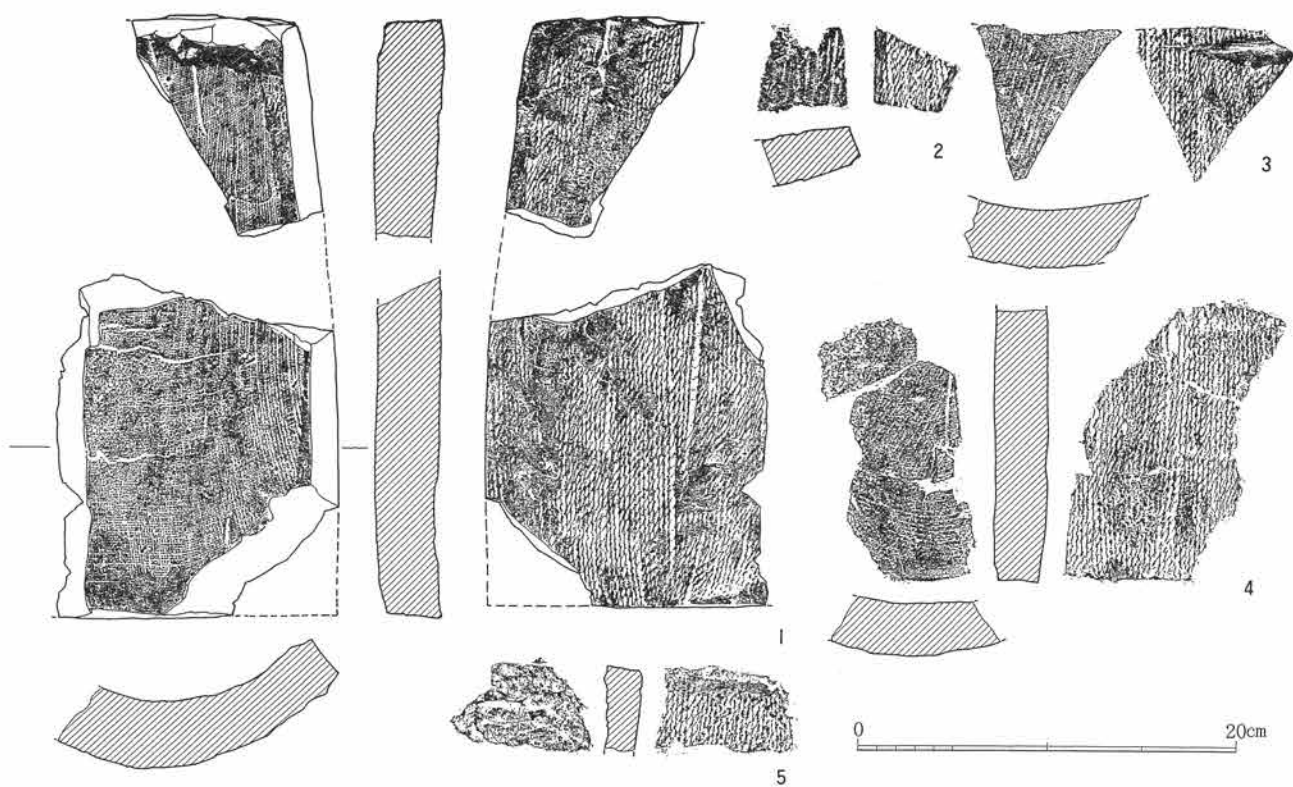


150~165 灰釉陶器 166~169 緑釉陶器

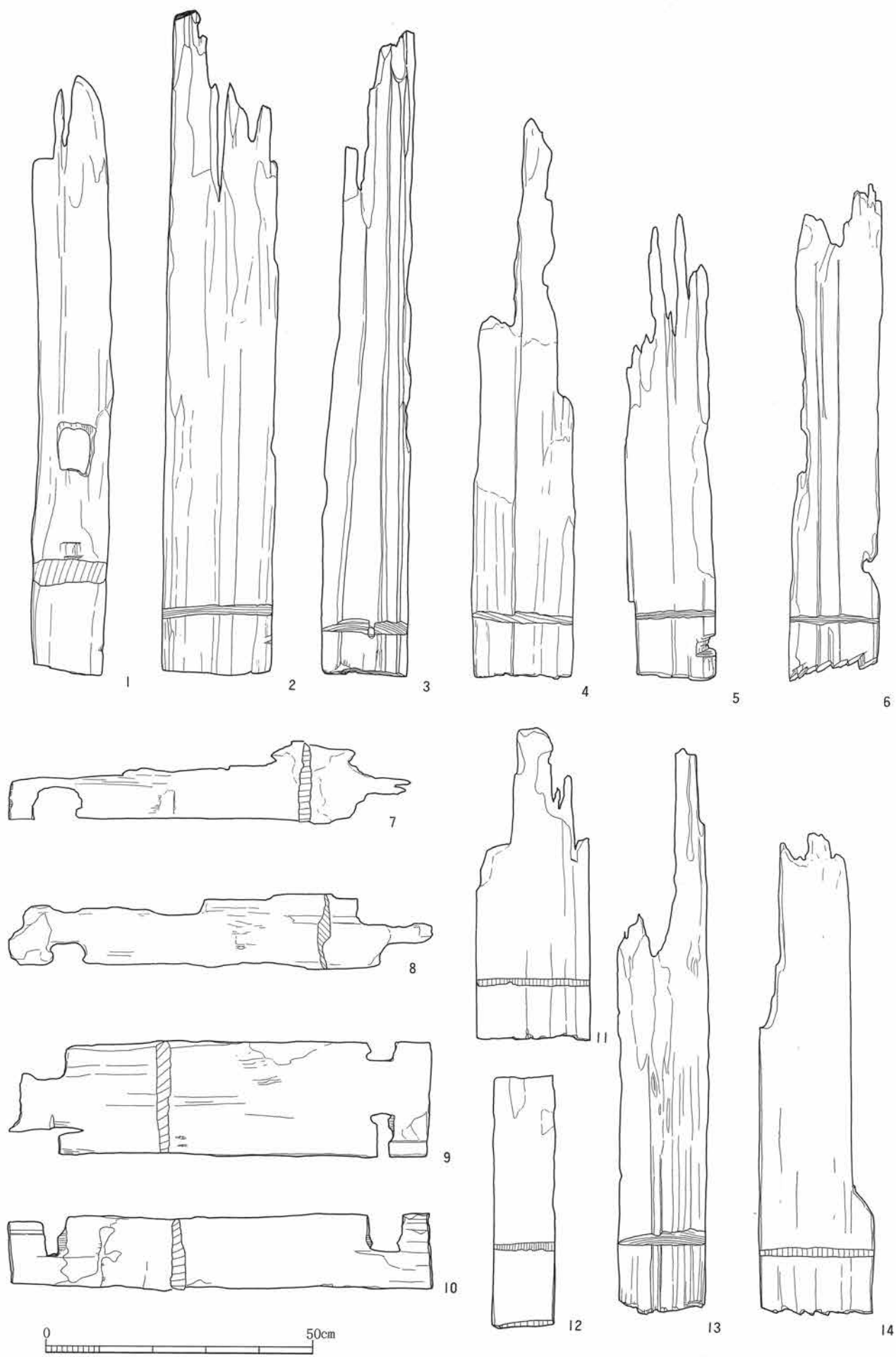


0 15cm

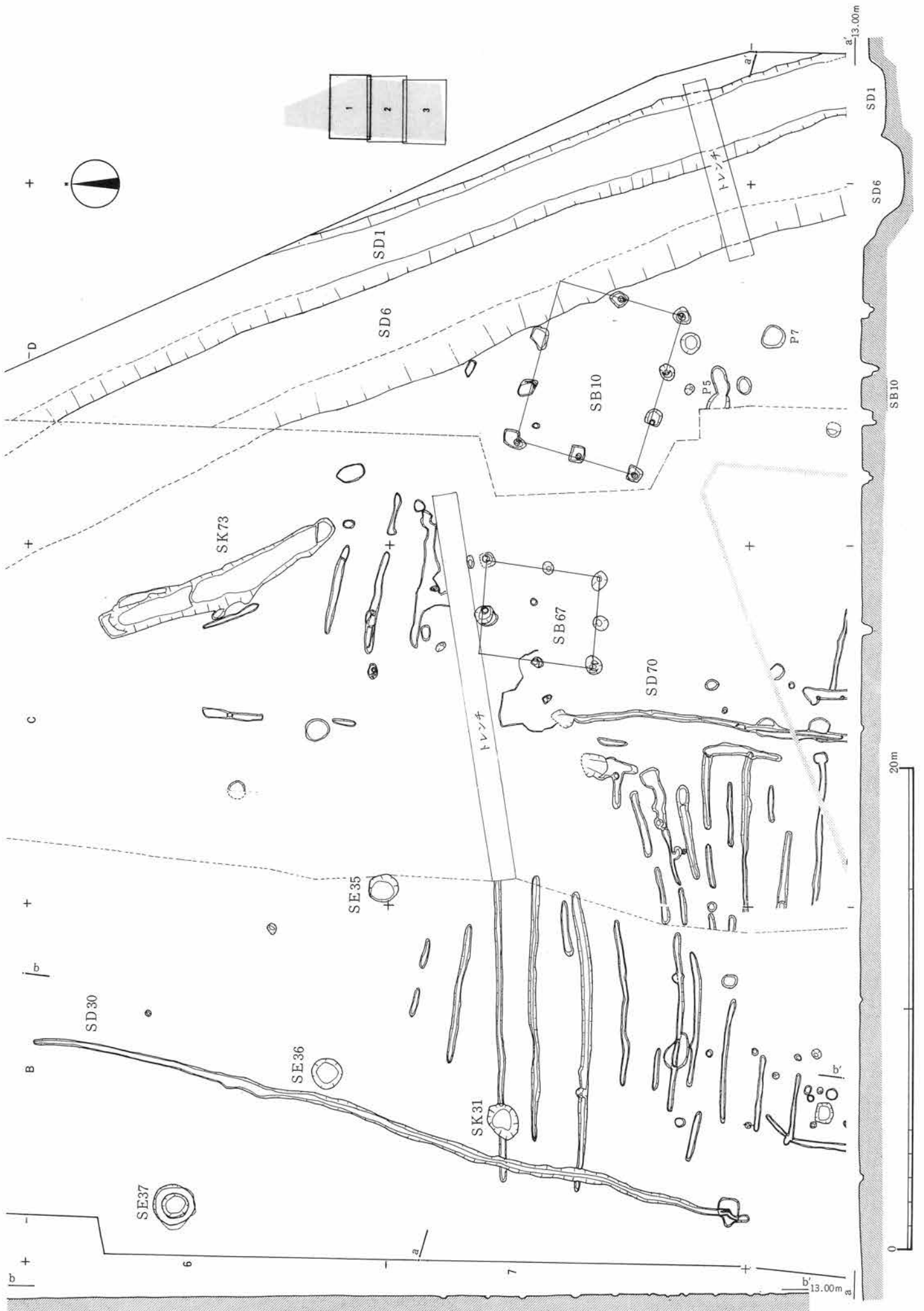


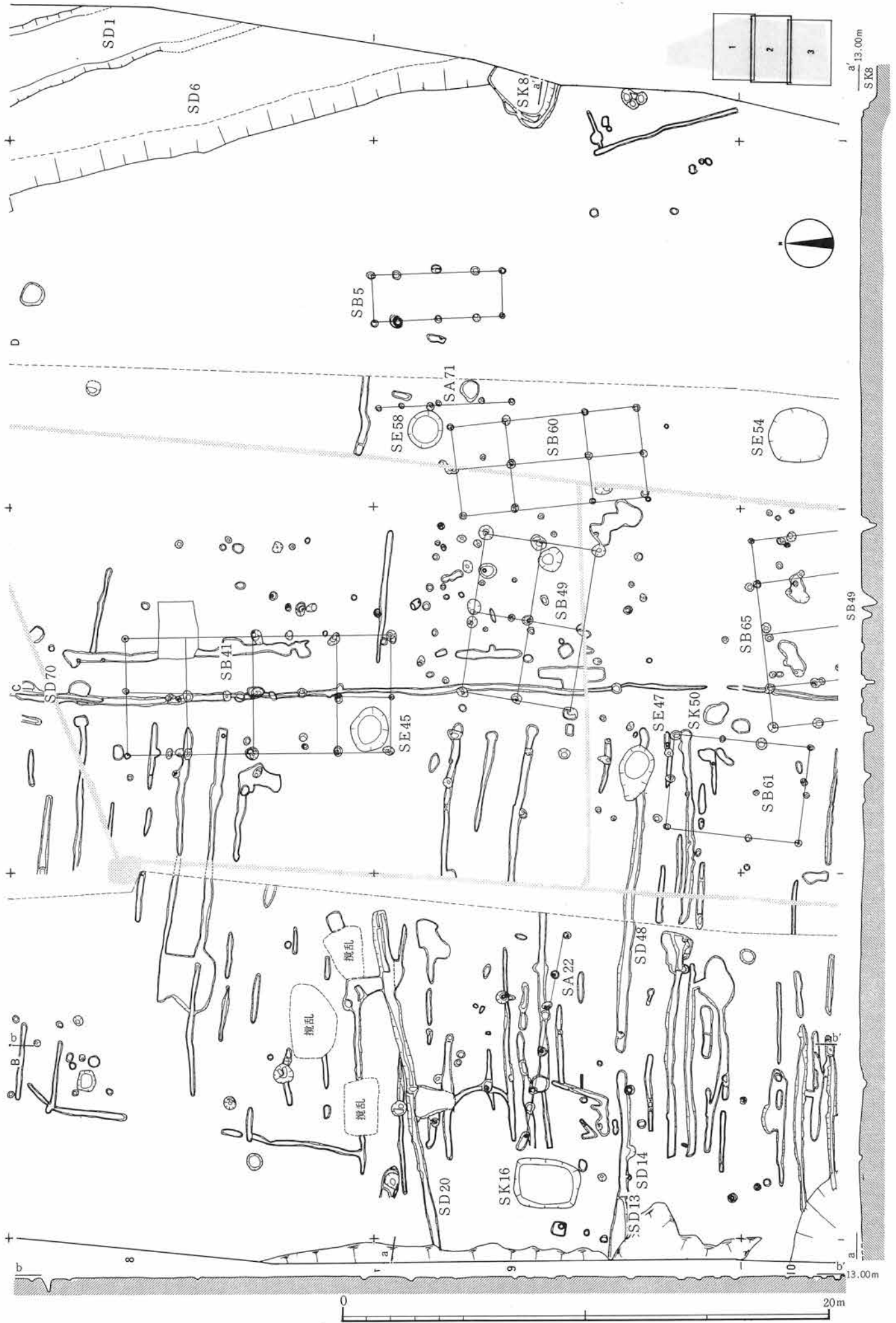


1~13 下新町遺跡 14 子安遺跡

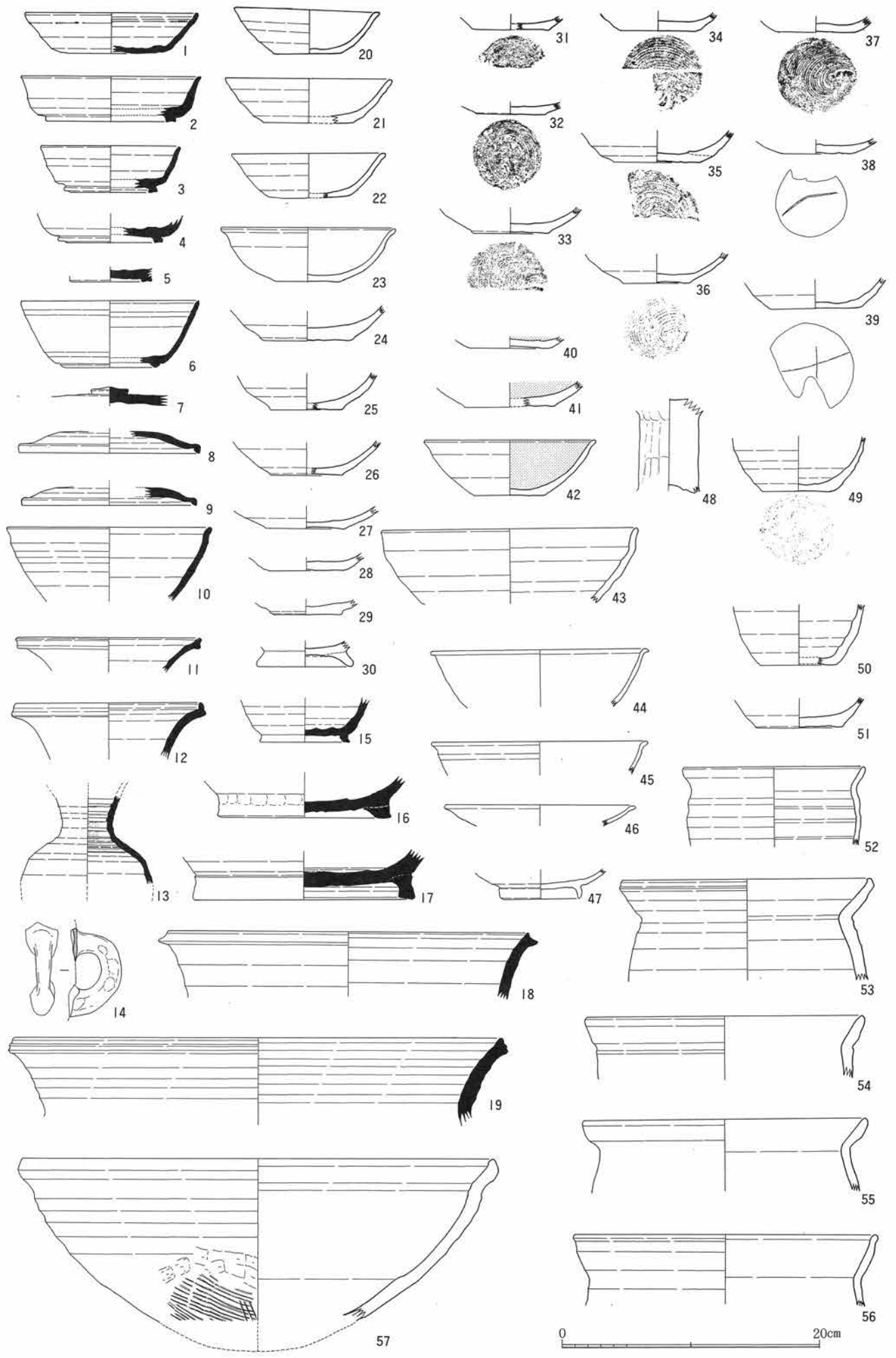




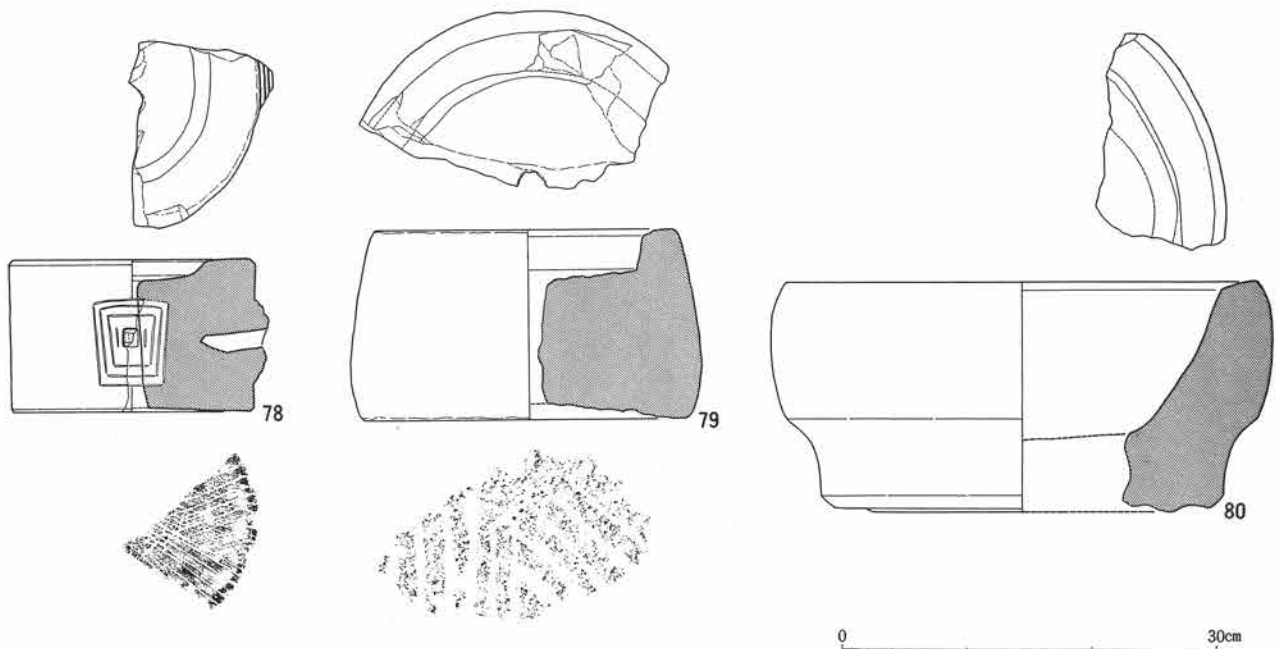
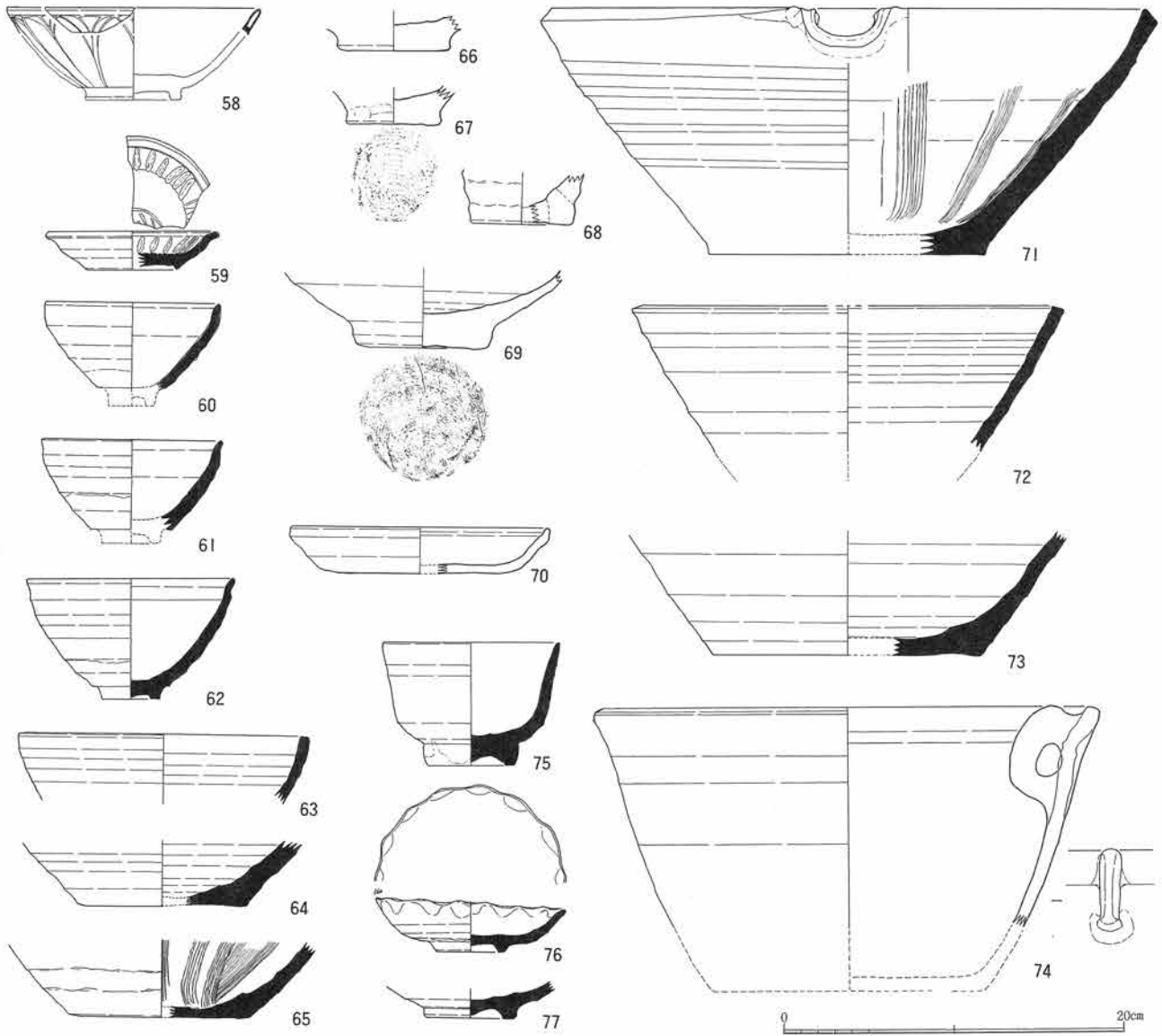


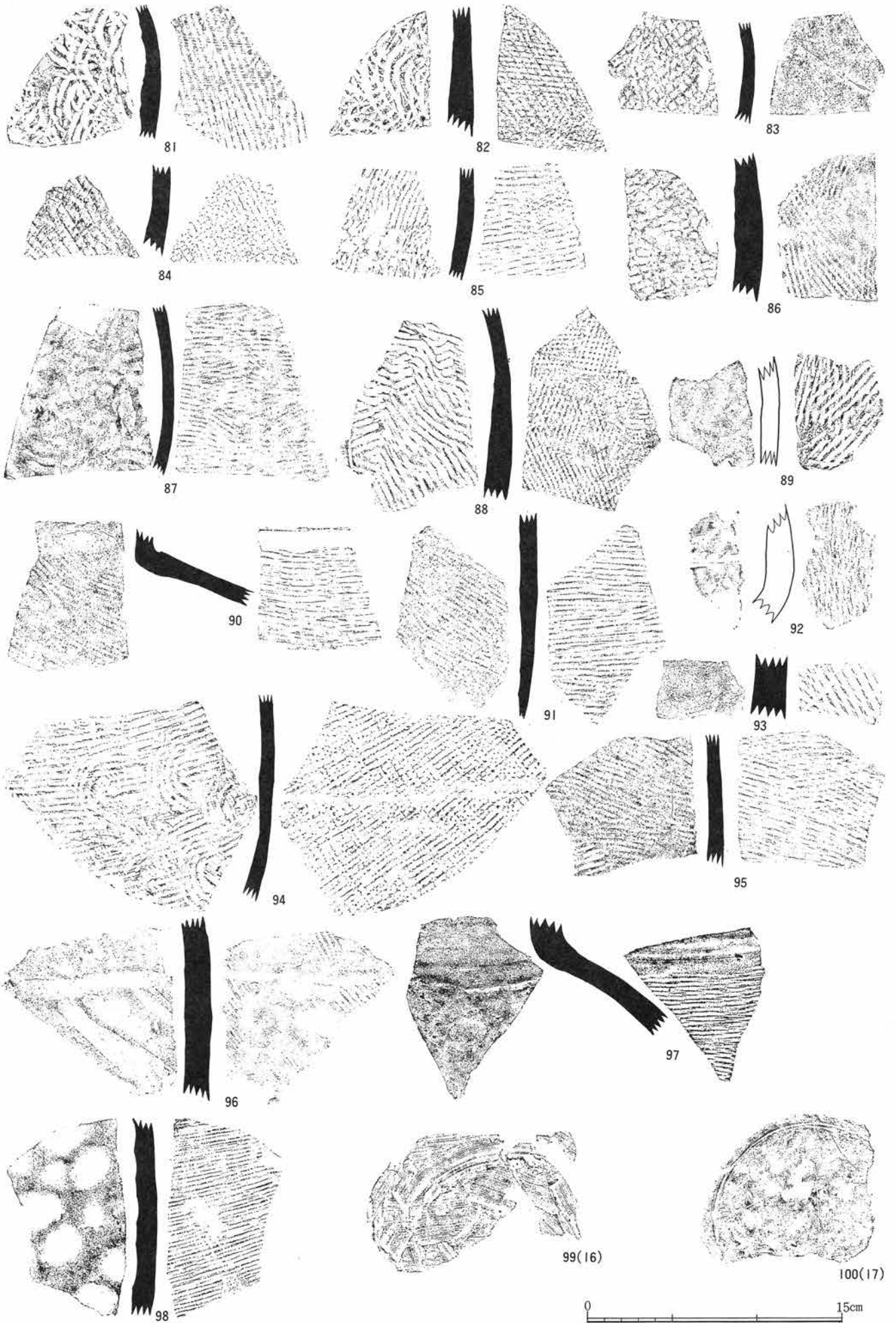


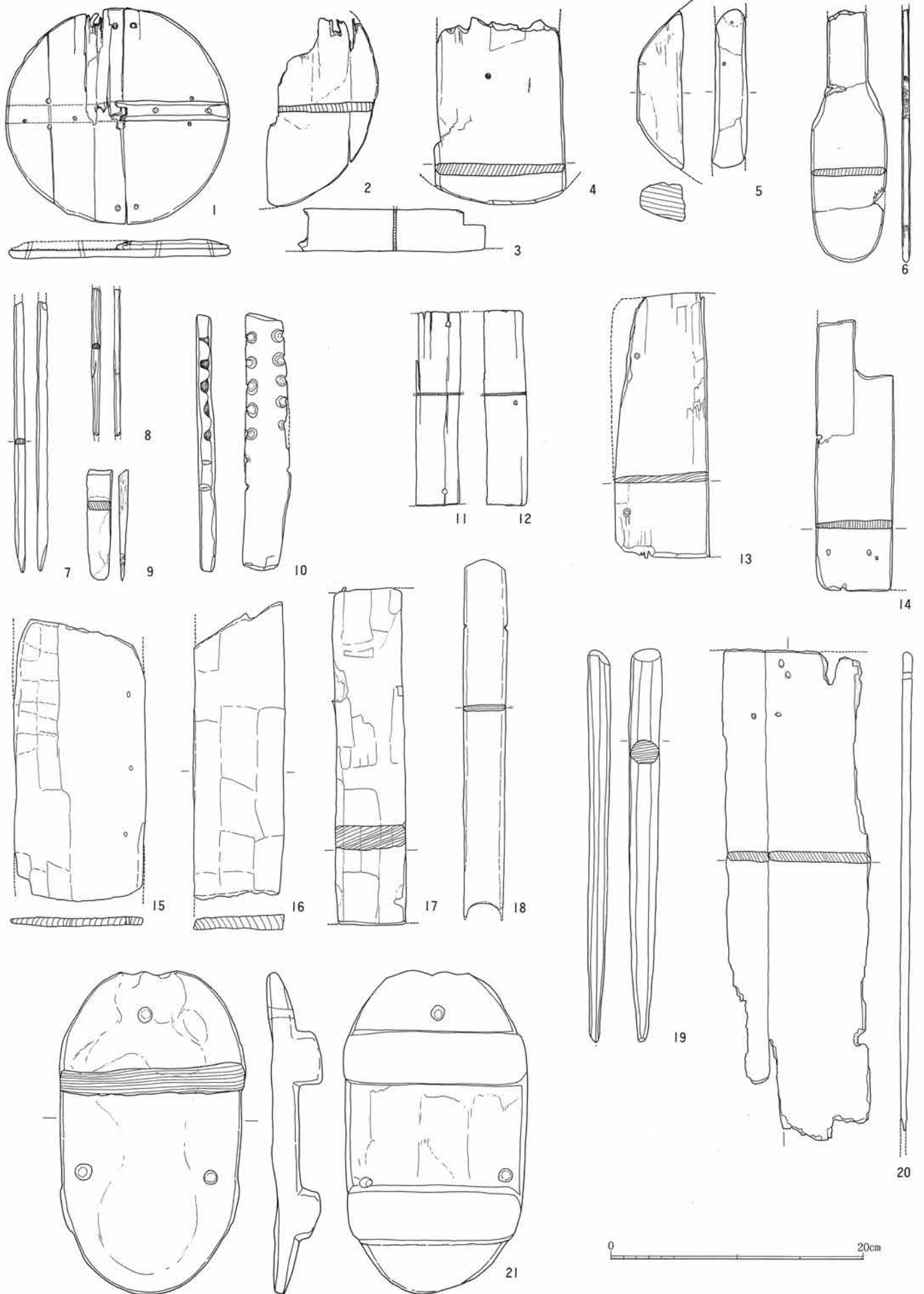




42 黑色土師器



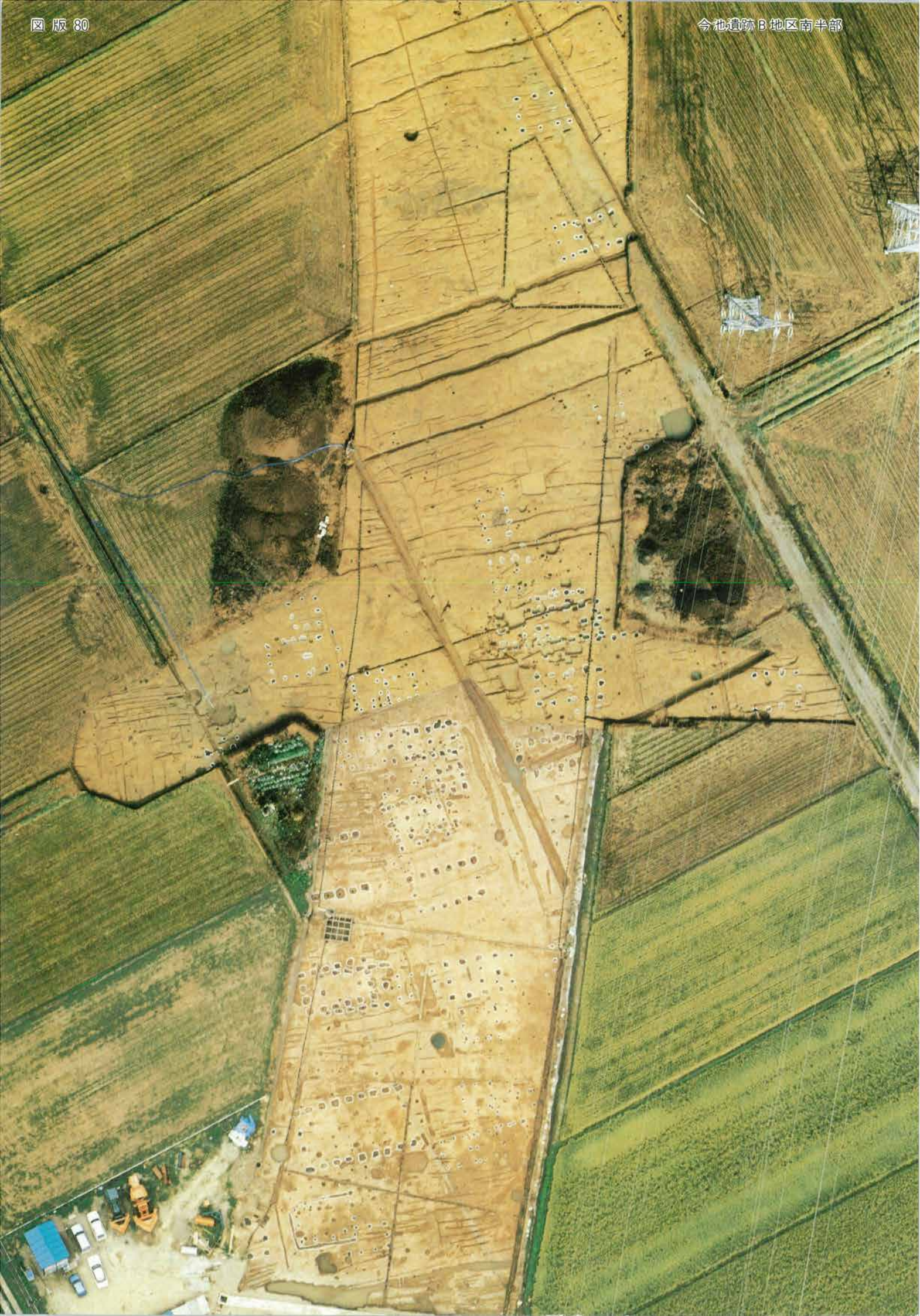














1. 建物SB57
東より



2. 建物SB12
建物SB13
東より



3. 井戸SE20
土坑SK21
南より

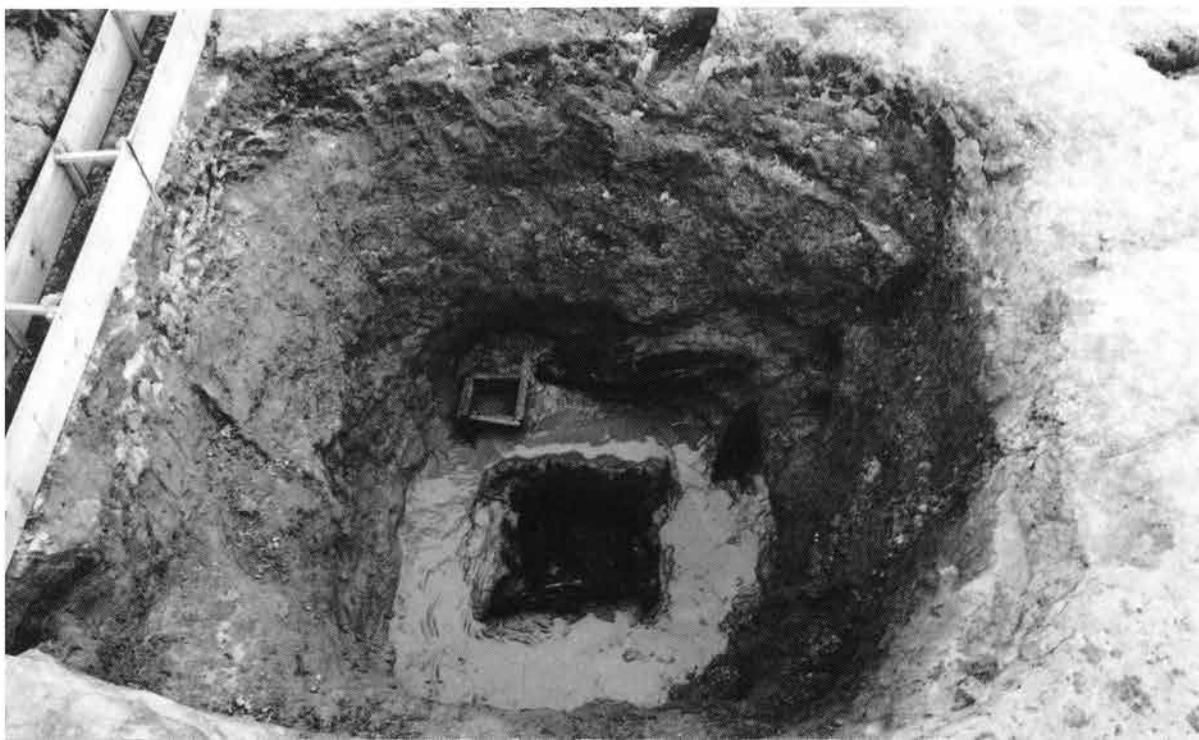




1. 井戸SE20全景
南より



2. 同上堀形断面
北より



3. 同上
井戸枠検出状況



1. 井戸SE20掘形
上部埋土状況
北より



2. 同上井戸枠
南より



3. 同上
井戸枠と自然木
西より



1. 溝SD1
南より



2. 溝SD2
溝SD6
南より



3. 土坑SK10断面
南より

1. 南端部全景
南より

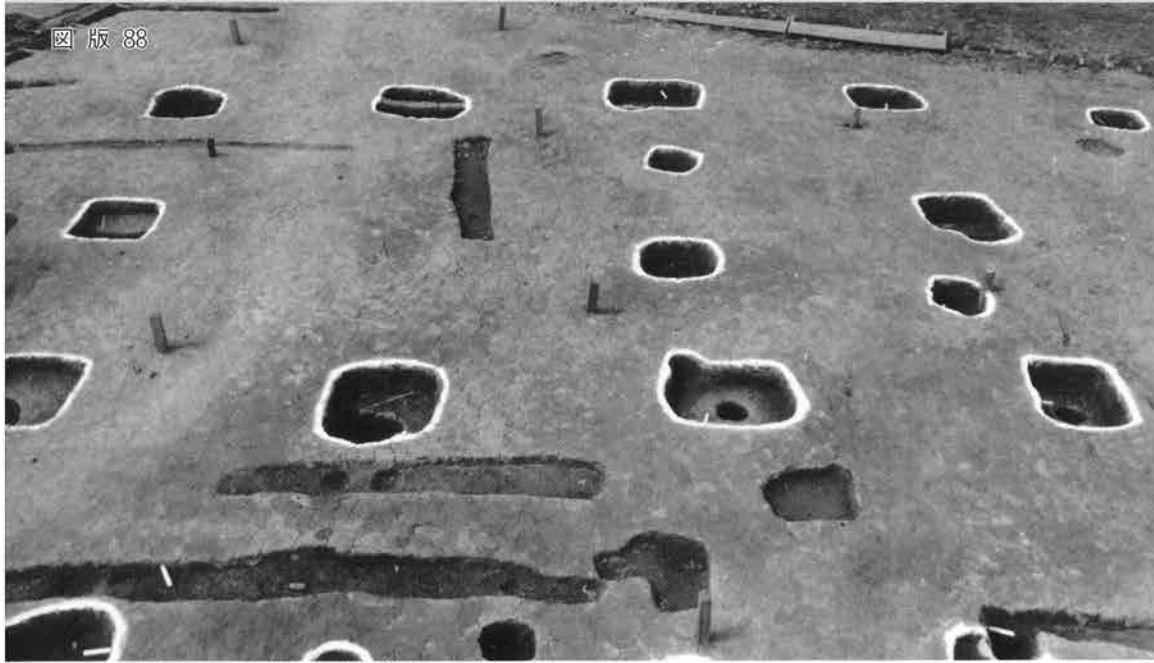


2. 建物SB105
南より

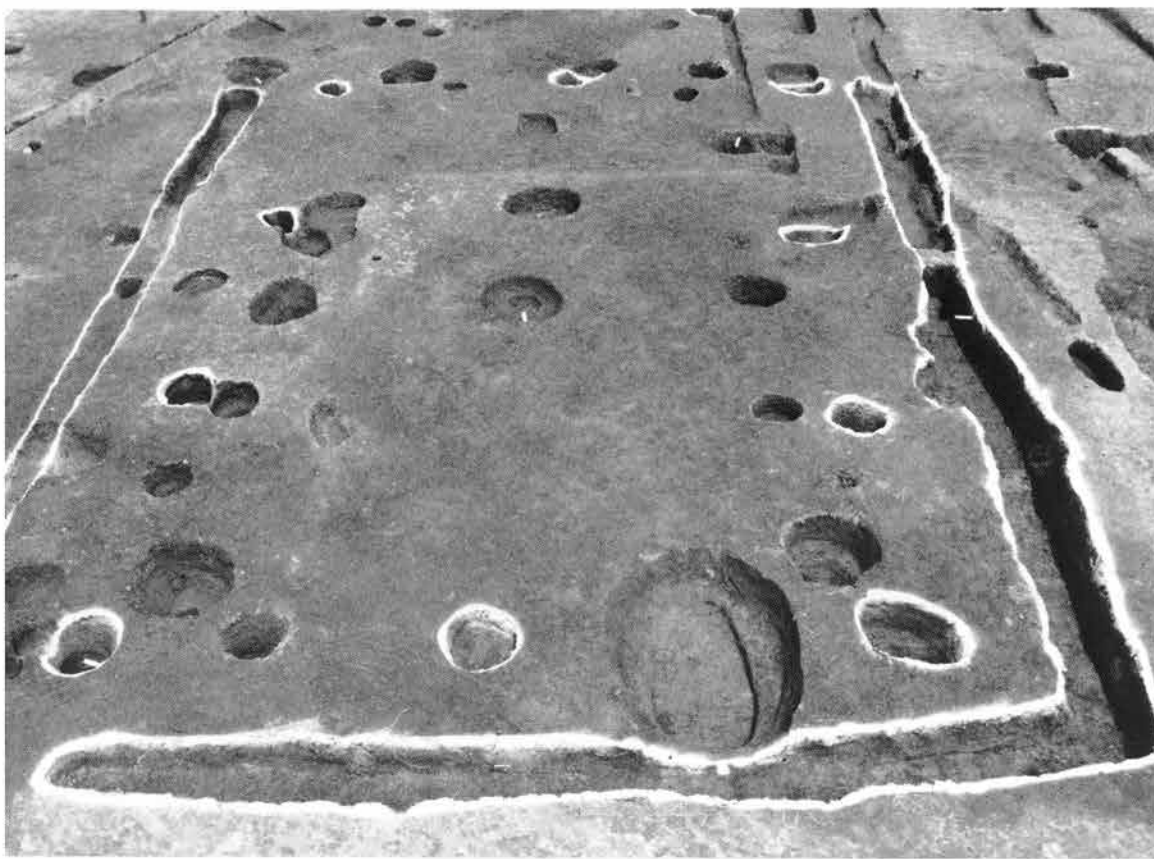


3. 建物SB106
南より





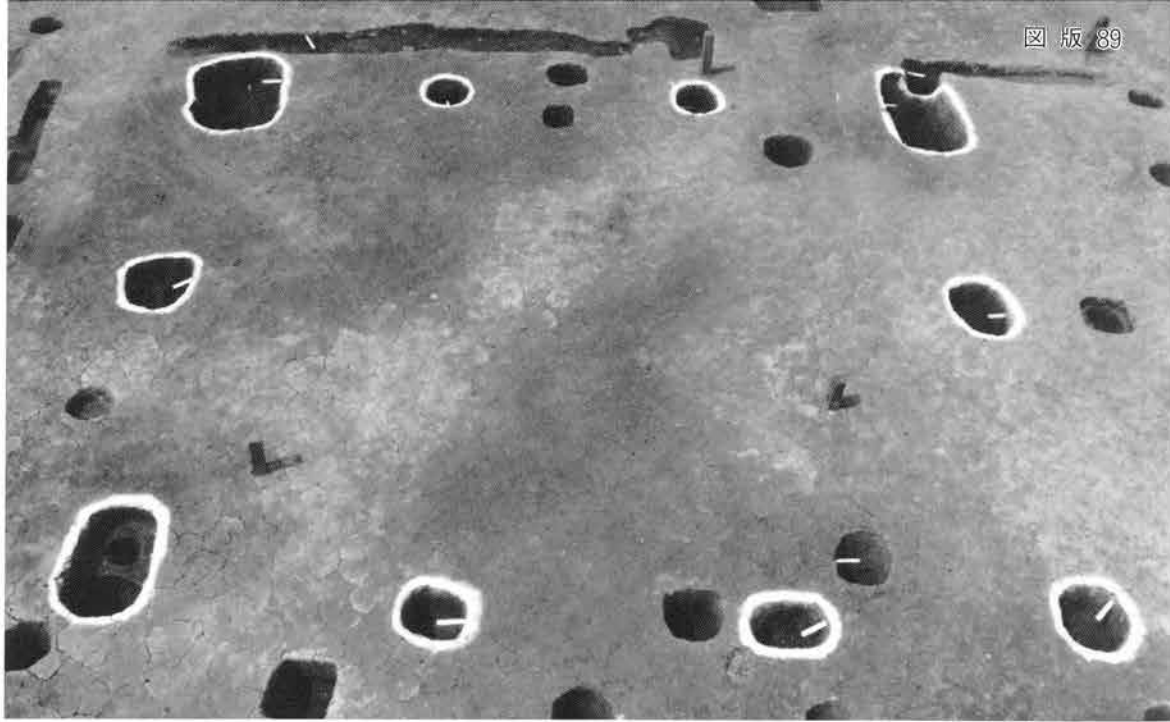
1. 建物SB109
南より



2. 建物SB115
溝SD111
溝SD104
西より



3. E27区付近
建物
北より



1. 建物SB148
南より



2. 建物SB173
南より



3. 建物SB122
南より



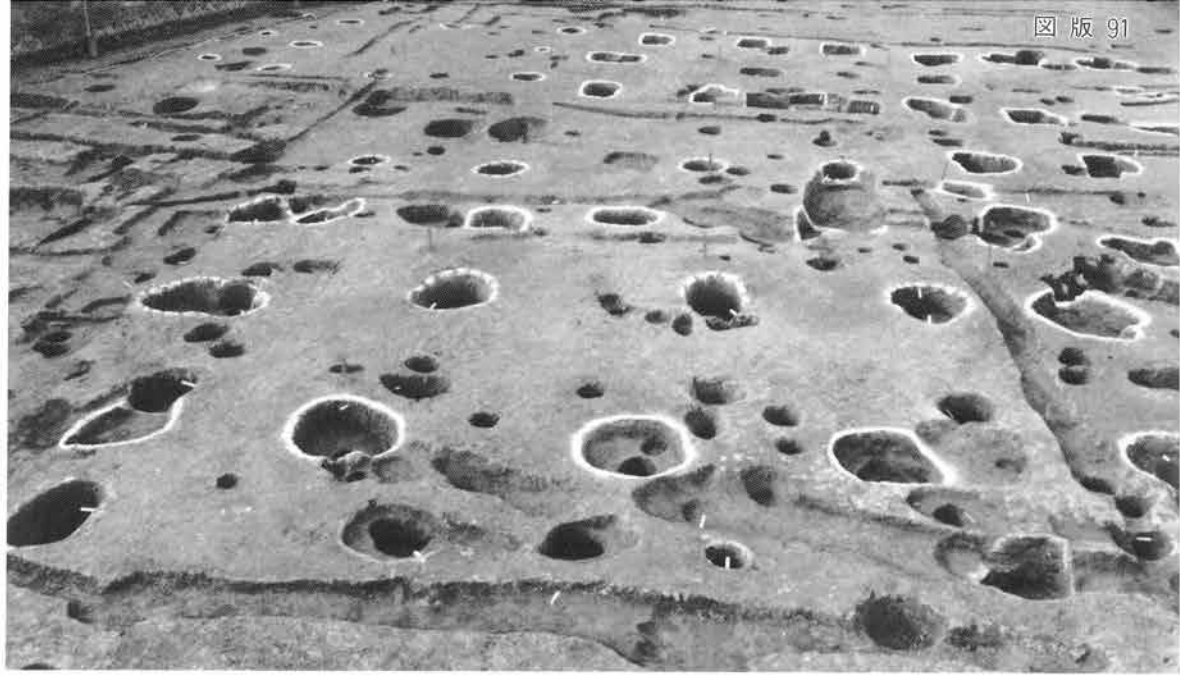
1. 建物 SB 205
南より



2. 建物 SB 204
南より



3. 建物 SB 206
溝 SD 203
西より



1. 建物 SB 229
建物 SB 242
南より



2. 建物 SB 242
東より



3. 建物 SB 228
建物 SB 253
南より



1. 建物 SB 290
南より



2. 建物 SB 274
南より



3. H・I 24区付近
西より



1. 土坑 SK391A・B
東より



2. 建物 SB411
建物 SB408
東より



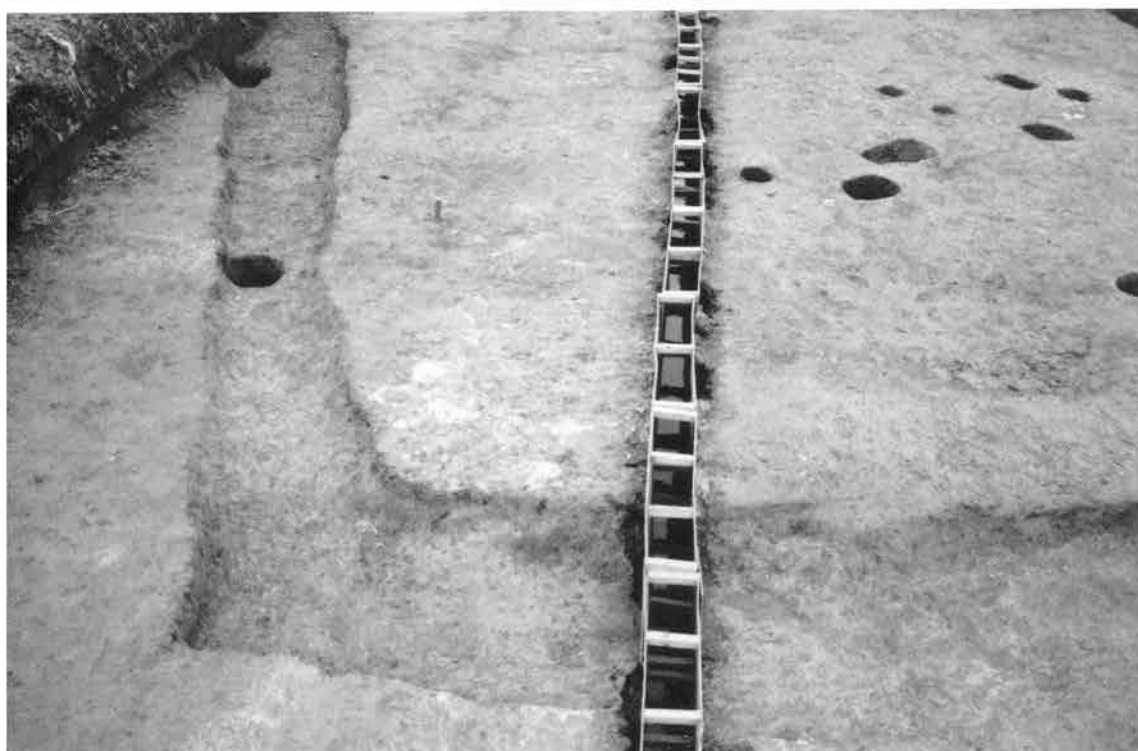
3. 溝 SD201
溝 SD141
溝 SD202
北より



1. 溝 SD201
北より



2. 溝 SD320
溝 SD321
溝 SD325
西より



3. 溝 SD320屈折部
北より



1. 溝 SD 323
西より



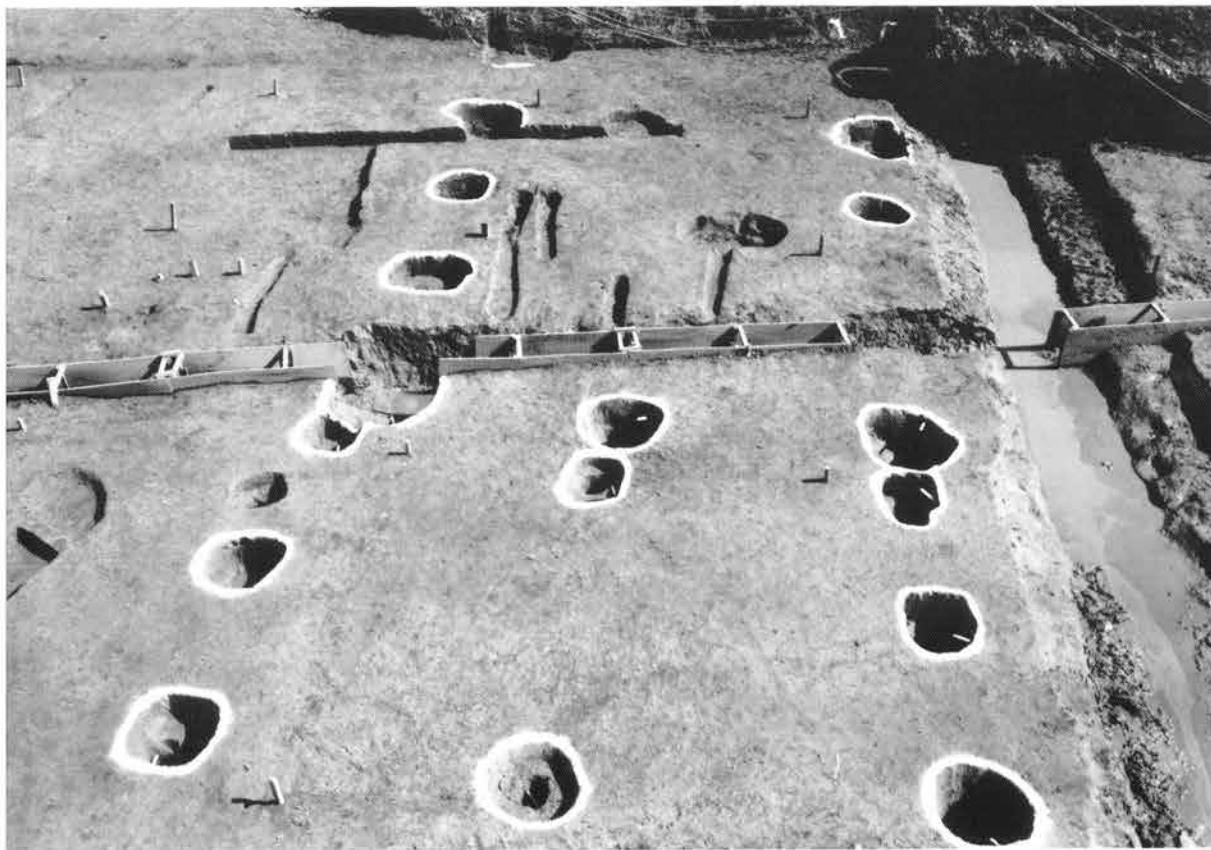
2. 溝 SD 324
西より



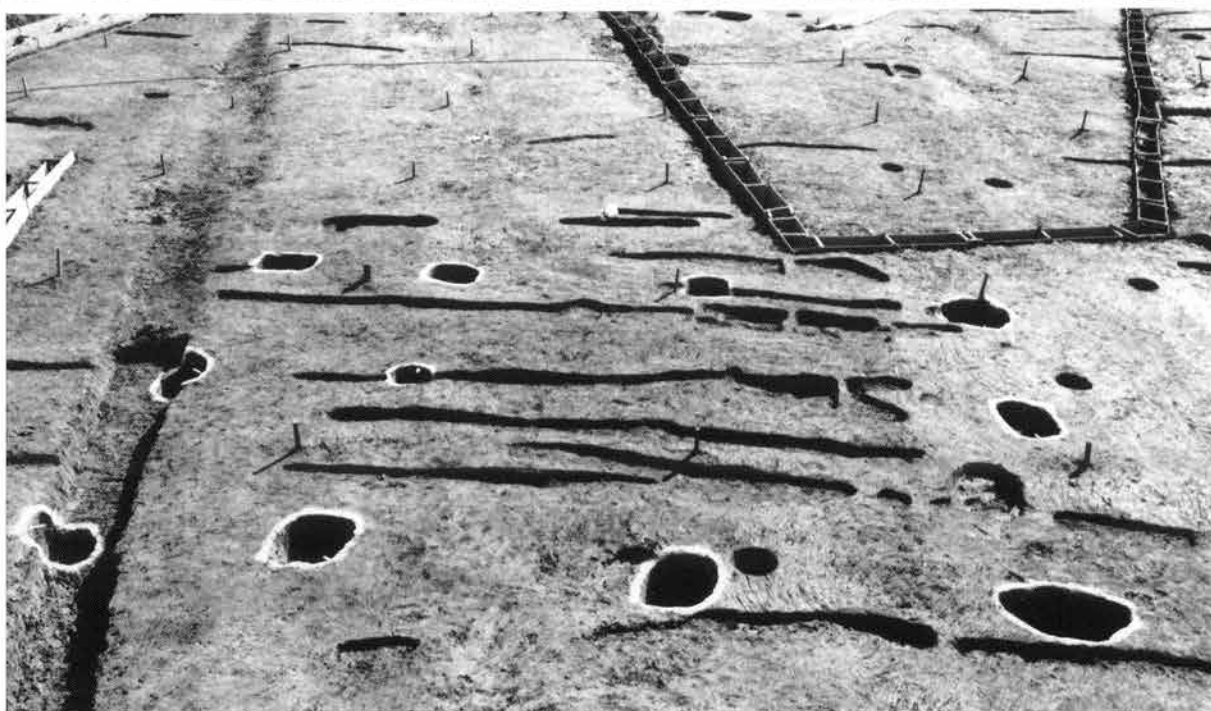
3. 溝 SD 387
西より



1. 溝 SD 324
西より



2. 建物 SB 420
建物 SB 421
西より



3. 建物 SB 430
北より



1. 溝 SD 501
東より



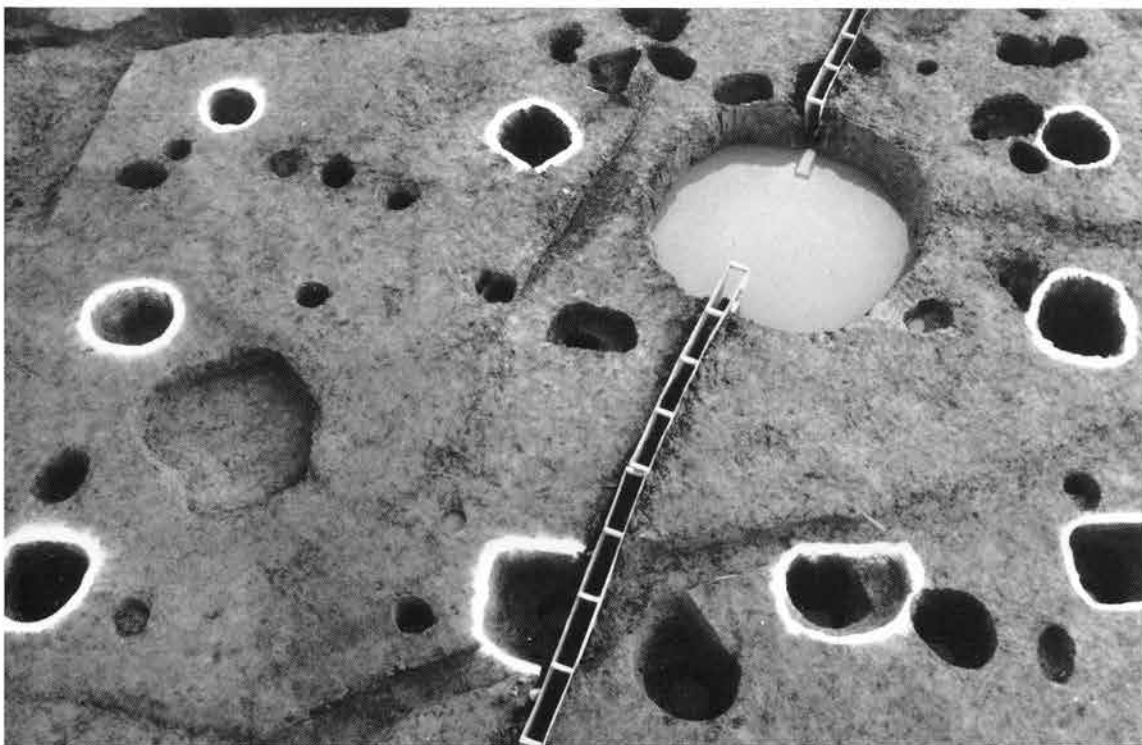
2. 溝 SD 431
溝 SD 501
溝 SD 433
西より



3. 建物 SB 504
西より



1. 建物 SB 504
北より



2. 建物 SB 666
井戸 SE 652
北より



3. 建物 SB 651
東より



1. 溝SD 3
北より



2. 同上



3. H11・12区
畝状小溝B



1. 溝 SD 3 石敷
西より



2. 同上



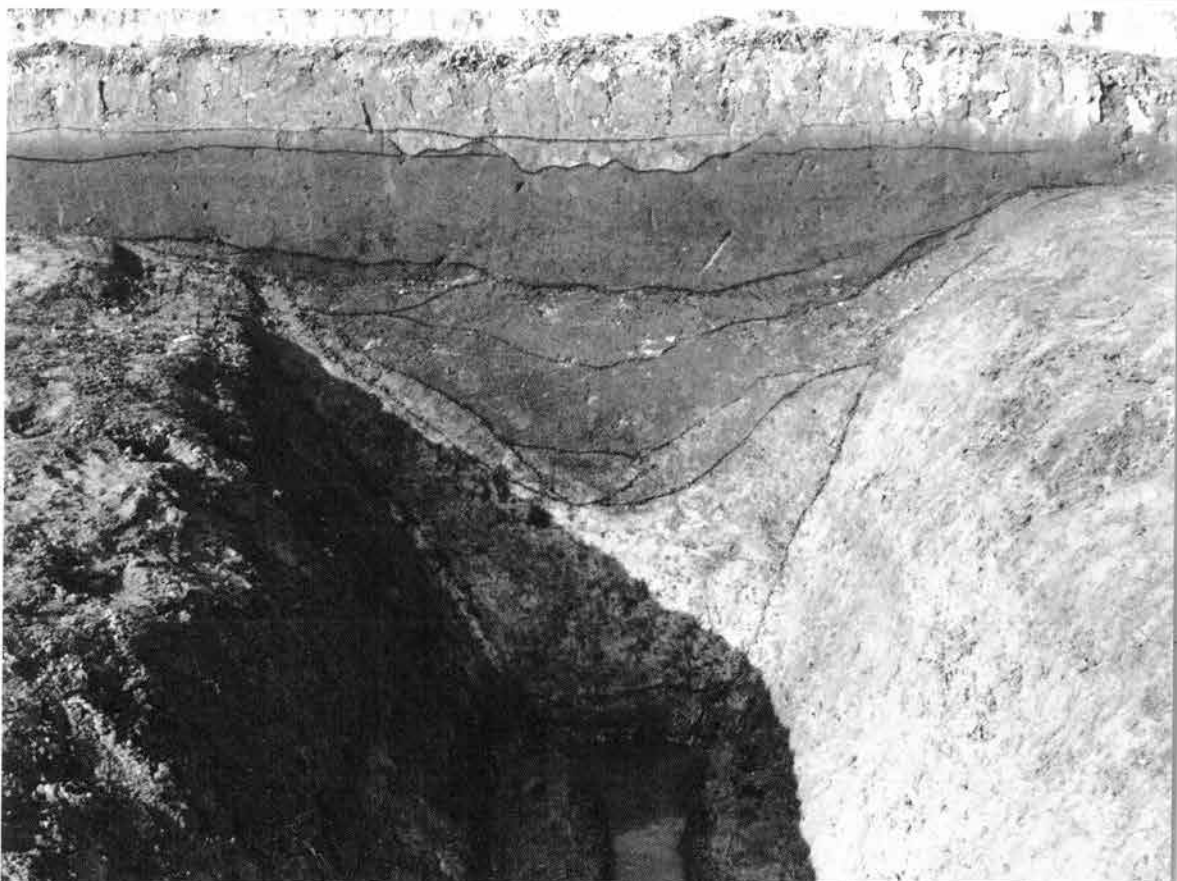
3. 溝 SD 3
南より



1. B地区北辺部
発掘風景
南より



2. 溝SD3 満水状況
北より



3. 同上断面
南より



1. 土坑 SK102
南より



2. 井戸 SE114
東より



3. 土坑 SK208
東より

1. 溝SD20I断面
F 25(14)区
北より



2. 同上
F 24(9)区
北より

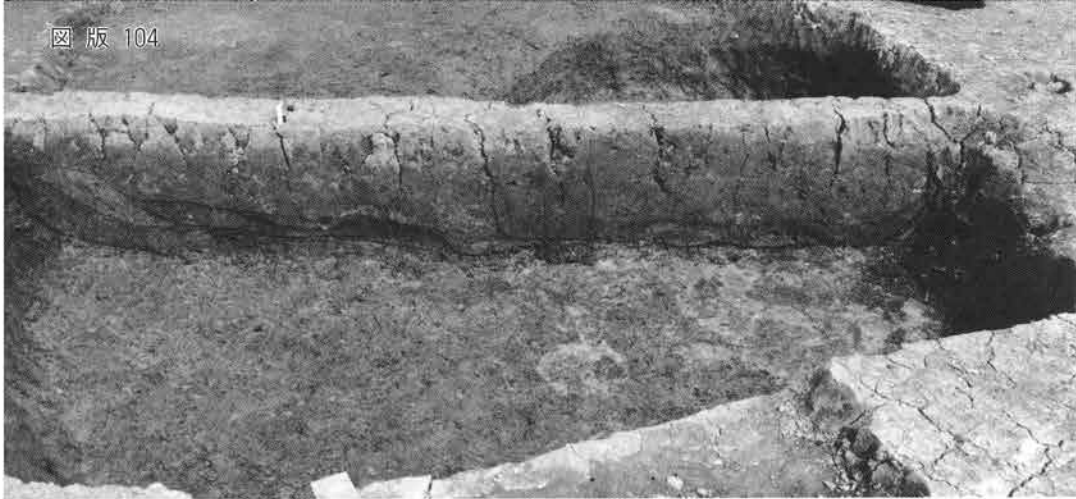


3. 同上
F 24(19)区断面
北より



4. 同上土器溜り
東より





1. 土坑 SK 101 断面
西より



2. 土坑 SK 257 断面
北より



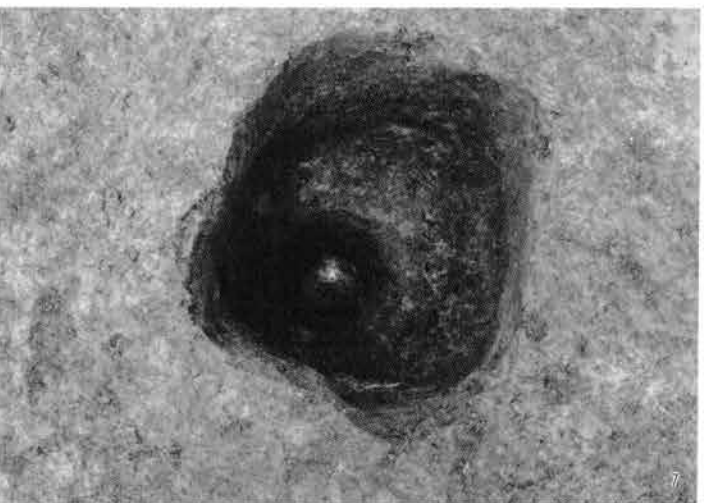
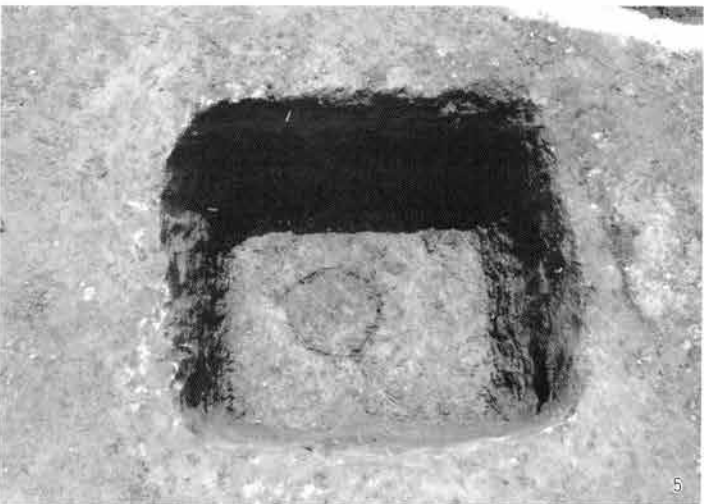
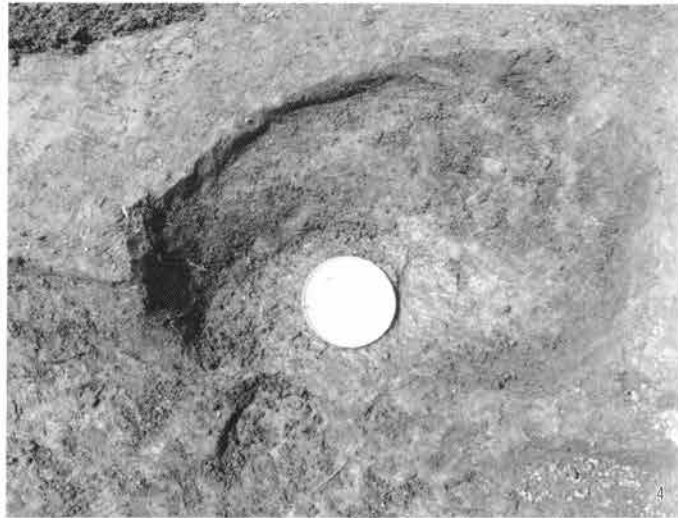
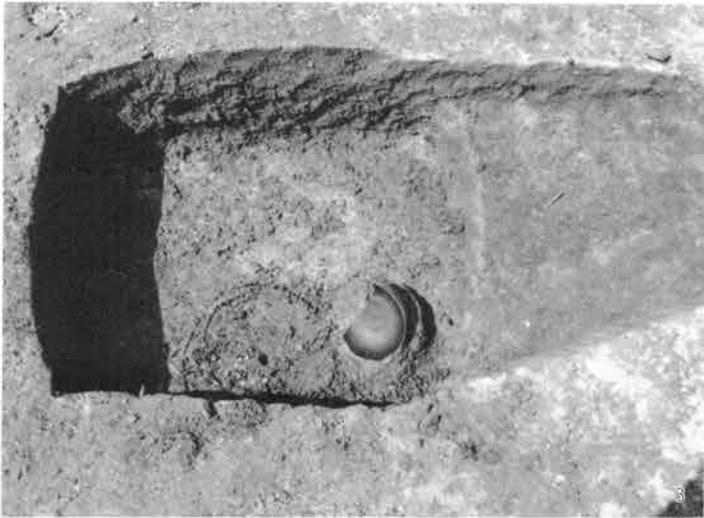
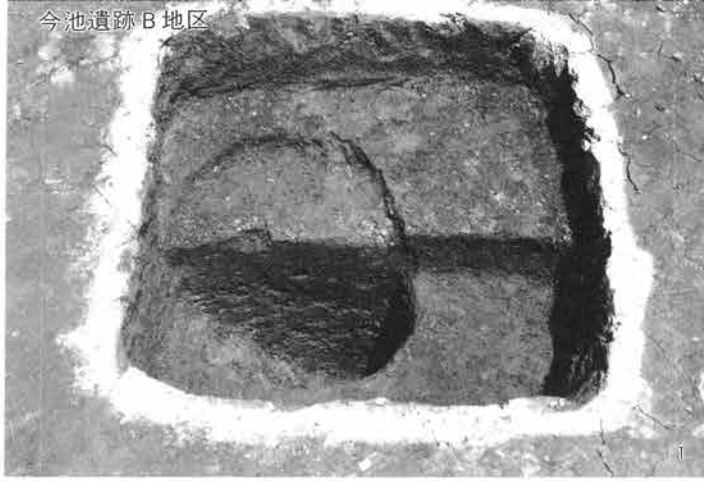
3. 土坑 SK 302 断面
南より



左 4. 溝 SD 324 断面
西より



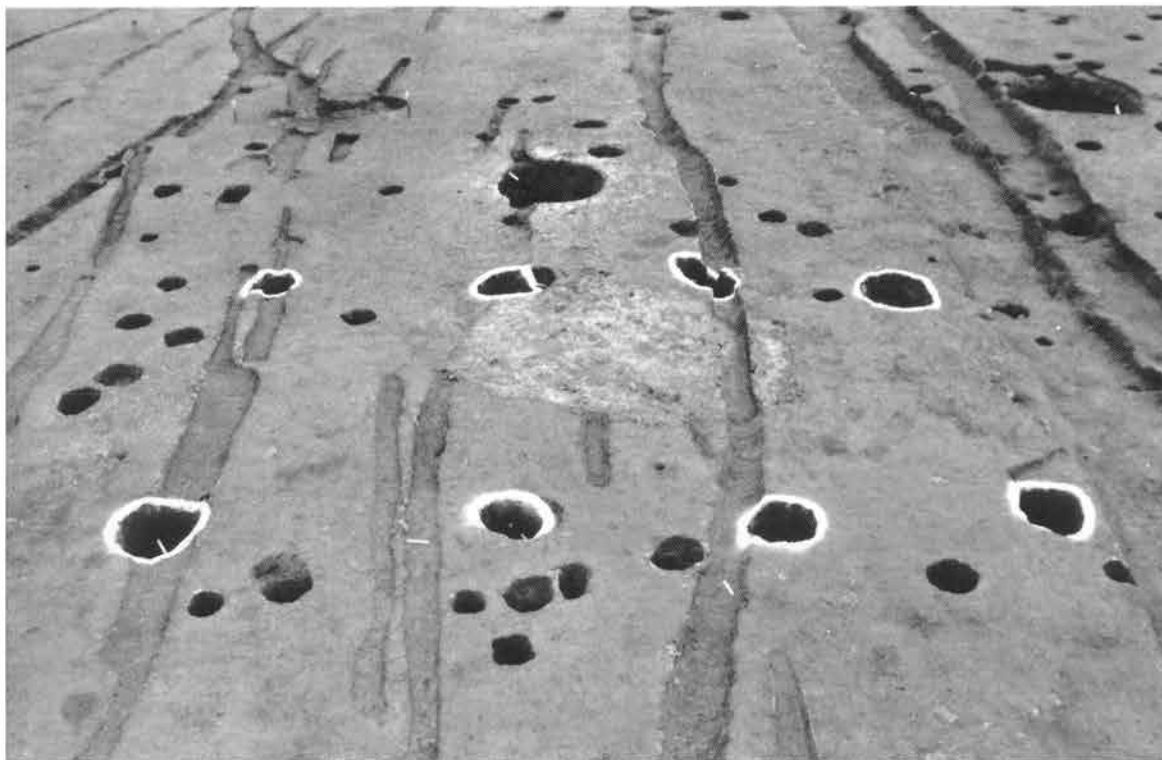
右 5. 溝 SD 603 断面
東より



1. 建物 SB109-10断面 2. 建物 SB228-4 断面 3. 建物 SB107-5 黒色土師器出土状況 4. 土坑 SK145 杯蓋出土状況
5. 建物 SB105-11 柱穴底面柱痕 6. F23区 P2・3 切り合い断面 7. 建物 SB108-4 土器出土状況 8. I17区 P1 根石



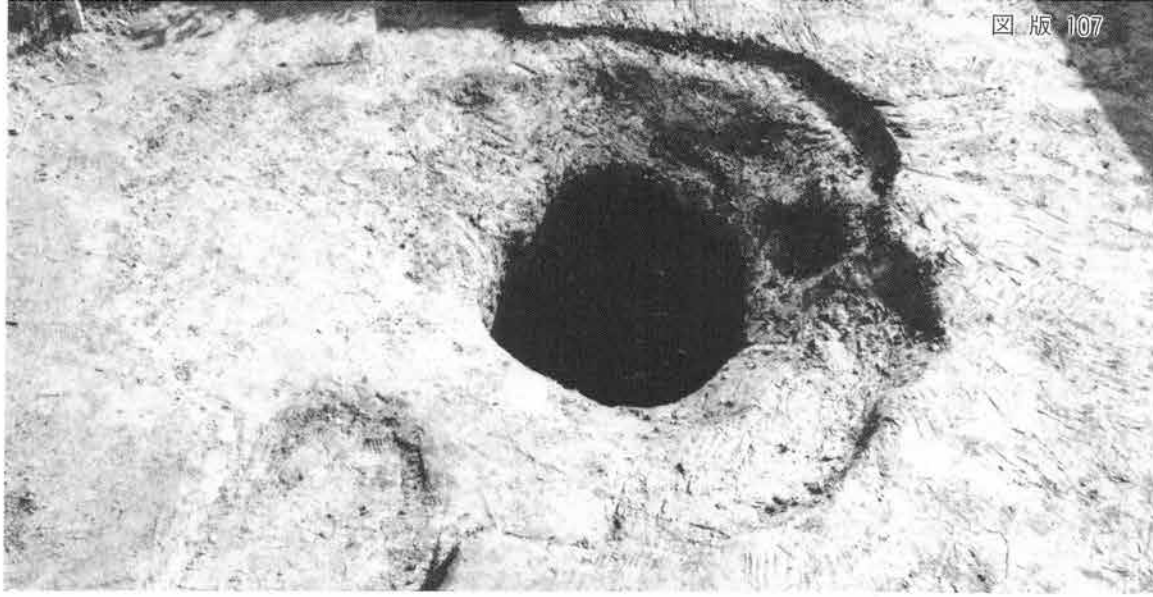
1. 建物 SB 340
建物 SB 341
西より



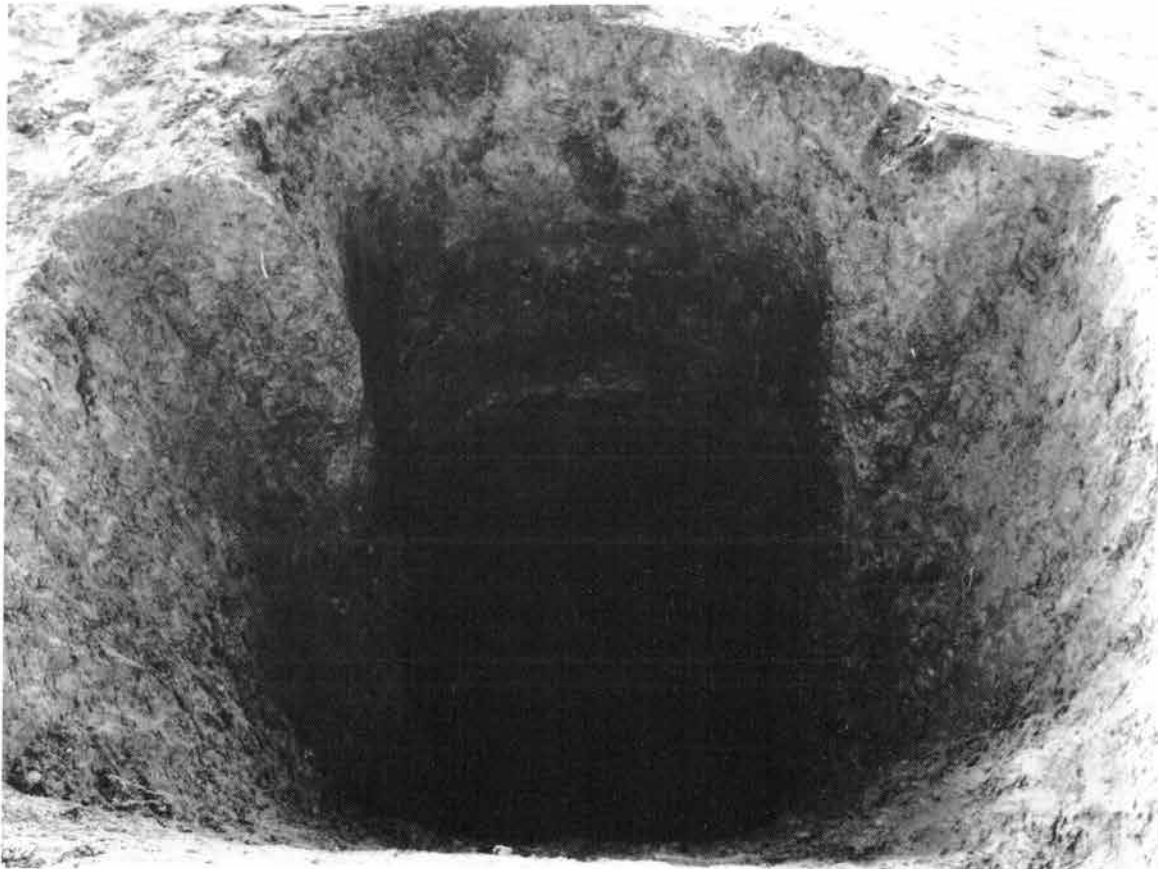
2. 建物 SB 345
西より



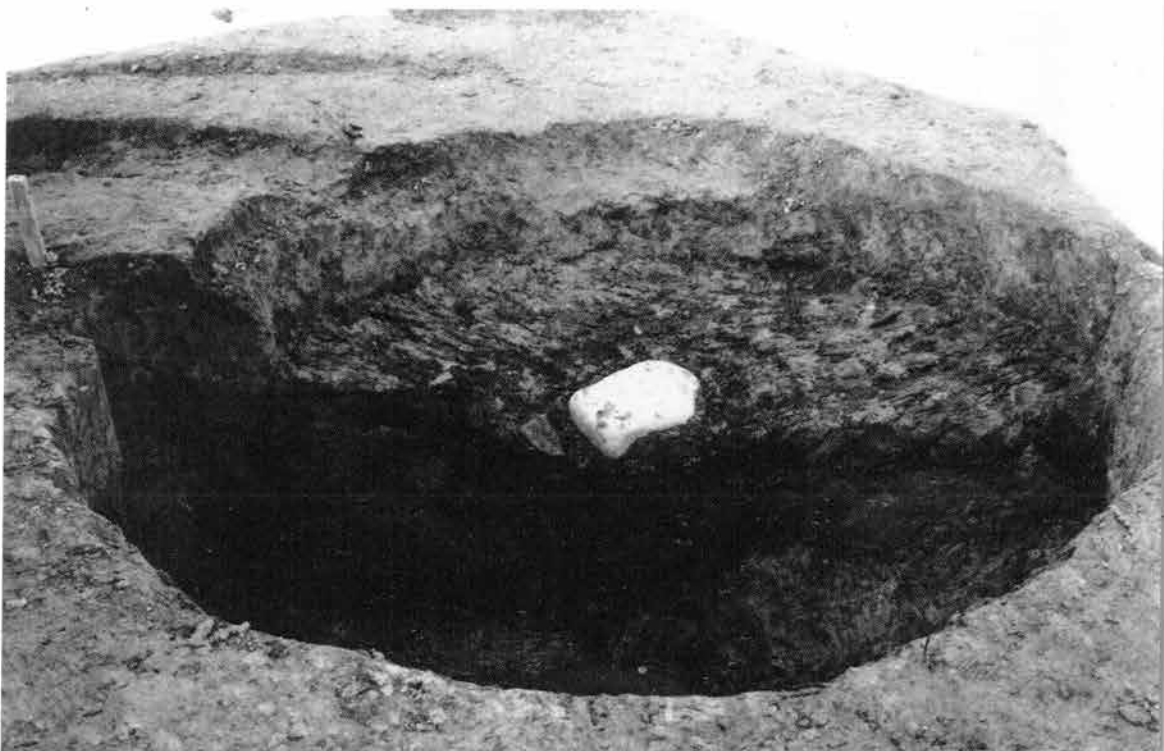
3. 井戸 SE 327
西より



1. 井戸 SE 356
北より



2. 井戸 SE 347
東より



3. 土坑 SK 428
南より



1. 建物 SB 1002
建物 SB 1003
西より



2. 同上
南より



3. 土坑 SK 1004
南より



1. 遺跡近景
南東より



2. グリッド設定状況
北東より



3. 遺跡近景(完掘後)
南西より



1. 昭和56年度調査区
完掘状況 南東より



2. 昭和55年度調査区
完掘状況 北東より



3. 建物 SB 901
土坑 SK 906
土坑 SK 907
完掘状況
南東より



1. 建物 SB 900
西より



2. 建物 SB 901
西より



3. 建物 SB 902
南東より



1. 溝 SD904
西より



2. 溝 SD904
土層断面
西より



3. 土坑 SK906
土坑 SK907
西より



1. 発掘前 遺物表面
採集風景



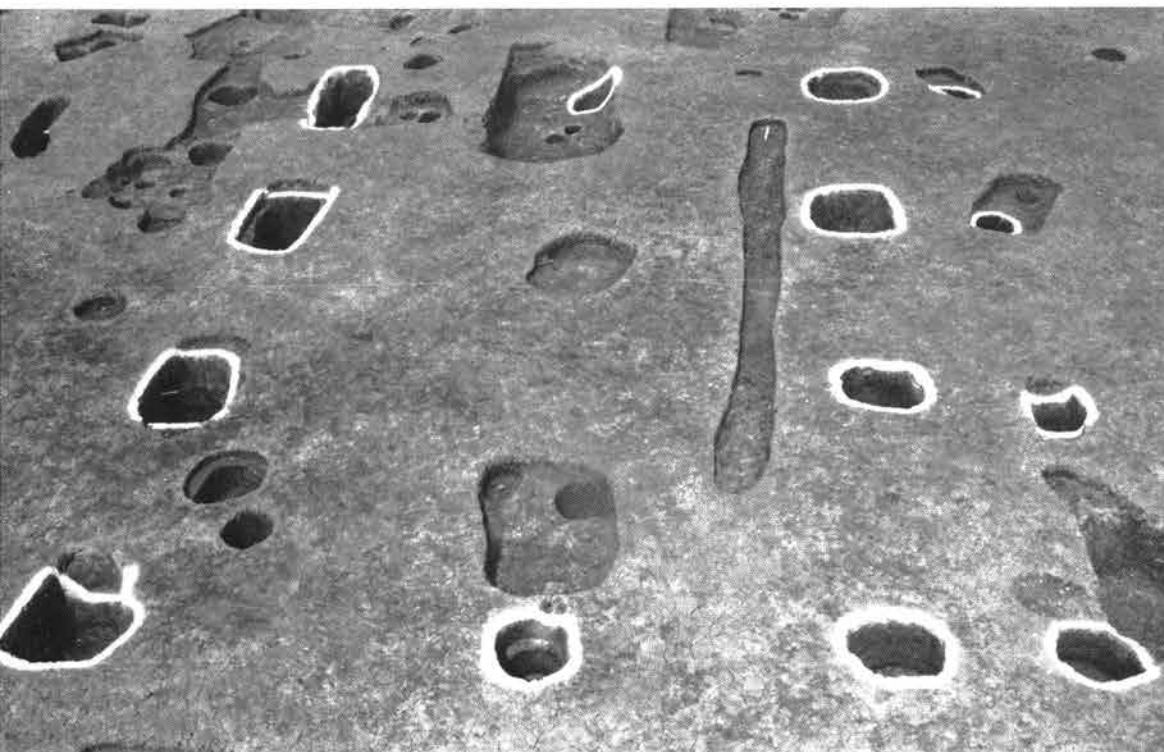
2. 完掘状況 東側
北より



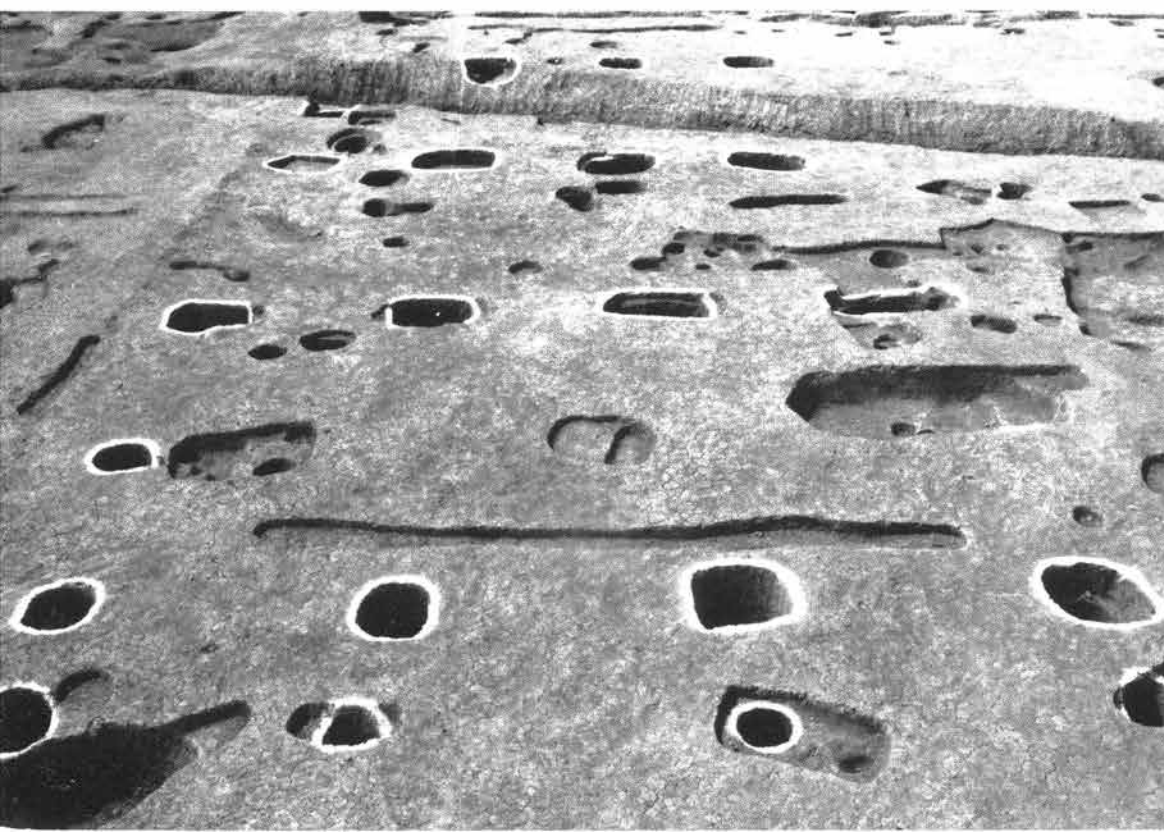
3. 同上 西側
北より



1. A・B区全景
北より

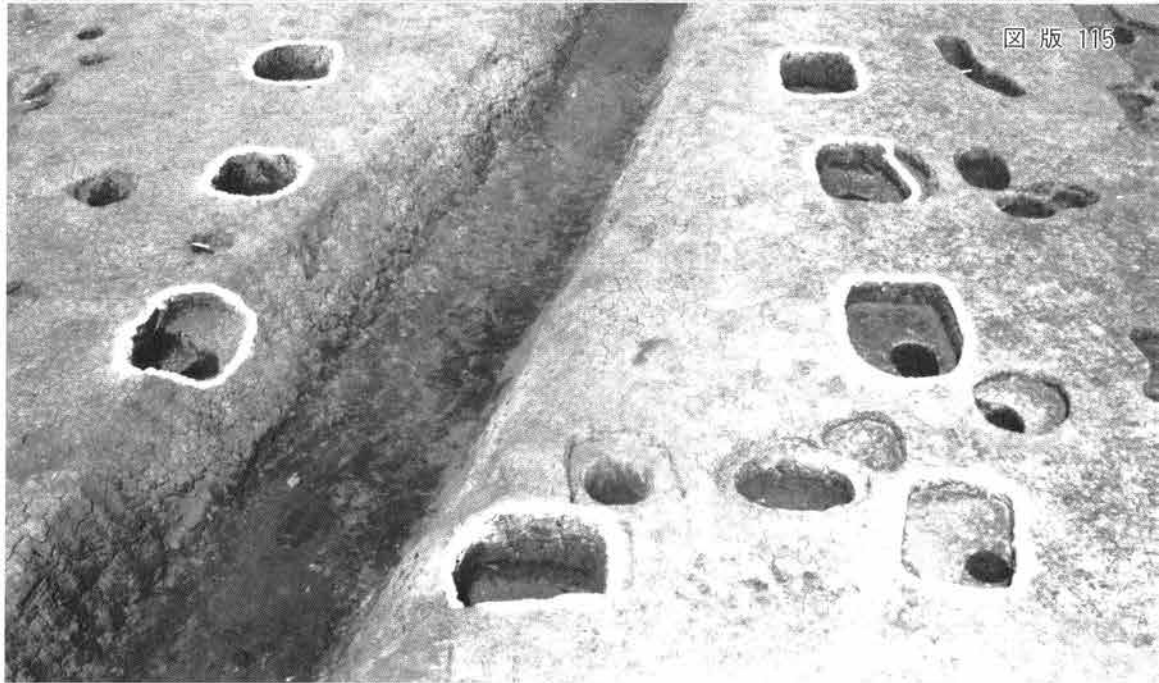


2. 建物SB1
東より



3. 建物SB1
建物SB2
溝SD21
北より

1. 建物SB1
溝SD21
東より

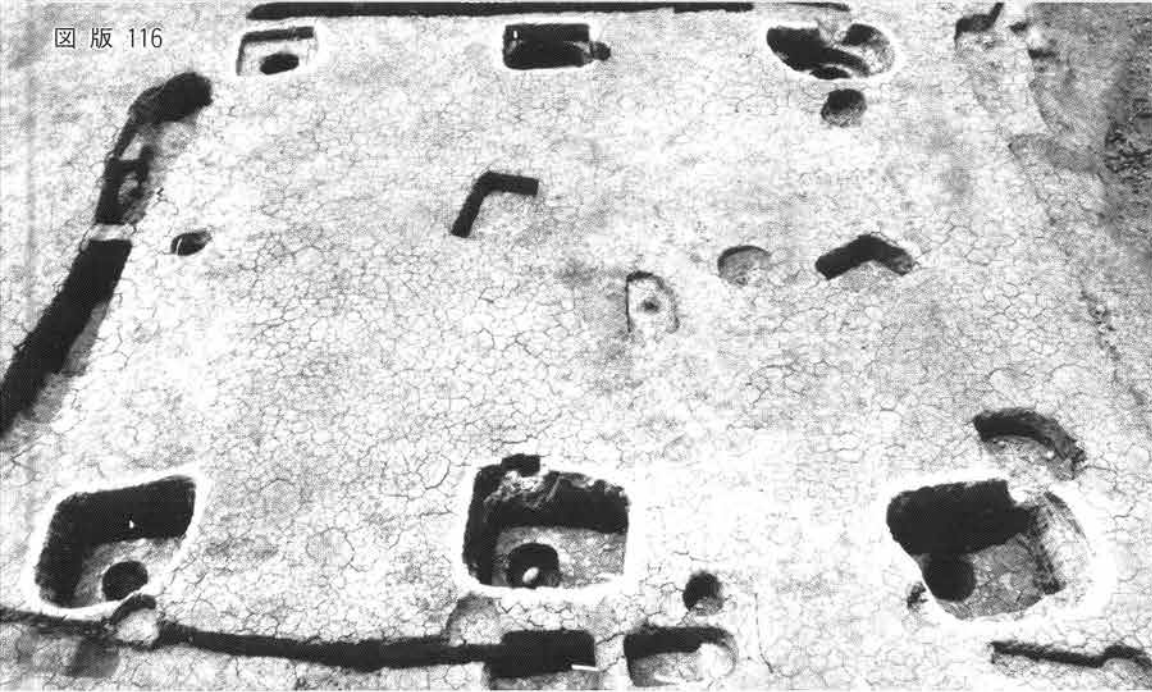


2. 建物SB3
建物SB4
東より

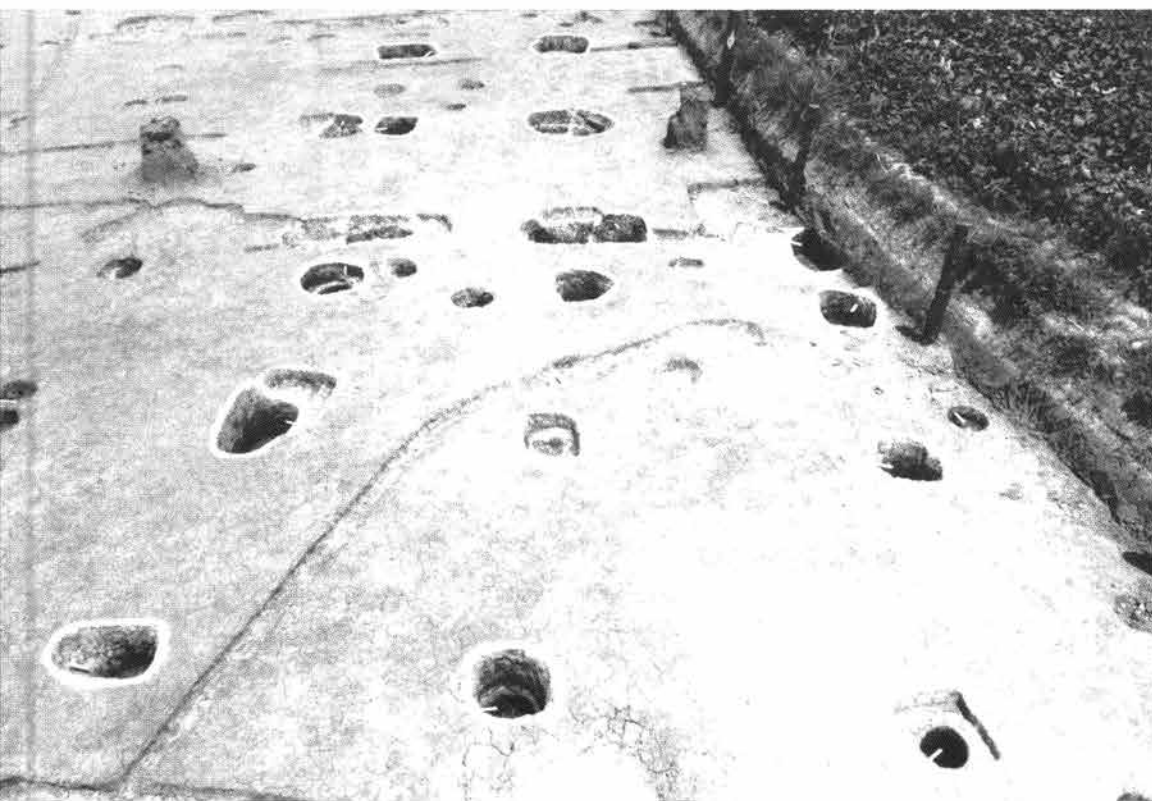


3. 建物SB4
南より





1. 建物 SB 5
北より



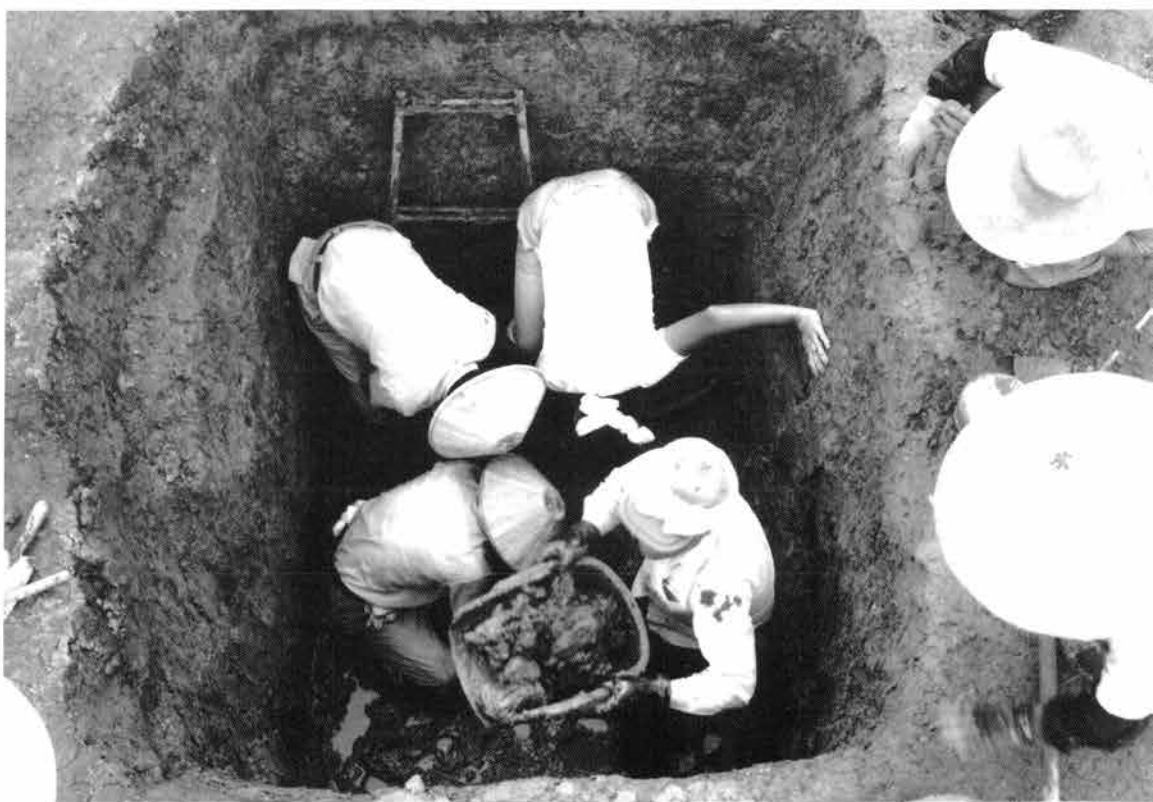
2. 建物 SB 6 A
建物 SB 6 B
建物 SB 7
南より



3. 建物 SB 8 (部分)
建物 SB 9
井戸 SE 13
東より



1. 建物SB10
北より



2. 井戸SE11発掘風景



3. 井戸SE11
井戸枠検出状況



井戸 SE II

1. 遺物出土状況



2. 井戸枠内礫出土状況



3. 井戸枠設置状況



井戸 SE II
1. 掘形完掘



2. 井戸枠内遺物出土状況
3. 井戸枠組方
4. 井戸枠内礫出土状況
5. 井戸枠底部



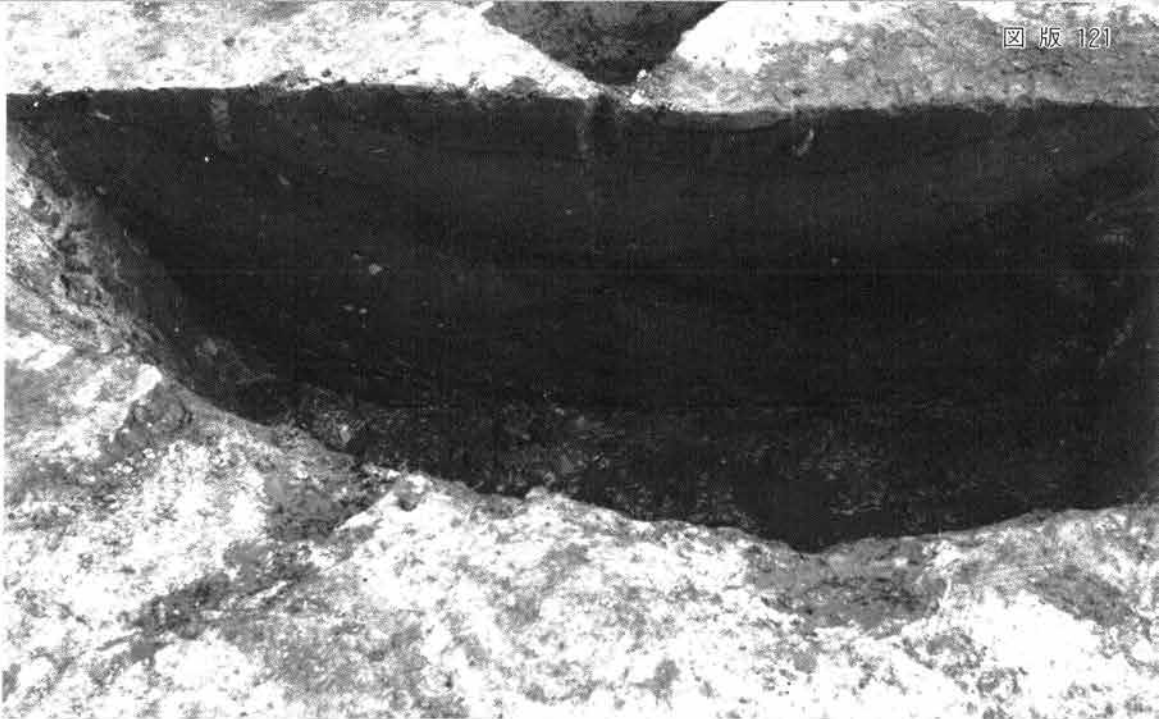
1. 井戸SE12遺物出土状況
北より



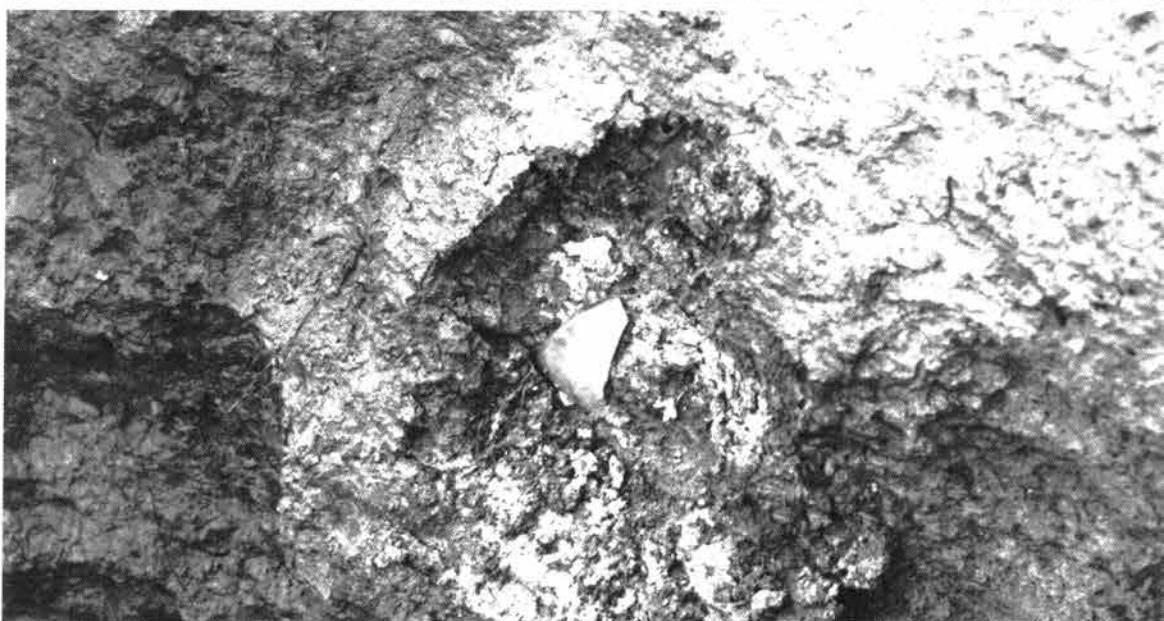
2. 井戸SE12土層断面
東より



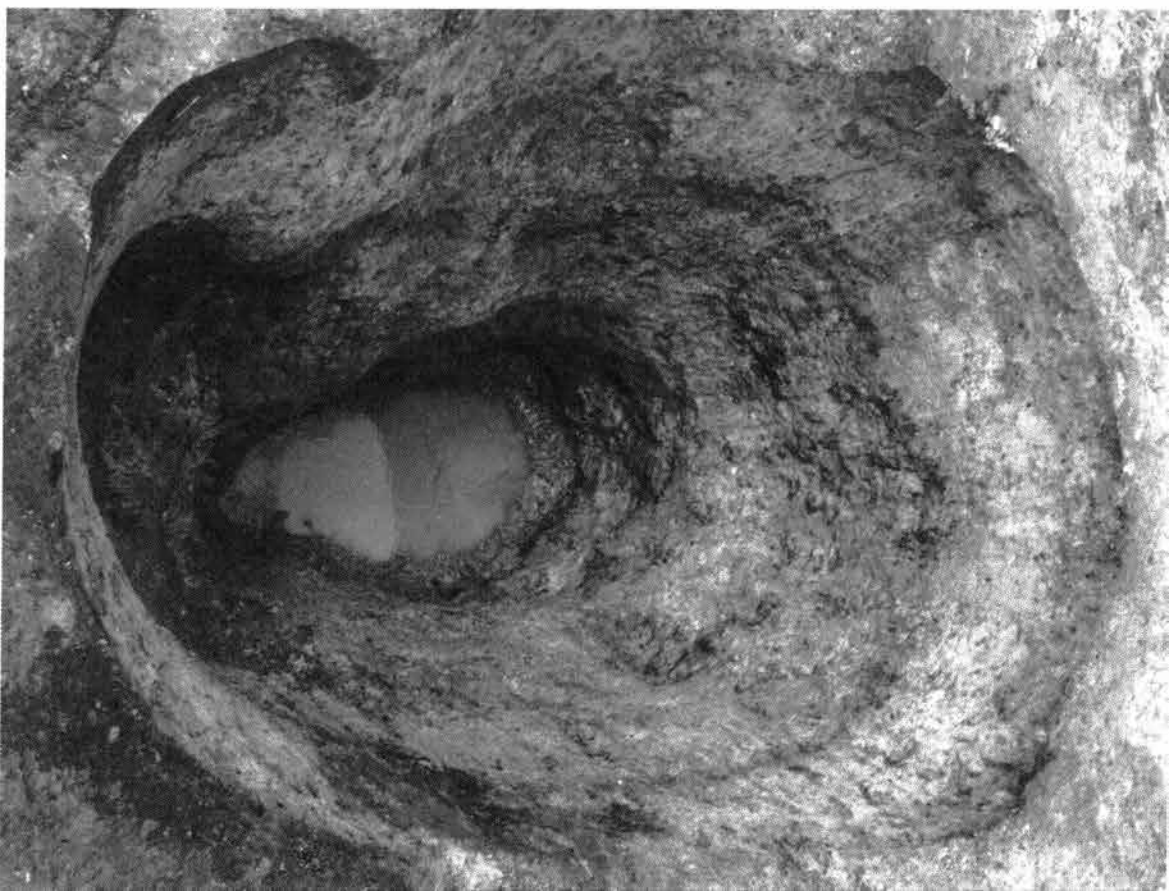
3. 井戸SE12完掘状況
北東より



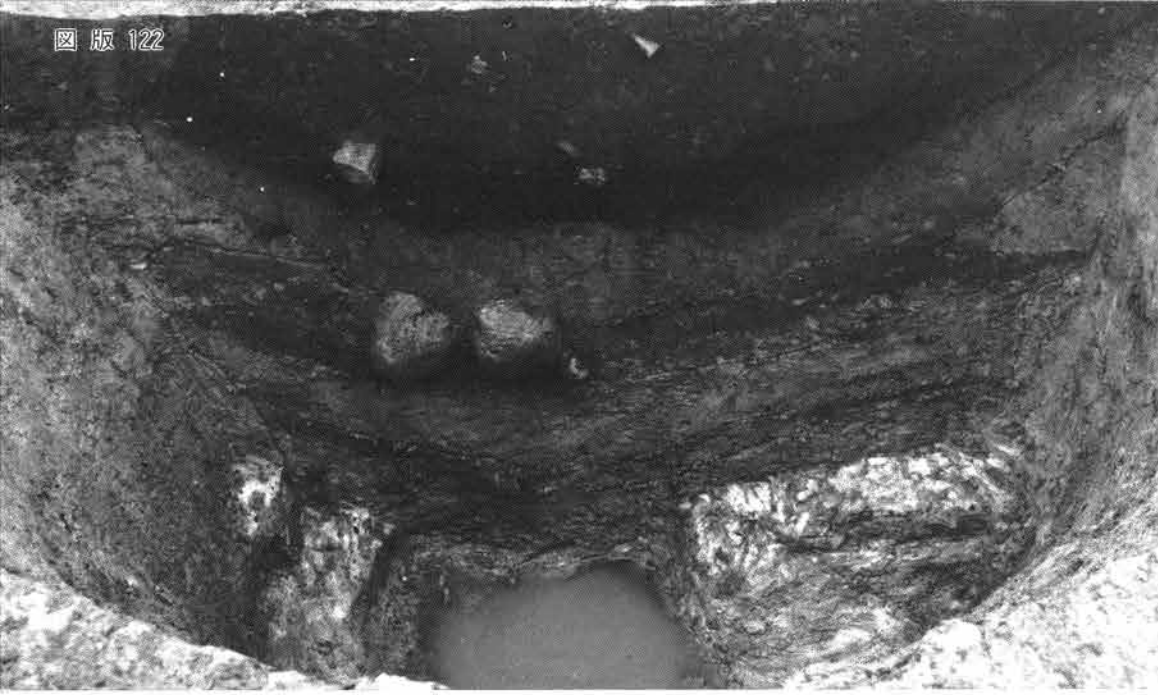
1. 井戸 SE 14土層断面
北より



2. 井戸 SE 14緑釉出土状況



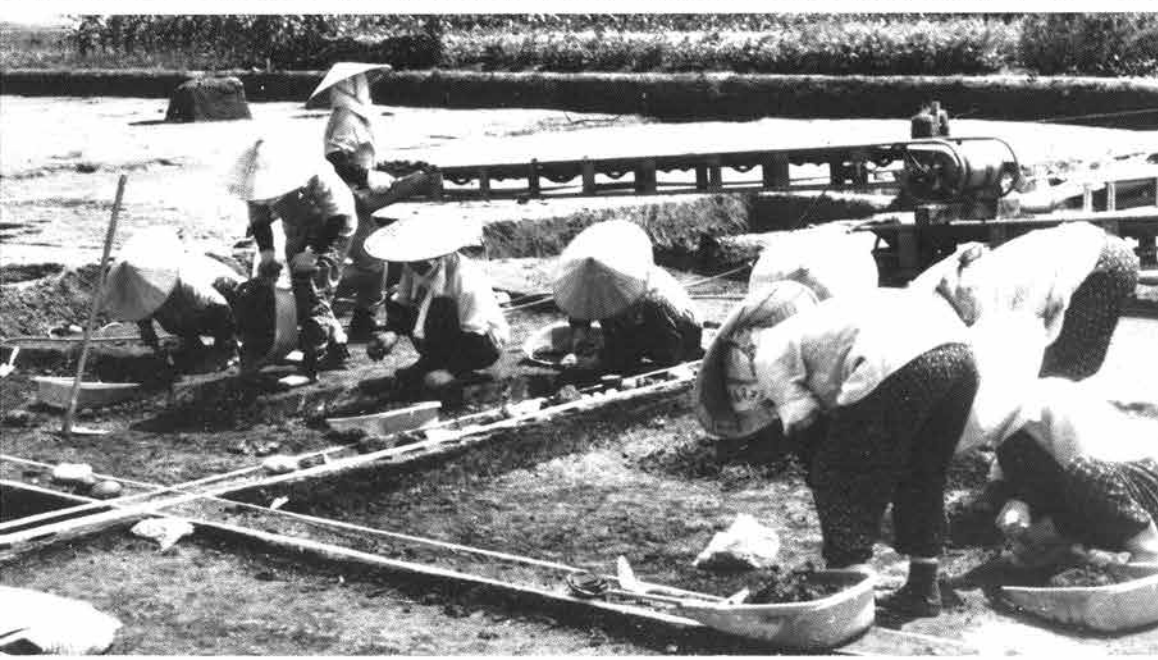
3. 井戸 SE 14完掘状況



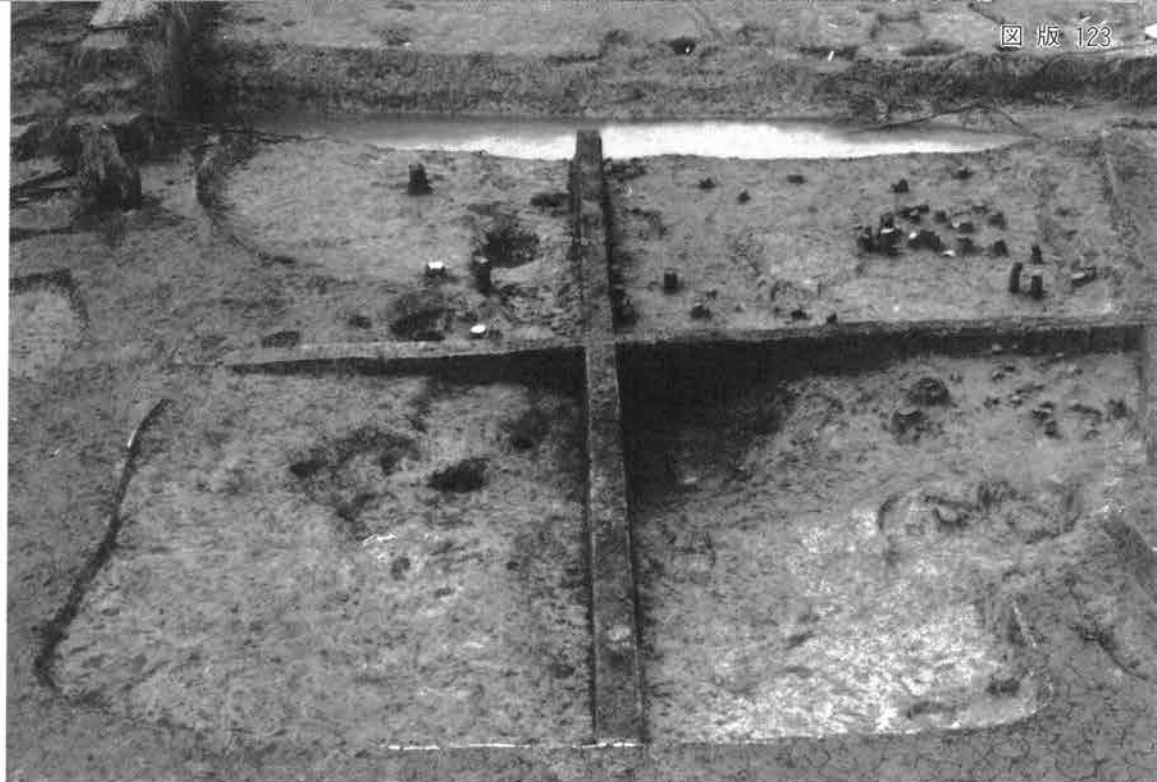
1. 井戸 SE 15土層断面
南より



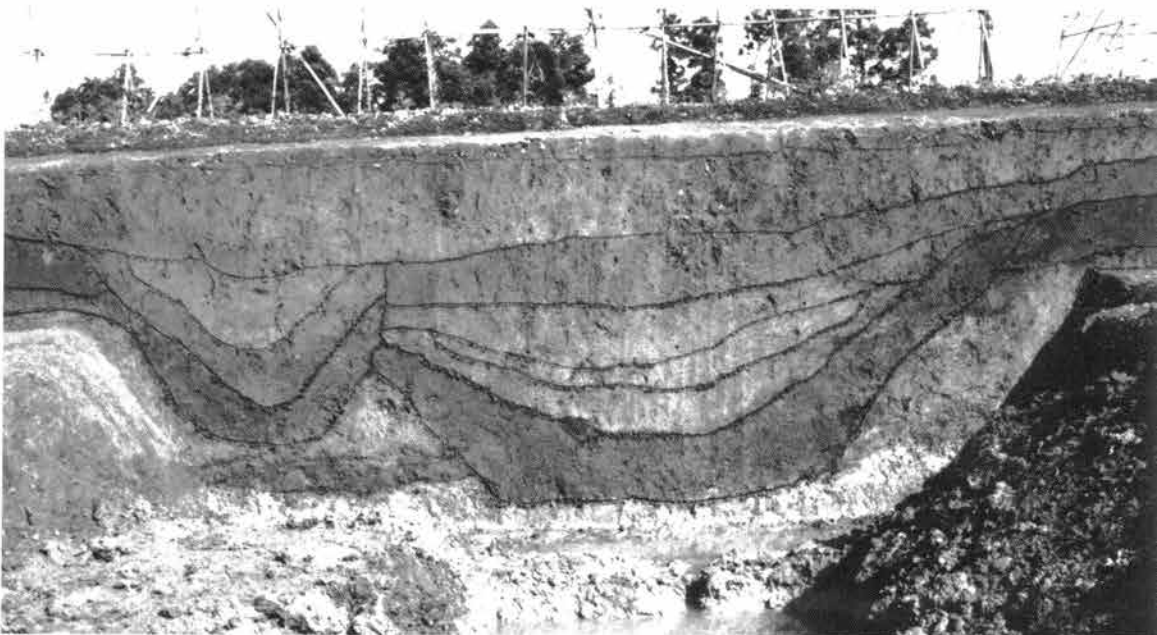
2. 井戸 SE 15完掘状況
北より



3. C 7区発掘風景



1. 土坑SK31
遺物出土状況
南より



2. 溝SD21土層断面
右A 左B
西より



3. 溝SD22土層断面
南より



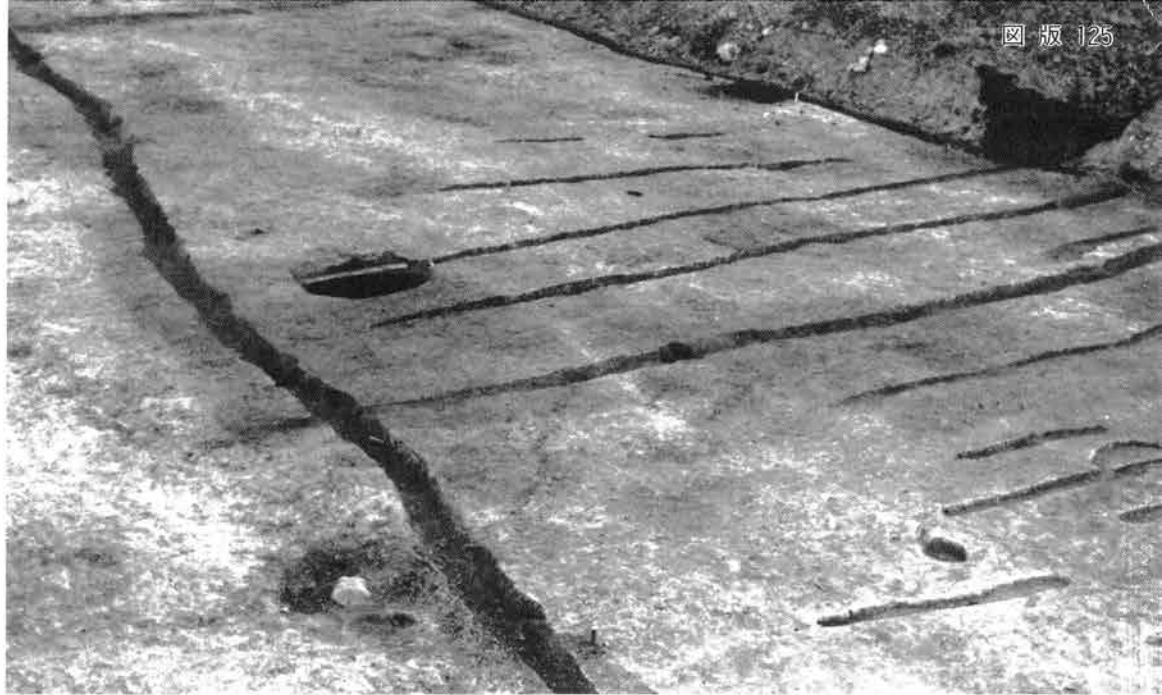
1. 西南部全景
南より



2. 同上
北より



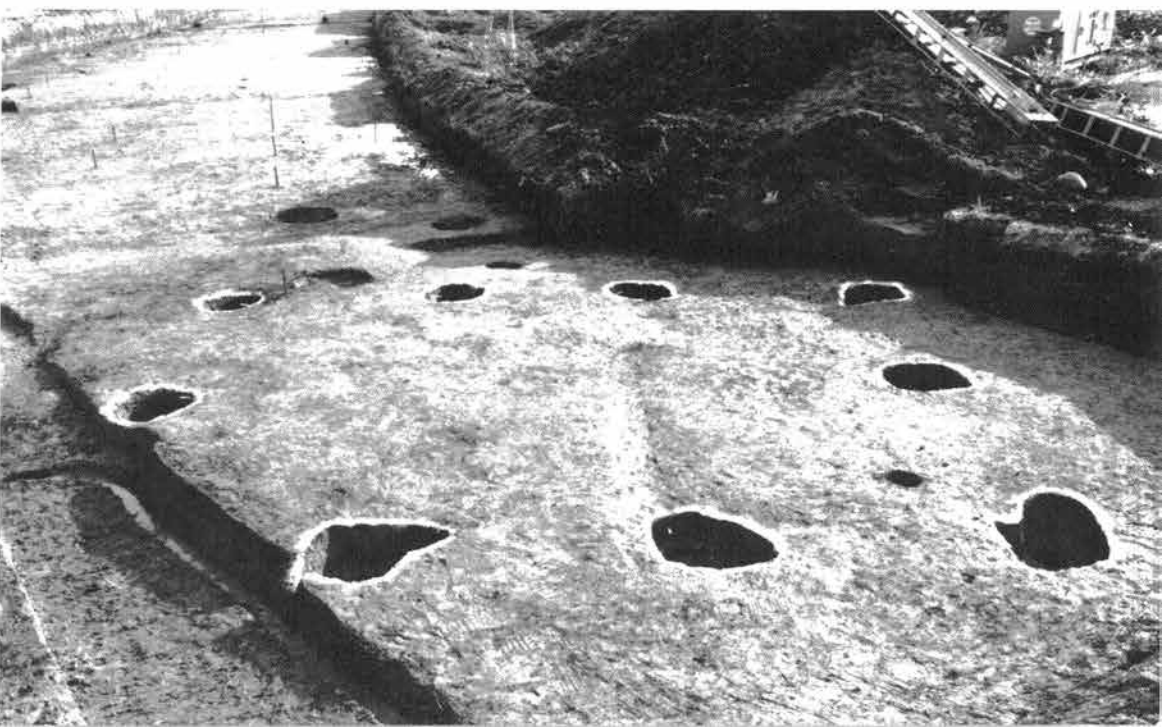
3. B10区
畝状小溝
東より



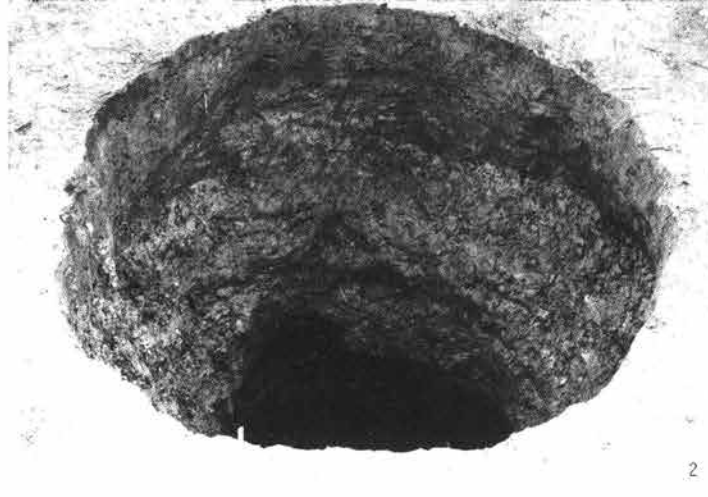
1. B7区付近
北より



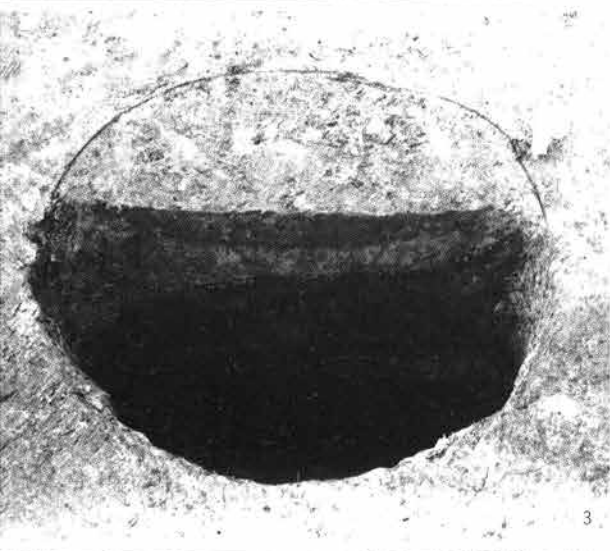
2. 東南部全景
南より



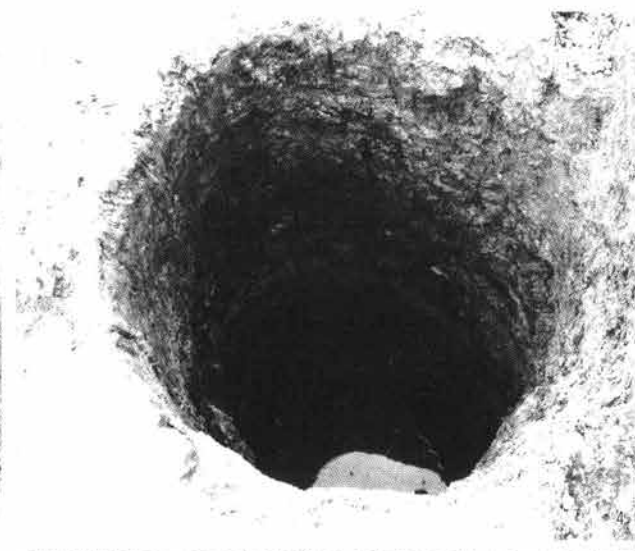
3. 建物SB10
北より



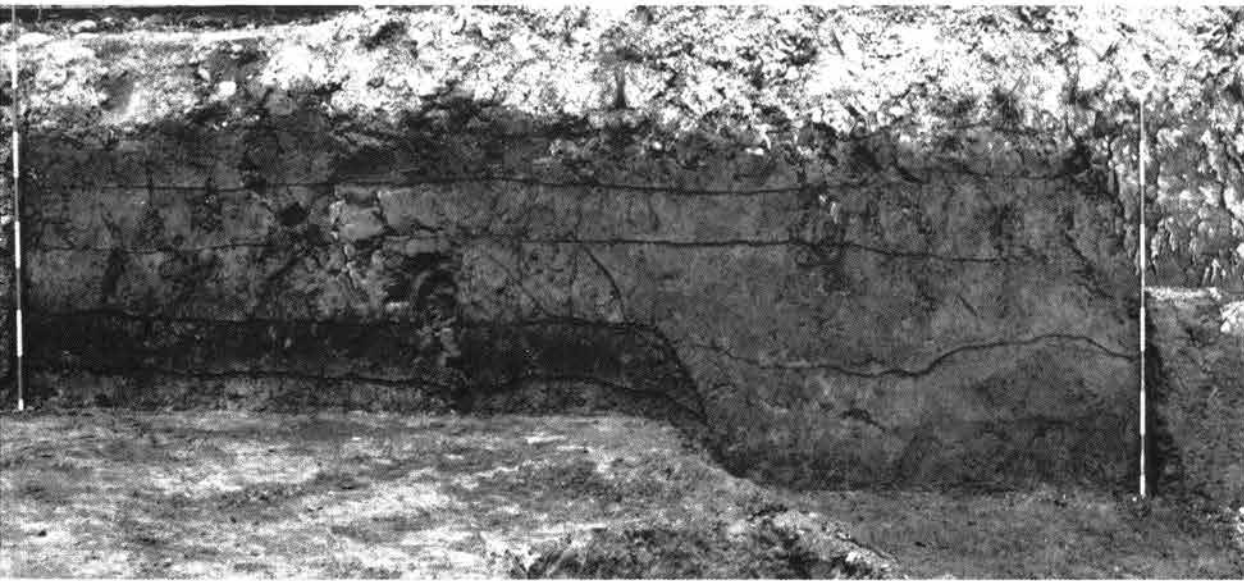
2



3



- 1. 建物SB 5
南より
- 2. 井戸SE 37
- 3. 井戸SE 35断面
- 4. 井戸SE 36



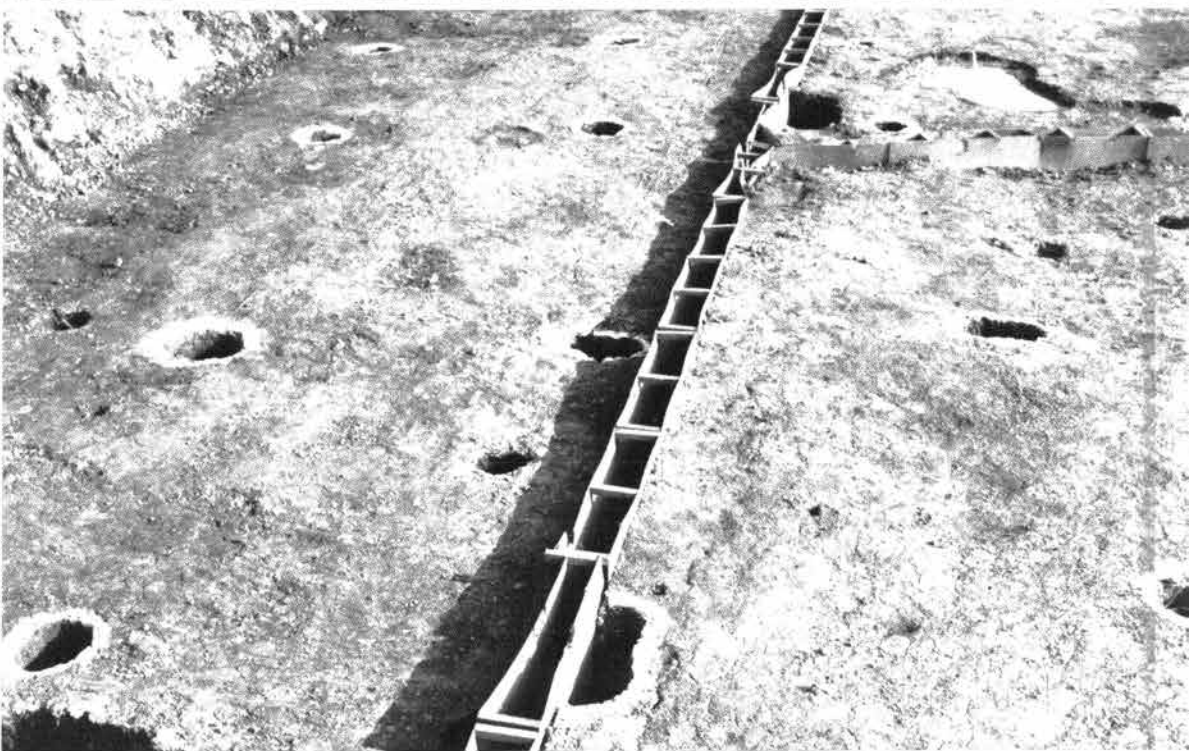
5. 溝SD 1 断面
北より



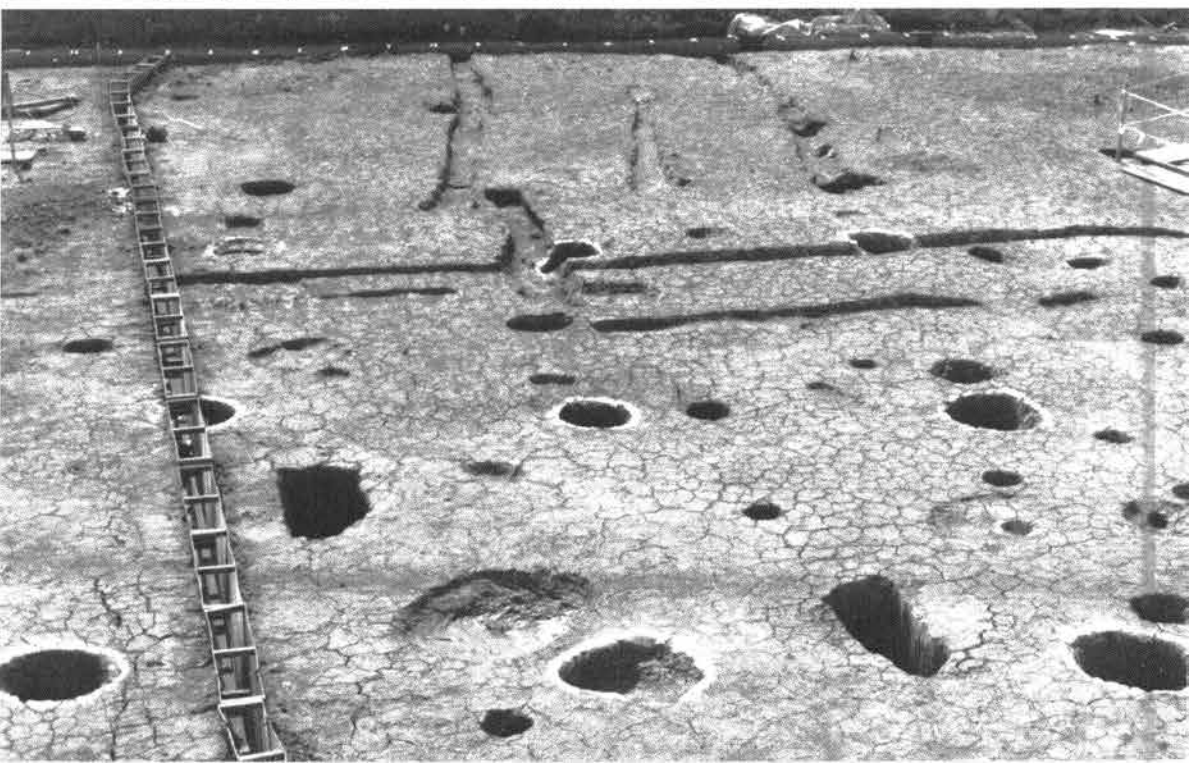
6. 溝SD 1 右
溝SD 6 左
断面
南より



1. 調査区全景
北より



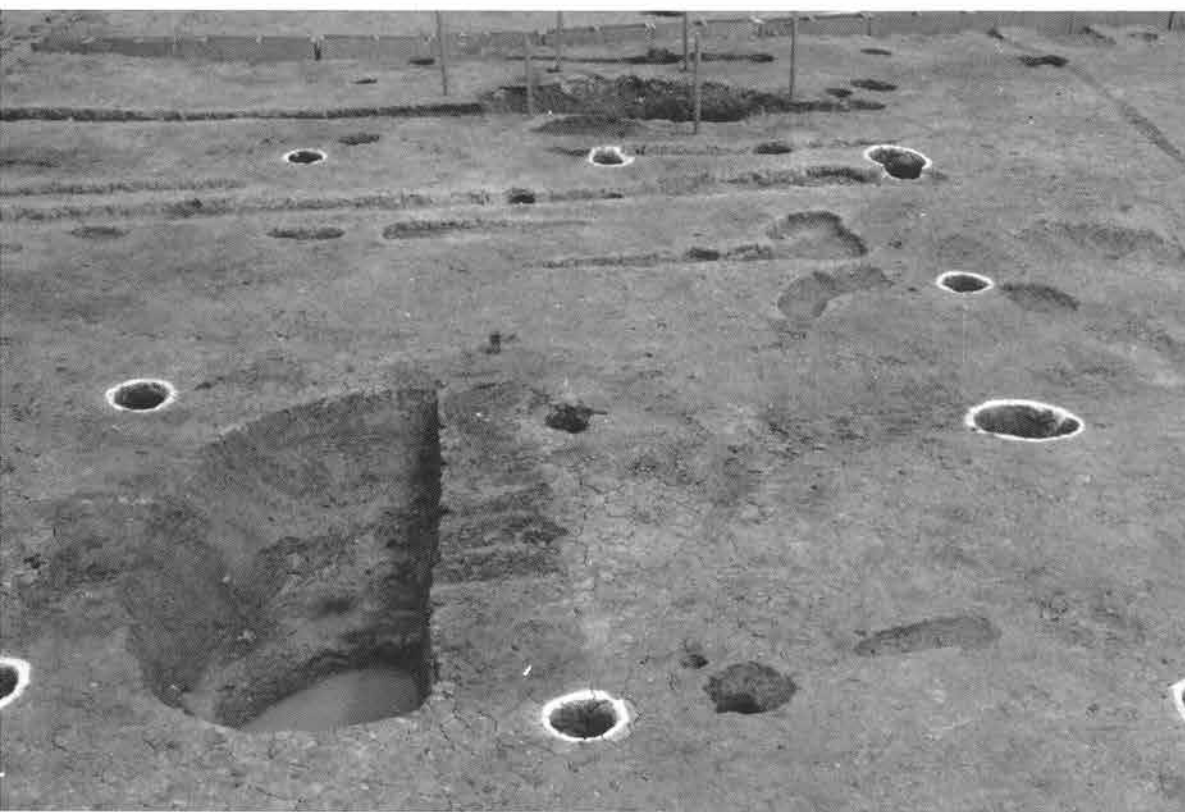
2. 建物SB60
北より



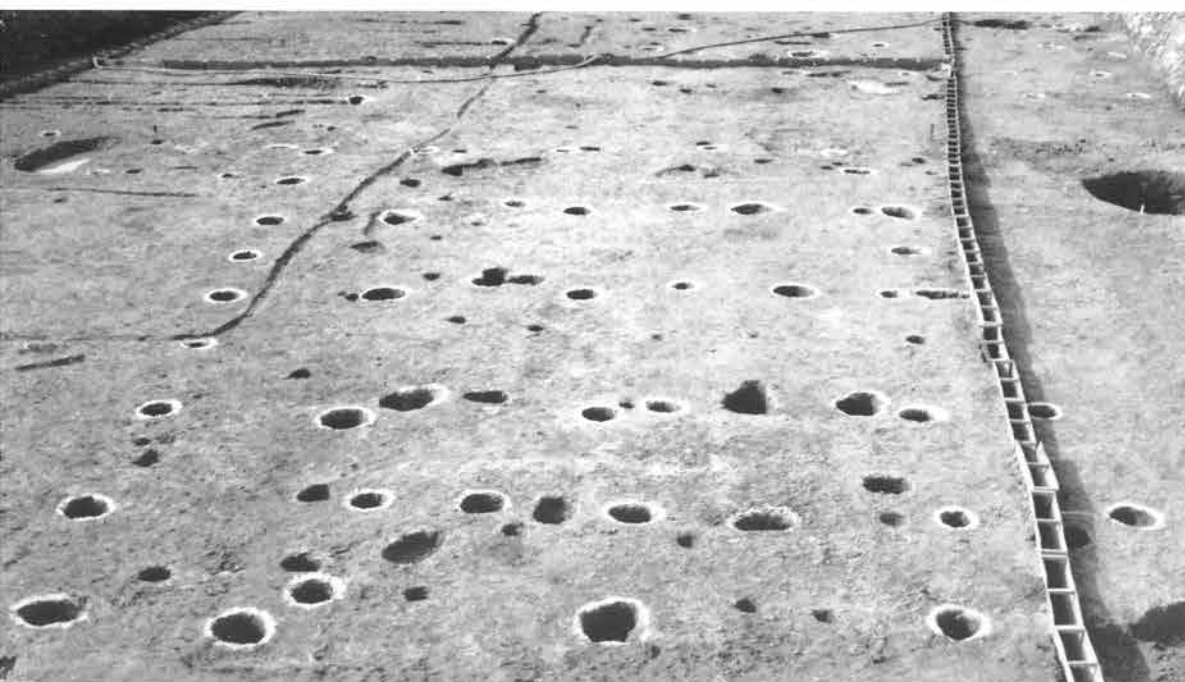
3. 建物SB49
東より



1. 建物 SB41
北より



2. 建物 SB61
南より



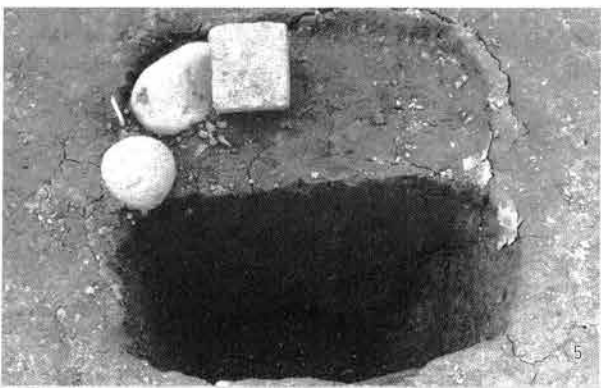
3. 建物 SB65
建物 SB66
南より



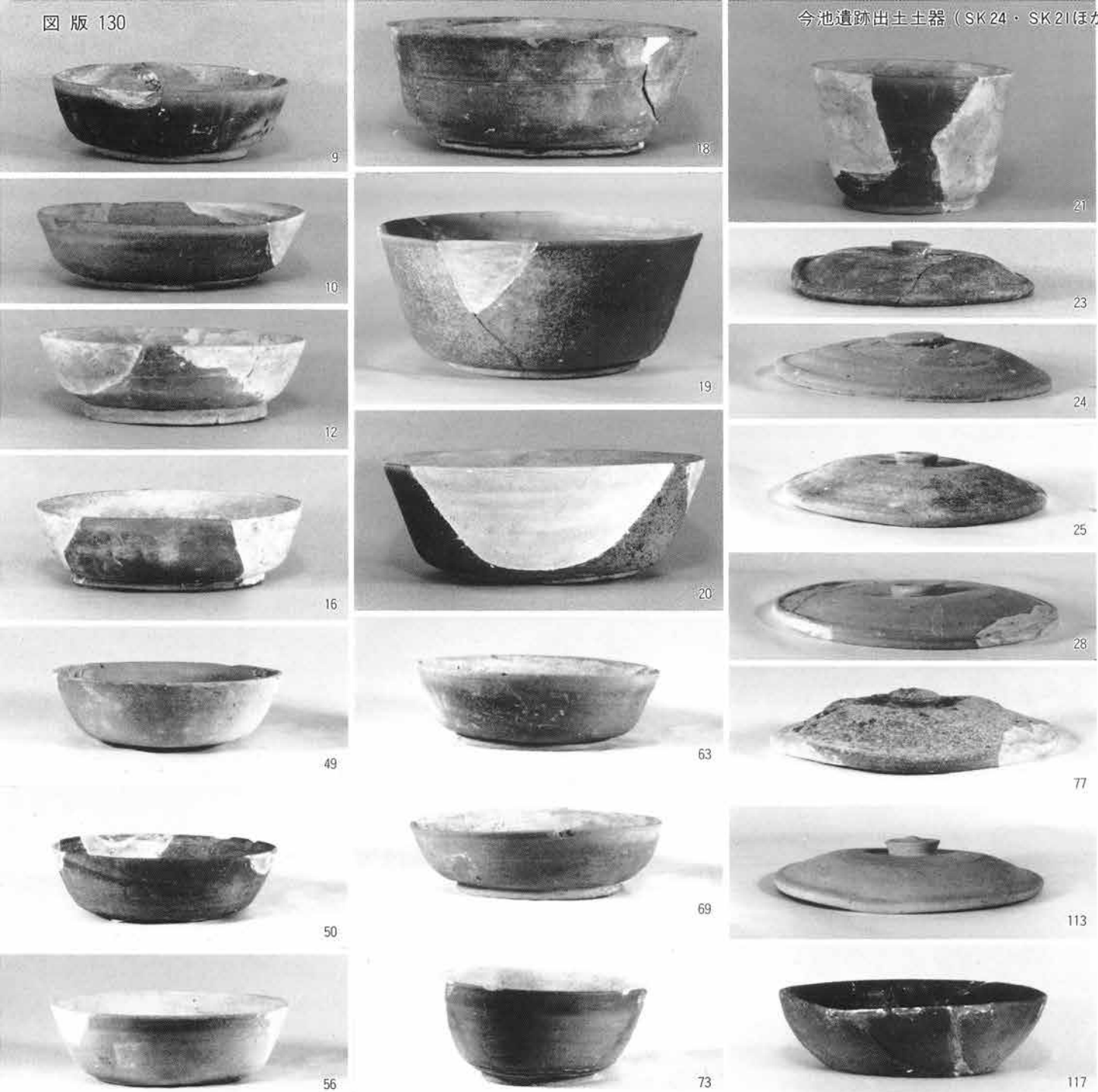
1. 井戸 SE 54



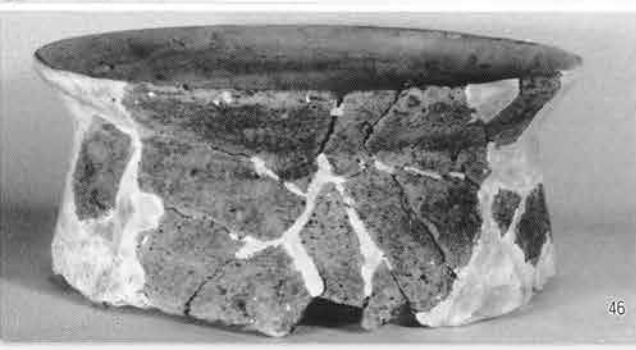
2. 井戸 SE 58



- 3. 井戸 SE 47
- 4. 井戸 SE 45
- 5. 墓坑 SX 59断面
- 6. 墓坑 SX 59



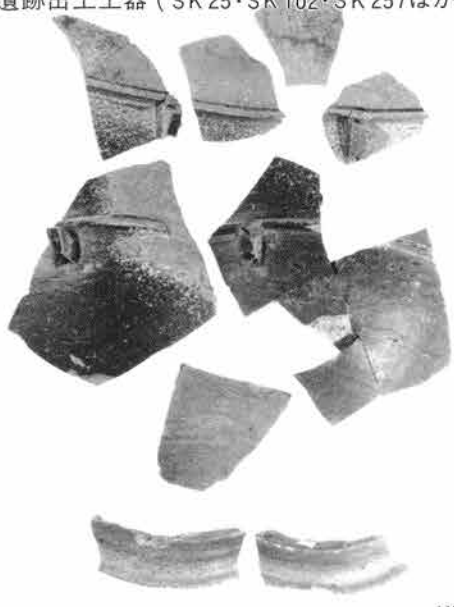
33



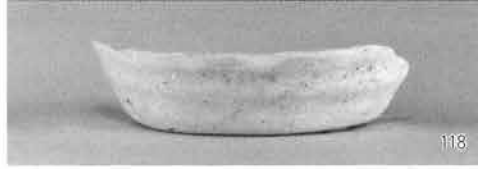
46



80



115



118



121



122



123



124



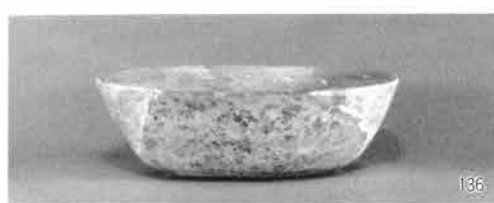
128



133



134



136



147



176



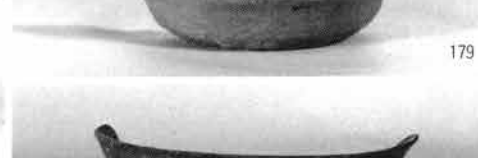
140



179



150



180



141



152



181



142



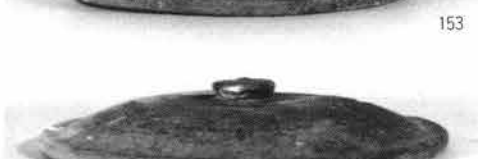
153



182



143



154



183



144



168



186



145



173



187



174



190



197



221



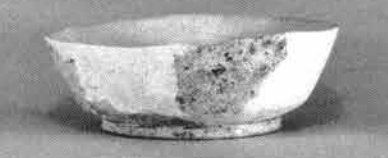
227



229



231



233



238



239



241



242



194



214



225



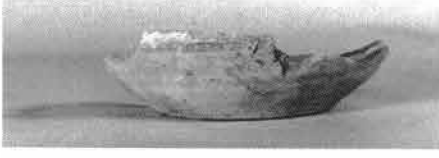
226



243



245



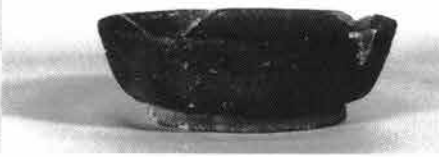
246



248



249



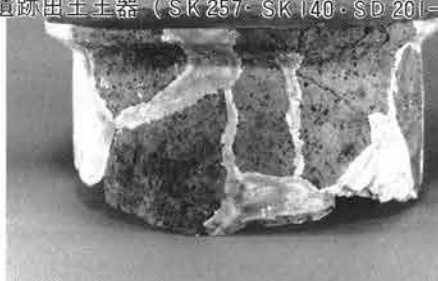
254



255



256



172



223



222



257



258



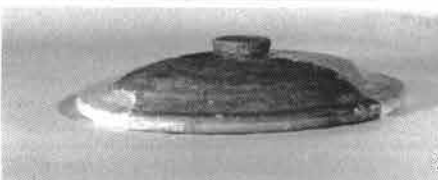
260



261



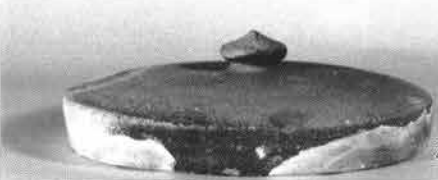
262



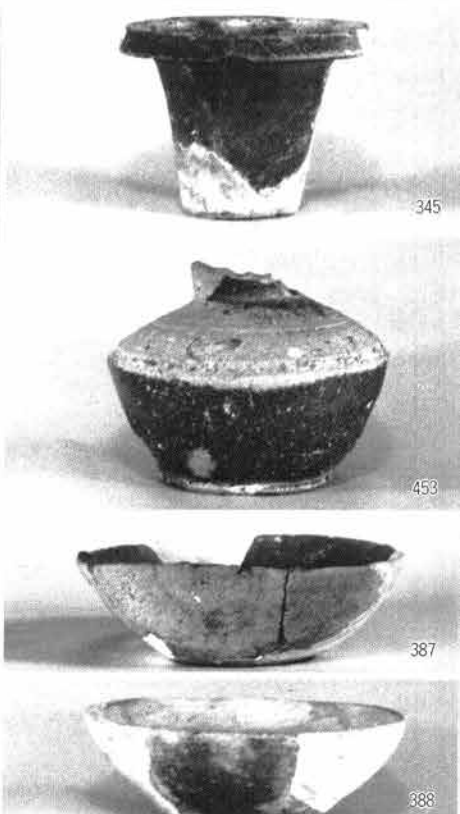
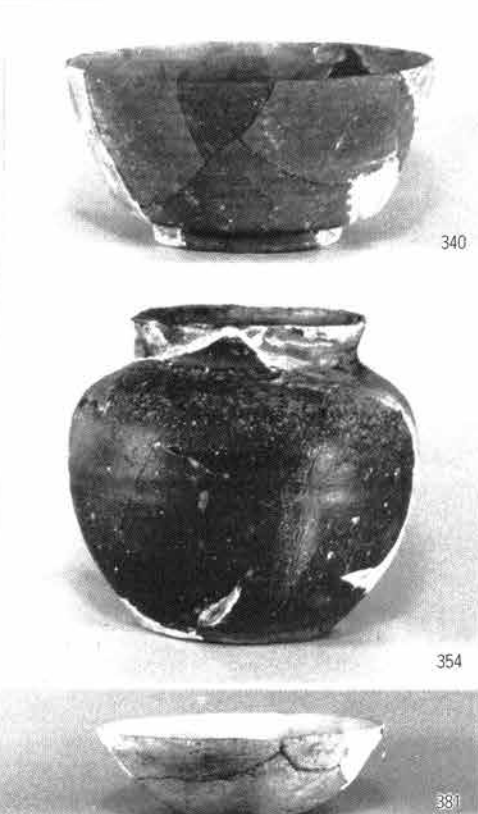
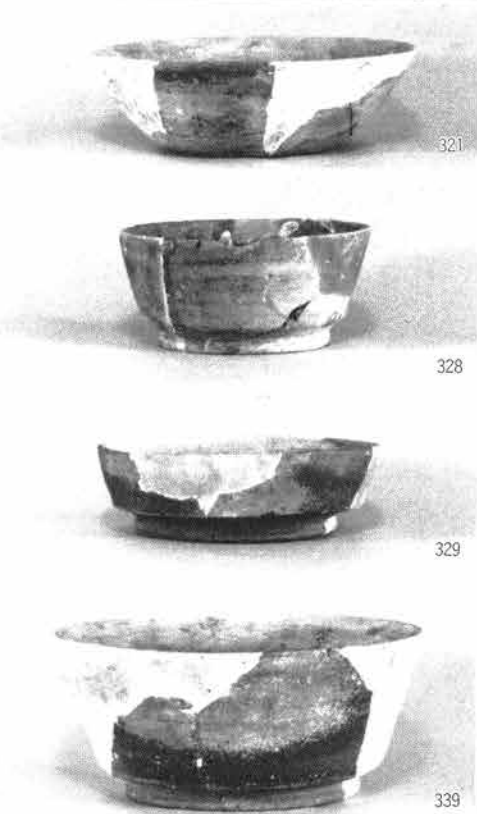
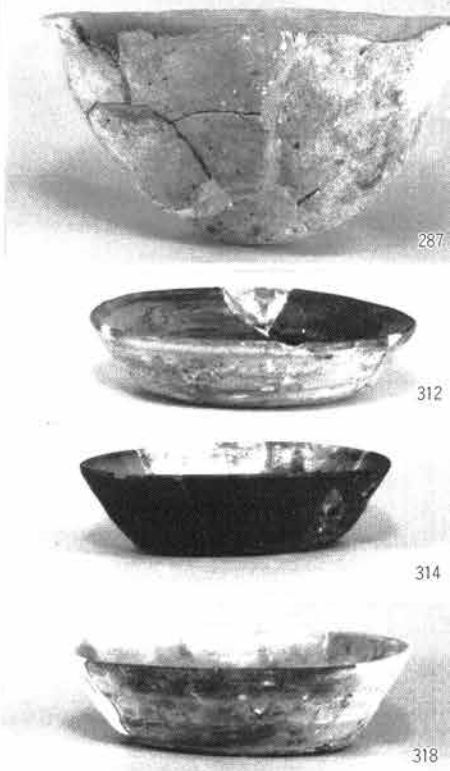
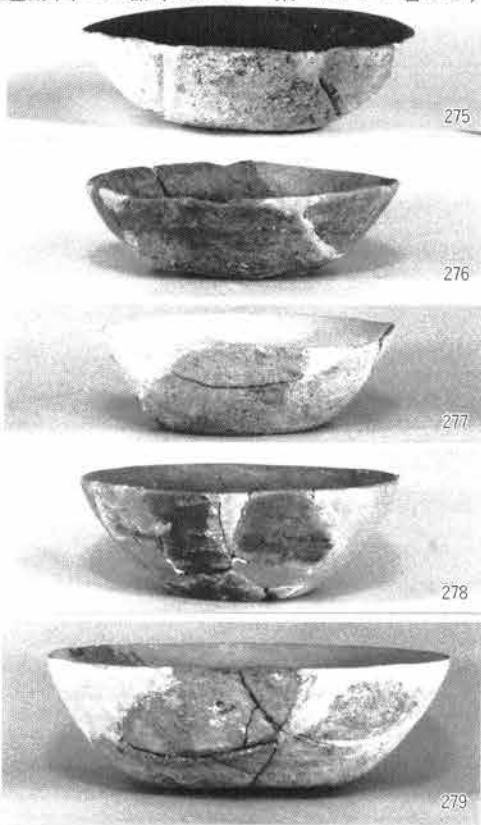
263



265



266





392

410

446

393

413

468

396

464

473

394

465

475

510

523

480

514

491

515

489

502

519

505

482

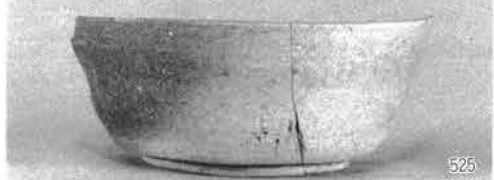
508

565

496

567

512



525



537



529



564



577



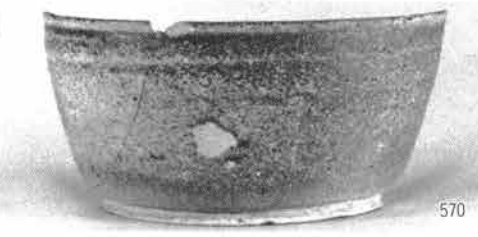
526



569



573



570



532



571



575



579



586



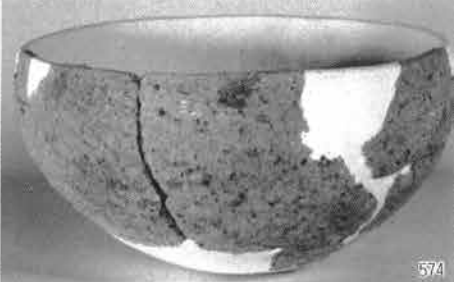
568



590



599



574



592



600



576



597



601



598



602



584



606



611



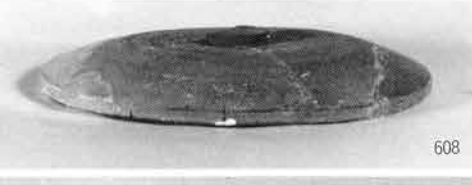
607



610



665



608



618



609



708



667



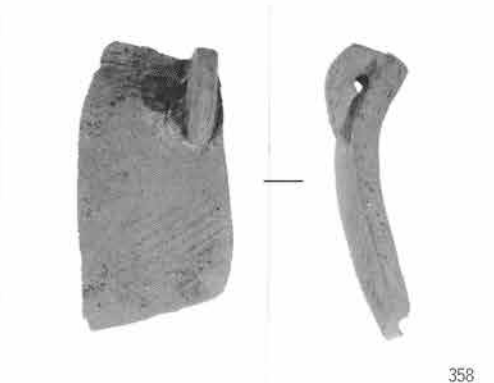
697



585



2



358



19



瓦塔



296



216



666

小形長頸瓶



215

製塩土器



62



56



59



円面硯



55

古式土師器



142



564



144



258



128



145



333



231



153



242



260



312



150



312



448



309



杯内面叩き目



248



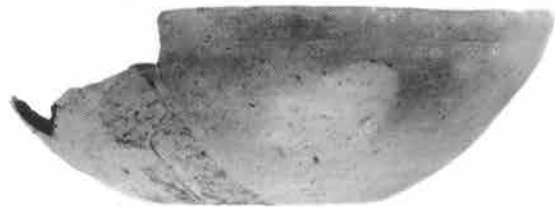
黒色土師器(568)暗文



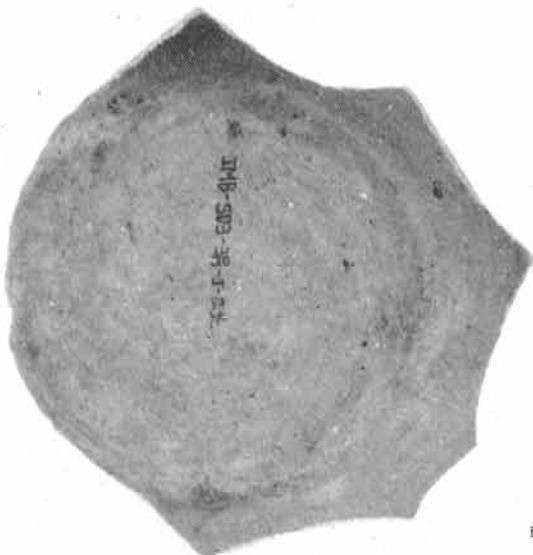
117



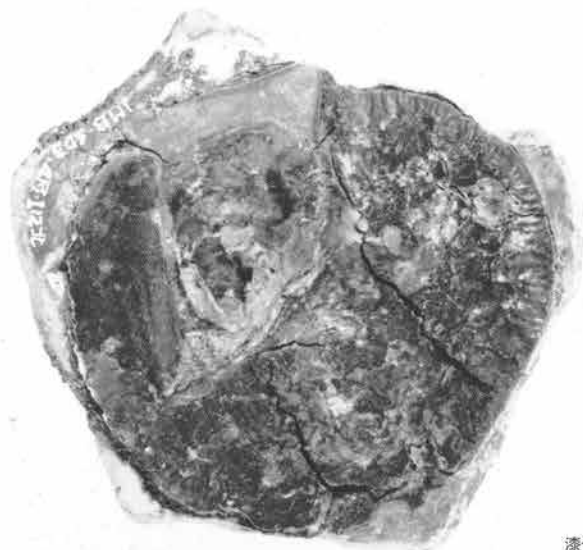
614



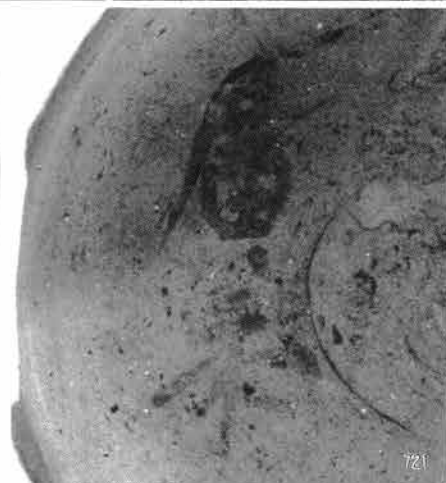
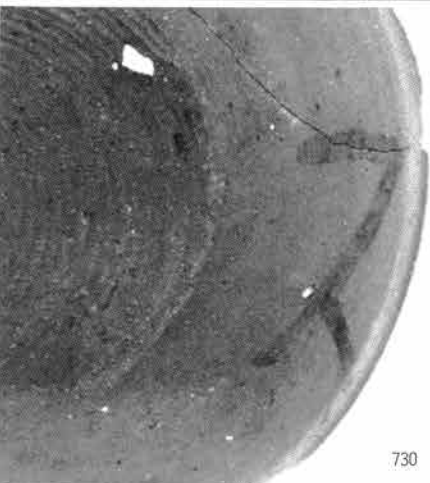
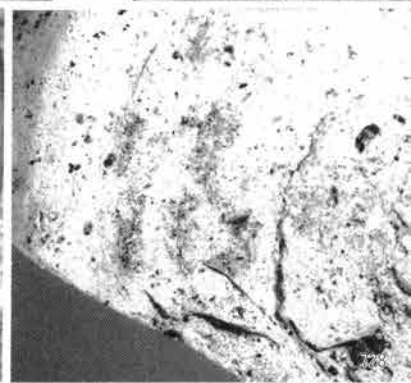
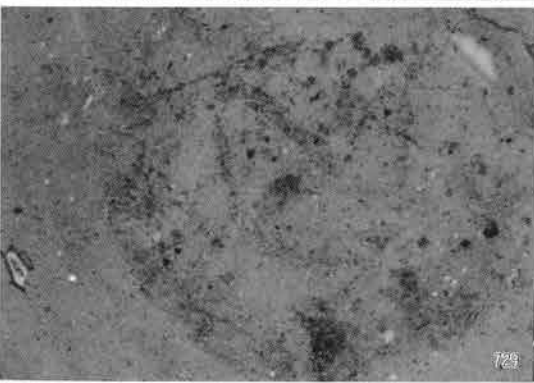
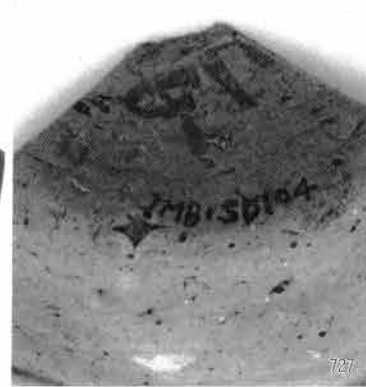
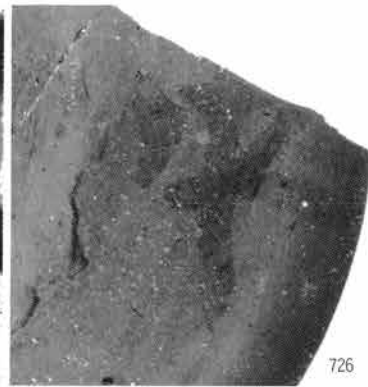
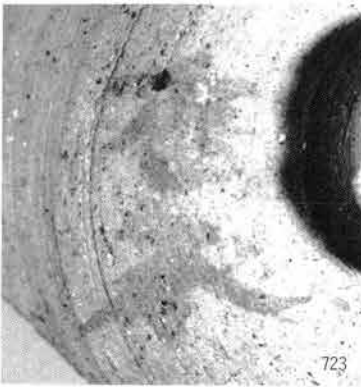
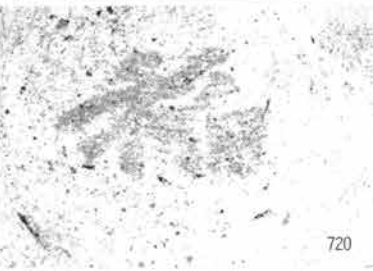
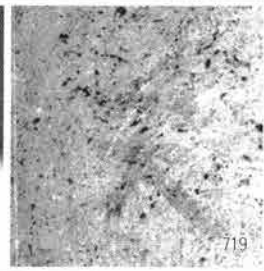
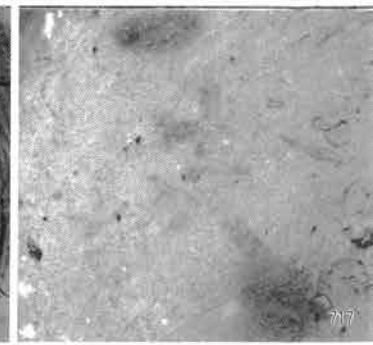
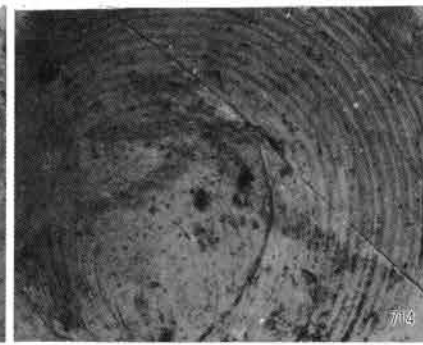
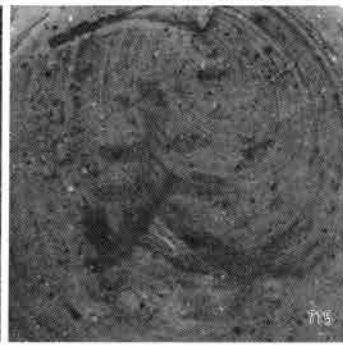
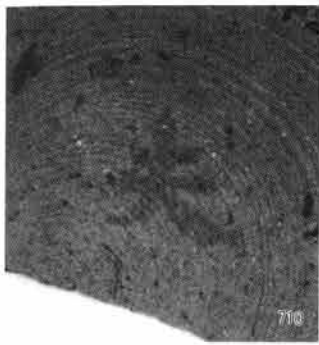
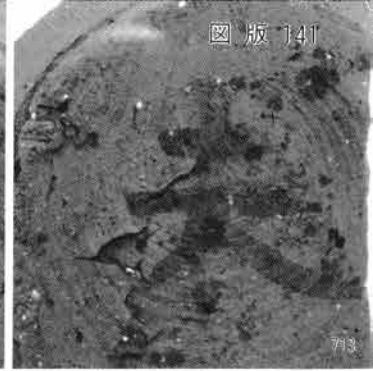
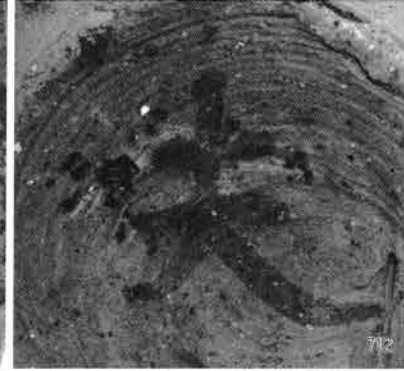
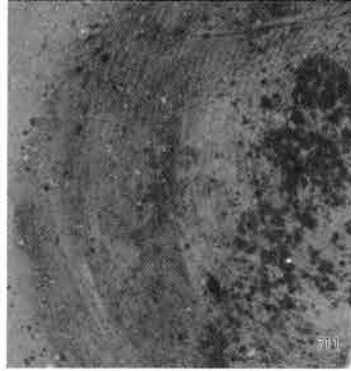
転用杯



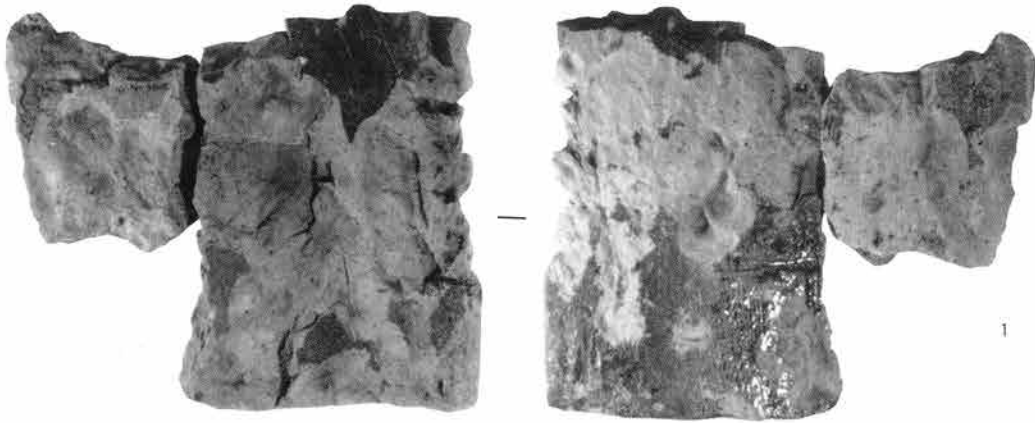
転用碗(452)



漆付着土器



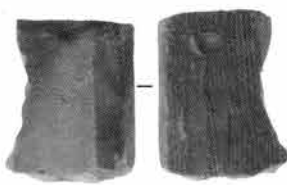
範書き



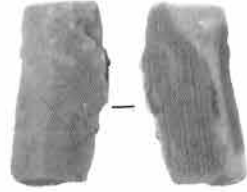
1



3



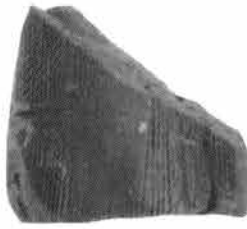
6



4



11



9



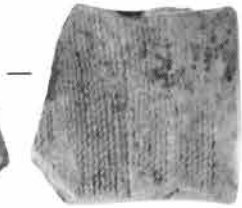
8



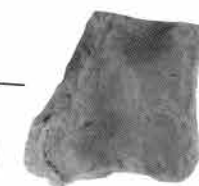
15



12

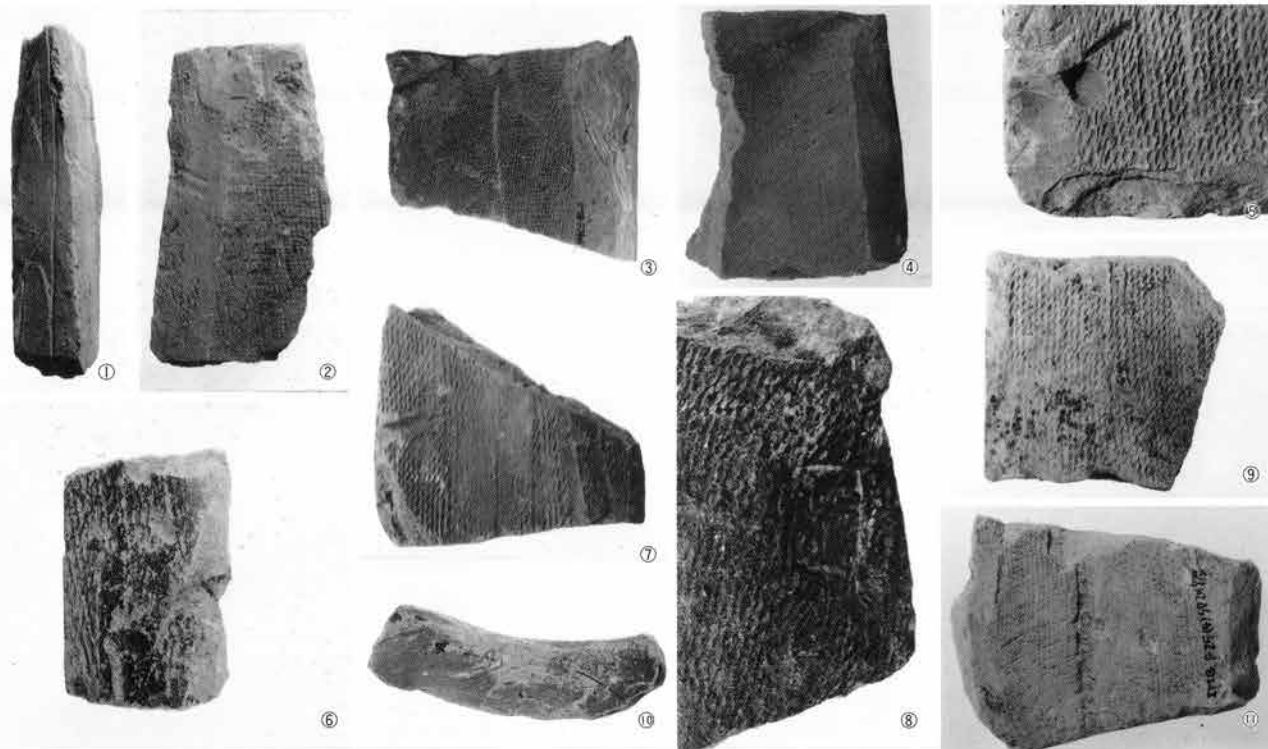


5

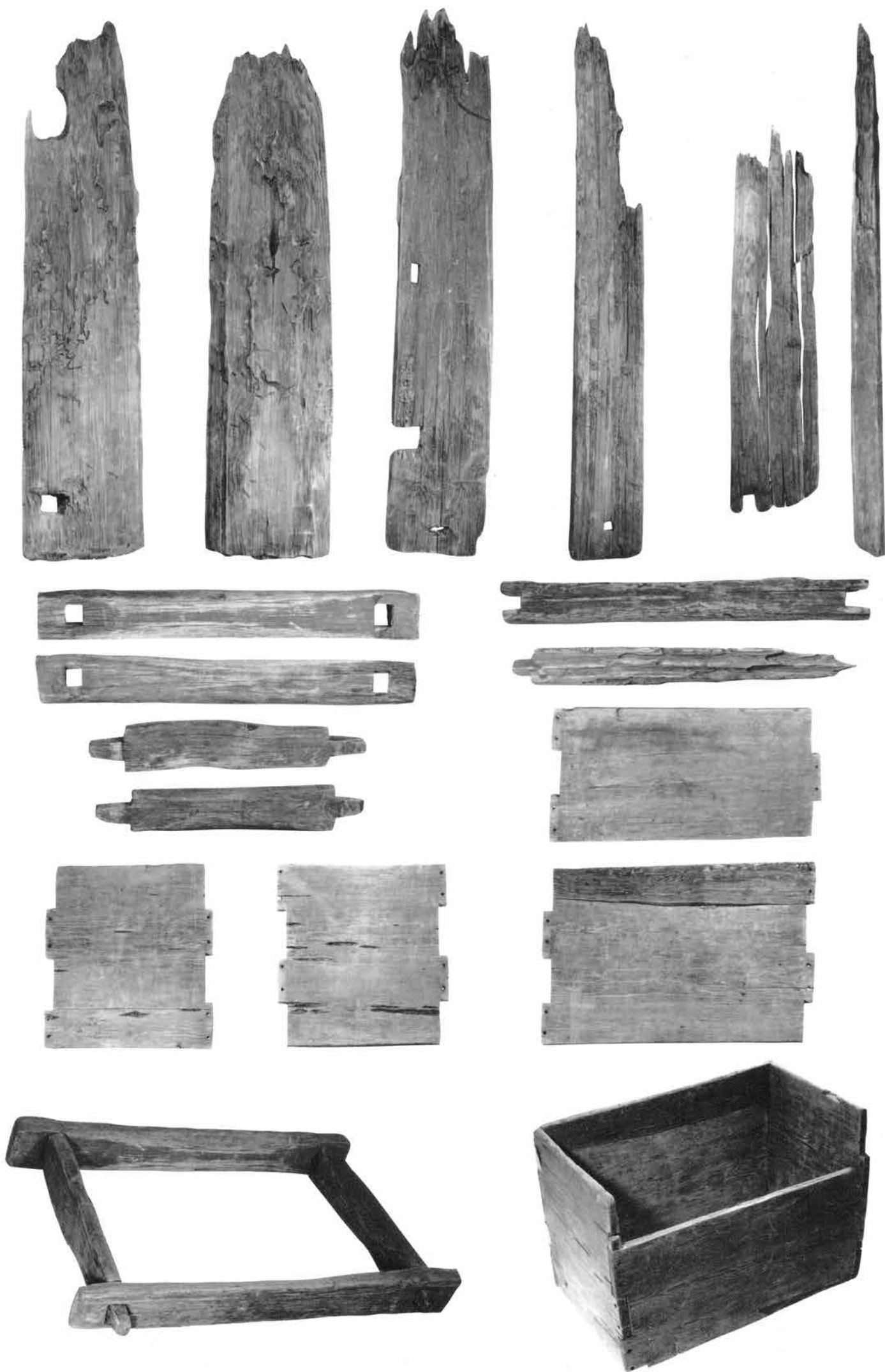


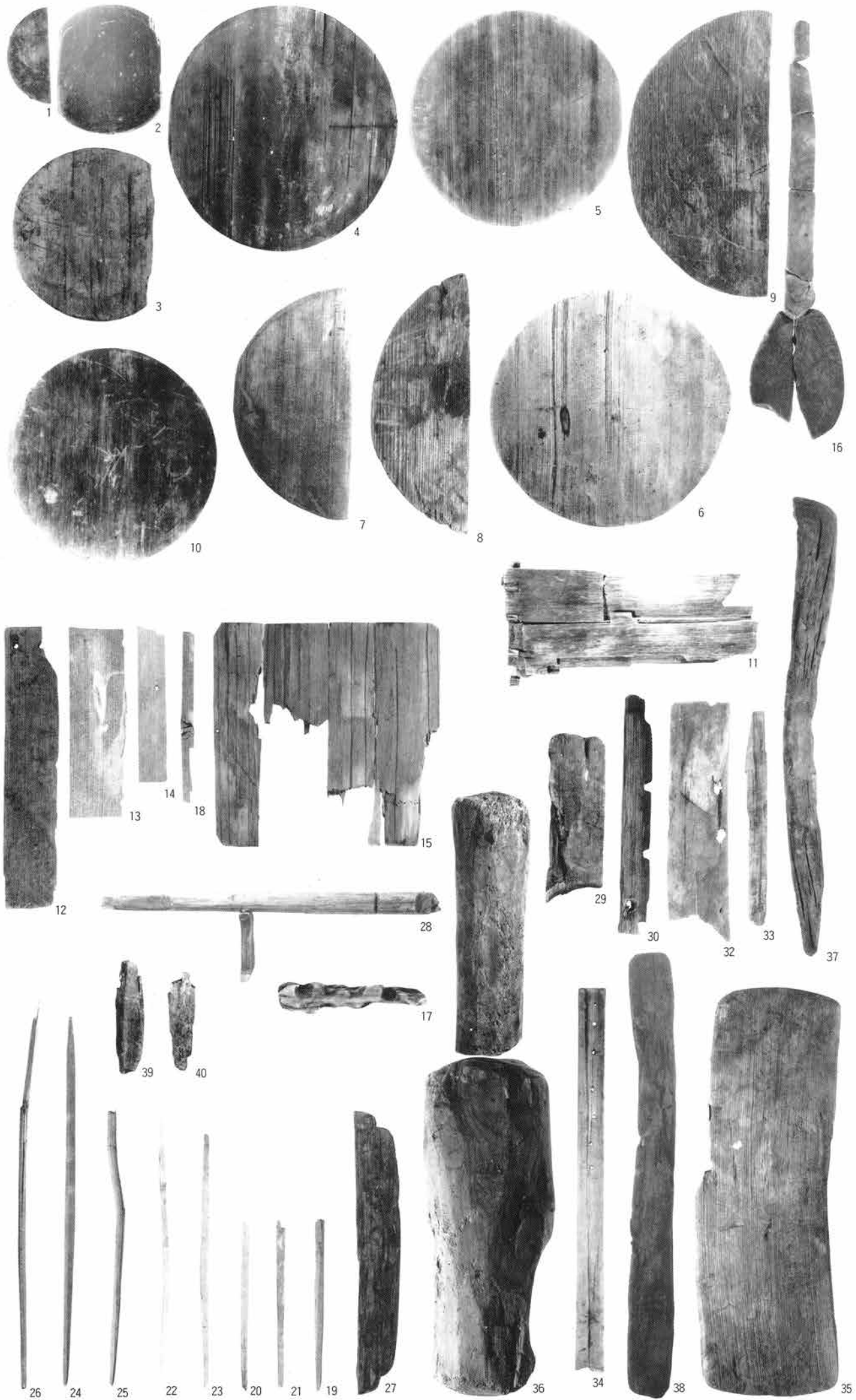
14

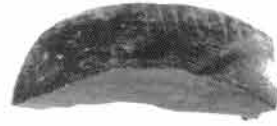
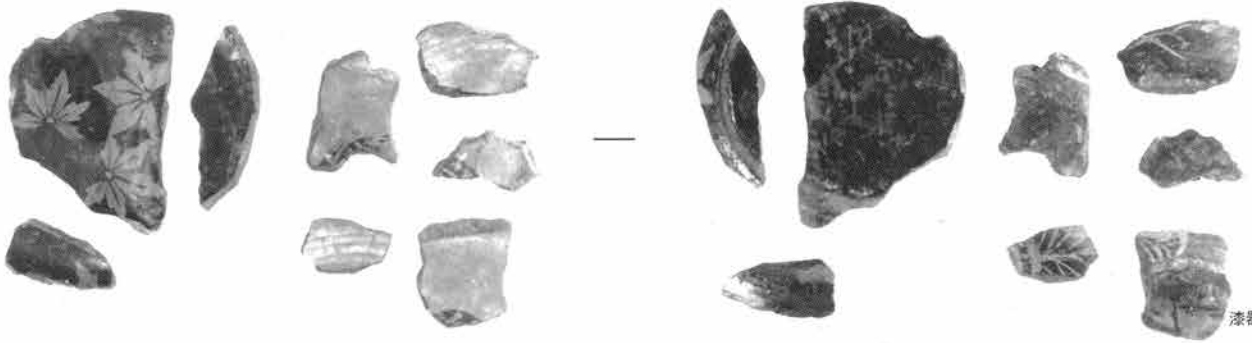
1-12
平瓦
14・15
丸瓦



- ①平瓦側面
ヘラケズリ
調整
- ②~④
平瓦凹面
布目痕各種
- ⑤~⑨
平瓦凸面
叩き目各種
- ⑤指頭圧痕
- ⑥砥石すり面
- ⑧刻印状圧痕
- ⑩平瓦端部
ヘラケズリ
調整の痕跡
- ⑪丸瓦凹面







漆器

羽口



木製紡錘車



土錘



鉄製品





13



14



15



16



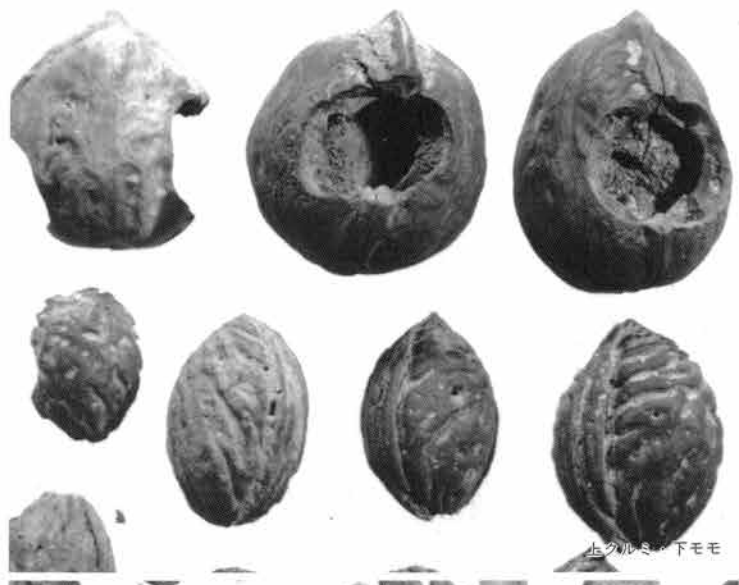
19



18



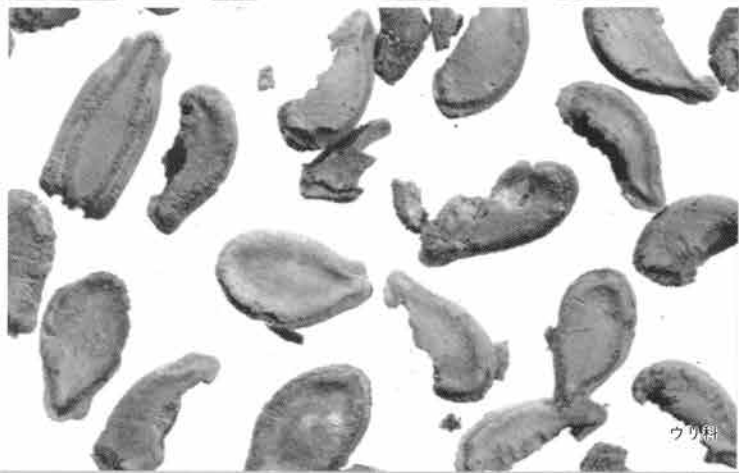
17



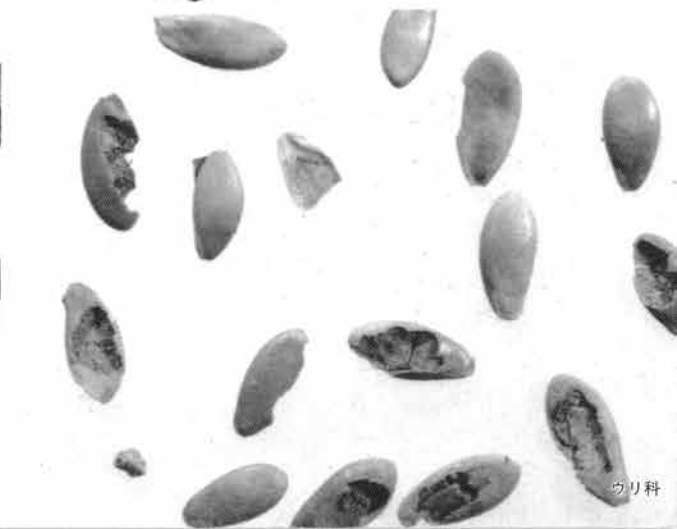
上クルミ、下モモ



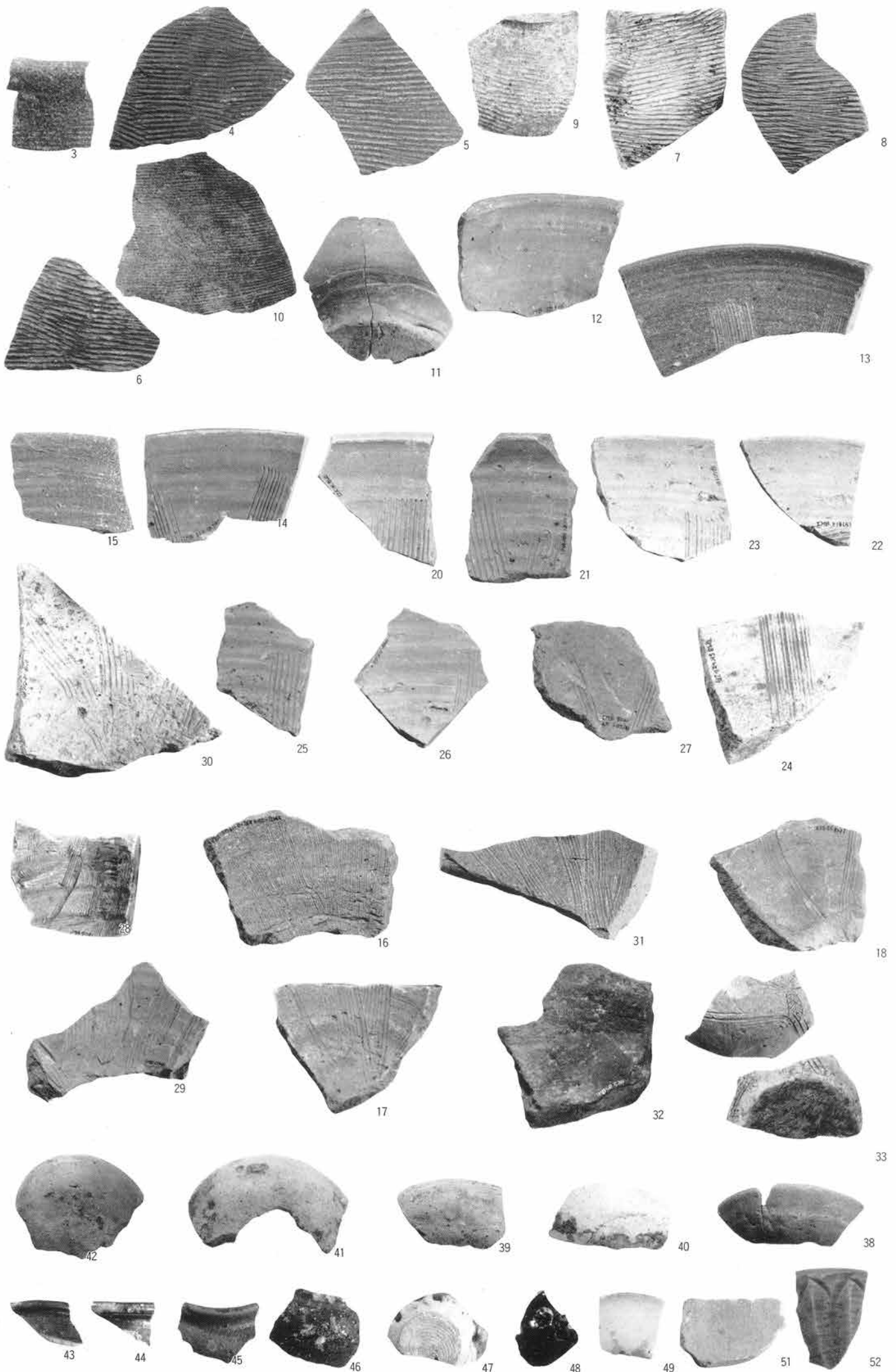
ブナ

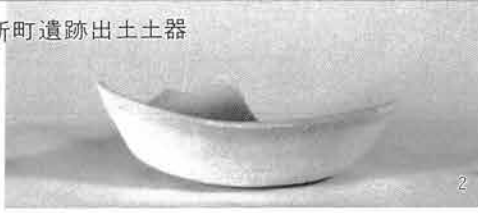


ウリ科



ウリ科





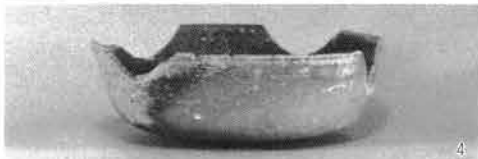
2



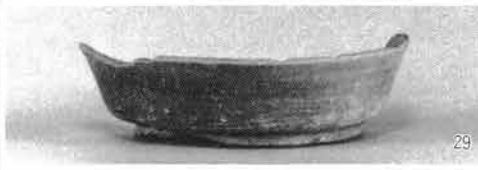
20



35



4



29



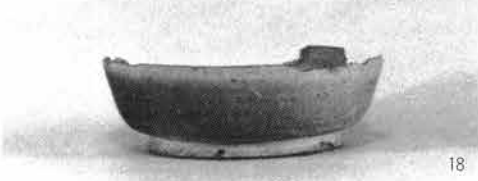
7



34



47



18



74



81



101



130



82



125



131



88



126



133



89



147



41



97



157



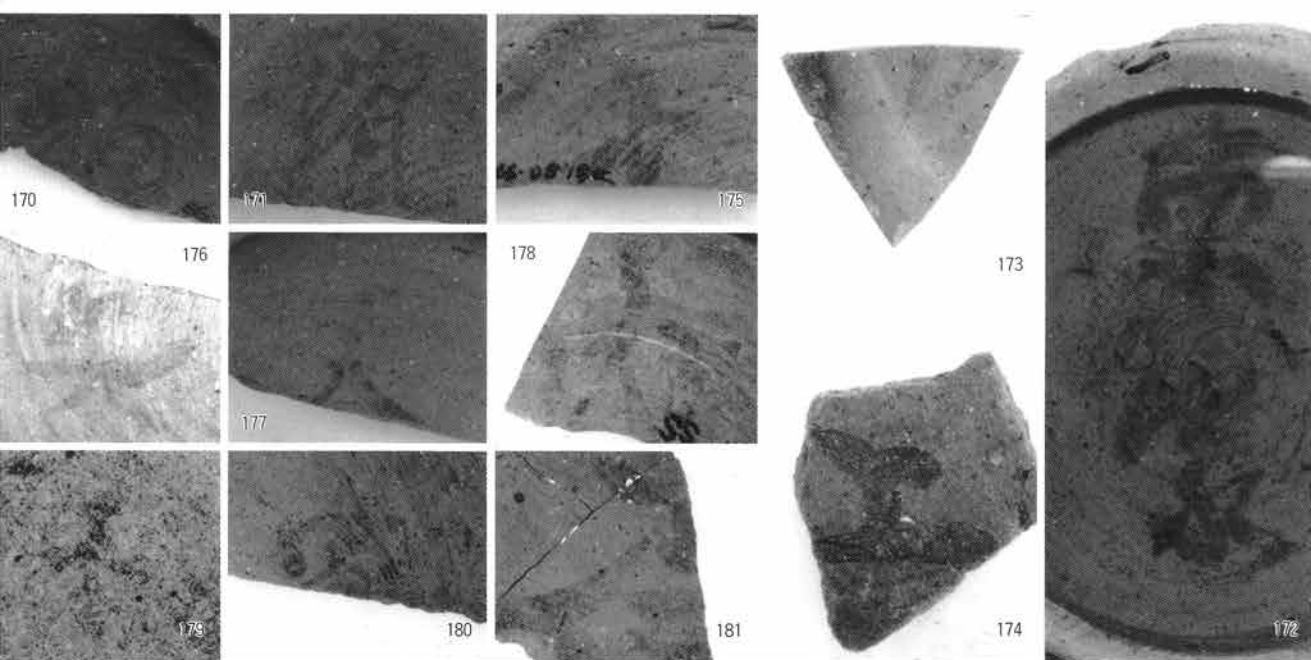
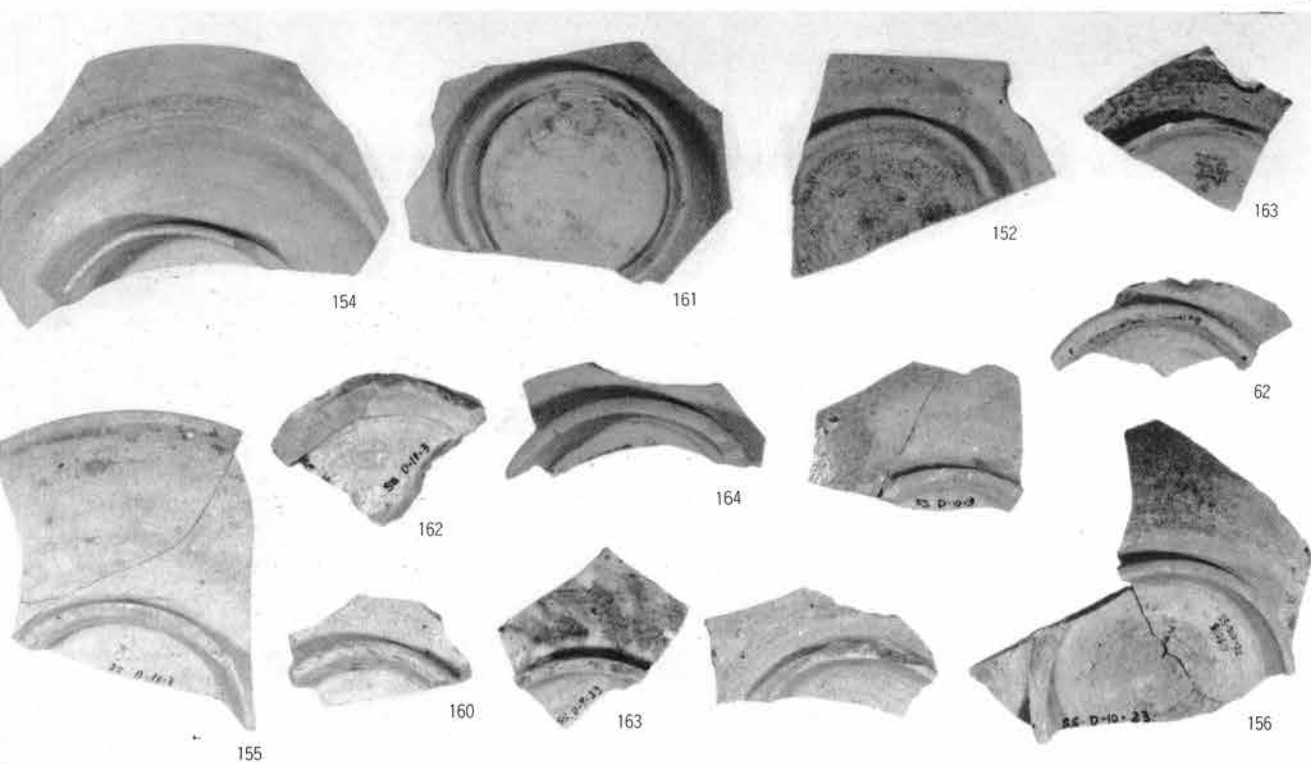
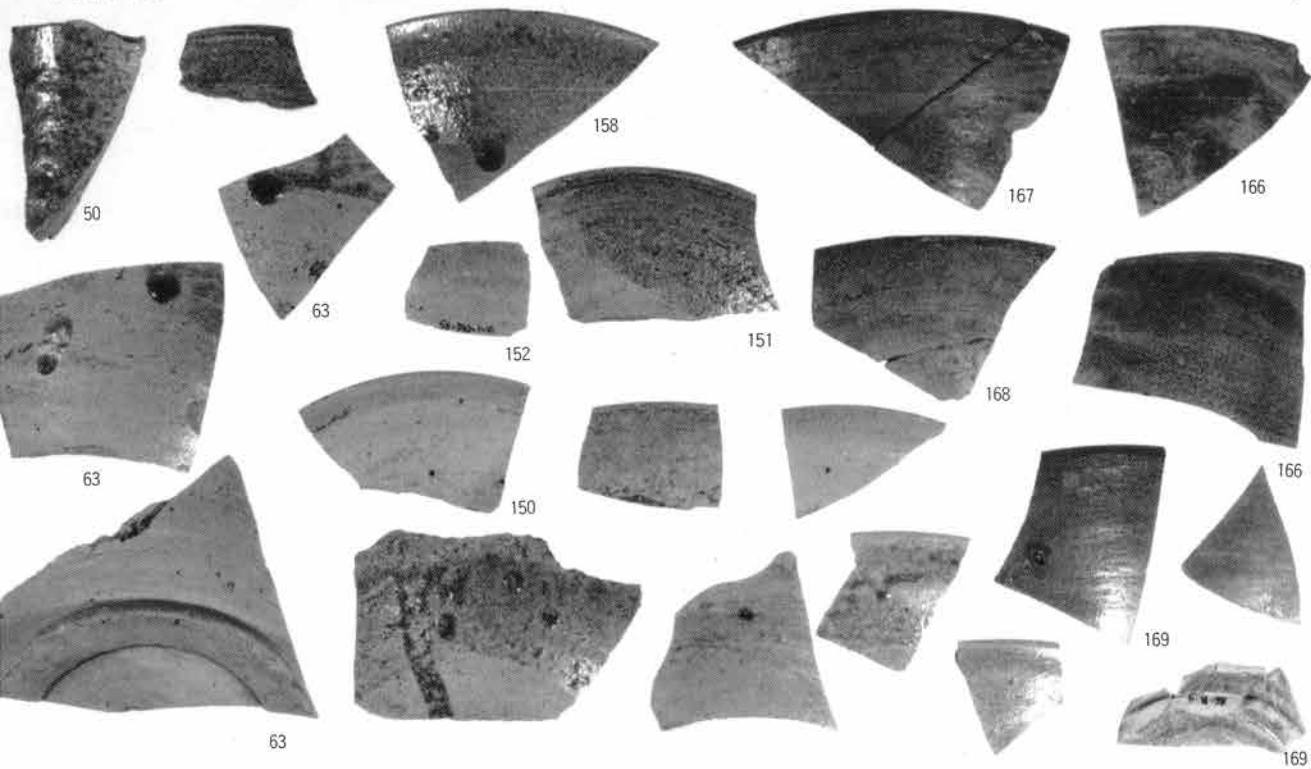
122

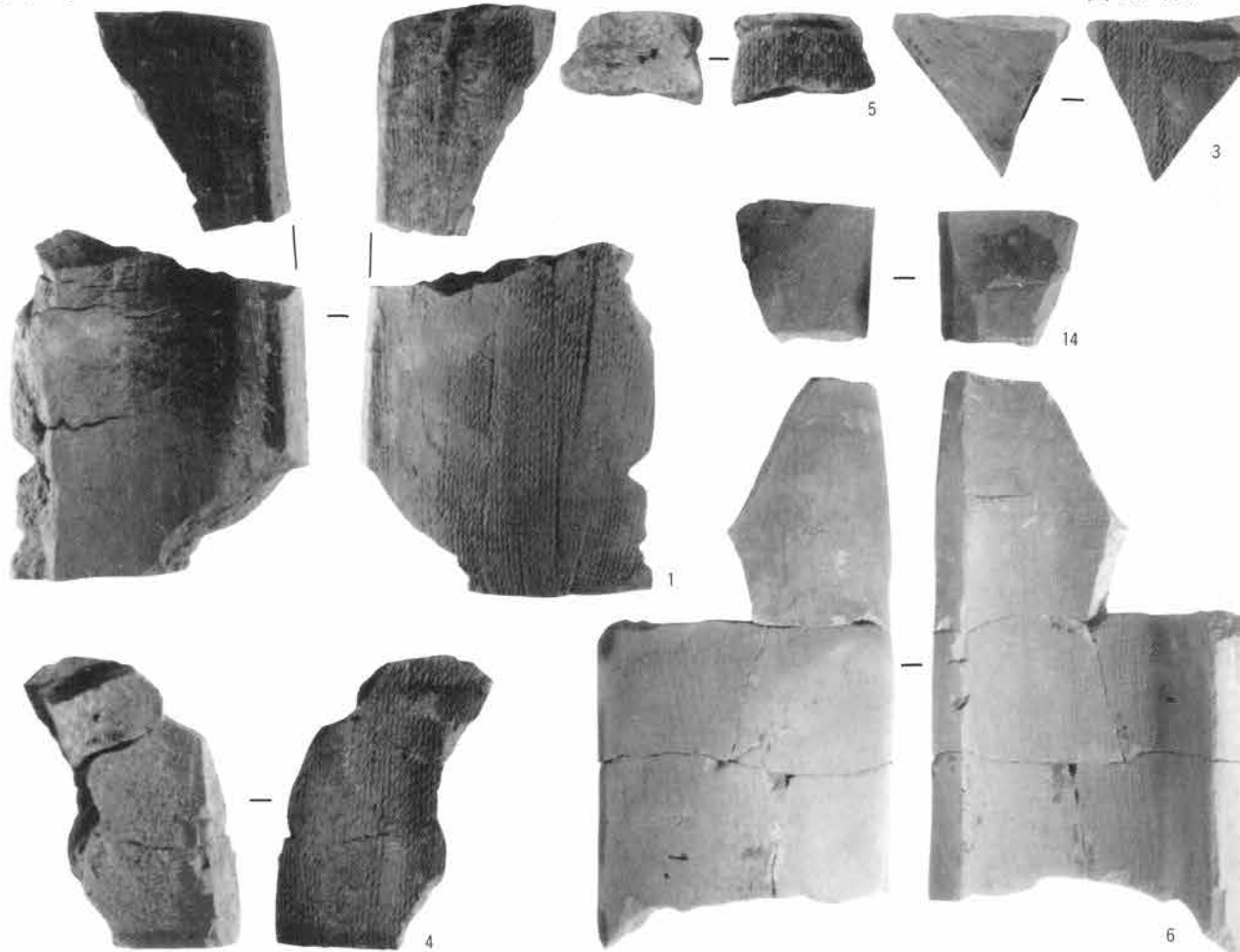


56

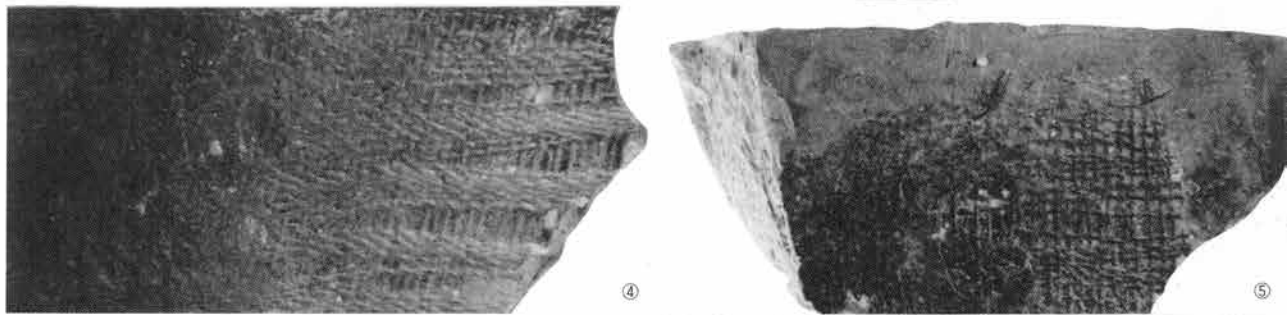
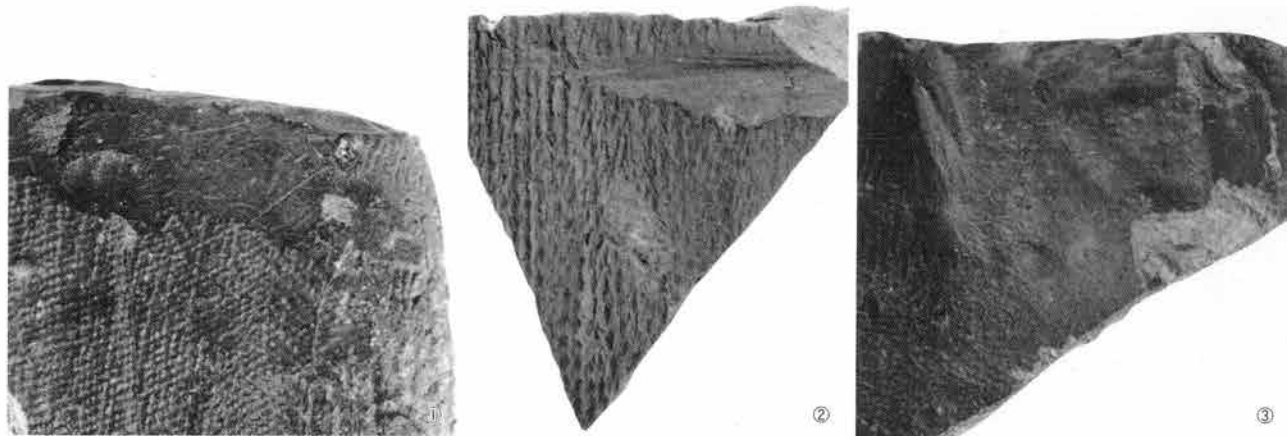


64

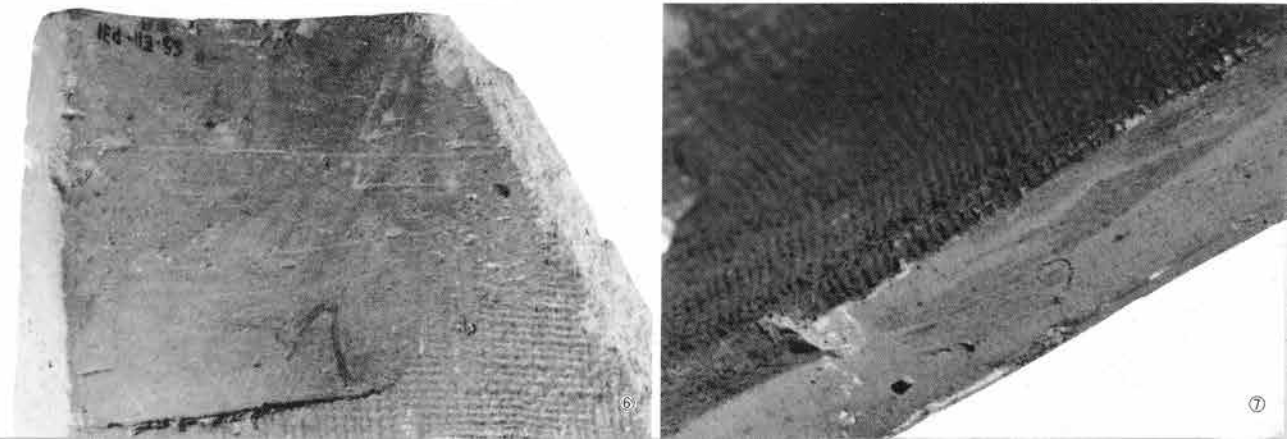




1~6
下新町遺跡
14
子安遺跡
1~5
平瓦
6・14
丸瓦



①平瓦
狭端部
凹面ナデに
よる面取り
②平瓦
凸面
ナデ調整
③丸瓦
狭端部凹面
④丸瓦
凹面細かい布目
⑤丸瓦
凹面
粗い布目
⑥丸瓦狭端部
凹面
ヘラケズリ調整
⑦丸瓦
側面
ヘラケズリ調整





斎串



土錘



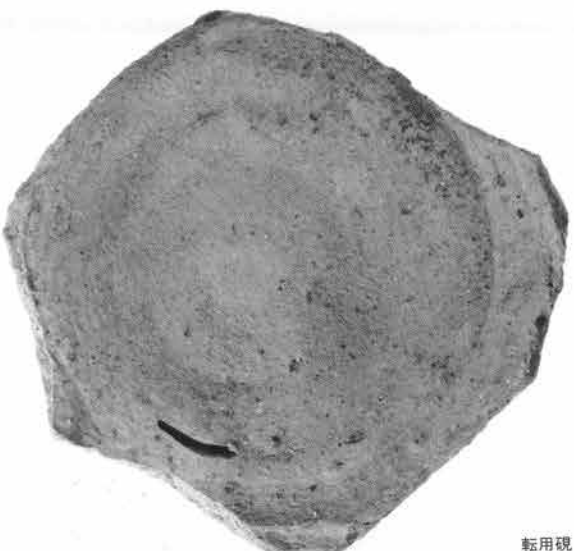
石製品



灯火器



高杯(110)



転用硯



クルミのモモ







74



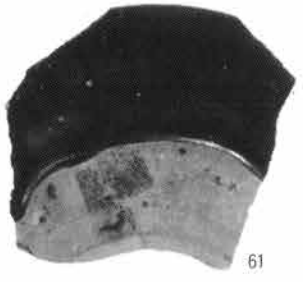
74



57



60



61



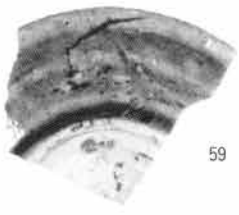
60



61



58



59



58



59



81



87



97



86



84

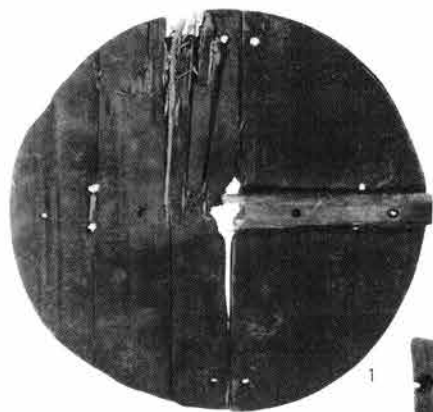


93



98





1



2



4



5



6



18



7



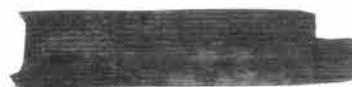
8



11



10



3



13



14



15



16



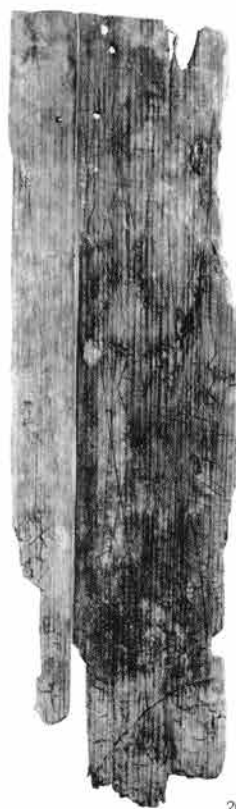
仏像



9



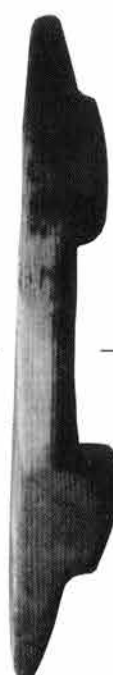
19



20

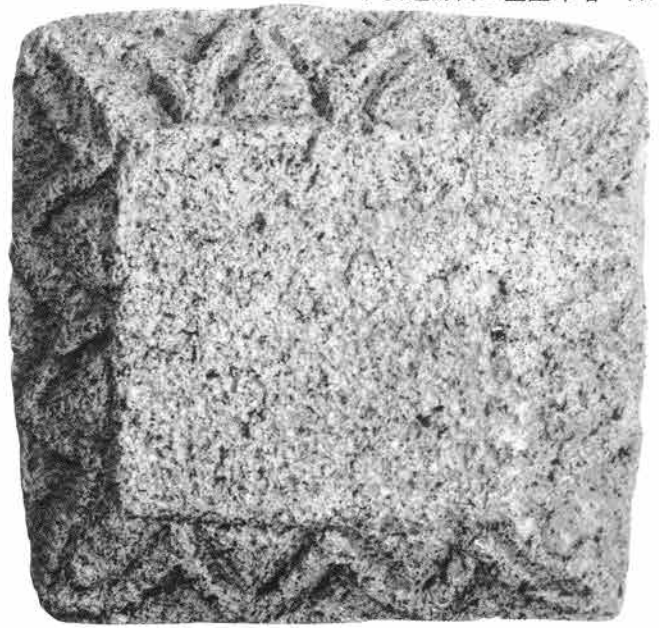


21





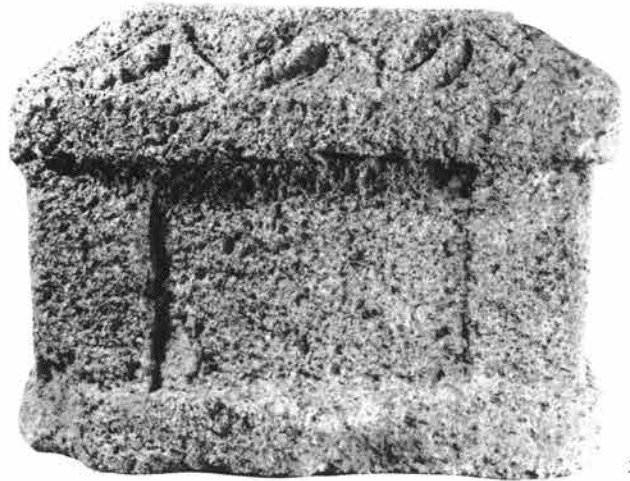
1



2



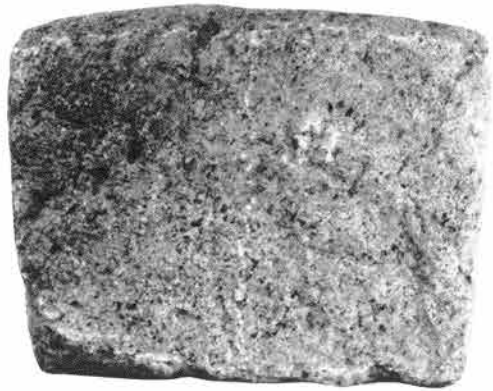
5



3



4



2



78



79



80

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集

上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

今池遺跡

下新町遺跡

子安遺跡

昭和59年3月15日 印刷

発行 新潟県教育委員会

昭和59年3月31日 発行

印刷 長谷川印刷

新潟市学校町通1-6

☎ 0252 (28) 3309